蛍火は円（まどか）に舞う

三流ＦＬＡＳＨ職人

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「火ノ丸相撲」のその後のお話、三ツ橋蛍が主役の物語です。

目　次

エピローグ　新横綱『鬼丸国綱』土俵入り ―― 1
第一章　二年生
第１番　新大太刀高校相撲部　始動！ ―― 5
第２番　蛍と桐仁と１年生 ―― 11
第３番　ちゃんこＤＡＹ ―― 16
第４番　部内戦 ―― 20
第５番　男子三日会わざれば― ―― 27
第６番　三ツ橋蛍と下山倫平 ―― 31
第７番　春の終わり ―― 38
第８番　呉越同舟 ―― 44
第９番　祝勝会ｉｎスタミナ次郎 ―― 51
第１０番　成長の証明 ―― 57
第１１番『山』を切り崩せ！ ―― 64
第１２番　蛍火は円（まどか）に舞う ―― 70
第１３番　天秤が傾くのは・・・？ ―― 76
第１４番　荒木の選択 ―― 82
第１５番　鬼切安綱と三日月宗近 ―― 88
第１６番　顔を上げ、前を向こう ―― 94
第１７番　柚子香の戦い ―― 101
第１８番　秋合宿開始！ ―― 107
第１９番　自惚れと自虐 ―― 113
第２０番　栄大名物 ―― 121
第２１番　収穫を胸に ―― 129

第２２番　滅入って苦しみます ―― 134
第２３番　ふたりの正月 ―― 138
第二章　三年生
第２４番　新入生たち ―― 143
第２５番　個性派集団 ―― 150
第２６番　３年生として ―― 155
第２７番　新たな千葉の勢力図 ―― 160
第２８番　西上高校と大太刀高校 ―― 165
第２９番　『円』の相撲 ―― 171
第３０番　真っ向勝負！ ―― 176
第３１番　笑顔と魔法 ―― 182
第３２番　がんばれ１年生 ―― 189
第３３番　夏の海にて ―― 197
第３４番　男子の悩み、女子の悩み ―― 203
第３５番　ダチ高相撲部　ｖｓ　辻　桐仁 ―― 212
第３６番　ダチ高相撲部　ｖｓ　三ツ橋　蛍 ―― 219
第３７番　三ツ橋　蛍と堀　柚子香 ―― 227
第３８番　大太刀高相撲部員紹介（蛍３年ＩＨ直前時） ―― 234
第３９番　名塚圭子の見たもの ―― 241
第４０番　激突！名伯楽～王道と異能と ―― 250
第４１番　ライバル―鎬を削った３年間 ―― 255
第４２番　達人にでもなったつもりか！ ―― 263
第４３番　石高、剣ヶ峰 ―― 268
第４４番　ケンカ相撲 ―― 277
第４５番　変化のスペシャリスト、３年間の集大成 ―― 283

第４６番　決勝戦だよ、全員集合！　288
第４７番　弟子の声　294
第４８番　なんてこった　299
第４９番　反撃の鉈　306
第５０番　三日月宗近と幸田純一　311
第５１番　その刀の銘は。　323
第５２番　激突、必殺技！　331
第５３番　蛍丸は円（まどか）を描く　337
第５４番　蛍丸と鬼切安綱　346
第５５番　見ているか　353
第５６番　見たぜ　359
第５７番　ある少女の成長　362
第５８番　好きこそものの上手なれ　367
第５９番　国宝バーゲンセール　375
第三章　インターハイ全国大会
第６０番　全国の猛者たち　384
第６１番　黙らせる　392
第６２番　腕白小僧達　399
第６３番　名門の重責　404
第６４番　振るいにかける　412
第６５番　真夜中の邂逅　419
第６６番　国宝候補『陽鉈（ひなた）』？　427
第６７番　栄大からの挑戦　433
第６８番　蛍丸と小龍景光　440
第６９番　所作　447

第７０番　なりたい、やっつけたい。　454
第７１番　飲み込む相撲　462
第７２番　黒い狼　470
第７３番　最期の日　476
第７４番　白い狼　485
第７５番　ナンバーシステム　493
第７６番　努力人　501
第７７番　部長に繋げ！　508
第７８番　蛍丸と備前長船　515
第７９番　蛍丸と備前長船②　521
第８０番　蛍丸と備前長船、決着。　527
第８１番　壊れた『心』　534
第８２番　蚊帳の外　543
第８３番　蛍丸と三ツ橋蛍　548
第８４番　引っ込んでろ！　552
第８５番　蛍丸と圧切長谷部　557
第８６番　魂の叫び　562
第８７番　日本一　570
第８８番　進路　578
第８９番　盛り上げていこう！　585
第９０番　正道、堀柚子香　591
最終章　道の先の宝物
第９１番　その瞬間（とき）　600
第９２番　袂分かつ時　608
第９３番　前相撲　614

第９４番　雪の日の春 621
第９５番　流星大１年目 628
第９６番　再会 632
第９７番　進化の形 638
第９８番　とある女子大生達の休日 643
第９９番　嬉しい出来事、そして・・・ 650
第１００番　途絶える道 656
第１０１番　柚子香は夜に出会う。 665
第１０２番　落ち武者たちの祭典 670
第１０３番　道の先の宝物 678
第１０４番　三ツ橋蛍と五條佑真 685
第１０５番　蛍丸と七星剣と金剛力 692
第１０６番　大和国部屋へ 700
第１０７番　最後のピース 709
第１０８番　ポプラの大樹 715
第１０９番　蛍火、大相撲に舞う 723
第１１０番　初場所を終えて 731
第１１１番　駆け上がる 737
第１１２番　贈り物 742
第１１３番　２２年ぶりの天王山 751
第１１４番　小龍景光の見た光景① 759
第１１５番　小龍景光の見た光景② 765
第１１６番　蛍丸と清心道璃音 772
第１１７番　綱の責務 779
第１１８番　もう一度だけ、自分と語ろう。 788

結びの一番　蛍丸と鬼丸国綱 —— 794
あとがき —— 804

エピローグ　新横綱『鬼丸国綱』土俵入り

―続きまして、横綱、鬼丸国綱の土俵入りであります―

拍子木の響きと共に、東の通路から3人の力士が現れる。と同時に国技館は

怒涛の歓声に響き、揺れる。

新横綱、鬼丸国綱の初の土俵入り、そのお目当てを見ようと満員御礼の傘の下のファンが

一斉に拍手喝采を送る。

「さぁ親方、いよいよこの瞬間が来ましたね、待ちに待ったのではないですか？」

アナウンサーのフリに、解説席に収まる柴木山親方はその厳つい顔をユルユルに緩めて

涙を堪えながら返す。

「ええ、本当にそうです、私が夢にまで見たその時が、世代を超えて・・・ついに、実現・・しました・・・」

感極まってそれ以上言葉にならない親方をフォローする解説者。

「あの初優勝から3年、着実に力を付けてきた鬼関。特にここ3場所の強さは際立ってました。１４勝１敗で優勝、１３勝２敗で準優勝、そして先場所は全勝優勝、文句のつけようが無いですね。」

ここ3年、大相撲はまさに群雄割拠の様相を呈していた。鬼丸が刃皇を破って初優勝して以来

ほぼ毎場所のように活躍、優勝する力士が入れ替わり、番付は荒波のように入れ替わっていた。

そして半年後、童子切が2場所連続優勝で見事横綱を巻く事になる。

人々が「次代の日本人横綱」と期待した「国宝」が、ついにその地位を手に入れたのだ。

さらに1年半後、同じ国宝の大典太が横綱の地位に昇り詰める。もはや横綱は日本人力士に

手の届かない地位では無くなっていたのだ。

そして1年の後、鬼丸がそれに続くことになる。小兵であるがゆえに長い相撲が多いが
それだけにファンの人気も高かった。
特に横綱刃皇との死闘は、その激しさと熱量が多くの者を熱狂させた。
ぶちかまし、押し、突き、投げ、寄り、あらゆる相撲のエッセンスが詰まったその1番は
多くの相撲関係者をして「名勝負」と言わしめた。
残念なことに、その横綱刃皇は先場所で引退、数々の伝説を残して土俵を去った。
ひとつの時代が終わり、新しい世代の台頭を告げる、そんな象徴の土俵入りでもあった。
『いよぉいっしょぉーっ!』
高々と上がる鬼丸の四股、それが地面に打ち付けられると同時に上がる歓声、そして拍手。
太刀持ちの白狼（東前頭１１枚目）も、露払いの薫丸（東十両５枚目）も鬼丸に負けず堂々と佇む。
鬼丸の象徴とも言える「不知火型」の姿勢でせり上がる鬼丸は、小兵でありながら誰より
大きく見えた。
やがて土俵入りを終え、横綱としての最初の仕事を果たし花道を引き上げる。
拍手の渦が国技館を包む。
「横綱鬼丸、無事にと言いますか、見事に土俵入りを勤め上げました・・・おや?」
中継のカメラが桟敷席の一角を映している。和服を纏った女性二人が拍手を送っている。
「奥様の玲奈夫人ですね、隣は冴関の奥さんもいらっしゃいますよ。」
目ざといカメラマンやアナウンサーの仕事に親方がフォローを入れる。
「ずっと二人を支えてきた自慢の奥方ですからねぇ、期待に応えない

といけませんよ。」
「大関の冴ノ山関も今場所に綱取りがかかっていますからねぇ、もし実現すれば柴木山部屋は
まさにこの世の春と言う所ですか。」
「そう甘くはないと思いますが、是非そうなってほしいですね。」
冴ノ山は大関昇進後、ずっと横綱を目指し戦ってきた。本人曰く
「横綱になるまでは何も欲さない」
とストイックな姿勢を貫いてきた。が、さすがに2年半も手が届かなければ待ってる方はたまらないだろう。
健気に待ち続ける堀千鶴子を見かねて、柴木山夫妻は半ば強引に二人をくっつけたのだ。
その行動は吉と出た。最愛の、そして最良の味方を得た冴関は先場所、先々場所と13勝を挙げ、横綱昇進に王手をかける。
今場所13勝を横綱審議委員会から昇進の条件として出されたのだ。
鬼丸の土俵入りの熱を受けてか、初日の取り組みは熱戦続きであった。
大和号と太郎太刀が迫力のぶちかまし合戦を演じ、三日月と御手杵が鋭い差し手争いを見せる、
大包平が長船の猛攻を凌ぎ切り、草薙が蜻蛉切を上手一本で仕留める。冴ノ山が数珠丸を退ければ、
童子切がかつての後輩、白狼を一蹴し、大典太が四方田を張り飛ばす。
熱戦なれど上位陣安泰のまま、ついに結びの一番。
レイナと千鶴子が桟敷席から、太郎太刀と鬼切が西の控室で。五条佑真と国崎千尋は
仕事をほっぽり出して観客席から、かつてのチームメイトの晴れ舞台を見守る。
そして行司の呼び出し。
「ひがぁ～しぃ～、鬼ー丸、おにぃ～まぁあ～るぅ～」
その声と同時に土俵へ上がる横綱、鬼丸国綱。会場のボルテージは

今や最高潮だ。
「さぁ、いよいよ結びの一番。相撲ファンの待ちに待った取り組みです！」
興奮気味に語るアナウンサーの横、柴木山親方は少し複雑な面持ちで土俵を見守る。
もし自分がもっと積極的に動いていたら、彼はウチの部屋に・・・
しかし、ならば彼が
ここまで来られたか。後悔と「これで良かった」という思いが頭の中でぐるぐる回る。
歓声にかき消されて聞こえなかった呼び出しの声をフォローするかのように、場内アナウンスが
取り組みの紹介を響かせる。
―東方、横綱、鬼丸。千葉県銚子市出身、柴木山部屋―

―西方、蛍丸。西前頭９枚目、千葉県千葉市出身、大和国部屋―
アナウンスが終わると同時に、甲高い、しかし凛とした少女の声が国技館に響き渡る。
「蛍ーーーっ！頑張れーーっ!!」

第一章　二年生

第1番　新大太刀高校相撲部　始動！

「はーい、みんな注目ー！」

春、大太刀高校相撲部の部室に、五條礼奈の声が響く。

レイナの側には辻桐仁と三ツ橋蛍、堀千鶴子、そして新顧問（レスリング部との兼任）の諸岡雄一郎。

向かい合うのは5人の新入部員、内4人は以前から出稽古に来ており、既に顔馴染みではあるが。

「えー、改めて挨拶させてもらうわね、大太刀相撲部部長、五條礼奈です。」

凛として堂々と語ってはいるのだが、実は内心は不満もあったりする。

（ったく、何で選手でもない私が部長やんなきゃいけないのよ！監督も三ツ橋も・・・）

半年前、3年の小関信也と五條佑真が引退、12月には三段目付け出し資格を得て大相撲に行く潮火ノ丸、

そして格闘王の夢を叶えるため高校を中退した国崎千比路が引退し、

残った桐仁、蛍、そしてマネージャーのレイナと千鶴子のわずか4人で新生大太刀相撲部は

スタートを切った。

てっきり新部長は相撲博士でもある桐仁が務めると全員が思っていた。しかし桐仁は

新顧問との諸岡と相談の末、部長の任を引き受けないことを明かす。

「俺は、これから選手としての可能性を追求していきたいんだ。」

ただでさえ技術指導者としての役割がある彼は、部長の仕事まで引き受けてしまえば

自分の為に使える時間が少なくなる。肺に疾患があり、長時間戦えない桐仁がそれを克服するには
やるべきことは幾らでもある、そんな彼の切実な願いに皆は黙るしかなかった。
「僕は・・まだ公式戦未勝利ですからね。そんな人間が部長になったら大太刀の『格』が下がっちゃいますよ。」
三ツ橋はそう言って新部長の座を断る。
確かにこの1年で大太刀高校相撲部の名は全国に『強豪校』として轟いた。しかしそれは逆に言えば
『団体戦全国優勝校で公式戦1勝もできなかった男』三ツ橋蛍の存在をも知らしめてしまっていた。
ましてや既に諸岡が中学相撲で実績を上げた有望株のスカウトに奔走していて、既に何人かは
色よい返事を得ている。そんな彼らの部長が三ツ橋だと不満に思う者もいるだろう。
部内的にも対外的にも、蛍が部長になることが大太刀の『格』を下げるのは確かだった。
じゃあ誰にすんのよ!というレイナの言葉に、全員が一斉に彼女を指差す。
ええ、わ、私いーっ!?と言ってドン引きするレイナに、悪い目をした桐仁が囁く。
「生徒会ももう引退でしょ?コネ使ってたっぷり部費ふんだくって下さいよ。」
「3年はレイナさんだけですしね、指導力もバッチリだし。」
適任という顔をして言う蛍に続いて、千鶴子がさらに後押し。
「レイナさんなら安心です、部長って色んな所に目が行き届いていないといけませんから。」
千鶴子には心配事もあった。兄の佑真が引退し、火ノ丸が出て行ったダチ高相撲部に彼女が
居続けてくれるか、その引き止めの理由としては部長の指名はうってつけだったのだ。

3方向から集中砲火を受けて赤い顔で引いている玲奈に、諸岡がトドメを差す。
「五條君なら適任だろうね。私もレスリング部と兼任だから、しっかりしてる人間が部長をしてくれると有難いよ。」
その言葉に、内心げんなりしながらも
「仕方ないわねー、じゃあ私に任せなさい！」
と部長を引き受けるレイナ。そんなこんなで今この状況である。

「知っての通り我が部は昨年、全国制覇の偉業を成し遂げました。主力は卒業しましたが
続く私たちもその誇りをもって、大いに大太刀相撲部を盛り上げていきましょう！」
レイナのスピーチに拍手が起こる。ふふん、と微笑んで下がるレイナと入れ替わりに
桐人が一歩前に出る。
「2年の辻桐仁です。大したことは言えませんが、ここでは一つだけ。」
そう前フリしておいてから続ける桐人。
「大事なのは自分で考え、工夫する事。自分の相撲に何が足りないか、何が秀でてるかをよく考え
試行錯誤を怠らない事。もちろん分からなければ積極的に誰かに聞くのもアリだ。
何もせず日々を漫然と過ごすことだけはしないように、以上です。」
多少、瞬海さんの受け売りもあるが、無難にスピーチをまとめる桐仁。彼が下がると同時に
蛍が前に出て、話す。
「ようこそ大太刀相撲部へ。ウチは完全実力主義ですので、1年の皆さんも遠慮せずに
レギュラー目指してガンガン鍛えて下さい。今年の主力になるのは間違いなく君達です！」
そのスピーチに1年全員が「ハイ！」と元気な声を返す。1年と

言ってもいずれも腕に覚えのある猛者たち、
レギュラー争いに年功序列が絡まないのは願ったり叶ったりであろう。
「では、左から順番に自己紹介してもらおうか。」
諸岡の言葉に、左端の坊主頭の巨漢から口を開く。
「松本康太(まつもと　こうた)ッス！昨年の先輩たちのような熱い相撲を取りたいッス！」
続いて隣りの、ややがっしりした格闘家体形の短髪の男が前に出る。
「陽川満(ひかわ　みつる)です。将来はプロを目指しています、よろしくお願いします。」
さらにその隣、天然パーマにメガネがなんとも威圧感のある、お前のような高1がいるか
と言いたくなる生徒がずいっ、と体をゆすって前に出る。
「大峰浩二(おおみね　こうじ)、昨年の全中でベスト8でした。よろしくお願いします！」
彼ら3人はいずれも諸岡がスカウトしてきた、地元千葉の中学の強豪選手だった者たちだ。
そういう生徒は昨年までならたいてい石神高校や川人高校など強豪校が引っ張っていくのだが
全国優勝の看板をタテに諸岡が見事ゲットしてきたのだ。
「幸田純一(こうだ　じゅんいち)です。相撲経験はありませんが、頑張っていきます！」
彼は今日が初顔見せ。中肉中背、他の3人と比べるとややソップ(やせっぽち)な印象があるが、果たして・・・
「堀柚子香(ほり　ゆずか)です。マネージャーの堀先輩の妹です。女子相撲の選手を希望します！」
最後にそう言った柚子香に対して、上級生から「ええっ!?」というざわめきが起こる。
「ちょ、ちょっと柚子香、あなたマネージャーやるって・・・」
「いいじゃない！やっぱり見るよりやるほうが好きだし、私。」

はぁー、と頭を抑える千鶴子。以前からそんなこと言ってて嫌な予感はしていたが。

姉妹から一歩引いた立場のレイナは諸岡に問う。

「まー、土俵は2面ありますけど・・・練習相手どうします?まさか男子と相撲取るわけにもいかないでしょう。」

そんなレイナに諸岡はぐっ!と親指を立て笑顔でウインクすると、ごそごそとカバンをあさり始める。

やがて取り出されたのは、新品の女子相撲用のマワシ。

それが・・・ふたつ。

ひとつを柚子香に渡すと、くるりと振り返った諸岡は、レイナに笑顔でずんずんと近づく。

「え、え?・えええええーっ!?」

青くなって後ずさりするレイナに、笑顔のままマワシを渡す諸岡。

「五條君なら運動神経バツグンだし、練習相手にはうってつけだろう。あ、選手に転向したかったらいつでも言ってくれたまえ!」

目をキラリと輝かせ『よろしく頼むよ』と無言の圧をかける。レイナは諸岡とマワシを交互に見ながら

やがてがっくりと肩を落とし、首をうなだれる。

「部長!・よろしくお願いします。」

満面の笑顔で頭を下げる柚子香に、千鶴子が続く。

「よかったわね柚子香、頑張って!」

その声を聴いたレイナがきっ!と顔を上げ、ずかずか歩いて千鶴子に詰め寄る。

「ちょっと、堀ちゃんも相手してあげなさいよ!」

その発言に一同がえっ?という顔になる、レイナはともかく千鶴子はスポーツには何か

向いてなさそうなのだが。」

「わ、私は・・・ちょっと。」

視線をそらし、言葉を濁す千鶴子にレイナが口を滑らす。

「何言ってんの!・あなた前に私と相撲取っていい勝負したじゃない!」

部室沈黙。桐仁が悪ーい顔でメガネをくいっ！と上げる。
「ほほう、初耳ですな。部長と堀さんがいい勝負を、ねぇ。」
「あ・・・いやその、それは」
「レ、レイナさんっ・・・なんでバラすんですかぁっ！」
二人の抗議を無視して、諸岡に視線を送る桐仁、それを受けてスマホをポケットから出し、
通販のサイトを開く。
「女子相撲用の廻し、サイズＳ，購入、と。」

第2番　蛍と桐仁と1年生

「う、運動でお姉ちゃんに負けた・・・」
姉、千鶴子に寄り切られ、土俵の外で真っ白になっている堀柚子香。
運動神経のいいレイナに負けるならいざ知らずだが、中学生以来あらゆる運動で
姉に負け知らずだった柚子香にとって、今の状況はまさにカルチャーショックであろう。
「ま、まぁ柚子香は初心者だし・・・これから強くなるよきっと。」
姉のフォローが空しく響く。
今年度大太刀の練習3日目、それまでは柔軟や基礎動作、受け身等の練習をしてきた
柚子香だったが、注文していた千鶴子用のマワシが届いたので、一番取ってみようということになり、
レイナと、そして姉と相撲を取ってみたのだが・・・結果はかくのごとし。
もちろんジャージの上からマワシを付けてるとはいえ、その取組みが男子部員の注目の的であることは言うまでもない。
「では、レイナさんと堀さんで決勝戦といきますか。」
桐仁の一言にレイナが予想していたとばかり反撃する。
「やんないわよ!選手希望はゆずでしょうが。ほら練習再開しなさい男子!」
ちぇー残念、と解散し練習に戻る男子部員たち。
「どう思った?今の一番。」
その桐仁の問いにうーん、と考え、きびすを返して柚子香に向き直る蛍。
「えーと、堀さ・・・柚子香さん、手と足がバラバラっていうか逆でしたよ、今の一番。」
「え?」
蛍の言葉に、うなだれていた顔を上げる柚子香。
「足は押そうと前に出てたのに、腕は逆に堀さん・・・お姉さんの体を

引き寄せてましたから。
あれじゃ単に抱き着いているだけですよ。」
「あ!そっか、なるほど。」
ぽん!と手を打つ柚子香。なんとなく皆の練習を見ていて形だけ真似てみたが、
それで出来るようになるほど単純ではないことを理解する。
桐仁はへぇ、と感心していた。蛍があっさりと満点回答を出したのもだが、
質問した自分ではなく、柚子香本人にそのことを教えるその先輩としての態度と、
女子相手にも臆さずそれを言える行動力に。
「(そういや以前は吹奏楽やってたんだったな、中学時代も後輩の女子に教えてたのかな)」
アップや柔軟、筋トレを経て、ぶつかり稽古に移る男子部員。
受け役の相手を、土俵の端から端まで押し出す、突進力を養う稽古。
初心者の幸田純一は昨日まではここからは見学だったが、もう3日目、そして女子の柚子香も
実戦をしたという事もあって、彼も今日からこの先の稽古に参加する事になる。
あまり体格のよくない純一に、まず蛍が受けに回る・・・のだが。
体格に似合わない突進力で蛍に体当たりした純一は、そのまま一気に蛍を押し出した。
続く桐仁、陽川満、果ては重量級の松本康太に大峰浩二まで、息を切らしながらも
全員に土俵を割らせた。
「スゲェじゃないか、何かやってたのか?」
桐人の問いに、ヒザに手をついて答える純一。
「は、はい・・・ラグビーやってまして。」
その答えに納得する一同。1年の中では経験者3人に埋もれるかと思っていたが、
思わぬ逸材がいたもんだ。

ただしその後の申し合い稽古（実戦形式の稽古）では次々と転がされる純一。

足腰こそ強いものの、上半身の使い方や投げ、ひねりに対する対応はまだまだ初心者だった。

だが将来的なことを考えたら彼は間違いなく強くなるだろう。桐仁はふむ、と頭をひねって

考えたアイデアを蛍に告げる。

「なぁ三ツ橋、1年の初心者の二人なんだが・・・」

「二人って言うと、幸田君と・・・堀さんの妹さん？」

「ああ。俺とお前でマンツーマンで教えたらどうかと思ってな。」

こういう時に頭がよく回るのが辻桐仁という男だ。

「純一の伸びしろは間違いなく大きい、うまく育てれば必ず強力な戦力になるよ、アイツは。」

その言葉にこくりと頷く蛍。彼に押し出された時はあわや吹き飛ばされそうにすらなったから

純一の突進力、膂力が並でないことは身をもって理解している。彼の力に桐仁の技が加わればさぞ強くなるだろう。

・・・が、蛍はもうひとつの意味を察し、驚き顔で桐仁に言う。

「え！今マンツーマンって・・・じゃあ僕に柚子香さんの指導をしろと？」

「頼むよ、彼女はまだまだ完全に初心者だし、基本的なことを教えればそれでいいから。

それにお前女子の扱い上手そうだしな、頼む！」

「まぁ、いいですけど。」

蛍は桐仁の意図を全ては理解していなかった。それは以前から桐仁の頭の中にあった、

蛍に対する不安と期待―

昨年のインターハイ団体戦準決勝、蛍は鳥取白楼の首藤との戦いでヒザを負傷した。

大会後、実質的な練習ができない蛍は、これからの自分の相撲道を

考える時間を得る。
この一年、変化に特化した稽古を積んできた蛍。それはいわゆる『3年先の稽古』ではなく
大太刀相撲部の為に、ここそという一番で勝ちを拾うために続けてきた稽古。
だが、勝利への近道を模索したその稽古は、遂に蛍に白星をもたらす事は無かった。
それと決別するべきか、それともこのまま変化に特化した選手になるか、療養の時間は
そのどちらかを選択する時間でもあったのだ。
結局、蛍は後者を選択する。それは勝つために楽な道を選んだのではなく、
自分を勝たせるために指導してきた桐仁の思いに応えたい、という意志もあった。
なにより彼にはフィジカルな才能が無かった、体格で近い火の丸の馬鹿力を見続けてきた蛍は
それが自分には届かない理想像であることを理解していたのだ。
そこで蛍はアマ、プロ問わず相撲のビデオを見て研究する。変化を成功させるのに必要なものは何かを知るために。
彼が得た結論、それは『何でもできる事』だった。大相撲でも変化に特化した力士は
相撲のあらゆる攻め手を自在に使いこなしていた。
怪我が治ると、蛍は早速それを実行に移す。幸いにしてサンプルは自分の周りにあった。
火の丸のぶちかましや投げ、五條の突っ張り、国崎の機動力、そして桐仁の技。
それらを十全に会得するのは到底無理でも、1でも2でも使うことが出来れば変化の幅が広がる。
虚と見せて実、実と見せて虚。そんな相撲こそが「変化のスペシャリスト」の完成形であるとし、
そこを目指すために、彼はチームメイト達がしていた稽古を積極的

に取り入れる。
金魚の動きに合わせた足運び、吊るしたピンポン玉への張り手、鉄砲柱への当たりから
力を逸らすためのわずかなひねり等、仲間たちの技を取り入れようとする。
それは桐仁にとって嬉しくもあったが、同時に『これでいいのか』と思わずにもいられなかった。
昨年の忘れ物である初勝利、それを桐仁が教えた変化でもぎ取る、その意思は確かに嬉しい。
だがこのまま真っ当な相撲からどんどん蛍が外れていくのはどこか心苦しさがあった。
もし自分が最初から「3年先の稽古」を蛍に仕込んでいたら、3年後には一端の力士になれたのではないか
もしそうなら自分は、火の丸たちの為に、蛍の相撲人生を潰してしまったのではないか、
そんな後悔さえ頭をよぎる。

そんな悶々とした思いを抱える桐仁の前に、二人の逸材が現れる。
幸田は部内での蛍のいいライバルになるだろう、強力な突進力を持つ彼は、変化で戦う蛍と
非常に噛み合う存在になるはずだ。
柚子香はまず相撲のイロハから教えねばならない。それを教えることは蛍にとっても
相撲の基本を改めて見直すいい機会になると思ったのだ。
こうして翌日から桐仁は幸田の、蛍は柚子香の指導を担当する。
―それは後に、二人の運命を大きく変える事になる―

第3番　ちゃんこＤＡＹ

「堀ちゃん、野菜切れたー?」
「あ、はい。今持っていきますねー。」
「先生ー、ガスコンロここでいいですか?」
「イス持ってきましたー。」
「よしよし、コンロの周りに並べてくれ。」
いつも以上に賑やかな大太刀相撲部室。本日は月に2回の「ちゃんこデー」。
以前から時々やっていた練習後のちゃんこ、今年度からは顧問の勧めもあり、レスリング部との
共同開催になっている。必要経費を折半できると共に、お互い格闘技の部活同士、
交流を深めることでお互いの向上にもなれば、という意図もある。
最もそのおかげで縛りもある。レスリングは体重別の競技、減量が必要な選手もいることから
大会が近い時は日程をズラすことになっている。
逆に相撲部にとっては単なるイベントではなく、いわゆる「食いトレ」の場でもある。
デカくて重い、が無差別級の相撲にとっては重要な強みだ。
胃袋を広げ、沢山カロリーを詰め込める体を作るための稽古でもある。
とはいえ、皆で集まって鍋を囲むのはやはり楽しいものだ。皆もう服を着替え終わって
なごやかな雰囲気で準備は進む。
「肉、準備できましたー!」
陽川満が両手に皿を持って調理場から出てくる。彼は新一年生の中でも特に張り切っている、
プロ志望である彼は、今からちゃんこ番のトレーニングをしておくのも大事な経験だからだろう。

「「いっただきまーすっ！」」
皆で鍋を囲み、どんぶり飯を片手に話が弾む。一年は相撲部・レスリング部の同中出身者が
近況報告に花を咲かせ、また女子マネのいないレスリング部は冗談で千鶴子にウチに来てと泣きつく。
桐仁はこんな時にも弟子の純一に身振り手振りでアドバイスし、蛍は逆に柚子香に質問攻めにあっている。
和やかな雰囲気で続く食事の時間。と、部室のドアが開き、長身の男が一人顔を出す。
「いい匂いがすると思ったら、今日はちゃんこの日か！」
「五條さん！」
「佑真!?」
驚く2年生に続いて、相撲部1年から驚嘆の声が上がる。
「突き押しの五條さんだ！」
「ち、ちわぁーーーッス！」
五條佑真、レイナの兄で、昨年のインターハイ全国制覇メンバーのひとり。
空手をベースにした突き押し相撲で優勝に大きく貢献した選手だ。
卒業後は相撲の強豪、栄華大学の医学部に進み相撲を続けてつつ、目標の医者になるべく励んでいる。
「佑真、大学は？」
「ああ、今週末は練習休みでな。ヒマだから顔出したんだが、いい日に来たもんだ。」
そう言うと空いてる椅子に座り、千鶴子が差し出した椀と箸を受け取る。
が、この後は後輩の質問攻めにあい、おちおち食うこともままならないのだが。
「一年前じゃ考えられねぇなぁ、この光景。」
しみじみと呟く佑真。一年前はこの部室を『ダチ高最強』のユーマが占拠し、不良のたまり場になっていた。
火ノ丸が来て、部室が相撲部に戻ってもこの時点では部員はわずか

3人、広すぎる部室を
持て余していたものだが。
今や大勢の部員が日々切磋琢磨する場になっている。そして他の部も招待し、活気ある
食事タイムで懇談に花を咲かせるまでに。
少しは相撲に恩返しできたかな、と頬を緩ませる佑真。

「さーてさて、相撲部のみんな、食べながらでいいから聞いてくれ。」
顧問の諸岡が大きな声で相撲部に声をかける、何事かと注目する部員。
「1か月後に迫った春の団体戦、メンバーは選手3人に補欠2人の構成だ。よってウチからは
一人だけメンバーから外れることになるのだが・・・」
現在、男子部員は6名。つまり一人はこの大会に出場できなくなるという事だ。
「で、選抜の方法だが、一週間後の土曜日、部員で総当たりの部内戦を行って、最下位の者は
今回メンバーから外れて貰う事にする。」
一瞬の沈黙の後、相撲部全員がハイ、ウッス、と頷く。今年に入って初の『本番』は
対外試合ではなく、普段切磋琢磨している『仲間』が最初のライバルとなる。
それを聞いた佑真は一時「ガチだなー」と呑気なことを思うが、少し置いてその提案の非情さに気付く。
「お、おい監督・・・いや辻!いいのか?総当たり戦って。」
心配そうな佑真に向かって桐仁は、箸を置いて佑真に向き直る。
「いいも何も、俺と三ツ橋の提案ですよ、この選抜方法は。」
隣りにいる蛍も佑真に向かって親指を立て、笑顔を見せる。佑真は自分が思ってる以上に
今の大太刀がガチモード全開であることを思い知らされた。
桐仁は肺に疾患があり、20秒以上の運動が出来ない体だ。部内総

当たりともなると
一日に5番も相撲を取る事になる。最初の1番こそ無類の強さを誇る桐仁だが
2番目以降極端に弱くなる彼にとって、この総当たり戦は最悪1勝4敗で最下位になる危険すらある。
三ツ橋は去年、公式戦でただの1勝も挙げられなかった。それでも徐々に力をつけ、今年こそは
悲願の初勝利を挙げるチャンスだったはずだ。だが今のダチ高相撲部は巨漢ぞろいな上に
部内なら三ツ橋の得意な『変化』もよく知っているだろう。こちらもまた最下位になり
メンバーを外れる可能性すらある。それを承知でのこの選抜方法を選んだと言うのか・・・
食事が終わり、皆が片付けをしている中、レイナは佑真が来てるという事もあり
ふたりで部室の外で話してきなさい、と気を使われる。
「しかしスゲェな、今の大太刀って。」
「そりゃまぁ、私が部長ですもの。中途半端な部にはならないわよ!」
いやまぁ、そこは特にすごいとは思わないが。
「あのな、玲奈。実は今日はひとつ、有益な情報を持ってきたんだが・・・」
今の大太刀の雰囲気に当てられ、『そういう情報』を話す気にはなれなかった。
「え、何?」
それでも興味津々なレイナを見て、続ける佑真。
「去年石高にいた金森、今は栄大のチームメイトなの知ってるだろ。あいつからの情報なんだがな・・・」
一呼吸おいて続ける佑真。
「荒木っていたろ、去年国崎とやった奴・・・あいつ今、絶不調らしいぜ。
春の団体のメンバーからも漏れたらしい。」

第４番　部内戦

「ではこれより、春の団体戦の代表を決める部内戦を行います！」
レイナ、千鶴子、柚子香、そして顧問の諸岡が見守る中、ついに新生大太刀相撲部、
初の真剣勝負が幕を開ける。
単に出場選手を決めるだけではない、この部内戦は今の相撲部の『格付け』を決める勝負の
場でもあるのだ。
レイナの横にはホワイトボードに書かれた星取表と、その際にはくじ引きの箱。
公平を期するべく、対戦順はこのクジによって決められる。
諸岡がその箱に手を入れ、一枚のクジを取り出し、初戦の組み合わせを発表する。
「東、松本君。西、三ツ橋君。」
いきなり相撲部最重量と最軽量の組み合わせ。厳しい表情で土俵に上がる両者。
「うわ・・・二人とも気合入ってる。」
柚子香が目を見張る。特に普段温厚な松本のヒリつくような顔つきに気圧される。
そんな彼女に諸岡と千鶴子が解説。
「彼も全中で活躍した選手だ、真剣勝負になるとさすがにスイッチ入るね。」
「でも三ツ橋さんも負けてませんよ、気合入ってます。」
行司を務めるレイナが二人を仕切る。
「手をついて！」
ゆっくりと腰を下ろしながら松本は考える。恐らく三ツ橋先輩は変化するだろう。部内の稽古でも
真っ向勝負なら負けたことは無い。ならば立ち合いは慎重に胸で受け、しっかり捕まえて
確実に仕留めるべきだ、と。

「はっきよい！」
　―バチイィンー
　レイナの掛け声と共に、両者が激突する。松本の予想に反し、蛍は真っ向からぶちかましを
仕掛けてきた。胸で受けた松本は重心が浮き、後方に押し込まれる。だがそれも土俵際まで、
俵に足が掛かるころには松本が得意の右四つ十分の体制になっていた。そのまま蛍を吊り上げ
土俵の外に出す、勝負あり。礼をして土俵から降りる両者。
「次。東、辻君。西、大峰君。」
　次に来たのは部内の暫定最強決定戦だ。１番だけなら無敵の辻と、昨年の全中ベスト８の大峰。
　メガネを陽川に預け、顔を叩いて気合を入れる。桐仁を相手にするなら無論、後の方が有利になるが
大峰にそんな気は微塵も無かった。むしろ万全の桐仁との真剣勝負に大いに闘志を燃やす。
　結局、大峰の闘志を桐仁の技術が上回る。立ち合いのいなしから潜り込んで体を浮かせ
大峰が踏ん張った瞬間の絶妙な引き落としにあえなく両手を付いてしまう。
　部内戦は進む。蛍は経験者の大峰、陽川にも変化を見せず、真っ向からのぶちかましを見せるが
やがては捕まり、反撃を受け土俵を割ってしまう。３戦して白星が出ていない。
　桐仁は２戦目の陽川戦が思わぬ苦戦だった。あまり太くなく筋肉質の陽川は、桐人の連続攻撃にも
何度も体をひるがえして残すが、ついには絶妙の切り返しに倒れる。しかしこの取り組みで
２０秒以上の時間を使ってしまい、３戦目の松本戦ではあっけなく押し出される。
　初心者の幸田はやはり経験者の１年に分が悪い。得意のぶちかま

しでいい所は見せるものの
あと一歩で投げられ、または捕まってしまい土俵を割らされる、勝ち星のないまま3敗目。
「東、辻君。西、幸田君。」
取り組みも終盤、師弟対決ではあるが、桐仁は既に息も絶え絶えで、ふらつきながら土俵に上がる。
対してラグビー経験者の幸田は持久力には自信がある、何より辻先輩と三ツ橋先輩、
二人の先輩に勝って大会に出られるとあれば、土俵に上がれば容赦はしない。
「はっきよい！」
桐人は幸田のぶちかましを切り返そうとするが、悲しいかな体が言うことを聞かない、
一気に押し出される桐仁。
ふたつ取り組みを挟んで、桐仁の最後の一番。
「東、辻君。西、三ツ橋君。」
酸素スプレーを口から離し、おっくうそうに土俵に上がる桐仁。向かい合う蛍はそれでも
油断なく桐人を睨む、それを見て桐仁がしんどそうに声をかける。
「なぁ三ツ橋、何でお前、今日、変化しねぇんだ・・・？」
それに対して、薄い笑いを浮かべて蛍が返す。
「ここでするかも知れませんよ。」
「はっきよい！」
変化は無い、またも正面から行く蛍。胸で受けた桐仁は最後の力を振り絞って投げを打つ。
もつれるように土俵の外に飛ぶ両者、だが先に地面に落ちたのは引いた桐仁の方だった。
桐仁はこの部内戦を2勝3敗で終える。
彼は残る試合を、部室の隅でへたり込みながら眺めることになる。
勝ち頭はやはり大峰だった、初戦の桐人で負けた以外は全勝の４勝1敗、松本と陽川が

それに続く3勝2敗で大会への出場権をゲットする。
そして最後の試合、共に1勝3敗で、負けた方が最下位になり、大会への出場が無くなる一番。
「東、三ツ橋君。西、幸田君。」
土俵に上がる両者。蛍は終始無表情だが、幸田は緊張のただ中にある。この1戦さえ勝てば大会に出られる。
だが、果たして今まで通りに突っ込んでいいのか、三ツ橋先輩の得意技は変化だ。
ここまで使わずにおいたのは、この土壇場で使うためではないか。
では見て立つか?いや、松本ですらそれをやって土俵端まで押された。自分なら外まで
押し出されるかもしれない・・・どうする?
「手をついて!」
決意のないまま仕切る幸田。と、三ツ橋先輩の目を見る。その闘志あふれる目を見て吹っ切れた。
そうだ、変化で躱されても構わない。それは先輩が俺のぶちかましを恐れたってことじゃないか。
なにより中途半端に立って負けるなんて絶対に嫌だ、勝つにしろ負けるにしろ自分の相撲を取れば
いいじゃないか、腹が座った幸田はやや下がり、助走距離を取って仕切る。
それを見ていた桐仁は思う、三ツ橋はなぜここまで真っ正直にぶちかましを続けてきたのか。
本当に勝つ気なら、今までにも変化を使うテは十分考えられた。だが三ツ橋はここまで愚直に
頭からぶつかっていき、自分以外に全敗を喫してしまった
無論この最終戦に取っておいた可能性はある。だがここまでの三ツ橋はまるで、真剣勝負の中で
まるで何かを試すかのような相撲にさえ見えた。
「何かを・・・試す?」
そこに辿り着いた桐仁に、ひとつの記憶が蘇る。以前三ツ橋が相談

してきた、あまりに難しい戦法の提案。
『変化って大抵立った瞬間か、一度当たってそこから引くとかですよね。もしも当たった瞬間に
変化することが出来たら面白いと思うんですが・・・』
「まさか・・・お前!?アレをやるつもりか?」
三ツ橋がかつてのチームメイトの良さを取り込もうとして、未だに習得できていないあの技。
そしてそれを使った変化技。そうか、それならお前のその相撲も、ここまで俺以外に全敗なのも―
「はっきよい!」
―ガツン!―
幸田が突進する、三ツ橋が突撃する。頭と頭が激突し、部室に鈍い音が響く。
「(勝った!このまま押し切る!!)」
幸田は勝ちを確信する。最初に当たった時からすぐ、頭の感覚が消えていたから。
当たり勝ったと確信を得た幸田の眼前に、三ツ橋先輩の姿は・・・無かった。
「なっ!」
蛍はすでに幸田の後ろに取り付き、そのまま彼を吊り上げる。
驚きの声を出したのは幸田だけではない、この取り組みを見ていた全員が、蛍のしたことに
驚嘆の声を上げる。
「しょ、勝負あり。勝者三ツ橋!」
レイナの宣言を受け、土俵を降りる両者。
「ふぅ、やっと成功したよ。」
部内戦も終わり、ようやく緊張も解けたか、そう桐仁に話しかける蛍。
「・・お前、ずっとアレ狙ってたのか。全敗したらどうするつもりだったんだよ。」
蛍の後ろから息を切らせた幸田が話しかける。

「三ツ橋先輩、一体・・・何をやったんですか?」
蛍が口を開こうとしたその時、柚子香が空気を読まずに声を上げる。
「凄いですよ師匠、まるでウナギみたいにぬるっと後ろに回るなんて!」
一瞬の沈黙の後、桐仁がぶっ!と吹き出し、つられるようにレイナも大笑いする。
千鶴子に至ってはツボに入ったようで、かがんで苦しそうに悶え笑う。
「ウ、ウナギ・・・ぷーーーっ!」
「ひでぇなぁ、ウナギだってよ三ツ橋!」
「柚子香さん、もうちょっとマシな表現して!」
蛍は五條の突き押し、国崎の機動力、桐仁の技などを習得しようとしていたが、
中でも至難だったのが鬼丸のぶちかましを習得する事だった。ただ当たるだけではなく
当たった瞬間にぶちかましの軌道をずらす高等技術。
本家の冴ノ山の『水の如し』そして鬼丸の『火の如し』
体格に勝る相手に当たり負けしない為のその技は、型としては出来ても実戦で決められないと
意味が無い。初の実戦であるこの部内戦で、蛍はその習得に勝敗を度外視して挑んだ。
そして相手のぶちかましを逸らしたその流れで体ごと変化する、成功すればまさに
当たったはずの相手が目の前から消えたように思うだろう。
そう、まるで掴んだと思った瞬間に逃げる蛍火のように。
「じゃあ、真っ向からぶちかましたのが自分だけだったから、成功したと?」
幸田の問いに、蛍は笑顔で返す。
「松本君たち、みんな胸で受けられたからね、頭で受けてくれないと使えないし。」

「よし、三ツ橋のこの技を『ウナギの如く』と命名しよう！」

桐仁の宣言に拍手に沸く相撲部。蛍は桐仁の首根っこを掴んで抗議するが無駄のようだ。

弟子の柚子香にジト目で非難する蛍、柚子香は手を合わせて『すんません』の意思表示。

後に三ツ橋蛍、いや『蛍丸』の象徴と言える技は、こうして誕生した。

―蛍火の如く―

第５番　男子三日会わざれば―

「組み合わせ貰ってきましたー。」
千鶴子がトーナメント表を持って皆の所に駆けてくる。
いよいよ春の団体戦、会場にはマワシ姿の選手たちがごった返す。
その一角に大太刀相撲部も陣取っている。
千鶴子から紙を受け取った満が呟く。
「今年からリーグ戦じゃなくて、いきなりトーナメントなんですね。」
「国宝効果で相撲熱が盛り上がって、参加チーム増えたからな。
リーグ戦じゃ消化しきれないんだろ。」
桐仁の解説に続き、浩二が強豪校を目で追う。
「石神や川人は別ブロックか、ラッキーっちゃラッキーですか。」
「そこまでは辿り着かないとね、昨年のインターハイ全国王者なんだし。」
「で、１回戦の相手は?」
「初戦はシードですね、常磐第三と佐倉二高の勝者が相手です。
どちらも強豪とは言えませんが・・・」
常磐大学付属第三高校と公立佐倉第二高校、いずれも進学校としての側面が強く、相撲に限らず
スポーツで名前を聞く機会はあまりない高校だ。油断は禁物だが、それでも新生大太刀としては
良いスタートが切れそうな相手ではある。
「ただ、常磐第三には、昨年インターハイ県予選、個人戦ベスト８の下山選手がいます。」
その名を聞いて、桐仁と蛍がぴくっ、と反応する。
「鬼丸殺し、か。」
「去年の新人戦で火ノ丸さんと戦った人ですよね。」
下山倫平。かつて小学生横綱だった潮火ノ丸に、中学相撲で立て続けに土を付けた男。
昨年の新人戦で火ノ丸に敗れるも、インターハイ個人戦では８強に名を連ねる。

こちらが勝ち上がって来るなら、大太刀にとって楽な相手にはならないだろう。
その1回戦、予想通り常磐第三が佐倉二高を2―1で下す。やはり大将の倫平の強さは際立っていた。
体格では五分の佐倉の大将をかち上げからの突き放しで一気に押し出す、荒々しく豪快な相撲。
それを見ていた桐仁が諸岡に進言する。
「アイツとは、俺にやらせてもらえませんか、お願いします。」
「もちろんOKさ、部長もいいね。」
こくりと頷くレイナ。先鋒と中堅で決められなければ、大将戦には主力を置いておきたい、
この判断は妥当だろう。
もっとも桐仁には、かつて『鬼丸殺し』の異名を取った下山に対する敵愾心が強かった。
国宝『鬼切』と呼ばれる身としては、格の違いを見せつけて勝ちたいという欲もあった。
「ではオーダーを発表します。先鋒三ツ橋、中堅松本、大将辻で行きます！」
「「はい！」」
このオーダーの狙いは明らかだ。昨年公式戦で勝ち星のなかった三ツ橋を先鋒に出し
初勝利を挙げることで勢いに乗ろうという算段だ。
幸い、常磐第三の残りの二人はそれほどのレベルではない、三ツ橋の今の実力なら
勝ちの目は十分にあった。
「それでは2回戦、大太刀と常磐第三の試合を行います。」
主力が抜けたとはいえ、昨年インターハイ全国王者の大太刀の登場に会場がざわめく。
他の土俵に比べて観客の密度もはるかに高い。
トーナメントは初戦の入り方が重要だ。そういう意味では良い緊張感がある、これで波に乗れれば

新生大太刀の快進撃が期待できる。レイナも桐仁も諸岡もそんな展開に期待を寄せる。

が、行司の呼び出しを聞いた途端、そんな青写真は粉々に砕け散る。

「先鋒戦！東、大太刀、三ツ橋！西、常磐第三、下山！」

「なっ！」

桐仁が驚愕の声を上げる。まさかついさっき大将で戦った下山が先鋒で出てくるなんて・・・

そしてさらなる悪い想像を掻き立ててしまう。三ツ橋にとって下山の相撲は相性最悪と言ってよかった。

下山は一言でいうなら乱暴な相撲を取る力士だ。かち上げ、素首落とし、張り手等

暴力的な相撲で勝ちを取る。しかもそれだけでは無く、自分より小さな相手に変化するなど

狡猾な側面も持ち合わせる選手。

三ツ橋の変化相撲はどちらかと言うと、真っ当な力士にこそ効果が高い。逆に下山のような

何をしてくるかわからない選手には通用しない可能性が高くなる。

だがもう二人とも土俵に上がってしまった、今更どうなるものでもない。三ツ橋を信じるしかなかった。

と、会場の一角から黄色い声援が飛ぶ。

「リンちゃーん、頑張ってーー！」

は？という空気に包まれる大太刀相撲部。っていうかリンちゃん？あのモヒカンで乱暴な

下山が実は学校じゃ人気者だって言うのか？違和感アリアリだ。

下山倫平。

彼は声援に軽く答えながら、相手の蛍を見据える。そして思い出す、一年前の自分を。

鬼丸に敗れ、「今はお前よりワシのほうが強い、それだけじゃ」と言われた屈辱。

その敗戦は彼の相撲に対する姿勢を変える。今まではそれほどの

熱を持って相撲を取っていなかったが
鬼丸への敗戦を機に『俺は強い』というプライドを取り戻すための相撲へと変わる。
それがインターハイ県予選ベスト8にまで彼を押し上げたのだ。
そんな彼にさらなる転機が訪れる。インターハイ後の2学期の始業式、彼は壇上に招かれ
大会ベスト8の健闘を全校生徒に報告される。なにせ常磐第三はかなりのレベルの進学校、
その代わりに運動部の成績はまぁ散々で、大会1回戦を突破する部活など皆無だったのだ。
彼はこの日以来、学校で一躍有名人になった。大会はおろか練習試合でも倫平の相撲を
見ようと生徒たちが押しかけ、声援を送られる日々。
環境は人を変える。彼はこの一年足らずの間に敗北の屈辱と、応援され慕われる立場を得て
昨年とは比較にならない程の「力士」として成長していたのだ。
腰を下ろす。目の前には昨年の鬼丸を思わせる体格の選手、マワシには因縁の『大太刀』の文字。
倫平の体に力が漲る、しかし頭は冷静に戦法を模索する。こいつは鬼丸とは違い、
変化を得意とする選手。それに対する戦いのイメージを構築する。
「手をついて！」
倫平が両手を、蛍が片手を付き、タイミングを見計らってもう一つの手をたんっ！と地面に打ち付ける。

「はっきよい！」
倫平が立つ。
蛍が立つ。
この一年足らず、より刮目すべき成長を遂げたのは、果たしてどちらか―

第6番　三ツ橋蛍と下山倫平

―ビチイィッ！―

倫平のかち上げが蛍の顔面をはね上げ、強烈な打撃音と共に蛍を吹き飛ばす。

立ち合いを制したのは倫平の方だ！

だが、彼も蛍の突進と自らのかち上げにより、やや後ろにのけぞる姿勢になり、追撃の機会を逸する。

土俵際まで飛ばされた蛍は、顔面に焼けるような痛みを感じながらも闘志は萎えず、

相手を睨みつけて次の手に移る。

―パンッー

間合いを詰め、決めようとした倫平の顔面を、今度は蛍の張り手が捕らえる。

五條佑真の突きを取り入れた、張り手と言うよりは掌底突きのような打撃技。

相手を張りながら、蛍はかつて佑真に教えてもらった話を思い浮かべる。

（ケンカっ早いヤツとかな、大抵は何かされると同じ事を相手に返すんだ、倍返しでな。

つまりお前が突き押しを使えば、相手も当然突き返してくる、その覚悟は必要だぜ。）

「ンの野郎っ！」

倫平が吼える、こんなヒョロそうな奴に顔面を張られて黙ってはいられない、お返しとばかりに

右の突っ張りをフルスイングする、食らいやがれ！

が、その手は空を切る。反撃の張り手を見越した蛍は、その瞬間を狙って変化していた。

国崎の機動力を目指して練習を積んだその足さばきで倫平の左に回り込み、そのまま後方に

取り付こうとする。

「くっ！」
倫平の反応も早い。すかさず体を回して蛍の方に向き直ろうとする、その行動がもたらす結果。
―ガツッ！―
反転した倫平の左ヒジが、まともに蛍の側頭部に命中する。立ち合いのかち上げで既に
垂らしていた鼻血がこの一撃で飛び散る。
それでも蛍はマワシを引き、倫平の横に取り付くことに成功する。
相撲では後ろを取られることは死を意味する。そこまで決定的ではないが、横に取り付かれ
半身になることも相撲では絶体絶命のピンチと言えるのだ。
この機を逃さず蛍は押す。８０ｋｇに満たない彼が１２５ｋｇの倫平を土俵際に追い詰める。
上体が浮き、蛍に潜られている倫平には既になすすべなしかと思われた。
が、ここで倫平は彼らしい反撃に出る。
―ゴツゥン!!―
素首落とし。というよりエルボーに近い勢いで蛍の首筋を打ち据える。
「ひっ！」
思わず悲鳴を上げる柚子香。桐仁が抗議の声を出す。
「おいおい審判！さっきからやり過ぎだ！」
かち上げ、ヒジ打ち、そしてこの素首落とし。いずれも相撲では反則ではないが、
この倫平のやり方は相撲というよりケンカに近いものだった。
それでも常磐第三の応援団は沸いている。優等生でガリ勉タイプの彼らは
倫平のそういう荒っぽさにこそ憧れを感じているのだから。
事実、素首落としの効果は絶大だった。蛍は撃たれたその瞬間、意識を飛ばす―

（相撲って言うのは、しっかり腰を落とすのが基本だよ、腰を割るって言うんだけどね）

前部長、小関の声が脳内に反芻される。

（相撲はしっかり腰を落とすのが基本だよ、腰を割るって言うんだよ）

自分が柚子香に教えた相撲の基本。ああ、そういえばアレは小関さんの受け売りだっけ・・・

そこで我に返る。今、組み合ってる相手が、まさに棒立ちの状態から腰を割って

自分を押し返そうと体勢を作っているのだから。

そうはさせない！落ちかけた体を引き上げ、負けずと腰を割って倫平の動きを止める。

未だ蛍が相手の横から組み付く半身の体制、まだわずかに有利なのは蛍の方だ。

「ここで決める！」

顔面血まみれの蛍が、意に介さずの鬼の表情で投げを打つ。右の下手投げ『鬼車』。

火ノ丸との送別相撲で決められなかったその技で勝利をもぎ取りに行く。

だがその技が、逆に倫平の闘志をも掻き立てる。

「野郎おぉおっ！」

鬼車。昨年彼が火ノ丸に引導を渡された投げ技。２度も同じ技で仕留められてたまるか！

倫平は背中越しに取っていた上手投げで反撃、投げの打ち合いとなる。

「いっけえぇぇぇぇっ！」

レイナが、千鶴子が、柚子香が叫ぶ。ダチ高相撲部員が、常磐第三の応援団が、かたずを飲んで見守る。

―ドシャアァツ！―

蛍が顔面から、倫平がヒジから落ちる、同時に。

全員が一斉に行司に注目する。勝ったのはどっちだ・・・？

「西！下山君の勝ち」
「なっ！」
桐仁が叫ぶ。だがそれ以上の言葉は出なかった。二人の副審が手を上げ、物言いをつけたからだ。
協議の間、桐仁は祈るような気持ちでいた。どう見ても今のは三ツ橋の勝ちだろう！
下山は手を付いたが、三ツ橋は顔面から落ちるまで粘ったのだ、そうだ絶対行司差し違えで・・・
「同体、取り直し！」
その言葉に桐仁は血の気が引く。まただ、またこの無情な裁定。去年のインターハイ準決勝の再現。
相撲の神様よ、あんたどこまで三ツ橋を―
「やった！まだチャンスはある！」
「三ツ橋先輩ファイットォーっ！
「相手もしんどいんですよ、頑張って！」
ダチ高一年の応援が、桐仁の悲壮感を打ち消す。彼らにとっては一度は相手に上がった軍配が
再び無効になるのはチャンス以外の何物でもないのだ。
そして、それに応えてうなずく蛍。顔面血まみれ土まみれになりながらも、後輩の前で
虚勢を張らないわけにはいかない。肩で息をしながら再び土俵に上がる。
倫平もまた、チームメイトや応援団から激励され、土俵に歩を進める。
その二人の姿に拍手、そして場内から応援コールが上がる。
「みっつはしっ！みっつはしっ！みっつはしっ！」
「しっもやまっ！しっもやまっ！しっもやまっ！」
行司の「呼吸を整えて」の声も聞こえないくらいの応援合戦。改めて礼をする両者。
そして蹲踞の姿勢に入った途端、応援が止み、静まる会場。それが相撲のマナー。

「手をついて！」
仕切りながら倫平は考える。もう俺も奴も体力は限界だ。こうなったら何も考えず
ぶちかまして体重差で押し切るしかねぇ、変化したら腕で叩き落とすまでだ！
「はっきよい！」
二人が激突する。蛍も、倫平も、頭から。
「勝った！」
そう思った倫平の目の前から、蛍が消える―
「なっ!?」
当たった瞬間、蛍はぶちかましの軌道を下にずらし、反転しつつ倫平の腹の下に潜りこんでいた。
「ウナギの如し！」
柚子香が思わず声を上げる。先日の部内戦の最終戦で見せた、ぶちかましからの高速変化。
蛍は倫平のマワシを担ぎ上げるように持ち、前のめりで自分にかぶさった相手の腰を
担ぎ上げようとする。
「百千夜叉落とし！」
レイナが叫ぶ。だがその表現は正確ではない。蛍には相手を担いだまま、片足をかけるほどの
膂力はまだなかった。３点投げではなく2点投げだが、鬼車と共に蛍が目指した
火ノ丸の必殺の投げ技、それを蛍は選択する。
「うがあぁぁっ！」
倫平が吼え、蛍の後頭部を押し付け、潰そうとする。しかしこうなっては最早勝敗は決している。
あとは蛍のヒザが倫平の体重に耐えさえすれば・・・
力強く伸ばされる蛍のヒザ。マワシを支点にして半回転する倫平。
―ズドォーンッ―
「勝負あり！東、三ツ橋君の勝ち！」

喜びを爆発させるダチ高相撲部。桐仁は目に涙を浮かべながらガッツポーズ。
涙を流して嗚咽する千鶴子を慰めながらもらい泣きするレイナ。
柚子香は思わず「かっこいい・・・」と漏らす。
長かった、本当に長かった三ツ橋蛍の『1勝』。永遠に届かないとすら思えた瞬間が
今、ようやくここに成ったのだ。
だが土俵上では、そんな感情は無縁だった。蛍は息を切らせながらも倫平に手を貸し、
一礼して勝ち名乗りを受ける。その表情は淡々として綻ばない。
土俵から降りる蛍を拍手で迎える一同。だが蛍は厳しい表情で返す。
「『まだ1勝』です、あと2番頼んだよ!松本君、桐仁!」
蛍の目は既に自分の勝利ではなく、団体戦の勝利に向いていた・・・かと思われた。
残り2番、松本も桐仁も勝利を手にする。しかし先の一番に熱をもらったか、
常磐第三の残り二人も実力以上の力を発揮し、二人を大いに苦しめたのだが。
勝利の後、流血した蛍は救護室で手当てを受ける。幸い鼻血だけで済んだようで
目立った外傷はなかった。
「先輩、初勝利おめでとうございます・・・って、あんまり嬉しそうじゃないですよね?」
帰り道すがら、付き添いの柚子香にそう聞かれる。
蛍はここで自虐的な表情を見せ、柚子香にこう言った。
「『まだ1勝』だよ、全然足りない・・・」
その言葉だけで察することが出来た。当時を知らない柚子香でさえも。

―全国大会優勝チームのレギュラーで全試合敗北―

それがどれだけ蛍の心の奥に深く刺さった棘であるのか、想像することが出来るだろうか。

楽しいこと、嬉しいことは涼風のごとく気持ちよく身を撫でていく。

だが辛いこと、悲しいこと、屈辱的なことは人の心の奥に深く刺さった棘であり、

永くその痛みを忘れることは出来ないのだから―

第7番　春の終わり

大会は進む。

２回戦以降、桐仁は控えに回り、一年生３人と蛍が戦う。千鶴子が調べてきた対戦相手との相性を考えた上でのオーダーは見事に当たり、順調にトーナメントを勝ち上がっていく。

結果、午前の部を終えた所で、ベスト４進出を決めたのだった。

「へぇ、ダチ高も勝ち上がってきてるのか、やるなぁ。」

昼休み、トーナメントの結果表を見ながら、石神高校相撲部、沙田美月はそう呟く。

優勝候補の筆頭である石神は、ここまで全試合３―０の圧倒的な内容で勝ち上がってきた。

主将の間宮、３年の巨漢市橋、そして沙田こと国宝『三日月宗近』。その圧倒的な戦力をここまで目の当たりにしてきたならば、彼らが今年の優勝候補筆頭、

いやむしろ代表は確実であることを確信せざるをえないだろう。

「まぁ、どこが来ようが問題ない、勝つのは俺達石高だ。そうだろ?」

間宮がそう返す。昨年のインターハイで屈辱の県予選敗退を喫して以来、彼らは

『歴代最強の石高』を目指したチーム作りをしてきた。そしてそれはこの春で早くも

開花しようとしていた。

ただ、沙田は少し退屈だった。去年までライバルだった鬼丸はもういない、そして全国でも

昨年敗れた天王寺、昨年の高校横綱の久世、青森の雄の野地。『国宝』と呼ばれた連中は

もういない。彼らは沙田と刃を交わす事無く大相撲に進んでしまった。

彼らを追いかけて、大相撲に進む道もあっただろう。しかし彼は前主将の金森との約束があった。

「最低でもあと2年、石高相撲部に尽くせ」
それは沙田に相撲を続けさせるための方便ではあったのだが、彼はそれに従った。
ライバル不在のこの県予選、この先の対戦に思いを馳せる。
「国宝『鬼切』か、楽しませてくれよ・・・」
彼は忘れていた。かつて鬼丸に敗れた後の感情を。
―ライバルなんて、いらない―

午後の部、いよいよ準決勝。ここからは土俵を1面にして行われる。
第一試合　石神―川人
第二試合　大太刀―柏実業
第一試合の両チームが東西に陣取る。控え席からそれを見やる大太刀相撲部。
「よく見とけよ。あれが国宝『三日月』だ、俺たちが全国に行く上で、避けては通れない相手だ。」
桐仁が一年にそう解説する。そして覚悟を決める、それはここまで休ませてもらった
自分の仕事だ、と。
昼休みを挟んで、体力は十分に回復している。そのための呼吸法も研究して
ベストコンディションで戦いに臨む態勢は整っている。そう、1番だけなら俺は
誰にも負けない、あの三日月にだって・・・
「東、間宮君の勝ち!」
先鋒戦は石高の圧勝だった。間宮はまさに山の如く相手の攻撃を受け止めて、
焦らず騒がずにゆっくりと相手を寄り切る。
「うわぁ・・・アレにもどうやって勝つんですか?」
柚子香が驚愕の声を上げる。まるで迫りくる山に土俵から追い出されるような相撲に

それでも蛍は、そこからの勝ち筋を思考錯誤していく。
「西、桜本君の勝ち！」
そんな彼らの思考を、行司の声が中断する。中堅戦は桜本の絶妙の引き技に、市橋が
思わず土俵に手を付く。今日初めての石神高校の黒星。
と、蛍は忘れていた顔を思い出す。土俵にも、控え席にもいないあの顔を。
「あれ・・・荒木さんが居ない？」
それを聞いたレイナが観客席の一端を差し、言う。
「ほら、あそこ。なんか調子落としてるって聞いたわよ。」
目をやれば確かに目立つバリアートの坊主頭が、他の石高応援団と共に観客席にいる。
つまり彼はこの春の大会、選手はおろか補欠にも選ばれなかったという事になる。
「ケガでもしたのかな？」
いぶかしがる蛍を桐仁が制する。
「余計なことは考えなくていい、お前は間宮攻略だけを考えろ。」
そう言って土俵を凝視する桐仁。三日月がいる以上、石神が勝つのは間違いない。
荒木がいようがいまいが、石高が初黒星を上げようがどうでもいい、そう思っていた。
「東。石神、沙田君。西。川人、大河内君。」
呼び出しを受け、ふたりが土俵に上がる。両校の補欠部員がそれぞれ観客席から応援を飛ばす。
だが、どこか楽観的な石神応援団の声に対し、川人高校の応援は悲壮な、祈るような響きがあった。
それも無理なき事。このふたりは昨年2度対戦しているが、いずれも沙田が残酷なまでの
強さで圧倒していたのだから。
得意のおっつけと円を描く出し投げ、その純白のマワシにはこの大会でもここまで誰も

触れる事すら敵わなかった。
「はっきよい！」
両者が立つ。そして大河内の手が、沙田のマワシに触れることは無かった・・・想像とは違う形で。
「なっ!?」
大河内が頭を付け、右手の掌で沙田のハズ（脇）を捕らえ、沙田の右下手を許しながらもその手を閂（かんぬき）で決め、投げを打たせずに押す。
「マワシが取れないなら、取らずに勝つまでだ！取る事にこだわって惨敗した去年の僕とは違う！」
大河内　学
昨年のインターハイ団体戦。彼は大将として沙田と対戦した。既にチームの敗北は決していたが
1年生の自分をレギュラーとして使い続けてくれた先輩たちの為にも、せめて一矢報いようとの
決意を持って臨んだ土俵、だがその結果は残酷だった。その傷は彼の心に深く刺さった棘となり
彼を苛み続けていた。個人戦の県代表になっても、全国で1勝を挙げても、その痛みは消えない、
消す方法はただ一つ、復讐（リベンジ）
以来彼はこの9か月余り、『三日月を倒すための相撲』をひたすら追い求めた。
マワシにこだわらず、かつ沙田が嫌した数少ない敗戦をヒントにして、ひたすらその戦法を
磨いてきたのだ、全てはこの日の為に！
「土俵際！」
石高応援団から悲鳴が上がる。あの沙田が手も無く土俵際に詰められて反撃できない。
「（嫌なことを思い出させてくれるね、大河内君！）」
右ハズに左の閂。それは昨年沙田が春の全国で天王寺に敗れた型。
右下手のヒジを極められ

そこからの小手投げ『六ツ胴斬り』で仕留められた記憶が蘇る。
「(だが甘い！僕がそれを克服してないと思うのかい！)」
右の下手出し投げは打てない。もしその瞬間に小手投げが来たら、最悪右手を折られてしまう。
ならば逆にその小手投げを待つ！それがあの敗戦を振り払うために編み出した戦法！
「ふんっ！」
ついに放たれる大河内の小手投げ。沙田はその瞬間、投げた先に回り込もうとその体を飛ばす。
彼の足さばきは、投げを打つ先に回り込むだけの機動力を持つ、その瞬間、沙田の体が崩れる。
「なっ!?」
小手投げはフェイント、その瞬間ハズに当てた右手を深々と差し込み、沙田の動く方向の逆に
すくい投げを打つ。沙田が回り込もうとしたことも織り込み済みで、完全に逆を取る。
―呼び戻し『荒沸（あらにえ）』―
波打つように回転する両者。そして沙田は半回転し、背中から土俵に落ちる。
会場を静寂が包む。
「西、大河内君の勝ち！」
爆発する川人応援団、大河内自身も雄叫びを上げ、涙を流す。屈辱と悔しさをバネに
自分に課してきた日々が、ついに実を結んだのだ。
呆然自失する会場の中、川人の歓喜だけが響き渡る。審判に注意された大河内は頭を下げ
一礼して土俵を降り、チームメイトにもみくちゃにされる。
一方の沙田は呆然としたまま土俵を降り、よろめく。間宮に支えられ、青い顔をして
自陣に下がっていく。
桐仁もまたパニックだった。ここで石神が負けるなんて！練りに

練ってきた戦法もオーダーも
この瞬間、全てご破算になってしまった。どうする、どうメンバーを組み替える？
今からどうやって川人対策を練る？どうやって部員たちのモチベーションを鼓舞する・・・？

「以上、3―0で『柏実業』の勝ち！」
それ以前の問題だった。元々強豪で、かつ相手に対応した相撲を取れるほどの基礎技術を持つ
柏実業。彼らはここまでの大太刀の試合をマネージャーが事細かく研究し、対策を練ってきた。
対する大太刀はこの試合を楽観視しすぎていたのだ。決勝で戦うであろう石神を意識するあまり
目の前の準決勝の相手に気が向いてなかった、そこへきて石神の敗北による動揺、
残念ながら大太刀は、戦う前から柏実業に負けていたのだ。
決勝は2―1で川人が制す。昨年代表の石神も、昨年インターハイ王者の大太刀も
全国へのキップを得ることは出来なかった。
こうして、彼らの春は終わりを告げる。

第８番　呉越同舟

・・・何やってんだ、俺。

北陸新幹線の車内、彼は胸中に渦巻くモヤモヤした感情を抱え、ひとつため息をついた。

荒木　源之助

石神高校相撲部２年、昨年は先輩を差し置いて１年からレギュラーになり活躍。

だが今はスタメンはおろか控え選手にもなれず、石高が敗北するのを観客席で眺めていただけ。

深刻なスランプの原因は、彼自身が何より一番理解していた。

彼の夢は世界の格闘王になる事、その為にはじめた相撲だった。中学で柔道王者となった彼は

高校では力士となりその強さを取り込む、そして格闘王としての道を上り詰めるというのが

彼の描いた青写真だった。

だが、自分の目標であったそれを成したのは、自分以外の人間だった。

國崎チハル。

ライバル高校の偵察にと大太刀を訪れた時に出会った、自分と同じ青写真を持った男。

団体戦の決勝、二陣戦で源之助は彼に敗れた。そこから二人の道への差は加速度的に開くことになる。

國崎はその後も勝ち続けた。全国の舞台でもその実力をいかんなく発揮し、やがては

国宝の大典太をも倒す。そればかりか高校Ｎｏ２とまで言われた国宝、大包平すら

仕留めてしまった。しかも相撲の決まり手、寄り切りで。

彼はレスラーから、完全に『力士』の強さも収めた強者になったのだ。

國崎は止まらない。昨年暮には高校を中退し、自ら目指す格闘王の

道を追いかけて
アメリカに渡る。
ライバルだと思っていた相手は、あまりに遠くへ行ってしまった。
自分が進む道だった
レールをひた走って。
対して自分はどうだ？格闘の世界に進むどころか、今だ『力士』にすら成れていない。
もし力士になることが出来、格闘の世界に勧めたとしても、もうそれは国崎の二番煎じでしか
無いのではないか、今更アイツの真似をして何の価値があるのか・・・
そんな劣等感と、それを覆す相手がもう相撲の世界にすらいない事に、彼のモチベーションは
下がりに下がってしまった。
何で自分は相撲をやってるのか、倒すべきライバルはもういないのに。
だからと言って国崎のように学校を中退までして格闘界に飛び込む度胸も無い。
自分はまだ力士にすら成っていないのに、その先の道など見えるはずが無かった。
そんな彼に、石高顧問の菅原はひとつの仕事を依頼する。金沢で開催される
春の全国大会の偵察だった。
曰く、石高はインターハイでは絶対に全国に行く！その為には全国のライバル達の情報が
必要だから、というのが表向きの理由だった。が、深い所には別の理由がある。
今の彼は一度石高相撲部を離れて、ひとりの人間として改めて相撲を、全国の強豪を
目にすることで再び相撲に対する情熱を再燃させるのが良い方法だと思ったのだ。

だが、そんな思いを汲めるほど荒木は賢くはなかった。
―今や、俺はマネージャー扱いかよ―
菅原顧問を尊敬はしていたが、その仕事は本来俺の担当じゃ無いはずだ。
だが、事情を考えたら仕方ないとも思った。春の全国は関東の新人戦と日程が重なるため
石高相撲部、およびマネージャーはそっちの大会で忙しい。昨年この時期に停学になり
高校相撲を始めて一年を過ぎている荒木には出場権利も無い、いわば彼だけが宙ぶらりんの
状態だったから。
そんな悩みに加え、さらに今日、今この場でちょっとイラつくこともあり益々不機嫌な荒木。
とりあえずそっちの不満をぶちけるべく、新幹線車内の通路を挟んで隣に座るカップルに怒鳴る。
「何でお前が隣にいるんだよ!しかも女連れで、デートか?俺に対する嫌味かよ!!」
「それはこっちのセリフですよ!て言うかデートじゃありません、偵察です!
って言うか何で荒木さんがここにいるんですか!」
怒り顔で返す三ツ橋蛍、その隣には堀柚子香が「まぁまぁ」という表情で蛍をなだめる。

春の団体戦で敗れた大太刀相撲部だが、落胆してる暇はなかった。
一か月の間も置かずに開催される関東新人戦。1年が主力の大太刀にとっては大イベントだ。
夏のインターハイで全国を目指すダチ高としては、この新人戦での成績、および経験は
非常に重要となる。1年が主力である以上、目標はもちろん上位独占だ。
松本、大峰、陽川、そして公式戦デビューである幸田。彼らの試金

石ともいえる大会に向けて
意気上がる大太刀高校。
そんな中、蛍と柚子香は顧問の諸岡にある仕事を依頼される。春の全国大会の偵察だ。
新人戦と日程が被るため、行ける人間は限られてくる。
部長のレイナは手続きや進行、マネージャーの千鶴子は選手のケア、そして桐仁は
弟子の幸田を主とする指導に当たらねばならず、手の空いてる二人にその依頼が来たというわけだ。
無論、諸岡にも他の狙いはある。何でもできる力士を目指す蛍にとって、全国の猛者たちの試合は
戦術の見本市となるはずだ、また初心者の柚子香にとっても、その試合は相撲の良い教科書になる
そんな思いもあって二人に会場と新幹線のチケットを託すことになる。
そしてこの状況。荒木と蛍、そして柚子香の新幹線の座席チケットは見事に続き番になっていた。
相撲会場の席番まで続きになっていたのは、もはや神様のいたずらだろうか・・・
不機嫌そうな顔で隣に座る源之助と蛍。柚子香はやれやれ、という表情で、姉から借りてきた
カメラをセットし、撮影の準備をする。
そして開幕する全国大会。それはまさに蛍にとっての見本市であり、柚子香にとっての
教科書であった。
押し、突き、引き、投げ、そして変化。大型力士から小兵まで、様々な相撲スタイルの選手が
次々にその持ち味を披露していく。全国レベルの相撲の形がそこにあった。
そして準決勝、地元の金沢北高は圧倒的な実力で相手をねじ伏せる。中でも

国宝『大典太』こと日景典馬の強さは際立っていた。
もうひとつの試合、鳥取白楼高校と栄華大付属の準決勝は鎬を削る熱戦となった。
先鋒戦、白楼主将の榎木が栄大のダニエルの長い腕を取ってねじ伏せる、まずは白狼が先制。
「榎木さん、ますます技がキレてる・・・あの巨体を転がすなんて！」
そう感心する蛍に、源之助が反論する。
「それだけじゃねぇよ、見たか、あの腰の割り方、それは合気道じゃねぇ・・・力士のソレだ。」
自分が目指し、今だ敵わない「得意格闘技と相撲の融合」それを既に榎木も身につけていた。
中堅戦、栄大の狩谷は白楼のバトの懐に潜り込み、足技で攻める。対するバトは両上手を取って
右に左に狩谷をふり回すが、両下手の引きつけと足さばきにより、その猛攻を凌ぐ。
ならばと繰り出したバトの櫓投げに狩谷は「待ってたぜ！」とばかりに跳ね上げた足を抱える。
昨年の新人戦で鬼丸に食らった櫓投げ、その対策を負けず嫌いな狩谷がしていないはずが無かったのだ。
バトの足を取り、残った足を狩る。あえなく土俵に背中を付くバト。栄大がイーブンに持っていく。
「狙ってやがったな、狩谷の奴。」
バトとどこか似ているスタイルの源之助が、敗戦を自分に重ねて冷や汗を流す。
「凄いな狩谷さん・・・小兵でも変化なしであそこまで戦えるのか。」
蛍は素直に感心する、あるいは自分が目指すべき見本の一つがそこにあった気がした。
「大将戦。東、栄大付属、澤井。西、鳥取白楼、舟木。」
そのアナウンスに場内がざわめく。栄大の澤井は現主将でもあり、ここまでずっと大将を
務めてきた。

対する舟木はここまで控えであり、これが初試合である。ライバル高である栄大の大将戦に
無名の選手が出てくることに皆が驚いていた。
「舟木選手は１７０ｃｍの１１５ｋｇです、そんなに大きいわけでもないですね。」
柚子香がパンフレットに書かれた選手プロフィールを見て言う。
確かに体格は
昨年のダチ高部長の小関と同じくらいだ。
対する澤井はさらに一回り大きな体格、しかもその実力は昨年の全国で立証済みだ。
誰もが栄大の勝ちを想像する中、観客席の一端に陣取る女性相撲記者、名塚だけは
逆の結果を予想していた。
「いよいよ全国デビューね、鳥取白楼の新たな『国宝』・・・」
―はっきよい―
その掛け声とともに、全国の相撲関係者は知る事となる、新たな怪物の誕生を。
舟木はとにかく速かった、立ち合いの突撃速度、体重移動、投げの判断やキレ、
そして技から技への繋ぎの判断。終始後手に回った澤井は、この土俵上を駆け回る
ミサイルのような力士の連続攻撃に、あえなく土俵の外に転げ出される事となる。
決勝は白楼が金沢北を2―1で下す。典馬は榎木を下すも、準決勝の屈辱を晴らすべく
バトがイーブンに持ち込むと、舟木はまたもそのずば抜けた速さで北高の大将を圧倒する。
その強さ、そしてパンフレットのプロフィールに書かれている舟木のデータが、観客全員に
彼の『国宝』としての異名を刻み込む。
岡山県出身、舟木長一郎

―国宝　備前長船―

新たな国宝の誕生の興奮冷めやらぬ中、閉会式の準備が粛々と進む。

そんな中、源之助は下を向いて・・・笑っていた。

「クックク・・・ハッハッハッ！」

顔を上げて大笑いを始める源之助。隣の蛍は何事かと呆れている。

「バッカバカしい！居るじゃねぇか、強者がゴロゴロと・・・国宝までよぉ！」

自分は何を勘違いしていたのだろう、國崎がいない？童子切が、草薙が、大包平がいない？

それで高校相撲の価値が下がるわけでも無かったのだ。強者など毎年沸いてくるものだ、

いるじゃねぇか、倒すべき猛者が、俺が力士になり、さらに格闘王を目指すにあたって

蹴散らす標的が、全国にはいくらでもいるんだ！

今まで自分が感じていた虚無感があっさりと晴れていく。

「当たり前じゃないですか、全国に強豪がいるなんて・・・」

源之助の内心を知らぬ蛍が、バカじゃないのこの人、という目で彼を見る。

さぁ、帰ろう。この大会で見たこと、試してみたいことがいくらでもある！

予想をはるかに超える収穫を胸に、源之助が、蛍が帰路につく。

後に千葉県代表をかけた死闘を演じることになる両者、それを柚子香はまだ

想像すらできなかった―

第9番　祝勝会ｉｎスタミナ次郎

「それでは、松本君の優勝、および1年生部員の活躍を祝して、かんぱーい！」

顧問の諸岡がコップを掲げ、相撲部員全員がそれに続く。

―かんぱーいっ！―

焼き肉店『スタミナ次郎』の一角。ダチ高相撲部はこの日、諸岡の計らいで特別に

夕食会が開かれていた。

蛍と柚子香が全国の視察に行ってる間、残りの部員たちは高校相撲、関東新人戦に

参加していた。

昨年は国宝『草薙』の鮮烈なデビューが話題となった大会、今年は特にずば抜けた選手不在の中

大太刀の1年生は大いに健闘してみせた。

中でもやや組み合わせに恵まれた感のあった松本は、決勝で栄大付属の大型新人、滝沢を破り

見事優勝をゲットしたのだった。

他、大峰と陽川も決勝トーナメント進出を果たす。幸田はさすがに3回戦までだったが

それでも公式戦初出場で2勝をもぎ取り、大いに自信を付けたようだ。

そんな1年の健闘を祝して、こうして祝勝会が開かれたわけだ。

「僕も応援したかったなぁ、何にせよおめでとう、松本君。」

蛍の祝福に、記念撮影のために出した賞状をしまいながら、坊主頭の松本が答える。

「大峰と陽川の援護が効きましたからね、滝沢選手はマジ強かったツスよ。」

「準決勝で俺が勝ってりゃ、俺と松本で決勝だったんだがなぁ」

天然パーマにメガネの大峰が返す。童顔の松本と威圧感のあるおっさん顔の大峰、

大太刀の誇る巨漢二人が並んで笑う姿は壮観だ。
陽川は決勝トーナメント2回戦、大峰は準決勝で滝沢と対戦した。
いずれも熱戦だったが
何せ相手は昨年の全中横綱、力及ばず敗退することになる。が、二人の得た情報と
大峰が粘りに粘り、滝沢の体力を消耗させた結果は、決勝の松本を大いに援護した。
「去年の火ノ丸さえ届かなかった優勝だからな、これでインターハイを戦う目途がついたってもんだ。」
上機嫌で桐仁が話す。もちろん滝沢はじめ、関東一円の要注意新人選手をチェックできたことも大きい。
「こっちも収穫ありましたよ、やっぱ全国はレベル高かったよー、こう、がつーん!どすーんって。」
「柚子香、熱く語るのはいいけど、もっと具体的に・・・」
堀姉妹が噛み合わない会話をする中、部長のレイナがぱんぱんと手を叩き、注目を集める。
「はいはい、時間制限ありのバイキングなんだから、みんなどんどん食べる食べる!
あ、取ったものは残さないように、別料金になるからね!」
「はーい」
と、その時。ダチ高の面々の前に、やたら巨大な手押しワゴンが現れる。
「いらっしゃいませ、ダチ高相撲部の皆さん!」
ワゴンを推しているのは、小太りの中年男性。エプロンには「店長」の名札。
「みなさんよく食べますから、ある程度は用意しておきました、よければこちからかどうぞ。」
恵比寿顔でワゴンを差す。その上には大皿に盛られた肉、肉、肉!
脇には炊飯器が2台に
カレー鍋やモツ鍋、別の大皿には大量のスイーツ、ピッチャーにはウーロン茶が並々と揺れ

他にもパスタや唐揚げ、寿司、麺類などが山盛り積まれている。
「え・・・ちょっと待って下さい、バイキングなのに固定注文って?」
千鶴子の質問に、店長は申し訳なさそうな笑顔で返す。
「いや・・・皆さん物凄い勢いで取られますから・・・調理済みストックが無くなるんですよ。」
「え?」
「前回も前々回も、バイキングコーナーから食材がすっかり消える時間帯があったものですから
他のお客さんからクレームがありまして・・・」
あ、という顔の後、全員が桐仁に冷たい目を向ける。そう、過去2回の来店で桐仁は
「食いトレ」と評して大量の肉をかき集めてきたのだが・・・棚を空にしたのは流石にまずかったようだ。
「・・・すいません」
頭を下げる桐仁に営業スマイルで返す店長。
「いえいえ、今回は電話予約があったものですから、あらかじめ多めに用意させていただいたんですよ
皆さんならこのくらい余裕でしょう。」
「お気遣い感謝します。さぁみんな、有難く頂こう!」
気まずい空気を振り払うべく明るく言う桐仁。その裏には食材の量に対する余裕もあった。
(まぁこの量なら余裕だろう、松本と大峰がいれば追加がいるくらいだな。)
巨漢の松本と大峰は見た目通りに大食漢だ。部内のちゃんこでも、この二人の食事量は
際立っていた。
そんな余裕を持って店長にこう返す桐仁。
「これ、食べ残したらペナルティーで別料金払いますよ。」
「いえいえ、こちらが用意した物なのですから、ご無理はなさらずに。」
「あ、いえ、食べるのも稽古ですから。残すと罰則があるほうが気合入るんですよ。」

「・・・そうですか、ではそのように。」
そう言って去っていく店長。しかしその顔から営業スマイルは消え、野獣の眼光が
見えない方向で光っていた。
(勝った!勝ったぞダチ高相撲部、気付いているか?ワゴンの上に『野菜』が無い事に!
肉は脂の多いカルビがメイン!野菜が無いとなれば脂っぽさを飲み物でごまかすしかない、
しかし飲めば飲むほど腹は膨れ、胃袋の許容量をやがては超える!
今回こそ原価割れは阻止する!)
さすがに店長にも別料金を取るつもりはないが、あのワゴン全部でギリギリ彼らから
利益が出るように計算して盛り付けてある。
何せ初来店からいきなり原価割れされたダチ高、2回目に来た時は寺原とかいうOBっぽい男に
先取り分はおろか追加で原価の倍近い量を食われたのだから、この対策もむべなるかな。
一方、さっそく飯に取り組むダチ高。しかし・・・何かいつものちゃんこよりペースが遅い。
「どうした大峰、松本も、もっとガンガン行けよ。」
「体調でも悪いのか?俺らより食えてないじゃん。」
陽川と幸田が二人を心配する、蒼い顔をして返す大峰。
「いや・・・実はな、今日の祝勝会、バイキングだとは思わなくって。」
「俺たちが普通の店で食ったらすごい料金になるだろ・・・だから」
「だから?」
全員のその質問に大峰が返す。
「来る前にふたりで、剣山ラーメン食べてきたんだ・・・4杯ほど。」
「なんだとーーーっ!?」
店内で絶叫する桐仁、その頭をレイナがしばく。
「(ちょ・・・剣山ラーメンって、あの超こってり山盛りのラーメン屋だろ!それを4杯?)」

「あ、すいません辻先輩、俺5杯食いました。」
その松本の言葉に血の気が引く桐仁。改めてワゴンを見る、そびえ立つ焼き肉マウンテン。
戦力になりそうな面子を見る・・・
蛍（小さい）、陽川（筋肉質）、幸田（やせっぽち）、レイナ（女子高生）、千鶴子（女子高生2）
柚子香（女子高生3）、諸岡（中年）・・・
―これ、食べ残したらペナルティーで別料金払いますよ―
「どーすんだよこれぇぇっ！」
頭を抱えて絶叫する桐仁、レイナが再度桐仁をひっぱたく。
「店内で叫ぶな！っていうかアンタが食べなさいよ、選手としての可能性追及すんでしょーが！」
他の全員がうんうんと頷く。半年前の件も合わせて完全に自滅する桐仁。

こうして、新生ダチ高最大の試練が幕を開けた。

残り時間２０分、すでに死屍累々状態の男子部員。陽川と蛍はかなり頑張って食べたが
桐仁と幸田の師弟コンビはもともと食が細いらしく、たいして戦力にならないうちにダウン、
私も選手志望なんだから！と肉に突撃した柚子香だったが、しょせんは女子高生の胃袋、
肉マウンテンの1合目も踏めず撃沈。
レイナと千鶴子は「いやー、私たちは女子だから」「ねー」と傍観者モードで逃げに入っている。
ワゴンには未だ1／4ほどの食料が残っていた、優勝を祝うはずの祝勝会でまさか敗北を
喫するハメになるとは誰が予想しただろうか・・・
吐きそうな顔のまま、む、無念。と呟く桐仁の前に、緑色の救世主が現れた。

「諸岡先生?.そ、その大量の野菜は一体・・・」
皿いっぱいのキャベツやサニーレタスを抱えてきた諸岡、ワゴンの際に置き、皆に即する。
「肉を焼いたら、これに巻いて食べるといい、さぁみんな!.ラストスパートだよ!.」
半信半疑で野菜巻きにして食べてみる面々、しかし意外に食えたりする。
野菜の優しい口当たりが、肉のしつこさをうまく包んで飲み込みを助ける。
「これ、いける!.まだ食べられるよ!.」
「うん、俺も。もうちょっと頑張ってみるか!.」
「先生よくこんなの知ってましたね。」
「昔も昔は大食いだったからね、よく詰め込んだものだよ。」
元レスリングの強化選手だったという噂もある諸岡、彼もまた体作りで苦労した経験があったのだろう。
復活のダチ高はワゴンの山をどんどん平らにしていく。だが制限時間が迫る、間に合うか・・・?

「う~食った食った」
「ていうか食べ過ぎですよ・・・うっぷ」
「みんな今日はよく休んどけよ、消化が追い付かんぞ・・・」
夜道を引き上げる一同。最後に参戦したレイナや千鶴子は、満幅のお腹を押さえて不安げに語る。
「こりゃダイエット考えなきゃいけないわ。」
「広がった胃袋を縮める方法、考えなきゃ・・・」

○○●大太刀高校相撲部 ― スタミナ次郎●●○

第１０番　成長の証明

「さぁ、やるべき事はやってきた。行くぞ！」
「「はい！」」
桐仁の激を受け、会場入りする大太刀高校相撲部。
いよいよ夏のインターハイ、全日本高校相撲選手権、千葉県予選の開幕である。
春の大会ではベスト４止まりだったものの、昨年の全国覇者、そして
関東新人戦を制した松本と、国宝『鬼切』を擁するダチ高はやはり注目の的だった。
そんな状況を示すように、一人の女性記者がダチ高の方にやって来る。
「あ、相撲雑誌の・・・確か名塚さん。こんにちは。」
会釈する千鶴子に、名塚は若干心配気な顔で問う。
「お久しぶり。どう？調子は。」
「もっちろん！絶好調に決まってるじゃない、しっかり取材してね。」
胸を張って自信満々に返すレイナ。名塚の隣にいるカメラマンの宮崎は、ファインダーを通しての
ダチ高のメンバーを見て感心する。
「（春とは見違えたね・・・強さが伝わってくるよ。）」
「じゃあさっそく、ひとつ情報をあげるとしましょうか。」
そう前フリして、イジワルな表情でこう告げる。
「一回戦の相手、春の覇者、川人高校よ。いきなり消えないでね。」

―第一試合、東、川人高校。西、大太刀高校―
場内アナウンスと共に会場がどよめく。いきなりの大一番に会場の注目が集まる。
春の全国でベスト１６入りを果たした川人、しかも大将の大河内は全国でも負けなしである。
下馬評でもやはり、総合力でやや川人が上だった。大太刀がこの数

か月で、
その差をどこまで埋めてきたか・・・
―先鋒戦。東、桜本君。西、陽川君―
春の大会のメンバーでもあった桜本。その押し引きのバランスは絶妙で、春の県予選でも
石神から白星をもぎ取った男でもある。
が、土俵に上がる陽川も、見送るダチ高相撲部も、その表情に不安は見えない。
―はっきよい！―
胸で当たり、組み合う両者。左の合四つである両者が、共に力を発揮できる十分の体制。
ここから桜本はがぶり寄りに出る。もし不用意に踏ん張れば、その瞬間に引き技を放つつもりで。
が、その目論見は失敗に終わる。陽川は腰を落とすと、そのまま１０５ｋｇの桜本を強引に吊り上げる。
大太刀高校１年、陽川　満。１８５ｃｍ、９２ｋｇ。
筋肉質で、相撲取りと言うより格闘家と言うべき体躯を持つ。見た目通りその腕力（かいなぢから）は、
ダチ高の中でも群を抜いていた。
将来は大相撲に進むことを決心し、そのために大太刀に入学した男。
そんな彼の為に、桐仁は腕力を生かした相撲に特化する異能力士としてのメニューを仕込む。
ワカメ漁のおじさんのツテを頼り、一本釣りの船に乗せてもらい仕事を手伝う。
揺れる船の上でバランスを取りながら、重い魚に合わせて繊細に竿を上げる訓練。
部室でも熱心にバーベルを上げ、筋力増強にいそしんだ結果、彼の吊り、投げは恐るべき
破壊力を持つに至った。
桜本を吊り上げた陽川は、そこからひねりを加えて相手を土俵に転

がす。
まずは大太刀が1勝。
―東、鳥飼君。西、幸田君―
二陣はお互い春の大会では出番のなかった両者。成長が問われる一戦。
―はっきよい！―
仕切り線のはるか後ろら幸田が突撃する。それを予測していた鳥飼は体重を利用して受けた後
右に身をかわす。
が、幸田は体に手ごたえが無いと悟るや、すぐに重心を戻し、横っ飛びで鳥飼に食らいつく。
大太刀高校1年、幸田純一。１７５ｃｍ、７９ｋｇ
ラグビー経験者であった彼は、押しとぶちかましだけは素人離れしていた。それを生かすべく
彼は蛍とペア特訓を行ってきた。突進に特化した彼にとって、変化は最大の敵である。
相手の重心の取り方や、肌で感じる相手の押し引きを素早く感じ取り、即座に対応する。
軽量で俊敏な彼は、そうした対応力を確実に身につけて行った。
頭を付け、体重で上回る相手をぐいぐい押す。鳥飼が土俵際につまったその時、右からの
ひねりを加えた投げが炸裂する。彼の投げの師匠は桐仁、タイミングの見切りは一級品だ。
なすすべなく転がる鳥飼、ダチ高2連勝！
―東、佐々木君。西、松本君―
関東新人戦の覇者、松本の登場に会場が沸く。
大太刀高校1年、松本　康太。１８８ｃｍ、１４５ｋｇ
坊主頭ににこやかで温厚な表情と性格、そしてそれに習うように、彼の体はとても柔らかかった。
そんな彼はこの3か月、受けに特化した粘りの相撲を仕込まれる。
ダチ高相撲部にはそんな格好のサンプルがあった、前部長の小関信

也である。
彼がやっていた水を口に含んでの無呼吸相撲に、数人で別方向から押し込んでも
粘り腰を発揮できるよう、柔軟性とバランス感覚を養ってきた。その結果、彼は関東の新人王となる。
佐々木は攻めに攻めるが、ついには力尽き、息も絶え絶えに土俵を割る。
「大太刀が川人を3タテかよ！」
「強ぇぇーっ！」
誰もが注目の1回戦が、まさか3試合で決着を見るとは思っていなかった。無論名塚も例外ではない。
「（昨年は鬼丸がいたけど、今年も負けて無いわねこれは・・・さぁて、お次は？）」
―東、堀田君、西、大峰君―
すでに負けが決まっている川人だが、このまま終わるわけにはいかない。大河内が堀田に
「全国レベルの実力、見せてやれ！」と激を飛ばす。
おう！と答えて土俵に上がる堀田。が、仕切り線の向こうの相手を見て若干ひるんでしまう。
大太刀高校1年、大峰　浩二。１８０ｃｍ、１３２ｋｇ
パンチパーマかと思うような天然パーマに薄い眉毛、切れ上がる吊り目、
そして相撲取り然としたあんこ型の体形。睨み合うだけで凄まじいまでの威圧感を放つ彼は
その見た目だけでなく、相撲の取り口も非常に激しいものがあった。
松本が受けの相撲なら、大峰は攻めの相撲。突っ張り、かち上げ、そしてがぶり寄り。
その成長を促進したのが、猛稽古で知られる柴木山部屋への出稽古だ。親方に竹刀で撃たれながら
闘志を漲らせ、より苛烈な攻めを身につけるに至った。

激しい打撃戦の中、堀田はやがて後の個人戦のことを考えてしまう。このまま激戦を続けて
もしケガでもしたら・・・そう思考が流れた瞬間、勝負は決する。
―大将戦。東、大河内君。西、三ツ橋君―
まさかの川人４連敗。しかし大将はあの国宝『三日月』をも破った大河内だ。
対する三ツ橋は昨年公式戦全敗、今年に入ってようやく白星を挙げられた程度の相手。
川人が一矢を報いる可能性は十分にあった・・・のだが。
―手をついて―
仕切りながら大河内は考える。彼は変化を使う選手、だが自分は無理に突進するスタイルではない。
長い腕を使って、相手と距離を取っても相撲が取れる、無論密着したなら変化させずに勝てる。
彼にとって僕のような相撲は天敵のはず、大丈夫、勝てる。自信を持て―
そこまで思って、ふと前を見る。そこには、まるで蛍火のようにらんらんと輝く三ツ橋の眼光が
大河内の目を射抜くように睨めすえる。
「くっ・・・」
負けるか、ビビるな！僕は川人のエースなんだ。意を決し睨み返す
―
大河内は気付かなかった。その時すでに彼は三ツ橋の術中に嵌っていることに。
―はっきよい！―
その瞬間、大河内の視界から、蛍火のような眼光だけを残し、三ツ橋の姿がかき消える。
「・・・なっ！」
彼の腕が虚空を掴んでいた時、蛍はすでに大河内を飛び越し、その背中を取っていた。
「八艘飛び！」

相撲で背後を取られることは『死』を意味する。大河内の長い腕も、この時点で意味を成さなくなった。

大太刀高校2年、三ツ橋　蛍

様々な相撲のスタイルを取り入れようとしてきた彼に、思わぬアドバイスを与えたのは

新顧問でもあり、レスリング部の顧問を兼用している諸岡であった。

レスリングという競技は、相手の後ろを取る事が重要なテクニックになっている、しかしお互い

ソレを狙っている以上簡単にはいかない。

そんな時の戦術のひとつとして教わったのが、『視線による相手心理の誘導』であった。

「いいかいミスター三ツ橋、まずは相手の目を睨むんだ。相手じゃなくて相手の『目』ね。

そして目と目があったら、ほんの少し目線を逸らす。そうすれば相手は必ずその逸らした方向に

意識が飛んでしまうんだ、あとはその逆をつけばいい。」

そんなテクニックを身につけるため、蛍は度々レスリング部の練習に参加していた。

強豪とは言えない大太刀レスリング部員でも、この『視線の誘導』は様々に駆使されている。

そんな連中に揉まれた彼は、真っ向勝負を良しとする相撲ではタブーとされる変化に加え

その逆をつく目線の動きを身につけてきた。

この1番もそうだ、大河内と目が合った瞬間、彼は一瞬だけ目線を下に落とす。と同時に立ち合い。

意識が下に向いたその刹那に蛍は飛ぶ。大河内の肩越しに彼を飛び超えてみせた。

懸命に抵抗する大河内をがむしゃらに寄り立てる蛍。場内は思わぬ金星の予感と

八艘飛びにに全く対応出来なかった大河内に驚きを隠せない。名

塚もその例外ではなかった。
「(三ツ橋君・・・貴方一体、何をしたの?)」
やがて歓声。ついに三ツ橋が大河内を寄り切って退ける。最高のスタートが切れたようだ。
―以上、5―0で大太刀の勝ち!―
選手たちを控えの桐仁が、部長のレイナが、柚子香が迎える。
「全勝とは出来過ぎだな、これは俺も負けていられないな。」
桐仁は体力の温存のため、幸田か蛍のどちらかと1戦交代の予定だ。しかし川人戦で出なくても
全勝とは、俺の影が薄くなるじゃねぇか、と笑う。
そして確信する。これなら昨年に続き全国出場、いや優勝も夢ではない、と。
大太刀の全員が、そんな手ごたえを確信していた。
ただひとり、堀　千鶴子を覗いて。

―以上、5―0で石神高校の勝ち―
別の土俵、春の大会準優勝チームである柏実業を文字通り圧倒した石神高校。
偵察に来ていた千鶴子は思わず漏らす、この会場の全ての人間と同じ感情を。

「・・・強い、強すぎる・・・」

第11番『山』を切り崩せ！

「間宮戦は・・・捨てる。残り4戦で3勝するしかない！」
悲壮な決意で、桐仁は皆にそう告げる。
ついに団体決勝までコマを進めた大太刀高校。しかし反対側のブロックからは
やはり当然のように石神高校が勝ち上がってきていた。
千鶴子が撮ってきた石神のビデオ、そして準々決勝からは直に彼らの相撲を見て
勝つためのプランを練った結果、桐仁は皆にそう告げた。
石神の強さは圧倒的だった。しかしそれでも取り口や展開次第によっては勝ちの目はある、
ただひとり、石神の主将、間宮を除いては。
とにかく彼の相撲には付け入るスキが無かった。１８２ｃｍ、１７０ｋｇのその巨体を生かし、
相手を受け止め、つかまえて土俵の外に出す。そのシンプルな相撲の前に、誰も成す術が無かった。
何より秀逸なのがそのバランス感覚だ、引きや叩きには絶対に落ちず、投げを打っても余裕で残す、
前傾姿勢にならずに常に後ろに体重を残し、組んでからはその大きな腹でじわじわ圧力をかけて
寄り切るその戦法を崩す術は、今のダチ高には無かった。
「大将の沙田は俺がなんとかする。そこまでに何とか2勝、できれば3勝を挙げてくれ！」
そう続ける桐仁。しかしその表情や呼吸を見ていると、とてもあの国宝『三日月』を
凌げる状態では無いことが分かってしまう。
2回戦、西上高校戦で先鋒として出た幸田は、得意のぶちかましで相手を圧倒するも
勢いあまって土俵外に飛び出し、足にケガを負ってしまう。その結果、3回戦以降は桐仁が

フル出場する羽目になってしまった。
肺に疾患のある桐仁はここまでの試合で、その耐久力を大幅に減らしてしまっていたのだ。
「だったらその間宮戦、俺にやらせてください！」
そう申し出たのは陽川だった。彼は今日ここまで全勝で波に乗ってはいる・・・が桐仁は認めない。
「ダメだ。見ただろう間宮の相撲を、投げにも引きにも落ちない奴をお前がどうやって倒す？」
強力な腕力の陽川だが、それでもあの巨体を転がせるとは思えない、まして吊り上げるなど不可能だ。
「俺は・・・大相撲に行くつもりで相撲やってます。だから相手が誰でも引く気はありませんよ
間宮でも、例え横綱刃皇でも！」
意外な名前を出されて驚く一同。その決意にやれやれ、と頭を掻く桐仁。
「勝算は、あるんだろうな。」
「勝てない相手なんて存在しませんよ、手はあります。」
「分かった・・・やってみろ。」

―これより決勝戦を行います。東、大太刀高校。西、石神高校―
場内アナウンスが決勝の開始を告げる、会場内の人間の注目が土俵に集中する。
雑誌記者の名塚も、カメラマンの宮崎も、お忍びで応援に来ている柴木山親方も、その行方に注目する。
―先鋒戦。東、陽川君。西、間宮君―
その組み合わせに会場が沸く。両者いきなりポイントゲッターの激突である。
しかし相撲をよく理解する人間にとっては、大太刀がオーダーミスをしたようにしか思えなかった。
まるで動かざる山のごとく相手を受け止め、その山が山のまま動いて相手を土俵外に追いやる間宮の相撲。

投げや吊りが主体の陽川にとっては最悪の相手だと思われたからだ。

―手をついて―

仕切りながら間宮はこの取組の重要性を感じていた。ここまで無敗の陽川を倒せば、一気に流れは

石高に傾くだろう。

てっきり自分には体格的に遜色のない松本か大峰、または捨て石としての三ツ橋か幸田が来るものと

思っていた、だが相対したのはダチ高の主力であり、相性の良さそうな大魚である。絶対に勝つ！

―はっきよい！―

陽川が頭から突っ込む、間宮はいつものように胸で受け止め、すかさず前ミツを探る。

ここから誰もが間宮の必勝パターンにハマる、と思ったその時、陽川は右手で間宮にかち上げを放つ。

だがそれは勢いのある打撃では無かった、ぶち当てるというより当てがう感じで、

間宮のアゴに右腕を添える。

「何だありゃ、そんなもんで主将がたじろぐかよ。」

石高二陣の市橋が選手席から呟く。

「いや・・・これは？」

沙田が呟いたその時、陽川は左手で間宮の右下手を閂（かんぬき）で抱え込む。関節は決まっていないが、

かち上げから添えた手と左手の閂によって、二人の間に隙間ができる。

そして陽川は、閂を決めた左手で自らの右の二の腕を掴む。と同時に間宮のアゴに添えた右腕を突き出し

ノドにめり込ませる！喉に圧迫感を感じて表情を変える間宮。

「鉈（なた）!!」

柴木山親方が思わず声を上げる。大相撲でも滅多に見ない、腕と喉笛の二点攻め。

「その手があったか！」
桐仁が拳を握り締めて立ち上がる。陽川の選択したのは投げでも吊りでもない『押し』だった。
喉笛に腕がめり込んでいる以上、間宮は押せない。押せば腕はますますめり込み、自らを苦しめる結果になる。
それどころか相手が押してくれれば、踏ん張るだけでもやはり首が締まる、これならいかに間宮が重くとも
押し込むことが出来る。
「（アンタの弱点、それは体の割に腕が短い事だ！俺の長い腕でホールドして、このまま押し切る！）」
陽川は前傾姿勢でじりじりと間宮を押し進めていく。石高応援団から驚愕の声が上がる。
「間宮さんが・・・押されてる、だって!?」
「見たことねぇぞこんなの・・・」
動かざること山のごとき間宮が、今まさに動かされている、しかも後ろに！
「『山』を切り崩すのに『鉈』って・・・」
予想もしていなかった光景に名塚がこぼす、無敵だと思っていた間宮に想わぬ綻び。
この大会次第で間宮を国宝認定しようと思っていた名塚にとって、それはある意味痛快な光景だった。
名刀を鉈が凌駕する、そんな奇跡のシーンに身震いがする。
ついに土俵際、俵に足が掛かる間宮。
「くっ・・・」
間宮は苦しい。勝負も、呼吸もだが、それ以上に石高相撲部主将としてのプライドが何よりも。
―これから俺達で、最強の石高相撲部を作るんだからよ―
去年、沙田に言った言葉が頭をよぎる、来年は金森も真田もいない、それでもその決意は固かった。

間宮　圭一

実家が花屋だった彼は、元々が心優しい少年であった。しかしその体格や面構えから
周囲の人間には敬遠され、時には苛めの対象になることもあった。
だが相撲に出会って彼の人生は変わる、そこには見た目で自分を嘲る者などいない。
マワシ一丁で己を飾らず、闘志をぶつけ合う世界。仲間と同じ釜の飯を食い、共に鍛え、そして戦う。
そして高三の今年、自分は強豪校である石高の主将として戦っている。自分にとって最後の大会、
主将として『負ければ終わり』の大会を戦っているのだ。
なのに、なんだこのザマは！
「くひゅあああぁぁぁ!!」
ノドを責められながらも吠える間宮。アゴを引き、陽川の腕を喉元に挟み込む。無論それで更に喉は圧迫されるが
意に介さず腰を割り、真っ赤な顔で陽川を睨む。
「（負けられるか！俺は石高史上最強のチームの主将なんだ！）」
そして間宮は、陽川に負けない前傾姿勢を取り、全体重を陽川に浴びせる、ノドに手がくい込んだままで。
そして押し返す！
１７０ｋｇの間宮と９２ｋｇの陽川が同じ体制で押し合えば、結果は言わずもがなである。一気に土俵の反対側まで
押し返される陽川。
「チャンスだ！」
桐仁が叫ぶ。今、間宮は完全に陽川に寄りかかる体勢になっている。今なら投げも引きも決め放題だ！
「投げろ！・・・あ、ああっ！」
口にした一瞬の後、自分の言葉の間抜けさに気付く桐仁。間宮は『鉈』を極められた状態で押している、
逆に言えば陽川の両手は押し付ける間宮の体重と、自らホールドした腕によって完全に封じられているのだ。
これでは投げや引きはおろか、体を躱す事さえままならないではな

いか！
「くそおぉおぉっ！」
無念の雄たけびを上げ、土俵外に弾き出される陽川。
―西、間宮君の勝ち！―
審判のコールに、首元を真っ赤に紅潮させた間宮が、せき込みながら勝ち名乗りを受ける。
普段温厚な間宮の激しい戦いと勝利に、石高応援団が沸きに沸く。
「間宮さん、ナイスファイト！」
沙田が珍しく興奮気味にハイタッチする。間宮は呼吸を整えながら、皆に指示を出す。
「おう・・・続けよ！」
多くを語らない、間宮らしい激励。その声を聴き、皆の反応を見て、選手の脇に座る石高顧問の菅原は確信する。
「（勝ちましたね・・・昨年の借りは返させてもらいますよ、ダチ高相撲部。）」

息を切らせながら土俵を降りる陽川。大口を叩いておいてこのザマだ、何が刃皇だ、情けない・・・
「下を向かない！」
蛍が声をかける。陽川とすれ違いざまに肩に手を置き、こう続ける。
「必ず取り返す！だから、よく見ておくんだ！」
そう言って土俵に上がる蛍。

―二陣戦。東、三ツ橋君。西、市橋君―

第１２番　蛍火は円（まどか）に舞う

相対する蛍と市橋。１６８ｃｍ７７ｋｇと１８２ｃｍ１２２ｋｇ。小兵と巨漢。

この二人が向かい合う様、そして今やよく知られた三ツ橋蛍の相撲スタイル『変化』を考えれば、

この取り組みの先がおのずと予想される。

が、石高相撲部は誰一人として「変化気を付けろー」と声を飛ばす者はいない。

それは市橋に対する絶大な信頼を示していた。

市橋　義彦

今年の春、団体準決勝の中堅として出場した彼は、川人高校の桜本に引き落としで敗れた。

それは彼が相撲を始めてからこっち、初の『引き技』に落ちた一番でもあった。

昔から反射神経には自信があった。太っているにもかかわらず、その俊敏さや反応速度は

一般生徒のそれをはるかにしのぐほどの能力を備えていた。

それだけにあの敗戦は彼にとってショックだった。二度と同じ失態はすまいと彼は毎日

稽古を積んできた、つまりは『変化に対する反応と対応』を磨いてきたのだ。

その彼が『変化の三ツ橋』と対戦する。これはもう相撲の神様が石高に「勝て」と言っているようなものだ。もちろん真っ向勝負では相撲にもなるまい、石高側の誰もがそう確信し、勝利を期待する。

―手をついて―

さぁ、どう来る、と蛍を睨む市橋。蛍もまたそのベビーフェイスに似合わない険しい眼光で

市橋の目を射抜く。

「（相撲取りの目じゃねぇな・・・まるで子供の目の光だぜ）」

蛍の眼の光は格闘技者にありがちなスレた目ではない、らんらんと輝くその目の光は、まるで
暗闇に光る電球のような、透明感のある光を備えている。
―はっきよい！―
両者が立つ！胸を起こして受ける市橋に対し、蛍は全力でぶちかましを仕掛ける。肩口あたりに
激突する蛍は、続いてもろ手突きを放つ。
―パチィンッ―
平手で両肩を張った蛍と市橋の距離が空く、だが蛍の突きは市橋の上半身を少し起こしたに過ぎない、
にもかかわらず両者の間合いが広がったのは、蛍がもろ手突きと同時にバックステップしたからだ。
「何!?」
思わぬ展開に市橋が困惑する。立ち合いで変化せず当たった後で後方に変化、しかも叩くならまだしも
逆にこちらの上体を起こして後ろに下がるとは！
一瞬の後に市橋の思考は切り替わる。これは絶好のチャンスだ。迷わず突進し、土俵際の蛍を
外に叩きだす！
土俵際まで飛んだ蛍は、そこで腰を割り、再び真っ向から市橋に突撃する。
―ガツゥン！―
再び激突する両者、今度は頭と頭で。
その瞬間、蛍は相手のぶちかましの軌道をずらし、そのまま市橋の左下にすべるように体を潜り込ませる。
「ウナギの如し！」
柚子香が叫ぶ。ぶちかましで当たった瞬間に高速変化する蛍の得意技。どんなに鍛えた人間であっても
頭と頭が当たった瞬間は反射的に目をつぶる、そんな反応も利用した動き。
そして蛍は市橋の脇の下をすり抜け、後方に回り込もうとする。し

かし市橋は目で追えずとも
肌を伝う三ツ橋の感触から、相手が脇を抜けて背後に回ろうとしていることを察する。
「後ろかぁっ！」
素早く反応し、振り向く市橋。まだマワシを掴まれた感触はない。
これなら間に合う、
奴の姿を正面に捕らえられる！
そして彼が目にしたのは、目線の高さにある蛍の『足』だった。
「八艘飛び！」
後ろに回った蛍はなんと、そこからさらに市橋を飛び越しにかかる。もし彼が振り向かなければ
わざわざ後ろから彼の目の前に着地してしまう危険な行為。だが市橋が反応良くふり向いたおかげで
相手の後ろ後ろへとその身を踊らせる。
「させるかぁっ!!」
飛ぶ蛍を目で追い、上を仰ぎ見る市橋。見失っていた蛍の全身を、その眼の光を再び捉える。
そして蛍が着地すると同時に、その体を正面に向ける。横に上にとくるくる回りながら、
ついに彼の変化に体ごと追いついた！
蛍は正面から組み付きに来るが、市橋は上からかぶせるように両上手を取る。あとはぶっこ抜いて
放り出せば全てが終わる。
が、次の瞬間、市橋はバランスを崩し、後方によろめく。懐に潜り込んだ蛍が、市橋の左足を
抱えて持ち上げていたからだ。
「な・・・」
市橋には理解できない。単に足を取られた程度でよろめくようなヤワな鍛え方はしていないつもりだ。
なのに今の自分は完全にバランスを崩し、後方に押されながらケンケンでかろうじて耐えている。

彼には真下にいる蛍の両眼が、その光が見えていた。鬼の表情の上にまるで蛍火のような光を
たたえたその眼光を。

「いったーっ！」

陽川が叫ぶ。この春以降、三ツ橋先輩が研究していた戦法、相手の下に潜りこむ『小兵の王道』。

春の全国大会、そこで蛍は栄大付属の小兵、国宝『小龍景光』こと狩谷俊の相撲を見る。

相手の下に潜り込み、足技や足取りで次々に大型選手に土を付けるその姿は、蛍の心に強く焼き付いた。

が、ダチ高に戻ってその戦法を試そうとするが、それは上手くいかなかった。蛍と狩谷では

上からの圧に対する膂力に差があったのだ。部内では松本や大峰は勿論、陽川にさえ引っこ抜かれて

空しく土俵を割る事になる。

「相手の腰が浮いてるならともかく、腰を割ってる状態じゃ無理だ、今後の課題だな。」

そう桐仁に言われ、落胆した三ツ橋先輩の姿を陽川はよく覚えていた。

だが彼は諦めてはいなかったのだ。腰を割っている状態で通用しないなら、相手の腰を

浮かせてから潜ればいい。

最初に正面から当たり、脇をすり抜け、上に飛ぶ。その姿を相手に目と体と意識で追わせることで

腰の低い市橋を棒立ちにさせる、八艘飛びさえも『撒き餌』にして！

「うおおおおおっ！」

「「行っけえぇぇぇぇっ！」」

三ツ橋が吠える、ダチ高応援団が叫ぶ。足にタックルをしたまま、巨漢の市橋を土俵際まで運び

そのまま両者はもつれる様に土俵外に転がり落ちる。

―東、三ツ橋君の勝ち！―

「うおっしゃあぁぁ！」

ダチ高相撲部の全員がガッツポーズを決める。逆に顔色無しの石高相撲部、先鋒戦の借りを返し勝負を振り出しに戻した。

起き上がる市橋。転がったせいで今は蛍の方が下敷きになっていた。息も絶え絶えな彼に市橋は手を差し出す。

「大丈夫、かよ・・・」

「ええ、すいま、せん・・・」

蛍を引き起こす市橋。疲労を隠せない蛍のその表情に、今だ光をたたえた目が映る。

「消えたり現れたり、まるで蛍火、だな。」

「・・え？」

言葉の意味を理解できずに返す蛍。構わず続ける市橋。

「なんだよウナギって・・どうせなら『蛍火の如し』とでも呼んでもらえ。」

円い土俵、その上で舞う蛍火。そんな一番を目にした相撲雑誌記者、名塚は思う。

「（三ツ橋蛍、か。もし彼が国宝になるなら『蛍丸』かしら。）」

そう思いつつも、次の瞬間にはそれを否定する。国宝とは本来『将来の日本人横綱候補』に与えられる称号だ。彼の相撲はどう見ても横綱相撲には程遠かった。

でも、と思う。かつて大相撲にも彼のような力士がいた。変化に特化し『技のデパート』『昭和の牛若丸』とまで言われた人気力士が。

今再び大相撲にそういう力士が現れて、大相撲を盛り上げてくれる

なら、それは相撲の、
そして『国技』の『宝』と言えるかもしれない。
そんな名塚の予感が実現するのは、今少し先になる―

第１３番　天秤が傾くのは・・・？

―三陣戦。東、大峰君。西、美馬君。―

１勝１敗で迎えた三陣戦。これに勝ったほうが優勝と全国出場にリーチがかかる重要な１戦。

だが、土俵に上がる対戦相手を見て、ダチ高相撲部の面々は訝し気な表情を隠せない。

「美馬武志（みま　たけし）３年。１８５ｃｍ９３ｋｇ、今年はここまで公式戦に出てはいません。」

千鶴子がノートを見ながら皆に説明する。石神の三人目は今日ここまでずっと補欠だった美馬が出てきた。

「石高の秘密兵器ってワケか・・・むしろ好都合かもな。」

桐仁がアゴに手を当て、そう呟く。こちらの三陣、大峰は攻めの相撲が身上のタイプだ。

相手によって相撲を変えるタイプではないだけに、予測不能な相手にぶつけるには適任だろう。

「お、親方。いよいよですよ、大峰君。」

「うむ。」

観客席。寺原の言葉にうなずく柴木山親方。大峰はここ数か月に何度も柴木山部屋に出稽古に来ていた。

桐仁が彼を自分の所に寄こした理由はすぐわかった。大峰の相撲はかつての親方、現役時代『薫山』の『爆竹』と称された苛烈な攻め、そのスタイルにそっくりだったのだ。

昨年に続きお気に入りの弟子を得た親方は、彼をとことん可愛がった（相撲用語で厳しく鍛えた）。

その彼の一戦にかつての自分を重ね、かつ自分には無かった巨体の大峰に期待を寄せる。

―手をついて―

仕切る両者。体格としては先鋒戦の逆、相撲取り然とした体格の大峰に、筋肉質な美馬。

一瞬の静寂の後、両者の立ち合い―
―バッチィイン！―
美馬の強烈な突っ張りが大峰を襲う。その太く長い腕が、グローブのように大きな掌が、
大峰の顔面を張る！2発、3発、4発・・・
「ぐっ！」
よもやの展開に後れを取る大峰だが、荒っぽい展開なら望むところだ。返す刀で張り手を撃ち返す。
だが、それはいずれも美馬の体の芯を捕らえるには至らない。美馬は張り返されると見るや、
自らの長い腕を目いっぱい伸ばして大峰を突き放して距離を取る。そしてそこから再び張り手！
―ドッ、ビシィッ、パンッ、ビチィッ！―
打撃音が響き渡る土俵上。美馬はあくまで張り手一本で攻めまくる。その長いリーチを生かして
主導権を渡さない。
「金森の『大筒』か・・・いや、アレよりもっと強烈だ！」
桐仁が叫ぶ。昨年の石高主将の金森の突き、それを押しよりも打撃に特化したような突っ張りは
相撲というよりボクシングのそれに近い打撃戦を思わせた。
「アゴを引け、頭を下げて距離を潰せ！」
柴木山親方がお忍びであることも忘れて声を飛ばす。体格差から言っても組みさえすればこちらのものだ。
そしてまるでその声が聞こえたかのように、大峰は腰を落とし、前傾姿勢で突進し、頭を押し付ける。
が、次の瞬間、再び両者の距離が開く。美馬は諸手を相手の両肩に添え、突き出しながらその反動で
自ら後ずさりして再び自分の間合いに戻す。
「ぐっ！」
組みに行こうと思った途端に距離を開けられ、また強烈な張り手が

大峰を襲う。
最初の方の張り手で既に鼻の中を切っており、したたる血が張り手で血しぶきとなって飛び散る。
それでも攻防が止まっていない以上、行司も『鼻血待った』をかけられない。
「徹底的に離れて張ってくる、それに特化した力士か！」
桐仁の叫びを聞いた石高の間宮が、心の中でそれを否定する。
「（違うな・・特化したんじゃない、特化せざるをえなかったんだよ）」

美馬　武志
彼は石高の次期主力として大いに期待された選手だった。だが昨年秋、美馬は稽古中の事故で
首を痛めてしまったのだ。
力士にとって首は生命線と言っても良い。ダメージは頸椎にまで達しており、彼は医者から
相撲そのものにドクターストップをかけられていたのだ。
失意に沈む彼に、顧問の菅原は突き相撲への転向を進める。無論試合に出すつもりは無かったが
彼の相撲への情熱をこそ惜しんでのアドバイスだった。
だがそれは彼にハマった。元々気性の荒い美馬に、その長く太い腕は十二分に応えたのだ。
部内でも他を圧倒する威力を持ったその張り手に、菅原は1試合だけの出場を許可する。
首は完治してはいたが、精神的なトラウマが彼を襲わないか心配ではあった。
とはいえ3年生最後の大会、頑張ってきた彼にせめてもの晴れ舞台を与えたかったのだ。

「まずいですよ親方、このままじゃ・・・」
「美馬君の間合いの取り方が上手い、距離を潰せば自ら下がってでも間合いを戻す。まずいな・・・」

腕組みしながら唸る柴木山親方。大相撲でもかつてそういうタイプの力士が居た。そのスタイルで
横綱にまでなったほどの・・・
大峰は打たれながらも、間合いを詰める方法を必死で探る。既に顔面はおろか胸まで血しぶきに
染まっているが、それでも闘志は衰えない。
「大峰ファイットーォ！」
「スキも見て潜り込めーっ」
「手を休めるな、張れ、撃ちまくれ！」
「ぶちのめせーっ!!」
両高から応援が、激が飛ぶ。苛烈な打撃戦に場内が沸き、汗と血が土俵に舞う。

「根競べだな、美馬君が力尽きるのが先か、大峰ちゃんが突き倒されるのが先か・・・。」
柴木山親方が冷静に分析する。美馬は立ち合いからずっと張りっぱなしだ。
体力が無尽蔵ではありえない以上、撃ち疲れれば大峰にもチャンスは訪れる。
一方、防戦一方の大峰は、体力はまだ尽きないがダメージのほうが心配される、始まってからこっち
殴られっぱなしなのだから。
そして、勝負の天秤はここで一方に傾く。
―ズルッ！―
美馬の渾身の一撃は、大峰の頬を捕らえたかに見えたが、それが血で滑り、体が泳ぐ！
どんっ！という音と共に四つに組む両者。
「よっしゃ！捕まえた!!」
「逃がすな！決めろっ！」
意気上がるダチ高相撲部の気勢を削いだのは、なんと行司であった。

「待った！」
両者の肩を叩いて動きを止めるよう指示する。土俵の砂を二人の足元に集め、今の位置を記録する。
「なんてこった、ここで止血待ったかよ!!」
桐仁が吐き捨てる。ようやく大峰が相手を捕まえてこれからと言う時に・・・待ったで勝負が止まれば
美馬の体力が回復してしまうじゃないか！
「よし！美馬さん、呼吸を整えて!!」
沙田が声を出す。この待ったで勝負の天秤は石高の方に傾くと誰もが思った、その時！
―どさっ！―
重い音と共に、土俵にうつ伏せに倒れる大峰。呼吸を荒げながら手をついて起き上がるが
足元がどうもおぼつかない。
「いかん、脳震盪を起こしたか・・・？」
諸岡顧問が心配そうに見つめる。あれだけ張られ続けたなら、その可能性は十分にある。
「君、大丈夫か、やれるかね？」
「勿論ッス！」
ティッシュを鼻に詰めながら大峰が返す。
「やられた、最後は寄りかかっていただけだったのか・・・」
石高の市橋が嘆く。もし待ったがかかってなかったら、大峰は簡単に落ちていたのか。
待ったで石高側に傾いたと思った勝負の流れは、今またどちらにあるのか分からなくなった。
行司の指導で、待ったがかかる以前の体勢で組み合う両者。
美馬は迷っていた。何とかして離れて再び突きに出るか、このまま組んで勝負するか・・・
彼は後者を選ぶ。もう首は治っているはずだ！だったらこんなフラフラな1年坊主に負けられない！
―ぱんっ！―

行事が両者の肩を叩く、再開の合図。と同時に美馬は両マワシを強烈に引きつける。

が、次の瞬間に起こった事に、彼は目を丸くする、大峰は美馬を引きつけ返し、

そのまま一気に寄り立てる。

「な、なんだと・・・!?」

これが今しがた脳震盪を起こした選手の寄りだと言うのか?その力強さになすすべなく

電車道で押し出される美馬、勝負あった。

―東、大峰君の勝ち!―

土俵を降りる大峰を、ダチ高相撲部が心配そうに迎える。が、そんな心配は無用とばかりに

大峰は笑顔を見せ、ピースサインを決める。

「アレ・・・演技かよオイ!」

陽川のツッコミにへへ、と照れ笑いする大峰。彼は張り手を受けながらなんとか接近するために

故意によろめいて相手の油断を誘おうとしていたのだ。

そんな際にいきなり四ツ状態になったのだから、待ったで離された時にその流れで倒れただけだったのだ。

観客席、柴木山親方と寺原は顔を緩めながら、その結果に満足していた。

「あれだけウチの鬼丸のぶちかましを受けてたんだ、あんな張り手で落ちて貰っちゃ困るよ、なぁ。」

第14番　荒木の選択

「くっ、すまん。荒木、沙田・・・頼む！」
呼吸を荒げながら土俵を降りる美馬、後に続く2年生二人に望みを託す。
荒木は立ち上がり、ひとつ、すぅっと深呼吸すると、格闘家の目になって土俵を睨む、
昨年の団体戦、荒木は二陣戦で出場するも國崎に敗れ、石神の県予選敗退の一端を担ってしまった。
そんな雪辱の場面に力が漲る。
が、土俵に向かおうとしたその時、主将、間宮の手が彼の肩に置かれる。
「あれこれ考えるな、お前の相撲を取ってこい。」
そう告げる間宮に、荒木はため息ひとつついて答える。
「土俵の下に置いていけ、でしたね、わーってますよ。」

―副将戦。東、松本君。西、荒木君―
2―1で迎えた団体戦決勝の副将戦、今年の関東新人王の松本と、一昨年の全中柔道王、荒木の対戦。
しかし観客も、ダチ高相撲部の面々も、有利なのは松本の方だと睨んでいる。
重厚な受けの相撲を取る松本に対し、荒木の相撲はどこか腰高な、柔道癖が抜けきらない感じある、
投げ主体のイメージがあったからだ。
腰をがっつり割ってくる、粘りのある松本にその投げが決まるとは思いにくい。
まして荒木は今年の春、団体のレギュラーからすら外れていた。ここにきて復調したとしても
今の松本に通用するとは思えなかった。
「(ここで決めろよ、松本・・・)」
土俵を見る桐仁の拳に力が入る。もし松本が破れ2―2のイーブ

ンになったら、自分が大将として
あの沙田と戦うことになる。無論その覚悟はあったが、体調がそれについてきていない。
ここまで5戦、休憩を挟みながとはいえ連戦。肺の弱い桐仁の『戦える時間』は確実に削られていた。
松本もそんな事情は良く分かっている、自分がここで決めなければダチ高の全国が危うくなる。
大丈夫だ、普段通りの相撲を取れば勝てる。そう自分に言い聞かせて荒木に対峙する。
相手は見た目も自分よりずっと小さい、何をしてこようと対応できる、勝てる！
―はっきよい！―
両者が立つ！荒木は頭から突っ込み、松本は胸で受ける。
そのまま体格差で一気に荒木を押し込む松本ではあったが・・・
「(な、何だ？軽い・・・変化？い、いや違う)」
手ごたえが無い。軽量どころではない、ほとんど空気を押しているかのように重さを感じない、
改めて凝視するまで、そこに荒木がいるのかどうかさえ疑うほどに。
が、彼はそこに居る。頭を付け、腰を落とし、姿勢を固定したまま滑るように押されていく。
そして足が俵にかかった瞬間、右に円を描くように移動、体を入れ替えようとする。
松本もそれに反応、出し投げを食らわないように足を運び、再び正面に向かい合う。
そして、松本が右上手を引こうとした瞬間、荒木は動く。静かに、気配無く。
左手で松本の右手首を掴む
右手を相手の左わきに差し込む
やや体を開き、右足を松本の左足の内側に添える
その3動作を同時に、スッと自然な形で行う。まるで武道の『型』の

ごとく。
松本もその動きを把握してはいた。しかしあまりに力感のないその動きに、作為を感じ取れずにいた。
むしろそれがフェイントではないか、とすら思う。
次の瞬間、荒木の体が、力が、弾けるように爆発する！
まるで暴れ馬が騎手を振り落とさんかのように右足を跳ね上げる、同時に右腕ですくい投げを打ち
左手で掴んだ松本の右腕を巻き込む。
左内股を跳ね上げられた松本の、唯一地面に接していた右足が浮き上がる。と同時に
松本は正中線を軸にして一気に空中で半回転！
―掛け投げ『天地返し』！―
１４５ｋｇの松本が宙を舞い、もんどりうって背中から地面に落ちる。
そのあまりに一瞬の出来事に、会場からは声が出ない。多くの人があんぐり、と口を開けて固まる。
投げられた松本の視界は、その技名の通り土俵と屋根が、地と天が入れ替わったかのごとく映った、
「（僕は負けた、のか？何をされて・・・？）」

「さ・・・三点投げ、だと⁉」
桐仁が声を絞り出す。自分の元祖でもなく、火ノ丸の百千夜叉落としでもない、
『腕取り』『掬い』『足跳ね上げ』の３つの合わせ技！
「あんな速い投げ、相撲じゃ見たこと無いわ・・・」
名塚が漏らす。確かに複数の合わせ技は、投げを主体とした柔道では珍しくはない。
だが、長年相撲を見てきた彼女をしても、ここまでの切れ味と速度を持った投げ技は見たことが無かった。
あー、と嘆く寺原の隣で、柴木山親方が唸る。
「『脱力』が生む『瞬発力』か。だが、ここまでとは・・・」

普段も彼は部屋の弟子たちに「力の入れどころ、抜きどころをしっかり見極めろ」と指導している。
それを承知でも、あの荒木の立ち合いからの力の抜き方は異常だ。
相撲は刹那の勝負。わずか４．５５ｍの土俵から出ても、足の裏以外が地面についても負けの世界、
そんな勝負でそもそも「力を抜く」こと自体がリスクですらある。
下手をすると力を込める前に
負けてしまう事すらあるというのに。

「よし！」

ぐっ、と拳を握り、手ごたえを感じ取る荒木。この脱力を生かした瞬間の破壊力、彼なりに出した
『相撲と柔道の融合』の結論の取り口に満足する。
彼が見本としたのは、春の全国で見た鳥取白楼の主将、榎木慎太郎の相撲だった。
合気道を習得している彼は、かつては荒木と同じように、やや腰高な相撲を取る傾向があった。
だが、この春の彼は、合気道のような自然体に近い立ち方は一切見せず、常に腰を割った状態で
見事に相手を捌いて次々と勝ち星を挙げていった。
あれ以来、荒木はひたすら四股を踏んできた。腰高にならない状態で、なおかつ相撲において
柔道の技を生かす方法を模索するために。
押さば引け、引かば押せ。そんな柔道の極意を応用するため、彼は力のオンとオフを使い分けを目指す。
勝負が一瞬の相撲では、それを使いこなすのは無理だと思っていた。しかし相撲の腰の低さを
身につけた時、それは不可能では無かったのだ、彼にとっては。
腰を十分に割れば、どんな技でも一瞬で負けることは無い。脱力した状態ならなおさら倒れにくくなる。
ましてや彼の『削ぎ落す』メンタルの強さは、オンオフの判断をよ

り鋭敏なものにしていたのだ。
力強い笑みをたたえ、石高相撲部が小さくガッツポーズを作る。見たか、ウチの荒木の強さを！
部員全員がこの荒木の瞬発力を生かした投げを知っている、喰らっているからこそ、
それが味方であることに、頼もしさと誇りを感じながら。
―西、荒木君の勝ち―

土俵を降りる荒木を沙田が出迎える。拳で軽くハイタッチをした後、背中で語る荒木。
「お膳立てはしてやったぜ、国宝さんよ。」
「・・・プレッシャーかけてくれるじゃないの。」
お前がそんなタマかよ、と嘆いてすれ違う、石高内最大のライバルふたり。
試合を終えた荒木も、これから試合を迎える沙田も・・・共に笑っていた。

ふぅ、と息をついて桐仁が立ち上がる。眼鏡をはずし、三ツ橋に預ける。
「さて、出番か。」
結局こうなってしまった。というよりその予感はあった、沙田との一戦が個人の戦いではなく
大太刀と石神の雌雄を決する戦いになる事の。
不安はある。自分は２０秒以上戦えない欠陥力士、しかも今日の連戦でさらに時間は短くなっている。
そして対峙するのは国宝『三日月宗近』。自分に負けず劣らずのスピードと技のキレを持つ男。
そんな苦境を背負って土俵に上がる自分に、むしろ喜びと、血の滾りを感じていた。
「大一番、望むところ！」
暗い顔に、それでも笑みをたたえて、呼び出しを受ける。

―大将戦。東、辻君。西、沙田君！―

第１５番　鬼切安綱と三日月宗近

呼び出しを受け、東西から双方の大将が土俵に上がる。
その瞬間、会場が異様などよめきに包まれる。
千葉県内にいるただふたりの国宝、鬼切こと辻桐仁と、三日月こと沙田美月。
殺気をはらんで対峙する二人を、チームメイトが、ライバル達が、そして他県の偵察部隊が見守る。
そんな中、相撲雑誌記者の名塚に、カメラマンの宮崎が質問する。
「どっちが、勝つかな・・・？」
その質問に、彼女は残念そうな表情をして返す。
「さぁ・・でも、この一戦で負けた方は。もう『国宝』とは呼べなくなるわね。」
沙田は昨年、潮火ノ丸に二度、天王寺に一度敗北を喫している。そして今年の春は
大河内にも敗れ、全国でその名を馳せる事は出来なかった。
もしこれ以上黒星を喫するようなら、もう彼を『未来の横綱候補』と称する者はいないだろう。
桐仁は昨年の全国大会決勝、二陣戦で出場した。鮮やかな取り口で勝利はしたが、
同時に耐久力の無さという欠点をさらけ出してしまっていた。
弱点を抱える力士に横綱の夢を見る者はいない、桐仁がそれを克服しない限り、彼に国宝の名は
相応しくない。
「団体戦全国への切符、そして『国宝』の名を掛けた一番か・・・」
宮崎のカメラを握る手に力がこもる。

礼をして、両者が蹲踞の姿勢を取る。桐仁は沙田の殺気を受け止めながら、自分の体と会話し
己に残された『時間』を割り出していた。
「（１５秒は流石に無いか・・・）」

呼吸法を試した、インターバルも取った。それでも今日一日の連戦で、ベストコンディションで
土俵に上がる事は叶わなかった。
だがそれでいい。時間が少ないならそれだけ集中すればいいだけの事！
―手をついて―
沙田は対峙しながら、不思議な高揚感を感じていた。昨年と同じ舞台、そして惜敗した一番。
だが今年、今また自分はここにいる。昨年と同様、真剣勝負が出来る相手を目にして。
（つーか、昨日今日でやっと本気になった奴が、やり切った感出してんじゃねぇよ）
去年の敗戦後、市橋に言われた言葉を思い出す。そうだ、僕はまだまだやり切っていない。
国宝も後悔ももうどうでもいいじゃないか、この一番が、こういう瞬間が、相撲を続けていれば
必ずやって来る。
そのためにも勝つ！自分の『その先』の為にも・・・

「立ち合い、注目だぞ！」
川人高校の大河内が呟く。両者ともに組み際の技が非常に鋭い、立ち合った後先手を取るのは
果たしてどちらか・・・

―はっきよい！―
パァァン！
立ち合いと同時に、沙田の突っ張りが桐仁の顔を張る。続けて二発目―
「そうきたか！昨年の鬼丸戦でも見せ・・・」
大河内はそれ以上喋れなかった。桐仁は沙田の二発目の左張り手をなんと右手でつかみ取り、

その手を巻き込んでネジ伏せに行く―

「とったり!」

柴木山親方が拳を握り、叫ぶ。あの速い突っ張りを掴んだだけではなく、すぐさま投げに行くとは

なんという相撲セン・・・

親方の思考はそこで中断する。褒める間もなく沙田は右手で左手を掴み、取られた腕を両手の力で

無理矢理に引きはがす。返す刀で肩でカチ上げ、上体が起きた桐仁に沙田が襲い掛か・・・

パンッ!!

沙田の目の前が弾ける。なんと桐仁は猫だましを放ち、その轟音が会場内に木霊する。

瞬時、視界を奪われた沙田の懐に、桐仁が低空で滑り込み、右手で左足を払いにかかる。

「内無双!」

間宮が言葉にした時、既に沙田はそれを先手の蹴返しで防いでいた。そして一歩引き、腰を割って

上から体重をかける。

と、桐仁はのしかかられたまま後ろに下がる。つられて沙田の体が流れた瞬間、半身の体制を取る、

そして肩で相手の上半身を担いで後ろに反り返る!

「襷反りっ!」

蛍が叫ぶ。昨年の全国で國崎が大典太を仕留めた技!

が、沙田は素早く下半身を回し、桐仁にまたぐらを取らせない。桐仁を飛び越し、また正面に立つ。

すかさずぶちかましを放つ、体重で劣る桐仁は飛ばされながらも相手の両肩を掴み、

ひねって軸をずらし左にいなす。沙田もそれに追いつき、張り手で追撃!

会場の全員が息をのむ。これは本当に相撲の試合か?目まぐるし

く入れ替わる攻防に息つく暇もない。
目を離したスキに試合が終わりそうなハイスピードの攻防に、会場が釘付けとなる。
突っ張り、捻り、いなし、叩き、投げ、そしてまたぶちかまし。土俵の上で展開する高速バトルは
ある一つの条件の下に成り立っていた。
「・・・いつ組むんだよ。」
そう、二人はここまで全くマワシを掴んでいない。お互いに組むことがいかに危険か
よく理解していたから。
沙田のそのマワシはここまで純白のまま、誰にも触れる事は叶わなかった。その体さばきと
強烈なおっつけ、そして目視すら困難な出し投げの前に、対戦相手は土にまみれて行ったから。
辻桐仁と四つになること、それは彼と対峙するなら誰もが恐れる事だろう。組み際でさえ
あれほどの多彩な技を放つ相手、もしマワシを許したら次の瞬間何が来るか予想も出来ない。
沙田もまた、彼と組むことを警戒していた、組むなら決定的な瞬間、その一瞬で決める、と。

「ゼッ、ゼェッ・・・」
攻防の最中、桐仁の呼吸が荒くなっていく。今何秒経った、あと何秒動ける・・・？
体は徐々に水に浸かったように重くなり、呼吸を水圧が圧迫していく。それでも目の前の状況に合わせ
気持ちが体にムチをくれて動き続ける！
だが、土俵上は徐々に沙田の時間が増えていった。桐仁はいなしや躱しで凌いではいるが
目に見えて『攻め』の時間が失われていく、試合の流れは誰の目にも沙田に傾いている。

「辻センパーイ、ファイットお！」
「カントクー！気合い入れろーっ！」
「動きを止めるな！かき回せーっ!!」
悲鳴に近いダチ高の声援が響く。
「油断するなよ！」
「変わるぞ、じっくりいけ！」
「詰めを誤るなよーっ！」
勝利に確実に近づきつつある石高が、『その時』を待ちかねて声を出す。
桐仁が出した渾身のもろ手突きを沙田がいなし、体が泳いだ相手にタックルをかける。
そのまま一気に土俵際まで押し込まれる桐仁、俵に足が掛かり、少しだけ抵抗の力が増す。
だがこの時点で、もう彼の『時間』は完全に尽きていた。
立ち合いから２１．５７秒、強敵との攻防による集中力を頼りにここまできたが、既に彼は
頭の遥か上まで水に浸かっていた。
―２０秒動き続けるとな、『溺れる』んだ、息が出来ない―
動きを止めた桐仁は、俵に足が掛かったことでほんの少し前のめりになる。それは沙田の、
いや国宝『三日月』の前では致命傷となる体制であった。
「（ここだ！）」
沙田は決断する、今こそ決着をつける時、彼のマワシを僕だけが掴み、勝利の円を、月を描く時！
そう判断した時の沙田は速い。対戦相手には目視すら出来ない程の、高速の出し投げ―
―下弦之月、朧―
沙田の体が月輪を描く。その姿、その速さ、彼の必勝の動きに誰もが決着を確信する。
石高相撲部が拳を握って立ち上がりかける。
大太刀相撲部が表情を悲壮な色に曇らせる。

そして桐仁は・・・溺れながら・・・笑っていた。

「(・・・かかった)」

第16番　顔を上げ、前を向こう

―団体決勝戦の始まる一時間ほど前―

「うわ、マジ速いわ！」

「これが国宝『三日月』の出し投げ・・・」

ダチ高控室、千鶴子が録ってきた石高の試合をタブレットで鑑賞しながら、思わずため息を漏らす。

「技に入る前の動きや『崩し』も逸品だな、そりゃこんなの食らったら飛ぶしかねぇ。」

「マワシを引くのと投げの初動、ほぼ同時じゃねぇか！速いわけだ・・・」

画面に釘付けになる一年を見ながら、ため息を漏らす桐仁。分かってはいたことだが、

やはり奴には一年では歯が立ちそうにない、自分でも攻略の糸口すら見えてこないのだから。

右の『上弦之月』、左の『下弦之月』。それを気配すら感じさせずに繰り出す『朧（おぼろ）』―

ひとたびこの投げの体勢に入られたら、もはや対戦相手には成す術は無いだろう。

「でも、この投げ技って、マワシ掴めなかったら自滅しません？」

そう言ったのは足のケガで座って見ていた幸田だった。マワシを引くことを前提にほぼ決め打ちで

投げを打っているだけに、もし手がすっぽ抜けたら完全に背中を向けてしまう、

初心者の彼には、そんな欠点があるように見えた。

「いやいやいや、いくら何でもマワシ引けなかったら投げを止めるって。」

陽川が反論する。さすがに何も掴んでない状態で投げに行く間抜けはいないだろう。

周囲も、そりゃそうだ、と笑いが漏れる。

が、桐仁だけは、その弟子の意見を無視しなかった・・・。

―下弦之月、朧―

沙田の体が月輪を描く。その姿、その速さ、彼の必勝の動きに誰もが決着を確信する。

そう、誰よりも沙田自身が・・・

だが。その瞬間、沙田の全身に強烈なノイズ、つまり違和感が突き抜ける!

「(なんだ・・・?何かがおかしい、何かがいつもと違う!)」

何が違う?技に入る前の『崩し』は充分、腰のキレも、足の運びも完璧。あとは腕を返して

相手を投げる・・・

「(手の感触・・・これは、マワシじゃ、無い!?)」

ノイズの正体。沙田が左手で握っていたのは、否、『握らされて』いたのは、マワシでは無かった。

なんと対戦相手である桐仁の、固く締められた『手の平』だった!

桐仁のやったことは単純だった。崩されて出し投げを狙われる体勢になった、その時を見計らって、

自分の右の手の平を手刀に固め、出し投げの際に狙われそうなマワシの横ミツに添えただけ。

肩と二の腕で、沙田から見えないように隠しながら。

普通なら掴んで間もなくそれがマワシでは無いことに気付くだろう。しかし沙田の出し投げは

『間もなく』の間に投げ終えるほどの速度を持っている。

その速さこそがアダとなったのだ。桐仁の手を掴んだまま豪快に出し投げを打った沙田は、

相手を動かせぬままそのまま半回転し、無防備な背中を晒す。

会場の全員が、あんぐりと口を開け、声にならない声を上げる。

これが偶然ではなく、桐仁が狙って仕掛けた『罠』であることを、その光景が告げていたから。

「(かかったぁっ!!)」
桐仁が声にならない声を上げ、掴まれた掌を振りほどき、背中を向けた沙田に突撃する。
沙田は必死に振り向こうとする。が、遅い!背後とはいかなかったが、横からがっしりと食らいつく桐仁。
そして、その純白のマワシを、桐仁の両手がしっかりと、捕らえた
―
「捕まえたぁっ!」
蛍が、ダチ高相撲部が、応援に来ていた大太刀の生徒が一斉に沸く!
単にマワシを掴んだだけではない、沙田の横から、しかも腰が浮いた状態の沙田を捕まえたのだ。
乾坤一擲!相撲にとって絶対の体勢を作る事に、ついに成功した。
「うおおおおおっ!」
桐仁が寄る。寄りかかるようにして。
投げを打つ選択肢はない、もし投げをこらえられたら、せっかく掴んだマワシをまた離すことになる、
そうなれば二度とその機会は訪れないだろう。
ゴボゴボボォッ!
桐仁は溺れながら寄る、寄る、寄る!呼吸が出来ない?なら魚になるまでだ!
例え肺が破れようと、心臓が悲鳴を上げようと、この寄りだけは決めるっ!
土俵の端から端へ、二本のレールが航跡を引く。桐仁の勝利への電車道。
「行け行け行けーーーっ!」
「桐仁ーっ!」
ダチ高顧問の諸岡が、蛍が、一年生が、レイナや堀姉妹が、大声でその背中を押す。
彼の体力が限界を超えているのは皆分かっている。しかしそれでも、否、だからこそ

期待せずにはいられない、この執念が生んだ奇跡の勝利に！

「うわあああああーっ！」

「沙田あーッ！」

まさかのエースの絶体絶命の光景に悲鳴を上げる石高相撲部。横から食らいつかれたこの状態では

得意のおっつけも効果を成さない、腰が浮いている以上踏ん張る事すら出来ないのだ。

「（負ける、のか？また・・・）」

沙田は放心しながら、自分の弱さを噛みしめていた。潮君に負け、天王寺に負け、大河内に負け

今また負けようとしている、自分はそんなに弱かったというのか・・・？

―次やる時は、ビシッと決めろよ―

―石高がお前を強くしてやる―

―確かにお前が勝ってりゃ、俺達は全国に行けたのになぁ―

走馬灯のように響く、誰かの声。

そう、自分とは違う、骨太で豪胆な先輩の声。

彼に比べて自分は、何と線の細い事か。あの人なら土俵を割るその瞬間まで、決して諦めなど

しなかっただろう、それに比べて俺は・・・

「（諦めてどうするっ！）」

そうだ、不利な体勢になったくらいで諦めるな、あの人、金盛さんならどんな体勢でも

最後の最後まで足掻いたはずだ、俺は何を学んだんだ！

押されながら、沙田は相手の背中越しに左の上手を掴む。奇しくも金盛の声を思い出したがゆえに

トレースした。彼の得意な、昨年ダチ高の五条を破った『波離間投げ』の体制。

だが、まだ足りない。体勢不十分な上に、金盛ほどの腕力は沙田に

は無い。
それは決して意識してやったわけでも、稽古の賜物で身に着いた動きでは無かった。
沙田美月という人物の運動神経、センス、そして直感がその選択をする。
空いた右手を下から背中に回し、後ろマワシを掴む桐仁の右手を、その上から鷲掴みにする。
マワシを『切る』のではない、『放させない』為に。
「はあぁぁぁぁっ！」
沙田が吼え、左手で波離間投げを打つ。と同時に相手の右手を抑えたまま、投げと同じ反時計回りに
鋭く腰を切る。その腰の回転に、抑えられた桐仁の右腕が、その先の体が巻き込まれる―

「なっ!?」
桐仁は自分の手がマワシから放れない、その理由が分からなかった。
相手が無理な投げを仕掛けてきたのは分かっていた、対処は簡単だ、簡単なハズだった。
右手さえ、放せていれば。
回転する渦のような沙田の動きに巻きこまれる桐仁、勝利を目前にしたその気勢が、執念が、
限界を超えていた彼をして、土俵に踏みとどまらせる。
代償として、沙田の姿を、その掴んだマワシを失って―

朦朧とした桐仁に、沙田の『最後の投げ』が炸裂する。右の前みつを引き、左手で自重を
相手のマワシに乗せて。
―自手取り上手出し投げ『双月』―

ズシャアァッ！

目を伏せ、天を仰ぐダチ高相撲部。この瞬間、大太刀の2年連続優勝の夢は潰えた。

息も絶え絶えな桐仁を見下ろしながら、沙田はこう話す。

「欲を言うと、万全の君と戦ってみたかったね。」

もし彼がベストコンディションなら、あの波離間投げで窮地を脱せられただろうか。

いや、もし彼に肺の疾患が無かったら、立ち合いからの攻防は違ったものになっていただろうか。

歓喜で迎えられる沙田、酸素スプレーを当てがわれ、自陣に座り込む桐仁。

勝者と敗者の対照的な光景が、土俵の外にあった。

そんな流れの悪さを、午後の個人戦でも引きずる事になる。

桐仁は1回戦で柏実業の三嶺に相撲にもならずに敗れ、松本は3回戦で川人の大河内に敗退、

大峰は4回戦で陽川との同校対決に屈し、その陽川も準々決勝で沙田に負ける。

そして、蛍は何と、1回戦でいきなり石高の荒木と対戦する。

団体決勝カードの勝者同士の対決は、誰もの予想を裏切る決着だった。

なんと立ち合い、ぶちかましを仕掛ける蛍を、荒木が『変化』による叩き込みで落としたのだ。

呆気ない、そしてまさかの結末に呆然とする蛍。いつも自分がしてきた『変化』で

負けるという事がどういう事なのか、彼は初めて身をもって知る事になる。

沙田―間宮の同校対決の決勝で盛り上がる会場の隅、大太刀相撲部は失意の底にいた。

団体も個人も、今年は誰一人として全国にコマを進める事は叶わなかったのだから。

「ほらほら、みんな下を向かない！これから表彰式でしょ！」

レイナがぱんぱんと手を叩いて激励する。

「考えてもみなさい！あんた達はみんな来年もあるのよ、他は主力が卒業しちゃうんだから

来年はアンタ達の天下じゃない、しゃきっとしなさい！」

あ、と顔を上げる一同。そうだ、忘れていたが今のダチ高は全員が1．2年生、

それでここまで戦えたんだから、あと1年鍛え込めば、きっとその先に行けるハズだ。

「私もＯＢとして威張らせてもらうからね、『ダチ高は私が育てた！』って。

だから顔を上げて、前を向きなさい！」

「「はいっ！」」

諸岡は思う。五條君が部長で本当に良かった、と。

―団体準優勝、大太刀高校―

表彰式。蛍が賞状を、桐仁がトロフィーを受け取る。みんないい笑顔、やるべき事をやりつくし

さらに前を向く男の顔。

「かっこいいじゃん、みんな。」

「ええ。」

「ですねー。」

レイナが、千鶴子が、柚子香が彼らを見て呟く。今年はあと一歩だったが、来年はきっと

違う未来が、より良い光景がここにはあるだろう。

―大太刀高校の夏は、まだ終わらない―

第17番　柚子香の戦い

「うおーーっ、あの娘、めっちゃ美人だわ！」
「いやいやいや、あそこの3人組の真ん中見てみ、完璧なプロポーションだし。」
「僕はあっちの端にいる娘・・・可愛い。」
「みんなセンスないなぁ・・・あそこの娘見てみろよ。あの髪、あのうなじ、抜群だよ・・・」
県立体育館の2階席、鼻の下を伸ばしまくって眼下の花々を物色中の大太刀高校相撲部1年。
しかしそれもやむなき事、1階のコートにはレオタード姿の女子高生たちが数十人、所狭しと
あふれているのだから。
・・・まぁ、腰の部分にマワシが巻かれているのが、若干色気を落としてはいるが。
「何しに来たのよアンタ達は！」
レイナがとりあえず手近にいた幸田の頭をひっぱたく。
「・・・いやいや、もちろん応援はしますよ部長。」
折りたたんだ2ｍほどの手作りの横断幕を手にして陽川が反論する。他の4人もこくこく頷く。
相変わらず鼻の下の伸びた、ユルんだ顔で言っても説得力ゼロなんだが。
「(ったく、先週コイツらをちょっとでもカッコイイと思ったアタシがバカだった・・・)」
あれから一週間、インターハイ女子相撲の会場である体育館。そう、大太刀相撲部女子選手である
堀柚子香デビュー戦がついにやって来たのだ。
女子相撲は大会や会場によって室内、室外の両方のケースがある。
本日の千葉県予選は室内で
マットで作られた土俵で行われる。
また、試合用の女子のマワシはレオタードと一体化したものになっ

ている。加えて男子と違い
女子相撲は体重別で行われるため、太るどころかむしろ減量されて引き締まった体を包むその姿は
かくの如し桃源郷のような空間を作り出していたのだ。
「ちょっと!カントクもなんか言ってやんな・・・さい、よ・・・」
レイナの振りに気も止めず、桐仁はずっとタブレットで相撲の試合を凝視している。
こっちはこっちで相撲バカなんだから、と思いつつ覗き込むと、見ていた試合は
大相撲幕下で戦う鬼丸こと潮火ノ丸の1番だったりする。
眼下の百花繚乱に目もくれず、かつての相棒の相撲を凝視するその姿に、思わずレイナもちょっと引く。
「(こ、こいつ、ホモッ気とかあるんじゃないでしょうね・・・)」
「しかしなぁ・・・三ツ橋先輩、本当スゲェな。」
「ああ、俺、あの空間に1分いる自身ないわ・・・」
「ちょっと女顔だから違和感ないけどな」
件の三ツ橋はフロアの一角、大勢の女子の中に平然と混じって、弟子の柚子香にアドバイスなどしている。
横で救急箱を抱えてる千鶴子も、そんな三ツ橋を見て、はへー、という表情。
何しろフロアにいる男性と言えば大会役員の偉いさんと各校の顧問や監督くらいで、同じ年頃の
男子生徒は彼以外皆無なのに、全然気にする様子もない。
「三ツ橋君は中学時代、吹奏楽部の部長だったらしいからね、女子に慣れてるんだろう。」
顧問の諸岡の言葉に、ほぉ~、と納得の声を上げる一年生。
逆にレイナはその話を聞いて顔をひきつらせる。
「すっ、吹奏楽部の・・・部長!?マジで?」
ドン引きするレイナのリアクションを見て、頭にハテナマークを浮かべる一年の面々。
女3人寄ればかしましい、と言うが、30人も集まればもはやそん

な和やかなレベルではない。
派閥が乱立し、羨望や嫉妬やコンプレックス、果ては恋愛沙汰やその部活におけるカーストまで
ありとあらゆるカオス渦巻く空間になる事が、同じ女子のレイナには容易に想像がつく。
その中で部長・・・つまり、まとめ役を?あの三ツ橋が?
ふと桐仁をちらり、と見やるレイナ。彼は相変わらず一心不乱にタブレットを見つめている。
レイナの中で、あるひとつの懸案の答えが、そのとき出た気がした。

「いいかいゆず、君は試合に勝ちたいと思っているね。」
「はい!」
試合が近づき、蛍が柚子香に最後の激を飛ばし、柚子香もそれに答える。
「だけど、相手も同じことを思っている。じゃあ、どうすれば勝てる?」
「勝ちたい、じゃなくて『勝つ』と思う事です!」
「よし!じゃあ勝って来い!」
「はいっ!」
すっかり体育会系のノリの二人、この4か月ずっとマンツーマンで稽古してきた師弟。
最初こそレイナや千鶴子と稽古してきた柚子香だが、2週間もしないうちにその二人では
歯が立たなくなってしまっていた。
選手を目指す柚子香と、付き合いで稽古相手として相撲を取るレイナ&千鶴子とは
元々目的意識が違うのだから無理も無かったが。
それ以降は蛍がずっと柚子香の相手をしてきた。もちろん蛍は体操服の上にジャージを着込んで
女子の柚子香も遠慮なく取っ組み合えるようにしてはきたが。
元々運動神経のいい柚子香だったが、体格の違う蛍と相撲を取る事

で、彼女はめきめきと
腕を上げて行った。
ただ試合経験が無い不安はあった。体重別だけに同じ階級の選手との経験が無いのはハンデだ。
だがそれも今日埋まる。そのためにも1試合でも多く勝ち、経験を積む。それが来年、再来年の
柚子香をさらに強くするだろう。
―東、大太刀高校、堀！西、佐倉女子高、三木谷！―
呼び出しを受け、柚子香が土俵に向かう。ぱんぱんと顔を張り、気合を入れる。
と、その時、2階席の一角から声援が飛ぶ。
「「堀さーん、ファイットーっ」」
レイナと一年生の面々が、柚子香の名を書いた横断幕を広げて声を出す。
それを見た柚子香は薄い笑顔意を見せ、こくりと頷いて土俵に上がる。逆に姉の千鶴子は横断幕を見て
あわわ・・と真っ赤になって恥ずかしそうにおろおろしている、対照的な姉妹だ。
対戦相手は柚子香よりやや長身、体も少し大きい。このクラスでは体重制限ギリギリだろう。
彼女は柚子香に心の中で毒づく。
「(ふん、男はべらせて、そんな奴に負けるもんですか・・・)」
―手をついて―
向かい合う両者。女子と言えどこの瞬間の空気の緊張は変わらない、それが相撲。
―はっきよい！―
立つと同時に四つに組む両者。女子相撲はぶちかましが禁じ手なため、自然に組み合うことが多い。
相手はすかさず投げを打つ。が、柚子香は振り回されながらも体幹をブレさせず、腰を落として
体を残す。

そして相手が一息ついた瞬間、腰を左右に振ってマワシを切る、と同時に一気の寄り！

そのまま寄り切って決着をつけた。

―東、堀の勝ち！―

勝ち名乗りを受け、客席からの喝采を受けながら土俵から降りる柚子香。

千鶴子が、蛍が拍手で迎える。

「師匠、勝ちました！」

「うん、いい相撲だったよ、その調子！」

褒められて、てへっ、と舌を出して喜ぶ柚子香。

堀　柚子香

相撲初心者だった彼女は、まず相撲に必要な基礎知識から学ばなければならなかった。

受け身、礼儀から基本的なルール、力の入れ方、抜き方、腰の割り方等。

が、それらを習得した時、彼女はいともあっさり強くなっていた。

運動が得意な上

小回りの利くすばしっこさ、反射神経を持つ彼女に、相撲という一瞬の競技はぴたりハマった。

そんな彼女に師匠の蛍は、お手本として火ノ丸の相撲を学ばせた。

立ち合いと同時に

組むことが多い女子相撲において、彼の前さばきの上手さは大いに参考になった。

マワシを取る技術、切る技術、投げとそれに対する姿勢の取り方、重心のかけ方、足さばき。

自分の形を作り、相手の形にさせない。そんな基本にして必勝法ともいえる要素を

男子相手の稽古で十分に培ってきたのだ。

余談だが、それを教えた蛍もまた、その前さばきの上手さが自然に身についていた。

桐仁の目論んだ『教えることで身につく技術』の狙いはまさに的中

していたのだ。
彼女は勝ち進む。２回戦、３回戦、４回戦。
いずれも寄りや投げなど、奇をてらわない勝ち方ではあるが、それでもデビュー戦で早くも
４勝を挙げるに至ったのは大きな成果だ。
そして準々決勝、相手は昨年の県大会２位、九十九里高の池西と対戦。
柔道からの転向組である池西の崩し、揺さぶりに加え、ここまでの試合の疲労が堪えたのもあり
粘った末についに投げられ、土俵に転がる事になる。
「お疲れ様。」
涙ぐむ柚子香に、タオルを渡してそう労う蛍。そう、負けの味はいつも苦いもの。
蛍自身、それを嫌と言うほど味わってきたから、それ以上は何も言わない。
着替えを終え、会場を出てきた応援組と合流する３人。
その頃には柚子香もすっかり笑顔で、今日の成果を報告する。
「さて、部長から少し話があるそうだ」
そう諸岡が前置きし、レイナが３人の前に出る。何事かなと顔を見合わせる３人。
「来年の部長に三ツ橋蛍を指名します、よろしく頼むわね！」
そう言って蛍の肩を叩くレイナ、３年生として部活動の活動期間を終え、彼女は今日引退する。
そんな彼女と新部長の蛍に、周囲の部員たちが拍手する。
「えー!?一体いつの間にそういう話になったんですか?」
「今日決まったのよ。」
即答するレイナ。三ツ橋の物怖じしないあの態度は、きっとこれからの大太刀をさらに強くするだろう。
未だに固まる蛍の肩を、横から柚子香がぽんっ、と叩く。
「これからもご指導、ご教授お願いしますね、三ツ橋ぶ・ちょ・う。」

第１８番　秋合宿開始！

秋。大太刀高校の職員室にて、

「合同稽古？」

呼び出しを受けた新部長の三ツ橋蛍と桐仁、マネージャーの堀千鶴子に告げる諸岡顧問。

「うむ。しばらく大会は無いからね、モチベーションの維持のために企画しておいたんだ、」

そう言って１枚のプリントを３人に渡す。

「コピーして部員全員に配ってくれたまえ、親御さんの許可とハンコがいるから忘れないように。

そのプリントの頭にある文字を見て、思わず声を出す蛍。

「え、栄華大学付属高校・・・合同練習同意書!?」

「栄大かよオイ！」

思いもかけずテンションが上がる。今年のインターハイ全国ベスト４のチームとの合同練習ともなれば

今の大太刀にとって、自分たちの力を計るのにこの上ない相手だ。

と、プリントに目を走らせていた千鶴子が、その最下段の欄を見て硬直する。

〔参加予定　大太刀高校（千葉）：金沢北高校（石川）〕

「金沢北も来る!?凄ぇ！」

なんと今年のインターハイの団体、個人のダブル覇者である金沢北も参加するとは！

高校相撲の頂点と肌を合わせる機会とあっては、ダチ高にとってはこの上ないチャンスであろう。

「来週の連休を利用しての２泊３日の遠征になるから、是非参加しれくれたまえ。」

ぐっ、と親指を立てて得意げな諸岡。

とは言うもののこの合同稽古、実は栄大の方から申し込みがあったのだ。

県予選敗退のダチ高にわざわざ声が掛かった理由は分からないが、

まさに渡りに船と言うものだ。
来年春の大会まで部員のモチベーションを保たせるのに最適な遠征になるだろう。

部員たちの意気は大いに上がり、その日の練習はいつも以上に熱が入ったものとなった。
高校横綱、国宝『大典太』日景典馬、『異国からの聖剣』と称されるダニエル・ステファノフ、
小兵の国宝『小龍景光』狩谷俊、他にも世良や澤井など、全国に名を馳せる強豪力士と
相まみえる機会に心が逸る。
結局、堀姉妹を含めて部員全員が参加することになった。

秋合宿、その舞台となる埼玉県、栄華大学付属高校にダチ高部員を乗せたバスが到着する。
と、数人のジャージを着た大男達が整列し、彼らを出迎える。
「ようこそ、栄大付属へ！」
「「チューッス!!」」
彼らは栄大付属の一年生部員のようだ。松本や大峰、陽川には見知った顔も混じっている。
「滝沢、久々だなぁ、全国でも活躍したそうじゃないか！」
「お前らも全国まで来てりや借りを返せたんだがなぁ・・・」
「それを言うなって。」
昨年の全中横綱であり、春の新人戦で松本と決勝戦を戦った栄大のホープ滝沢。
彼はＩＨ全国でも団体の選手として活躍していた。
荷物を寝床でもある宿舎に搬入し、服を着替え、マワシを締めて部室に向かう。
「失礼します！」
部長の蛍を先頭に、敵地の中に歩みを進めるダチ高。と、その前にひときわ大きな体躯の男が

立ちはだかる。
「栄大相撲部主将の澤井だ、遠路はるばるようこそ。」
団体全国４位の主将、そして個人戦ベスト８の貫録を感じさせながらも、決して好意的ではない、
どちらかと言うと見下したような目線と口調でそう告げる。
「大太刀高校相撲部の三ツ橋です、どうかよろしく。」
一礼する蛍を見て、ふん、と息をつく澤井。
「・・・なんだお前、まだ相撲やってたのか。」
カチン！
その一言で場が、ダチ高側が固まる。いくら格下とはいえ、自分たちの部長をこうも
見下した目で見られるいわれはない。が、構わず続ける澤井。
「相撲ってのはデカくてナンボなんだよ。お前みたいなチビが相撲取ってケガするのは勝手だが
デカい方にその責任を取る義務はねぇんだぜ！」
ギリッ！と歯噛みして前に出ようとする陽川を、蛍は手を広げて制する。
「勿論ですよ、格闘技なんですから。やれるものならやって見せて下さいよ。」
一歩も引かずに蛍が返す。後輩の手前、ダチ高の部長としても引けない、引かない。
本当に怖いのはケガでは無いのだから。
「フン、まぁいい、歓迎するぜ。」
くるり、ときびすを返す澤井・・・が、そのまま固まる。
その先には、蛍に劣らぬ小兵の体躯の力士が、澤井をジト目で睨んでいた。
少し硬直した後、すまなさそうに振り返り、ダチ高に再び向き直る。
「あー、そうだ、そっちの、その三ツ橋と、あと辻だったな、それとそっちの小さい奴・・・」
途端に腰が低くなる澤井。申し訳なさそうに頭をぼりぼり掻きながら、こう付け足す。

「すまねぇが、コイツに胸を貸してやってくれねぇか・・・」
後ろ指に小兵の選手を差しながらそう続ける。無論、蛍も桐仁もそして幸田も、その選手を知っていた。
栄大の小さな国宝、狩谷俊。
２年生、そして僅か１６５ｃｍ７７ｋｇの体躯で栄大のレギュラーを勝ち取り、全国大会でも勝ち星を上げた
『小龍景光』。
「ま、そういうワケだ、よろしくな。」
手を上げてそう告げる狩谷。続いて澤井に毒を吐く。
「ったく、いちいち小兵に食ってかかるそのクセ直してくださいよ、機嫌損ねて帰られたら
どーするつもりだったんですか。」
彼はこの秋の国際相撲、つまり相撲の世界選手権、その軽量級に日本代表として参戦が決まっていた。
体重別なだけに、栄大の巨漢といくら稽古しても充分とは言えない。
そんな中、今年の各県予選を偵察に行っていたマネージャーから、似たような体躯を持つ選手のいる
チームの存在を知る、そう、大太刀高校である。
技の辻、変化の三ツ橋、ぶちかましの幸田。似た体格でありながら相撲スタイルの全く違うこの３人と
稽古することは、彼にとって貴重な調整になるだろう。
「なるほど、この合同稽古、大太刀が招待されるわけだ。」
いつの間にか背後にいる諸岡。世界大会の調整相手を当て込まれたわけだが、当然それは彼らにとっても
日本代表の選手と肌を合わせるよい経験になる。
と、桐仁がすっ、と遠慮がちに手を上げる。なんだ?と全員が彼に注目する。
「で、アンタ留年したのか?」
澤井に向かって一言。空気がぴしっ!と凍る音がした・・・気がした。

「するかよ！俺は大相撲に進むんだよ、だから入門まで部に残ってるんだ！」

考えてみれば彼はもう3年、普通ならとっくに引退してしかるべきなのに部にいる彼に、

桐人が『お返し』を見舞う。

「ハッハッハッ、リオンチャンハ成績優秀ナンデスヨ～」

同じく3年の『居残り組』のダニエルが笑いながら続ける。

「え・・・マジで？」

「生徒会長モヤッテマシタシネ～コウミエテ『ジンカクシャ』ナンデスヨ」

そのセリフに大太刀全員が引く。こんな生徒会長は嫌だ、ゼッタイ。

そんなリアクションに栄大の面々が笑う。狩谷も歯を見せ、きっしっし、と笑顔。

澤井だけが顔を真っ赤にしてダニエルを黙らせようとする。

険悪な空気はどこへやら、なんとか両校は、しばし和やかな空気に落ち着く。

が、部室に飛び込んできた1年生部員が、その空気を再度張り詰めさせる。

「金沢北、到着しました！」

びりっ！と張り詰める空気。ついに全国覇者の、そして高校横綱のお出ましである。

澤井も、ダニエルも、狩谷も、蛍も、ダチ高1年生たちも、そして桐仁も、

入り口のドアに注目する。

「お疲れさんでございます。」

長身を曲げ、ドアをくぐって現れた彼は、その上背に負けない筋肉を纏った体躯を伴い

道場に歩を進める。

国宝『大典太光世』日景典馬。

全国個人戦決勝で沙田を破った彼はダチ高にとって、まだ見ぬ最強

の相手。

第19番　自惚れと自虐

「・・・なっ!?」

高校横綱、日景典馬のすぐ後に現れた面々を見て、栄大の、ダチ高の面々の表情がさらに固まる。

瀬良拓海、狭間勝、岸谷祐樹、坂田徹、いずれも3年、そして・・・

「おいおい、今年のインターハイ制覇メンバー全員かよ!」

全日本選手権を控えた日景はまだしも、本来なら引退してしかるべき3年生が全員登場した!

「あー、折角のご招待なんで、全員連れて来たんすよ。」

典馬がけだるそうにそう説明する。

「ったく、受験勉強もあるってのに、しゃーねぇなぁ。」

「まぁまぁ、息抜き息抜き。」

「まぁ栄大に大太刀だろ、来る価値はあるってもんだ、なぁ典馬。」

最後にそう言った瀬良は、ダチ高の方を見てすかさず寄ってくる。

桐仁も蛍も1年もスルーして。

「また会えたねー、マネージャーちゃん♪」

そう言って速攻で千鶴子にすり寄る瀬良。場の緊張が一気にダダ下がる。

「マスク無しの素顔もやっぱいいねー、そっちは妹さん?うん、姉妹揃って美人だねぇ。」

「え・・・お姉ちゃん、知り合い?」

ぶんぶんと首を振る千鶴子。そう、あの時に彼と合ったのは謎のマスクガールであり、決して私じゃ・・・

ドゴッ!

典馬の突きが瀬良の後頭部を直撃する。もんどりうって豪快に倒れ込む瀬良。

「痛ってーな!ツッコミはもーちょい優しくやれよ!」

「場の空気読めよ、何しに来たんだお前は。」

「ナンパ。」

典馬の2発目の突きが今度こそ瀬良を黙らせた。

「きゅうじゅうきゅーう、ひゃあーくっ！」
アップ代わりの四股百回が振動と共に終了する。流石に栄大も金沢北もまだまだ余裕たっぷりそうだが
遠征疲れを考慮して少な目で四股は終わる。
「じゃあ、こっからは各自自由に練習してくれ。折角の合同稽古だし、どんどん他校の胸を借りる様に。」
栄大の三木監督がそう告げる。それなら、と各自相手を探し、ぶつかり稽古や申し合い稽古に移る。
蛍、幸田、そして桐仁の３人は早速、狩谷との稽古を開始した。
胸を合わせて感じたのは、やはりその速さと潜りの技術。あまり上背の無い幸田のぶちかましの
さらに下に潜る技術には舌を巻くものがあった。
「速いですねー、それに下に入ったら辻先輩でも敵わないなんて・・・」
柚子香がその技術を見て感心する、狩谷は女子に褒められて、ふふん、と得意げだ。
もっとも桐仁は全力で相手したわけではない。相手は世界大会を控えた身なれば、
どうしても目に映る、左ひざを覆う大き目のサポーター。
そしてもうひとつ。桐仁は彼とは別に、もう一人腕を試したい相手がいたからだ。
一日に何番も真剣勝負のできない身としては、あの相手と戦う体力は取っておきたい、
鉄砲柱にいい音を響かせる日景の方をちら、と見やる。
「その左ヒザ、大丈夫ですか?」
蛍の質問に、狩谷は上機嫌で大丈夫大丈夫、と答える。が、やはり多少引きずってる感じがある。
あまり無理をさせないほうがいいだろう、と判断した蛍は、『潜る相撲』のコツやトレーニング方法を
色々聞きだしてみた。
「正中線を意識して体を固めてみ、かなりの重さにも耐えられると思

うぜ。
バーベル担いでスクワットとか意識してやってみな・・・って敵にナニ教えてんだよ俺！」
我に返るタイミングを見計らって柚子香がまた狩谷を褒める。そしてまた上機嫌になり
事細かに解説を、実践を交えて指導する。うん、ちょろいな小龍景光。
「よーし、そろそろ仕上げに行くぞ。」
三木監督が全員にそう告げ、汗をかいた全員がその言葉に注目する。
「試合形式でひとり一番、相手は各々自由に選べ！」
その言葉にざわつく道場。と、誰よりも早く、桐仁が手を上げる。
「日景さん、お相手願います。」
栄大とダチ高の強者が『出遅れた』という表情をする。高校横綱との真剣勝負、そのイス取りゲームに
先をこされてしまった、と。
指名を受けた典馬は、桐仁を見た後、少し視線を逸らす。その先にいたのは意外にも、
マネージャーの堀千鶴子だった。それも一瞬で、すぐ視線を桐仁に戻し、返す。
「ああ、いいよ。ただし手加減は出来ないから覚悟しなよ。」
腕をみしり、と軋ませ凄む典馬を見て、桐仁はにやり、と笑う。
「（ありがてぇ、高校横綱の真剣（マジ）、俺が切って落とす！）」
「手をついて」
行司を務める諸岡顧問の声の元、向かい合う二人。片手をつく典馬に対し、桐仁はぐぐっ、と
這いつくばるような仕切りを見せる。
「平蜘蛛！」
「やべぇ、辻先輩マジ入ってる・・・」
本日の練習締めの最初の大一番に室内の緊張が高まる。
―はっきよい！―

低い位置から当たる桐仁に対し、典馬はもろ手で相手を起こしにかかる。その剛腕は
軽量の桐仁の上体を一気に起こし、そのまま土俵際まで突き飛ばす。
だが、それも桐仁にとっては織り込み済みだ。
一度距離が離れた両者。この間合いは突き押しの日景の間合いだ、と誰もが思うだろう。
現に間髪入れず、典馬の突きが次々と桐仁に襲い掛かる。
「閃光!」
日景典馬の高速連打。昨年のよりも遥かに速く、重い。彼の、そして金沢北の躍進を支えた技。
―パン!パンッ!パシィッ!―
「捌いてる・・・!?」
栄大と北高のメンツから驚愕の声が上がる。桐仁は典馬の突きをその両手で捌き、弾き、身をかわす。
さすがに全部はかわせないが、その場合も体の芯を外してこらえるダチ高のエース。
「信じられねぇ・・・アレを捌くか!」
「石神の沙田以外に捌けるヤツがいるってのか、ったく千葉の国宝は・・・」
その強烈さに辟易しながらも、桐仁は予想通りの展開にほくそ笑む。
「(さぁ、じれて全力の一撃を打ってこい!それを捌いて一気に捕まえる!)」
典馬の左を捌いて、次の右の本気度を推し量る。来る、これは牽制の突きじゃない、ここだ!
そう思ったその瞬間、捌いたはずの典馬の左手が桐仁の右手を掴む。
「・・・な!?」
次の瞬間、典馬は掴んだ右手ごと桐仁を引き寄せる。それと交差するように典馬の右突っ張りが!

「（・・・マズ）」
―ドゴォッ!!!―
顔面に直撃したその一撃が、桐仁の脳と体の接続を分断する。するり、と崩れ落ち、ヒザを付く。
「しょ、勝負あり！」
室内が凍り付く。なんだ今のは？
相手の腕を掴み、自分の方に連れ込みつつカウンターの突き。相手を押し出す為の突きではない、
ダメージを与え、ノックアウトするための大砲！
相撲部員であるここの全員が、あの技を自分が食らったら、と想像して冷や汗を流す。
「出たな、『雷神の槌』」
瀬良がしみじみ呟く。典馬はインターハイ個人戦決勝で、『三日月』こと沙田に、その突っ張りを
ことごとくいなされ、あわやの窮地まで陥った。
その反省から生み出された技。昨年の団体全国覇者であるダチ高の五條佑真が使っていた
『掛け突き、破城掌』とほぼ同じ原理のカウンター攻撃。違うのは腕を引きつけられているので
食らう瞬間に体を逃がせない、つまりまともに食らうしかないのだ、『大典太』のパワーを。
「早く手当てしてやんな。」
そう千鶴子に向かって言う典馬。この技を使うのは少々ためらわれたが、昨年苦汁をなめた
大太刀の選手であること、そして手当てができるマネージャーがいたことが、彼にこの技を解禁させた。
「悪いな、俺は大相撲の横綱になるんだよ、負けるわけにはいかないのさ。」
担ぎ出される桐仁にそう呟く典馬。その声を朧げに聞きながら、酸素スプレー吸入口の下で、嘆く。
「（思い上がって、いた。）」

彼と典馬の差、それは何より目的意識の違い。自分は火ノ丸を追い続けて相撲を取っていた、
いつかアイツと大相撲の舞台で戦うために。
だが天馬は違ったのだ。より高みの、誰もが憧れ誰もが届かない、そんな領域に本気で達するために。
高校横綱になったにもかかわらず、沙田に苦戦した自分を許さず、即その対策を身につける、
そんなストイックな面が自分には無かった。２０秒だけなら誰にも負けない、そんな自惚れに溺れ
将来の横綱候補『国宝』の前に立った結果がコレだった。
「(こんな事ならあの時、火ノ丸と送別相撲取っときゃ・・・)」

未だざわつく道場内、次の一番に名乗りを上げる者が出ない。と、その時。
「澤井さん、一番願います。」
その蛍の言葉に全員がどよめく。たった今自分のチームメイトがＫＯされたというのに、
軽量の三ツ橋が、よりによって重量級の強豪である澤井との一番を望んだのだから。
澤井はふぅっ、と息をつき、体をゆすって三ツ橋の前に出る。
「いい度胸してるな、大ケガしても知らんぜ。」
ぱんぱんとマワシを叩く澤井に、蛍は正面から返す。
「そう言ったはずです、望むところですよ！」
蛍が澤井を選んだ理由。それはもちろん無残に敗れた桐仁に代わって、ダチ高の意気を上げたい
という意図もあった。
だが一番の理由はそこでは無い。彼が本当に恐れるのは、決してケガでは無いのだ。
それは未だ自分の心の芯に刺さった棘、相撲を続けても、止めてしまっても、
決して消せない『汚点』という黒いシミ。

「互いに礼」
今後いつまで引きずるのだろう、後悔するのだろう、あの瞬間を。
―同体、取り直し―
―西、首藤君の勝ち―
ついにチームの為に、たったの1勝も挙げられなかった自分。
何一つ役に立たなかった、ひたすら足を引っ張り続けた。負傷した
自分に変わって決勝に出た桐仁は
きっちり勝利してチームに貢献した、それがなおさら心をえぐる。
かつて桐仁が倒した相手であり、首藤に負けない体躯の持ち主、澤
井。だが彼に勝ってもこの棘は
抜けることは無いだろう。
それでも蛍は挑む。弱かった自分が積み重ね続けた『恥』という、何
よりも怖い、辛い相手に。
「手をついて」
「(コイツ・・・)」
澤井は正面から自分を見据える三ツ橋の目を見て、既視感を感じて
いた。
らんらんと光るその目の奥に浮かぶ暗い負の感情。かつて自分が
敗北を喫した、あの選手と同じ目。
あの時を思い出し、心にあるスイッチが入る。変化は・・・無い!
―はっきよい―
澤井が立つ、蛍が突っ込む。バチィッ!激突音が道場に響く。
次の瞬間、蛍は澤井の正面から消え、横っ飛びに円を描く。思わず
叫ぶ柚子香。
「蛍火の如く!」
かつて市橋と対戦した時、この技で後ろに回り込もうとした際、体
に触れる感触でその動きを悟られた。
その反省から、この技の一つのバリエーションとして、当たった直
後に横っ飛びで一度距離を開ける
という選択肢を増やす。立ち合いの緊張を一度いなし、リスタート
から上に下にと選択肢を増やすために。

が、そこで勝負は終わる。
目標を見失った澤井は、そのままばったりと両手を地面についていた。呆気ない幕切れに道場からため息。
蛍も消化不良を感じ、澤井に声をかける。
「取り直します?」
「いや・・・いい。負けは負けだ。」
そう言って引き上げる澤井。蛍はその表情に、態度に、違和感を感じられずにはいられなかった。

第２０番　栄大名物

「ほら、しっかり食えよチビ共。」
そう言って蛍、桐仁、幸田、そして狩谷の前に大量の飯が入ったドンブリを配る澤井。
「ちょ、ちょっと主将、オレ減量あるんですけど！」
「まぁ今日くらいいいじゃねぇか。」
珍しく笑顔の澤井、狩谷の抗議はさらっと受け流された。

稽古終了後、着替えた遠征組は栄大の一年生に収集をかけられた。
「2軍の道場でちゃんこ用意出来てますよー」
というわけで行ってみると、先ほどの道場の倍以上ある別道場に、大量の机と鍋、
そして食材が所狭しと並んでいる。
自分たちが稽古してる間も、栄大の2軍以下の生徒が用意してくれていたらしい。
で、席に座るなり、主将の澤井の指示で蛍達の前に大量の食材がよそわれたわけである。
小食の桐仁と幸田はうげ、と言う表情をするが、蛍だけはご苦労様と一年を労う。
全員の頂きます、の唱和と共にす早速ちゃんこに取り掛かる面々。
松本と大峰は栄大の滝沢と早くも食べ比べに入っており、陽川は日景典馬の正面に座り
明日俺と一番願いますとドンブリ片手に頼み込む。
顧問の諸岡と栄大の三木監督は上座に座り、なにやら相談しながら堀姉妹に指示している。
「なんだ、結構食えんじゃねぇか、三ツ橋。」
「折角の栄大のご飯ですからね、強さごと頂いていくつもりですよ。」
早くもダウン気味な桐仁たちの横で、向かい合って食べながら話す蛍と澤井。
「フン、言うじゃねぇか。無理して腹壊すなよ。」

そんな澤井の隣で、ダニエルが笑顔で狩谷に話す。
「ホント、リオンチャンハ栄大ノ、イヤ日本ノ顔デスネ～」
なんだそりゃ、という表情で返す狩谷に、ダニエルが耳打ちする。
「アーユーノヲ日本文化デ『ツンデレ』ッテイウンデショ？」
ぶふぅっ！と吹き出す狩谷を見て、澤井が『？』という顔をする、
またしょーもない事言ってんな、と。
「今日の一番だがな。」
澤井が蛍に切り出す。蛍も気になっていたのか、箸を止めて聞きに入る。
「ワザと落ちたワケでも、調子が悪かったワケでもねぇよ。」
「え？じゃあ、何であの程度で落ちたんですか？」
澤井の実力は蛍も知っていた。昨年の団体決勝、桐仁に立ち合いからの『とったり』を仕掛けられ
それでも土俵に踏みとどまった粘り腰を見ていた蛍にとって、今日の澤井の負け方は
腑に落ちないものがあった。
「お前の目を見てな、思い出しちまったんだ、嫌な事をな。」
ふぅ、とため息をついて箸を置く澤井。蛍の目を見て続ける。
「俺はな、立ち合いの時には必ず相手の目を見るようにしてる。それで大体、相手の手口も見えるしな。」
そのセリフに、はっとする蛍。自分が身につけている『目線の誘導』に対する読みを持っていると？
だがだとしたら、ますます今日の対戦で彼が落ちた理由が分からない。
「今年のインターハイ、お前と同じ目をした奴に負けてな・・・ソイツがそれまでも、俺との一番も
絶対に引かない相撲を取る奴だったんで、ついお前にも当てはめちまったのさ。」
「そう、だったんですか・・・」
「なぁお前、何で相撲を取ってるんだ？」
「いけませんか？」

聞きようによっては失礼な質問に、真剣な表情で返す蛍。
「あ、貶したワケじゃねぇ。ただお前とアイツじゃ相撲が違いすぎるからな、なのに目の光だけはそっくりだったからな。」
今一つ容量を得ない澤井の言葉に首をかしげる。
「なんっつーか、同じ『何か』を思って相撲を取ってる、そういう目をしてたよ。」
澤井理音
栄大相撲部の主将にして、昨年以上に『ハズレ年』だった今年のチームを団体ベスト４まで引っ張っていった男。
彼は相手の目から、意識や感情を読み取る事に長けていた。怖気ている相手には押し、暑苦しい目をしてる奴には気合を、スカした目の奴には変化に対する警戒をする。
相撲に必要不可欠な、目は口程に物を言うを実践する眼力を持っていたのだ。
「アイツの目は、何もかも投げ出して叩きつけるような怖さがあった。引くなんて微塵も考えないような・・・」
「それって、立花寺の黒田の事っすか?」
割って入った狩谷に、こくりと頷く澤井。
「アイツの目とお前の目がそっくりだったのは確かだ。だが相撲は正反対、俺の眼力も鈍ったかな?」
頭を振って飯に戻る澤井。
蛍はその名を心に記憶した。『立花寺、黒田』

「えー、さて皆様、これより我が栄大相撲部名物の『初っ切り』を行います。どうぞ食べながらご鑑賞ください」
三木監督がマイクを掴んでそうアナウンスする。

「初っ切り?」
「相撲版の漫才っていうか、パントマイムみたいなもんさ。相撲の反則手を面白おかしく
演じてくれるよ。」
幸田の疑問に桐仁が答える。そんな事もやってるのかと感心する蛍に、刈谷がこう返す。
「ウチは大相撲に行く奴多いからな。巡業とかでもやらなきゃいけない時もあるし。」
なるほど、角界入りに備えた予行演習も兼ねてるわけだ。
行司が土俵に上がり、続いて栄大生と思われる一人が続く。珍しく痩せ型で気弱そうな顔に
チョンマゲのカツラを被って。
「東方、和空　無伊（わから　ない）君、栄大付属一年」
三木監督のアナウンスに応え、ぺこぺこ頭を下げる和空。しかし、偽名だろうけど・・・酷い名前だ。
「西方、親方マークⅡ、栄大科学科、および美術科協力。」
と、道場のドアが開き、一人の力士が入ってくる・・・力士?
「「ぶーーーーっ!」」
大勢が一斉に噴き出す。部屋に入ってきたのは相撲取りの格好をしたロボットだ。いや中に人は
入ってるんだろうけど、鋲やネジで打ち付けられた鉄板に身を包んだそのメカメカしい体を
いかにもがっしゃんがっしゃん動かして入場してくるもんだから・・・場内大爆笑である。
「おい!栄大!!」
金沢北の誰かからツッコミが入るのをスルーして、土俵に上がる親方マークⅡ.
コーホーコーホー息しながら蹲踞（そんきょ）とか仕切りの度に体から
『プシュー』と煙が舞う様が一層笑いを掻き立てる。
内容もかなりめちゃくちゃだった。和空が無駄に塩を撒けば、親方

マークⅡは塩をカゴごと取り
風呂よろしくかけ湯ならぬ『かけ塩』をして「サビルー・サビルー」とのたうつわ、
和空がドロップキックを浴びせれば、お返しとばかりに親方マークⅡがロケットパンチを飛ばすわ
行司から奪った軍配と体から生やしたビームサーベルでチャンバラを始めるわ、
その度に行司が「それは反則」と取り直しをさせ続け、決着がつかない事に業を煮やした二人が
行司にツープラトンを仕掛けるわ、お返しとばかりに行司が天井から下がるヒモを引けば、
二人の頭上に金ダライが落下するわ、少し遅れて行司にも落下するわでもう滅茶苦茶である、
こんな相撲があるか！
やがて疲れ果てた３人が土俵に座り込むと、下から何故か料亭の仲居さんの格好をした
女性が膳を抱えて上がってくる。
「ぶっ!!」
大太刀の生徒全員が噴き出す。堀姉妹・・・いつのまに！
で、そのまま土俵の上で食事まで始める３人。千鶴子と柚子香はお酌までしてるし・・・。
んで行司が杯（中身は多分水）をあおるや否や、大きな声でこう告げる。
「土俵は～女人禁制ではありますが～特別な恩情を持って～」
柚子香が頭に血管をぴき！と浮かび上がらせ、もろ手突きで行事を突き落とす。
「そっちかいっ!!」
ついでに和空と親方マークⅡも土俵外にぶん投げる千鶴子と柚子香。
「ナイスツッコミ！」
「マネージャーちゃ～ん、かっこいー！」

拍手と歓声に包まれる堀姉妹。柚子香が笑顔でダブルピースなのに対し、千鶴子は顔を抑えて真っ赤、
本当に対照的な姉妹である。

「特別参加の金星（美人）ふたりに、盛大な拍手を～」
木拍子と共に一礼して、土俵から降りる５人。親方は最後までがっしゃんがっしゃん動いて退場する。

こうして合宿初日の夜は更けていった。

夜、蛍は宿舎のザコ寝部屋から起き出し、外にあった自販機コーナーに向かう。
そこには先客がいた。
「あれ・・・ゆず。」
「あ、師匠・・・いや部長。どうしたんです?こんな時間に。」
「うん、ちょっと調べ物があってね。部屋だとみんなが眠れないといけないから・・・ゆずは?」
スマホをかざす蛍に、少し照れながら柚子香が返す。
「なんか初っ切りやったせいか、興奮して眠れなくて。お姉ちゃんは頭から布団かぶってうめいてましたけど・・・」
「あはは・・・マネージャーらしいね。」
二人でオレンジジュースを飲みながら、スマホで検索する、昼間に聞いたその名を。
―立花寺　黒田―
福岡県の相撲強豪、立花寺高校。今年のインターハイ団体準優勝。
大将の黒田篤(くろだ　あつし)。２年、１７４ｃｍ１０２ｋｇ。個人戦３位。
「うわ・・・血まみれじゃないですか。」
対戦の動画を見てゆずが呟く。黒田の額は傷だらけで、立ち合いの度に頭は割れ

その顔を鮮血に染めていた。それでも引き技や投げはおろか、立ち合い胸で受ける事すらしない、
ただひたすらに頭からぶちかましを仕掛ける。
まるで自らを痛めつけるように、罰するように。
「なんかもう、痛々しいですね。あ、でも確かにこの人、部長に似てるかも・・・」
「そう?例えば?」
「・・・言っちゃって、いいんですか?」
え?という顔をする蛍。しばし間を開け、柚子香が口を開く。
「なんていうか、後悔を抱えて相撲取ってるように、見えます。」
その言葉に目を丸くする蛍。自分の弟子にそこまで見抜かれていたことに少し心が冷える。
そう、自分には消せない後悔がある。どれだけ戦っても、勝っても、決して拭えない
『記録』と言う非情な事実。
そんな過去を彼、黒田も持っているのだろうか・・・
そう思った時、蛍に閃きが走る。そう、ある、思い当たる事が!
スマホを取り出し、検索に再入力をする。
―高校相撲　インターハイ　昨年―
立花寺高校、団体ベスト4、準決勝で栄大に5―0で敗退。大将、黒田。
「あ・・・」
蛍は理解する。黒田と自分が持つ同じ『感情』。その正体を。
彼も『黒い汚点』を持っていたのだ。下手をすると蛍よりも屈辱的なものを。
いくら努力しても、いくら勝ち星を重ねても、決して消えない恥と言う事実。
ましてや彼は九州男児、強敵と相対するのは誇りであり、畏怖や萎縮などもっての他だろう。
栄大―立花寺、大将戦決まり手、『睨み出し』。
どれだけ蔑まれたのだろうか、どれほど後悔したのだろうか、あの

一番を。
相撲部の汚点、立花寺の恥晒し、戦わずして負け犬になった男、そんな中傷から無縁では
いられなかっただろう。
なるほど、彼はもう決して下がらないだろう、横に体を躱すことも無いだろう。
今年の個人戦の準決勝、彼は石高の沙田に出し投げを食らい、土俵の外まで飛んで頭から地面に落ちた。
それでも彼は血まみれの顔を歪めることもなく、整然と土俵を後にした。下がらずに相撲を取ったから。
彼にとって『下がる』事は、自分の傷口をえぐる行為に等しいから

―

蛍はスマホを仕舞い、満天の星空を見上げて、こう呟いた。
「会ってみたいな、いつか。」
彼が黒田と会うのは、もう少し先になる。

―二振りの国宝、『蛍丸』と『圧切長谷部』として―

第21番　収穫を胸に

「さて、手前みそで恐縮ですが、稽古の前にひとつ朗報があります。」
合宿二日目朝、栄大付属の三木監督が皆を前にしてそう切り出す。
「わが校のダニエル・ステファノフ君、および澤井理音君が正式に大相撲、大和国部屋に
入門が決まりました。」
おお～と言う声の後に拍手が起こる。元横綱の大和国といえば、この世代で相撲を取る者の
憧れの的の存在だ。栄大付属は昨年その大和国の息子、久世草介がいた事もあり、
部屋との親交も深かったこともある。
が、澤井はともかくダニエルの方は決定が遅れていた。現在、各相撲部屋に外国人力士は
1名しか所属できない。大和国部屋への希望者はダニエルの他にもうひとり競合していたのだ。
その選手が三笠部屋からの誘いを受け、そちらを選んだことによって、ダニエルの入門が
内定したのだ。
「今、この道場にいる者の中には当然、角界入りを目指してる者もいるだろう。将来のライバルの
顔を覚えていてくれたまえ。名勝負を楽しみにしているよ。」
日景典馬が、道場にいる幾人かの強者が、そしてダチ高の陽川がこくり、と頷く。
栄大、金沢北の名門2校と昨年全国優勝の大太刀。この中から将来、国技館を沸かせる者が出る
可能性は大いにあるだろう。
その日の稽古も大いに熱が入ったものとなった。陽川は典馬に何度も申し合いを挑み、
何番かは勝って見せた。稽古なので典馬も無茶な抵抗こそしな

かったが、終わった後の
典馬の「いい稽古になったよ、礼を言うぜ」の言葉が、陽川の実力と成長を正しく評価していた。
蛍はこの日、栄大2軍に交じってハズ押しや申し合いに終始する。まだまだ体格的に不安な蛍が
変化を使わずに重量級に対抗する膂力を養うために番数を多くとる。正面から戦えるようになれば
変化もよりその効果を増すからだ。
松本、大峰、幸田の3人は桐仁の指導の元、栄大や北高の上位陣と汗を流す。全国覇者や上位との
稽古は確実に彼らの血肉になっていくだろう。
で、柚子香はというと、三木監督が紹介してくれた栄大付属の女子レスリング部の練習に
混ぜて貰っていた。相撲とレスリングの違いはあるものの、格闘技女子との取っ組み合いは
貴重な体験だ。
ちなみに姉の千鶴子ももっぱら同じ体育館で妹を見守っていた。さすがに自分以外全員男子の
相撲道場で残っているのはキツかったらしい。
男子の2軍道場で蛍を見ていた諸岡は、ふむ、と考え込む。
「(そろそろ三ツ橋君に『アレ』を教える時期かな・・・)」
諸岡は蛍にレスリングのテクニックの一つである『目線の誘導』を教えていた。
だがそれはレスラーにとっては基本のテクニックでしかない。元国際強化選手だった諸岡には
その先の技がいくつかあるのだ。
ひと息ついた蛍を諸岡が呼ぶ。
「いいかい三ツ橋君。番数を多く取るのもいいが、一番一番が雑になってはいけない。」
「え?・・・いえ、雑に取ったつもりは・・・」
「そうかな、格闘技である以上、相手があってのことだ。誰に対しても

同じように当たってはいけないよ。」
　蛍にはまだその意味が分からない。ちゃんと重量級や長身の選手、小柄な選手と組み方や力の入れ方
　使う変化技などを使い分けてはいるつもりだが・・・
「相撲に限らず、格闘技は『心』『技』『体』が重要だ、それは分かるね。」
「はい。」
「でも君は相手に対する時、『技』と『体』しか見ていない、違うかい？」
　その諸岡の言葉にしばし考える蛍。確かに、体格や取り口は意識しているが・・・
「『心』・・・相手の心理を読め、と？」
「その通り。」
　笑顔で頷き、親指をぐっ、と立てる諸岡。
「相手をよく観察する癖を付けたまえ。相手を見、自分をよく理解すれば、相対する者が
　何を思っているか読めるようになる、そうなればしめたもんさ。」
「は、はぁ・・・あ！」
　内心『そんな無茶な』とか思い、生返事をする蛍。が、次の瞬間その頭に昨夜聞いた言葉が蘇る。。
　―俺はな、立ち合いの時には必ず相手の目を見るようにしてる。それで大体、相手の手口も見えるしな―
　澤井が昨日語った、相手の目を見て心理を洞察する眼力。だがそれはどう考えても天性のものだろう、
　そう話す蛍に諸岡は返す。
「何も目を見るだけじゃないよ、相手の置かれている状況、直前の取組、疲労度、その一番の重要性、
　ヒントはいたる所に転がっているもんさ、それを読むんだ。」
　蛍は今、自分の前にいる人物が只者ではないことを改めて認識する。格闘技経験者の諸岡顧問は
　現役時にはそこまで考えて戦っていたのか、と。
　稽古に戻った蛍は早速、その教えを実行にかかる。

前の取組で引きや出し投げに落ちた選手はどうしても腰が引ける、そんな選手なら蛍でも
電車道で押し出せた。
投げを決めた選手は、その感覚をモノにしようと次の一番も投げを狙ってくる、マワシにこだわって
自分の形になるまで攻めてこない。それでは投げのタイミングを予告してるようなものだ。
寄りで勝った選手は疲労を感じながらも、自分の寄りへの自信が過信へと変わりやすく、
万全の姿勢でもないのに寄ってくるのでいなし技に落ちやすい。
確かに『見れば』見るほど、そこらじゅうに攻略のヒントが転がっている
蛍はこの日の後半の申し合いで、栄大2軍相手にその技を着々と身につけていった。

それぞれが充実した時間を過ごし、この日の稽古も終了する。
2日目のちゃんこ時の出し物は、相撲甚句に名を借りたカラオケ大会になった。
特に柚子香に稽古をつけてくれた栄大女子たちが大いにはっちゃけて場を盛り上げる。
普段女子に縁のない相撲部員たちが大いに楽しむ中、チッくだらないと不機嫌だった典馬は
高校横綱という事でトリに指名され時代劇の主題歌を披露、意外な上手さに感心する一同。
ちなみに隠れ音痴の柚子香とか、歌自体まったく歌えない桐仁が少々恥ずかしい思いをしたことを
付け加えておこう。

こうして合宿は幕を閉じる、3日目の早朝から金沢北、そして大太刀のバスが帰路に就く。
ライバル達の再会を誓い、また先に進む者たちの躍進を祈って別れ

を惜しむ。
次に会う時、それは彼らと雌雄を決する時になるだろう。
帰りのバスの中、先頭に座る桐仁は立ち上がって皆の方を振り返る。
「みんな、聞いてくれ。」
ひと息置いて、こう続ける。
「いけるぞ。」
それだけ言って着席する桐仁。一同がくっ、と体を傾ける。
「短っ！」
「相変わらず言葉足りなすぎ！」
「そんなんだから歌もアレなんですよっ」
ツッコみながらも、大太刀部員達はその意味を正しく理解していた。
全国の頂点達と肌を合わせた2日間、もちろん相手も全力で戦った保証はない。
それでも今のダチ高にとって、決して勝ちえない相手ではない、そのことを確信として感じていた。
それは来年の、大太刀の全国での大暴れを予感させるものであった。
蛍もまた、多数の収穫を胸に帰路を行く。
狩谷から習った潜る相撲、諸岡に教わった『心』の制し方、まだ見ぬ強敵の情報。

―そして秋が去り、冬が訪れる―

第２２番　滅入って苦しみます

「ふんふん、ふふ～ん♪」

ご機嫌で渡り廊下を歩く五條礼奈。本日１２月２４日、彼女は相撲部内のクリスマスパーティに
招待されていた。
受験勉強漬けの毎日のつかの間の癒しに、と三ツ橋や桐仁に誘われ、これを承諾。
もともと学年トップクラスの成績であるレイナは、既に第一志望である栄華大学も
模試において合格判定Ａを叩き出しており、余裕もあった。
「にしても、しょうがない連中よね～、クリスマスイブくらい彼女とデートでもしろっての。」
ふふん、と笑い、改めて相撲部の面々を思う。
「（ま、相撲部じゃモテないのもしょうがないか、ここはひとつ元部長の私が、パーティに
花を添えてあげるとしましょう、感謝なさい。）」
そう思って部室の前に立ち、ドアを開ける。
・・・笑顔のまま顔が引きつり、硬直するレイナ。
部室内はまるで葬式の陣幕のように、白と黒の色に２分されていた、ように見えた。
部屋の半分を占拠しているのは、美味しそうに煮えた鍋やチキン、ケーキが満載されたテーブルに
天井から下がるモールや紙テープの飾りつけ、隅にはしっかりツリーもある。
が、そんな華やかな机に座っているのは大半がレスリング部の連中で、相撲部でそこに居るのは大峰と
堀ちゃんの二人だけ。
部室の反対側にレイナがぎぎぃっ、と首を向けると、何故か２列に並べられた長机の周りに
ドス黒い怨念のような気が満ちている。

机の上には乱雑に広げられた教科書や参考書、周りに座っているのは、もちろん相撲部の面々。
皆真っ黒な表情で俯き、ノートに無言で鉛筆を走らせる音だけが響く。
あ、あと空気がず～ん、という音を立てている気がする・・・
「おお五條君、来てくれたか、助かるよ。」
竹刀を肩に担いだ諸岡が、援軍が来た！という顔をしてそう話す。
呆れと残念さと怒りをこねまわした顔をして状況を察するレイナ。
それに念を押すように
机の端には赤い立て札で『赤点組』と明記されている。
「ねぇ三ツ橋、カントク。念のために聞くけど、これは一体どういう状況か・し・ら？」
笑顔で、しかし全く笑っていない目で蛍と桐人の背後から問うレイナ。二人はびくっ！と
反応した後、背中に冷や汗をかきながら、すすす、と小さくなる。
「まぁ見ての通りだよ五條君。追試で合格ラインを越えられなかったら、3学期の中間テストまで
部活禁止だからね、ここは心を鬼にして、というわけさ。」
「い、いやぁ～つい稽古中心の生活になっちゃいまして・・・」
「あの解答欄、あの解答欄さえズレていなければ、俺は回避できてた、できてたハズなんだ・・・ッ！」
言い訳にもなってない言い訳をする蛍と桐仁。なまじ秋の合宿でいい手ごたえを掴んで、
来年こそは全国に！という意気込みが学業の方をだいぶおろそかにしてしまったようである。
はぁ～、と嘆いてパイプ椅子を取り、どっかりと座るレイナ。
どうやらこの状況、赤点組に対する罰ゲームも兼ねてるようである。わざわざ勉強してる横で
パーティをして、赤点組に『コッチ来たけりゃ勉強しろ』と煽っているのが見え見えだ。
で、成績優秀な元部長のレイナは、先生としてここに呼ばれたとい

うワケだろう。
「あの～、私も、教えましょうか？」
　申し訳なさそうにそう提案する千鶴子を諸岡が手で制する。
「いや、マネージャーはちゃんと結果を出したからね、そっちで楽しみたまえ。けじめは大切だよ。」
　は、はぁ、と居心地悪そうに座り直し、それでも美味しそうにケーキを食べにかかる。
「お姉ちゃーん、私の分残しとい・・・」
　―パシィン!!―
　諸岡の竹刀が、言いかけた柚子香をかすめ、際の机を叩く。びくっ、と硬直して、無言で
　しぶしぶ問題集に戻るゆず。
「う～ん、うまい。今夜のちゃんこは最高だなぁ。」
　大峰が聞こえよがしにチキンを片手にそううそぶく。さすがに彼の周囲の料理は減るのが早い、
　早いとこノルマを片付けてあっちに混ざらないと・・・
「俺は大相撲に進むんだから、何も勉強できなくても・・・」
　そんなことをこぼす陽川。と、諸岡は彼の首をぐいっ！とヘッドロックし、鬼の表情でこう返す。
「どこかの偉い先生はおっしゃった。人生に第二の刃を持てヌルフフフフ、と。」
　怖さと不気味さに顔を青くする陽川に、さらにこう続ける。
「大相撲は潰しが効かない職業だ。幕内まで行けば別だが、幕下以下でケガで引退するケースも多い、
　将来の為に高校くらいは卒業しておかないと、ねぇ。」
「は、はいぃっ！」
　観念して参考書に取り組む陽川。ああそうさ大相撲に入ったら最初はちゃんこを
　自分が食うのは一番最後、野菜クズしか残ってないちゃんこで強くなるしかないんだ！などと
　ブツブツ言いながら空腹と戦いつつ問題を解いていく。

「しっかし、堀ちゃんはともかく、大峰って頭良かったのねぇ。」
レイナが腕組みしつつそう述べる。一年の中でも一番の強面の彼が一番成績優秀とは。
こう思っちゃなんだが、とーしてもインテリヤ○ザそのまんまに見えてしまう。
「伊達にメガネはしてないってコトですよ、レイナさん。」
メガネをくいっ、と上げて自慢する大峰。いやメガネ関係ないと思うんだけど。
「さぁさぁ集中集中、早く終わらせないと食べ物無くなるよ！」
ぱしぱしと竹刀を手に打ち付けながら諸岡が檄を飛ばす。来年の相撲部の活躍の為には、
こんなコトで一人でも脱落してもらっては困るのだ。
問題集にラクガキをしていた柚子香がレイナにハタかれたり、松本が大きな体を妙に縮めて
勉強してるなと思ったらこっそり隣から拝借してたチキンをかじってるのがバレて
竹刀でしばき回されたり、桐仁が最終テストでまた解答欄を間違えてたり、
比較的早くイチ抜けした幸田が食事を始め、残りの皆に『裏切り者ー』と罵られたり・・・
そんなこんなで、残り全員がほぼ同時にクリアした時には、料理はすっかり
片付けられていましたとさ。
後日、全員追試をパスした面々が、ヤケ食いで実費でスタミナ次郎に突撃した事、
次郎の店長の悲鳴が店内に響いたことを付け加えておこう。
お後がよろしいようで。

第２３番　ふたりの正月

１月３日、蛍は地元の神社に来ていた。
信心深い方では無かったし、神頼みをするタイプでもなかったが、今年は大太刀相撲部の部長として
必勝祈願くらいしておこう、と足を向けたのだが・・・
まぁ人、人、人。当然ながら初詣真っ盛りなこの状況。参道には屋台が並び、晴れ着姿の女性が
人の群れに花を添える。
「（もっと小さい所に行くべきだったかなぁ・・・）」
本堂への参拝の列に並びつつ、そう心の中でごちる。皮肉にも家から一番近い神社が、千葉県内でも
有数の大社であることを内心うとましく思う。自分の後ろにも次々と人が並んで行く・・・
「あれ？部長じゃないですか。」
真後ろから声をかけられる。ん？と見ると、白地に赤い花柄の晴れ着に身を包んだ少女が
蛍をじっと見ていた。
「・・・どちらさま？」
目を細めて顔を見る蛍。いや、知った顔ではあるけど、どーしても顔と服装が一致しない。
見慣れたボブカットに刺された鮮やかなカンザシも含め『彼女』であることを脳が否定する。
高校相撲正月場所　堀　柚子香○―●三ツ橋　蛍（ど突き倒し）
参拝後、ぷんすか怒る柚子香に綿あめを奢りつつ、『晴れ着が似合ってたんで気付かなかった』と
釈明してご機嫌を直してもらう。このへんはさすが元吹奏楽部、女子の扱いに慣れている。
「今日はひとり？」
「うん、お姉ちゃん人混みが苦手で。」
いかにも納得な理由だ。ましてやお転婆な柚子香でさえこの変わ

りよう、もし千鶴子が晴れ着で
参拝でもしようものなら、さぞナンパや撮影申請が殺到するだろう。
「にしても気合入ってるね。」
「うん、お母さん美容師だから。私も窮屈なのは苦手なんだけどねー。」
彼女が言うには、年頃の娘がよりによって相撲部に入部し、毎日マワシ姿でいることを
母がたいそう嘆き、正月くらいはしっかりおめかししなさい、とがっつりコーデされたらしい。
なるほど、おかっぱ頭の彼女が和服を纏うと日本人形さながらに似合っている。
「部長は何をお祈りしました?」
そう聞いてくる柚子香に、間を置かず答える蛍。
「そりゃもちろん、大太刀相撲部の躍進をね。」
本当は全国大会団体優勝を祈願したんだが、それだと柚子香の女子相撲が含まれなくなってしまうので
さらっと内容を変えて伝える蛍。
「へー、私は『怪我の無い様に』だけど。私とみんなも。」
「あ、それいいね。」
蛍は感心する。格闘技である以上、怪我はどうしてもつきものだ。
そして今のダチ高相撲部を考える。
桐仁、松本、大峰、陽川、幸田、そして自分。もし誰か一人でも怪我をして戦線離脱すれば、
大きな戦力ダウンになるだろう。選手層としても、そして精神的にも。
2年前の全国優勝の後、その主力はごっそり抜け落ち、見る影もない程に弱体化すると思っていた。
しかし、新顧問の諸岡が引っ張ってきた1年生3人、そして幸田。
彼らが入部してくれたことで
ダチ高相撲部は再び強豪校として息を吹き返すことが出来た。

彼らと稽古する日々が、自分にとってもどれほど恵まれた環境であったことか。

そう、柚子香もだ。誰かに教えることで自分の身にもなる、教えた弟子が活躍する事の喜びも

また教えてくれた、そんな充実した1年間は、部員の大ケガが無く来れたことが大きかったのだ。

「僕ももっかい、それ祈願しようかな。」

「って、またアレに並ぶんですか?」

柚子香が指さす先、行列はさっきの倍以上の長さになっている。アレに並んだら参拝まで

小一時間はかかるだろう。

「・・・先におみくじ引きません?」

「そうしよっか。」

今年最初の運試し。巫女さんに頂いたおみくじを開き・・・固まる。

『凶』

「うっわー、あるんですねぇ凶って、初めて見ましたよ。」

感心しつつスマホで写真を撮る柚子香。

「・・・そういうゆずは?」

「あ、えっとですね・・・うげ!」

『凶』

「どんだけですか、この神社はぁーっ!」

正月早々先行き真っ暗である。宝くじなら配当いくらになる確率やら。

「でもそんなに悪い事は書いてないよ、内容は。」

蛍がおみくじの内容に目を走らせる。健康:良。勝負事:後に良。方位:西。縁談:進展在り、など。

特に『方位:西』という事は、千葉の西、東京の国技館を示しているのかも知れない。

「これを守って凶事を避けろってコトですかね?」

そう言って自分のおみくじを開く柚子香。

健康:良。勝負事:躍進有り。方位:光。縁談:言霊が良。

「・・・勝負事いいです、躍進有りですって。」
「へぇ、やったじゃん。他は？」
そう聞かれて、すっ、と背中を向ける柚子香。おみくじを折り曲げ、隠す。
「内緒、です。」
少し照れながら、おみくじを近くの木に結ぶ。蛍もそれに続く。
そんな蛍の姿を横目で見ながら、柚子香はおみくじの内容を心の中で復唱する。
「（方位：光、縁談：言霊が良、か。）」
その後二人で屋台を見て回る。端から見たらどうみてもデートなのだが、
なまじ蛍が女子の扱いに慣れているだけに、二人の間に緊張やラブ臭は一切なかった。
「（・・・なんとかしなきゃねぇ）」
ベンチに座って、たこ焼きなどつついている時、ふと柚子香が切り出す。
「ねぇ部長、せっかく正月に会ったんだし、ひとつお願いいいですか？」
ん？という顔で柚子香を見る蛍。
「私の事『ゆず』って呼んでるじゃないですか。だったら私も『蛍』って呼んでもいいですか？」
「ん―・・・別にいいけど、でも部活中は『部長』で頼むよ。」
「オッケーです、蛍センパイ。」
笑顔で親指を立てる柚子香。そこから別れるまで、彼女は終始上機嫌だった。
今日ばかりは気合の入った母のコーディネイトに感謝する。
―方位：（蛍の）光。縁談：言霊（呼び方）が良―
柚子香と別れたすぐ後に、蛍は４名の暴漢に囲まれていた。黒いオーラを発し、
目から血涙を流す大男達に。

「ぶちょう～、今のかわい子ちゃん、一体だ・れ・で・す・か～～～」
「正月早々デートっすか、いいですねぇモテる男は・・・」
「あんだけ相撲漬けの生活しといて、やることしっかりやってますねぇケツ」

正月練習開始後、三ツ橋部長はしばらく1年の男子部員に何故か口を聞いてもらえなかった。
「何があったの？」
「さぁ～？」
姉、千鶴子の質問に柚子香はころころ笑いながら答える。さて、こっからどう進展しようか、
などと考えながら。
そして彼らは進級し、新たな部員を迎えることになる―

第二章　三年生
第２４番　新入生たち

「相撲部、相撲部に入りませんかー！」
「相撲部に入って、一緒に国技館を目指しましょう！」
「月二回、美味しいちゃんこも食べ放題！太る？むしろ痩せますよー」
４月１０日、本日から新入生への部活の勧誘が解禁。大勢の部活に交じって相撲部の面々も
思い思いのセリフや看板、パフォーマンスを交えて声を上げる。
「貧弱だった彼がなんと、一年間でこんなムキムキに！人呼んでムキムキリヒト先輩です！」
ゴム製の肉じゅばんをまとってボディビルのポーズを取っている桐仁の横で、
幸田がちょい脚色した宣伝をする。ただ集まってるのは女子ばっかりではあるが。
「国宝『鬼丸』の出身校、ここ大太刀で、あなたも次代の国宝に！大相撲が君を待ってるぞ！」
どう考えても入部のハードルを上げている陽川の横で、苦笑いしながら千鶴子がパンフレットを
配っている。
レイナが無事進学し、生徒会へのコネが無くなった上に、昨年は全国にすら進めなかった
相撲部としては、部員の頭数を揃えて学内での地位向上を目指さないと昨年のような恵まれた
部活動はできないだろう。
諸岡顧問も昨年のように新人のスカウトは捗らなかった。というか昨年は千葉県内の
中学相撲自体が不作で、めぼしい選手を見つけづらかったのも原因ではあるが。
そんなこんなで相撲部は活動期間中、声を枯らして新入部員の勧誘

にいそしんだ。
さて・・・その成果は?

「ようこそ相撲部へ。僕が部長の三ツ橋です。これから一年、一緒に頑張っていきましょう!」
今年の新入部員は4名。彼らを前にして三ツ橋がまず挨拶する。
桐仁、千鶴子、諸岡、そして2年生たちが一言挨拶した後、新入部員に自己紹介をさせる。
「柳沢　真(やなぎさわ　まこと)です。初心者ですがよろしくお願いします。」
小太り、という表現がピッタリの、ちょっとボサついた頭の生徒がぺこりと頭を下げる。
「沼田　卓(ぬまた　すぐる)です。三ツ橋部長、僕の事覚えてます?」
蛍より頭半分以上背の高い坊主頭が、自分を指差して蛍に問う。
「え、あれ?どこかで・・・?」
「一番取ったことあったぞ三ツ橋。ま、分からなくても無理ないけどな。」
疑問に思う蛍に桐仁がニヤリ笑ってそう返す。桐仁に言われたことが蛍の記憶を呼び覚ます。
「あ、あーっ!桐仁があのとき連れて来た中学生!てかデカっ、めっちゃ背が伸びてるし!」
2年前、桐仁が大太刀相撲部に監督として参加する際、各人の欠点を指摘するため
連れて来た中学生4人、そのうち蛍と相撲を取って勝った少年。あの時は蛍よりも背が低かったが
今や見上げるまでに成長していた。
「あんときはありがとうございました。おかげで先生から寿司たらふく食えましたし。」
「・・・幸田、コイツ徹底的にシゴいていいからな。」
かつての先生と生徒が見えない火花を散らす。というか彼の入部は明らかに桐仁の手柄だろう、

相変わらず無口だが裏での行動力は大したものである。
「次はワシやな。」
そう言って沼田の肩をつかんで後ろに引っ込め一歩前に出る、赤く染めた髪が目立つ
新入部員一番の巨漢。
「赤池　哲夫（あかいけ　てつお）や。四国からこっちに来たんやけど、なんやレベル低そうで
がっかりしたわ。」
瞬時にびりっ！とした空気が部室に走る。だが赤池は気にする様子も無く、蛍の前に歩み寄る。
「こんなちんちくりんが部長かいな、ほんまに相撲取れるんかい。」
傲然とした態度で蛍を見下ろす。そんな彼の態度にも蛍は平然と返す。
「自信満々なところを見るに経験者だね、歓迎するよ。」
笑顔で握手の手を差し出すが、それを一瞥する赤池。背中を向け、下がりながらこう返す。
「へーいへい。ま、せいぜいワシに壊されんようにな。」
そんな彼らを見て2年生達はやれやれ、という顔をする。そもそも人を見た目で判断してる時点で・・・
「あ、あの・・・いいですか?」
おっと忘れていた。最後に残った女子がおずおずと手を上げる。
「あ、うん、どうぞ。」
「小林　早苗（こばやし　さなえ）です。あ、あの私、相撲は経験ないんですけど・・・その。」
自信なさそうにおずおず話す小林。いや、普通女子は経験ないでしょ、と全員が心でツッコむ。
「私、その、こんなだから・・よくイジメられてしまって、だから・・その・・・」
重っ！
赤池爆弾に続いてまたとんでもないのが来たものだ。確かに彼女はお世辞にも美人とはいえず

失礼ながら女子にしてはふとましい体格に自信の無さそうな目、いかにもイジメに会いそうなタイプだ。
が、その空気を払拭すべく彼女の前に飛んでいく人物ひとり。
「女子選手新入部員!ようこそいらっしゃいませーっ!」
柚子香が嬉々として小林の手を取り、ぶんぶん上下させる。初の同志を得た感激にはしゃいで続ける。
「うんうん、この部で強くなってそんな奴らぶん投げちゃえ!私が許す。」
いやそれはまずいだろう、と言いかけた皆の機先を制し、小林は続ける。
「え、いや・・・『お前には相撲部とかお似合いだ』とか言われて・・・それでその、やってみようかと。」
全員が真っ白に固まる。いやそれ絶対悪口だし、というかどこまでも重いよこの娘・・・

稽古初日。今日くらいはとりあえす軽く流す予定だったのだが・・・
「部長さんよ、一番胸貸しな。」
ぶつかり稽古の後、早速蛍に突っかかる赤池。どうも小さい上に女顔の蛍が部長であることが
気に入らないらしい。
「うん、いいよ、やろう。」
そのセリフにえっ?という顔をする柳沢と沼田。小林に至っては早くも顔を伏せ、泣きそうな顔をする。
どう見ても平和的な展開にはならなさそうな空気、初日から嫌な物を見る羽目に・・・
と、そんな3人の横にマネージャーの千鶴子が付き、語る。
「よく見ておきなさい、相撲っていうものがどういうものか解るわ、きっと。」

「手をついて!」
幸田の仕切りの元、向かい合って構える蛍と赤池。

「(ぶっ飛ばしたるよ)」
そう思い蛍を睨む。人相の悪さも相まって威圧感抜群だ。そんな彼にも蛍は憶する様子も無く
らんらんと光る眼光を返す。
「はっきよい!」
立ち合いと同時にかち上げを放つ赤池。ゴッ!という手ごたえはあったが、
蛍は跳ね上げられるどころか、逆に赤池の腕を頭で跳ね上げ、彼の下に潜りこむ。
―蛍火の如し・潜―
ぶちかましの軌道を下にずらし、相手の下に潜る蛍の新しい型。そのまま両下手を引きつけ
正中線を軸に体幹を固める。ぐぐっ、と力がこもる両者。
「ちっ!」
赤池は蛍の両手を抱えながら、体重を生かして寄りに出る。が、蛍の足が俵にかかった時から
蛍の抵抗が増し、それ以上押せない。
ならばと抱えていた右手を離し、そのまま右上手を引くと、強引な投げに出る・・・が!
「(う、動かん!)」
腕力には自信があった、だがこの小さな相手はまるで地面に根が生えたかの如くビクともしない。
「くそだらぁっ!」
片手では駄目だ、左手も放して両上手を取る。このまま吊り上げてやらぁっ!と体を反らす。
―ガチン―
「ぐっ!」
重い。吊れない、なんだコイツ!まるでアンカーで固定されているような蛍の重さに焦る。
その理由が左足から伝わってくる。蛍は赤池に『内掛け』、つまり右足を赤池の左足に絡めさせ

吊られるのを防いでいたのだ。
なんとか引っこ抜こうと力を込め続ける赤池だが、蛍の両下手の引きつけと足のロックで
微動だにさせない。
「だはっ！」
息を吐き出し、吊りを諦め蛍を下ろす赤池。くそっ、ここは一息ついて・・・
そう思った瞬間、自分の体は泳いでいた。組んでいた蛍の感触が消え、横から前方に引っ張られる。
―下手投げ『鬼車』―
出し投げ気味に下から横に脱出しながら放った投げは、そのまま赤池を一回転させる。
まさかの結果に固まる一年生とは対照的に、ニヤついた表情で結果に満足する2年生。
転がった赤池はしばし座ったまま呆然としていた。俺が負けた？こんなチビに？
「赤池君、手の内バレバレだったよ。」
「・・・はぁ？」
蛍が赤池の前にしゃがみ、今の一番を振り返る。
「ぶっ飛ばしてやろうと思ってかち上げ、体重軽いだろうと無理な寄り、
利き腕の上手を引いたから投げ、両マワシを引いたから吊り。あれじゃ全部正直すぎて、技の前に
何をするか告白してるようなもんだよ。」
「・・・」
呆然とする赤池。今のほんの２０秒ほどのやり取りでどれだけ考え、深い読みを持って相撲してんだ、
やべぇ、この部めっちゃレベル高ぇ・・・
「性格が素直なのはいいけど、過ぎるとそれが欠点にもなるから覚えておくといいよ。」
そう言って礼をし、土俵を降りる蛍。

「三ツ橋部長、心読むのがマジ上手いもんな。」
「ピタリはまるとマジでエスパーかニュータイプかって思うもん。」
「諸岡先生もえらい仕込みしてくれたよなぁ・・・」
２年生達がそんな話をしている。そう、昨年秋の合宿以来、諸岡が蛍に仕込んだ
『心理戦』を応用した相撲、それは蛍に更なる強さをもたらしていた。
特に感情が表に出やすい相手、例えばこの赤池あたりにはこの戦法は面白い様にハマっていく。
「どう?」
千鶴子が一年にそう話す。当の３人はキラキラした目で自分たちの部長の強さに感動している。
戻ってきた赤池は、悔しそうな表情を見せながらも、強がる。
「くそ!次こそは勝つ・・・見とれよ!」
引き上げてくる蛍の正面に桐仁が立ち、真剣な表情で問う。
「どうだ、赤池は?」
タオルで汗を拭きながら、真剣な、そして複雑な表情で蛍が返す。
「強いよ、ヤバい位にね・・・」

第２５番　個性派集団

「さぁそこで！私をいじめっ子だと思ってぶん投げろーっ！」
　土俵の上、小林と組み合った柚子香がそうハッパをかける。
「は、はい・・・んんーーーーっ!!」
　気合と共に時計回りに柚子香を振り回す小林。完全に足を浮かされ、メリーゴーランドのように
　くるくる振り回される柚子香。
「ちょ、ちょっと、ひゃあぁぁぁぁぁーっ！」
　その悲鳴を聞いて、慌てて柚子香を下ろす小林。
「あ・・・すみません、手を放すタイミングが掴めなくて。」
「だはーっ！死ぬかと思った。っていうか小林さんめっちゃ力強いじゃん！」
「え、そう、なんですか？よく分からなくって・・・」
　試しに土俵の隅にあるダンベルを持たせてみると、何と２０ｋｇを軽々と持ち上げる小林。
　何でも中学生の時には家計を助けるために引っ越しのアルバイトをやっていたらしい。
　その怪力を体で経験し、柚子香は先日の彼女の言葉を思い出す。
（え、いや・・『お前には相撲部とかお似合いだ』とか言われて・・・）
　アレ悪口じゃなくって、ただの好アドバイスだったんじゃ・・・

　そんな彼女とは対照的なのが、部室の隅で息も絶え絶えに座り込んでいる柳沢。
　確かに初心者とは言っていたが、相撲に限らずスポーツそのものの経験が皆無らしく、
　四股は１０回でダウン、すり足は土俵半周でストップと、２年前の三ツ橋を上回る酷さだ。
　一見するとその小太りな体格は相撲に向いていそうだが、実際は食太りのようで
　筋肉を伴っていない体重は、運動すれば必然的に負担となって彼の

体に返ってくる。
「大丈夫？桐仁用の酸素スプレー使う？」
そう声をかける蛍に、滝のような汗をかきながらなんとか首を振る柳沢。
「ホンマに、どんな人生送ってきたんやオノレは。」
赤池が柳沢を見下ろしてそう言う。口の悪い彼が言っても悪口に聞こえない程、
柳沢の体力の無さは顕著だった。
その質問に答えたのは意外にも、腕組みして見ていた諸岡顧問だ。
「あー、ちなみに彼は入試でぶっちぎりトップだったからね、こないだの全国模試でも
全国トップ１０だったし。」
「ぶっ！」
「えええーっ！」
「マ、マジ・・・かよ。」
驚く一同。特に模試で最低ラインだった赤池は柳沢を驚愕の視線で見る。
話を聞くに、彼は放課後や休日はポテチなど食べ、ジュース飲みながら参考書を解くのが
趣味かつ日常だったらしい。最後だけなんかおかしい、と全員が心の中でツッコむ。
さすがに高校では何か運動しないとマズいと思った彼は、太ってる人がするイメージがあるのと
個人競技で自分が負けても他に迷惑が掛からない、という理由で相撲を選んだとのことだ。
さすがに自分の認識の甘さを理解したらしく、皆の練習を隅で見ながら落ち込んでいる柳沢。
そんな彼の隣りにマネージャーの千鶴子が座り、柔らかい声で語る。
「ねぇ柳沢君、よかったらマネージャーやってみない？」
え？という表情の後に、顔を伏せて嘆く柳沢。

「やっぱ、選手は無理、ですよね、こんなんじゃ。」
そんな嘆きに、千鶴子は頭を振ってこう続ける。
「私もね、運動全然ダメだったの。でも相撲部のマネージャーになって、相撲の勉強を続けて、
相撲だけはけっこう出来るようになったの。柚子香にも勝った事あるんだよ。」
顔を上げ、え?という顔をする柳沢。
「外から相撲を見てわかる事、多分いっぱいある。柳沢君は頭がいいから尚更だと思うの。
もちろん体も鍛えなきゃだけど、相撲そのものをよく知るのも大事よ、きっと。」
千鶴子は柳沢にある種のシンパシーを感じていた。入部してからこっち周りは皆
(当然ながら)体育会系の人間ばかりで、知識で相撲を理解しようとする自分は何か違うと
感じていた。
彼がもし自分と同じように、相撲を外から見て理解し、それを自分に応用したら
強くなるかもしれないと思ったのだ。何よりこのまま選手としてのみ続けていたら
彼は持たない、相撲を嫌いになるか諦めるかのどっちかになるだろうと思ったから。
結果、柳沢はこの提案を受け入れ、選手兼マネージャーとして再スタートを切る事になる。

―ゴロンッ―
陽川の投げに転がる沼田。しかし受け身だけは奇麗に取り、そのまま笑顔で立ち上がる。
「いやぁ、すごい投げッスね。」
「いや、もうちょっと粘れただろ、お前。」
陽川がそう返すのも無理はない。沼田は上背も体力もあり、なによ

り相撲歴が長いはずなんだが
肝心の根性というか闘志と言うか、そういう物が全然感じられなかった。
申し合い稽古でも少しでも危なくなると、あっさりと土俵を割る、または今みたいに転がって
それでいて少しも悔しそうな表情を見せず、笑顔でヘラヘラ笑っているのだ。
「・・・昔っからああなんだよな、アイツは。」
桐仁が土俵外で蛍に話す。なんでも体が小さかったせいで小学生の時から大会でも
勝つことがほとんどなかったらしい。
そんな相撲生活が続いたせいで、背が伸びた今でも相撲自体がライフワークみたいに
なってしまっているようだ。
「何かキッカケがあれば、化けるような気がするんだがな。」
蛍もこくりと頷く。自分が火ノ丸さんに憧れたように、彼も何かモチベーションを上げる
材料があれば変われるかもしれない。

週末、今日は月二回のちゃんこの日。相撲部とレスリング部の面々が準備にかかっている。
が、そんな中一際注目を集めているのが、調理場で大きなハマチを捌いている赤池だ。
その解体ショーに、大勢がほぉ～と感心して見入る。
「ウチの親父漁師で板前やけん、魚捌くんは慣れとんや。」
彼の父は四国で自分で漁をした魚を使って小料理屋を営んでいたが、経営不振で
店をたたんだ後に、千葉の料亭に料理人としてスカウトされて引っ越して来たらしい。
なんでもこのハマチも親父さんからの差し入れとの事、豪快かつ繊細な包丁さばきで

刺身にして皿に盛り付けていく、ツマまで奇麗に仕上げて。
（なるほどなぁ・・・）
板前と漁師、どっちも過酷でかつ厳格な気骨ある世界。そんな中で揉まれた赤池が
こういう性格や、口の悪さを備えるのも無理はあるまい。
単に関西弁が気に障るだけのイキり君でもなかったようだ。

「「頂きます」」
全員の唱和と共に、いつもより少し豪華なちゃんこタイムの開始。
赤池は柳沢に刺身を寄せつつ（今度勉強教っせて）と囁いている。
分かりやすい男だ。
沼田は遠慮も無しにその刺身を次々と平らげる、取られてなるかと
各人も殺到し
あっという間に空になっていく刺身皿。
が、小林さんは相変わらず遠慮してほぼハシをつけない、彼女に赤池や沼田の図々しさが
半分でもあれば、あの怪力を生かして女子相撲界の星になれる可能性もあるんだが・・・
そんな新入生の様子を観察していた蛍と桐仁は、顧問の諸岡にちょいちょい、と手招きされる。
席を立って部室の隅で相談する3人。
「本当に、いいんだね。」
その諸岡の言葉にこくりと頷く蛍と桐仁、目には厳しそうな表情を、決意と共に浮かべて。
そして3人はちゃんこ真っ最中の部員たちに向き直り、諸岡がこう切り出す。
「ちょっと相撲部の皆に話がある・・・」

第２６番　３年生として

「じゃあ、お先に失礼します。」
「うん、お疲れ。」
今日の部活が終わり、着替え終わった１．２年生が蛍と桐仁に挨拶をし、部室を後にする。
ただ、この日はいつもと違った。その部活の『残り香』というか、明らかにいつもと違う『空気』。
残った二人も、去っていく下級生たちも、どこか複雑な表情。
「やられたな。」
メガネをくいっ、と上げ語るその桐仁の言葉に頷き、神妙に返す蛍。
「うん、覚悟はしてたけどね。みんな本当に強くなったよ、去年より一段と。」
部室の隅にあるホワイトボードを見る二人。
本日の部活、春の団体戦に出場する選手を決めるための部内リーグ戦、その対戦表と結果を。

１位・大峰
２位・陽川
３位・沼田
４位・松本
５位・幸田

６位・三ツ橋
７位・赤池
８位・柳沢
９位・辻

春の団体戦は選手３人＋補欠２人、つまり出場できるのは上位５人まで。
そう、この日の部内戦で３年の三ツ橋蛍と辻桐仁は後輩に敗れ、大会出場資格を得られなかったのだ。
蛍は２年生の４人に全敗だった。変化を主軸に戦う蛍にとって、一

年以上胸を合わせ続けてきた
彼らとの真剣勝負は、あまりにもその手の内を知られ過ぎていたのだ。
桐仁は初戦に当たった沼田戦が全てだった。もともと相撲クラブで桐仁を先生として
教わってきた沼田は、辻が自分ではかなわない実力である事も、弱点である肺の疾患も良く知っていた。
彼は一縷の望みに賭け、徹底した持久戦戦法を取ってきた。
腕を取られないように、マワシは前ミツのみ。無理に押さずに腰を割りつつじりじり体重をかけ、
切り返されそうになればすかさず吊りに出て腰を浮かし止める、この徹底した持久戦により、
実に3分以上の相撲を強いた上、ついに力尽きた桐仁を寄り切る。
相手が全開で攻めてこないことが桐仁の相撲時間を伸ばしたとはいえ、この戦いで全ての力を
使い果たした桐仁は2戦目3戦目と連敗し、以後の試合は棄権するしかないほど消耗してしまった。
皮肉にも、その桐仁に勝った沼田がその1番で変わる。クラブ時代から1勝もできなかった桐仁に
勝った事に歓喜した彼は、2番目以降も大いに張り切り、2年生2人を食い、実力伯仲の赤池も
仕留めてみせた。彼にとって桐仁戦は『自分を変えるキッカケとなる金星』になったのだ。
「沼田に文句を言うつもりはない、むしろよくやってくれたよ・・・」
大太刀の辻桐仁、国宝『鬼切安綱』とまで呼ばれる彼が、スタミナ不足の欠点を抱えていることは
強豪校には周知の事実だ。もし彼が大会に出れば、対戦相手が沼田と同じ戦法を取ってくる可能性は
ありすぎる程あるだろう。
実力主義。その姿勢は時にこんな残酷な結果を生む。
まだ夏のインターハイを残してるとはいえ、春の大会に応援団とし

ての参加を余儀なくされる3年2人。
「さて、始めようか。」
蛍がマワシをぽんぽん、と叩いてハッパをかける。
「ああ、やられっ放しってワケにもいかないからな。」
桐仁もメガネを外し、足をドンドンと地面に打ち付けて気合を入れる。
彼らが居残った理由、それは本日不覚を取った下級生に対し、夏のインターハイ出場の
部内戦に備えた対策とリベンジの為だった。
ライバルは県内でも全国でもない、部内にこそ最初の『倒すべき敵』がいるのだ。
「まずは1位の大峰君だね、攻めが厳しい分スキも多いと思うけど・・・」
「普段から攻めてるから部内戦でも容赦ないのが強味なんだよ、火ノ丸の奴に似てるな。」
そんな会話をしていると、部室のドアががちゃりと開き、一人の女子が入ってくる、千鶴子だ。
「あれ、マネージャーまだ残ってたんだ。」
そんな言葉をかける2人にこう返す千鶴子。
「お二人こそ・・・でもまぁそんな事だろうと思ってましたけど。」
そう言ってタブレットを取り出し、取り溜めた動画を開く。
「まずは大峰君でしたね、彼は右四つですから・・・」
「いやちょっと待ってマネージャー。」
今回の負けはあくまで自分たちの力不足によるものだ。ダチ高マネージャーの立場の彼女が
いくら同学年とはいえ自分達だけに肩入れするのはいかにも不公平というものだろう。
「何か問題でも?」
笑顔で返す千鶴子。私はただ居残りして練習する人にマネージャーとして協力してるだけですよ、
と付け足せば、さすがに文句も出ない。

もちろん千鶴子にすれば、一緒に3年間頑張ってきた2人に試合に出てほしいと思う気持ちはある。
実力主義と言うなら彼らに実力をつけてもらう、それがマネージャーである彼女なりのエールの送り方でもあった。
そんな千鶴子の気づかいに気付けない2人でもない、顔を見合わせてやれやれ、という顔のあと蛍は拳と掌をぱしっ!と合わせて宣言する。
「よし!夏には後輩たちを全員倒すぞっ!」
しーん。
「いや、そこは『おーっ!』とか言おうよ」
桐仁と千鶴子にそのノリを求めるのは無理があったか。が、意志は伝わったようだ。
「よし、じゃあ今日の大峰の取組を頼む!」
そう言ってタブレットを覗き込み、ああだこうだと対策を出し、土俵に上がってそれを実践する。
その時、部室の外から中を伺っていた面々が、そっと離れていくのに3人は気付かなかった。
「だから言っただろ、あの2人に同情するだけ無駄だっての。」
「俺達を倒すってよ、こりゃ夏も返り打ちにしてやらないとな。」
大峰と陽川が同じベクトルの会話をする。
「あのたくましさと言うか、図々しさは見習いたいッスね。」
「うん、だったら春の大会、俺達でしっかり結果を出さないと・・・」
松本と幸田、実はこの二人は今日の部内戦の結果に際し『先輩に出番を譲るべきでは』との意見を出していたのだ。
沼田は賛成するが、大峰と陽川、そして赤池はそれに反発する。そんなこと言うなら元々部内戦なんかしなけりゃいい、そもそも部内戦で選手を決めると決めたのはあの二人じゃないか、と。
そんなこんなで部室に残る二人をこっそり見に来てみたら、まぁこ

んな具合である。
　完全に要らぬ心配、余計なお世話だったようだ。
「まぁ夏には蛍部長と辻カントクがあんた達、コテンパンにしちゃうでしょ。」
　柚子香の言葉に一同が反発する、上等、望むところ、やれる物なら、と。
　赤池に至っては全員倒すんはワシや！とか口走って皆にツッコミを食らいまくる。
　そんな中、柳沢と小林だけが今の会話の不自然さに気付く。向かい合ってアイコンタクトで会話する二人。
「（あれ？柚子香さん今、『蛍』部長って・・・名前呼び？）」
　そして春の団体戦が開幕する。新勢力となった各校、台頭するのは果たして―

第27番　新たな千葉の勢力図

『大太刀』の札が下げられたテントの中、部長の蛍の指示の元、各人が自分の仕事を確認する。

「ウチはD土俵の最後だから、各土俵の偵察に2名ずつ組みまーす。」

春の団体戦開幕。昨年IH準優勝のダチ高はトーナメントの一番最後、4面ある土俵の4番目

D土俵の最後が一回戦になる。残念ながら参加チーム数が割り切れるためシードではないが。

この春の団体戦は単なる大会というだけではない。各校とも新たなメンバーで挑む、いわば

新戦力のお披露目とでも言うべき側面を持っている。自分たちのチームが千葉県内でどの地位にいるか

各校の新人や新戦力で注目、警戒すべき選手は誰かなど、チェックする点は非常に多い。

選手メンバーにあふれた蛍たちにしても、やることはいくらでもあるのだ。

「A土俵には僕と赤池君、B土俵は桐仁と柳沢君、C土俵はゆずと小林さん、ここD土俵はマネージャーと

諸岡先生にチェックをお願いしまーす。」

ハイ!と全員が頷く。手には撮影用のカメラまたはスマホと、ノート&ペンを各人が掲げて。

「選手の5人はしっかりアップしておく事!1回戦の相手の木更津商業も決して弱くないよ、油断せずに!」

こちらも元気よく返事を返す5人。仮にも3年生2人を差し置いて出場しているのだ、油断で負けた

なんて言い訳にもならない。

「じゃあウチの出番の前の試合になったら電話するから、D土俵に集合してくれたまえ。」

そう言って携帯を掲げる諸岡顧問。さすがに偵察に夢中になってダチ高の応援に来れなかったら

本末転倒だ、仲間の応援こそが彼らの一番の仕事なのだから。
解散し、駆け足でＡ土俵に向かう蛍と赤池。到着した時、今まさに見るべき試合が始まる所だった。
「よかった、間に合った。」
Ａ土俵の１回戦、昨年ＩＨ千葉県覇者の石神高校がいきなり登場だ。ダチ高の全国進出への最大の壁の
今年の出来はいかに？
―先鋒戦。東、荒木君。西、船場君―
先鋒はあの荒木だ。昨年より一回りついた筋肉に、無精髭を蓄えたその眼光が仕切りの時点で
もう相手を威圧している、負けじと睨み返す松戸一高の巨漢、船場。
「赤池君、入部初日に言った事覚えてる？」
「えっと・・・わいの相撲が何するか見え見えだったっちゅー奴ですか？」
その返しにこくりと頷き、スマホを構えながら続ける蛍。
「彼の相撲をよく見てて、悟られずに繰り出す技の怖さがわかると思うよ。」
―はっきよい―
両者が立ち、組み合う。船場が体格を利して寄りに出る。土俵際まで来た時に荒木は軽く捻りを加え
わずかに相手の体勢を崩し、体を入れかえる。
次の瞬間、荒木はいつの間にか相手の右足首に引っ掛けていた左足首を瞬時に後ろに跳ね上げる。
アキレス腱の部分同士をフックさせ、自分の後ろに蹴り上げる。船場はまるでサッカーボールを
蹴り損ねた少年のように右足を胸まで浮かせ、そのまま尻もちをつく。
「な・・・いつの間に、ほんで、早ぇ！」
驚愕する赤池。そもそも彼には荒木がいつ『内掛け』の体勢に入ったか、それすら悟れなかった。
動作が早いわけではない、あくまで自然に、スムーズに技の体勢に

入る事により相手にすら
気付かれないその静かな動き、力のオンオフを使いこなす荒木ならではの強さだ。
「彼は元、柔道の全中王者だよ。今じゃ間違いなく国宝クラスの実力者だ。」
蛍の解説に冷や汗を流す赤池。自分ならどう戦う?こいつと。どう勝つ、それは可能か?
―副将戦。東、沙田君。西、白井君―
国宝『三日月』の登場に会場が沸く。昨年ＩＨ個人戦で準優勝した彼は、この1番でさらなる
技のキレを見せる。
立ち合いからのおっつけで相手の両手関節を完璧に決める。腕を折らんばかりのその勢いに
臆した白井が腕をすぼめた瞬間!電光石火の上手出し投げが炸裂、あえなく土俵に転がる白井選手。
「え、えげつねぇ、完璧に関節決めてもて、あれやったらそら腰も引ける、その一瞬に・・・」
全国レベルの強さを目の当たりにし、体温をさらに下げる赤池に蛍は毅然と返す。
「あれが石神だよ。国宝級が最低2人、彼らに勝たないと全国への道は無いからね。」
「・・・3人目はわりと普通でんな、温存しとるんかいな。」
結局3―0で完勝した石神ではあったが、大将で出てきた三宅は特に際立った強さは感じなかった。
「あり得るね、補欠の二人の方が本命かもしれない。」
この春の団体戦、実は対戦直前に出場選手を補欠選手と入れ替えることが可能なのだ。
その為、先の2人で勝ちを決めた高校は、最後に1・2年生に実戦経験を積ませる為に出場させる事もある、
また2連敗した高校が、思い出作りにと補欠の3年生を出すケースもあったりする。

A土俵の試合は進む。各校とも見るべき選手はいるが、やはり石神の強さは際立っている。

このブロックを勝ち進んでくるのは彼らでまず間違いないだろう。

と、蛍のスマホがブーッと振動。諸岡顧問からの集合の合図だ。

赤池にいこう、と声をかけD土俵に向かう二人。

「偵察お疲れ様です、こっちの準備は万端っすよ！」

到着した蛍に大峰が返す。彼も松本も陽川も幸田も、そして沼田も体から汗の湯気を出している。

準備万端気合十分。さぁ見せてくれ、今年の大太刀の強さ！

「先鋒大峰君、副将松本君、大将陽川君。ただし2―0になったら大将は沼田君に出て貰うよ！」

「ハイ！」

―東、木更津商業。西、大太刀高校―

先鋒戦、大峰が電車道で寄り切ると、副将戦では松本が軽量の相手をゆうゆうと吊り上げる。

大太刀の強さに驚愕の声を上げる各校の偵察部隊。

行ってこい！と陽川に肩を叩かれ、高校相撲の公式戦デビューを果たす沼田。

木更津商業の大将、久保田に一歩も引かぬ差し手争いを見せ、四つ十分になった所で寄りに出る。

土俵際で粘る相手を見事な切り返しの上手投げで仕留めてみせた。

―以上、3―0で大太刀の勝ち―

新生大太刀の初戦は、望む最高の形でのスタートとなった。

2回戦までのしばしの間、彼らはテントで偵察の報告を兼ねたミーティングをする。

「Aブロックは間違いなく石神だね。ただ荒木さんと沙田さん以外はまだ未知数、っていうかそこが

穴の可能性もあるね、楽観は禁物にしても。」

蛍に続き、桐仁がBブロックの報告をする。

「ここば常磐第三が要注意だな。下山の他にもいい選手がいる。」

なんでも堀マネージャーによると、下山のここ2年の活躍に応えて

常磐第三は相撲部のサポートと
育成や人材発掘に力を入れ出したらしい。一人の頑張りが相撲部を押し上げたのは、なんとなく
一昨年の大太刀、小関部長を彷彿とさせる。
「Cブロックはやはり川人高校が本命ね。主将の大河内さん以外にも、でっかくて強い選手が
いっぱいだったし、実際強かった。」
柚子香がそう告げる。元々川人高校は伝統的に大型選手が多く、その圧力で勝つタイプのチーム。
大河内のような細身でキレのある選手の方がレアと言えるだろう。
「で、ここDブロックは?」
蛍が千鶴子にそう問う。彼女は口元を手で押さえて、意外な名前と結果を報告する。
「柏実業が1回戦で負けました、相手は・・・あの『西上高校』です。」
「なっ!!」
蛍と桐仁が同時に声を上げる。柏実業といえば昨年春に大太刀を破り、準優勝までいった高校、
かたや西上は万年1回戦負けで、昨年やっと初戦を突破した程度だった。
2年前にはまだ初心者の蛍と、勝ち癖の無い小関の為に桐仁が練習相手として連れて行った
そんなレベルだったあの西上が、柏実業を破ったというのか・・・?
驚く一同に、千鶴子はこう付け足す。
「大型選手は相変わらず居ません。でも、みんなすごく速くて、そして強かった・・・」

第２８番　西上高校と大太刀高校

「横の動きスゴイな・・・」

Ｄ土俵の勝者を決める、いわば準々決勝の前。ダチ高相撲部は対戦相手、西上高校の

ここまでの取組の動画を眺め、一様に同じ感想を持つ。

彼らの相撲はとにかく回り込む。相手の側面、そして背後に向かってひたすら円を描き、

最終的には後ろを取って勝つ、そんなスタイルが徹底されていた。

西上の選手は全員が１７０ｃｍ前後、体重も７０ｋｇ程度。確かにそんな彼らが勝ち上がるには、

こんな亜流の相撲を取らざるを得ないだろう。

「レスリングの動きに似ている。が、ソレと違ってちゃんとすり足で動けている、

相当稽古してこの動きを身につけたのだろうね。」

諸岡顧問が腕組みして感心する。レスリングでよくある『バックを取る動き』を

相撲のルール、相撲の足さばきで行えていることに感心する。

普通に考えれば相手の周りをまわる選手より、それに対応して体の向きを変える相手のほうが

早いと思うだろう。だが相撲は基本押し合う競技、どうしても前に前にと出てしまう。

そのタイミングを見極めて躱し、時には出し投げや蹴返しなどを混ぜて意識をそっちに振り

それでも追いついてくる相手に対しては切り返して逆方向に回り込む、いわば『円』の相撲で

県内の重量級選手を次々と餌食にしてきた。

もちろんドンピシャ胸を合わされた場合は成す術なく寄り切られていた。ここまでも

ほぼ全試合２―１の僅差で勝ち上がってきている、回り込めれば勝ち、捕まれば負けで徹底していた。

「速い動きに対応できるオーダーが理想だね。というわけで先鋒幸田君、副将沼田君、
大将は陽川君で行こう！」
蛍の提案に全員が頷く。実はこの西上の戦法、蛍の相撲にかなり似たところがある。
巨漢の大峰や松本は稽古でもこの戦法の蛍に不覚を取る事があり、相性的に良くない傾向がある。
まして大峰・松本はここまで3試合連続で出場しており、疲労も結構溜まっていた。
準決勝以降に戦力を温存しつつ相手に対応したオーダーは、現時点で正解の判断と言えるだろう。
―東、西上高校、高橋君。西、大太刀高校、幸田君―
呼び出しを受け、先鋒二人が土俵に上がる。ぶちかましを得意とする幸田は入学以来、
変化を得意とする蛍とずっとペア特訓を続けており、横の動きに対応する能力はピカ1だ。
捕まえてしまえば桐仁直伝の投げで仕留められるだろう、そんな楽観的な見方があった。
―手をついて―
助走距離を取る幸田に対し、体をやや起こした『狛犬型仕切り』で相対する高橋。
ここまでもずっと使ってきた、左右の動きに移行するには最適の仕切りの形。
―はっきよい！―
立ち合いと同時に、バチィン！と音を立てて激突する両者。
「何っ!?」
意外にも高橋は真っ向からぶちかましを仕掛けてきた。それどころか当たり負け気味で
幸田に押されても横に動こうとはしない。
「（なら、このまま押し切る！）」
一気に土俵際まで押し込む幸田。と、高橋は押されながら右手で幸

田のハズ（脇）を取り、
左手で幸田の下手を抱え込む。
次の瞬間、高橋は上半身を捻り、突進する幸田の上半身を回転させる。そしてハズをさし上げて
体を抜くとそのまま幸田を空中で転がす、もんどりうって土俵下に転がり落ちる幸田。
―東、高橋君の勝ち！―
予想もしない結果にダチ高メンバーは固まっていた。１．２年生が『何だ今のは？』という顔をする中、
３年の蛍と桐仁、千鶴子は『知っている』技に驚愕する。
―頭捻り『渦切』―
２年前の全国大会、団体戦決勝で桐仁が澤井を破った技、柔道で言う空気投げ『隅返し』に近い
極めて難易度の高い、相手の突進力を利用した投げ技。
いかに幸田が突進力のある選手とはいえ、ぶっつけ本番で出来る技ではない。この状況も想定して
身につけていたと言うのか、いや、それにしても・・・
「まさか！」
桐仁が呟く。そうだ、なんで気付かなかったんだ。この頭捻り、狛犬型仕切り、そして横に動く
『レスリング』のような相撲、これは・・・

勝った高橋は仲間に拍手で迎えられる。その中央で西上の監督、飯田が満足そうに笑顔を見せ
そして邂逅する。２年前、自分が西上の相撲部顧問に就任した時の事を。

『大太刀に続け！』
部室に入った途端、目につくようにでかでかと張られた紙に書いた文字。
大太刀高校と言えば、昨年日本一に輝いた学校である。西上を弱小

校と聞いていた飯田には
そのピンポイントな、そしてどこか的外れなスローガンの意味が分からなかった。
話を聞くに、ダチ高は以前からウチとよく合同稽古をしていた仲である事、一昨年までは
西上と変わらないレベルで、しかも部員が一人だけという有様だったという事実。
その大太刀があそこまで強くなったのだから自分たちも、との意思を込めての張り紙らしい。
そんな部員に対し、飯田は頭を振って呆れてみせた。
「同じ千葉県内の学校だろう、彼らは敵であり、先人ではないぞ。」
強くなる、とはそういう事ではない。彼らに憧れるだけでは決して彼らには勝てない、
勝ちたいなら彼らの上をいかなければならない、と。
とはいえ気持ちは分からなくもない。弱小校だった大太刀のサクセスストーリーは
彼らの心に大きく響いただろう。だが西上は大太刀ではない、レスリング王者もいなければ
国宝が入学するような学校でもない、強くなるのはあくまでも自分たちでなくてはならないのだ。
だがそのためには、彼らの『体』は貧弱すぎた。3年も1．2年も皆、相撲に向いた体格ではなく
進学校である西上において『技』を鍛える土壌も無い。小学生の稽古相手に指名され、それを
実力相応と仕方なく受け入れる彼らは格闘技者としての『心』すら備わっていなかった。
飯田は一念発揮する。かつて大学相撲で鳴らした自分なら『技』は教えることが出来る、
『体』を鍛える為、実費でトレーニング機器も購入した。だが肝心の『心』だけは
生徒たちが自分から燃やさない限りどうにもならなかった。

そこで彼は2年越しの計画を立てる、1年目は奇をてらわずに正攻法の相撲を仕込んだ。
厳しい練習に耐え昨年よりは強くなった。が、所詮は急造、2回戦を突破することは
叶わなかった。しかも彼らを負かしたのは、かつて憧れていた大太刀高校。
夏が終わり、代替わりした西上高校。その部室には『大太刀を倒せ！』の張り紙が
デカデカと張られていたのだ。敗北の悔しさが育てた彼らの『心』に飯田監督はほくそ笑んだ。
そして彼は小兵の生徒たちにかつて憧れていたダチ高の相撲を教える。全国を取った時の
ダチ高は決して大きくなく、そんな彼らの相撲は今の西上を強くするための格好の教科書だった。
国崎のレスリングの動きを相撲にアレンジし、全員の基本スタイルに取り入れる。
辻選手の切れ味鋭い投げ、五條選手の強烈な突き押し、小関選手の粘り腰、いずれも今の
生徒達には習得は難しいだろう。だが不可能ではない、彼らを上回りたいという『心』があれば
『技』はそれに引っ張られて身につくものだ。十全ではなくてもいい、それが武器になり、
そして勝利を呼ぶものであれば！

「ついに大太刀に一矢報いたな！」
その飯田監督の声に威勢よく返す高橋。
「一矢じゃたりません、俺たちが勝ちます!!」
全員が大きく頷く。その態度に笑みをたたえた顔で副将、葉山に檄を飛ばす飯田。
「よし、葉山、決めてこい!!」
「ハイ！」

「頼むぞ沼田、俺まで回してくれよ!」
陽川が沼田の背中を両手で叩きながらそう激励する。が、肝心の沼田は自分が負ければ
ダチ高の敗退が決まる、そんな責任のかかる勝負に重圧を感じてるのがはた目にも分かる。
「まずいな・・・変えるか?」
桐仁が蛍に提案する。今の沼田では勝ち目は薄い、松本か大峰を出したほうがまだ
マシかも知れない。が、蛍はそれを否定する。
「それをやったら沼田君が育たないよ、ここはバタバタせずに信じて行こう!」
そんな会話をするふたりに、背中から声をかけてきたのは柳沢だった。
「あの・・・西上の戦法に対処する方法があるんですが・・・」

第２９番『円』の相撲

―東、葉山君。西、沼田君―

「ほう、オーダー変更は無しか」

西上の飯田監督が腕組みして感心する。この春の大会は勝敗状況によって、取り組みの直前での

選手交代が容認されている。先鋒が破れたことで主力の２年生に変えると思ったが・・・

敗戦にバタバタしてくれればまさにこちらの思うツボだったが。監督か部長か、なかなか

腹の座ったトップのようだ。

しかし流れはこちらにある、このまま2連勝して一気に勝負を決めたいところだ、頼むぞ葉山！

そんな監督の期待を胸に意気揚々と土俵に上がる葉山。対する沼田は直前に柳沢に聞いた

『西上の攻略法』を頭の中で復唱しながら歩を進める。

彼は生来デリケートなタイプだ。大太刀のピンチに土俵に上がる彼にとって、そのアドバイスは

ひとつの光明として彼の背中を押す。

大太刀高校１年、沼田　卓。１８９ｃｍ、８６ｋｇ

小学校から相撲クラブに通っていた彼ではあったが、当時は他の生徒と比べ背が低かったこともあり

練習でも試合でも勝つ事はあまりなかった。

そんな彼にとって、相撲を取っていることはある種のスターテスになっていた。

格闘技をやっている自分に、悪い意味で陶酔していたのだ。

中学２年の頃から彼は急激に身長が伸びる。だがそれは彼の相撲にいい影響は与えなかった。

急に成長したことが逆に彼のバランス感覚を狂わせ、相撲の取り方そのものを見失っていった。

こうして彼は恵まれた体躯を持ちながら、『心』の強さを持ち合わせ

ない『技』の未熟な
選手になってしまった。
そんな彼に転機が訪れる、相撲クラブ時代に世話になっていた桐仁に大太刀相撲部に誘われたのだ。
沼田の資質に気付いていた桐仁は、その『心』さえ何とかすれば、やがて大太刀のエースとなる
存在になれると確信していた。
皮肉にもこの春の団体戦への出場選手を決める部内戦、桐仁との一番がそのきっかけとなった。
自分はもちろん、他の相撲クラブの同級生たちも勝てなかった桐仁を倒すことで彼は
確かな自信を付けるに至る。
だが、それで人が突然別人になるわけではない、大太刀のピンチに出番が回ってきた彼は
かつての弱い心が顔を覗かせようとしていた。
そんな彼にとって、柳沢のアドバイスは救いですらあった。なにか心の芯を支えるものがあれば
人は逆境でも戦えるものだ。礼をしながら彼は考える、彼のアドバイスを生かすための取り口を。
―手をついて―
先鋒の高橋同様『狛犬型仕切り』で構える葉山に対し、沼田は少し下がって腰を下ろす。
柳沢の指摘がもし事実なら、それを最大に生かすためには・・・
―はっきよい―
バチィッ!
立ったと同時に葉山の張り手が沼田の顔面を張る。２発、３発、４発、止まらない。
「やっぱりか!」
桐仁が吐く。彼らの相撲は2年前、全国制覇を成した大太刀の相撲を取り入れている。
この張り手も相手を押すためのものではない。ダメージを与える

ための空手の、五條佑真の張りだ。
左右の手をピストンのように繰り出し、ひらすら相手を叩き続ける葉山。
「マズイな、押されとるでスグルのの奴・・・」
赤池が嘆く。決して押しの強い突きではないにもかかわらず、じりじりと後退する沼田。
それは力でも技でもなく『心』で押されているのが見て取れる。弱気の虫が顔を出せば
耐えられるものも耐えられなくなる。
「コラ卓、ワレ気合い入れんかいー！」
たまらず叫ぶ赤池。仮にも部内戦で自分を破った1年のライバルの不甲斐なさに声を荒げる。
「(う、うっせーな、見てろ！)」
心の中でそう呟き、押されながらも腰を割る。柳沢のアドバイスと赤池の叱咤が、折れ気味だった
沼田の心に火を入れる。
張り手のひとつを払いのけ前進、組みさえすれば体格差を生かして押し切れると突進する。
が、葉山の姿は既に無かった。突進に合わせた絶妙のタイミングで回り込み、背後に取り付こうとする。
「えっ!?」
回り込んだ葉山は、沼田との距離が遠い事に驚く。沼田は変化されたのもお構いなしに
そのまま土俵の反対側まで走っていく、慌てて追いかける葉山。
ズザァッ、という音と共に土俵際まで走った沼田は、徳俵に足をかけると体を返して葉山と向き直り、
土俵際ギリギリで腰を割る。追撃してきた葉山は再度張りに出るが、沼田は諸手を相手の両肩に添え、
ぐいっ、と土俵中央に押し返す。
そして両者の動きが、止まった。
不思議な光景だった。沼田も葉山も自分からは仕掛けず、お見合い

状態になって対峙している。
相撲においてはかなり珍しい、相手が動くのを待っている状況。
「ちっ！」
飯田監督が毒づく。気付かれたか、という顔をして。
「正解だったようだな。」
桐仁がちらりと柳沢の方を見る。こくりと頷いて土俵に視線を戻す柳沢。
西上は相手の背後に回り込む戦法を基本としている。だがもし相手が土俵際にいたら？
背後が土俵外なので回り込めない、それどころか横を取ろうとしてさえ土俵内にいられない
そう、土俵は『円い』のだから。
いわゆる背水の陣。ここに位置すれば相手も小細工なしで押しに来るしかない。
本来なら立った側が大ピンチな位置取りだが、膂力で勝るダチ高にとってここがむしろ
安全地帯ですらある、ここで待ち、無理に前に出ず捕まえてから確実に仕留める。
この瞬間、葉山の勝利への青写真は飛んで行った。
が、逆の感情が彼を支配する。相撲にとって絶体絶命の土俵際に自らを晒すとは！
俺には押し出せないとでも言うのか、ナメるのも大概にしろ！
「いかん！冷静に・・・」
飯田の声は遅かった。腰を割り、俵ひとつ分くらい超えてみせる、とぶちかましに出る葉山。
一方が熱くなれば、もう一方は冷静になっていた。一度勝負が止まったことで、相手の感情が
沼田にはよく見えていた。
土俵際を伝って葉山の突進を躱す。その先はもうない、かわされた時点で勝負はあっけなく決した。
―西、沼田君の勝ち！―

勝ち名乗りを受けて土俵を降り、ガッツポーズで笑顔を見せる沼田。
赤池は拍手しながらも「真のおかげやないか」と頭を小突くポーズを取る。
そんな中、陽川はよくやった、と沼田の肩を叩き、土俵に向かう。その姿は頼もしさすら感じられる。
―大将戦。東、横井君。西、陽川君―
西上の相撲は蛍のそれに似ている。そして陽川の相撲は、そういったスタイルの選手にとってまさに『天敵』と言ってよかった。
引きやいなしに落ちない筋肉で引き締まった体、変化する相手を逃がさず捕らえる長い腕、
そして捕まえたら逃さず仕留めるその腕力。現に蛍は稽古でも部内戦でも、この陽川にはほとんど勝つことが出来ずにいたのだ。
ましてや既に西上の相撲は大太刀にバレている、その欠点すらも。ぶちかましから回り込もうとする横井の脇を捕らえ、剛腕で無理矢理自分の正面に持ってくる、
あとは４つに組み、吊り上げて土俵の外に運ぶ、それで終わった。
―西、大太刀の勝ち！―
勝ち名乗りを受けられなかった西上が退場する。皆、涙を流しながら。
そこには小学生相手に細々と相撲を取ってきたチームはいない。県ベスト８まで進みながら
なお敗戦に悔し涙を流せる、確かな『強い』チームがあった。
飯田監督が自慢の選手の肩を叩き、こうハッパをかける。
「夏にリベンジだ！今日の悔しさを忘れるな！」

第３０番　真っ向勝負！

午前の部が終わり、ついにベスト４が出そろった、いよいよ準決勝！

第一試合　石神―常磐第三
第二試合　川人ー大太刀

ここからは土俵を１面に絞っての試合である。
西側のダチ高は西側、常磐第三の後ろに陣取り、試合を待つ。
―先鋒、東、石神高校、荒木。西、常磐第三、岩野―
東西から土俵に上がる両選手。常磐の岩野は２ｍ近い体躯に１５０ｋｇの重量を乗せた巨漢選手。
ただ、それでも荒木と相対すると、見る者にとって有利には移らない。
荒木の持つその肉体、鎧のような筋肉に加え、身にまとうその格闘技者のオーラが
対峙する相手を圧倒する未来を想像させる。
―はっきよい―
勝負は一方的だった。荒木はその懐に深々と潜り込むと、両下手を引いて一気の寄りで
ケリをつけた、寄り切られた体勢で呆然とする岩野。
ここまで相手を呼び込んでの投げに終始していた荒木、その情報をマネージャーから聞いていた
岩野にとってはまさかの負け方だった。
「あの荒木が電車道？ここまで見せなかったな。」
「むしろ、だからだよ。相手も一気に来るとは思わなかったんだろう。」
大峰の言葉に桐仁が答える。勝負が一瞬の相撲にとって、相手がこうしてくるだろうという
思い込みは禁物だ。昨年のＩＨの個人戦では蛍もそれを経験している、あの荒木にまさかの
変化負けを喫したことを鮮明に思い出す。

副将戦、今度は常磐第三の清水が石神の三宅を圧倒する。やはり今年の石神は今のところ
両エースに比して他が今一つなのかと思われたが、それでもまだ1年生の清水の強さは
会場を驚かせた。
「強敵出現だね。」
そう赤池と柳沢に語る蛍。これから3年間、彼らはライバルとして戦っていかなければ
ならない相手。
「おう、こいやこいや、望むところやで。」
強気の赤池と、緊張しながらもこくり頷く柳沢。選手スペースでいる沼田に至っては
今日いきなり清水と戦う可能性すらある。
ただ、それは限りなくゼロに近い可能性ではあるが。
―大将戦。東、沙田君。西、下山君―
決勝進出をかけて両選手が土俵に上がる、両校の応援団から檄が飛ぶ。
「「行け行け石高!おせおせ石高!」」
「「リンちゃーん、頑張れーっ!」」
男子校の石神と進学校の常磐第三、毛色の違う応援ではあるが、会場は否応なしに盛り上がる。
―手をついて―
睨み合う両者。沙田は無論の事だが、対する下山も負けるつもりはない、例え相手が『国宝』だろうと。
今年はいい1年が大勢入った、ならば主将の俺が一念発揮しないわけにはいかない、
大物を食って一気に全国へ行く!
―はっきよい!―
立ち合いと同時にかち上げを放つ下山。が、それを読んでいた沙田はヒジでガードすると
キレのある張り手で攻勢に出る。そして下山が張り返すタイミン

グで捌き、組み付きに行く。
　下手を引こうとする下山の腕をおっつけて殺し前に出る、沙田の必勝パターン。
「（くそが！そうそう思い通りにさせっか！）」
　下山はおっつけられてる右腕を上にあげて外し、そのまま背中越しにマワシを掴もうとする。
　それを察した沙田は即座に体を回し、左下手投げに出る。得意の『下弦の月』！
「ぐっ！」
　左足を前に出して踏ん張り残す下山。チームとしても成長を続ける常磐第三では、当然沙田の
　相撲の研究と対策も行っている、出し投げも想定内だ、と体を返し再度腰を割る。
「（へぇ・・・いいね、いい殺気だ。）」
　その粘りにほくそ笑む沙田。やはり相撲はこうでなくっちゃいけない、本気の殺気をぶつけ合う
　場所でなければ・・・
　―ゴツゥン―
　沙田の思考を、下山の素首落としが中断させる。さきほど上から回していた右腕をここぞとばかり
　相手の首根っこに叩きつけたのだ。
「（上等！）」
　両下手を引いている沙田は素首落としなどお構いなしに両下手を引きつけ、寄る。
　強烈な打撃なら喰らい慣れている、潮君、天王寺さん、そして日景、今さらこの程度で
　僕がどうこうなるか！
　土俵際まで下山を追い詰めた沙田は、そこから驚異の投げ技を披露する。両下手を捕らえたまま
　右手で投げ、左手で捻り、そして足で躱し（出し）投げを打つ。
　―3点式出し投げ『月輪（がちりん）』―

自らの出し投げと、あの鬼丸の『百鬼薙』を融合させたような技。それは下山の巨体を振り回し
半回転して土俵の外に問答無用で放り出す。
―東、沙田君の勝ち―
思っていたよりずっと激戦だったが、やはり決勝にコマを進めたのは石神だった。
土俵下に放り出され、文字通り土にまみれた下山であったが、潔く一礼して仲間の元へ。
主将として、3年生として、常磐第三の代表として、負けてもなお堂々とした態度で
夏に再起を誓う―

「先鋒大峰君、副将松本君、大将陽川君で行く、いいね！」
「ハイ！」
試合前、大太刀の準決勝の相手が川人に決まった時、蛍は選手にオーダーを伝える。
「このオーダー、意味は分かってるな。」
桐仁の言葉にうなずく選手たち。
川人はここまで先鋒と副将に大型選手を置き、大将は必ず大河内を配置してきた。
おそらく準決勝でもそれは変わらないだろう。
「真っ向勝負、ですね。」
松本の言葉に蛍と桐仁が揃って頷く。先鋒と副将の大型選手にはこちらも巨漢二人を当て
大将の大河内には体格や相撲の似た陽川をぶつける。
つまりダチ高と川人の小細工抜き、正面切っての力比べだ。
決勝の事など考えない、昨年の轍は踏まない、ここで全部出し切る、その意思を込めての
真っ向勝負！
―準決勝第二試合、東、川人高校。西、大太刀高校―
一昨年のＩＨ（インターハイ）全国王者と、昨年春の千葉県覇者の

一戦。両校の応援団はもちろん、
石神も、夏にリベンジを誓う各校の選手も、土俵に熱い視線を送る。
―東、佐々木君。西、大峰君―
大峰の相手は昨年のＩＨ予選で松本と対戦して敗れた佐々木だ。
借りを返すべく今度は
もう一人の巨漢、大峰と対峙する。
―はっきよい―
勝負は激しく、そして長引く。お互い得意の組み方が逆の『ケンカ四つ』、しかもどちらも
攻撃的な攻めの相撲。突っ張り合いから始まり、組んでからの巻き替え、そのスキに寄り、
投げで体を入れ替え、押し合い、吊り合う、重量級二人の激しい相撲に会場が沸く。
やがて土俵中央で両者が組み合ったまま動きを止める。二人とも呼吸は激しく乱れ、
それでも握るマワシには力がこもる。
「ぬぉらあーっ！」
有利な右四つで組んでいた大峰が意を決して寄る。一気に土俵際まで追い詰めるが、そこまでに
佐々木は巻き替えに成功し、自分の得意な左四つに体勢を変えていた。
俵に足をかけ、ふんばる佐々木。ここが勝負所と意を決し、寄り切ろうとする大峰。
「ぐおぉぉーーっ！」
佐々木が吼えた。と同時に大峰の巨体を完全に吊り上げる。そのまま体を半回転し、横から
大峰を吊り出そうとするが、疲労で腕の力が尽き、大峰を土俵に下ろす。
だが、大峰の右足は俵の外にあった。
―東、佐々木君の勝ち―
勝ち名乗りを受けても二人はすぐには立てない。疲労と過呼吸と

大汗を体にまといながら
やっとのことでふらついて土俵を降りる、まさに大相撲だった。
「まずは川人が先制、か。」
客席で沙田がそう漏らす。それを聞いた荒木はこう付け足した。
「この長い勝負で競り勝ったら、流れはソッチに行く。熱戦っていうのはそういうモンだ。」
「す、スマン・・・松本、頼む・・・」
未だ息を切らしながら大峰が返ってくる。入れ替わりに行く松本は任せろ、と一言告げて
呼び出しを待つ。
―副将戦。東、湊（みなと）君、西、松本君―

第３１番　笑顔と魔法

土俵上、巨漢の二人が対峙する。川人高校の湊、１９１ｃｍ１３５ｋｇと大太刀高校の松本、１８８ｃｍ１４２ｋｇ。
両者ともいわゆる『あんこ型』の相撲取り然とした体躯の持ち主。
『体』では互角の２人がいかなる『技』と『心』で、勝負するのか、大相撲さながらの光景に
観客の期待も高まる。
―はっきよい―
巨体が激突する。小気味よい肉のぶつかる音が、実は交通事故に匹敵する衝撃であることを
知る者はこの会場には多い。さぁ、ここからどうなる？
先手を取ったのは湊の方だ。得意の右四つで両マワシを引くと、そのままズイズイと寄りに出る。
が、土俵際まで来ると俵に足をかけた松本が粘りを見せる。無理に押そうと腰が浮いた湊のマワシを
掴むと、俵の足の掛かりを利して押し返す。
ここから両者の攻防が勢いを増す。投げ、捻り、寄り。がっぷり四つからの重量級の激しい戦いに
両校の応援のボルテージが増す。
「湊ー、前だ、前に出ろ！」
「康太ーっ！もっと腰を割れ！ガブれ!!」
「巻き替え狙ってるぞ―」
「足、気を付けろ！来るぞっ！」
幾多の攻防を経て、一度組み合った状態で止まる両者。既に息は荒く、呼吸で肩が揺れる。
しかし、両者の表情は対照的だった。
「ふんっ！」
湊が必死の形相で捻りを加える。松本は攻撃的ながら、どこか笑ったような表情でそれに耐える。
「へぇ、笑ってるよアイツ。」

決勝を控えた石神の沙田が、松本の表情を見て感心する。彼自身もよく土俵で笑みを見せる
ことがあるだけに、その心の強さに感心する。
隣に座る荒木は、逆に稽古時の沙田との取り組みを思い出してげんなりとした表情になる。
こういう奴は厄介なんだ、と。
「出たな、康太スマイル。」
「笑うと強いんだよなぁアイツ、何考えているのやら。」
ダチ高の面々がそう語る。あの表情が出てる時の松本はめっぽう強かった。
ただ、その真意は本人以外誰も知らない。
「(うん、僕は今、熱くなってる、熱い相撲を取れている!)」
2年前、中学3年だった彼は、正直相撲に飽いていた。
恵まれた体格で強かったことは強かったが、それでも望んで始めたわけではなく、将来相撲で
食っていくという気も無かった。
勧められて始め、惰性で続けているだけの相撲にモチベーションは沸かなかったのだ。
誘われてなんとなく見に行ってみたインターハイ、そこで見た景色で彼の相撲観は一変する。
小兵のその力士が、まさに鬼の表情で倍はありそうな大型力士を吹き飛ばさんばかりの勢いで
土俵外に突き出している姿を!
更に彼の心を揺さぶったのは、弾き出されているその巨漢力士の表情だ。体を割るその瞬間まで
負けじと必死の形相で耐え、飛ぶ瞬間さえも歯を食いしばり相手を睨み返すその『熱さ』に震えた。
相撲って、こんなに熱くなれる競技なんだ、と。
ほどなく彼は、その小兵力士の学校が、自分と同じ千葉県の高校であることを知る。
2日目以降も足しげく国技館に通った彼は、その学校—大太刀高校

の選手達の連日の
熱い熱い戦いに強く惹かれた。
後日、そんな彼のもとに、そのダチ高の諸岡がスカウトに現れる、無論イチもニもなく飛びついた。
入部当時のアイサツで、彼はこう宣言する。
―昨年の先輩たちのような熱い相撲を取りたいッス！―
春の大会、全国に続く道、その準決勝、相手は強豪川人高校、先鋒が破れここで自分が負けたら
チームが敗北するこの状況、そして死に物狂いで自分を倒そうとする相手の力士！
ここで熱くならずに、いつ熱くなる！
あの時見た両力士を思い出し、顔は綻び、力が漲る。あとは勝つだけだ！
湊の出し投げをこらえて向き直る。先に湊がマワシを取り直すが、松本はその外から
上手を引き、左右の両上手を引く。湊は両差し、松本は両上手で組み合う。
ここで松本は両上手を内へ内へと絞り込み、湊の両下手を中へ中へと押し込む、腹の中に。
「入った！今だ出ろっ！」
桐仁の声と同時に、松本が前に出て胸を合わせる。あんこ型のお腹にサンドイッチされた
湊の両下手は、この時に無力化されてしまう。
「しまった！」
懸命に腕を腹から抜きにかかる湊だが、構わず松本はがぶって出る。ようやく湊が腕を巻き替えた時
彼の足は俵を超えていた。
―西、松本君の勝ち！―
勝ち名乗りを受け、笑顔で土俵を降りガッツポーズを決める松本に、ダチ高全員が拍手を送る。
「出たな必殺、『お腹極め出し』」

ダチ校内では大峰相手のみ使えた、あんこ型の腹をもつ相手にしか使えない得意の型。
その大峰と、そして陽川といい笑顔でハイタッチをする松本。席に座ると天井を見上げ
心地よい充実感にしばし浸る。だが、それも一時のこと。
―大将戦。東、大河内君。西、陽川君―
陽川はばんばんと顔を叩いて気合を入れ土俵に上がる。一方の大河内は涼しげな顔で
眼鏡をチームメイトに預け、主将として円い戦地に赴く。
「なんや、ひょろそうなやっちゃの、陽川はんなら楽勝ちゃうか?」
そんな感想の赤池に、堀マネージャーが訂正を入れる。
「大河内　学。昨年インターハイ個人戦全国ベスト16、昨年の春には石高の沙田選手にも勝ってます。」
げっ!と驚く赤池。大丈夫なんかいな、と心配げに土俵を見る。そんな彼に桐仁はこう返す。
「大丈夫だ、陽川を信じてしっかり応援しろよ!」
桐仁は推察する。大河内１９０ｃｍ１１０ｋｇ、陽川１８８ｃｍ１００ｋｇ。似た体躯の両者ではあるが、
それでも彼はこの勝負、陽川有利と見ていたのだ。
腕力では陽川の方が絶対に上だろう。そして何より彼には向上心がある、大相撲を目指しており
強敵との対戦を何より望む、勝ち気で豪胆な『心』。
対する大河内はその手の長さからくる懐の深さ、そして体のキレで戦うタイプ。
ただ彼はどこか自分に酔う所があり、油断や慢心で星を落とす事もある。
陽川に比べてどこか『心』の弱さを感じる、そんな認識があったのだ。
桐仁は思い知る。そんな心の『繊細さ』、それすらも強さに繋がるという事を。
―はっきよい!―

ぶつかる両者。前の二番と違い、どちらも体のキレで速い相撲を取るタイプ。

立ち合いと、その直後の差し手争いで大方の勝負は決まってしまう。

右四つ得意の陽川はまず右下手を掴む。そして左手で大河内の右手を払いのけ、上手を探る。

これさえ掴めばこっちのものだ、あとはその剛腕が勝負を決めるだろう。

陽川に上手を許す直前、大河内は押しに出る。が、それは陽川の上体を少し起こし

両者の間に一瞬スキマを作っただけで、再びドン、と胸が合う。

次の瞬間、陽川は左の上手をがっちりと掴む。勝利への命綱、右四つが完成した！

「よおぉぉし！行けえぇぇぇっ！」

「組み手充分、勝負！」

ダチ高の応援が意気上がる。

対する川人の選手たちは・・・ほくそ笑んでいた。

「くっ!?」

なんだ？押せない、吊れない、投げれない。違和感に固まる陽川。

正面から組んでるはずの相手が、何故か斜め前にいるような相撲の取りにくさ、一体何が・・・？

ダチ高の選手たちも、動かない陽川に訝しがる。勝負に勿体を付けるタイプではない彼の

戸惑いが、勝ちを確信していた先ほどまでの感情に危険信号をともす。

「・・・頭、頭が逆だ！」

桐仁が吐き捨てる。右四つなら普通、相手の頭は自分の右に来る。当然左手が外（上手）

右手が内（下手）になる。だが陽川が組み手充になる直前、押して隙間が出来たその一瞬で

頭を逆の位置に持って行ったのだ。

―逆鞘（さかさや）―

川人の部員たちは、大河内のこの組み方をこう呼んでいた。下手が密着し、上手は逆に

伸びきったこの状態では誰しも力が出せない。だが大河内はこの体勢から力を出す相撲を

ずっと模索してきたのだ。誰もが力を出せない体勢だからこそ、ここで戦える技術を持てば

僕は負けない力士になれる。

繊細だからこその着眼点の違い、自分が強くなるのももちろんだが、相手の強さを

より確実に、効率的に殺す、まるで魔法のような戦法。そんな理外の発想に気付くのは、

むしろ豪胆よりも、繊細な『心』だったのだ。

陽川は頭の位置を入れ変えようと、マワシを離さずに上半身を引く。だがこの体勢に慣れた

大河内がそのスキを見逃すハズが無かった。素早く寄りに出て一気に陽川を土俵際に

追い詰める。まるで斜めから押されてるような違和感に、思うように抵抗の姿勢が取れない。

俵に足が掛かったその時、大河内はその伸びきった左上手で投げを打つ。

だがそれは今まで斜めにいた違和感のあった陽川を、わざわざ自分の正面に戻す行為だった。

足さばきで耐えた陽川は、今度こそ万全の体制をと、組みに行く。

「駄目だーっ！」

蛍の声は遅かった。右下手が深く刺さっている状態での左からの投げ、ここからの大河内の

必殺技を忘れていたのだ。

―呼び戻し『荒沸（あらにえ）』―

差し込んだ右手で、逆方向にすくい投げを放つ。まるで大河内の右手を鉄棒にして

逆上がりするように空中で波打つ陽川の体。そして・・・

―ドシャアァアッ―

背中から落ちる陽川、天を仰ぐダチ高。この瞬間、彼らの全国への夢は、またしても潰えた。

戦力としては十分なはずだった、稽古量も他校より積んできたつもりだ、油断も無く総力戦で挑んだ。

それでも、全国への道は、繋がらなかった。

「お疲れ様。」

蛍が選手たちを労う。だが選手たちの落胆は隠せない。昨年秋の合宿で感じた全国『で』の

手ごたえは何だったのか。全国『へ』すら叶わなかった自分達が、何を・・・

「下を向かない!」

蛍がぱんっ!と手を打ち、皆の顔を起こす。そう、彼は知っている。こういう時に皆に伝える言葉、前部長が言ってくれた、立ち直るための『魔法の言葉』。

「まだ夏がある!だから顔を上げ、前を向こう!」

第３２番　がんばれ１年生

春の団体戦に続き、今年もやってきた関東新人戦。
関東各県が持ち回りで開催しているこの大会、今年は地元千葉県が開催地という事もあり
ダチ高メンバー全員が一年生の活躍を見ようと応援に来ている。
さぁ、赤池、柳沢のデビュー戦、および沼田の奮闘はいかに？
「おい、見ろよ、大太刀だぜ。おととし全国制覇の。」
「昨年優勝の松本もいるぞ、隣りは大峰か、っていうかでけぇなー。」
やはり強豪の一角と見られているのか、今年も注目度はかなり高い。
なんとなく誇らしげに思う2，３年生とは裏腹に、１年生の３人はそれが無言のプレッシャーとなって
肌を刺す。
自陣のテントに荷物を置き、各土俵に移動しようかと思ったその時、蛍は背後から
声をかけられる。
「おー、来たなダチ高、久しぶり。」
「あ・・・狩谷君！」
すでにマワシ姿の巨漢たちの先頭にいたのは、相撲の名門、埼玉県栄華大付属の３年生、狩谷俊。
昨年秋の合宿で胸を合わせた国宝『小龍景光』。
「お久しぶりです。そうそう、世界大会優勝おめでとうございます。」
「ああ、サンキュな、お前らとの稽古がいいリハーサルになったよ。」
彼は昨年秋、ヨーロッパで開催された相撲の世界選手権に軽量級として出場し、見事表彰台の
中央に上がって見せた。
だが、そんな彼も今は試合出場がめっきり減っている。その原因は彼の右手に握られている
杖と、それでもやや引きずっている足取りが全てを物語っていた。
蛍も、桐仁も、他の合宿で顔を見知った面々も事情を察して何も言

わない
　が、気を使わせまいとしたのか、狩谷自身がその話題を振ってくる。
「ウチは春の全国なんだが、あいにく俺はこのザマでね、1年生の引率ってワケさ。」
　杖を掲げてそう語る狩谷。その一言に驚くダチ高1年。
「え・・・うしろ全員1年、なんスか？」
　狩谷に続く5人の巨漢を見て沼田がそうこぼす。相撲の名門だけあって、毎年関東中から
　プロ志望の生徒が集まってくる栄大付属。今年の1年もツブ揃いのようだ。
「ダチ高と栄大の組み合わせかよ。」
　そう言って横から会話に加わるモヒカンヘアーの男。ジャージの胸には『常磐第三』の文字。
「あ、常磐第三の下山選手。君も一年生の引率？」
　まぁな、と蛍を一瞥してから狩谷を見る下山。
「見た顔だな・・・」
「知らねぇよ。」
　そっけなく返す狩谷。その反応に常磐の一年生が険しい顔をし、栄大の面々と睨み合う。
「まぁまぁ、2年前にこの大会で鬼丸に負けた者同士、仲良くすれば？」
　桐仁の挑発に両校の視線が大太刀に刺さる。栄大と常磐の1年生が敵意剥き出しでダチ高を睨む。
　蛍は沼田と柳沢の背中をぽん、と叩いて指示を出す。
「気持ちでで負けちゃダメだよ、睨み返して！」
　桐仁の意図を受け、蛍がふたりをけしかける。相撲は格闘技、相手に飲まれるようでは勝ちはない、
　敵意を受け止め、ぶつけるのは勝負以前の問題だ。
　もちろん赤池にはそのアドバイスは無用で、既に両校の1年にガンを飛ばしまくっている。
「君達、今からそんなに入れ込んで大丈夫かい？」

事態をややこしくしに現れたのは川人の大河内だ。春の団体戦で敗れた陽川が厳しい顔つきになる。
「まぁウチの1年は間違いなくこの大会を獲るだろうね、君達には気の毒だけど。」
メガネをくいっ、と上げながら、相変わらずの自信家ぶりを披露する大河内。
「春の決勝戦、残念でしたねぇ。」
桐仁がメガネの繋ぎ部分を抑えてそう返す。春の大会県予選決勝、川人は石神に2―1で敗れ
惜しくも連覇はならなかった。
「なに、夏に借りは返すよ。」
「そいつは俺らのセリフだぜ。」
「こっちも負けませんよ!」
下山と蛍が会話に加わる、激しい眼光を散らす千葉県強豪3高の主将。
「まぁまぁ県予選落ちの皆さん、仲良くしろや。」
狩谷がにかっ、と歯を見せながら3人を、いや3高を挑発する。また一段と空気が固まり
十字に隊列を組んだ4高の1年が激しく視線を交錯させる。
もっとも各高の3年がこうも対決を煽るのは、これから戦う1年の空気を暖気させる
狙いがあるようだが、効果はてきめんだった。
「んじゃな。」
「行くぞ!」
「では、また」
3人の引率に連れられて各校が解散し、自陣のテントに戻っていく。
「ふぅ・・・試合前から疲れるよ全く。」
沼田がげんなりした表情でこぼす。柳沢に至ってはへなへなとその場にへたり込む、顔中脂汗だらけだ。
マネージャーの千鶴子がノートをぱらぱらめくってデータを調べ

る。
「常磐第三は昨年全中のベスト8が2人、栄大は3人います、要注意ですね。」
有望な新人が集まる栄大は言わずもがな、常磐第三も近年相撲には力を入れている。
川人の新人の実力は未知数だが、ダチ高1年にとって楽な戦いにはならなさそうだ。
「まずは柳沢君ですね、A土俵の3試合目です。相手は・・・あらら、川人高の選手ですね。」
―東、大太刀、柳沢。西、川人、喜多―
呼び出しを受けて両者が土俵に上がる。相手の喜多は・・・小さい、細い、そして筋肉が目立たない。
どうみても相撲を取るタイプには見えない、太ってる分むしろ柳沢の方が強そうにすら見える。
よし!と心の中でガッツポーズするダチ高の面々。この春の新人戦、中には柳沢同様明らかに
相撲初心者の選手も混じって存在している。同じく初心者の柳沢にとって『当たり』を引いたようだ。
連日の稽古で、なんとかぶつかり稽古で3人までは押し出せるようになった柳沢。
引きに落ちないように体重を浴びせて寄り切るという唯一の勝ちパターンが通用するかどうか・・・
―はっきよい―
正面からぶつかる両者。柳沢は練習通りに慎重に両マワシを引くと、やや前のめりになって
ずるずると喜多を押し込んでいく。いいぞ、稽古の成果が出てる、行け!
土俵際まで到着し、俵に足をかけて残す相手に体重を浴びせる。両者の上半身が浮き上がり、
腕が伸びきったことで柳沢の掴んでいたマワシがするっ、と切れる。

ここから喜多の逆襲、マワシが切れたことで再び腰が据わり、逆に両マワシを引いた喜多が
逆に柳沢を土俵の反対側まで押し返す。
「アカン・・・力尽きとるわ真のヤツ。」
赤池が嘆く。まだ決着はついてないのに、すでに精魂尽き果てた表情の柳沢。
視界から遠ざかっていく俵が、彼にはまるで運動会のゴールテープが遠ざかっていくように
見えていた。
―寄り切って、西、喜多の勝ち―
呼吸も絶え絶えに土俵を降りる柳沢。反対側ではやはりバテバテの喜多が、大河内はじめ
川人のチームメイトから手洗い祝福を受けている。
「勝ちやがったよコイツ!」
「俺らより先に1勝かよ!やったなオイ。」
その激励から察するに、喜多もまた見た目通りの初心者だったのだろう。公式戦初勝利という
金星を見事挙げた喜多と、大魚を逃した柳沢の表情が対照的だった。
「すいま、せん・・・あと、少し、だったのに・・・」
息も絶え絶えに柳沢が謝罪する。大太刀の1年生として不甲斐ない相撲を取ってしまった。
「僕のデビュー戦は1秒で負けたよ。これからこれから。」
蛍のフォローに柳沢は、え?という表情。桐仁がそうそう、そうだったなと肯定すると
本当に?という表情で蛍を見る。相撲部部長、並み居る巨漢に対して小兵ながら引けを
取ない戦いをする、この三ツ橋部長が・・・1秒で?
「さぁ、見るのも稽古だよ。自分が相撲を取っているつもりで、他の試合をよく見よう。」
そう柳沢を励ます蛍。ふと、それが誰かの受け売りだった事を思い

出す。
「(ああ、僕の時も小関部長に同じようなこと言われたっけ・・・強くなるといいな、柳沢君。)」
―東、栄大付属、久我。西、大太刀、沼田―
皮肉にも大太刀の3人は全員がA土俵での1回戦。移動しなくていいのは幸いだが、どうも
このブロックは強豪選手がひしめいている気がしてならない。
相手の久我はダチ高の松本に匹敵する大型選手、こちらのアドバンテージといえば、沼田はすでに
公式戦を経験しているという事。さてどうなる?
―はっきよい―
久我は強かった。当たった瞬間に沼田の勝つ気をぽっきりと折るほどに。
電車道で一気に寄ると、そのまま沼田を腹に乗せて吊り上げ、あっけなく土俵を割らせる。
栄大のレギュラーは今、春の全国に行ってるハズなんだが・・・戦力外でこの強さとは。
土俵を降りる久我を迎える狩谷はじめ栄大の選手も、拍手はするものの『当然だ』という表情。
どうやら部内でも強さは折り紙付きのようだ。
一方で沼田は「いやぁ、めっちゃ強いッスねぇ、あいつ。」と笑って頭を掻く。
そんな彼に、もっと悔しがれよと説教する2年生の面々。
「次はワイやな!」
そう言って顔と言わず体と言わず叩きまくって気合を入れる赤池。
高校で、そして関東での公式戦初勝利に向かって意気上がる、叩いた自分の体があちこち
赤く火照るほどに。
「赤池と沼田の性格を足して二等分できないものかなぁ・・・」
桐仁が嘆く。実力伯仲の二人だが、性格があまりにも対照的で困る。さてさて・・・」

―東、常磐第三、清水。西、大太刀、赤池―

クジ運が悪いのはダチ高の伝統なのか、赤池の相手は春の団体でレギュラーとして活躍し

準決勝で石神の三宅をも圧倒してみせた清水。

それでも臆することなく対峙する赤池のその勝ち気な性格は、確かに沼田に見習わせたいものだ。

―はっきよい―

両者がぶつかる。激しい差し手争いの末、先に両マワシを引いたのは赤池の方だ。

得意の形が出来た彼は一気に寄る、土俵際まで来たら今度は吊り合いだ。お互いがっぷり四つのまま

歯を食いしばり、真っ赤になって相手を持ち上げようとする。

「ふごおぉおぉっ！」

「ん～～～があぁぁぁ！」

重量級同士の力の入った吊り合い、その勝敗を左右したのは両者の身長差だった。

赤池は太ってはいるが身長は１７５ｃｍ、相手より低い分重心も下にある、吊り合いでは彼に分があった。

「ぬごおぉぉっ!!」

気合一閃、清水を高々と持ち上げ、土俵外に運び、降ろす。決着だ！

―東、清水君の勝ち―

「ぬあ？」

その声に行司を睨む赤池。と、行司は赤池の足元を指差す。

「・・・あ、しもた。」

赤池の左足が俵の外に出ている、なんとなんと決まり手『勇み足』。

頭を抱えるダチ高の面々。確かに彼に沼田の冷静さがあれば土俵の境も見えていただろうに・・・

こうして今年のダチ高１年生の新人戦は、全員１回戦敗退という屈

辱の結果で終わった。

清水を迎える下山が、観客席で見ていた狩谷が、大河内が、同じ感想を漏らす。

『今年のダチ高1年はハズレ年だな・・・2年後はウチの天下が来るぜ！』と。

彼らは知らない。2年後のダチ高が高校相撲に大いなる旋風を巻き起こすことを。

第３３番　夏の海にて

青い空、沸き立つ白い入道雲、きらめく海、果てしない水平線、爽やかな風、
そして色とりどりの水着を纏った少女たち―
「（ここが天国か）」
悟り切ったような表情で、同じ感想を心で述べるダチ高相撲部員（一部削除）。
過酷な稽古で疲れ切った心と体に、吹き抜ける清涼剤のごとく光景。
千葉県、九十九里浜の某海水浴場、海開き前の浜でのひととき、青春の夏―

「うー・・・あづ～～」
「部長～、冷房入れられないんですかぁ・・・」
６月下旬、ダチ高の相撲部室はサウナかと思われるほどの熱気に包まれていた。
空梅雨のせいもあって、まだ7月前だというのに連日３５度に迫る気温、ましてやプレハブの
部室内の温度と湿度、もはやスポーツをする環境ではなくなっていた。
「男子はまだいいじゃないですか～、私たちなんかこの環境の中ジャージですよぉ。」
柚子香が掌でぱたぱた仰ぎながらため息をつく。彼女も隣の小林も大汗でジャージがぐっしょり
濡れている状態だ、悲しいかな色気は皆無ではあるが。
「それも状況次第だよ、組み合うと暑くて暑くて・・・何が悲しゅうてこの猛暑の中
男同士で裸で組み合って温め合わなきゃならんのだか・・・」
沼田の抗議に一同『相撲だからしゃーないだろ』という感想を思う。
ただ堀マネージャーだけは

少し顔を赤らめて明後日の方向を向いているのだが。
「水分補給はこまめにねー、熱中症だけは厳に避けるよう、学校側からのお達しだから。」
蛍がペットボトルの麦茶を飲みながら皆に忠告する。飲んでもすぐ全部汗で出てしまうのだが
それでも飲まなければ救急車を呼びかねない状況だ。
赤池は水道の水を頭からかぶっているし、大峰はもうとっくに済んだはずの柔軟、股割りで
地面にべったり張り付いて、土の冷たさで凌ぐ有り様。
「ほらほら、他校だってこの暑さで稽古してるんだ、辛抱しろ。」
そんな桐仁の言葉に、そう言われちゃしょうがない、とばかりに立ち上がって稽古を再開する。
その光景を部室の隅で腕組みしながら、顧問の諸岡はうーん、と頭をひねって考える。
大型の扇風機を入れる案も考えたが、そもそも部室は下が土である、風なんか起こそうものなら
室内が砂ぼこりで荒れ狂うのは目に見えている、無論大型クーラーを入れるような予算は無いし・・・。
「どうしたもんかねぇ・・・」
連日の猛暑の中の稽古、いくら心が鍛えられるとは言え、これではインターハイまで体も持つまい、
彼は色々ツテを頼って、この状況を打破する方法を模索していく。

「合同稽古?」
3日後、クーラーの効いた職員室に呼び出された蛍たちは、その諸岡の提案に驚く。
インターハイ県予選を直前に控えたこの時期、どこも他校に手の内は見せたくないものだ。
弱小高同士ならそういうこともあるだろうが、ダチ高は全国出場を目標に稽古しているし
そんなウチとよく合同稽古など取り付けたなぁ、と。

「まぁ合宿といえば聞こえはいいが、実際には息抜きみたいなものと思えばいい、
　このところの暑さとオーバーワーク気味なのが気になってね。」
　ますます分からない、それらに対する息抜きなら練習休みにすればいいのに、
　合同稽古なんかやったら、ますます熱が入って疲れを溜め込むコトになるんじゃ・・・
　そんな蛍たちの疑問は、親指を立てながらの諸岡の一言で一気に吹っ飛んだ。
「行き先は海だ!・もちろん泳ぎ放題だよ。」
　かくしてダチ高のインターハイ前の最終調整、海合宿がスタートした。

「「こんにちわーーっす、ようこそ大太刀高校の皆さん」」
　海際の学校に到着したバスを出迎えたのは7人の女子高生だ。その際には一際長身の
　20代と思われる女性が立っている。
　いきなりのこの嬉しい歓迎は何?と若干不安がる一同の中、彼女らを見た柚子香が思わず
　声を上げる。
「あーーっ、い、池西選手!」
「お久しぶりー、堀さん。」
　九十九里高女子相撲部現部長、池西　檸檬（いけにし　れもん）。
　昨年夏のＩＨ、女子相撲千葉県予選の準々決勝で柚子香が対戦し、敗れた相手。
　その後彼女は全国まで進み、ベスト4まで勝ち進んだが、3位決定戦で敗れ表彰台を逃していた。
「あ、ひょっとしてこの合宿って・・・」
　諸岡の方を見る柚子香と小林に対し、諸岡はうんうんと頷いて見せる。
　男子は心身の休養と英気を養い、女子は少しでも多くの対人戦をこ

なしてＩＨに備えるのが目的だ。
「九十九里高女子相撲部顧問の南です、ライフセイバーの資格も持ってるから安心して泳いでね。」
長身の女性がそう言うのを皮切りに、それぞれが自己紹介していく。
「今日は午前中、みんなで海岸の掃除ね。終わったら自由時間だから楽しんで。」
南顧問の説明によると、彼女はこの学校のすぐそばの海水浴場の組合員のひとりだそうだ。
毎年部員がオープン前の海水浴場の清掃を担当し、その見返りとして特定の日数、女子相撲部員に
監視付き限定で開放しているらしい。
実は南顧問、元レスリングの女子選手で、諸岡の後輩だったりする。
そのツテもあって
合同稽古の約束を取りつけることに成功したのだ。
「でもこの合宿って、そちらのメリット薄くないですか?」
そう返す柚子香に、池西が笑顔で応える。
「そんなコトないよ、女子相撲部同士、交流があるのはいい事よ。」
うんうんと頷く女子部員たち。
「なんせ女子相撲は人気なくってねー、やると絶対面白いのに。」
「同志が欲しいのよ、よろしくね、ちずちゃんゆずちゃんにさなえちゃん。」
池西いわく、この九十九里高は数年前、男子相撲部が廃部になり、その後に残った土俵を使って
女子相撲部を立ち上げたのが始まりらしい。
女子柔道出身の池西も、入学当時に先輩から猛烈な勧誘を受け入部に至ったとか、
やってみてどっぷりハマったのは、今の彼女の強さから容易に察することができる。
「あ、私のコトはレモンって呼んでね。さぁ、時間は有限よ。さっそく海岸に行こう!」

池西レモン部長の号令の元、早速ゴミ袋を持って海岸に突撃する若人たち。
かくして午前中で海岸はすっかりキレイになり、そして話は冒頭へと繋がるのである。
「ヒャッホーっ！」
「いぇーい！」
貸し切りの海に次々とダイブする部員たち。オープン前の海はまだ少し冷たく、火照った体にありがたく染み渡る。
いやそれは二の次だろう、普段女子に縁のない相撲部員たちにとって、華やかな水着に身を包んだ女子と海水浴など考えもしなかった青春だ。
それは女子たちも同じだったようで、水を掛け合ったりビーチボールをぶつけてきたりと中々のはしゃぎっぷりである。
何故か海に近づかなかった陽川はほどなくカナヅチがばれ、全員で海に放り込まれたり
持久力に自信がある幸田は水泳自慢の女子と延々並行して泳ぎ勝負したり、それを見た桐仁は心肺機能の強化になるかと海に潜って数を数えたり、南顧問の指導の元、ライフセーバーの旗取り競技に一同が参加し大いに盛り上がったりと、それぞれが海を満喫する。
が、相撲部の悲しさと言うか、海遊びは次第に稽古を含んだものになっていく。
「腰まで海に浸かってすり足すると面白いぜ。」
「波の満ち引きでバランス保つの難しいね。」
「波が来た時にぶつかり稽古の要領で沖に走るといいわよ。」
「稽古しようと思ったら浜ですぐ出来るのがいいな。」
「マメに海に入れば熱中症の心配もないしねー。」
そんな光景を見ながら、諸岡と南の両顧問はやれやれ、と笑う、

なんにせよダチ高男子部員にとってはいいリフレッシュになったようだ。

夕食、バーベキューをつつきながら歓談する一同に諸岡が声をかける。

「えー、明日の予定だが、女子の３人は九十九里高との合同練習だ、しっかり胸を借りるように。」

ハイ!と答えるゆずたちにレモンがよろしくね、と肩を叩く。

「で、男子だが、明日は浜で自由にしていい。」

え?と不思議がる男子部員。てっきり明日からはみっちり稽古だと思ってたんだが・・・

その理由は、次の諸岡の言葉で明らかにされる。

「明後日、九十九里高の土俵でインターハイ出場選手を決める部内戦を行うからね、疲れを残さず
体調を万全にしておくように!」

びりっ!と緊張が走る。蛍と桐仁にとっては最後の大会、その出場枠を争う部内戦、

まさか遠征先で行うことになるとは・・・

「アウェイの土俵で実力を発揮できなきゃ意味がない、そういう意味でもここでの部内戦は意味がある、

本番を想定してのギャラリーもいるし、みんな全力を尽くすように!」

第３４番　男子の悩み、女子の悩み

―１人負け確の奴がいるからなぁ―

―数合わせにしたってもうすこしマシなのはいなかったのかね―

『ろくにスポーツ経験もないんだろ、おこがましいと思わねぇ？』

―頼りねぇなぁ―

「何だよ、変化なんて汚ねぇマネしたのに前も勝てなかったの？」

『気の毒にな、なまじ仲間が強いせいでこんな場違いなところに放り込まれてよ』

―ダメだよ変化なんて汚い真似は―

「勝てなきゃ結局、無意味」

『ハッハッハッ、結局最後まで勝てねぇんじゃねーか、ホタル』

―いてもいなくても一緒、何もしてないのと一緒だ―

―がばぁっ！―

「はぁっ、はぁっ、はぁっ・・・」

動機が止まない。脂汗が頬を伝う・・・熱く、冷たい汗が。

「（また・・・あの夢）」

宿舎代わりに使っているオープン前の海の家、その雑魚寝スペース。

仲間の寝息やイビキが響く中、蛍が悪夢に飛び起きたのは夜中の２：００。

ふぅ、とため息をつく。そういや、今日はロクに稽古をしなかったもんな・・・

合宿初日、海の掃除と海水浴で久々に本格的な稽古から離れられた日。

そう、相撲をしなかった日に限って見る夢、後悔の記憶、消せない過去―

熱帯夜の熱さと、夢で見た冷や汗が混じって気持ち悪い。うなされて皆を

起こさなかったことにほっとしつつ、布団から起き上がり、部屋の外へ。

「・・・三ツ橋部長、どこ行くんです?」

そう声をかけてきたのは幸田だった。

「あ、起こしちゃった?ごめん。」

「いいッスよ、俺も大峰のイビキうるさくて眠れなくって・・・」

うん、ちょっと水分補給に、と言うと俺も行きます、と起き出してくる。

―パシュッ―

自販機でジュースを買い、その栓を抜いて喉を潤す。

部屋の中は蒸し熱いが、外は海風が心地よく吹いて、幾分気分が落ち着く。

「なんかうなされてたみたいですけど、何かあったんスか?」

「うん、ちょっと夢で嫌なことを思い出してね・・・」

そう返す蛍に、幸田は心配げに聞く。

「ひょっとして、春の部内戦のコトっすか?」

昨日聞いた合宿スケジュール、明後日の、いやもう明日か。インターハイ出場選手を決める部内戦、

それを聞いたから、春に負けて大会に出られなかったことがプレッシャーになっているのでは、と

推察したらしい。

「ううん、そうじゃないよ。もっと昔の話。」

幸田は知らない。元々ラグビー選手だった彼は、一年半前の入部当時、ダチ高が全国制覇した事すら

知らなかった。その中で蛍がどういうポジションだったのか、公式戦の成績も含めて。

「なんだ・・ちょっとホッとしましたよ。俺たちが部内戦に勝ったの

を気に病んでるかと思って。」
春の部内戦、蛍と桐仁は下級生に負け、出場枠に入れなかった。それだけならまだしも
下級生たちが彼らに取った戦法は、徹底したふたりの『弱点狙い』だった。
桐仁には徹底した持久戦を、蛍には変化を封じる相撲を。それは下級生が2人の実力を
認めていればこそであったが、それでも3年生の出番を潰し、なおかつ目標であった
全国に行けなかったことを幸田は申し訳なく思っていた。
「それは無いよ、だって明日は僕も桐仁も勝つから。もちろん君にもね。」
「お、言いますねぇ。」
変化の三ツ橋、突進の幸田。ここ2年ずっとペア特訓で胸を合わせ続けてきた2人、
だが2人は意外に、お互いの事を知らなかった。
「そう言えばラグビーやってたんだったね、どうして高校では相撲を？」
その蛍の質問に、あ、という顔をして、ため息をひとつ吐く幸田。
「個人競技やりたかったんスよ、しがらみの無い、自分だけの競技。」
そう言って、皆が雑魚寝する部屋を見る。
「なのに不思議なもんですね、やっぱり仲間がいて、一緒に全国を目指してる。部内戦なんて
しがらみも込みでね。」
そう自重気味に語る幸田の顔を見て蛍は思う、何かあったのかな、と。
「中学の時の事、聞いていいかな？」
「・・・いいですよ。」
幸田　純一
彼には親友がいた。運動神経は彼よりはるかに劣っていたが、よく一緒に遊び、学んだ友人。

中学に入学した時、彼はラグビー部に入り、その友人も誘った。幸田は持ち前の足の速さで
2年生からレギュラーを務めたが、その友人は3年になっても補欠で、試合に出ることは無かった。
「努力はしてたんスよ、アイツも。」
そんな彼にも晴れ舞台を、試合出場を経験させてやりたかった。そしてそれは普通に実現する
ハズだった。
元々彼の中学のラグビー部は、さほど強豪というわけでもない、公式戦最後の試合には
3年生は思い出作りにと、入れ代わり立ち代わり全員出るのが毎年の恒例だった。
そして最後の大会の3回戦、相手は県下有数の強豪中学。ここが彼らの最後の試合になると思われていた。
「相手のエースが前の試合でケガしてて、思いがけず接戦になっちゃったんです。」
先制トライを挙げ、その直後返される。リードしては追いつかれるの展開で、チームは欲を出した。
これなら番狂わせで勝てるのでは、そんな状況がベストメンバーからの交代を許さなかったのだ。
これで勝てれば次の試合がある、いや、ひょっとしたら全国に・・・と。
「負けたんだ。」
蛍の言葉にこくり頷く幸田。
「ノーサイド（試合終了）の直前にトライ決められて、キックも入れられて。その試合で
そこまでずっと得点リードしてたんですけどね、初めて逆転されたんです、試合終了と同時に。」
選手たちは泣かなかった。いや、泣けなかった。元々勝てるとは思っていなかった試合だ。
泣いていたのは彼の友人だった。3年間ひたすら努力を重ねてき

た、ようやく晴れ舞台が
　来るはずだった。だが非情にもその日、彼がフィールドを駆けることは無かった。
「すごく申し訳なかったって言うか、やり切れなかったですね。アイツの3年を無駄に
　しちまったような気がして・・・」
「それは、違うと思うよ。」
「え?」
「その友達は、レギュラーより劣っていたんだよね。」
「ま、まぁ。」
「それでその友達が出場してて、勝てるかもしれない試合を壊していたら、きっと彼はもっと後悔する。」
「あ・・・」
　その言葉に、幸田は反論することが出来なかった。
　蛍はその友人に自分を重ねる。分不相応の舞台に出て、ひたすら足を引っ張り続けた2年前の自分。
　そのダチ高が全国制覇した事で、自分はなお傷付いた。皆が活躍する中、自分だけが全国の舞台で
　負けという恥をさらし続けてきたから。
　でも、もしダチ高が負けていたら、それは取りも直さず自分の責任だ。5戦で3勝が勝ちの条件なら
　自分の1敗でチームが負けたら当然己の責任になる。
　もしそうなっていたら、多分今とは違う後悔を蛍は抱えていただろう。
「で、その友達は?」
「違う学校に進学しました、あれから会ってないッスよ。」
　そう、と返して、蛍はこう続けた。
「ラグビー、続けているといいね。」
「はい!」
　そう、続けていればいつかは試合に出られるだろう。そうすれば過去の悔しさは糧にできる。

・・・なら自分は？
確かに2年の時、公式戦で初勝利は手にした。しかしそれで『全国優勝したチームで全敗した男』
の汚名が消えるわけではない。
かつて鳥取白楼戦に勝った時も、栄大付属に勝って全国優勝した時も、嬉しさの中にも、
「せめて自分も1勝でもしていれば」と思わずにはいられなかった。
優勝に全く貢献しなかった優勝チームの一員。それは蛍がずっと背負っていく十字架―

わっしょい、わっしょい、わっしょい！
合宿二日目、柚子香と小林は九十九里高の女子相撲部に交じって、朝の砂浜をランニングする。
普段は二人だけの稽古だから、こうして大勢で練習するのは新鮮さがあり、朝の浜辺の爽快さもあって
苦しさの中にも笑みがこぼれる。
海岸線を1往復し、学校の門をくぐって屋外にある土俵まで走り切る。
「ふへーっ、し、しんどいー。」
千鶴子にタオルを貰いながらそうこぼす、小林に至っては過呼吸にあえぎながらスポーツドリンクを
喉に流し込んでいる。普段の稽古じゃランニングってのは無いからなぁ・・・
「はいはーい、一息ついたらすぐ柔軟よ、準備して！」
池西レモン部長のハッパに、はぁーい、と応えて輪になる一同。念入りな柔軟運動の後、
すり足、受け身、ハーフスクワットなどをこなしていく。どうやらここではスクワットが
四股の代わりらしい。
「貴方たちがいるせいでちょっと飛ばし気味だったけど、さすがに付

いてくるわね。」
レモンが上機嫌で柚子香たちに言う。ゆず達にしてもダチ高のメンツとして、そう簡単に
音を上げるわけにはいかない、やはり自分たちの学校が低くみられるのは嫌だから。
ぶつかり稽古を経て、申し合いに移る。柚子香も小林も、それぞれ個性的な相撲を取る
九十九里高の選手たちと胸を合わせる。
「堀さん前さばき上手いねぇ、ちっとも自分の形に出来ないし。」
そう褒めてくれる副部長の和田に頭を掻いて返すゆず。
「あー、いつもの稽古相手に差し手争いに負けると終わりますからねー、ああいう風に。」
そう言って土俵を見る。なんと部長のレモンが小林に高々と吊り上げられている。
「すごっ！レモン部長を軽々と!?」
「両マワシ引くと男子でも持ち上げるんですよ、あの娘。」
驚く女子部員にゆずが解説を入れる。流石に松本や大峰は無理だが、陽川以下の体重の相手なら
両マワシを引けばそのまま吊り上げる程の腕力と腰の使い方の上手さがあった。
無論柚子香なら軽々運ばれる、彼女と相撲を取る時はとにかく両マワシを持たれないことが
前提条件になっていて、それがさらに柚子香の前さばきを鍛えていたのだ。

昼食時、食べ終わったゆずは砂浜に男子の様子を見に行ってみる、邪魔にならないように影から
こっそりと。
皆、各々稽古をしてるようだが、やはり表情は硬い。無理もない、明日はインターハイの
出場選手を決める部内戦、目の前の仲間が明日にはライバルとなる

のだから。
と、そんなゆずの背後にレモンがぴったりと取り付き、声をかける。
「で、本命は誰かな～？」
「ひゃっ!?」
いきなり背後に取り付かれ、思わず悲鳴を上げる、慌てて木の影に引っ込む2人。
幸い海風のおかげで男子には気付かれなかったようだ。
というかレモンだけじゃなく、女子全員がしっかり集合している。
「本命ですか～、やっぱり大峰かなぁ。」
「えっ！ゆずちゃん・・・強面フェチ？」
は？と目を丸くして固まること数秒、意味を理解したゆずが慌てて否定する。
「そっちですか！違います違います大峰じゃありません！」
「ってコトは、他に本命がいるのね～」
休憩中はすっかり女子モードのようだ。目ざとく言葉の裏を突き、ゆずに詰め寄る面々、
女子しかいない彼女たちにすれば、大勢の男子に囲まれて部活をするゆず達は少し羨ましい存在である。
せめて雰囲気だけでもおすそ分けを、と言うのが彼女たちの本音だろう。
「まぁ、いることはいますけどね・・・」
おおっ！と色めき立つ女子達。千鶴子はえっ！いるの？という顔をして驚く。
視線を躱すように顔を逸らし、ふっ、と息をついて続ける。
「でもあの人、女子慣れしてますからねー、モーションかけても効いてるんだかいないんだか。」
多くの女子がへぇ～、と言う中、千鶴子と小林は誰かを特定し、レモンはなんとなく予想がついた。
「（ああ、昨年の大会で堀さんの隣で平然と激励してた人いたなぁ・・ふぅーん、彼か。）」
顔を赤くしておろおろする千鶴子の横で、今度は小林が同じ質問に

あっている。
数分の尋問の結果の自白によると、どうやら赤池が気になっているらしい。当たりの強い性格の彼が
自分の容姿に差別なく、女子として接してくれているのが一因とか。
思わぬ後輩たちの異性意識にあうあうしている千鶴子は、次は自分の番だという自覚がない。
集中審議から逃げ出すことも叶わぬままに、鬼丸への想いを知られてしまうのであった。
海岸から学校へ引き上げる最中、レモンがゆずにある提案をする
「ね、ゆずちゃん。さっきのモーションの話、ちょっと考えたんだけど。」
「はい？」
「こういうのはどうかな、ホラ、明日男子は試合でしょ、そこで・・・」

第３５番　ダチ高相撲部　ｖｓ　辻　桐仁

「おお、いいセッティングだねぇ。」
諸岡がアゴをひねって感心する。いよいよ合宿最終日、インターハイ出場選手を決める部内戦。
その舞台である九十九里高の校庭の一角にある屋外土俵。
周囲には女子相撲部員はもちろん、休日にもかかわらず学校に来ている各部活の生徒や
手の空いている教員、用務員などの職員が見物に集まっている。
実際の大会を想定しての舞台をと南顧問にお願いしたのだが、予想の遥か上の舞台設定に大満足、
これなら本番の雰囲気さながらに相撲が取れるだろう。
案の定、支度を終えて現れた９人のダチ高男子部員も驚きを隠せない。
「うわ、すごいギャラリー」
「まさに本番さながら、だな。」
「こりゃいいとこ見せないとなぁ・・・」
各々の感想を抱きながら、諸岡の前に集合する選手たち。彼らの傍らにはマネージャーの千鶴子と
女子部員の柚子香と小林。彼らの後ろには、９人全員の名前と星取表が書かれたホワイトボード。
インターハイ出場は選手５人＋補欠２人、つまりこの部内戦で選手を外れるのは９人中２人。
普通なら問題なく選ばれる者、ボーダーラインにいる者、落選濃厚な者などが勝負前から
明確になるだろう。
だがこれは相撲の勝負。わずか４ｍ強の土俵から出ても、足の裏以外が地についても敗北する
極めてシビアで、そして不確定な戦いだ。１発勝負で誰が勝つかは誰にも分からない。
「ではこれより、部内総当たり戦を始める！」

諸岡がそう宣言し、脇にある箱から対戦のクジを引き、読み上げる。
「東、辻！・西、松本！」
「「ハイ！」」
同時に応え、土俵下で東西に分かれ、そして上がる。いきなり注目の大一番だ。
「互いに、礼！」
審判を務める森顧問の合図で礼を交わし、対峙する両者。と、松本は桐仁に声をかける。
「辻先輩、悪いけど確実に勝たせてもらうッス！」
蹲踞の姿勢を取りながらそう言う松本に、立ったまま見下ろして桐仁が返す。
「松本、お前の甘いトコだ。『悪いけど』なんて考えは土俵の下に置いてこい！」
その会話を聞いたダチ高相撲部員は思案する。
『確実に勝たせてもらう』
つまりは肺に疾患があり、２０秒以上戦えない桐仁に持久戦を仕掛けるという宣言だ。
もとより松本はその体重と粘り腰を生かして戦う『受けの相撲』を取るタイプ、
そんな彼に持久戦法を取られては桐仁の勝ち目は限りなく薄くなる、現に春の部内戦では、
最初に当たった沼田に徹底した持久戦を取られ、全ての時間を奪われた結果、全敗という成績に終わる。
「（どうするつもりだ・・・？）」
１．２年生がいぶかしがる中、蛍と千鶴子だけはいくぶん余裕の表情で土俵を見上げる。
―はっきよい―
女性らしい甲高い森顧問の掛け声と同時にぶつかる二人。そして松本がずいずいと桐仁を
土俵際に追い込む。と、桐仁が体をひねって松本を巻き込むように投げに行く、松本はまるで

それに従うように回転して土俵に落ちる。
―巻き落としで東、辻の勝ち！―
ギャラリーの拍手が起きる中、ダチ高の1・2年は『あれ？』という顔でその結果を聞く。
てっきり持久戦かと思いきや、いきなり勝負を決めに行って、桐仁得意のカウンター攻撃の
餌食となるとは・・・先輩だから手心を加えた？いや、土俵から降りる松本の表情が違うと言っている、
悔しさと不思議さを織り交ぜた表情は、今の勝負に納得できない、そう語っていた。
3番挟んで、再び桐仁の出番。相手は春の因縁の相手、沼田。
「（松本先輩はあれで優しいからな、俺は徹底して待ちますよ、辻先生！）」
―はっきよい―
組み合ってすぐだった。沼田は不気味な違和感に襲われる、軽い、桐仁から力感が一切
感じられないのだ。まるで空気を相手に相撲を取っているように、自然に足が前に出る。
「やっぱり・・・辻先輩、全然力入れてない！」
松本が土俵下からそうこぼす。自分の時もそうだった、まるで相手がいないかのようなその感覚、
それに覚えがあった彼は、追い立てられるように焦って寄り切ろうとして巻き落としを食らった。
「あ・・・あの相撲は！」
そう吐いて三ツ橋を見る赤池。蛍は小さく頷き、視線を土俵に戻す。
「（石神高校の荒木・・・アレか！）」
春の団体戦、偵察部隊として蛍と一緒に石神の試合を見た時の記憶、力のオンオフを巧みに使いこなし
一瞬の爆発力で決める荒木の相撲、その脱力時に今の辻はそっくりだった。

1年前には松本自身がその相撲からの『天地返し』で敗れた、そんな経験が松本を焦らせたのだ。

土俵際まで来た時、桐仁が沼田の左手首を取る。その動きにびくっ！として体を引く沼田。

構わず胸を合わせなおした桐仁はこう囁いた。

「どうした、こいよ沼田君」

「くっ！」

その挑発に乗せられたか、沼田は取ったままの右上手で投げに行く。が、桐仁は取っていた沼田の左手を

自分の左脇まで円を描くように回して持っていく。その力の流れに巻かれるように土俵に転がる沼田。

―小手捻りで西、辻の勝ち―

ギャラリーから、特に九十九里女子相撲部員から黄色い歓声が飛ぶ。イケメンに加え技も鮮やか、

彼女らが桐仁に魅かれるのもむべなるかな。

うなだれて土俵を降りる沼田の背中を見て、桐仁は思う。

「(この相撲のヒントをくれたのはお前なんだぜ、沼田)」

春の部内戦、沼田は自分から攻めず、ひたすら桐仁の体力切れを待った。結果3分もの

長い相撲を取らされ、ついに力尽きたのだ・・・が。

3分?自分は20秒しか相撲が取れない体だ。それが何故・・・考えるまでも無い、沼田が攻めて

こなかったから、自分も組みながら息を継ぐ時間がいくらかあったからだ。

あくまで20秒と言うのは『自分が全力で動ける時間』なのだから。

そう思った時、桐仁の頭に電撃が走る。そうだ、自分は何を思い違いしていたんだ、

20秒しか全力で動けないなら、その20秒を使うべき時にのみ使えばいいんじゃないか！

部内戦で持久戦法を取られるなら、こっちが何も最初から全力で行く必要はない、

相手が決めに来る時までその力を取っておいて、『その時』に時間を使えばいいだけのこと！

次の瞬間、彼の視界は更に開ける。

そう、自分にスタミナが無いのはみんな知ってる、何もダチ高だけではない、他の強豪校も

自分と当たる時は持久戦法を使ってくるのは丸分かりじゃないか・・・だったら！

自分の弱点を『相手が知る情報』として前提に置き、それに対応した戦術を取る。

「普通は考えねぇよ、相撲の真剣勝負の最中に『力を抜く』なんてな。」

稽古後の居残り練習で蛍を相手にそれを実践しながら桐仁はそうこぼしていた。普段から火ノ丸の

全身全霊全力の相撲を見てきた彼にとって、相撲は常に全力を出すもの、そして自分は２０秒しか

全力が出せない、だから持久戦法を取られたら終わり、などと勝手に思い込んでいた。

なんというお粗末な結論だったろう、発想を少し変えればこんなにも自分には長い相撲が取れるのに。

３戦目は陽川、もはや持久戦が無駄と考えて最初から全開で来た彼を、桐仁は冷静に仕留める。

長い腕で背中越しに上手を取りに来た陽川の脇をくぐり横を取る、切り返し一閃で土俵に転がしたのだ。

４戦目、赤池。最初は持久戦で来たが、やがて痺れを切らせて攻めに転じる。

ある意味、桐仁のこの戦法の真価はその瞬間にこそ問われると言っていい。荒木のソレと違い

相手の力を利用するカウンター相撲を得意とする桐仁にとって、力を抜いている時にいかに

相手の動く瞬間を見極め『後の先』を取るかが勝負となる。脱力していても精神集中は研ぎ澄まし

その一瞬で斬って落とす、まるで剣道の居合い斬りの様に。

攻めに来た赤池の足が揃う瞬間を狙っての二枚蹴り、巨体の赤池が横倒しに土俵に落ちる。

蛍以外、ダチ高の誰もが、桐仁に勝つプロセスを見いだせずにいた。対する桐仁はいまだ

自分で酸素スプレーを使う余裕すらある、以前なら1番こなせばスプレーを当てがってもらい

座り込んでヘタってたと言うのに。

「強い・・・」

土俵に尻もちをついた大峰がそう嘆く。突進をかわされ、外掛け気味に合わされた足で

バランスを崩されたその瞬間、体当たりされて後ろに倒された、マジでどう勝つんだこの人に・・・

6戦目、相手は三ツ橋。

蛍は不用意には組みに行かず、変化とぶちかましからの『蛍火の如し』でかき回しにかかる。

あるいはこういう相撲こそが今の桐仁の難敵なのかもしれない。まして三ツ橋はずっと桐仁と

今の戦法を煮詰めてきた相手、手の内はお互い知られている。

とはいえ桐仁にも手はある、相撲歴が長い分彼には蛍よりも相撲の引き出しが多い。

蛍が横に飛ぶタイミングを見計らい、土俵際を背負う。ここぞとばかり突進する蛍に

桐仁はほとんど俵の上を伝うように走り、蛍の突進を躱す。そのまま腕を取り、

『とったり』で蛍を土俵に転がして仕留めた。

7戦目、幸田。流石に疲労も濃くなってきたが、それでもぶちかましに耐えて差し手争いを制すると

久々に『元祖三点投げ』で彼を退ける。もう全力の時間がほとんどないという理由もあったが

日々実力をつけ続ける幸田に対して、残す余力は無かったというのが本音だ。

そして7戦全勝で迎えた最終戦、相手はここまで勝ち無しの柳沢だ。とはいえ桐仁ももう
疲労のピークで、朦朧とした意識で土俵に上がる。
ただ、勝つプロセスは見えていた。柳沢は相手と組み合い、寄りかかるように体重をかけるスタイル、
相手が体重を浴びせてきたその時に・・・
―はっきよい―
桐仁は土俵に落ちていた。なんと柳沢がまさかの立ち合い変化『叩き込み』で勝ったのだ。
思わずガッツポーズして見た先にいたのは、なんとマネージャーの千鶴子だった。
「(やられた・・・マネージャーの入れ知恵かよ・・・)」
「カントク(辻)は疲れてくると、立ち合いで相手にもたれるように組むクセがあるわ、そこを突けば・・・」
快進撃を続ける辻と、白星が出ない柳沢の最終戦、千鶴子はせめて柳沢に1勝をと、こんなアドバイスを
送っていた、それが見事にハマった形となったのだ。
部内戦が終わり、結果が発表される。
「トップ通過、7勝1敗、辻　桐仁!」
周囲の拍手に応え、遠慮がちに手を突き上げる桐仁。春の全敗の借りを確かに返し
見事大太刀最強に返り咲いたのである。
―国宝『鬼切安綱』、その名の復活は近い―

第３６番　ダチ高相撲部　ｖｓ　三ツ橋　蛍

「次、東、三ツ橋。西、陽川！」
部内戦の３試合目、柚子香はその呼び出しに応えて土俵に上がる両者を見つつ、
『あっちゃー』という顔をする。
ひょっこり隣に顔を出した九十九里高、池西レモンが事情を知らずにゆずに問う。
「いよいよ彼の出番だねぇ、勝てるかな？」
「・・・相性は、最悪です。」
渋い表情で返すゆずにレモンは『そうなの？』という顔で土俵を見る。
陽川の相撲は蛍にとってまさに『天敵』と言っていい。変化に素早く対応する反射神経と
捕まえたら軽量の相手なら強引にねじ伏せる剛腕、そして大相撲を目指すだけあって
相撲に対する深い理解と知識を兼ね備える彼にとって、蛍の相撲そのものが『小細工の集合体』
でしか無かった。
そして近年蛍が試行錯誤していた『潜る相撲』に対しても、完璧な対応でこれを退ける、
ここ最近は蛍が勝つのはおろか、善戦するシーンすらお目にかかれなかったのだ。
そんな二人をマネージャーの千鶴子が横目で見て、心の中で思う。
取り終わった後の
妹の反応が楽しみだ、と。
―はっきよい！―
二人が立ち、ぶつかる。と同時に蛍は体を低くし、陽川の懐に潜り込んで両前ミツを引く。
一方の陽川は蛍の胴を抱え込み、腰を割って足を引き気味に踏ん張り、のしかかって体重をかける。

「え!?」

ダチ高の1・2年が驚いて声を出す。実はこの体勢こそ、この春以来の『三ツ橋殺し』の状態なのだ。

足を引くことにより蛍の足技を届かせない、抱え込むことで出し投げや百千夜叉落としのような

体を回す技を出させない、あとは上から体重をかけ、蛍のスタミナを奪っていき、仕留める。

蛍が『潜る相撲』を研究する過程で出来た副産物ともいえる形、部内での試行錯誤の末に

辿り着いたのは、潜った蛍の方が打つ手が無くなるという皮肉だった。

それが具体的に形になったのが、春の部内戦で陽川が見せたこの相撲、足技も投げも出せずに

体力を奪われ、最後は吊り出された。しかもその後の大峰戦、松本戦にも同じ戦法を使われて敗れた。

今やダチ高相撲部員に対してのこの『潜る相撲』こそが、完全に死に体になっていたのだ。

「なんで・・・?」

柚子香のその嘆きは、相撲部員の心の声を代表していた。立ち合いからわざわざ自分の不利な体勢に

身を晒すとは。しかもこの体勢、体力の消耗も酷い。あと7番も取らなきゃいけないのに、

初戦でこの姿勢で負けたら後の試合も苦しくなることは必至だ。

「(さぁ、何をやってきますか、三ツ橋部長!)」

組み合う陽川に油断は無い。立ち合いから明らかにこの体勢を狙ってきたという事は、ここから何か

今までにない技に出ることは予想がついている。だが何が来ても彼には対応する自信がある。

また彼には三ツ橋に対する敵愾心もあり、情けをかける気はない。

―よし!夏には後輩たちを全員倒すぞっ!―

春の部内戦後に蛍が吐いた言葉。盗み聞きとはいえ聞き捨てなら

ない。そちらがそのつもりなら
こちらも断固として勝ちに行く。不用意にスキを作らず、このまま体力が切れるまで押しつぶしてやる！
ふっ！と陽川の体が前方に流れる。蛍が潜った状態から体ごと後方に引いたのだ。
「反り技かっ！」
陽川の反応は早い。蛍の奥の手が反り技『居反り』であることを瞬時に見抜き、素早く右足を
前に出して蛍の反りを止める。
その陽川の反応に、ダチ高相撲部員が、そして九十九里高の女子部員が驚愕の声を上げる。
「止めた！」
まさかの蛍の反り技を、瞬時に足さばきで防ぐその反応、そして対応力。
この瞬間、今度こそ三ツ橋部長は万策尽きたかと思われた。
だが、それは蛍にとって『一の矢』に過ぎなかった。
「あ・・・足が近い！」
幸田が叫ぶ。反り技に耐える為に一歩踏み出したことにより、陽川の右足が蛍の足技の
射程圏内に入っている。
「（狙いはそっちか！）」
幸田の声を聞くまでも無く、陽川は蛍の狙いを読み取る。そうはさせじと踏み込んだ右足にぐっ、と
体重をかけ腰を割る。内掛けでも足取りでも来るなら来い、耐えてやる！
それと同時に蛍の左足が、陽川の右足に巻き付く。二の矢『内掛け』！
「（やっぱりか！だが無駄だ、三ツ橋部長の馬力で今の俺の足は刈れまい！）」
２人の絡めた足にぐぐっ、と力が入る。が、陽川の右足はまるで地面に根を張ったかのごとく

ビクともしない。これに耐えれば俺の勝ちだ、と力を振り絞る陽川。

その時だった。蛍は上半身を陽川の右足にかぶせる。足を掛けながら上半身を乗せるその姿は

まるで木にしがみつくセミのようだった。

次の瞬間、陽川の右足は地面を離れ、空中に引っこ抜かれる―

内掛けが止められたのを見て、柚子香は心の中で毒づく。どんだけ反応速いのよ陽川の奴！

そう思った瞬間に彼女は見る、蛍の『三の矢』を。

蛍は左手を体の外に出し、内掛けを仕掛けている陽川の右足の外から、自分の左足首を掌で掴む。

ちょうど陽川の右足を、自分の左手と左足で輪を作り、巻き付けるようにして・・・

次の瞬間、左手と左足、両方の力で陽川の右足を引っこ抜いた！

―自足取り内掛け『根太起（ねたおこし）！』―

切り株の根っこをテコで引き抜くように、陽川の右足を手と足でぶっこ抜く蛍。

腰を割っていた状態で片足を持ち上げられては抵抗のしようも無い。そのままどさっ、と

尻もちをつく陽川。

「内掛けで東、三ツ橋の勝ち！」

ギャラリーから拍手が起きる中、ダチ高相撲部は全員が目を丸くして固まっていた。

手と足で引っこ抜く発想もそうだが、潜る、反る、掛ける、引っこ抜く、そのよどみない連携が

明らかに狙って仕掛け、そして成功させたものであることを物語っていたから。

「（やりましたね）」

「（形にするのに苦労したもんな、三ツ橋の奴）」

桐仁と千鶴子がアイコンタクトして頷く。この技『根太起』の発想

は早くからあったが、
実際に実戦するとその難度の高さに何度も壁に当たったものだ。
足を届かせるために反り技を鍛え、そこから素早く足を絡める姿勢作り、そして自分の足を
手でつかむための姿勢、バランスの取り方、最初はうまく行かずに何度もコケたり
手が土俵についたりと、完成への道は困難を極めた。
だが、それでも蛍はこの技にこだわった。これが決められれば自分の『潜る相撲』が
再び生きてくる。毎日の居残り練習で桐仁を相手に何度も試し、ようやく形になったのは
つい最近の事だった。
「・・・俺は、何をされたんだ?」
土俵を降りた陽川が松本達に問う。彼からは蛍が自分の足を取ったのが見えなかった。
手を足に届かせるため、蛍は陽川の足にのしかかるように体を入れる必要があった、上から
かぶさっていた彼には、その行動の意味が分からなかったのだ。
柚子香は感極まった顔で、レモンの手を取ってぶんぶん上下に振って喜びを表している。
まさかまさかの蛍部長の勝利、足だけで駄目なら手と足でというその発想、苦手だった陽川に
いきなり完勝してみせたその強さ、そのすべてに感動していた。
そんな妹を見て千鶴子は思う、よかったね、との思いと、もう一つ。
「(本当に好きなのね、三ツ橋部長が・・・)」
かつて火ノ丸を見て感動した自分を今の妹に重ねる。そう、私もその感動に突き動かされて
今、相撲部のマネージャーとしてここにいるのだから。

この1番は、三ツ橋部長とダチ高相撲部の立場をひっくり返してしまった。

死に体だった潜る相撲が、相手を倒しうる技へと昇華したのだから。

2戦目、松本に対しては潜った後、居反りをフェイントにして足にタックル、ケンケンで耐える彼をそのまま土俵外まで押し出して勝利する。

3戦目は沼田、先刻の一番で腰が引け気味の彼を、今度は居反りそのもので投げ倒す。

続く大峰戦は仕切りの段階から、目線で『潜るぞ、潜るぞ』と誘導し、つられて低く立った彼を八艘飛びで鮮やかに飛び越し、背中を取って寄り切る。

陽川を倒した『根太起』が起点となって、さまざまな選択肢が生きてくる。

諸岡に学んでいた目線誘導や心理を読む相撲が、さらにそれを有力な一手にしていく。

潜る、飛ぶ、掛ける、投げる、躱す、ぶちかます、無限に広がった戦法を駆使し

土俵を自在に駆ける蛍の相撲にギャラリーは大いに沸いた。

5戦目の柳沢を電車道で下すと、次の幸田には組んでからの彼の投げを裾取り（足首取り）で返し仕留める。『根太起』で練習した足首の高さを手でつかむ感覚が生きた一番だ。

7戦目の桐仁には勝てなかった、脱力の相撲をモノにした彼には、不用意に組むこと自体が危険だ、

離れて相撲を取るが、ここぞという時に『とったり』を食らい、土俵に転がる。

そして最後の8戦目、相手は赤池。

―はっきよい―

蛍はぶちかましと同時に相手の頭を上に逸らせる『蛍火の如し、潜』で赤池の懐を取る。

肌から伝わる赤池の感情、『足か?反りか?』と迷う彼に、両下手を掴んだまま体を反転させ

そのまま担ぎ上げる。
「百千夜叉落とし！」
柚子香が叫ぶ。赤池は投げられてなるものかと足を外に出し、かわそうとする。
その足を蛍の右足が刈り取る。投げ、捻り、そして足！
ここにきての『3点投げ』の完成、本当の意味での百千夜叉落としをついに会得したのだ。
―ズドォン！―
「えーと・・・2丁投げ?で、三ツ橋の勝ち！」
拍手に沸く会場。なんと一番の小兵の三ツ橋が、桐仁と並ぶトップの7勝1敗で試合を終えたのだ。
直接対決に負けたため桐仁に次ぐ2位ではあるが、見事に夏のＩＨ出場を決めた。
また、心の中で公約としていた『下級生を全員倒す』を見事実現してみせたのだ。

1位・辻
2位・三ツ橋
3位・大峰
4位・松本
5位・陽川
6位・幸田
7位・赤池

8位・沼田
9位・柳沢

最終戦で沼田に勝った赤池が最後のイスを獲得、ここにインターハイの出場選手が決定した。
全員が土俵に上がり、集まってくれたギャラリーに礼をする。
こうして夏合宿は終わる・・・ハズだった。
それを覆したのは、柚子香の意外な言葉。
「蛍部長、私と1番、お願いします！」

ジャージの上下を脱ぎ捨ててそう告げる、その下には女子試合用のレオタード一体型のマワシが
身に纏われていた。
彼女の『本気』の目とともに。

第３７番　三ツ橋　蛍と堀　柚子香

「蛍部長、私と1番、お願いします！」
「おいおい堀さん、いきなり何言ってんだ！」
そう声を上げたのは桐仁だ。三ツ橋に限らず男子部員は今、部内総当たり戦を終えたばかり、
余力のないのは何も桐仁だけではない、三ツ橋も当然精魂尽き果てている状態である。
加えてこのギャラリーの多い中で、男子と女子が相撲を取るのは絵面的にもどうかと思う、
男子が勝てば女性に対して暴力的な印象も受けるし、中には性的な目で見る者もいるだろう。
そんな桐仁たちをまっすぐ見つめ、柚子香はこう返す。
「この遠征で部内戦をやったのは、アウェイでの真剣勝負で実力が出せるように、でしたよね、先生。」
話を振られ、あ、うむ。とうなずく諸岡。
「だったら私も、『ここ』で真剣勝負がしたいんですよ。でも九十九里高のみんなは、手の内を
見せたくないでしょうし。」
横目に九十九里高の女子相撲部員を見てそう続けると、彼女たちもうん、まぁね、と頷く。
合同練習をした仲とはいえ、本番では鎬を削る『ライバル』となる。
ＩＨ直前のこの時期に
ここで本気の『心』で相撲を取り、手の内を晒すわけにはいかない。
「それに・・・蛍部長にはいつも稽古つけて貰ってますけど、まだ勝った事がありません、
疲れてる所悪いけど、勝ちたいんです、部長に！」
蛍をまっすぐ見据えてそう言う柚子香に、ギャラリーから拍手が起こる。
「相手してやれよー、部長さんよぉ。」
「嬢ちゃん頑張れよーっ！」

「延長戦、延長戦！」
　野次馬の声を聴きながら見つめ合う蛍と柚子香。蛍はその目が、稽古でいつも見ている
『真剣』の色を含んだ目であると理解し、ふぅ、と一息ついて言う。
「分かった、やろう！」
　ギャラリーのヤンヤの声を受けつつ、一度土俵を降りる蛍、そして男子部員。
　土俵の際にあるスポーツバッグからジャージの上を取り出そうとする蛍を柚子香が止める。
「あ、ジャージ着なくていいです、そのままで。」
「ええーっ!?」
「ヒャアー、マジで？」
　その一言に、さすがに場内から驚愕の声が上がる。そもそも柚子香からして試合用の
　ユニフォームを着込んだ状態。バストガードが付いているとはいえ、マワシ付きレオタード姿で
　裸の蛍と相撲を取るというのか？
　いくらなんでもそれは・・・
「ジャージがあると、どうしてもいつもの練習の気分になります。私も、多分部長も。
　さっきまでの真剣勝負の『熱』を持ってきてほしいんです！」
　そう言って自分の胸をばん、と叩く。
　しばしの沈黙の後、蛍はやれやれ、という表情でそのまま土俵に向かう。
　ギャラリーが大盛り上がりで拍手や口笛を鳴らす中、土俵に上がる二人。
　諸岡はさすがにいかんだろう、と止めに入ろうとするが、その肩を千鶴子が掴み、目で訴える。
　やらせてあげてください、と。
「後でセクハラとか言うのは無しだよ、ゆず。」
「そんなもの、土俵の下に投げ捨ててきましたよ！」

土俵の上に上がり、睨み合う両者。その瞬間に空気がびりっ！と張り詰める。

ダチ高部員全員が理解する。あの目、二人とも真剣でやる気だ。

「ケガだけはしないようにね・・・互いに、礼！」

「（うまくいったみたいね・・・）」

「（こんだけ大勢の中で抱き合ったら、さすがにあの部長さんも意識するでしょ）」

九十九里高の女子部員たちがひそひそ話す。実はこの勝負、部長の池西レモンの提案なのだ。

皆の前で、試合後のエキシビジョン的にあの格好で彼と相撲を取れば、少しは仲が進展するかな、

と思って。

しかしその提案者であるレモン自身が、そんなチームメイトの考えを否定する。

「馬鹿ね、堀さんマジ入ってるわよ・・・三ツ橋部長もね！」

ええっ！と驚く女子達。既に仕切りに入ってる二人を見て、思わずぞくっとする。

２人が交わしているのは、明らかに殺気をはらんだ視線だったから。

―はっきよい―

立ち合い、ぶつかる両者。と、蛍は体当たりの衝撃を横に逃がし、横っ飛びで後方に

回り込もうとする。

「蛍火の如し！」

幸田が叫ぶが、それは成功していなかった。柚子香は当たった瞬間、右手で蛍の左手首を掴んでいた。

蛍の動く方向は掴んだ手が教えてくれる、素早く向き直るとそのまま手を引きつけて組みに行く。

それに応じて四つに組もうとした蛍は、瞬間、柚子香を見失う。

「八艘飛び！」

柚子香は組むと見せかけて、その直前に蛍を飛び越しにかかる。わ

ざわざ手を掴んで組に行く意思を
見せておいての変化技！
「・・・っ！」
相手が消えた、なら後ろしかない。そう判断すると蛍の行動は早い。素早く前方に2歩踏み出し、
腰を割りながら体を反転させる。そこに突っ込んでくる柚子香、頭を付け、蛍のマワシを探る。
が、蛍は相手の両肩をもろ手でぐいっ！と押し上げて上体を浮かす。間髪入れずに胸を合わせ
そのまま一気に土俵際まで柚子香を押し込む。
マワシを取られていなかったのが柚子香の命を繋いだ。土俵際に詰まる瞬間、横に飛びつつ
叩き込み気味に蛍の圧力をいなし、土俵際から脱出する。
軽量級同士のスピーディな攻防に、そして二人から感じられる真剣勝負の空気に、ギャラリーが
感嘆の息をつく。そして彼らは気付く、あの二人の相撲が似ている事に。
それは彼女が部長さんの相撲をお手本にしている、尊敬しているんだな、と印象付ける。
「ゼッ、ゼッ、ゼェッ・・・」
「はぁっ、はぁっ、はぁ・・・っ！」
頭を付けて動きを止める。蛍はすでに疲労困憊で呼吸が荒い。柚子香もまた男女の体重差と
相手の速い動きについて行くのに、体力と精神をすり減らしている。
でも、まだだ。まだ私にはやれる事がある。今日の部内戦で貰った『熱』があれば、
この技を蛍に見せることが出来る！
「ふっ！」
柚子香が『叩き込み』に出る。蛍は足を一歩踏み出して残し、横に飛んだであろう相手の姿を追う。

が、柚子香は目の前にいた。叩いて前のめりになった蛍が体を起こした瞬間、その懐に潜り込んで
両前ミツを掴む。
「潜る相撲！」
陽川が叫ぶ。今日の部内戦で蛍が勝ち上がった原動力の体勢、それを意趣返しとばかりに
その姿勢に持っていく。
相手にされて初めてその体制の怖さを実感する蛍、覆い被されば反り技が来る。引けば足を取られる
その両方の警戒をすることと、加えての疲労で蛍はよろよろと中途半端な体勢になる。
「(その心理状態は・・・アカン！アレが来るで!!)」
赤池が自分の時の心理状況をトレースして、やばい！と思う。ついさっき自分が負けた状態に
三ツ橋部長が陥っているのだから。
「いっ・・・やあぁぁぁぁっ！」
体を反転させ、蛍を担ぎにかかる柚子香。両手を折りたたんで力を込める。
「まさか!?」
「百千・・・夜叉落とし！」
蛍を完全に腰に乗せる柚子香。腰から担がれ、蛍の両足が宙に浮く、完全に担いだ！
「決まれーーーっ！」
小林が叫ぶ。ふたりでの練習中にこっそり練習していた『蛍バージョン』の百千夜叉落。
担ぐだけで精いっぱいなので足は出せない、3点投げでは無く2点投げだが、それでも
柚子香なりに習得した、蛍に見せたかったその技を決めに行く。
スッ、と蛍の体が横にズレる。担がれた瞬間に蛍は体を右に躱しにかかっていた。
もし柚子香の投げが、足も使う3点投げならその足に捕まっていた

だろう。だが2点投げでは
横に躱す相手を捕まえることは出来ない。
投げを凌ぎ切り、着地する蛍。
捨て身技を躱され、死に体となる柚子香。
2年前の全国で、火ノ丸が天王寺に『寄り』から放って、躱された時のような体勢になる。
この瞬間、誰もが蛍の勝ちを確信しただろう。桐仁も、千鶴子も、小林も、レモンも。
そして多数のギャラリーもそれを悟り、「ああ~」という声を上げる。
地面とほぼ平行になり、蛍のマワシにしがみついて辛うじて残っているその柚子香の
背中から、蛍は得体の知れない『意志』を感じた。
―ここから、何か来る!―

「勝負あり!」
そこで二人の1番は終わった。柚子香はこらえ切れずにヒザを付いてしまっていた。
そのまま前のめりに土俵にべちゃっ、と倒れ込み、ひゅーひゅーと息を次いでいる。
蛍もゼイゼイと息を荒げながらも、倒れている柚子香に手を差し出す。
「あーあ・・・負け、ちゃった、かぁ。」
起こされながらそうこぼす柚子香。この時の為にずっと練習してきた、この技を蛍に
見せて、決めて、そして褒めてほしくて。
目に涙を溜めている柚子香を見て、蛍は彼女の肩に手を置き、こう返す。
「いい相撲だったよ。次は勝って泣こう。」
「・・・はい。」
一礼し、拍手を背に土俵を降りる両者。バテバテの蛍は座り込み、

天を仰いで息を継ぐ。

千鶴子は柚子香にタオルを渡し、お疲れ様、と妹を労う。

そんな中、諸岡は無難に終わってよかった、とほっとする。仮にも男女があの恰好で

取っ組み合って、問題にならなかったのは幸いだった。

だが、この1番は、この先に大きな意味を残す相撲であったことを、まだ誰も知らない。

第３８番　大太刀高相撲部員紹介（蛍３年ＩＨ直前時）

ここまで書いてきたダチ高相撲部編もいよいよ最後の大会。というわけで
その前に彼らの現在のプロフィールなど紹介。
正確には作者が今一度、現在のキャラを再把握するためのものなので
『二次創作の分際で気取った企画すんなや』って人はスルーして全然ＯＫですｗ
言うまでも無いけど川田先生非公認で、公式設定ではありませんので誤解無きようお願いします。

・三ツ橋　蛍（３年）　１６７ｃｍ　７９ｋｇ　得意技：変化、潜る
相撲、心理戦
大太刀高校相撲部部長。１年の時は小関や火ノ丸に腰が低かったが、後輩が出来るとしっかり彼らの面倒を見る先輩らしさを発揮する。中学時代に吹奏楽部で部長をした経験が生きている模様。
辻はもとより、逸材の２年生や個性的な１年生、そして思わぬ名アドバイザーの諸岡顧問にさまざまな影響を受け、１年の頃の面影がないほどに成長を遂げている。
『体』は相変わらず小兵だが、ここぞという時の動きと力の集中は、かつて憧れた火ノ丸に少しづつではあるが近づいている。
一年の時に『全国優勝のチームのレギュラーで全敗』だったのが生涯のトラウマ。

・辻　桐仁（３年）　１７８ｃｍ　７８ｋｇ　得意技：投げ技全般、躱し技

肺の疾患で２０秒しか全力で動けない欠点はあるが、その相撲の技術と知識は作中でも
飛びぬけている『業師』。
その技量に加え、何かと上から目線な物言いから、現後輩からも「カントク」なイメージが強い。
が、いじると結構簡単にボロを出すこともあり、意外に部内でも『面白キャラ』として
受け入れられている。
火ノ丸を追いかけて大相撲に行くか未だ悩んでいる状況。自分の成長に望みをかけるも
三ツ橋や後輩への指導の成果を実感しては『やっぱ俺は裏方が・・・』とネガになる時も。
学内でもトップクラスの女性人気を誇り、彼がマワシ一つで戦う姿は、ダチ高に多くの
『名塚2世』を生み出しているが、本人はまったく気にしていない。
・堀　千鶴子（３年）１６６ｃｍ　４８ｋｇ　特技：データ収集、選手の撮影（静止画＆動画）、料理
大太刀高校相撲部マネージャー、ダチ高のマザーコンピューター兼おかみさん。
遠くに行ってしまった憧れの人、火ノ丸に思いを寄せつつ、かつて彼と過ごしたダチ高相撲部の為に
出来ることを一生懸命やっている健気な存在。
卒業時には相撲部の『思い出のアルバム』を作ろうと写真を取り溜めている。
目下の課題は妹、柚子香の暴走を止める事と、マネージャー弟子の柳沢に色々仕事を
教える事。
相変わらず相撲に関する理解が深く、その発想や思い付きは桐仁をもうならせる時がある。
妹の活躍を見て、自分も女子相撲をやればよかったかなぁ、と少し後悔している。

・松本　康太（2年）　１８８ｃｍ　１４５ｋｇ　得意技：寄り、吊り、粘り腰

坊主頭に太い眉毛で巨漢、本家『火ノ丸相撲』でもっとも登場頻度の高かった名無しの後輩モブ。

それだけにもし川田先生が続編とか描いたら速攻で存在が消えかねない危険な存在ｗ

温和な性格で食いしん坊、攻め手に欠けるが守りに入ると異常に強い力士。

語尾によく「ッス！」がつく。関東新人戦覇者だが、『強いけど怖さはない』典型的な存在でもある。

大峰と一緒に食べ歩きするのが最近のマイブーム、家はお金持ち。

・大峰　浩二（2年）　１８１ｃｍ　１３５ｋｇ　得意技：かち上げ、突っ張り、がぶり寄り

巨漢に加え、天然パーマに眼鏡の下は鋭い吊り目、お前のような高校生がいるかと言わんばかりの強面な見た目に恥じない『攻めの相撲』が身上。

１年時にはその個性を伸ばすため、桐仁のツテで度々柴木山部屋に出稽古に行っている。

かつて攻めの相撲を取っていた柴木山親方に気に入られ、さらに磨きをかけてきた。が、

２年になってからは部屋所属の先輩『鬼丸』の快進撃もあり、邪魔になれば悪いと出稽古は遠慮気味。

彼もまた原作でちょくちょく名無しモブとして登場、親方と金盛と並んで立てばヤ●ザも逃げるｗ

ちなみに学業優秀。

・陽川　満（2年）　１８９ｃｍ　１００ｋｇ　得意技：投げ、吊り

一応原作でも顔は出ているが、ほぼ本作のオリキャラといっていい存在。

太ってはいないが筋肉質で腕力が強く手足が長い、國崎や金森などに近いタイプの力士。

大相撲へ進む目標を持ち、日々稽古に明け暮れる。相撲の知識も桐

仁に次ぐ詳しさで、
強敵相手に物怖じしない『心』の強さも魅力の一つだ。
『体』が頭打ちなのか、いくら食べても太れないことが悩みの種、あとカナヅチ。
男前ではあるのだが、真面目で一徹な性格とゴツい筋肉で女子は近寄りがたい模様。
・幸田　純一（２年）１７７ｃｍ　８０ｋｇ　得意技：ぶちかまし、出し投げ、引き技
こちらは完全なオリキャラ。元ラグビー選手であり、突進力とスタミナは折り紙付き。
ただ先輩を立てる謙虚なところがあり、春の部内戦後に先輩に出番を譲るべきではと
皆に相談している。
小兵の部類に入る体格のせいで他の３人にはやや劣るものの、その前に出る突進力と、桐仁直伝の
『引く投げ』で前後の揺さぶりの相撲は破壊力抜群である。
変化の蛍と相撲スタイルが噛み合うため、彼とずっとペア特訓を続けている。早朝ジョギングが趣味。
・堀　柚子香（２年）１５９ｃｍ　５５ｋｇ　得意技：前さばき、投げ、寄り
堀　千鶴子マネージャーの妹。おかっぱ頭に少々のキツネ目と、姉と比べて美人の印象は無いが
和服を着ると化ける大和撫子タイプ。好物も紅茶ケーキより日本茶饅頭な和食寄り。
快活で運動大好きな彼女は、姉の相撲部自慢を聞いて相撲部に入部するが、その席で
マネージャーではなく女子相撲を始めることを宣言し、周囲を驚かせる。
姉の影響で火ノ丸に憧れていたが、入部してからはマンツーマンで教えてくれる蛍に
徐々に惹かれていく。同時に彼の『心の闇』も知るようになり、な

んとか彼を癒したいと
ひそかに思っている。料理は大の苦手で隠れ音痴。

・赤池　哲夫（1年）　１７５ｃｍ　１１０ｋｇ　得意技：ぶちかまし、吊り

関西弁オラオラ1年生。この春に四国から越してきた漁師兼板前の息子。そのせいで関東の
高校相撲情勢は疎い。
唯我独尊な性格だが意外に人懐っこく、他人との距離を詰めるのが得意なジャイアンタイプ。
ビジュアルは原作で集合写真のコマで映ってた、染めた髪が逆立ってる彼。
思考が単純で変化に弱く、勝負の駆け引きが苦手なタイプな為、蛍が部内での天敵。
半面、漁師の息子という事もあり、膂力とバランス感覚は折り紙付きである。
父子家庭。アウトドアに強く、魚を捌けるほど料理が上手。勉強は全教科苦手。

・沼田　卓（1年）　１８８ｃｍ　９５ｋｇ　得意技：もろ差し、寄り

かつて桐仁の通ってた相撲クラブの後輩。2年前には桐仁がダチ高で監督としての地位を
認めさせるために連れてこられた一人、その時に蛍を寄り切りで破り、回転寿司を堪能した。
あれから急激に背が伸びたため当時とは完全に別人。ちょっとチャラ男が入っており
『心』が弱いのが最大の欠点。
赤池と同じく、原作の集合写真で写っていた長身の黒坊主頭が彼である。
趣味は店頭ガチャ。回転寿司に行くと必ず1回は回しているが、本命は引けない。

・柳沢　真（1年）　１６９ｃｍ　８８ｋｇ

成績優秀で運動音痴、典型的な肥満系ガリ勉タイプの彼は運動不足を懸念して相撲を始める。
が、ダチ高が強豪だったせいで運動不足解消というレベルではなく、ついて行けそうにない所に
千鶴子に声を掛けられ、マネージャー兼選手になった。そのため集合写真でもジャージである。
趣味が参考書解きという稀に見る存在、全国模試でも常に上位にその名を連ねる彼が
何故ダチ高に入学してきたかは不明だが、先生方からは早くも一流大学への進学を迫られている。
食太りの為スタミナ、瞬発力共に無く、今のところ全力で動ける時間は桐仁より短い。
相手に体重を浴びせて寄り切るのが現在唯一の勝ちパターン。
・小林　早苗（１年）　１５８ｃｍ　８２ｋｇ
女子相撲部員。母子家庭に育ったため、中学時代からバイトに明け暮れていたために
友達を作るのが苦手。そのせいで陰湿なイジメを受けていたこともあり、内向的でネガティブな性格。
主に引っ越しのバイト三昧だったせいか力が非常に強く、相撲と出会うことでその長所を
はじめて生かせた。現在は母親が正社員として就職できたため、学問と相撲に集中できている。
『不美人』の自覚がある自分に、他の女子と変わらぬ態度で接してくれる赤池（同じクラス）が
気になっている。趣味は編み物。
・諸岡雄一郎（顧問で体育教師、４０歳）
相撲部兼レスリング部の顧問。かつて1年の國崎を指導し全国王者にしたほどの人物。
若い頃はレスリングの国際強化選手で組み系格闘技に理解が深く、その知識がダチ高相撲部
（主に蛍）をさらに強くした。

意外に各方面に顔が効き、遠征などの手配もお手の物。人当たりが良くフレンドリーな性格を
存分に活用し、２顧問のワラジを履きこなしている。
独身貴族を気取っているうちについに４０の大台に乗り、さすがにもう手遅れかなとブルーに
なるのが最近の鬱の種。わりと貯金持ち。趣味は愛車（オープンカー）でふらっと出かける事。

第３９番　名塚圭子の見たもの

「おおおおー、やっぱり高校生はいいわねぇ、瑞々しい！」
「お前なぁ・・・さっきまでの落ち込みっぷりはどこいった。」
インターハイ高校相撲千葉県大会会場。『月刊相撲道』記者の名塚とカメラマンの宮崎の会話。
到着までダウナーな気分だった名塚だが、会場入りした途端テンション急上昇だ。
が、いざ取組みが始まると、観客席で再び鬱になる彼女。
「（・・・ったく、編集長も無茶言うわ。『国宝』を軽く使っていい言葉じゃないって
言ってたのは誰よ。）」
名塚は昨年のＩＨ以降、高校相撲の取材からは遠ざかっていた。と、いうより相撲記者として人気の
彼女を高校相撲に当てる余裕が無かった、というのが会社の本音だ。
―ついに角界入りした国宝たち、快進撃―
童子切、草薙、数珠丸、そして鬼丸。将来の横綱を期待された『国宝世代』がついにファンの悲願、
日本人横綱へ向けて番付を駆け上がっていく。昨年冬には大典太こと日景典馬も幕下付け出しで
デビューしてそれに続く。
今年初めには童子切と草薙が幕内入りし、先場所には童子切がモンゴル人横綱、猛昇山から見事
金星をもぎ取り殊勲賞を受賞、草薙も１１勝を挙げ、いよいよ国宝が綱を巻く時代到来かと大いに沸いた。
そんなわけで名塚は昨年以来、大相撲の方に付きっきりで、高校相撲を視野に入れる余裕が無かった。
が、今年のこの時期になって彼女は編集長から、再度高校相撲の取材を指名される。
とんでもない難題付きで。

「(国宝をできるだけ発掘してこいって?そんなのがその辺にゴロゴロ転がってるわけ無いでしょう!)」

編集長の意見も分からないではない。ここ数年、相撲は国宝人気で大いに盛り上がっている。

月刊相撲道の発行部数も順調に右肩上がりで、国宝効果に大いにのっかっていた。

だが、もし本当に『日本人横綱』が誕生してしまったら・・・

その時こそ、国宝世代は終わりを告げるだろう。長らく日本人横綱がいなかったからこそ、人々は

若人に期待を寄せ、彼らを日本国技の宝『国宝』と呼んで来た。

あまりに強い外国人横綱『刃皇』。『刃』の『皇帝』を打倒すべく、国宝級の日本刀の銘を冠して。

そしてその時はそう遠くない、ほどなく童子切や草薙は綱を巻き、国宝世代は終焉を迎えると

日本の相撲ファンの誰もが思っていた。

だがそれは、今の相撲ブームの終焉をも予感させていた。日本人が安定して勝ち続ければ

ファンは若者に期待を寄せなくなる、期待されなくなれば若者の相撲熱は冷め、それは未来の

相撲人気の低迷を呼ぶだろう。皮肉にも今の『強すぎる外国人横綱』と、それを倒すべく

挑む若者『国宝』の図式こそが、今の相撲人気の原動力なのだから。

そこで編集長は名塚に再び国宝の発掘を命じる。少しでも見込みのありそうな者、

または化けそうな者には構わないから国宝候補として取り上げろ、と。

国宝世代が終わる前に、少しでも相撲人気を繋ぎ止め、それを取り上げた自社の雑誌の地位も

向上させる、そんな期待を込めて。

「横綱候補?そんなの『彼』くらいでしょ。この会場じゃ。」

―下手投げで西、沙田君の勝ち―

石神高校の先鋒として出た沙田は、１７０ｋｇはあろうかという相手を軽々と土俵に転がす。
昨年ＩＨ全国個人戦の決勝、日景との死闘はファンの記憶にも新しい、そんな彼がこの会場で
頭１つも２つも抜けた存在であることは明らかだ。
「彼はどうかな？」
ファインダーを覗きつつ宮崎がそう返す。そのシャッターには石神の大将、荒木が
目にも止まらぬ速さで相手を投げ飛ばした瞬間が焼いついていた。
「駄目よ、彼は大相撲に行かないらしいからね。」
確かに荒木の実力なら国宝の名を冠するに足るだろう。しかし彼は前々から
総合格闘技への進路を表明している。２年前の國崎と同じように。
気の無い返事をする名塚に、宮崎はやれやれ、と息をつく。
―以上、５―０で柏実業の勝ち―
「ふぅん、ずいぶん慎重ね、スキのない相撲を取るわ。」
柏実業のその危なげない取り組みに感心する名塚。彼女もプロの記者である以上、国宝は
置いとくとしても、その見る目は真剣だ。
「さすがと言うべきか、阿部監督の指導が行き届いているようね、さすがは千葉の名将だわ。」
と、その柏実業の面々が、入れ替わりに土俵西に陣取る高校を睨みつけているのに気付く。
阿部監督すら、その高校の顧問らしき人物に厳しい目を向ける。
「え、あれは、まさか・・・」
「知っているのか？名塚。」
―東、大羅工業。西、西上高校―
そのアナウンスに会場がざわつく。強さとはまた違う緊張感に会場が曇る。
その会場の空気は、東の大羅工業に向けられていた。
大羅工業高校、石神と並ぶ県内でも屈指のヤンキー高校。しかもこ

こは相撲部自体が
荒くれ者の寄せ集めのような存在だった。現に昨年春、2年生の狭間が他校生徒とのケンカの末
重傷を負わせて少年院送りになり、相撲部は1年間の対外試合禁止処分が下されていた。
選手たちも皆、茶髪や整髪料で髪を固め、肩や腕にはタトゥー、ピアスを付けている物までいる。
その大将の席に座るのは、少年院から出所したばかりの大男、狭間だ。
彼は土俵の向こうに座る相手を見て、チームメイトにこう命令する。
「あのチビ共、全員無事に土俵から降ろすなよ!」
5分後、大羅の副将まで4人、見事に西上の小兵力士に折り畳まれていた。
ヤンキー上がりのその喧嘩腰な直線の相撲は、西上の円の相撲の格好の餌食だった。
出し投げ、蹴手繰り、とったり、頭捻り、円を描いて仕掛ける技が次々と不良くずれを仕留める。
「恥かかせやがって・・・帰ったら覚悟しとけ!」
そう言って土俵に上がる狭間。あんなチビ共に手玉に取られるか普通・・・
その怒りはまず対戦相手に向けられる。まずはこいつをド突き殺して、次はウチのバカ共だ。
―はっきよい―
「死ね!」
―バチィン―
全力で放った狭間の張り手と交差するように、西上の大将、葉山の掌底付きが炸裂する。
「がっ!?」
アゴに衝撃を受け、狭間の脳が揺れる。
「(なんだ、こいつも回ると思っていたが、やり合う気かよ!)」

そんな余計な思考をしている暇はなかった。葉山は手を止めずに、ひたすら狭間の顔面を狙って
突きを繰り出す。鼻が潰れ、血が滴り、眼球を叩き、人中を弾く。その容赦ない怒涛の突きに
狭間の巨体がじりじりと土俵際まで叩き押される。
「(そうだ葉山、突き押しは相手の体を打ち抜くつもりで行け!)」
腕組みした西上の監督が、自分の弟子に教えた突き押しに満足する。
春以降、彼はひたすら突き押し相撲を磨いてきた。大太刀の沼田に土俵際を背負われ、円の相撲を
破られた悔しさが、彼にその道を取らせたのだ。
葉山は迷いなく張る、突く、撃つ。その目に存分の殺気を湛え、黒い炎が溢れている錯覚まで起こす。
狭間の大振りな張り手も何発かは当たっている。にもかかわらず試合は一方的だった。
―ブァッチイイイ・・・ン!―
土俵際で腰の浮いた狭間の顔面を葉山の突きが打ち抜く。その一激で土俵下に叩き落とされる狭間。
土俵から彼を見下ろす葉山の表情はまさしく『鬼』だった。
まさかの惨劇に騒然となる会場。『心』の差がまともに出たその結果に、大羅の面々も顔色無し。
そんな中、柏実業の一同は『当然だ』という顔であらためて西上を睨む。春の借りは返す、と。
「思い出した!大西宮大学の怪童飯田!西上で監督やってたのね・・・」
名塚が叫ぶ。相撲記者の道に進んですぐ、資料を調べて妙に印象に残った学生横綱。
もう20年も前になる。学生相撲で無類の強さを誇りながら、不祥事で大相撲への道を断たれた男。
顔は老けているが、西上の監督席にいる男は、間違いなくその飯田だったのだ。

―東。常磐第三、下山君―

取組みは進む。登場したのは躍進著しい常磐第三。主将の下山が先鋒として出る。

「(下山君ね・・・さてさて、今の相撲は?・)」

ぶちかましで後退させ、もろ手突きで土俵際に追い詰め、腹に乗せて吊り出す。

わずか3アクションで自分より重い相手をあっけなく退ける下山。

強い・・・何よコレ、と驚愕する名塚をさらに驚かせたのは、土俵を降りてからの下山のリアクション。

仲間たちとハイタッチを交わし、続けよと声をかけ、悠々と座る。

その所作や表情のすべてが

名塚の知っている下山とは別人だった。

「男子3日会わざれば、っていうけど、本当にコレがあの下山君?・」

多くの者に応援され、学校の期待を背負って、強力な新戦力を迎え、彼らと共に稽古する日々。

春には全国までもう一息だった、あの国宝『三日月』にも食い下がることが出来た。

今、彼には誰かの足を引っ張るだけの昔の影はない。前を見て、まっすぐに進む、それだけだ。

―はっきよい―

川人ＶＳ八柳の大将戦、大河内はあえて相手の得意の左四つに組む。ただし、頭の位置だけは右組み。

「え?・何よ・・・あの組み方。」

意図的にやっているのだろうか、大相撲でも見ない不自然な組み方。窮屈な下手と伸びきった上手、

その原因の全てが『頭の位置』にあることは名塚にも、そして多くの相撲シーンを撮影してきた

宮崎にもすぐに理解できた。

「出たな『逆鞘（さかさや）』。」

すぐ近くで高校相撲のファンらしき人物の嘆きを聞く。鞘がさか

さま、つまり収まりが悪い・・・
言い得て妙なその組み方から大河内が寄りに出る。そして相手が頭を入れ替えようとした瞬間、
大河内は一気に右にひねりを加え、相手を派手に転がす。
―以上、5―0で川人の勝ち！―
名塚は思い出す。編集長の言葉を、そして試合前の自分の感情を。
「（いるじゃない・・・国宝候補がゴロゴロと。ここはまさに宝の山よ！）」

―東、大太刀高校。西、中川高校―
出番順に並んで礼をする両校。中川高は毎年ベスト8の常連、決して弱くはない。
先鋒の赤池が土俵に上がるその対で、中川高校の監督が選手に伝える。
「相手はベストメンバーじゃない、大峰も松本も温存している、ウチを舐めた事を後悔させてやれ！」
赤池が気合一閃で相手を吊り出すと、2陣の幸田がぶちかましからの引き落としで相手に土を付ける。
陽川が豪快な投げで相手を圧倒する頃には、中川高の監督は認識の甘さを理解せざるをえなかった。
今の大太刀は誰が出ても強い！と。
「さて、次は国宝『鬼切』ね。」
迷わずそう言う名塚に対して、宮崎は思わず『昨年もう彼には国宝の価値は無い』と言った彼女にツッコもうとして止める。今の大太刀は明らかに別のレベルだろうから。
代わりにこの一番を彼なりに検証する。
「辻君は体力に不安があるようだし、本人の緊張しいな性格もある、課題はそこだろう。」
明らかに消耗戦を狙ってきた相手に対し、桐仁は終始余裕の表情で相撲を取った。

1分にもわたる長い相撲の結果、意を決して出てきた相手を『網打ち』で仕留める。
「ったく、俺の相撲パクんじゃねぇよ。」
客席から石神の荒木がそう呟く。彼も得意としているオン（集中）とオフ（脱力）の相撲。
だがそれを傍目に理解している人間はわずかで、大勢のライバル達は彼がスタミナ不足を
克服したと認識する、桐仁が初戦から出た理由は正にそこにあったのだ。
―大将戦、東、三ツ橋！西、江口―
江口は立ち合いと同時に得意の突っ張りを放つ。腕が長く腕力のある彼は、三ツ橋に変化させず
潜らせないためにも得意の突っ張りで勝負を仕掛けてきた。
が、最初の1発こそ体を捕らえたものの、それ以降は三ツ橋の手によって捌かれ、躱され、
あるいは体の芯を外される。
江口の頭には三ツ橋の変化、つまり横の動きがどうしても頭にちらつく。それを見越した蛍は
諸岡に教わった『目線による誘導』で、右に行くぞ、左に行くぞ、飛ぶぞとフェイントをかけ
突っ張りの方向自体を誘導していく。
空しく空を切る張り手を掻い潜り、下に潜りこむ。江口はその長い手で蛍を抱え込み
打ち疲れもあって上から体重をかける。この姿勢なら少しは時間が稼げ・・・
突如、江口の体が前に流れる。蛍が両前みつを取ったまま反り投げを放つ！
「いくかっ！」
左足を前に出してこらえる江口。と同時に蛍の右足が江口の左足に巻き付く、内掛けだ。
次の瞬間、蛍は右手で自分の右足首を掴み、手と足の両方で江口の

足を強引に引っこ抜く！

―内掛け『根太起！』―

―以上、５―０で大太刀の勝ち！―

会場がダチ高の強さに騒然となる。他の強豪校はそれでも今の試合を参考に、

対、大太刀攻略を進めていく。

だが、それは大太刀にとっても思い通りの展開だった。桐仁が『長い相撲』を取り、

蛍が潜る相撲から『根太起』まで持っていったのは、最終までの選択肢を見せつけ

警戒心を分散する狙いがあったのだから。

１回戦が終わり、しばしの休息を取る大太刀に、一人の女性（とカメラマンの男）が

駆け足でやって来る。

「おおおーーい、ダチ高ー、取材よろしくーっ!!」

第４０番　激突！名伯楽～王道と異能と

―以上、４―１で石神高校の勝ち！―

準々決勝の第一試合が終わった。予想通り石神が上がってきてはいたが、その強さについては

誰もが疑問符を付けていた。

「やっぱり、沙田と荒木以外はもうひとつ、かな・・・」

桐仁が客席からそうこぼす。石高は初戦こそ５―０だったが、２回戦以降はもうずっと４―１で来ていた。

しかも特定の『負け確』の選手がいるわけではなく、試合ごとに主力２人以外の誰かが星を

落としていた。

むろん相手あっての勝負である、対戦校のポイントゲッターに黒星を喫したケースもあれば

まさかの引き技に足を滑らせた負け方もあった。

だが、それを差し引いても今の石高の沙田、荒木と他のメンバーの間には『安定感』という

面において明確な差の開きがあった。

「オーダーを結構変えてくるのもそのせいでしょうか。」

千鶴子の問いに、だろうね、と頷く一同。試合ごとに順番を変え、沙田と荒木以外は補欠の二人と

出番を入れ替えながらの試合。それには相手にオーダー対策を絞らせたくないとの石高の意図が

見て取れる。

昨年までの不動のオーダーと比べると、石高の台所事情の苦しさが感じられた。

―第二試合。東、柏実業。西、西上高校！―

場内アナウンスに会場が沸く。ここまでの試合を見てきた観客にとってはかなり楽しみな一戦。

大きな体で王道の相撲を取る柏実業と、小回りを利かせて機動力で戦う西上高校。

力対速さ、巨漢対小兵、その激突に観客も、既に敗れた選手たちも注目する。

王道ＶＳ異能、『相撲』で勝つのはいずれか。

「ある意味、監督対決とも言えるわね。」

名塚がそう呟く。柏実業の阿部監督はその指導力においては千葉県屈指の存在だった。

相撲取り然とした選手を育てる稽古から体調管理まで、またいかなるタイプの相手に対しても

対応した相撲が取れる指導、そしてその対戦相手の情報を集めるアンテナの広さまで。

だが、さすがに昨年まで2回戦止まりだった西上の対策は阿部監督には無かった。

それがこの春での屈辱の1回戦負けという結果に繋がってしまったのだ。

「だからなのね、今の柏実業が慎重な相撲を取るのは・・・」

春の動画をタブレットで見ながら名塚は納得する。2―1で西上に敗れた相撲はいずれも土俵際

ギリギリでも攻防を制された負け方だったから。

「さぁ、春の借りを返してこい！」

阿部監督が大きな声で柏実業の選手を鼓舞する。

「大太刀まであと二つだ、大丈夫だ、いつもの相撲を取れば必ず勝てる！」

飯田監督が揺らぎない自信の目をして生徒たちに伝える。

―ハイっ！―

両校の選手の、監督の激に対する返事が、同時に会場にこだまする。

試合は一進一退の攻防を見せる。先鋒戦、西上の小牧は立ち合いから組まずにひたすら土俵を

回るように動き続け、それに追いつこうとして腰高になった相手の足にしがみ付き、押し倒す。

2陣戦、柏の伊丹はひたすら粘った。相手の出し投げ、足技、叩きに耐え続けチャンスを待つと

一瞬のスキをついてがっぷり組み止め、一気に吊り出しでケリをつける。
勝者によくやった、と称賛し、敗者に次は勝て、と激を飛ばす両監督。
それを頬杖をついて羨ましそうに見る桐仁。
「(分かるな、手塩にかけた選手たちが結果を出す、その嬉しさってのは・・・)」
そして横にいるチームメイト達を見る。確かに自分は監督として彼らに接してきたし、その指導が
彼らを強くしてきたことにも自信がある。
力士と指導者、そのふたつの将来に思いを馳せる桐仁。
中堅戦、柏の直沢はその長い腕で相手を捕まえると、ひたすら動かれても手を放さず、
力を込められる姿勢になった瞬間に相手を引きずり回す。姿勢が崩れ、動きが止まった瞬間に
体ごとぶち当たって自分ごと土俵外になだれ落とす。
副将戦、西上は主将の高橋。頭を付けた体勢で相手を捻り倒す『頭捻り』の使い手。
―はっきよい―
柏側も変化は意識していた。が、まさかその変化が『八艘飛び』だとは思わなかった。
ここまで一度も使わなかったその動きに、完全に後ろを取られると、押しからの引きに
背中から土俵に叩きつけられる。
「うわ、やるなぁ・・・」
そう呟く蛍。飛ぶ技術や後ろを取ってからの攻めもそうだが、ここまで全く使わなかった技を
ここ一番で使うその胆力、見破られれば成す術なく負ける変化を、主将の彼が1―2と追い込まれた
状況で迷いなく使うその度胸に。
―大将戦！東、神崎、西、葉山！―

2勝2敗で迎えた大将決戦。柏実業主将の神崎はここまで負けなし、対する葉山は初戦であの
ヤンキー高、大羅の狭間を土俵下まで突き落とした小さな豪傑。
―はっきよい！―
葉山もここに至っては変化は無い。得意の突っ張りが神崎の顔面を捕らえ続ける。
が、神崎はアゴを引き、喉元にアゴを押し付けて耐え、額で張り手を受け止め、体重を利して
じりじりと打たれながらも逆に寄っていく。
「打て打て打て！葉山ーっ！」
「神崎さん、行け、押し切れーっ！」
両校の選手が、そして監督が檄を飛ばす。
ついに土俵際まで詰まる葉山。突きの手ごたえは十分だが、それ以上にこの神崎の力士としての
強さが、『このまま突いてもコイツは倒れない』と判断せざるを得ない。
「ならば！」
横っ飛びで土俵際から脱出し、再度横から突っ張ろうとしたその瞬間だった。
神崎の全体重を乗せた強烈な突っ張りが、カウンター気味に葉山の顔面を捕らえ、頭ごと後方に
のけ反らす。
神崎はここまでただ葉山の張り手を受けていたわけではない、阿部監督の指示に従い、
受けることで相手の張り手のリズムを掴み、ここぞの時にカウンターを狙っていたのだ。
その一撃で意識を飛ばす葉山。
彼が意識を取り戻したのは、神崎に抱きかかえられて土俵の外まで寄り切られた、その瞬間だった。
「以上、3―2で柏実業の勝ち！」
喜びに沸く柏実業。春の雪辱を晴らした、そして何より西上は強

かった。それでも監督の指導を信じ、
取ってきた相撲が結果に結びついた、努力が実る瞬間、喜ぶなと言うのは無理な話だ。
涙に暮れる西上高校の生徒を、よくやったな、と肩を抱いて慰める飯田監督。
この春以降、千葉の高校相撲界を大いに沸かせてきた生徒たちを誇りに思い、こう告げる。
「まだ個人戦もある、大学や社会人にも相撲はある、これからだ！なぁ。」
そんな両校の姿に惜しみなく拍手を送る観客たち。そんな中、大羅の狭間が観客席の最上段の通路から
見下ろしながらこう呟いた。
「俺も・・・真剣に相撲やるか。」

準々決勝の３つ目は、常磐第三が４―１で松戸学園を下し、準決勝に名乗りを上げた。
こちらはずっと先鋒に主将の下山を置き、その豪快な相撲で勢いをつけて勝ちを重ねるパターン。
西上と同じく2年前までは無名高だった新興勢力。彼らもまた全国へ手が届く存在となっていた、
そして、最後の準々決勝が始まる。ダチ高全国への大きなヤマとなる一戦。

―川人高校ＶＳ大太刀高校―

第41番　ライバル―鎬を削った3年間

―大将戦！東、大河内。西、辻！―

大太刀高校と川人高校の準々決勝は、2―2のまま大将決戦へともつれ込んだ。

眼鏡をチームメイトに預け、土俵に上がる両選手。

対峙すると、大河内は桐仁に声をかける。

「そういや、君と戦うのは初めてだね。」

「まぁな。」

お互いが顔を見合わせ礼をする。もうすっかりお馴染みだな、と、相手のマワシに書かれた

学校名を見る。

『大太刀』と『川人』。

準々決勝最後の一戦が始まる時、カメラマンの宮崎はファインダーを覗きながら、名塚にこう語る。

「この両校、すっかりお馴染みの対決になったなぁ。」

そんな宮崎の言葉に、名塚は本当にそうね、と返し、邂逅する。かつてこの2校が初めて団体で激突した、

2年前の春のことを。

―寄り切りで東、潮君の勝ち―

あの鮮烈な『鬼丸』の復活デビュー、その相手が川人高校であり、現在の主将、大河内だった。

あれ以来両校は団体戦で幾度も戦ってきた。最初の春は川人が勝ち、翌年の夏にはダチ高が

全勝する強さを見せた。そして今年の春には川人が再び雪辱を果たす。

また個人戦でもこの2校は幾度も対戦している。その結果もほぼ5分の星。

千葉県内で石高に追随する両校はこの2年で、押しも押されぬライバル校として並び立っていた。

「でも、先に進めるのは1校だけよ・・・」
名塚が少し寂しそうにそうこぼす。あの春に1年だった大河内や、鬼丸と同級生の辻、三ツ橋。
その世代のチームとしての最後の一戦が、これから始まり、どちらかが『終わり』を告げる。
鬼丸はプロへ行き、大河内は沙田を倒して全国の土俵を経験した。辻や三ツ橋は新たな
チームメイトを得て、主力の抜けたダチ高を千葉の強豪校として根付かせた。
鎬を削り合った両校の集大成、そんな試合が今、始まる―
先鋒戦はダチ高が取る。大峰は終始攻めの手を緩めず、最後は得意のがぶり寄りで相手に
土俵を割らせる。が、2陣の陽川は湊の大きな腹に乗せられて吊り上げられて敗れる。
中堅の松本は粘りの相撲からの突き出しで勝利するも、副将の蛍は激しい攻防の末、相手の懐に
潜ろうとしたその瞬間、桜本に上から全体重を浴びせられ土俵に潰される。
そして大将戦、川人の期待の星として常に皆を引っ張ってきた大河内と、ダチ高の監督として
ずっとチームを支えていた桐仁。勝敗の行方はそんな二人の手に委ねられた。
「以前から大河内君には素質があった。でも以前の彼は、明確な自分の勝ちパターンを持っていなかった。
でも今は違う、差し手争いからの『逆鞘（さかさや）』、そこからの寄り、投げ、そして呼び戻し
『荒沸（あらにえ）』」
名塚は分析する。強い力士には必ずある自分の必勝パターン、元々膂力のある彼がそれを会得した今、
彼は高校生レベルから一つ抜けた存在となっていた。
「国宝『鬼切』との1番、もし勝てば彼にも国宝の銘を与えてもいいか

も知れないわね。」
―手をついて―
両校の選手が、応援団が、客席全体が固唾を飲んで見守る。
―はっきよい！―
両者が激突する。張り手もかち上げも無しに真っ向から組み合った二人は、そのまま
差し手争いに入る。得意の左四つを狙う大河内の左手を右手で絞り込む桐仁。相手の左手首を掴み
マワシを取らせない大河内。
だが桐仁は肌で感じていた。大河内の前さばきはそれほど厳しくはない、あるいは手を抜いている？
「（狙っているな・・・）」
大河内独自の組手『逆鞘』。こちらが体勢充分になったところを見計らって頭の位置を入れ替え、
そこから一気に勝負を決める気か！
「え・・・？」
桐仁はいつの間にか土俵際にいた。差し手争いに気が行っていたせいで押されているのに気付けなかった。
大河内は上半身の厚い胸板で圧力をかけ、じりじりと桐仁を押し込んでいたのだ。
「（知ってるよ、君の相撲は必要に応じて力を抜き入れしている。僕が決めに来るその時を狙ってね。
でも、こうしてじりじり攻めていけばどうかな？）」
「くっ！」
俵に足が掛かる。こうなってはもう脱力とか言ってられない、自分の時間を使って勝負に出る。
絞っていた大河内の左手を取り、土俵際を回り込んで『とったり』を仕掛ける。
だが大河内は読んでいた。元々押し込まれてからの左右に入れ替わるような投げが桐仁の必勝パターン、
そう来るだろうと間髪入れず横っ飛びで追いかけつつ、取られた腕

を振りほどく。
「(ったく、嫌になるぜ!)」
再び組み合っての体勢になりながら桐仁は心で毒づく。胸を合わせてみて初めて分かる相手の強さ、
腕力、前さばき、膂力、洞察力、捌き、そして技。
侮っていたつもりはない、あの沙田をも破ったことのあるこの男。
だが実際に相対するまでは
ここまでとは想像していなかった。カウンターの投げは通用せず、組み合えばじりじり体力を奪われ
なおかつ相手の得意『逆鞘』に持っていかれる・・・どうする?
「(もう時間がない・・・行く!)」
意を決して巻き替えに行き、両下手を深く差す『もろ差し』の体制に移行する桐仁。両下手なら
頭がどちらにあろうが関係なく力が出せる、桐仁なりに考えた『逆鞘』対策。
だがその瞬間、大河内は両マワシを離し、下手を取った桐仁の腕を両閂(かんぬき)に決める。
「読まれてた!」
蛍が、陽川が叫ぶ。春の大会で陽川がこの逆鞘に敗れてから、研究してきた対策。
しかしそれも大河内にとって織り込み済みだった。
桐仁の両肘を絞るように極めながら前に出る大河内。このまま『極め出し』で土俵を割らせる気だ。
両手を極められている以上、桐仁得意の投げが出せない、まずいっ!
ここで桐仁は賭けに出る。右手を離し、素早く巻き替えようと腕を抜こうとする。が、大河内は
それを察して左ヒジを上げ、腕を抜かせまいとする。
が、それこそが桐仁の狙いだった。一度抜きかけた右手を次の瞬間、肩ごと深々と差し込んだのだ。
極めを外すために一度引き、追いかけてきた所を逆に潜る、業師桐

仁ならではの駆け引き。
半身になり、大河内の左懐に入り込む。下を取った桐仁が土俵際で踏みとどまると、そのまま吊りに出て
上半身を浮かせ、右足で相手の足を狩る！
「くっ！」
大河内も簡単には落ちない。その長い足を大きく踏み出してこらえると、閂に決めたままの右手で
小手投げに行く。
「（バランス感覚も並以上かよ！）」
大河内の才能に辟易としながらも足さばきで凌ぐ桐仁。土俵際で半回転し、両者の動きが止まる。
「（マズいな・・・ガス欠寸前・・・か。）」
とったり以降の攻防で、桐仁の時間は確実に減っていた。まともに力を込められる攻防は
あと1回が限度か、だったら！
差し手争いの攻防は大河内に分があった。左の下手を引き、右の上手を捕らえる。彼得意の左四つ！
「（ここだ！）」
桐仁は相手の組手になったその瞬間、頭を引いて大河内の左に頭を持っていく。なんと桐仁が
大河内に『逆鞘』を仕掛けたのだ。
「なっ！」
目を見張る大河内、まさか相手からこの組み方を仕掛けられるとは！
だがそれでも有利なのは大河内の方だ。上手が遠くなるこの組み方、長い腕の大河内の右上手は
掴めているが、桐仁の右手はマワシを引けず、相手の腕を巻いているだけの状態。
「ここで決める！」
意を決して上手投げに行く大河内。伸びきった上手でも桐仁の体を振り回すだけの膂力が彼にはある。

桐仁を振り回し、こらえた所で左下手を差し込み、逆にすくい投げを打つ、呼び戻し『荒沸』！

「(得意技に固執してきたな、待っていた！)」

桐仁は呼び戻しのタイミングに合わせて、同じ方向に首投げを放つ。右手を相手の首に巻き付け、

そのすぐ下の相手のすくい投げの力をも利用して投げの打ち合いに持っていく。

さらに桐仁は右足で大河内の左足を内から『掛け投げ』風に跳ね上げる。

「な・・・に!?」

大河内は驚くがもう遅い。こうなってしまえばあとは投げの打ち合い、耐え合いだ。

刈られた片足を上げ、柔道で言う『内股すかし』の姿勢でこらえ、すくい投げを決めようとする。

「(くっぞ・・・がぁぁぁぁっ！)」

既に溺れつつある桐仁が、残る全ての酸素と力を振り絞る。すかされそうになる足を辛うじて掛け、

自分の方に引き込もうと首投げを打つ！

そして両者は、その足を高々と上げたまま静止する。

どよめく場内。次の瞬間にはそれは歓声へと変わる。

「行けーーっ！」

「押し切れ、主将ーっ！」

「引きつけろ、巻き込めーーっ！」

「力相撲だ！」

時間にすれば1～2秒、投げの打ち合いの状態で静止していた両者は、あらんかぎりの力を振り絞って

相手を巻き込もうとする。自分の投げで相手を体の下に巻き込めば、あとはそのまま覆い被されば

勝敗は決する。

そして膂力、腕力、持久力で勝っていたのは、大河内の方だった。

ぐらり、と桐仁の体が大河内の方に流れる。この時、大河内は自分

の勝ちを確信した。
相手の右手は未だ自分の首に巻き付いたままだ。それは即ち相手が自分にしがみ付いたままだという事。
そして体が回る、相手を自分の下に連れ込んだ感覚。
体重をかけ覆い被さる。あとは彼の上にのしかかるだけ・・・
「なっ!?」
目を見張る大河内。確かに桐仁は自分の下にいた、自分の首に右手も撒いている。
だがその姿勢は投げられた『死に体』ではなく、両足を地面についた『残し』の状態だった。
桐仁は投げ合い状態から、跳ね上げた足を下ろして相手の下に走ったのだ。体を『く』の字に曲げ
足を下ろしたことを悟らせないように回り込んでいた。
だが、両者とも姿勢は良くない。大河内は投げの体勢に入ったまま片足立ち、桐仁は無理な回り込みと
長身の大河内の首に右手を巻いているせいで腰が浮いている。
だが、桐仁は知っていた。ここから相手を仕留める技があることを。
―首捻り―
相手の投げの回転力をそのまま利用して、首を巻き込んでの投げ。
かつて桐仁はこの技を
先輩である小関に教えたことがあった。その時に実践した感覚をトレースして、大河内の長身を
土俵際に引っ張り込む!
―ズシャアァァッ!!―
文字通り2転3転した攻防は、その時に決着を見た。
「西、辻の勝ち!」
ハッ、ハッと両手をついて息を切らせる大河内。背中で審判の声を聞き、負けたことを思い知る。
が、後悔や悲しさの感情よりも先に彼が目にしたのは、勝者である桐仁の息も絶え絶えに

背中を丸めてもがき苦しむその姿であった。
ダチ高の面々が酸素スプレーを持って殺到する。蛍が審判にすいません、と断りを入れ
陽川が桐仁の上半身を起こし、酸素スプレーをあてがう。
３０秒ほどそのまま呼吸をさせて、ようやくよろよろと立ち上がる桐仁。
その対面には、見慣れた『川人』の文字のマワシを締めた大河内が、凛とした表情で待ってくれていた。
「礼！」
お互いが頭を下げる。ライバルである両校の最後の団体戦は、こうして終わりを告げた―

第４２番　達人にでもなったつもりか！

―準決勝第一試合。東、石神高校。西、柏実業！―

場内のアナウンスと共に相対する両校。国宝『三日月』を擁し、夏春に続く千葉３連覇を狙う石神と

古豪復活を目論む柏。決勝にコマを進めるのは果たしてどちらか。

礼をする両陣営をファインダー越しに見ながら、カメラマンの宮崎がこう予想する。

「柏実業は、沙田君と荒木君は捨ててるんじゃないか？」

石高の両エース、沙田と荒木の強さは今大会でも突き抜けていた。昨年夏からの成績を見ても

沙田が破れたのは昨年ＩＨ個人戦決勝の日景典馬のみ、荒木も昨年夏の個人戦でチームメイトの沙田に

屈したのと、今年の春の団体、全国で鳥取白楼の国宝『備前長船』こと舟木に敗れた２敗のみだった。

「だけど、柏実業が残りの３人に全勝、っていうのも考えにくいわ。」

記者の名塚が返す。石高の他メンバーは実力的には柏実業の面々と伯仲している。エース２人に

捨て石を当て、残りの３人にポイントゲッターを投入したとしても、全勝の確率は低いだろう。

結局、国宝級２人を擁するというのが、いかに団体戦で有利に働くかがよく分かる。

そこまで考えて、改めて宮崎の考えを否定する名塚。

「それに・・・阿部監督は自分の生徒を『捨て石』に使うような人じゃないわ。」

２年前の夏、注目されていた国宝『鬼丸』に対して、チーム１の巨漢、ぶちかましの伊藤を当てて来た。

試合は鬼丸が成長を見せつけ圧倒し、結果４―１で敗れたが、柏側にしても捨てているような

オーダーは皆無だった。

監督と生徒の信頼関係、それこそが柏実業の強さの真骨頂なのだ。

―先鋒戦。東、荒木。西、藤岡！―

「まずは荒木君か、だいたい両エースのどっちかが先鋒よね、石神は。」

先鋒戦を確実に取り、勢いをつけて2陣以降に繋げるのが今年の石高のスタイル。

「いいんじゃないかな、団体のオーダーの組み方としては正しいと思うぞ。」

「そうね・・・」

アゴに手をやりながら名塚は思う。確かに今の荒木君なら石高に勢いをつけるのにもってこいだ、と。

力のオンオフを使い分けるその相撲、脱力により生み出されるその技の爆発力。そして何より

勝負所の一瞬を見逃さない荒木の勘の良さ。

誰もが思う事。ならば荒木が脱力をしている間に一気に勝負を決めてしまえば、と。

だがそれは彼の『削ぎ落す精神』の前にことごとく土を付けられる。いかな窮地に陥ろうとも

一切の雑念を廃し、勝ち筋を、力を爆発させる瞬間を見極めるその心の強さに屈する事になる。

思えば脱力しているからこそ、彼は冷静に戦況を見つめ、下す判断がさらに冴えわたるのだろう。

そして名塚も知らない事だが、荒木のこの削ぎ落す相撲は、チームメイトの沙田の出し投げすら

見極めて止める程の判断の速さを得ている。そこに至ってからは彼はしばらく沙田を圧倒してきた

程だった。

沙田の新たな技『月輪』は、この荒木に対抗するために生み出された。相手が凌ぐなら

凌げなくなるまで引きずり回す、沙田らしからぬ力づくの投げ。校内のライバルで切磋琢磨してきたのは

石高も同じだったのだ。

―手をついて―

沙田が余裕の表情で土俵を見上げる。今の源ちゃんが負けるなどありえない、勝って勢いをつけ、

大将の僕に回る頃にはウチが決勝進出を決めているだろう、と。

柏実業の阿部監督が内心ほくそ笑みながら土俵を見、心の中で呟く。

「(荒木君、確かに君は強い。その集中力、力の出し入れ、見事なレベルだ・・・だが!)」

―はっきよい!―

「高校生風情が!相撲の達人にでもなったつもりか!」

その阿部監督の独白は誰も聞くことが出来なかった。立ち合いの一瞬の後、会場はまさかの光景に

驚愕と悲鳴とため息と、そして歓声の渦に包まれたのだから。

石高の全員が呆然とした表情で固まる。柏実業の面々はしてやったり、とガッツポーズ。

西の控え席で見ていたダチ高の面々は『その手があったか!』という顔。

―『お手つき』で西、藤岡の勝ち!―

藤岡のやったことは簡単だった。立ち合い胸を合わせてすぐ、右手で荒木の左手首を掴み、

そのまま下に引き下ろして荒木の左手を地面につけた、ただそれだけである。

その一瞬の動きに、脱力していた荒木は成す術がなかった。極めて小さい動作、少ない力の動きで

相撲の負けの条件『地面に手をつく』を強要されたのだ。

本来なら姑息なイメージのあるこの決まり手。だが力のオンオフの相撲を取る荒木に対して

これほど有効な手もないだろう。寄りよりも投げよりも叩きよりも速い、削ぎ落した精神でも

対応が間に合わない絶妙の一手。

もし荒木が脱力していなければ、それは単純な差し手争いの動きで終わっていたはずなのだから。

「よし！よくやったぞ藤岡！」
阿部監督が大きな声で絶賛する。それはやや姑息な感じのある勝ち方が、監督である自分の指示で
あることをアピールする狙いもある。藤岡は自分の指示に従っただけだ、と。
「ちょ、ちょっと・・・待てよ」
呆然としたまま、やっとそれだけを絞り出す荒木。一体今のは何だったんだ？俺は相撲を取ったのか？
誰にも負けない戦法を身につけた、力士の強さを備えた、今度こそ石高を全国一のチームにする、
そう沙田と誓った・・・なのに！
審判に即され、呆然としたまま土俵を降りる荒木。その目に移ったのは自分以上に愕然とした
チームメイト達の顔だった。

「石神は先鋒にエースを出して勝って勢いをつける、だったわね。ならもしその先鋒が負けたら・・・」
名塚の言葉にはっとする宮崎。石高が先鋒戦を落としたという事は、沙田君を除いても残りの3番で
2勝を挙げなければ彼らは決勝に進めない。
そして今の石神と柏の戦力を考えたら・・・いや何より先鋒戦で敗れたこの流れの中、大将の沙田君に
頼らずに2勝するのは逆に至難の業なんじゃないか・・・？
その宮崎の危惧は的中する。
2陣戦、意気上がる柏の伊丹は石高の相良を攻めに攻める。逆に相良は負けられないプレッシャーに
手足が付いてこず、終始劣勢のまま土俵を割らされる。
石神高校相撲部。
沙田美月と荒木源之助という突出した二人が率いるこのチーム。
そんな彼らのチームメイト達は
常にふたりに対するコンプレックスのようなものを抱いていた。

もちろん自分たちも彼らに負けない強さを得たいと稽古に励んだ。
しかしその差は日を追うごとに
開いていく一方だった。特に沙田に対してはまともに相撲にならず、力不足を実感させられる。
沙田が楽しそうに皆川部屋に出稽古に行く姿を見ては、自分達との差を思い知らされていた、
自分達は沙田主将の稽古相手にすらなりえないんだ、と。
そんな『心』の弱さが今の石高には根付いていた。ならせめて沙田主将や荒木のお荷物に
ならないように頑張ろう、と。
今の彼らに、自らピンチを跳ね返そう、という『心』の強さは、無い―

第４３番　石高、剣ケ峰

まさかの石神高校２連敗に会場が騒然となる。肝心の国宝『三日月』は大将、ここから負け無しで
２連勝しない限り、彼らの団体の夏は終わる、昨年ＩＨ全国ベスト８の石神の夏が。
「大丈夫だ、ここから取り返していこう。」
沙田主将のその声は、中堅の荻野、そして副将の三宅には響かなかった。
日々沙田との実力差を思い知らされている彼らにとって、その言葉は『持ってる者』の
言動にしか過ぎないのだ。
その空気は沙田にも伝わっていた。が、そんな彼らに言うべき言葉が出てこない。
自分は何と無力な主将なのか・・・こんな時、金盛さんや間宮さんならもっと気の利いた
檄が飛ばせるのだろう、しかし僕は駄目だ、こういう時に自分は無力なんだと改めて思い知る。
沙田　美月
小学生の頃から抜群の運動神経を持ち、野球、サッカー、バスケ等様々なスポーツで活躍してきた。
だが、だったら彼は何故その道に進まなかったのか。
団体競技は個人が優秀でも、チームワークが取れていないと意味がない。チーム内でも一歩
抜きんでていた存在の彼に、チームメイトがついていけなかったのだ。
彼の剛速球を受けられるキャッチャーはおらず、絶好の位置取りをする彼に的確なパスを出せる
選手もいない、彼がいくらダンクを決めても、ザルなディフェンスは倍の反撃を止められなかった。
そんなある日、彼は相撲に魅かれる。マワシ一つで己の姿をぶつけ

合う個人競技。仲間との
温度差が埋まらなかった彼にとって、この世界はまさにうってつけだったのだ。
中学横綱になり、強豪の石神高校に入学する。そこでの先輩達との日々、そして『鬼丸』を
始めとするライバル達との激闘の日々は、彼が昔持っていたジレンマを忘れさせていた。
だが今、沙田は再びその思いに苛まれている。
自分についてこられないチームメイト、自分は特別だという周囲からの視線、それでも彼らは
自分を信じ、主将として慕っていてはくれた。それは裸でぶつかる格闘技、相撲ならではの感情。
嫉妬があるならぶつかり稽古で思う存分発散すればいい、気に食わないなら申し合い稽古で
その思いを叩きつければいい、そんな肉体言語の世界に感謝し、ある意味甘えていた。
そんな石高相撲部を日本一の相撲部にしたかった。だが、だったら何故チームがピンチに
陥ることを想定しなかったのか、そんな時に気の利く激を飛ばせるよう考えておかなかったのか。
それは間違いなく自分が『持っている』人間だったから。
持たざる者の心境を想像できなかったから、だからこんな取ってつけたような激励しか言えないのだ。
主将、石高相撲部を日本一にする、僕が？無理だ、この有様じゃあ。
すっ、と沙田に並び、荻野と三宅の前に出たのは、石高相撲部顧問の菅原だった。
彼はメガネの奥の目をまっすぐ二人に向けて、こう話す。
「いいですねぇ、舞台に立てる、と言うのは・・・」
え？という表情をする石高のメンバーたちに、菅原はこう続ける。
「私は相撲を取ったことが無いですからね、土俵に上がり、戦える皆さんが正直羨ましいんですよ。」

それはスポーツを観る者全てに共通する感情だろう。プロ野球に憧れる少年は自分がメジャーのマウンドに登ることを夢見て、サッカーの好きな人はワールドカップのフィールドに立つ自分を妄想する。

それは何も少年だけの夢ではない。叶う可能性が無い年齢に達した者も同じように、その舞台に立つ自分の姿を妄想する、だからスポーツは誰からも愛されるのだ。

「君達が普段どう思って稽古をしているか、私は良く知っていますよ。」

2人を見た後、沙田にちら、と目をやる。それだけで十分に伝わる。自分たちが沙田に感じている

コンプレックスを、先生には見抜かれていたんだ、と。

「ですが土俵の上では君たちが主役です、少なくとも見るだけの私などより、君達の舞台なんですよ。」

しばしの静寂の後、荻野が自分の頬をぱんぱんと張り、三宅の目に改めて力が籠る。

そう、彼らにしても石高の部内戦でレギュラーを勝ち取ってきた。今日この舞台に上がれず、

観客席から応援している仲間だって大勢いる。

自分は沙田主将の脇役かも知れない、だが、土俵に上がれば自分が主役なんだ。

―中堅戦。東、荻野。西、直沢―

立ち合い、柏の直沢はまさかの変化をする。追い詰められて余裕のない今の石神なら

この変化についてこられないだろう、との阿部監督の指示だった。

しかし荻野は足運びでこれを凌ぐと、得意の左四つに組み止めて一気に寄り立てる。

直沢も土俵際で懸命に残すが、それでも力ずくで寄り切ってケリをつけてみせた。

ガッツポーズを握った拳で三宅と拳を合わせる、次はお前の番だ、と。

石高の立ち直りを見て取った柏の阿部監督も、直沢を労いつつ、次の佐久間に檄を飛ばす。

「小細工はいらん、真っ向勝負で勝って来い！」

―副将戦。東、三宅。西、佐久間―

激しい突っ張り合いからの攻防。佐久間は得意の右四つに組み止めるが、三宅は腰を切って

上手を振りほどくと、そのまま下手投げを打ち、崩れた所に一気に寄って出る。

土俵際で踏みとどまった佐久間は再び上手を取り、土俵中央まで押し返す、一進一退、互角の

力相撲の様相を呈する。

土俵を見上げる沙田の肩をぽん、と叩く荒木。

「何やってんだよ主将サマ、声出さねぇか！」

あ、という表情の後、よし、と頷いて手でメガホンを作り、声を出す。

「三宅！行け！押し切れーっ！」

「止まるな、押せ押せ押せぇー！」

「沙田主将に繋げよ！勝てぇ！」

「ぷりぃーず、わんもあちゃーんっすっ!!」

荒木までが下手な英語を交えて声を出す、石高ではあまり聞かれない懸命の叫び。

その声に応えるかのように、素早く手を巻き変え、得意の左四つに組み替える三宅。

佐久間はそのスキに土俵際まで寄り立てるが、俵に足が掛かった所で自分の組手を失う。

かまわず体を浴びせ、寄り切ろうとする。が、そんな彼の足が浮く。

豪快に佐久間を吊り上げた三宅は、そのまま体を回して相手を土俵外に降ろした。

―吊り出しで東、三宅の勝ち！―

爆発する石高応援団。0―2の窮地から五分の星まで持ってこれた。しかも最後は国宝『三日月』、

これで勝てる！と誰もが思い、声を上げる。
沙田は立ち上がると、菅原にぺこりと頭を下げる。自分はまだまだ未熟者だ、との自戒を込めて。
そんな沙田に菅原は声をかける。
「さぁ、あとは貴方がみんなの為に出来ることをするだけです、分かってますね。」
「・・・勝ちます！」
力を漲らせて土俵に向かう沙田。チームメイトはその背中に頼もしさと、味方で良かった、という
感情を込めて見送る。
「さぁ、お膳立ては整ったぞ。神崎、国宝を叩き折って来い！」
「ウッス！」
柏実業の大将、神崎が腰を上げる。ここまで全勝の彼は、沙田相手にも決して気後れしていない。
阿部監督の言葉通り勝利して、自分こそが国宝に名乗りを挙げんと土俵に向かう。
―大将戦。東、沙田。西、神崎―
「神崎君か、沙田君にとってやっかいな相手ね。」
観客席の最上段で見ている記者の名塚が思わずこぼす。
神崎は１８８ｃｍ１３５ｋｇの恵まれた体躯、しかも腕が長く肩幅も広い。得意の型は右四つ、または両上手で、
強力な腕力をもって相手を制する相撲を身上としている。
また準々決勝の西高、葉山戦で見せたような、横の動きに反応する速さも兼ね備えている、
おっつけや出し投げを得意とする沙田に当てるのにこれ以上の人材はそういないだろう。
泣いても笑ってもこの１番で決する。二転三転した準決勝を制するのは、果たして・・・
―はっきよい！―
バチン！と小気味よい音と共に両者の胸が合う。そして同時に右下手を引く両者。

ざわっ！と会場がざわめく。あの沙田が、マワシを取らせない相撲を取る彼が、いともあっさり
相手に下手を許した？しかもおっつけるでもなく、普通に差し手争いを演じて、上手を探っている。
「よし、捕まえた！」
阿部監督始め柏実業の面々が色めき立つ。この体勢になったらもう神崎の相撲だ。
あとは左上手さえ引けば逃がさずに土俵を割らせることができるハズだ。
そんなチームの期待に応えるように、沙田の右手を掻い潜り、しっかりと左の上手を引く。
右四つ充分！あとは寄りに出るのみ・・・
「なに!?」
掴んだはずの右下手が切られる。左の腕を返し、腰を切って神崎の上手を切った沙田は、なんと
そのまま寄りに出て、神崎を土俵際まで追い詰める。
「沙田が『寄り』だと・・・？」
ファインダーを覗きながら、カメラマンの宮崎が叫ぶ。長年彼を取り続けてきた彼でも見たことのない
沙田の押し相撲。
「・・・最初から、コレを狙っていた？」
名塚が理解する。もしそうなら立ち合いからおっつけも無しにいきなり組んだことも説明がつく。
「土俵際気を付けろ、出し投げが来るぞ！」
阿部監督が声を上げる。それを土俵の反対側から聞いた荒木がふっ、と笑って否定する。
「ねぇよ、何しろあの寄りは・・・」

「「お疲れさんでございます！」」
春の某日、皆川部屋の力士たちが一斉に入り口に向かって、深々と頭を下げる。

入ってきたのは白い稽古マワシを締めた、普段の部屋では見ない力士。だが、出稽古に来ている
沙田も荒木も、その力士を知らないはずが無かった。
横綱、楯城山（たてぎやま）
かつて刃皇、猛昇山と共に『モンゴル3強横綱』として一時代を築いた力士。
確かに彼はここ皆川部屋と同じ、三海峰一門の横綱。出稽古に来るのも納得できる。
「横綱！僕と一番お願いします！」
沙田が遠慮も無く即そう申し出る。部屋の力士たちはそんな彼をたしなめようとするが、
「おう、君が噂の国宝君だね。いいよー。」
とあっさり承諾。思わぬチャンスに胸躍る沙田であったが・・・
沙田の出し投げが、いともあっさり横綱にヒザをつかせる。思わず『え？』という表情の
沙田と荒木。が、他の力士や付き人達は別段驚きもせず、横綱を労い、親方の横に座らせる。
親方と談笑し、出されたお茶をすする横綱を見て、沙田は馴染みの力士に耳打ちする。
「（横綱どこか悪いんですか？）」
「（悪いも何も、もう満身創痍だよあの方は・・・先場所も休場してたろ）」
角界において、未だ無敵の強さを誇る刃皇に対し、猛昇山と楯城山は体力の衰えが顕著だった。
序盤で黒星が先行しては休場し、最後まで出た場所も辛うじて8勝7敗が関の山だった。
日本国籍が取得できない彼らにとって、潔く引退したとしてもその後に親方株は得られない。
現役引退した後に、相撲界で生活していく道が無い以上、今の地位にしがみ付いているしか無いのだ。
「国宝君、もう一番やろうか。」

その日の稽古の締め、沙田は横綱に再び声を掛けられる。沙田はありがとうございます
と言いつつも、今度は投げを使うのは止めようと決めて胸を合わせる。
そして沙田は思い知る。横綱の差し手の上手さ、寄りの圧力、反撃をさせないその技術を。
いくら投げをしなかったとはいえ、ここまで圧倒されるのはいつ以来か、その強さと大きさに
彼は本物の強さを知る事になる。
「一週間ほど滞在するからね、いつでも来るといい。」
当然の如く、沙田は足しげく皆川部屋に通った。それはもう楽しそうに。
少しでも横綱の強さを吸収しようと、正面からの差し手争い、寄り、吊りなど、今までにない
戦い方を横綱に負けながら学び続けた。その結果、沙田は今までにない正面切っての相撲を
奥の手として備えることが出来たのだ。

―寄り切って東、沙田の勝ち―
神崎の巨体が、土俵の外で両手をヒザに付いて呆然としている。組めた時には勝ったと思った、
そこからまさかの力負け、じゃあ一体どうすればコイツに勝てた？・・・これが『国宝』の力、なのか。
うなだれる彼に阿部監督が声をかける。
「すまん、沙田に寄りがある事を見抜けなかった俺のミスだ。まだ個人戦もある、胸を張れ！」
西の控えで試合を見ていたダチ高も、沙田のまさかの強さに呆然としていた。
誰もが沙田に当たることを想定し、いかに組むか、そのマワシをどう掴むかを考えていたのだ。

が、それはこの1番で無意味に終わる。組めたらどうこうできる相手では無いことを思い知らされる。

桐仁は歯をぎりっ、と噛みしめながら、心の中で苦渋の決断をする。

「（沙田戦は・・・捨てるしか無い。）」

第４４番　ケンカ相撲

「あったあった、あそこだよ、会場！」
「本当にもう！バス逆方向に乗ってどうすんのよ！」
「ソレ言うんだったら、部長もでしょ！」
会場に向かって駆ける女子高生の一団。真夏の炎天下に大汗をかきながら全力疾走。
「ダチ高、まだ、残ってる、かなぁ・・・」
「大丈夫でしょ、あの人達なら！」
「だと、いーけど、コレで負けてたら、何しに、来たん、だか・・・」
息を切らせながら会場入りする、といっても前の方の席は埋まっており、やむなく最上段の
立ち見通路に向かう。
―準決勝第二試合。東、常磐第三。西、大太刀高校―
「残ってた・・・よかったぁー。」
「これから準決勝か、流石ねー。」
ばたばたと通路に集合する面々。と、そのすぐ下の観客席にいた記者の名塚が彼女らを見上げる。
「（あら、この娘たち、確か・・・）」
そんな彼女の思考を、逆方向からの声援がストップさせる。

「「フレーッ。フレーッ、常・磐っ！」」
「「頑張れ、頑張れ、だ・い・さんっ!!」」
会場内に響く常磐第三の応援団の声。共学でやや女子が多い学校だけに、応援の声も
やや黄色い声が多い。
「くっそー・・・ダチ高、構わねぇから叩きのめせ。」
憮然とした表情で石高の荒木が毒づく。男子校の自分たちには野太い声援しか無いってのに、
なんで相撲部で女子に応援されるんだ！羨ましい。
「「大太刀ーっ！ファイットーっ！おーーーっ！」」

え〟という表情で荒木が声の方に振り向く。共学どころか混じりっけなしの女子達の声援。

見上げた先には女子高生の集団が常磐第三に負けじと一斉に声をあげている。

荒木が頭を抱えて嘆いたのは言うまでもない。

「がああっ、もうどいつもこいつも！」

その声援にダチ高相撲部も思わず反応する。

「あーっ！九十九里高のみんな！」

「応援に来てくれたんだ。」

「黄色い声援・・・いい！」

思わぬサプライズに感動する一同。陽川に至っては感涙に顔を歪めている。

そんな一同に部長の蛍は、ぱん！と手を打って皆に檄を飛ばす。

「さぁ、遠いところから応援に来てくれたんだ、いい相撲を見せよう！」

―東、下山。西、赤池―

応援合戦も終わり、両校の先鋒が土俵に上がる。と同時に濃密な殺気が会場を支配する。

共に荒っぽい相撲が身上の両者。準決勝の幕開けとしてガチンコの展開は確実だ。

「（この1年坊、確か新人戦でウチの清水を吊り上げたヤツだな・・）」

下山が相手を見ながら分析する。確か吊った時には吠えていた、相当負けん気の強いヤツだ、と。

以前の彼なら、こういう相手には『じらし』や変化を使って気合を空回りさせる戦法を使っただろう。

だが今は違う、常磐第三の主将として、また先鋒として、真っ向からねじ伏せてチームに勢いを

つけねばならない。

「（ワイと同類、か。望むとこや！）」

赤池は試合前に蛍や桐仁に言われたことを思い出していた。いい意味で荒っぽい相撲を取る相手、

そんな相手に真っ向からぶつかって勝てば勢いを得られる、その為にお前を先鋒で出すのだ、と。

ばんばんと顔を叩いて気合を入れる。

「勝てると思うか？」

そう問う桐仁に、下山との試合経験を持つ蛍はこう返す。

「簡単にはいかないよ。でも赤池君なら間違いなく、この1番でチームに力をくれると思う。」

蛍は昨年春の下山との一番、その後のチームメイトの試合を思い出していた。

下山は敗れはしたが、その懸命な一番はチームにも勢いを与え、戦力的に上回るダチ高に

善戦してみせた。勝つのももちろんだが、負け方によってもチームに力を与える一番というのは

確かにあるものだ。

―はっきよい！―

ドゴォッ！

上背のある下山がまずはかち上げを放つ。体重の割に背の低い赤池に潜られまいと、

その顔面を跳ね上げる。

お返しとばかりに赤池は突っ張りを放つ。2発、3発、下山の顔面を捕らえる。が、次の1発を

手で払いのけた下山はそのまま額から赤池に突っ込む。

―ガッツゥウン！―

頭と頭、ほぼヘッドバッドなノリで額を打ち付け、そのまま両者が額をくっつけたまま

押し合い睨み合う。下山の額からつーっ、と赤い線が流れるが、そんなことはお構いなしに

アゴを引き、そのままマワシを探る。

そのスキをついて赤池が下に潜り、両前みつに手を伸ばす。が、それも下山の想定内だ。

バチィン！と素首落としを赤池の首筋に叩きつけ、引き落とそうとする。赤池は足運びで耐えるが
そこに待っていたのは下山の突き上げるような突っ張りだった。
―バゴン！―
アッパーカットのような張り手が赤池のあごを跳ね上げる。上体をまるごと浮かされた赤池は
それでも張り手を返す。下山も張り返し、まるで殴り合うような突きの応酬になる。
その迫力の展開に、思わず会場からは、おおおぉーっ！という声が漏れる。
「すっげぇ！めっちゃガチじゃん。」
「もうほとんどケンカだよ！」
「これ本当に相撲かよ、面白れー、」
そんな観客の反応を聞いて、名塚は心の中で返す。これ『も』相撲なのよ、と。
下山が張り手を右手で捌き、そのまま小手に抱え込む。間髪入れず強引に小手投げを打つ！
赤池の左ヒジが、めりっ！という音を立てる。が、赤池も足を運んで回り込み、
さらに投げようとする下山の周りをぐるぐる回って凌ぐ。
が、投げを止めた下山は、すかさず赤池の右手をも小手に巻き、両門を決めて極め出そうとする。
赤池の痛めた左腕がみきみきと嫌な音を立てる、痛みに負けて引いたら一気に土俵を割らされるだろう。
―ゴツゥン！―
両手を極められた赤池が負けん気を発揮、なんと下山の頭に自分の頭をぶつける。
極め出しでずりずりと押されながらも2発、3発、4発と頭突きをかます。
割れていた下山の額から血が飛び散り、両者の胸を染める。それでも引かずに押す下山と

頭を叩きつける赤池。
「行けー、主将っ！」
「押せ押せ押せ押せーーー！」
「諦めるな、粘れ粘れっ！」
「腕を抜け、折られるぞ！」
両校の、そして観客の声が響く。
赤池が7発目の頭突きを決めた時、審判の「勝負あり」の声が響く。
―極め出しで東、下山の勝ち―
さすがに痛めた腕を極められて寄られれば、赤池の負けん気でも成す術は無かった。
顔面血まみれの下山と、左手を抑えて顔を歪める赤池だが、それでも両者正対に構え、
礼をして土俵を降りる。
そんな彼らに拍手の渦。ある意味相撲の原点の様な一番に大いに満足する観客たち。
「ナイスファイト、主将！」
「おう、後は任せたぞ。」
タオルで顔面を拭き、割れた額に絆創膏を張りながら下山が答える。さぁ頼むぞ、
俺より強い後輩共！
「くっそ、がぁっ・・・」
赤池は千鶴子に左手を観てもらいながら悔しさをこぼす。準決勝で相手の主将を倒す
チャンスを逸した事は、彼にとってケガよりも痛みを感じる。
「大丈夫です、折れても外れてもいません。」
「そっか、良かった。」
「・・・良ぉねぇわ！」
蛍の言葉に赤池が吼える。確かに勝ちの可能性はあった。だが白星は彼の手をこぼれ、
団体戦で先行を許した、それが無念だった。
そんな赤池の肩にぽん、と手を置き、蛍は真摯な目でこう返した。

「取られたら取り返すよ、必ずね。それが団体戦だ！」

「赤池ちゃん負けちゃったかぁー」

「あーあ、小林さん泣いてんじゃん、気付きなさいよ鈍感男。」

観客席の一番上で、九十九里高の女子相撲部が感想を漏らす。彼女らも相撲を取る身なれば

今の激しい一番を見ても気後れは無い。

「でも先制されちゃったわよ、ダチ高大丈夫かなぁ・・・」

「勢いは常磐に行っちゃったわね、こっから引き戻すのは正直ツライかも・・・」

主将の池西レモンがそうこぼす。彼女も団体戦の勢いや流れの重要性はよく知っている。

と、すぐ下にいる名塚が彼女らを見上げ、こう返す。

「大丈夫じゃない？2陣は『彼』だから、流れを引き寄せるにはうってつけよ。」

いきなり声を掛けられてしばし固まる女子部員。それが見知った顔であることを認識し、返す。

「あ、『月刊相撲道』の名塚さん！それにカメラマンの宮崎さん、お久しぶりです。」

一斉に会釈する女子達。名塚はお久しぶり、と手をひらひらさせて微笑む。

「まぁ見てなさい、彼は何度も相手に入った流れを自分の方に引き寄せてきた男よ。」

そう、2年前の鳥取白楼戦、そして昨年の県大会決勝の石高戦、彼はその小さな体で

常にチームメイトの『心』を牽引してきた存在なのだ。

―2陣戦。東、清水。西、三ツ橋―

第４５番　変化のスペシャリスト、３年間の集大成

「まずは常磐が先制、と。」
東の控え席で、椅子に腰かけて試合を眺めていた石高の沙田が呟く、
この1戦の勝者が決勝の相手、主将としてチェックは欠かせない所だ。
「2陣は三ツ橋か・・・アイツももう2年前の面影はねぇな。」
隣に座る荒木がそう続ける。2年前のこの大会では、三ツ橋は単に小細工を弄するだけの
素人でしか無かった。相撲のみならず格闘技、いやスポーツすら、のレベルで。
だが今は大太刀の部長として、この大事な場面で2陣を任されている。その表情に以前の様な
悲壮な影は微塵も感じられない、自信と、後輩が落とした星を取り返す気迫に満ちた顔。
「相手の清水君は春の新人戦準優勝だよ、まだ1年だけど体も大きいし・・・源ちゃんはどう思う?」
沙田のそのフリに荒木は、ああん?という表情を向ける。
「分かってんだろ、デカいだけで勝てりゃ苦労はねぇよ。」
一度そこで言葉を区切って、そのあと保険を掛ける荒木。
「ま、もしここで負けるようなら、三ツ橋もその程度だったってこった。」
―互いに、礼―
一礼して顔を上げたその瞬間から、蛍の視線が清水を射抜く。睨むでも凄むでもなく、
ただ相手の眼球をサーチするように、蛍火の様ならんらんと輝く目で。
その眼光に、清水は先鋒戦で戦った主将、下山の勝利の勢いを削がれる。いや、正確には
初戦の勝利に浮かれることなく、自分が対戦するこの小兵力士への

対応に思考が移る。
「(コイツは確か変化を使う相手。下手に張って出て躱されたら回り込まれる。
なら腕からいかずに胸で受けるべきか・・・いや、潜る相撲もあったハズ、胸で当たったら潜ってくれと言ってるようなもんだ、なら・・・。
―手をついて―
「(躱されても落ちない程度の勢いでぶちかます。それから相手の動きを見て、潜られないように捕まえる!)」
清水の腹は決まった。だがそれは蛍に対して『負けない為』の消極的な結論でしかなかった。
というより、そう意識させるために蛍は彼の目を静かに見据え、自分の存在と相撲を相手に意識させたのだ。
―はっきよい!―
清水、三ツ橋、両者頭から激突する。
「何!?」
次の瞬間、清水の視界から三ツ橋は消えていた。ぶちかましの軌道を横に逸らし、その流れで真横に飛んで距離を開ける、得意の『蛍火の如く』横っ飛びバージョン。
再度突進する三ツ橋、迎え撃つ清水。が、さすがに今度は清水も頭から行く体制は出来ていない。
胸で受け、案の定易々と潜り込まれてしまう。
「立ち合いのパターンが多すぎる、相手は的を絞れなくてたまったもんじゃねぇな。」
荒木が感想を漏らす。相撲は刹那の勝負、よって立ち合いを制した方が俄然有利になる。
ぶちかましから方向をずらして変化に繋げるこの『蛍火の如し』、立ち合いから一気に潜る相撲、

さらに当たる前から八艘飛びや叩き込みのいわゆる『注文相撲』。
変化のスペシャリストとしてあらゆるパターンを使いこなす彼の相撲は、ここにきて高い完成度を
示していた。
「潜る相撲が強いから変化が生きるね、変化と真逆の戦法なのにどっちも小兵向きだ、イヤラシイね。」
沙田がほくそ笑みながらそう褒める。自分たちが相手をする時の心境を込めて。
潜られた三ツ橋を抱えながら清水は思う。確かコイツは反り投げから妙な足技があったはずだ、
下手を取られると危険だ、と上から相手の手を払い、腰を引いてマワシを掴ませないように抵抗する。
押すでもなく吊るでもなく、完全に消極策に出てしまう清水。だがそれも無理もない事、
大型力士が変化やすばしっこさを持つ小兵力士を相手にするなら誰だって受けに回ってしまう。
そんな相手を最後まで翻弄するのが今の三ツ橋の相撲なのだ。
ふっ、と三ツ橋の体がわずかに沈む。次の瞬間彼は腕をクロスさせ、体を引いて上にかち上げを放つ。
まるで下からクロスチョップを放つように両手で清水の喉を捕らえ、顔をはね上げる。
「なんだありゃ!」
「三ツ橋が・・・カチ上げた!?」
「クロスチョップかよ!」
またひとつ増えた三ツ橋の戦法、選択肢に頭を抱える会場のライバル達。
意表を突かれた清水であったが、相手がほぼ真上にかち上げを放ったせいで、つっかい棒が
取れたように体が前に進む。相手が棒立ちになった今なら!と前に体重をかけ・・・
そこに相手はいなかった。

かち上げで隙間の出来た清水の脇からすばやく脱出して上手を取り、そのまま出し投げに行く三ツ橋。
たった今跳ね上げた相手の頭を今度は抑え込むようにして投げる。
前のめりで勢いのついた清水に
この投げを残す術は無かった。
―どどぉっ！―
清水の巨体が土俵に転ぶ、勝負あった。
「鬼車かよ、しかも出し投げ入ってるぜ沙田。」
荒木がヒジで沙田を小突きながらそうからかう。が、沙田は腕組みをした状態を崩さず、
少し口元を緩めながら土俵を睨め据え、一言こう呟いた。
「強い・・・。」
歓声と拍手に包まれる会場。小兵の蛍が大きな力士を投げ転がすその姿は確かに胸のすくシーンだ。
決して真正面から切って落としたわけではないが、土俵上をダイナミックに動き回り、
相撲の常識の枠を超えた派手なその戦いは、今や『卑劣な変化に頼る男』のイメージを完全に払拭し
三ツ橋蛍という力士のその個性として会場全体に受け入れられていた。
土俵を降り、皆に迎えられる蛍。
「うまくいったな、『十字かち上げ』。」
そう絶賛する桐仁に、蛍は「何とかね」と返す。この技ももちろん稽古の賜物で出来た技だ。
夏合宿の部内戦の後、潜った後にマワシを嫌う動きをされた時に対する作戦として、昨日今日まで
研鑽を続けてきたのだ。
八艘飛び、蛍火の如し、円の相撲、潜る相撲～足技、反り投げ、根太起、十字かち上げ、
鬼車、そして夜叉落とし。
変化の相撲を始めて3年、変化のスペシャリストを目指して続けて

きた『3年先の稽古』は
今、勝てる力士としてひとつの形を成すに至った。
この1番で流れは完全にダチ高に来た。中堅の大峰は得意の攻めの相撲で圧倒し、副将の松本もどっしりとした堅実な一番で最後には相手を寄り切り、ダチ高の勝利を決める。
ただ大将で出た陽川は、客席からの九十九里高女子の声援に舞い上がってカチコチになってしまい
ギクシャクした相撲で敗れてしまう。
「女に緊張するのは火ノ丸に似てるな。」
すんませーん、と嘆く陽川にそう語る。そんなんだからモテないんだぞ、とチームメイトにツッコミを入れられながら。
下山は天を仰ぎながら敗戦を実感する。が、肩を落とす下級生のチームメイト達を見て、
すぐ自分の役目を思い出す。
「だらしねぇなぁ、負けて下を向くのは負け犬のやる事だぜ、胸張んな。」
まるでかつての自分に言い聞かせるように話す下山。そう、全てはあの日、鬼丸に負けた日から
今日の彼が『始まった』のだ。そしてそれは後輩にリレーしていく大事な事だ、
お前ら、常磐第三を頼むぞ、と。

こうして激戦のインターハイ千葉県予選、その決勝カードが決定する。
―石神高校　対　大太刀高校―
3年連続の決勝の組み合わせ。
沙田の、荒木の、桐仁の、そして蛍の最後の夏の大一番、始まる―

第４６番　決勝戦だよ、全員集合！

決勝前の休憩時間、ほぼ満員の観客の一部は、今のうちにと手荷物を座席に預けてトイレや
自販機にジュースを求めてぽつぽつ席を立ち、通路に人の流れが出来る。
そんな中、観客席の中段に並んで座る五條佑真と妹のレイナに通路から声をかける男二人組。
「おーいたいた、こんにちわ。」
「ひ、久しぶり、じゃのう。」
現れたのはやたらメタルなジャケットに身を包み、頭にタオルを巻いたガタイのいい中年と
ベレー帽を深くかぶり、鉄下駄がプリントされたＴシャツを着込んだ、小柄だが筋肉の目立つ男性。
両者とも大き目のサングラスを付けており、迫力と怪しさが満点である。
「ひっ!?」
「な・・・って親方？」
気圧されるレイナに対し、佑真のほうはその中年のスタイルを覚えていた。２年前に
ダチ高の応援に来ていた柴木山親方の変装、相変わらず付け髭が微妙に外れそうだ。
「あ・・・ど、どうも。」
レイナも会釈して、もうひとりの存在に気付く。その似合わない変装の中身に、今度は佑真より
先に気付くレイナ。
「おチビ！・・・じゃなくって、ひの・・・鬼丸関？」
「あっ、しーっ、しぃーっ!!」
人差し指を口に当てて『静かにして』と懇願するポーズを取るのは、現役の関取にして
かつてダチ高相撲部を全国優勝に導いた潮火ノ丸こと鬼丸国綱関。

「なんだ?·なんか悪さでもしたのかよ、ンな変装して。」
　呑気に返す佑真に、ますます顔を青くして周囲をきょろきょろ見回す鬼丸。
「関取って確か、外出時は着物じゃなきゃいけなかっただろ、その恰好がマズいんじゃないか?」
　佑真の向こうからそう声をかけたのは、額の向こう傷が強面に輪をかける大男。
　その存在に鬼丸は目を丸くしてこう返す。
「石高の金森!·なんで佑真と一緒におるんじゃ?」
　彼だけではない。金盛のさらに向こうにはやはり石高出身の真田と間宮もよっ、と掌をかざす。
「金盛は俺やレイナと同じ栄大生だよ。で、あっちの二人は金盛が呼んだのさ。」
　そう二人を指差してから、レイナが先刻の話題に話を振る。
「で、どうしたのよ、そんな変装して。」
　そのレイナの質問にますます縮こまる鬼丸。柴木山親方が笑顔で解説を入れる。
「鬼関は人気力士だからねぇ、普通に出歩くとどうしてもファンに囲まれてしまうのさ。」
　親方曰く、今日は高校生の大会だから主役は彼らだ。現役関取が目立つのは彼らの活躍の邪魔になるだろうし、ダチ高の面々にも余計なプレッシャーを与えたくないとの意図で、このお忍びスタイルだそうだ。
「というわけで、相撲協会には内緒にしてくれたまえ。」
　手を合わせて頼む親方に、ンな方面に知り合い居ませんよ、と笑って流す佑真。
「分かるわ、俺らも今日は後輩には会ってないしな。」
　金盛が鬼丸の意図を汲んで同意する。現役の選手が彼らなりに頑張っているのだ、
　そこにＯＢが顔を出せば彼らを委縮させることにもなりかねない。

金盛も真田も間宮も、
後輩に会うのはこの決勝の後と決めていた。
「っていうかもう決勝よ、来るの遅いんじゃない?」
レイナがそう毒を吐く。鬼丸に会えたのは嬉しいが、それ以上に自分が1年間部長として面倒を
見てきたダチ高相撲部の、ここまでの躍進を見て貰えなかった不満が上回る。
「うへへ、悪い悪い。つい朝稽古に熱が入ってのう。」
ハイハイそんな事だと思った、とボディランゲージで伝えるレイナ。鬼丸はつい先場所、
幕内上位の壁に当たり、力士として初の『負け越し』を経験していた。
それ以来稽古のギヤが上がり過ぎた鬼丸の体調を心配した親方が、せめて息抜きにと
この大会に連れ出したのだ。
「今年もダチ高と石神か、どっちが勝つかのう。」
「そりゃダチ高に決まってるでしょ?私が育てたんだもの、勝つに決まってるわ。」
「おいおい、沙田の存在を忘れて無いか?化け物っぷりに輪がかかってるぞ。」
「そこは荒木も言ってやってくださいよ、あいつも今や国宝級ッスよ。」
各々がこれから始まる決勝に期待を寄せ、最後に親方がこう締める。
「なんにせよ楽しみだ!」

「先鋒は俺が行く。」
ダチ高の控えのテント下、桐仁が全員にそう告げる。
「石高はここまで先鋒と大将に荒木と沙田を配置している。正直に言おう、ここは捨てる!」
ざわっ、と全員が顔を見合わせる。

「正直あの二人、特に沙田には勝ち筋が見えない。あるとすれば立ち合いの一瞬だけだ。
だから俺と三ツ橋が先鋒と大将として二人に当たる。」
確かに、今の沙田にスキは無い。離れても組んでも国宝級の強さの彼に勝つとすれば
桐仁の組み際の投げか、蛍の変化で対抗するのが妥当な判断だろう。負けも覚悟の上では、だが。
「2陣大峰、中堅陽川、副将幸田！ここで3連勝できるかがカギだ、頼むぞ！」
その言葉に3人がハイ！と力強く答える。その際で松本と赤池が任せた、という顔をする。
赤池は前の試合で左ヒジを痛めており、松本はここまで5連戦の上に、受けの相撲を取る彼は
長い相撲が続いており、加えてダチ高最重量、もはや相撲にならない程消耗していた。
大峰と陽川は未だ余力を残しており、元ラガーマンの幸田に至っては持久力は折り紙付きだ。
沙田と荒木以外なら軽量の彼でも勝ちの目は十分にある、と踏んでのこの布陣。
「決勝戦始めまーす」
やってきた大会役員がそう告げる。すぐ行きます、と答えた後、皆で円陣を組む。
「全国行くぞ！」
「「おうっ!!」」
蛍が発し、桐仁が、大峰、陽川、幸田、松本、赤池、沼田、柳沢が、そして千鶴子、柚子香、小林が応える。
諸岡は腕組みして頼もしい生徒たちを見守る、最初はマネージャーを含めても4人だったのが
いいチームになったものだ、と。

―これより、団体戦決勝を行います―

―東、石神高等学校。西、大太刀高等学校―
両校の選手が入場してくる。その土俵を見守り、選手に拍手を送る数多くの人々。
ＯＢである鬼丸や五条兄妹、金盛たち、ライバルの大河内や下山、柏実業や西上高の面々、
相撲記者の名塚や宮崎、応援に駆け付けたダチ高のレスリング部員や九十九里高の女子達。
あるいは選手の家族、身内、クラスメイト、高校相撲のファン、そして全国の偵察部隊―
ついに激突する両校。勝つのはどっち、負けるのはどちらか。
―先鋒戦。東、三宅。西、辻―
「な・・・？」
桐仁が動揺を隠さずに嘆く。半分捨てる気で出た自分の相手が三宅？驚いて土俵の向こうに座る
石高の面々を見る、出番順に座るので見れば相手のオーダーが分かるのだ。
―２陣戦、荻野ｖｓ大峰、中堅戦、相良ｖｓ陽川、副将戦、沙田ｖｓ幸田、大将戦、荒木ｖｓ三ツ橋―
「（なんてこった、最悪の組み合わせじゃないか・・・）」
完全にオーダーの裏をかかれた。２陣と中堅はまだ想定内だ。しかし副将戦はある意味絶望的、
そしてそれ以上に先鋒の自分も非常に厳しい戦いとなるのは必至だ。
準々決勝の大河内戦で持てる力の全てを使い切った桐仁は、もう立ち合いの一瞬にかけるだけの
体力しか残っていない、だから沙田か荒木に当たる想定で先鋒を志願したのだ。
だが相手は大型選手で、受けの相撲を取る三宅。大河内戦のバテ方を見られている以上
自分のガス欠は気付かれているだろう、もし持久戦法を取られたら・・・終わる。

「(どうする・・・?)」

相撲の知識を総動員して勝ち筋を探る桐仁。だがいくら彼でもここまで想定外の事態に

短い時間で答えを出せる程万能ではない。無情の声が彼の思考を引き裂く。

―互いに、礼―

第４７番　弟子の声

―手をついて―

三宅と桐仁が対峙する。いよいよ決勝の幕開けの先鋒戦。

しかも今後の組み合わせを考えれば、この1戦を取ったほうが優勝に大きく近づくことは明白だ。

辻、大峰、陽川と先行逃げ切りの布陣のダチ高と、沙田、荒木を後半に配置して追い切る

算段の石高。

お互いに落とせない一番、その二人が行司の合図とともに、立つ。

―はっきよい―

胸があった瞬間、桐仁は相手の上半身を捻りながら『いなし』に出る。三宅は足を出して

それに耐えるが、桐仁は攻撃の手を緩めずすかさず蹴手繰りに行く。

その足を躱した三宅は、肩で桐仁のアゴをかち上げ、抱え込むように桐仁を組み止める。

「ゼェッ、ゼェッ、（く、くそっ！）」

呼吸を荒げながら桐仁が毒づく。立ち合いの瞬間に決めるつもりだったが、やはり相手は

持久戦に来ている、攻撃より防御に重点を置いた相撲。

自分のスタミナの無さが情けなくなる、たったこれだけの攻防でもう体は鉛のように重く、

呼吸は溺れているがごとくに荒くなる、こんな程度なのか、俺は・・

そんな感慨に浸る間を三宅は与えなかった。とはいえ寄るのでも投げるのでもない、

彼は掴んだ下手と、桐仁の背中に回した右手を、ぐいっ！と真下に押し下げる。

腕力を体に浴びせられ、桐仁の下半身が悲鳴を上げる。呼吸困難で溺れつつある彼を

まるで水中に沈めるように土俵に押し付けようとする。

「ぐっ！・・・」
何だこの攻めは、まるで体力の切れた俺に対する嫌がらせのような攻め。寄りや投げなら
カウンターの投げを打つ余地もある。しかし体ごと下に押し付けるこの攻めにはカウンターで
反撃する術も無い。かといって力を抜けばそのままヒザをつかされるだろう。
脱力の状態にすら出来ず、ヒザを小刻みに震わせながら懸命に力を振り絞って耐える。
石高の選手たちは、この攻めをチームメイト、荒木の対策として身につけていた。
脱力と爆発力、オンオフを使い分ける荒木に対し、常に力を込めるこの攻めで力のオフを封じ
常に力をの入った相撲を強要させて対抗していたのだ。
そんな彼らは、桐仁の相撲が荒木と同じ『脱力』を使う相撲であることを見抜いていた。
そしてこの1戦、彼らのそんな戦法は桐仁にぴたりハマった。先の川人戦、大河内との1戦で
体力が限界に近いことを見抜いた三宅は、確実に白星をもぎ取るために容赦なくこの戦法を使ってきた。
桐仁の上半身が少しづつ沈んでいく。反撃の術がないまま地面が迫ってくる。
両下手を取ってはいるが、それに捕まっても腕に力が入らない。顔が相手の肩を過ぎ、下半身が
目に写る。ダメだ・・・ここまでか。
「桐仁！」
自分の名を誰かが呼んでいる。あれ？知った声だ。この声は・・・火ノ丸か？
なんだよ、アイツ来てんのか。ああ、アイツの前でみっともねぇ相撲取ってんなぁ、俺。
せっかくだけどな、俺はもう限界だよ・・・お前を追うのは、やっ

ぱり無理だったかもな。
　去年の合宿で大典太に負けた時から、なんとなくそう思ってた・・・
「辻先輩ーっ！ファイットおーっ！」
　至近距離から声。今度ははっきりとその声の主が分かる。去年の春から自分が目をかけてきた
　後輩、ラグビー経験を生かした突進力で未経験者ながらレギュラーにまでなった弟子、幸田！
　そうだ、俺のオーダーミスのせいでお前に沙田を当てちまった、そんなお前の分も俺は
　勝ちを拾わなきゃならないんだ、折れてる場合じゃねぇ！
　力士として、目指すライバルの声に応えられなかった桐仁が、
　先輩として、面倒を見てきた弟子の応援で自分にムチを入れる！
　目の前にあるのは三宅の右足、桐仁は1も2もなくそれに飛びついた。いや、しがみ付くと
　言ったほうが正確かもしれない。残りの体力を総動員して『足取り』に行く。
　業師桐仁にしてはあまりにカッコ悪い、見栄も外聞もかなぐり捨てた片足タックル。
　それだけに三宅の意表は付けた、取られた足を引いて躱そうとするが、桐仁は引きずられながらも
　低い体制のまま足を離さない。
　―バッチィン！―
　そこに襲いかかる三宅の『素首落とし』！
　首筋を打ち据えられた桐仁が感じたのは、苦痛でも焦燥でも無かった、歓喜だ！
「（攻撃来たぁーっ！）」
　足を離した彼は、反射と言っていい速さで打ち下ろされた三宅の左腕を掴む。
　バランスを崩したまま後方に倒れつつ、三宅の体を手から自分の方向に引っ張り込む。
　まるでダンスで手を繋いだ相手を引き寄せるように！

「な!?」
バランスを崩した桐仁が三宅の手に捕まって体勢を『残し』、三宅は桐仁に引っ張られたことにより
バランスを『崩す』。
一瞬で両者の立場は入れ替わった。これこそ業師の真骨頂!
そのまま体を回し、土俵際を伝って、いや俵の上すら滑るように移動し、取った手を引き
右手で相手の左肩を極め、逆間接投げに持っていく。
―網打ち、『波切』―
「行っけーーーっ!」
「決まれぇぇぇぇぇぇ!」
「落ちろー!!」
ダチ高の面々が叫ぶ。まさに乾坤一擲、ここで決めない限り桐仁の勝利は無い。
三宅は懸命に足を運んで耐える、耐える、耐える。これさえ残せば先鋒戦は取れる。
つまりは俺たちが全国に行けるんだ!その一念で網打ちに耐える。
「凌げ、三宅ーーーっ!」
「こらえろーっ!」
「残せ残せ残せーーーっ!」
三宅の右足が俵に掛かる。すでに体は斜めに傾いており、左足はすでに宙に浮いて
辛うじてバランスを保っている状態で両者が静止する。
そして、がくっ、とヒザを付く。
三宅が。

―西、辻の勝ち―
「うおっしゃあぁぁぁぁぁっ!」
「いやったぁぁぁっ!」
「辻君かっこいーーーっ!!」
ダチ高メンバーが、応援に来ているレスリング部員が、九十九里高

の女子達が歓喜を
爆発させる。そんな中鬼丸はぐっ、と拳を固め、その勝利に笑顔を見せる。
だが、その歓声もすぐに静まり、代わりにどよめきが会場を支配する。
土俵下から見ていた副審が手を上げ、土俵に上がって協議を始めたからだ。
「え・・・何だよ?」
「審議するようなことあったか・・・?」
副審が指さしているのは俵の外すぐ際、その部分に足で擦ったようなラインが入っている。
そこは桐仁が『網打ち』に入る時に伝った俵の際。まさか、あの時に桐仁の踵が土俵外の土に
触れていた・・・?
息も絶え絶えで審議を待つ桐仁。頼むぜ、俺はもう指一つ動かせない・・・
三宅はぎりっ、と歯を食いしばり、桐仁を睨みつける。行司差し違えなんて贅沢は言わない、
せめて取り直しさせてくれ・・・
―行司差し違えで東、三宅の勝ち!―
石高には歓喜の、ダチ高には絶望の裁定が響き渡る。歓声と悲鳴がこだまする会場。

桐仁にはその声は聞こえなかった。彼の世界の静寂の中、ひとり天を仰いで嘆く。
「(・・・なんで、だよ)」

第４８番　なんてこった

―決勝前、石神高校控室にて―

「沙田君、決勝のオーダーは決まりましたか？」

菅原顧問がそう沙田に問いかける。試合の前に指定のプリントにオーダーを記入して

大会本部に提出しなければいけない。既に記入は終わっており、後はマネージャーが

持っていくだけの段階だ。

「ええ、出来てますよ。」

そう言ってプリントを渡す沙田。

先鋒・沙田

２陣・荻野

中堅・相良

副将・三宅

大将・荒木

菅原はそれをじっ、と見てこう提案する。

「沙田君と三宅君を入れ替えましょう。」

その言葉に一同が、え？という顔をする。元々この菅原顧問は相撲経験がなく、稽古や試合の

オーダーに関してはあまり口出しをしないタイプなのだが。

「主力を後半に集める、って事ですか？」

その相良の言葉にゆるやかに首をふる菅原。鼻先のメガネを指で起こし、こう返す。

「むしろ先行逃げ切り狙いですよ、出来れば３連勝で決めて下さい。」

それは菅原なりの発破のかけ方だった。先の準決勝では荻野と三宅が、エースの二人に頼らずに

勝ち星をもぎ取った。ならばその勢いをそのまま決勝に持っていこう、との意図だ。

選手にも好不調の波はある、まして高校生、勢いに乗っているなら

それに賭けない手はない、と。
　また対戦相手、大太刀のオーダーも流動的だ。今までと同じ先鋒と大将に主軸を置けば
　そこを突かれるかもしれない。その逆をつく意味でもこのオーダーは効果的だろう。
「そして荒木君、君は沙田君のすぐ後がいい。」
　笑顔でそう告げる菅原に、荒木はうっ、という表情をした後、その意図を理解する。
　普段から彼は沙田に並々ならぬライバル心を抱いている。その沙田の相撲を直前に見せられたら
　気合の入り方も確かに違ってくるだろう。
　顧問の粋な計らいに、にやりと笑って頷く荒木。
「また奇襲にひっかかるなよ、源ちゃん。」
「っせーな、つか負けろお前。その方が気合入るからよ！」
　ひでー、と笑いながら荒木を小突く沙田。周囲からも笑いが起こる。
　本番前の緊張が多少なりともほぐれる様を見て、菅原は静かに微笑む。
　土俵に上がれば国宝の名に恥じない『相撲の鬼』になる彼だが、普段は明るい性格で
　心底相撲を楽しんでいる様は、部内にも余裕と頼もしさを生む。
「（沙田君、そういう所だよ。君を主将にして良かったと思うのは・・・）」

　―行司差し違えで東、三宅の勝ち！―
　その裁定に石高が大いに沸く。難敵の一人、辻から見事勝利をもぎ取った三宅を
　拍手喝采で出迎える一同。
「よっしゃー、まずは先制！」
「お手柄だぜ三宅。」
「三宅君、ナイスファイッ！」

沙田が三宅とハイタッチを交わす。結果的にオーダー変更は大正解だった。貴重な初戦を
荒木も沙田も温存したまま取る事が出来た。
２陣の荻野に力が籠る。もうこうなったら沙田だ荒木だなどと言わずに、俺と相良で
一気に優勝を決めてやる、と意気を上げる。周囲も、続けよ荻野！と檄を飛ばす。

虚ろな目に、絶え絶えの呼吸を抱えて桐仁が土俵から降りる。マネージャーの柳沢が
彼に酸素スプレーをあてがい、選手席に座らせる。
「（どうして、こうなった・・・）」
あまりにも痛い初戦の黒星。これで最低でも荒木と沙田、どちらかに勝たなければ
いけなくなった。だが、今のダチ高の戦力ではそれはあまりに至難の業だ。
それでも、まだ勝敗が決したわけではない。２陣戦と中堅戦で連勝できれば望みは繋がる。
土俵では何があるか分からないのが相撲なのだから。
「（大峰、陽川、頼むぞ・・・）」
―２陣戦。東、荻野。西、大峰―
「お、大峰じゃな、頑張れよ！」
「ここは重要局面だな。なぁに、彼ならやってくれるさ。」
観客席から鬼丸と柴木山親方がそうこぼす。大峰は昨年に度々柴木山部屋に出稽古に来ており
所属力士たちに散々可愛がられながら、その攻めの相撲に磨きをかけてきた。
三段目付け出しでデビューした鬼丸にとっても、体の大きな大峰の相手は身になった。
何度も胸を出した後輩の活躍に期待し、見守る手にも力が入る。
―互いに、礼―

対峙する荻野と大峰。体格では大峰がやや勝るが、荻野もまたこのくらいの体格の相手には
何度も勝ってきた選手だ。お互いが相手を睨みつける、絶対に勝つ！と。
―はっきよい！―
立ち合いと同時に、大峰はもろ手で荻野の上体を起こし、そのまま回転力のある突っ張りを
繰り出して、組もうとする荻野を突き放す。
「よし！いい動き！」
「押し切れ・・・行けっ！」
「おっしゃぁ、その調子っ！」
意気上がるダチ高。組んでも離れても相撲が取れる大峰だが、やはり一番安定感のある
勝ち方といえばこの『押し相撲』である。
機関車のピストンのように連続して繰り出されるその突きは柴木山親方の直伝だ。
体重のある彼がやや前かがみになってその突きを繰り出せば、そこいらの高校生に残せる
ものではない、現に大峰はじりじりと荻野を追い詰めていく。
鬼丸や親方が、ダチ高レスリング部の面々が、九十九里の女子達が、これならいける！と
期待感を込めて試合を見守る。
だが荻野の足に俵が掛かったその時だった。彼は大峰の左突っ張りを右手で捌き、
相手の左の脇に深々と右手を差し込むと、そのまま大峰の頭を後ろから抱え込む。
脇部分を深くロックされた大峰の左手は、まるでバンザイをさせられたように高く上がった状態で
固定されてしまう。
「いかん!!」
柴木山親方が立ち上がってそう叫ぶ。大相撲でもよく見る光景、突

き押し力士が相手に
突きを潜られ、腕を返されてバンザイ状態になる、典型的な負けパターン。
「狙ってやがったな、荻野の奴！」
対照的にガッツポーズをしたのは離れて坐っている石神ＯＢの金森だ。真田と間宮も拳を握り
今だ、行け！と念を送る。
荻野が前に出る。自分より重い大峰の片手を殺し、一気に土俵の反対側まで走る！
俵に足が掛かった大峰は、その足掛かりを利用して踏ん張り、残す。
自前の大きな腹を突き出して肉の壁を作り、荻野の突進を止める。
ここから我慢比べが始まった。荻野は寄りながら右手に力を込め、バンザイをさせている
相手の左手を戻させまいと力を込める。
大峰もまた、大きな腹で相手の突進を止めつつ、差し上げられている左手を何とか戻そうと
歯を食いしばって踏ん張る。
「ぐおぉぉぉおっ！」
「ぬうぅぅ～～ん！」
力のこもった攻防の果て、ついに大峰は挙げられていた左手のヒジを内側に差し込み、
左手を下げて巻き替えに成功する。体勢が戻った、ここからだ！
その瞬間だった。荻野は相手の頭を抱えていた右手、つい今まで大峰の左手を封じていた
その右手で相手の首を抱え込み、体を躱して出し投げ気味に相手を捻り倒しにかかる。
「首投げ！」
荻野はこの瞬間を狙っていたのだ。組手で不利になった相手が巻き替えに来るその時こそ
こちらの技が最も決まりやすい瞬間でもある。
そして彼も経験上、あんこ型の力士が踏ん張っている時の出し投げ

の有効性に気付いていた。
他ならぬ主将の沙田が幾度となく巨漢力士に土を付けたその投げを嫌と言うほど見てきたから。
それを首投げにアレンジして、大峰の巨体を前方に走らせる。
「まずい！」
桐仁が声を上げる、勢いよく前方に引き込まれる大峰。
が、大峰は執念とも言うべき踏ん張りで、右足を前に出して踏みとどまった、こらえ・・・た!?
体を傾け、半身になった大峰の上に、なんと荻野はのしかかってきた。ほぼ全身を乗せて
まるでボディプレスのように上から体重を浴びせる。
なんでもいい、コイツより後に地面につけばそれでいい、なりふり構わない荻野の執念！
「しまっ・・・」
それが大峰が破れる直前の、最後の意思だった。
―浴びせ倒しで東、荻野の勝ち！―
「うおぉおおっしゃあぁ！」
「来たあぁぁぁぁぁっ！」
咆哮を上げる石高。ついに優勝に王手がかかった。もはやそれは揺るがないだろう！
沙田、荒木を残しての2―0、もはや負ける未来は1ミリも見えなかった。
それは会場中も同じだった。石高ＯＢの3人は拳を突き合わせ、鬼丸や親方は
あちゃー、という顔で天を仰ぐ。レイナも絶望的な状況にがっくりとこうべを垂れる。
盛り上がる石高応援団とは対照的に、ダチ高の応援組は声も出せないでいた。
「決まった・・・か。」
そう言う名塚の横で、宮崎が一応反論する。まだ何が起きるか分からないだろ、と。

そうね、と返す名塚だが、そこに感情は籠っていなかった。
静まり返る大太刀相撲部、誰もが現状の結果に言葉も出ない。
「なんて・・・こった。」
立ち上がっていた桐仁がどさりと椅子に座る。持っていた酸素スプレーが地面に落ち、
乾いた音を立てる。
「くっ・・・」
蛍は苦虫を噛み潰した顔で嘆く。千鶴子は顔で手を覆い現状を憂う。
沈痛な空気がダチ高陣営を支配する。
そんな時だった。陽川が立ち上がり、腕をぐるぐる回して一歩前へ出て、聞こえよがしに
こう言い放つ。
「さて、面白くなってきやがったな、なぁ純一！」
笑顔で振り向き、幸田にそう告げる陽川。それに応えて頷く幸田。
絶望感に沈むダチ高陣営の中、二人は・・・この状況で。
笑っていた。

第４９番　反撃の鉈

―中堅戦。東、相良。西、陽川―

土俵に上がる両選手。相良は自分のマワシを握りながら気合を入れる。

「(俺も準決勝では負けて足を引っ張っちまった、今度は勝つ！)」

彼にはまた秘策もあった。対戦相手の陽川、確かこいつは今日２回負けている、

その試合はしっかりチェックさせてもらった、作戦はある、大丈夫だ勝てる！

陽川は今日ここまで２敗を喫している。その負け方はいずれも、腹の大きな『あんこ型』の

相手に腹に乗せられて吊り出されるパターンだった。

部内でもよくこの形で松本や大峰に不覚を取っており、いわば彼の負けパターンになっている。

普段から太れないことにコンプレックスを感じている陽川にとって、またプロを目指す彼にとって、

この苦手を何とかすること、また自分が太る事は大きな課題だった。

そして対戦相手の相良もやはり大きな腹を持つ『あんこ型』の力士。

負けるわけにはいかない、自分の為にも、大太刀の勝利の為にも。

「陽川ーッ！頼むぞーっ！」

「まずは１勝返せよ！」

「相良ー、ここで決めちまえ！」

「気楽に行け、勝てる勝てるーっ！」

会場から応援が飛ぶ。しかしそれは先ほどまでに比べて、どこか熱の入っていない応援だった、

もはやこの勝負は、すでに２連勝し沙田と荒木を残している石神のものだと誰もが心の中で思っている。

この１番は大太刀がせめて一矢報いることができるか、という印象が強かった。

「(ひかわくーん、頑張れー・・・)」
九十九里高校の女子相撲部が声を殺して応援している。思わず「何やってんの?」と
首を回して聞く名塚。
「あ・・・いや、なんか陽川君あがり症みたいで。」
決勝前、柚子香と小林が彼女たちの前に駆け付けて、陽川の時は応援しないでと頼み込みに来た。
ダチ校内でも女子に縁のない彼は、女の子の声援で結構カチコチになる、準決勝はそれで不覚を取った。
「へー、モテないんだ、彼。」
意外そうに顔を見合わせる名塚と女子達。大太刀の女子達は見る目が無いわねー、と囁き合う。
―手をついて―
陽川が先に両手を付き、相良が遅れてゆっくりと仕切り線に手を添える。
会場を静寂が支配する、果たしてここで決まるのか、次戦に持ち越すのか、それは二人が決める事。
―はっきよい―
激突する両者。陽川は腹に乗せられまいとやや低く当たり、両下手を取りに行く。
が、相良はそれを狙いすましていたように、陽川の腕に両手を巻きつけ、閂(かんぬき)に
持っていく。
「(よし、ドンピシャ!)」
押し合いながら相良が歓喜する、両閂で完璧に相手のヒジを捕らえた、理想的な極め方だ。
「いかん、一番まずい極められ方だ!」
桐仁が叫ぶ。相手の両腕を絞るこの技だが、極めるポイントによって効果は変わってくる。
相良の閂はまさに陽川の両肘のど真ん中に食い込んでいる、このままでは関節をヤラれかねない。

なんとか手を抜いて巻き替えるか、逆にさらに差し込んで極めるポイントをずらすか、だが・・・

「(巻き替えに出たらその瞬間に寄り切る、突っ込んできたらそのまま腹に乗せて吊る!)」

そう、これが相良の作戦。相手が押しても引いても対応できるこの形。陽川の今日の負け方を

チェックしている彼にとって、完全にがっぷり胸が合ったらこちらの体格が生きる。

あとは巻き替えられないようにこのまま肘を絞り込めば、俺の勝ちは揺るがない、いける!

この決勝戦は常に石高の方が試合の主導権を握ってきた。会場内はまたか、という空気に

包まれる。ここから陽川の反撃を想像するのは、目の肥えた会場の観客には難しかった。

が、陽川はそんな会場の空気を、その腕力で強引に打ち払う。

両者の動きが止まったまま、二人が小刻みに震えている。何事か?と思っていたら、

なんと陽川が決められた両腕を力づくで外に開いていく。相手の手は確実に彼の両手に

巻き付いているのに、だ。

「う、うそだろ・・・」

観客の誰かが嘆くのも無理はない。普通、腕を絞る方が開く方よりはるかに力は入るはずだ。

なのに陽川は純粋な力比べで、鬼の形相で、相良の腕を左右に押し広げていく。

ついには完全に閂を外し、両手を大きく外に出し広げる両者。

「(この、化け物が!)」

もはや閂に戻すのが不可能と見た相良は、すばやく右手を巻き替えて下手を取りに行く。

陽川はそれに反応し、さっきのお返しとばかりに左手で相手の右手を小手に巻く。

構わず左手も巻き替えて下手を取りに行く相良。両下手で潜ってしまえば結局は腹で吊れる、
関節を極められる前にこっちが持ち上げてやる、と。
が、陽川は右手では閂に行かず、ヒジをたたんで相手の胸元に押し付けて距離を作る。
「いかん!」
そう叫んだのは観客席にいた石高ＯＢの間宮だった。あの形は・・・マズい!
陽川はそのヒジを突き出し、相手の喉元にめり込ませる。そして小手に巻いた左手で右手の
二の腕を掴む。相手の右ヒジを絞り上げながら、自分の右のヒジから先で喉深くをカチ上げる。
「鉈!入ったぞ!」
一年前、間宮をあともう一歩まで追い詰めた、肘関節とノドの２点攻め。
あの時は間宮対策にぶっつけ本番で決めたこの技だったが今は違う。松本や大峰に
首サポーターをつけてもらって、磨きに磨いた必殺の刃!
「うぉらあぁぁぁぁーーーっ!」
陽川が電車道で相手を押し返す。あっという間に俵に詰まった相良は、この技をこらえた
昨年の間宮主将の凄さを心底思い知る。首を絞められるどころかノドを血管ごと潰すような
この技を押し返す?不可能だそんな事!
成す術なく土俵を割る相良、勝負あった。
―西、陽川の勝ち!―
ついに1勝を返す大太刀。纏わりつく暗雲を剛腕の鉈で打ち払った。その豪快な勝ちっぷりに
会場が今までのワンサイドな雰囲気を忘れ、沸く。
「いよっしゃあーっ!」
「よしよし、よく勝ってくれた。」

沈んでいたダチ高相撲部が活気を取り戻す。そして土俵から降りる陽川に想わぬご褒美。

「「ひっかわくーん、かっこいいーっ！」」

解禁とばかりに九十九里高の女子から黄色い声援が上がる。思わず上気した顔をさらに赤くする、

そんな陽川を見てクスクス笑う副将、幸田。

「繋いでやったぜ、頼むぞ純一！」

拳を作って幸田にかざす。幸田も拳を作ってコツン、と合わせ、そして席を立つ。

その時だった。まだ次戦の呼び出しがされていないにも関わらず、会場内を大合唱が包む。

―みっかづきっ！みっかづきっ！みっかづきっ！―

国宝『三日月』の大合唱。最初は石神の補欠選手たちが上げた声に、会場の多くの

相撲ファンが、選手達が、それに応える。

未来の横綱候補『国宝』、その栄光の道中に立ち会えた事への感謝、未来の横綱を

先んじて目にする喜びを込めて。

―みっかづきっ！みっかづきっ！みっかづきっ！みっかづきっ！みっかづきっ！―

第５０番　三日月宗近と幸田純一

―みっかづきっ！みっかづきっ！みっかづきっ！みっかづきっ！みっかづきっ！―

「ちょ、ちょっと！何よコレ、三日月って・・・何？」

会場に響く三日月コールに、九十九里高女子相撲部の一人が思わず発する。

「・・・未来の横綱候補『国宝』の異名よ、沙田選手のね。」

部長の池西がそう返す。女子は相撲にプロ制度が無いため、そういう話に疎い生徒もいる。

が、それを差し引いてもこの会場の熱狂ぶりは異常だ。国宝だか何だか知らないが

ここまで一方に応援が集中するのはいくらなんでも酷い、と思う。

「ちょっと名塚さん！幸田君にも何か異名ないの!?」

すぐ下の席で取材中の相撲記者、名塚に問う。もし何かあるなら自分たちが対抗して

幸田の分も声を上げるつもりで。

だが、名塚はあっさり真実を告げる。あるわけないわよ、と。

『国宝』。それは確かな実力を示し続けた者が、大相撲の未来を託されてつけられる二つ名。

この会場のファンが三日月コールを送るように、多くの人々を魅了する相撲を取って来た者のみに

与えられる称号なのだ。ただのあだ名とは訳が違う。

「あーもう！幸田君でいいわ、みんな、行くわよ！」

―こーうーだっ！こーうーだっ！こーうーだっ！―

黄色い声を張り上げて応援するが、会場中を揺るがす三日月コールには成す術も無くかき消される。

先手を取って叫べばまだ選手にも届いたかもしれないが、後手を踏んだらもうどうしようもない。

そして、場内アナウンスが両者を呼び出す。

―副将戦。東、沙田！西、幸田！―

三日月コールをしていた大勢が、おおおおっ!と歓声を上げる。続いて起こる拍手。
「やれやれ、参ったな・・・プレッシャーかかっちゃうよ。」
ハハッ、と軽い笑いを見せて沙田がそうこぼす。隣にいた荒木は面白く無さそうな顔で返す。
「お前にそんなもん無ぇよ!どの口が言ってんだ、この目立ちたがり屋が!」
そんな荒木のツッコミに、沙田はニヤッと振り向いて返す。あ、バレてた?と。
目線を戻し、土俵に上がる沙田。と、三日月コールも歓声も拍手もその瞬間ピタリと止まる。
―ビリィッ!―
沙田の発する殺気が場内を凍らせる。土俵下の爽やかさは微塵も無く、会場を否応なく
黙らせ、注目させる。
空気そのものを一変させるその『格』、これが国宝、三日月宗近。
「以前よりさらに体が出来上がってるな・・・技は言うまでもないだろう。」
柴木山親方がそう前フリをする。それを察して鬼丸が続きを話す、絶望的な事実を。
「『心』も完璧じゃな、相変わらずいい殺気じゃ。仕切りたくなる・・・」
「・・・っ。」
隣りでその会話を聞いていたレイナが表情を歪める。そんな相手と戦わなきゃならない
幸田があまりに可哀想だ。実力も期待も段違いな相手に当てられる後輩が。
勝ち目も無い、期待もされない、それでいて負けたらチームの敗北が決定する。
そんな舞台に立たされて、見せしめのように負かされる未来を思って、レイナは心の中で嘆く。
「ん?」

「・・・お?」
そんなレイナに、親方と鬼丸の不思議そうな声が届く。彼らは土俵を、そこに立つ二人の力士を見て、
何か違和感でもあるかのような顔をする。
「何じゃ?幸田・・・あの表情は?」
「・・・うーむ。」
柴木山親方がアゴの付け髭をいじりながら、その違和感を考える。
「(粋がるでも怯えるでもなく、殺気を受け止めるでも流すでもない・・・何だ?まるで二人が
違う世界にいるような。)」

土俵に上がる幸田の背中を見送って、陽川は大将の蛍にこう話す。
「三ツ橋部長、そろそろアップ始めた方がいいッスよ。」
「あ・・・うん、そうだね。」
正直蛍もこの試合の観戦に集中したかったが、自分の相撲に備えないわけにはいかない。
立ち上がって屈伸でも、と思ったその時、蛍も違和感に気付く。ドキツい殺気を放っている沙田に対し
幸田は何か、深い覚悟を秘めたような表情で対峙している。それは格闘技者の殺気ではなく
むしろスポーツマンがこれから過酷な競技に向かう時の様な表情にすら見えた。
「いい顔をしてるな、これなら期待できる。」
そう語ったのは顧問の諸岡だ。腕組みをしたまま笑顔で土俵を見つめてそうこぼす。
え?という表情をする蛍と桐仁。期待、という言葉に何か秘策めいたものを感じて。
そんな二人に、陽川はきっぱりとこう返す。
「まぁ見てて下さい。純一は、『勝ちますよ』!」
―互いに、礼―
蛍も桐仁も、その陽川の言葉を鵜呑みには出来ない。確かに幸田は

強くなった、
ラグビー仕込みのぶちかましに加え、桐仁が教えたキレのある投げの数々。
だが、相手はあの沙田だ。恵まれた体格や膂力に加え、高速で放たれる投げの数々、
幸田のぶちかましを受け止める『体』も、それを一瞬でいなす『技』も持っている、
よしんば四つになれたとしても、投げの技術であの沙田に勝てる気はしない。
相手の先手を打って潰し、泣きどころを突く『殺し屋の本能』。相手の攻めを形にすらさせず
仕留めるその非情な『心』。
「(何か奇襲でも仕掛ける気か・・・?)」
―手をついて―
仕切り線に手を下ろす沙田に対し、幸田は大きく下がる。仕切り線の遥か後ろどころか
徳俵に足がかかるまで後退し、ようやく腰を下ろす。
「おいおい、普通あそこまで下がるか?」
「沙田君相手に突っ込むつもりかよ、躱されたら終わりだぞ。」
「助走距離がありゃいいってもんじゃないだろ・・・」
ざわめく会場。だが彼らも、また石高の選手たちもそれが無駄な小細工だとしか思っていない。
今の沙田ならどんなぶちかましも受ける力がある、躱す反射神経もある、無駄だ、と。
沙田が、幸田が両手をつく。行司が左右を見てそれを確認し、開始を告げる。
―はっきよい―
沙田が立つ。突進する相手の勢いを見極め、適切に対処する。油断は無い、万全の立ち合い―
「・・・え?」
沙田と会場が呆気にとられる。幸田は手を上げたが、そこから一歩

も動いていなかった。
受けるつもりで一歩二歩踏み出した沙田が、まさかの展開に足を止める、罠か!?
その瞬間だった。幸田が地面を蹴り、強烈なぶちかましを沙田に見舞う。頭を相手の腹に付け
極端な前傾姿勢で押しに入る。
だが、立ち合い止まったせいで沙田との距離は縮まっていた為、そこからのぶちかましは
本来の威力よりさらに落ちていた、沙田は少し後退するが、土俵を割るにはまだまだ足りない。
「(ただのフェイントか、それで俺に勝てると思ったのかい?)」
押されながら沙田は現状を分析する。低く頭を付けられているのでマワシが遠い、無理に取りに
言っても腕が伸びきって力は出ないだろう。
だけど、この姿勢は幾らなんでも前傾が過ぎる。叩けば簡単に落ちるじゃないか。
そう思った沙田は体を左に躱しながら相手の背中を叩き込む、これで終わり、と。
「なっ!?」
幸田は落ちなかった。まるでラグビーのスクラムのような低い姿勢から、瞬時に足を運んで
踏ん張り、変化した沙田に遅れずについて行き、再び頭を付けて押す。
「(器用だね、なら!)」
すかさず逆の右にいなす沙田。今度は叩かずに相手の左脇を取り、投げるように振り回す。
だが、幸田の足はその沙田について回るように円を描き、沙田の腹に付けた頭を離さない。
まるでホーミングするかのように沙田に頭を付けたまま、超がつく前傾姿勢で押してくる。
「(沙田さん、あなたは確かに速い、だけど・・・)」

幸田は思う。入部してからもうずっと三ツ橋とペア特訓を行ってきた。横に動く動きに
嫌と言うほど悩まされてきた。何度も躱され、土にまみれた。
その結果彼は、組んだ相手の動きを見切る術に異常に長けるようになる。マワシは掴まず
両手をハズ（脇）やわき腹にあてがい、わずかな筋肉の動きを察知する。
また相手の足から目を離さず、その飛ぶ方向や気配をいち早く察知し、まるで磁石で
くっついているかのように追いかける。
「（部長に比べて体がデカいんだよ、見失うもんか！）」
３度、４度といなす沙田だが、幸田はそれでも沙田の下腹部に頭を当てて食らいつく。
自分より大きな沙田をずいずいと押しながら、ついに土俵際まで追い詰める。
が、俵に足が掛かった状態で動きは止まる。足が踏ん張れれば体格差が生きてくる、
懸命に押す幸田だが、それ以上沙田を動かすことが出来ない。
５度目のいなしを放ち、幸田がそれについてきた時だった。沙田はわずかに空いた隙間から
腕を入れ、幸田の顔面をカチ上げる。いなしで落ちないなら体を起こし、がっぷり四つで
勝負を決める。横綱直伝の組み相撲でこの小細工を粉砕する！
が、その目論見も失敗する。幸田はそれを読んでいたかのように、組みに来る相手をもろ手で止め
そこから頭を潜らせて沙田の腹に再度取り付く。
「（くっ、うっとおしい！）」
沙田は上から幸田の上半身を抱え込むと、力任せに右に左に振り回す。幸田は木の葉のように
翻弄されながらも、足さばきと踏ん張りでその猛攻を凌ぐ。
ひとしきり振り回した後、沙田はこの攻めを諦める。再度土俵際ま

で押されるが、
俵に足を掛ければ前進は止まる。懸命に押し続ける幸田だが、沙田は土俵を割らない。
「このぉ！」
業を煮やした沙田が強烈な素首落としを見舞う。と同時に横っ飛びで回り、
上手を掴んで投げに行こうとする。が、それより早く体を回し、あくまで沙田の腹に食いつく幸田。
「（なんだよ、この相撲は・・・）」
理解できない。こんな前傾姿勢で、いなしにも叩きにも素首落としでも落ちないなんて
ありえないだろ、どうなってんだ！
心で毒づく沙田。自分の相撲を全く取らせて貰えない。それでいて相手にも自分を押し出すほどの
力はない。なのにこの攻めを変えようともしない、何なんだ一体！
「すごい・・・」
「あの沙田に、相撲を取らせないだと・・・？」
蛍が、桐仁が驚愕の声を上げる。特にあの極端な前傾姿勢、まるでラグビーで相手と
押し合っているようなその姿勢で沙田にマワシを掴ませない。なのに叩きに全く落ちず
ひたすら追いかけて押し続ける。
そんな二人に、後ろから諸岡が声をかける。
「秘密特訓をしていたのは、なにも君達だけではない、ということだよ。」
え？と反応する桐仁と蛍。彼らは春の部内戦以降、後輩に勝つための特訓を重ねてきた。
そんな俺たちが見ていない時に、幸田は幸田で別の特訓をしてきたというのか？
諸岡は陽川とアイコンタクトする。ずっと幸田と秘密特訓をしてきた『相方』に。

それに応えて、陽川はこう話す、土俵上で国宝に食らいつく相棒から目を離さずに。

「2年前、五條先輩は空手と相撲の融合を実現させた。國崎さんはレスリングを相撲に取り入れた、

石高の荒木は柔道と相撲を、鳥取白楼の榎木は合気道と・・・だったら、」

そこで一度言葉を区切り、力強くこう続ける陽川。

「ラグビーと相撲の融合の形が、あってもいいでしょう！」

幸田は三ツ橋と同様、陽川のようなタイプの選手が苦手だった。ぶちかましに耐える体格と

投げをこらえる反射神経、太すぎない体で投げに落ちない相手。

それを克服するため、彼はひそかに陽川ともペア特訓を行ってきた。低い姿勢でなおかつ

引きに落ちず、変化に食らいついていくこの姿勢なら簡単には負けない。

「けど、どうするんだ?押し出せなきゃ結局勝てないぜ?」

極端な前傾姿勢であるがゆえに、相手を押し出すには力の集中が過ぎる。

寄り切るなら相手と胸を合わせ、相手を『面』で押さないと土俵を割らせる事は叶わない。

そんな陽川の質問に答えを出したのは、その特訓をずっと見てきた諸岡顧問だった。

「だが、ここからどうする?いくら押しても土俵を割らせられないんじゃ意味がない、

そのうち力尽きて捕まったら終わりだぞ・・・」

かつての陽川と同じ疑問を桐仁が嘆く。この相撲は粘れる事は粘れるが、最後の一手が無い。

どこかでマワシを掴んで投げに行くか、いや、あの沙田のことだ、その瞬間を見逃すはずがない。

そこまで考えて、桐仁はあるひとつの仮定に行きつく。力尽きたら終わり・・・

「まさか・・・！」

その一言の後絶句する桐仁を、正解だよ、という顔で見る諸岡。

え・・・という顔をする蛍。幸田君の持ち味、そして対戦前のあの表情、つまり―

「沙田の体力が尽きるまで、ひたすら攻めまくるつもりか!!」

沙田がいなし、幸田が追う。何度も土俵際に詰め、その度に躱され、叩かれ、それでも

追いかけて押し込む。両者が土俵を回る、動く、押す、止まらずに、ただひたすら押す、躱す。

すでに会場は静まり返っていた。二人の激しい動きをずっと目で追っていて、時間のたつのを

忘れる観客。

ただ土俵上の二人のすり足の音と、荒くなっていく呼吸音だけが響き渡る。

会場の一角、他県からの偵察に来ていた女子マネージャーが、同じく撮影している後輩の

女子マネに問いかける。

「今、試合開始から何分や?」

その後輩が撮影カメラの時間表示を確認してこう答えた。

「じっ、時間表示6分30秒!た、立ち合い前から撮ってますから、だいたい6分弱かと・・・」

「・・・ホンマに相撲かいな、コレ。」

冷や汗を流す少女。相撲をよく知る彼女でも、こんな長丁場の一番はお目にかかったことが無い。

しかも終始動き回っているせいで、水入り（行事待った）もかけられない。

玉の汗を撒き散らしながら、土俵を回り続ける二人。そんな光景がさらに続く。

「(どうしてこうなった!俺に負ける要素なんか全く無かったはずだ!)」

沙田が心で嘆く。得意の出し投げも、横綱に教わった組み技も出せない、それもこれも

このスッポンに食いつかれたような低空の姿勢を取られているせいだ。

「(立ち合い、そうか!あのフェイントはこの形を最初に作るためだけに・・・)」

やられた!と臍を噛む。わざわざ大仰に距離を置いて立ったのは、ひたすらこの姿勢を作るためだったんだ。なんてことだ・・・

疲労で意識が朦朧としてくる。こんな長い相撲なんて取ったことは無い。

昔、別のスポーツをしていた頃は、これぐらいの時間動けていたはずだ、なのに今は

受けに回っているにもかかわらず呼吸が荒い、肺が痛い、腕に、足に、力が入らない。

鬼丸も、佑真も、レイナも、金盛たちもこの一番に声が出ない。

そんな中、柴木山親方が腕を組んだまま、話し始める。

「力士にはある種の『弱点』がある。」

え?と親方に注目する一同。と、視線は土俵に戻しつつ耳を傾ける。

「一般的に『体力』というのは『瞬発力』と『持久力』をさす。相撲取りというのは基本

『瞬発力』にほぼ全振りする競技なんだ。」

直径４．５５ｍの土俵から出ても、足の裏以外が地面についても負けとなる競技、相撲。

そんな刹那の勝負に、力士たちは一瞬の爆発力を磨く。瞬時の判断と素早い体さばき、

短期決戦に全てを出し切る体を作っていく。

太る事もまた然り、大きく重い体は瞬時に押し切られること無く、相手に圧をかけて勝てる。
白い筋肉を求め、より早く、より短い時間に胆力を使い切るための体を育てていくのだ。
その全てが『持久力』を犠牲のもとに
「さっきも言ったが、沙田君も相撲取りとしてさらに体が出来上がっている。まして彼は
瞬間の動きが目で追えないほど早い、日ごろの稽古の賜物だろう。だが・・・」
一同にそれ以上の説明は必要なかった。それだけ瞬発力に長けているなら、持久力はその分
削られているはず、なら、この長い一番で彼の体力は！

「ゼェッ、ゼェッ、ゼェッ・・・」
幸田が両手両ヒザを付き、四つん這いになって呼吸を貪る。
「ヒュウ、ヒュウ、ヒュ・・かはっ、ハァッ、ハァッ・・・」
沙田が俵に足を掛け、その外に尻もちをついた状態で天を仰ぎ、ひたすら酸素を取り入れる。
その『声』を待つダチ高のメンバーが、レイナ、佑真、鬼丸が、ダチ高応援団が、九十九里の
女子達が、拳を握って腰を浮かす。早く、早く来い！
―寄り倒しで、西、『幸田』の勝ち！―

「「うわあぁぁぁぁぁっ!!」」
爆発するダチ高陣営。誰もが手を天に突き上げ歓喜する。
師匠の桐仁はまさかの弟子の金星に大粒の涙をこぼし、相棒の陽川はおおおっしゃあぁぁ！
と吠える。堀姉妹と小林は抱き合って喜び、大峰や松本、赤池も見たか！と心で叫ぶ。
蛍はその光景を、じわっとした感動と共に受け止める。あの幸田君が凄いことをやってのけた、

他人に優しく自分に厳しい、そんな彼らしい愚直で、どこまでもひたむきなこの戦法で。

試合時間、実に１７分５３秒。

ダチ高全国への夢は、ひとりの小柄な力士の手によって、部長の蛍に繋がれた―

第５１番　その刀の銘は。

「ったく、無茶しやがってってレベルじゃねぇぞ！」
並べたイスに寝っ転がり、手足をアイシングされながら息を荒げる幸田に、桐仁が深刻な笑顔で
そう語りかける。
幸田は勝ち名乗りを受けた後、土俵を降りようとしてヒザから崩れ落ち、そのまま転落。
歓喜で出迎えるダチ高相撲部の面々を一瞬で青ざめさせた。
「だ・・・大丈夫、です。ヒザが・・・笑ってて・・・」
諸岡の指揮の元、すみやかにイスが並べられ、その上に寝かされる幸田。千鶴子が
クーラーボックスからアイシング用のタオルを取り出し、今だひくひく痙攣する足に被せられる。
「個人戦は無理、だな。」
諸岡が状況を見てそうこぼす。午後からは個人戦が予定されているが、今のこの状態で出ても
ケガのリスクがあるだけで結果が伴うとは思えない。
彼が先の相撲で見せた戦法、そのツケがこれだ。いつ力尽きるとも分からない相手に自ら攻めて
消耗戦を挑むのは、それこそゴールの見えないマラソンをしているのに等しい行為。
沈痛な面持ちの相撲部員。そんな中、幸田は息を切らしながらも首を回し、蛍を見る。
「三ツ橋部長、全国を、お願いします・・・！」
蛍の手に、全身に、力が漲る。
そう、個人戦に出られない以上、幸田が全国の舞台で戦うなら団体戦しかない。
ここで自分が負けたら後輩の頑張りが無駄になる。そうはさせない、絶対に！
部長として、先輩として、蛍は力強くうなずく。

「うん、行こう、みんなで！」

「ハッ、ハッ、ハァッ・・・」

土俵から降りた沙田をお通夜のような表情で迎える石高相撲部。

確実に訪れるはずだった

勝利が、全国への道が、今また見えなくなってしまった。

「すまない・・・源ちゃん、頼む。」

選手席に腰を下ろし、頭を垂れて隣の荒木にそう声をかける。その顔も見ずに。

「やれやれ、俺以外の奴に負けんじゃねぇよ！」

荒木はそう言って立ち上がると、ぐっ、と両手を突き上げて伸びをする。

「ま、おかげでオイシイ所が回ってきたワケだがな。」

ニヤリと笑い、アゴを引いて土俵の向こう、大将の三ツ橋を睨め上げる。

足を開き、ぐっ、と腰を割る。それは軽めのアップであると同時に、彼がずっと追い求めてきた

相撲取りとしての自覚を改めて身に刻み込む、彼なりの儀式。

その所作、その表情、そしてその殺気に仲間たちは確信する、彼の勝利を。

凶暴さと力強さ、溢れる自信と欠片も見せない慢心、その雰囲気はまた沙田とは違った

強者の形を示していた。この荒木なら大丈夫、必ず勝つ、と。

沙田もまた、そんな彼の姿を見て安堵する。こういう源ちゃんなら俺でも不覚を取りかねない、

三ツ橋君には気の毒だがね。

土俵が清め終わり、箒を持った役員が下りる。さぁ、いよいよ大将戦が始まる。

その時だった。会場の一角から、複数の黄色い声で、あまりにも意外な声援がコールされたのは。

―ほったるまるっ！ほったるまるっ！ほったるまるっ！―

―――――――――――――――――――――――――――――――――

「ねぇ名塚さん、だったら三ツ橋君には無いの？国宝の異名！」

大将戦前、改めて名塚に聞く九十九里女子部員。先ほどの三日月コールに今度こそ負けまいとして。

「だから無いわよ、三ツ橋君はまだ全国での活躍も無いし。」

そっけなくそう返す名塚。だが背後からは女子達の無言の圧が掛かる。彼女はやれやれ、

という表情で仕方なくフォローする。

「そうね・・・名前が『蛍』だし、今後の活躍によっては『蛍丸』って呼ばれるかもね。」

その返事を聞いて、池西以下全員がうしっ！とガッツポーズを取る。

「え・・・？あくまで将来の話よ、全国に行って活躍すればの・・・」

名塚のフォローに耳を貸さず、手を口に添えて大きく息を吸い込む少女たち。

せーのっ！

―ほったるまるっ！ほったるまるっ！ほったるまるっ！―

その声援に観客が一斉に注目する。意味が分からず『誰の応援だ？』といぶかしがる者、

三ツ橋の事だと察し、彼を国宝呼ばわりするなどありえない！と反発する者、

そして石神高校の補欠選手たちは、彼への応援だと知るや彼女らに敵意の目を向ける。

が、先の一番の感化され、大太刀贔屓になっている観客はこの声援に乗った。

どうせ団体戦もこれで最後、お祭り騒ぎも悪くないとノリで参加する者、三ツ橋の相撲が

独特で面白いから彼を国宝認定して何が悪い、と開き直る者などが

一斉にその声に乗っかる。
―ほったるまるっ！ほったるまるっ！ほったるまるっ！ほったるまるっ！―
―ほったるまるっ！ほったるまるっ！ほったるまるっ！ほったるまるっ！―
それに対抗するように、石高の補欠たちが声を上げる、石高派の観客がそれに続き
対抗するように声を被せにかかる。
―あーらーきっ！あーらーきっ！あーらーきっ！あーらーきっ！
―ほったるまるっ！ほったるまるっ！ほったるまるっ！ほったるまるっ！―
―あーらーきっ！あーらーきっ！あーらーきっ！あーらーきっ！
―ほったるまるっ！ほったるまるっ！ほったるまるっ！ほったるまるっ！―
「こりゃ三ツ橋も、ついに国宝認定か？」
歓声にそう反応する桐仁。彼以外の部員はすでに『蛍丸』コールに乗っかっている、諸岡顧問まで！
だが桐仁のほかにもう一人、その応援に乗っていない部員がいた。
『彼女』は蛍の前まで歩いてくると、彼にこう告げる。
「正月のおみくじ覚えてます？」
「え・・・『凶』だった、アレ？」
縁起でもない、という顔をする蛍に、こくりと頷いて笑顔を見せる柚子香。そしてこう続けた。
「方位は『西』でしたね、こっちは西方、縁起いいじゃないですか！」
そういえばそうだった。あの時は国技館を示しているのかと思っていたが、ここで西方なのも
その縁起に乗っかっているのかもしれない。
ぐっ、と腕を固めて蛍の前に差し出す柚子香。それに応えて腕を上げ、こつん！と拳を合わせる。

「勝ってください、蛍部長！」
　―大将戦。東、荒木。西、三ツ橋！―
　おおおおおおおおっ！という歓声と共に土俵に上がる両者。
　一礼のあと仕切り線までみ、対峙する。お互い相手から視線を離さずに火花を散らす。
「お前が国宝『蛍丸』だとよ、おこがましいと思わねぇ？」
　いつか聞いたような台詞に、蛍はあっ、という表情をした後、ふっと息をついてこう返す、
「何丸でもいいですよ、荒れた木を打ち払えるなら、ね。」
　上等！とうめいてさらに鋭い眼光で睨む荒木。そう、そうこなくっちゃいけねぇ。相手が
　国宝なら願ったり叶ったりだ。そういうヤツに勝ってこそ、相撲を続けてきた価値がある、
　あのチハルに追いつき、そして追い越すために！
　蛍も応えてらんらんとした眼で返す。相手は純粋に国宝クラス、それに勝てないならこんな声援を
　浴びる資格はない。
　でもそれは正直どうでもいいことだ。荒木の言う通り、かつて『小細工を弄するしかない初心者』を
　ここまで強くしてくれた、そして連れてきてくれたかけがえのないチームメイト達。
　彼らを今度は僕が全国に連れて行く、そのためにこそ自分は勝たねばならない、その決意に
　揺るぎはない。
「どう見る、この一番？」
　カメラマンの宮崎が名塚に問う。昨年夏の個人戦では荒木がまさかの立ち合い変化で勝っているが
　二人ともその時とは見違えるほどの成長を遂げている。その間大相撲にかかりっきりだった彼女には
　無難な答えしか返す術がなかった。
「荒木君の反応速度は異常よ。三ツ橋君の変化でそれを振り切れるか

がカギだけど・・・」
―手をついて―
会場が静まり、土俵の上に注目が集まる。さぁ最終決戦の幕開けだ。
―はっきよい！―
荒木が、蛍が立つ。両者とも立ち合い変化は無い、真っ向から頭でぶち当たる両者。
その刹那、蛍は大きく左に飛び退く。『蛍火の如く、横！』
この大会で蛍はずっとこの技の時は右に飛んでいた。それを伏線にして、相手に右を意識させ
逆をつきにかかる。
だが、荒木はそもそもヤマなど張ってこなかった。彼の『削ぎ落す強さ』は、蛍が左に飛んだ
その動きを見てからも遅れずに体を回し、再度正面に相対するだけの能力がある。
「（何をしようが無駄だ！『力士』の強さを収めた俺に小細工は通用せん！）」
腰を割り、組み付きに行く荒木。変化されたことを意に介さず、まるで立ち合いを
やり直すかのごとく蛍に突進する。
―バチッ！―
突っ張りを連続で繰り出す蛍。これもここまで見せなかった攻めの選択、２年前のチームメイト、
五條佑真の空手の突きを取り入れた攻め。
「いいぞ三ツ橋！」
観客席から見ていた佑真が思わず立ち上がって声を出す。自分の技をあの三ツ橋が
ここまでモノにしている事に感激し、期待を込める。そうだ、行け！
「・・・たじろぎもしねぇな。」
鬼丸の嘆き通り、荒木はアゴを引き、前傾姿勢で蛍の突きを額や肩

で受けながら
じりじり押し攻めてくる。張っているにもかかわらず土俵際まで詰められる蛍。
「見事だな・・・荒木君の相撲取りとしての完成度、本当に惜しい。」
柴木山親方がそう嘆く。総合格闘技に進むと表明している彼だが、彼がもし角界に進んだら
さぞや名のある力士になるだろう、と。
俵に足が掛かった時、蛍は突っ張りからもろ手突きを繰り出す。が、荒木に届く寸前
それは猫だましに『変化』する。
―パァン!―
破裂音と共に蛍は飛ぶ、うまくいけば逆に相手に土俵際を背負わさせることが・・・
「くっ!」
できなかった。荒木はあっさりと蛍の正面に向き直ると、ついに蛍を組み止める。
「なんてヤツだ・・・アレに反応するのかよ!」
桐仁が嘆く。単に猫だましを打ったのではなく、もろ手突きと見せかけて放ったのだ。
にもかかわらず全く意表がつけていない、なんという反応速度か!
両者頭をつけ、マワシの引き合いに入る。体格で勝る荒木は上手でも下手でも狙えるが
小柄な蛍は前ミツしか狙えない。それを見越して蛍の両腕を絞り込みにかかる荒木。
このまま蛍の両手を外から絞ってマワシを引けば、寄りでも吊りでも楽勝で決まるだろう。
荒木の手がマワシにかかろうとした瞬間、蛍は素早く体を沈めながら後ずさりする。
釣られて荒木の体が前に流れたその瞬間、蛍は下から荒木を強烈にカチ上げる。
―ゴッ―

「十字かち上げ！」
両手を絞り込まれた蛍は、逆にそれを利用して腕をクロスさせ、沈みつつ引いて
荒木の体を呼び込み、体のバネを使って全身で荒木を突き上げた。
「（コレだ、コイツの怖さは変化でも技でも無ぇ、この大事な試合で平然と飛び、引く
そのぶっちぎれた『心』だ。）」
突き上げられながら荒木は思う。なにしろコイツは立ち合いで相手に背を向けて歩いた
コトすらある奴だ。そんな奴が『大事に相撲を取ろう』なんてあるワケねぇ、
無様に負けることを恐れもせず、好き勝手に動きやがる！
だが浮いたのは荒木の上半身だけだった。未だにしっかり腰を割っている彼は
このかち上げでも揺るぎはしなかった。
しかし蛍の狙いはダメージや崩しには無かった。わずかに浮いた荒木の懐に素早く
その体を潜り込ませる。
「潜る相撲、入った！」
「部長の形！」
色めき立つダチ高陣営。蛍の得意の形がついに出来上がる。
両前ミツを引いた蛍に、上からのしかかりながら次の展開を待つ荒木。
―ここから両者の必殺の、そして勝敗を分ける攻防が始まる―

第５２番　激突、必殺技！

「よし、潜った！」
「部長の形、来た！」
意気上がるダチ高陣営、この夏の部内戦以降、蛍のメインの戦法ともいえる『潜る相撲』の
形を作ることに成功する。だが・・・
「（荒木の腰が低い、全く体が浮いてこない。）」
桐仁が嘆く。潜れたはいいが荒木は存分に腰を割り、上から蛍にのしかかる。
その削ぎ落す精神で相手の動き出しを待ち構えている。
その状態で止まる両者を見ながら、柚子香は思い出していた。これがこの二人の
追い求めた形のひとつなんだ、と。
昨年春の全国大会、蛍と荒木は全国の強豪たちを並んで見物していた。
そんな中で蛍が感銘を受けたのは、栄大付属の国宝『小龍景光』こと狩谷俊の潜る相撲だった。
一方の荒木も、鳥取白楼の榎木の『相撲の重心の低さで合気道の技を使う』その戦いに
感銘を受けていた。
そして今、蛍は荒木の懐に潜り込み、荒木は存分に腰を割ってあらゆる攻めに対応しようと
待ち受ける。両者が追い求めた相撲が、今まさにがっぷり四つで相対している。
「（覆い被されているのに軽い・・・脱力で僕の動きを待っているのか！）」
蛍は考えを巡らせる。ここまで今日初めて使う戦法、蛍火の如くからの左飛びや
五條さんの張り手、もろ手突きからの猫だまし変化など、全て相手に見切られてきた。

その対応力を持つ相手に、下手な小細工は逆効果と判断する。
「(だったら、一番得意な攻めに行く！)」
意を決した蛍が体を後ろにそらし、荒木の上半身を自分側に引っ張り込む。
「居反り！」
仕掛ける蛍。対する荒木は大きく左足を踏み出し、蛍の反り技を止める。
だがそれは仕掛けの為の『崩し』に過ぎない。すかさずその足に自分の足を巻きつけ、
内掛けに持っていく。
―根太起（ねたおこし）！―
内掛けした足の足首を手で掴み、手と足の両方の力で引っこ抜く技。体格に劣る蛍が
力技で相手に勝つために習得した、乾坤一擲の必殺技！
―バシッ!!―
が、蛍が自らの右足首を掴もうとしたその瞬間、そうはさせじと荒木の左手が蛍の右手首を捕まえる。
その強靭な握力で蛍の右手を締めあげ、根太起に行かせない。
「・・・なっ！」
桐仁が嘆く。なんという反応速度、そして正確さだ！あの一瞬で三ツ橋の狙いを読み、
完璧に封じ込めにかかるとは！
「(いい技、いい発想だぜ、三ツ橋。)」
荒木が心の中でそう呟く。手で足の、足で手の補助をするのは柔道では寝技でよくある手だ。
「(だがな、俺にゃ通用しねぇんだよ！)」
蛍の手を掴んだまま、掛けられた足を逆に引きつける。蛍の『内掛け』に対して
表裏一体の『外掛け』で力任せに足を刈りに行く。
「くっ！」
蛍が吐く。純粋な力比べでは明らかに不利だ、特に足腰の強さは組

んでいる蛍が
嫌と言うほど理解している。ダメだ、このままじゃ勝ち目はない、一度離れる！
すかさず右足を抜いて外掛けを躱す。抜いた足を後ろに踏み出しこらえる蛍、だが離れたため
折角の潜る形が終わってしまう。
と、荒木は素早く、しかも静かに蛍との距離を詰める。左手で蛍の右手を掴んだまま
右手を蛍の脇の下に差し入れ、右足を相手の内股に添える。
「マズい!!」
そう叫んだのはダチ高の松本だった。ちょうど1年前、彼は荒木にこの形を取られ
強烈な投げ技を食らって敗北を喫したのだ。
―天地返し―
相手の手首を引き込み、差し込んだ手ですくい投げを打ち、掛けた足を内股に跳ね上げる。
重力級の力士をも豪快にひっくり返す、3点同時の『掛け投げ』。軽量の蛍が食らえば
ひとたまりもないだろう。
だが荒木はその技を爆発させる寸前、ぞわっ！とした悪寒に晒される。
蛍が荒木に捕まれていた右手をなんと、地面に押し付けんばかりの勢いで押し下げたのだ。
「（お手つき！）」
荒木が準決勝で不覚を取ったその一手、蛍はこの一番でもし荒木の腕を掴めたら、
躊躇なくこの方法を試そうと思っていた。たとえ決まらなくても荒木の動揺を誘うことは
出来るかも知れない、諸岡顧問に指導を受けた『心理戦』はこんな形でも応用される。
今は逆に手を掴まれている状態だが、手首を押し付ければそこを

握っている荒木の指の方が
先に地面に付く！
瞬時の迷いが出た荒木、その瞬間を見逃さずに、蛍は掴まれた右手を引っこ抜き、振りほどく。
それと同時に荒木の足が豪快に蛍の内股を跳ね上げる。まるで暴れ馬に蹴り上げられたように
空中に舞う。
その豪快なリアクションに、会場がおおおおおっ！と沸く。だが引き手が切れているため
飛ばされた蛍も、跳ね上げた荒木も、共に前のめりに崩れた形になる。
蛍が空中でバランスを取り、荒木が足腰で体を残し、着地する両者、両者のこったのこった！
すかさず体制を直し、再び相手に突進する。
―ゴッ―
鈍い音と共に、蛍が再び荒木の懐に潜り込む。『蛍火の如し、潜！』至近距離からとっさの激突でこの技が決まったのは、両者の身長差に加えて、もう一度
潜る相撲にトライしたいという蛍の意思の賜物だった。
荒木もまた、飛び回られるよりは確実に捕まえていられるこの形を望んだ。
再び両者の望む形で組み合って、止まる。
蛍は躊躇しなかった。根太起が通用しなかった以上、出来ることは多くない。だったら！
体を反転させ、相手の腰を担ぎ上げるように自分の腰に乗せにかかる。これならいかに
荒木の腰が低くとも浮かすことが出来る。
「百千夜叉落とし!!」
赤池が叫ぶ、先日ついに完成した鬼丸の３点投げ。完全に担いだ、意表を付けた、決まる！
ダチ高の面々も、観客席で見ている鬼丸さえもがそう思い、気勢を

上げる。
「「行けえぇぇぇぇっ！」」
その光景を見ていた石高の沙田は、冷ややかに微笑んで、静かにこう呟く。
「・・・それは悪手だよ、三ツ橋君。」
荒木は得意の『削ぎ落した感情』の中で、『静かに』『猛って』いた。
「（その技はなぁ・・・２年前、俺たちの全国への夢を奪った技だ。）」
担がれながらも蛍の背中に手を添え、体重をかける荒木。
「（その対策を、この俺がしていないとでも思ったのかよ!!）」
投げられながら、蛍の背中の上で荒木は何と、自らの体を反転させにかかる。
蛍の背中に押し付けた胸を軸にして、投げられる方向に自分の下半身を持っていく。
本来頭から落とすこの技を、足から着地するべく身構える荒木。
捨て身技のこの投げを放った蛍にとって、もし耐えられれば最悪の結果になる。
―ドォンッ！―
そして荒木は右足から着地する。しっかりとヒザのバネを利かせ、確実に地面を踏みしめる。
その様は、相撲に関わる者であればだれもが知っている所作。
―地中の悪鬼を踏み殺す『四股』―
蛍が放った百千の夜叉は、この荒木の四股によって残らず踏み潰された。
後に残るのは、まだ片足立ちながらしっかりと腰を割った荒木と、捨て身技を残されて
完全に前に泳いだ状態で崩れている蛍の姿。
「（勝った！俺は確かに相撲の強さをこの身に収めた、今俺は確かに相撲取りに『成った』!!）」
荒木が感慨に浸る。嫌と言うほど踏んだ四股、何１０ｋｍ進んだかも知れないすり足、
追い求めてやまなかった力士としての強さ、それが今ここに実った

のだ。
止まる時間の中、石高に歓喜が湧き上がる、ダチ高を絶望感が支配する。
鬼丸が、柴木山親方が天を仰ぎ、佑真が顔を歪め、レイナが手で頬を覆う。
金盛が、真田が拳を握り、食いしばった歯を見せ、笑う。
誰もがこの勝負の決着を、石神の勝利を、ダチ高の敗北を確信していた。

ただ二人。三ツ橋蛍と、堀柚子香を覗いて。
「今だーーーっ!蛍ーーーーーっ!!」

第５３番　蛍丸は円（まどか）を描く

―なんだ・・・これは―

荒木は削ぎ落した時間の中、違和感に囚われ、嘆く。

―俺は耐えた。力士として成った。しっかりと腰を割り、三ツ橋の投げを凌いだ

あとは勝つだけ、体の崩れた三ツ橋をどうとでも料理すればいいだけだ、だが―

彼の目に映るのは、斜めに傾いた土俵。体に感じるのは、体幹の、軸のブレ。

―なのに・・・崩されている?なんで、俺が―

完全に凌いだハズだった。三ツ橋の百千夜叉落としを、その体さばきと足腰で。

力士として鍛えた、その全てを持ち寄って。

―どういう、ことだ・・・―

その嘆きは、すでに自分が崩されている事にでは無い。もっと別の、よりありえない事態に!

彼の腰のすぐ下で、らんらんと光る眼光をたたえ、腰を割って潜り込んでいる、一人の『力士』―

「なんでお前がそこにいる!三ツ橋ーーーーっ!!」

「ねぇ蛍部長、ちょっといいですか?」

夏合宿の帰りのバスの車内、ほぼ全員が疲れからこっくりこっくり舟をこいでる中で

通路を挟んで隣に座っている柚子香が蛍にそう声をかける。

「ん、なに?」

柚子香はタブレットを差し出し、蛍にこう問う。

「百千夜叉落としって・・・『連発』出来ないですかね?」

うーん、と首をひねって考える蛍。本来捨て身技であるこの投げが連発できるとしたら・・・

「火ノ丸さんはフェイントの『崩し』にも使ってたし、投げ切るつもりじゃなければ

十分可能だと思うけど。」

その答えに柚子香は首を振りつつ、タブレットを蛍に見せる。そこに映っていたのは

2年前のインターハイ全国個人戦、潮火ノ丸と天王寺獅童の取組のひとコマ。

火ノ丸の『寄り』からの百千夜叉落としを読まれ、回り込まれた瞬間で停止しているシーン。

全力の投げを躱され、完全に体が流れている火ノ丸。辛うじて天王子のマワシに捕まって

こらえてはいるが、完全に『死に体』になってしまっていた。

「まぁこうなるよね、捨て身技だし。これで残すだけでもさすがだと思うよ。」

蛍の答えに、柚子香はこう反論した。

「天王子さんはどっしり安定してますよね、で、火ノ丸さんはその相手のマワシをがっちり

掴んでいる。だったら・・・」

―マワシにつかまって、自分の体を引きつけられませんか?―

その一瞬の立場の逆転劇に、会場が目を見張り息をのむ。何という展開か!

「源ちゃんのマワシに、しがみ付いて・・・!」

沙田が愕然とした表情で、声にならない声を出す。

「自分の体を・・・引き寄せやがった!!!」

桐仁が吐く。自らも信じられない事態を、まるで自分自身に言い聞かせるように。

「同時に・・・安定してた荒木君の体を、崩した!?」

名塚が、この戦法のもうひとつの効果に気付き、思わず声を上げる。
蛍の足元には、2本のレールのような擦り跡が伸びている。その軌跡に煙のように
砂ぼこりを舞い上がらせて！
投げを放った位置、躯されて死に体になっていた足の位置から、荒木の真下で腰を割って
地面を踏んでいるその足元まで！
相手のマワシに捕まって、崩れた体を引き付けて直す。と同時にこの引きつけによって
安定していた相手に目一杯体重をかけ、崩す。
もしこれを重量級の選手が行えば、その体重を引き寄せる力に耐えきれずに引っ張られた側が
上から覆い被さって潰されるだけだろう。そもそも重量級の選手には相手のマワシに捕まって
自分の体を引き付けるほどの力は出せない、自分の体重に力が負けるから。
軽量の蛍だから、そして掴まれる側の荒木がしっかりと腰を割って安定していたからこその
体の戻し技！

かつて柚子香は、体操の鉄棒の選手を例に挙げてこう語っていた。
「ぶら下がった状態から体を引きつけて逆上がりとかしますよね。火ノ丸さんや蛍部長の
今の膂力と体の軽さなら出来ると思うんですよね。相手がどっしり腰を割ってれば。」
そう言われて蛍には思い当たるフシがあった。つい先ほどの部内戦の後の柚子香の挑戦。
「あ、ひょっとしてさっき、ソレ狙ってた？」
彼女の百千夜叉落としを躯した後、蛍はまだ彼女が『何か』をしようとしていた気配を察していた。

「バレました?」
てへへ、と舌を出し、ウインクして笑う柚子香。彼女の膂力では足りてなく、かつぶっつけ本番ではさすがに決めようも無かった。
蛍は翌日から柚子香と一緒に、ひそかにこの技が実現可能か試していた。
鉄砲柱にロープを巻きつけ、崩れた体勢から捕まって引き寄せる。かなりの膂力が必要だが
確かに出来なくはなかった。
ただ成功にはいくつかの条件を要した。相手が鉄棒や鉄砲柱の如くどっしりと安定している事、
また全力で投げながらも、この体の戻しと2発目を意識できている事。
相撲は裸で肌を合わせて戦う競技。言い換えれば相手の肌を伝わる感触から、相手の動きや
次の狙いなどを感じ取ることが出来る。そのセンサーを総動員すれば、今の自分の投げが
決まるか不発に終わるかを先読みすることが出来る。これなら!

蛍は体を回す、両マワシを引いたまま、崩れた荒木を再び担ぎ上げる。
「連発・・・じゃと!?」
鬼丸が叫ぶ。自分では成し得なかった発想、なまじ『崩し』の重要性に気付いていたせいで
フェイントと真剣の投げの2面性にしか目がいかなかった。
あの蛍が、自分では到達しえなかった領域の技を放っている。その事実が彼の胸を打つ。
「に・は・つ・めぇっ!」
「行っけえぇぇーーーっ!」
ダチ高の面々が叫ぶ。逆転につぐ逆転劇、もうこれ以上はいらな

い、ここで・・・決まれっ！
「荒木いいいい！」
「何だそりゃあぁぁぁぁぁぁっ!!」
信じられない形勢逆転を受け入れられずに絶叫する石高相撲部。
沙田に至っては声すら出ない、
この返し技が、極めて限定的な条件でのみ成功することを理解したがゆえに。
削ぎ落す時間の中、今まさに投げられつつある荒木が、心の中で憤りを吐き出す。
「(何をやってたんだ俺は！奴の技を耐えただけで勝ってもいないのに、何が力士に成った、だ！
あの貴重な時間、なんでそんな『雑念』に囚われてしまったんだ・・・)」
やがて荒木は気付く。そんな後悔すら『雑念』であることを。そうじゃないだろ、
今自分がすることは何としてもこの投げを凌ぐ事だ！
さっきと同じように体を回し、足を着地点に向ける。だがさっきより明らかに遅い、間に合うか!?
否、なんとしても間に合わせる！俺が負けたら石高の負けが決定するんだ、それが雑念でも何でもいい、
この想いだけは必ず遂げる、間に合えぇぇぇっ!!
―ドシンッ！―
―みきぃっ！―
間に合った！さっきとは比較にならないほどギリギリだが、確かに足から着地に成功した。
股関節からいやな音がしたが、遅れて激痛がやって来るがそれがどうした、俺は耐えたぞ！
あとはいつものように腰を割り、仕留めるのみだ！
荒木の視界が揺らぐ。またしても土俵が傾く。その原因はいくら頭の悪い荒木でも分かる。

崩され、蛍火の様な眼差しが再び自分の下にある。その足元には再び2本のレールが走り、
その軌跡に土ぼこりが舞う。
自分が腰を割った瞬間を見計らって、もう一度三ツ橋が、体を自分の下に引き寄せたのだ。
「・・・おい。」
そりゃねぇだろ、という声を出す荒木。投げられて耐える、引っ張られ崩される。それを2セット?
すでに彼の体はもう完全に崩れている、股関節が先ほどの着地から悲鳴を上げている。今の状態なら
寄りでも吊りでも叩きでも決め放題だろう。
だが、蛍にはこの流れを変える意志は全くなかった。3度体を反転させて荒木を担ぎ上げ、
力を振り絞って前方に投げに行く。百千夜叉落とし、3発目!
「お・お・お・お・おおっ!」
蛍が吼える。担ぎ投げも引きつけも全身の筋肉を酷使する技、それを3連発するのに体が
悲鳴を上げないわけがなかった。そんな体にムチを入れるような蛍の絶叫。
そして荒木の足が浮く。
今、長かった勝負が決着の時を迎える。

土俵上、蛍の腰を支点にして、両者の体が縦の円(まどか)を描く。
荒木のバリアート頭が、その足先が、蛍の頭が、跳ね上げた足が、そしてらんらんと輝く
蛍火のような瞳が、両者が撒き散らしたの玉の汗と共に光を放つ。
円い土俵のその上に、鮮やかな円が描かれた―
そのシーンを目に焼き付けた名塚が、誰に言うともなく、一言ごぼす。
「・・・国宝『蛍丸』・・・」
―どぉおぉぉ・・・ん!―

荒木が土俵にあお向けに倒れ、屋根を見上げる。その腹の上で蛍がやはり天を見上げ、

急いで起き上がり行司を見る。どうだ、どうなった、勝敗は?全国へ行けるのは、どっちだ・・・?

静まり返る会場に、高らかに響く行司の声!

―西、三ツ橋の勝ち!―

「「うわあぁぁぁぁぁぁぁっ!!」」

大太刀の全員が歓喜を爆発させる。ついに、ついに優勝、ついに全国だ!

全国制覇から2年、主力のほぼ全てを失い再スタートを切ったダチ高相撲部。

彼らにとってその道は長く、そして険しかった。手が届かないと思ったことも何度もあった。

艱難辛苦を乗り越えて、ついにそこへのキップを手にしたのだ。

礼をし、土俵を降りる両者。蛍を迎えるチームメイト達は皆、目に涙をためていた。

桐仁がガッツポーズを決め、大峰は天を仰いで涙を流し、陽川は幸田に肩を貸して二人で

親指をぐっ、と立てる。

赤池は拭いても拭いてもあふれる涙を抑えられず、千鶴子は顔を手で覆って涙と感情を

隠そうとする。ようやく、ようやくこのチームが2年前に追いついた、その嬉しさ。

顧問の諸岡に至っては大泣きで、むしろ沼田に「みっともねぇなぁ」と笑われる。

柳沢も小林も感激の涙をためて、相撲って本当に凄い!と感動する。

蛍は松本に抱え上げられ、その上で拳を突き上げる。その時、場外アナウンスが

高らかにこう告げた。

―優勝は、大太刀高校ーっ!―

荒木は土俵の上から既に泣いていた。技を耐えただけで雑念に支配され勝機を逃した事、
自分の負けで石高が全国に行けなくなった事、そして、どこかで三ツ橋を侮っていた事。
観客は『蛍丸』と言っていたが、自分は果たして三ツ橋を国宝並みの相手と認識していたか？
（お前みたいな奴が、イジめる相手を間違えて、痛い目見るのさ）
かつての先輩の、あまりに刺さるセリフ。その通りだ、春の全国で相対した国宝『備前長船』と
戦った時の様な本気度がこの一番にあったなら、結果は違ったものになったかもしれない。
沈痛な空気の石高相撲部。と、ぱん！と手を打って、顧問の菅原がこう語る。
「負けたのは私がオーダーをいじったからです。皆さんよくやりましたよ。」
そんなことは、と言いかけたメンバーを菅原は次の言葉で封じる。
「さぁ、胸を張って退場しましょう。この日を胸に刻むためにも、ね。」
土俵を去る石高相撲部。未だ大泣きしている荒木に、沙田はこう声をかける。
「泣くなよ源ちゃん、金盛主将や間宮さんは、後輩の前では泣かなかったぜ・・・」

自陣のテントに引き上げたダチ高、今だ興奮冷めやらぬ中、柚子香が蛍の前に立ち
一言こう告げる。
「おめでとう、相撲やってて良かったね、蛍・・・部長。」
あ、という表情の後、柔らかく笑って答える。
「・・・うん、ありがとう。」
周囲からひゅーひゅー、という冷やかしが飛ぶ。さすがにここに至っても二人の関係に
気付かない者はいなかった。

だが、その言葉の裏を察するのは当人二人だけだった。蛍の心中に根差す後悔、

それに引きずられるように続けてきた相撲。そんな彼に相撲の神様が、ようやく対価とも言える

価値ある勝利を与えたのだ。

「そーだ、三ツ橋部長のあの技、百千夜叉落としの連発！アレの名前考えようぜ！」

沼田の能天気な提案にメンバー全員が乗っかった・・・のだが。

「ストーキング夜叉落とし！」

「スッポン投げ連打！」

「あわよくば不浄勝ち！」

「土俵懸垂（けんすい）！」

「下手な鉄砲数うちゃ当たる！」

「土俵上の尺取り虫！」

「線路敷設工事！」

「ホバリング粘着投げ！」

次々と上がるロクでもない名称に、真面目にやれー！と皆を追い回す蛍。

追う側も、追われる側も、皆いい笑顔だった

観客席の最上段、すぐ後ろで嬉々としている九十九里高女子の前で、相撲雑誌記者の名塚が

記事を書くための記録をノートに書き留める。

―大将戦、『無限蛍火落とし』で『蛍丸』の勝ち―

第５４番　蛍丸と鬼切安綱

「んじゃ、俺らは傷心の後輩を慰めにでも行きますか。」
石高ＯＢの真田がそう言って席を立つ。金盛も「だな」と言って腰を上げる。
間宮も試合を中継録画していたスマホをポケットに仕舞い、足元のカバンを拾い上げる。
「ところでお前、ドコに中継してたの？」
「市橋んトコですよ、あいつも来たかったらしいけど、なんか今日限定の温泉旅行の
チケット当たったとかで、どうしても行けないから中継送信してくれって。」
真田の問いに間宮が答える。そいつはさぞがっかり旅行になっただろう、と笑う金盛。
「あ、私もダチ高んとこ行こっと。佑真や火ノ丸はどうする？」
レイナがカバンを抱えて二人に問う。じゃあ俺も、という佑真に対して、鬼丸は腰を上げなかった。
「ワシは・・・ええわ。」
何よ、つれないわねー、という顔をするレイナ。まぁお忍びで来てる身だし、目立ちたくないのは
分かるからしょうがないか、と納得して、自慢の後輩たちの所に向かう。
「正直、顔は出しづらいよな、鬼丸は。」
親方の言葉にええ、と頷く鬼丸。彼は三ツ橋や桐仁と同年齢であり、角界に進まなければ自分も
今日あの土俵で戦っていた身の上なのだ。
ある意味自分の都合で大太刀高校相撲部を見捨てた、と言っていい立場の自分が、自分抜きで
今日の快挙を成し遂げた彼らの前にどんな顔をして立てばいいのかは分からない。
そして、自分が彼らの頑張りに対してやれる事は他にある事も。

「負けてられないなぁ、鬼丸。」
「はい！」
先場所、角界入り後初の負け越しを喫した鬼丸に、高揚する思いが募る。焦りからオーバーワークだった彼に、無茶とは別種類の心地よい力が漲ってくる。
来場所の再起を誓う鬼丸に、連れてきてよかったと笑顔を見せる親方。
ダチ高のテントに向かう五條兄妹がその途中で、ばったり堀千鶴子に会う。
「レイナさん！佑真さんも。」
「堀ちゃん！優勝おめでとーっ！」
書類を抱えてる千鶴子の上からレイナがハグを決める。昨年は叶わなかった頂点に、そして全国。
心からの祝福と共に、その道を繋いだのが前部長の自分であるという自負を加えて。
「んで、どーしたんだよこんな所で。」
佑真が問う。てっきりみんなと一緒だと思っていたが、マネージャーだから何か用事かな？と。
「あ、個人戦ですけど、棄権する選手の申請に行ってたんです。」
「「え〃？」」
五條兄妹が同時に声を出す。棄権？何で・・・
「準決勝で左手を痛めた赤池君と、決勝で長い相撲を取った幸田君にストップがかかっちゃって・・・」
顧問の諸岡の判断だった。赤池の左ヒジはすでに赤く腫れあがり、幸田はようやく呼吸は落ち着いたが
手も足も筋肉疲労で震えっぱなしだった。
「まぁしょうがないよな、格闘技なんだし。ましてや団体全国が決まったんだ、ここで無理して
大怪我でもしたら全国大会にも影響出るしな。」
なるほど、まぁそういう事情なら、と考えたレイナは、はたともう

一人の事情に気付く。
「そういやカントク（桐仁）は？決勝も出てたし、こっから先の個人戦はキツいでしょうに。」
優勝戦まで数えると8連戦、とても辻が今からそれだけの番数をこなせるとも思えない。
そのセリフを聞いた千鶴子は、それが・・と顔を伏せて続ける。
「カントクと、部長（三ツ橋）もストップがかかってたんです、二人とも体力の限界だって。
でも本人が『どうしても出る！』って聞かなくて・・・」
レイナが、しょうがないわねー私が説得するわ。という顔でダチ高のテントに到着し、
テント内に入る。
―びりっ！―
「（え・・・何この空気。）」
殺気に満ちたテント内。ついさっき優勝して大喜びしていた空気はどこ？と顔を青ざめる。
佑真もその気配に冷や汗を流す、そしてそれを象徴している光景がテント内にはある。
スペースの両端で、背中を向け合って相手を見ずに殺気を漲らせるダチ高のツートップ。
事情を把握してもらうため、千鶴子がレイナにその事実を耳打ちする。
―個人戦1回戦第一試合、三ツ橋蛍　対　辻桐仁―
個人戦トーナメントの組み合わせは、団体戦終了後に告知される。
それは団体戦の最中に
個人戦で当たる選手を必要以上にマークしたり、潰しにかかったりしないようにとする配慮。
だが、完全ランダムで選ばれるその組み合わせは、早い段階で同校対決を生むこともある。
先に柳沢が貰って来た個人戦トーナメント表、その初戦を見た時から、団体優勝のお祭り気分は

吹き飛んだ。
「じゃ、邪魔しちゃ悪いわね、そんじゃ試合見てるから・・・」
くるっ、ときびすを返してテントから逃げるように去るレイナ。その後歩くたびにその組み合わせの
理不尽さに腹が立ってきた彼女が、大会本部に怒鳴り込みに行こうとして佑真に取り押さえられた
という一幕があったりしたのだが、それは別の話。

―これより個人戦、1回戦を開始します―
場内アナウンスの声に観客の注目が集まる。さぁ最初は誰だ?と土俵に注目する面々・・・
―東、大太刀高校、三ツ橋。西、大太刀高校、辻!―
アナウンスが終わった瞬間から、会場がどおぉぉぉおっ!と沸く。団体戦優勝校の主力二人が
まさかの個人戦のオープニングを飾ろうとは!
―ほったるまるっ!ほったるまるっ!ほったるまるっ!―
―おーにっきりっ!おーにっきりっ!おーにっきりっ!―
二振りの宝刀のコールの中、東西から土俵に上がる二人。ダチ高のチームメイト達も
二人をよく知る鬼丸や佑真、レイナも、彼らに辛酸をなめたライバル達も、観客と共に注目する。
立場の違う彼らだが、今、思いはひとつだった。どっちだ、どちらが強いんだ?と。
夏の部内戦では桐仁が勝っていた。だがあれから二人は短い期間ながら、さらなる強さを
身につけている。加えてここまでの試合の疲労、もはや昨日までの強さすらあてには出来ない、
それを克服するのは『心』の強さ。
この一番は、どちらが大太刀高校相撲部のエースであるかの決定戦でもあったのだ。
―手をついて―

その声と共に、桐仁は両手をついて、ぐぐっと身を伏せる。
「平蜘蛛！」
「おいおい相手は三ツ橋だぜ、正気か!?」
観客から声が上がる。低く立ち合うことで正面衝突の威力を上げるこの仕切りは、
逆に変化には弱い。三ツ橋相手にあえてこの仕切りをする桐仁に場内がどよめく。
「誘ってる、のか？」
「変化か、正面からか、どっちをだよ・・・」
陽川の嘆きに大峰が聞き返す。平蜘蛛を見せて変化を誘っているのか、逆にそれを読ませて
正面から圧倒する気か、答えは桐仁のみが知っていること。
すっ、と蛍が手を下ろす。その目は真っすぐに桐仁の目を捕らえている。目線をどちらにも
逸らさず、ぐっと腰を割り、両手を仕切り線に添える。その目に迷いはない！
―はっきよい！―
ゴッ！という音と共に頭と頭でぶつかる両者。共に変化は無い、蛍はここから体を沈め、
桐仁の懐に潜ろうとする。
だが桐仁は立ち合いの後、電光石火の早業で蛍の右腕を取っていた。そのまま体を開いて
取った腕を逆間接に持っていく。
「(やっぱりな、お前なら正面から平蜘蛛を受けると思っていたぜ、三ツ橋！)」
以前からそうだった。三ツ橋蛍と言う人物は、焚き付ければ焚き付けるほどに燃え上がるタイプ。
試合に出てくれさえすればいいと言えば、何でもするから勝たせてくれと懇願した。
真っ向勝負じゃ間に合わないと告げれば、変化でも何でもいいと理想すらあっさり捨て去った。

立ち合い後ろに飛べと指示すれば、立ち合い不成立を繰り返した挙句、後ろに歩いて見せた。
「(この『とったり』は俺からの最後の指導だ！部内戦と同じ技で仕留められるよう・・・)」
桐仁の思考はそこで中断する。ひねった腕に感覚が無い、離しているわけじゃないのに！
極める方向に向いていた顔を、腕の先の三ツ橋に向ける、そして桐仁は絶句した。
会場中の人間と同じように―
「飛んだー!?」
「宙返り・・・っておいっ！」
なんと蛍は桐仁に腕を取られた瞬間、ジャンプして前方宙返りをしてみせた！
腕関節を体ごと回転させて外す、原理は間違っていない。いないが・・・柔道の寝技じゃあるまいし、
相撲の立ち勝負でそれをやってのけるのか！
極めた腕が回ったことで手がすっぽ抜け、バランスを崩す桐仁。蛍もまた着地の衝撃が大きく
すぐに反撃には出られない。先手を取るのは・・・？
「(この野郎！ハナっからコレを狙ってたのか、やられたっ！)」
桐仁が嘆く。道理で部内戦で負けた同じ技にあっさりかかるワケだ！
「(桐仁、いつも君には教えられてきた。部内戦で君に負けたこの技に対する、
僕の答えがこれだよ！)」
桐仁の引きながらの投げには、この逆関節を極めながらの投げが多い。ならばどうする？
軽量の自分が出来る事、あの桐仁の意識の外を突ける行動。二度目は無い、一度きりの奇襲として
放った蛍の新たな飛び技！
―ガツゥン―

２度目の衝突。だがそれは心理戦で一歩先んじた蛍が一瞬早く踏み込んだ。激突と同時に
桐仁の頭が跳ね上がる。
―蛍火の如く、潜―

桐仁は朦朧とする意識の中、自分の教え子の成長に、心からの喝采を送る。

第５５番　見ているか

「（なぁ小関さん、五條さん、國崎さん、レイナさん・・・それに、火ノ丸。見ているか？）」

――

・・・なんだありゃ。

それが春の新人戦、初めて『彼』を見た時の正直な感想。

―西、大太刀、三ツ橋君―

「お、火ノ丸のチームメイトか？どれ・・・」

―ぐしゃ―

赤子の手をひねる、という表現がこれほど似合う一番も無いだろう。

五條や國崎はまだしも、こんなのが火ノ丸のチームメイトなのか・・・？

「ひでぇなこりゃ・・・女子と変わんねぇじゃねぇか。」

苦労して手に入れた『彼』のスポーツテストの記録を見て思わず嘆く。

これでよく相撲をやろうと思ったもんだ・・・

「先生、俺の作戦は？」

その沼田の質問に、あー、という顔をする。

「お前は普通に取ればいい、それで勝てる。」

「ええ！相手は高校生でしょ？」

そうだな、年齢だけなら高校生だよ。ド素人だし体も無い、な。小学生から相撲を続けてきた

沼田なら問題なく勝てるだろ、寿司っていうエサもあるからな。

「ま・・・そういう事だ。ダチ高の５人目はお前だぜ」

「ホッとしたかい？俺がこんなんでよ。」

「勝ち星は他の４人で何とかするさ、お前は出てさえくれればいい」

煽るだけ煽ってみた。そいつにプライドっていうものがあるかどうかを試してみた。

・・・俺も人が悪いな、実力がないのにプライドだけあっても何にもならない、それすら無いなら
どのみち使い物になりはしない、つまりどっちにしても、コイツは・・・
素人だと思ってた。火ノ丸に憧れるだけの甘ちゃんだと決めつけていた、人数合わせになればいいと。
憧れる？
そうだ、だったらそれをエサにすれば1勝を挙げられるかもしれねぇな。というかそれしか無いか。
火の丸の様な真っ向勝負を印象付けておいて、肝心な一番で変化すれば・・・
「変化という作戦もある、でも・・・火ノ丸に、真っ向勝負に憧れてるお前に、俺はそんなことを
勧めたくないんだ。」
思えばこの時が分岐点だったな、俺がアイツをただの捨て駒として見るか、それとも
本気で勝たせてやる！と思うかの・・・
―親方、この人にも稽古をつけてやって下さい、もちろん力士として―
おいおい、何を言い出すんだよ！分かってるのか？俺が相撲を取るってことは、つまりお前が・・・
―ひとりで抱え込むなよ！―
なんだよ、俺はお前を勝たすために色々やって来たのに、そのお前に背中を押されるのか、俺は。

―同体、取り直し―
―西、首藤君の勝ち―
何度謝ったかも分からない。あらゆる作戦を考え、それを想定した稽古を積んで、
そして負け続けた。
すまん、俺の責任だ、お前はよくやった、そんな意味のない言葉を

俺は試合のたびに重ねてきた。
だがもう終わった、俺はついにお前を勝たせることが出来なかった、情けない監督だ。
俺は結局コイツを体よく利用しようとして、利用すら出来なかった。戦歴を黒星で塗りつぶし
挙句にケガまでさせてしまった。
県予選でさっさと変化を使わせて、ひとつでもふたつでも勝ち星を上げさせるべきじゃなかったのか。
それとも会った時に「お前は相撲には向いていない」とはっきり言って、別の部員を探すべきじゃ
なかったのか。
そうすれば『公式戦全敗』なんて汚点をコイツに押し付けることも無かっただろうに。

「松本康太ッス！」
「陽川満です。」
「大峰浩二です。」
「幸田純一です！」
この時からだよな、お前が変わったのは。いや、そうじゃない、お前の周りが、だ。
鬼丸も、他の皆も、お前をどこか下に見てたよな、初心者だし、体も弱いし、無理もない。
だがお前の新しい仲間たちは、お前を『挑むべき先輩』として見ていた。
身近に対等のライバルがいることがお前の自覚を変えたのか、それとも本来お前が持っていた
先輩肌な性格を引き出したのか・・・
「堀柚子香です！」
彼女に教えるお前の姿を見て、お前に教えてた時の自分を重ねていたよ。
技術うんぬんはともかくだが、先輩としての自覚や自信は俺より

ずっと上じゃねぇか、
ちょっと嫉妬したぜ。
「来年の部長に三ツ橋蛍を指名します。」
異存はないさ。お前の方が部長に相応しい事はよく分かってるよ。
でもな、それをあのレイナさんに迷わず言わせるのか・・・スゲェなお前。
―桐仁、あとで残ろうか。―
「(・・・何だ?)」
―後輩にしてやられっぱなし、ってワケにもいかないよ、これから夏までは打倒下級生だろ?―
はは・・・今しがた後輩に負けて、初めてレギュラーの座を奪われて、早速そう言うのかよ、
まったく、コイツと付き合っていると落ち込むヒマさえ無いぜ。

―見てろ、いつか僕の勝利に感謝する日が来るからな―
お前が土俵に円を描いたあの瞬間、俺は、あの時のお前の言葉を思い出していたよ。
絶体絶命の窮地から、幸田が奇跡のような勝利でつないだ可能性を、お前は先輩として、
そして力士として―
なぁみんな、見ているか・・・あの三ツ橋が、ここまで・・・強く―

「三ツ橋が・・・寄り切ったーっ!」
おおおおっ!という歓声の中、二人は胸を合わせたまま大息をつく。その両者の足元を
土俵の俵が分断していた。
―寄り切りで東、三ツ橋の勝ち!―
拍手に沸く会場。両者の死力を尽くしたその一番は、迫力こそ無

かったものの、
見ている多くの人の心に響いた。
「二人とも明らかに消耗していたわね。でも最後まで粘れたのは、やっぱり
チームメイトだからこそ、負けられない戦いだったからなんでしょう。」
名塚が拍手しながらそう語る。最初の攻防こそキレがあったが、それ以降の組んでからの攻防は
明らかにここまでの両者の疲弊が見て取れた。
それでも諦めない『心』の相撲。残った力を振り絞り、ただ懸命に愚直に押し合った。
そして突然桐仁が糸の切れた人形のように力尽き、ゆっくりとした電車道でついには寄り切られる。
でも、その時の辻の顔が、どこか嬉しそうに見えたのは気のせいだろうか。
「ったく、満ち足りた顔しちゃって。」
観客席、レイナがそうこぼす。マネージャーとして、部長として、ずっと見てきたこのコンビ。
満ち足りた顔をしているのは、彼女もまた同じだった。
公式の場での初対決、そしておそらく最後の対戦になるであろう一番は、こうして幕を閉じた。

個人戦は進む。やはり決勝まで多くの番数を取ったダチ高のメンバーは、その疲労の蓄積から
トーナメントを上り詰めることは叶わなかった。加えて団体で全国がある彼らは、
もう個人しか残されていない他校の強豪とは『心』の有り様が違ってしまっていたのだ。
それがもっとも顕著だったのは石高の沙田だろう、全国への執念を見せた彼は、団体決勝の
疲れも見せず、執念の相撲で見事千葉県の頂点に立って見せた。

―個人戦優勝、沙田君。準優勝、大河内君。３位、神崎君。以上３名には、全国大会の出場権が
与えられます―
石高の荒木は団体決勝での股関節負傷がたたって３回戦敗退、西上の葉山は準々決勝での
脳震盪でドクターストップ、常磐第三の下山は３位決定戦で柏実業の神崎に敗れ無念の４位。
そして、個人戦では振るわなかったダチ高は―
―団体優勝、大太刀高校―
拍手と共に蛍が賞状を、桐仁がトロフィーを掲げる。そして部員全員の首に金色のメダルが
光り輝く。
昨年は開かなかった『全国への扉』。それを押し広げ、彼らは向かう。
聖地、国技館へ。

第５６番　見たぜ

―ピコン！―

夜中の高級ホテルの一室、金髪の美女と一戦やらかした後のけだるい雰囲気の中、彼の枕元で
スマホの着信音が鳴り響く。
「ンだよ、誰だこんな時間に。」
筋骨隆々の肉体をむくりと起こし、スマホを見る男。と、その厳つい顔が少し穏やかになる。
「ナーニ、チヒロ！ホカノ女カラジャナイデショーネェ」
「恩師からだよ！え、えーと・・・マイグレートシショー？」
国崎　千比路
総合格闘技の世界王者を夢見て単身アメリカへ来て早二年。ずっとストリートの賭けファイトで
戦い続けてきた彼にようやく訪れた転機。サンフランシスコの本部を構える格闘団体
『Ｍ・Ｌ・Ｆ・Ｃ』からのオファーが舞い込んだのだ。
その仕掛人こそ、いま彼の傍らにいる女性、ジェニファー・Ｋ・ライス。彼女はこの団体の
社長の令嬢で、たまたまチヒロの戦いを街で見かけていたく気に入ったらしい。
今日のデビュー戦で見事ＫＯ勝ちを収めたチヒロに、彼女は早速デートを申し込んできた。
このホテルの高級和食店でディナーを頂いた後、そのまま二人でホテルにしけこんで
しっぽりと、というワケである。
最もチヒロにとっては女性の相手は別に慣れっこではある。日本と違いこちらでは
強い男がモテるのはいたって当然ことであり、今までにも試合後に何度か女性に声を掛けられ
安モーテルに一泊、なんてのは数えきれないほどあった。

まぁ今回はチヒロにとってもＶＩＰといえる相手だ、ご機嫌を損ねないように、
前の女でないことは最初に明言しておく。
「諸岡先生か、なんだって今更？」
レスリング部でチヒロが指導を受け、自分を日本一に導いてくれた恩師。だがその後彼が
相撲に進んでからはあまり接点が無く、ましてやアメリカに来てからは初めての便りだ。
何の要件だとスマホを見ると、短いメッセージと共に動画が添付されている。
『近況報告、そしてエールだよ、Ｍｒ國崎。』
なんだそりゃ、と動画を開く。映ったのは土俵と共に書かれたテロップ『ダチ高相撲部奮闘す』
という書き文字だった。わざわざ行書体で書かれている所にこだわりを感じ。くっくっく、と笑う。
「オー、スモーレスリングネ、ムカシ、チヒロモヤッテタンデショ？」
ああ、まぁな、と相槌を打って動画に見入る。おっ！ホタルとハカセか、懐かしいなぁ。
そういやホタルの奴、１回くらいは勝てたのか？なんかチームメイトもデケェ奴が多いし
そもそも試合に出してもらえるのかよ、アイツ・・・
「ＯＨ！ファーンタスティック！コノ三ツ橋ッテコ、スゴイネ！」
嬉々とするジェニファーをよそに、中川高校の大将、江口の足を引っこ抜くような内掛けで
倒すホタルの姿を、堂々とダチ高の大将を務めるその雄姿を、チヒロは言葉も無く見つめる。
準決勝では巨漢の清水のノドをカチ上げ、派手に土俵に転がす。そこにいたのは彼の知る
ホタルではなく、ダチ高の大将として、また堂々たる力士として戦う三ツ橋蛍の姿だった。
蛍が源之助を円に投げ飛ばした時、彼の感情がついに爆発する。

「ハッハッハッ!どうだゲンゴロウ、強えだろうがホタルはよぉ!!」
言葉とは裏腹に、チヒロは熱いのかも冷たいのかも分からない汗をかく。もはや文句の
つけようもない、というか自分の想像する最善の手の、その斜め上を行くホタルの相撲に
思わず拳を握る。もし今、俺がホタルと相撲を取ったら・・・勝てるのか?俺は。
「とうとうハカセにも勝ちやがった・・・」
もう何も言うことは無い、今のホタルは強くなった、あの頃からは想像もつかない程に。
たった1勝を挙げるために恥も外聞も無く小細工を弄し、道化と化してきたあのホタルが
今や火ノ丸に成り代わるダチ高のエースとして奮闘している、そんな彼の姿にチヒロは
感動し、そして思い知らされていた。
人は『強さ』を求めて、ここまで変われるものだ、と。
「いよっしゃコシヒカリ!もう一戦すっか。」
いきり立つ感情と息子を隣の彼女に向ける。が、顔を真っ赤にして怒る彼女の表情が、
ついうっかり禁句を口走ったことを思い出させる。
「チ・ヒ・ロ~、ミドルネームデ呼ブナッテ・・アレホドイッタデショ~~」
「い、いや・・スマン!っていうかいい名前だと思うぜ、俺好きだし・・だから灰皿降ろせって!」
「チヒロノ、バカァーーーッ!!!!」
豪快に灰皿を投げつけるジェニファー・コシヒカリ・ライス。
カリフォルニア米の事業で財を成し、格闘団体を始め様々な事業を展開するライスカンパニーの御令嬢。
後の『國崎お米』の生みの親である・・・たぶん。

第５７番　ある少女の成長

―東、銚子女子、天音。西、大太刀、小林―

会場のアナウンスに反応して、赤池が周囲にいる面々に『来たで』とアイコンタクトする。

特に隣の席に座る男子、瀬部野には頭をわしづかみにして笑顔のまま凄む。

「いだだだっ！分かってますってテツオ君、頭割れる割れる～」

インターハイ女子相撲、千葉県予選会場、赤池の周りにいるのは彼や小林と同じ

１年３組のクラスメイト。

一週間前、全国出場を決めた翌日、ホームルームで先生にその報告とお褒めの言葉を貰った赤池は

それに応えてこう返していた。

「来週は女子の試合あるけん、みんな応援に来たってや。小林さんも出るけんな！」

赤池はクラス内でもワリと人気のあるキャラである。成績こそ悪いが、イケイケの関西弁と

外見の割に周囲に対して壁を作らないその性格で、特に男子受けは良い方だった。

加えて陰湿なイジメやシカトが大っ嫌いな性格で、新学期早々小林に『そういう行為』に出ていた

瀬部野にたっぷりと教育的指導を施していたりする。

「それはいいですね、先生も行きますから、是非皆さんも！」

そんな先生の声を反映してか　当日は意外に多くのクラスメイトが集まった。

さすがに他のクラブ活動がある生徒は無理だったが、先生も来るということで内申を気にする者、

猛暑の中、家にいても親がウザイし、会場に涼みに来るのもいいかな、という者、

また、普段から内気な小林にいい印象を持ってない女子達が、彼女

が派手に負けるところでも
見物に行こうなどと考えて。
「相手の人ゴツい体してんな、身長差ヤベェ・・・」
「顔もスゲェよ、アマゾネスって感じだな。」
小林の階級は中量級、女子の中ではちょうど真ん中の階級なのだが、小太りな小林に対し
相手の天音は細身ではあるが頭一つは背が高い、男子と比べても遜色のない体格で小林を見下ろす。
先述の通り、クラスメイトの中には小林にあまり良い印象を持っていない生徒もいる。
そんな彼女らは小林が無様に負けるシーンを少しばかり期待していたのだ、が。
―はっきよい―
組み合う両者。背の低い小林が両下手を、長身の天音は両上手をかぶせるように取る。
「ふんぬ―っ!!」
天音が吼え、小林を吊り上げようと力を込める。
「んっ、しょ!」
その天音の体が、まるで荷物のように抱え上げられる。相手を吊り上げた小林はそのまま
とことこ歩いて天音を土俵の外に降ろす、勝負あり。
「えぇーーーっ!」
驚愕するクラスメイト達。あの内気で引っ込み思案な小林が、あのゴツい女子をまるで
問題にせずに倒す様に驚きを隠せない。
「相撲は腰で吊るんや、腰の低い小林が、あんだけ腰高な相手に吊り負けるわけかるかい。」
赤池が上機嫌で解説する。確かに腕力頼みだった天音に対し、小林はしっかり腰を割って
自分の腹の上に相手を乗せていた。原理を考えればこれで小林が吊り負ける同理が無い。

２回戦、３回戦、準々決勝と小林は勝ち進む。その低い腰に加えて引っ越しのバイトで培った剛腕、
さらに千葉県を制したダチ高相撲部で学んだ相撲勘や技術は、そこいらの女子部員を圧倒する
力量を身につけていたのだ。
彼女のクラスメイトもまた、試合ごとに小林に対する期待感と、勝利の喜びを共有していく。
自分の見知った人間が、どこの誰かも知らぬ強者を次々と破っていく、その痛快さに
普段小林に抱いている負の感情などきれいさっぱり消え去っていた
「さぁ、いよいよ準決勝、これに勝てば全国だよ！」
「やるねー小林さん、これは私も負けてられないわ。」
蛍と柚子香の激励を受ける小林。女子相撲は階級別に各県２選手ずつが全国大会に進める。
あとひとつ勝てば彼女も全国大会へ出場が決まるのだ。
そこに立ちはだかるのは、共に夏合宿を過ごした相手、九十九里高の遠藤。
すでにもうひとつの準決勝も同高の副部長、和田が勝って全国と決勝進出を決めている、
彼女たちにダチ高が食い込めるかの正念場の一番。
―準決勝、東、大太刀高校、小林。西、九十九里高校、遠藤！―
「「フレーッ、フレーッ、こ・ば・や・し！頑張れ頑張れ、さ・な・えっ！」」
会場の一角から飛ぶ声援に、小林が思わず反応する。見上げた先の観客席には、
普段彼女と共に学ぶクラスのみんな。
そしてそこに混ざる男子、無粋だが真っすぐな相撲部のチームメイト。
彼女はすぐ顔を伏せ、照れ臭そうに少し微笑む。
「おお、赤池の連れて来た応援団、いい仕事するなー。」

「あれでアイツ、クラスじゃ人気者らしいからな、正直理解できん。」
赤池以外の相撲部男子は、別スペースで固まって試合を見ていた。
「火ノ丸の奴もクラスじゃ人気あったからな、熱血バカは人を惹きつけるんだろう。」
桐仁がそう語る。かつてダレ気味だった体育祭を熱血に盛り上げた誰かさんを思い出して。
―はっきよい！―
組み合う両者。さすがに小林の剛腕をよく知る遠藤は、うかつにマワシは取らせない。
小林の腕を自分の腕で巻き込み、閂に近い形で引っ張り上げる。自分の腋に相手の腕を
ロックして封じにかかる。
こうなるとさすがにその女子離れした腕力も生かせない、だが腕を抜こうにも遠藤の
絞り込みに抜くに抜けず、そのまま押し込まれていく。
「マワシにこだわるな！振り回せ!!」
赤池が立ち上がって声を上げる。その声が届いたのか、小林は両腕を抱えられたまま
相手の背中をぎゅっ、と抱きかかえると、そのまま遠藤を持ち上げて振り回す。
「出た！小林メリーゴーランド！」
柚子香が叫ぶ。相手を抱え上げたままぐるぐる回るその様は、まさに回転木馬を連想させる。
が、遠藤も執念と言うべき足さばきで土俵に足を残す。
1回転、2回転、そして3回転した時、ついにバランスを崩し、もつれるように倒れる両者、
その時上になっていたのは、多くのクラスメイトとチームメイトに見守られる小林だった。
―東、小林の勝ち！―
拍手喝采を送るクラスメイト達、あの内気な小林が全国大会出場？
その快挙に沸く。

が、赤池だけは、くっ、という表情のまま土俵を見つめる。
審判たちが土俵に集結し、今の一番を審議していたから。
「え・・・アレって何を審議して・・・どういう状況なんですか?」
不思議がる幸田の質問に、桐仁が深刻な表情で答える。
「マズいな、あの抱え込み、アマチュア相撲で禁じ手の『鯖折り』に取られるかもしれない・・・」
相手を抱きかかえ、そのまま絞り込んで背骨を締めあげる技。もしそれと取られたなら
反則負けの判定が下るかもしれない。
審判団は遠藤に問いただす。その質問に対して彼女は毅然として首を横に振る。
審判団が分かれ、あらためて主審の行司が勝者の名を呼ぶ。
―行司通り、東、小林の勝ち!―
会場が改めて拍手に沸く。勝った小林と、相手の反則を公然と否定し、敗北を認めた遠藤に。
小林はここで初めて2階席の応援団に顔を向け、手を振る。たったそれだけの行為なのだが
彼女を知る者にとってそれは大いなる進歩だった。あの内気な少女が舞台で堂々たる試合をし、
応援してくれる仲間に応える、仲間と共に鍛え上げたその力と技、そして『心』で。
「さってと、負けてられないわね。今度は私の番よ!」
柚子香が屈伸をして相手を見据える。土俵の対にいるのは、やはり共に鍛えた同志であり
昨年苦汁をなめたライバルでもある選手。
―中軽量級決勝!東、大太刀、堀。西、九十九里、池西!―

第５８番　好きこそものの上手なれ

「あれよあれよという間に決勝か、堀さんホント強くなったよなぁ。」
「ま、あんだけ稽古してりゃ強くもなるさ。」
松本と大峰が試合場を見下ろしながらそう話す。２年目であっさり全国出場を決めた彼女は
これから千葉県女子中軽量級の王座を賭けて戦う。
柚子香はこの大会で強かった。昨年よりいちだんと強くなった膂力に加え、持ち味であった
前さばきの巧みさで自分の体制を作り、速く力強い寄りやキレのある投げで次々と勝利し
トーナメントを駆け上がって行った。
もうひとつの要因を上げるなら、今年の会場はマットの土俵では無く、お馴染み土で出来た
土俵だという事だ。学校によっては日々の練習をマット土俵でやっている選手も多い。
そんな女子はどうしても土の土俵を潜在的に怖がる傾向がある、あまりガチで相撲を
やっていない娘にとっては、土で汚れる事すら嫌う者すらいる。
もちろん柚子香にとってはすっかりお馴染みの足触りだ。練習でも何度も転び、土にまみれた
彼女にとって、思う存分普段の成果を出すことが出来た。
準々決勝では九十九里の村田に投げ勝ち、準決勝では佐倉女子のエース、山口を激戦の末
寄り切って見せ２位以上が確定、見事全国出場を決めた。
だが、彼女の戦いはまだ終わらない。昨年惜敗を喫した相手は、柚子香を待ち構えるかのように
土俵の向こう側にいる。
池西　檸檬（いけにし　れもん）
九十九里高の主将であり、元柔道選手でもある実力者。昨年のインターハイでは全国で

ベスト4に進んだほどの強豪選手。
夏合宿で柚子香は檸檬と共に稽古することで、彼女の強さの秘密を知った。
―相撲が好き―
見る側では無く、相撲を『取る』側として心底相撲を楽しんでいる。
仲間との稽古を楽しみ
ライバルであるはずの自分の上達を嬉々として喜び、勝利に歓喜し負けに学ぶ。
そんな楽しそうに相撲を取る彼女に柚子香は大いに影響される。
自分が相撲を始めたのは
姉の影響と、体を動かすことが好きだったからではあるが、果たして自分は檸檬ほど
楽しんで相撲を取っているだろうか。
私は一体、何のために相撲を取っている?
私だって相撲は好きだ。お姉ちゃんはじめダチ高相撲部のみんなも好きだ。Ｌｉｋｅ以上に
好きな人も一緒にいる、みんなと喜びを共有するのは最高に青春を感じる瞬間。
だけど将来はどうする?男子と違って女子にはプロの世界はおろか、オリンピックの種目に
すらないのだ。檸檬みたいに女子相撲協会に進んで発展に貢献したいという目標があるわけでも無い。

―東、大太刀、堀。西、九十九里、池西!―
呼び出しを受け、ふたりが土俵に上がる。と、観客席の一角からなんとも珍しいコール。
「ゆっずれっもんっ!ゆっずれっもんっ!ゆっずれっもんっ!」
柚子香も檸檬もそのコールにがくっ!と体を傾ける。声のする方向、ダチ高男子部員の固まる
観客席に二人が同時にツッコミを入れる。
「ジュースかっ!」

「応援で遊ぶな!!」
ダチ高の面々はこの大会、柚子香と小林の試合はもちろん、九十九里高の選手の試合時にも
応援の声を上げていた。それはインターハイで応援してくれた彼女たちへの返礼でもあったが
共に夏合宿を稽古した者たちへの純粋な応援でもあった。
はぁ、と息を突き、改めてお互いを見る。土俵上にぴりっ、とした空気が充満する。
柚子香は彼女と真剣勝負の舞台で向かい合うことにより、自分自身に対する疑問に
ひとつの答えを出す。
「(私が相撲を取る理由・・・そう、貴女に勝ちたい!今は、それだけでいい!)」
―はっきよい―
低い体制で当たる両者。と、次の瞬間、檸檬は体を開いて柚子香の体を呼び込み、右足を
内股に差し込んで跳ね上げる。
「カウンターの内股!」
石神の荒木もよく使う、柔道からの転向組お馴染みの技。前に出る競技の相撲にとって
キレとタイミングさえ合えば効果は絶大である。
「くっ!」
柚子香は左足を刈られながらも右足を前に出してこらえる。普段から腰を割る稽古を重ねている
彼女にとって、マワシを取られていない投げに落ちることはそうそうない。
が、次の瞬間檸檬は右足を掛けたまま体を戻し、そのまま内掛けに移行する。引き技の内股から
押し技の小外刈り(内掛け)へ変化するその速さと、片足立ちで切り返すバランス感覚の良さ!
いきなり方向を変えられた柚子香だが、それでもケンケンで堪えて

体を戻し、腰を割り直す。
檸檬は間髪入れず刈っていた右足を逆に飛ばし、蹴返しを放つ。パチィン！と平手打ちの様な
音が会場に響く。そしてそのまま蹴った足に巻き付け、小内刈りに移行する、なんという
多彩な足技！
「なんてヤツだ！もうずっと片足立ちじゃねぇか！」
陽川が叫ぶ。　柔道経験者ならではの、組み合わずに攻める足技の冴え。
相撲は腰を割って、マワシを掴んで取るもの、と教わってきた柚子香には絶対真似できない
戦法だ。相撲の形にさせて貰えない！
「ゆず！一度離れて！」
蛍が声を飛ばす。足を掛けられてバランスが崩れた状態を続けるのは危険だ。ここは一度
距離を取って仕切り直すべきだ。
だが、それこそが檸檬の狙いだった。普通に組んでマワシを取っても彼女は十分に強い、
相手が引いたその瞬間は電車道で寄る絶好のチャンスなのだ。
が、柚子香は蛍のその声を聴いて、全く逆の判断をする。
なんとバランスを崩した状態で相手に思いきり寄りかかったのだ。
まさかのアクションと
かけられた体重を受け止める為、足を抜いて腰を割る檸檬。
そしてようやく胸を合わせた、相撲らしい体勢で組み合う両者。
「上手い！」
九十九里の副主将、和田が思わず声を上げる。もしあそこで引いていたら勝負は一気に
決まっていたはずだった。距離を取るために引くのではなく、逆に押すなんて！
それは小兵の蛍が常々心がけてきた、『引き』に対する心構え。小兵の蛍がもし引けば

相手はカサにかかって押し込んでくる。引く前には必ず相手を押して追撃を受けないように
気をつけてきた。そんな蛍の姿を見続けてきたからこその好判断。
ここから差し手争いに入る両者。鬼丸の前さばきを参考に、マワシの取り方切り方を
身につけてきた柚子香に対し、一手も引かぬ技術を見せる檸檬。
「うそ・・・堀さんと互角の前さばき・・・？」
「柔道の組み手争いも激しいからな、下手な殴り合いよりも手の出し引きは速いんだ！」
驚く幸田に桐仁が解説を入れる。この差し手争いに勝ったほうが勝利に大きく近づくだろう、
ある意味、相撲の基本にして必勝法ともいえるこの『前さばき合戦』。自分に有利な形で
組むことが勝利を大きく引き寄せる。鬼丸の両前ミツしかり、草薙の右上手もまたしかり。
胸を合わせたまま、両手でキャットファイトを演じる二人。檸檬の左手が柚子香の右手を掴み
上手を狙う檸檬の右手を柚子香の左手がはじき、ヒジを曲げて食い止める。
が、その間隙を縫って檸檬の右手が、がしっ！と上手を取る。と同時に左手で掴んでいた
柚子香の右手を離し、左でも上手を狙いに行く。
その瞬間だった。柚子香は低い姿勢で相手の懐に潜り込み、一気に両前ミツを取る。
師匠である蛍の『潜る相撲』、その体制を作ることに成功した。
だが檸檬も同時に両上手を引く、両者得意のがっぷり四つで土俵中央、動きが止まる。
「ハァッ、ハァッ・・・」
呼吸を整えながら柚子香は思う。両上手を取られている以上、下手に動いても押さえつけられて
体力を消耗するだけだ。なら相手の動きを待って、隙間が出来た瞬

間に投げに行く！
「（本当に、強くなったわね、ゆずっち。）」
檸檬は1年前の取組を思い出していた。自分の投げに付いてこれず、振り回された挙句に
土俵に転がった1年生の娘。それが今や自分の足技を駆使しても倒れず、差し手争いも
互角の勝負を演じてみせた。
だが、それでもこの勝負は、檸檬の手の内にあったのだ。
「（全国まで温存するつもりだったけど・・・行くわよ！）」
意を決した檸檬が全身に力を込める。それは肌を通して柚子香にも伝わってくる・・・来る！
その瞬間、右足を飛ばして蹴繰りにいく檸檬。組み合った状態で察知した柚子香は、
素早く右足を引いて蹴繰りを躱す。
「（イチ！）」
檸檬はすかされた足を、今度は相手の左足に向かわせる。蹴繰りから内掛けへの連続技！
だがそれも柚子香には見えていた。左右の足を交互に攻めてくるのは先ほどからの相手の
得意パターン、ひっかかるもんか、と左足も引いて躱す。
「（ニッ！）」
檸檬の足が空を漂う。その瞬間、柚子香のターンが訪れるハズだった。
「さんっ!!」
いつのまにか両上手を離した檸檬が、柚子香の両肩に両手を添え、強烈に下方向に押し付ける。
上半身に全体重を掛けられ、足技を躱すために左右に大きく引いた足は、この押し付けに
抵抗する術を持たなかった。
―叩き込み『三角落とし（トライアングルストライク）！』―
胸から、顔面から、成す術なく土俵に叩きつけられる柚子香。その

豪快な威力と
叩きつけられた際のどしゃっ!という嫌な音に会場がどよめく。
「ゆず!」
思わず声を上げる蛍。隣りにいる千鶴子は一瞬硬直するが、すぐ足元の救急箱を拾い上げ
妹の状態を観察する。
観客席で見ているダチ高の面々も、その衝撃の結末に立ち上がり、柚子香の容態を心配する。
「なんて技だ・・・さんざん足技を意識させておいて、それをエサにしやがった。」
桐仁が嘆く。足技を怖がらせることにより両足を広げさせ、それを角とする三角形の一点に
相手を叩き込む・・・恐ろしく理にかなった技である。
―西、池西の勝ち!―
行事の声と同時に柚子香はゆっくりと起き上がる。土だらけの顔を涙が洗う。
また負けた、なんて見事な技、自分の形を作りながら何もせずに待ってしまった、
悔しさ、後悔、そして痛み。彼女は泣きながら仕切り線まで下がり、礼をする。
土俵を降りる柚子香を、姉の千鶴子が出迎える。顔をタオルで覆い、土と涙を同時に拭う。
「痛いよ、お姉ちゃん・・・」
我慢して、と妹の頬を抑え、その顔を覗き込む。うん大丈夫、キズにはなってないよ、と
笑顔を見せる姉。その声に安堵の表情を見せる蛍と小林。
「すごい技だったね。」
その蛍の言葉にこくり、と頷いて、そのまま蛍にもたれかかる柚子香。
「・・・勝ちたかったな。」
「全国で勝てばいいさ。」

と、ひょこっと顔を上げ、ぽかんとした表情で続ける柚子香。
「あ、そうだ。まだ全国あったんだっけ。」
「忘れてたの!?」
思わずぷっ、と吹き出す千鶴子と小林。多少無理はしているだろうが、それでもその
立ち直りの速さに思わず笑顔が浮かぶ。
結局、中量級の小林も決勝で敗れ、両者とも準優勝に終わる。
だが、彼女たちにもこの先がある。そう、インターハイ女子相撲全国大会。
男子の団体と共に、その扉を押し開けることに成功したのだ。
大太刀高校相撲部の熱い夏は、これからが本番。

第５９番　国宝バーゲンセール

「さぁて、ダチ高の仕上がりはどんなもんかしらね！」
意気揚々と相撲部のプレハブのドアに手をかける相撲記者、名塚。
全国大会の出場校も出揃い、いよいよ大会間近になったこの日、彼女はダチ校に
取材の予約を入れていた。例によってカメラマンの宮崎を従え、部室のドアをくぐる。
「こんちわー、月刊相撲道でー・・・って、えええっ!?」
驚愕する名塚、宮崎も後ろから顔を出し、あらま、という表情をする。
「「チューーーッス!!」」
室内の全員が一斉に声を出す。が・・・人数が多い。狭くはないダチ高の部室だが、それでも
大勢が密集して所狭しと稽古しているのだ。
「沙田君?荒木君に・・・川人の大河内君も、柏の神崎君まで・・・」
「ちわっす、記者のオネーさん、今日は合同練習ですよー。」
沙田が軽薄にそう答える。そう、今日はダチ高主催の全国大会直前、千葉代表合同稽古の日。
雑誌の取材を予約された諸岡が急遽企画したこの集まりに、石高や川人、柏実業はもちろん
遠路はるばる九十九里や佐倉女子のメンツも駆け付け、共に汗を流していたのだ。
「参ったわね、とんだサプライズだわ・・・」
もちろん嬉しい不意打ちではある。全国に出場する面々の調整具合やコメントが
まとめて取れるのは願ったり叶ったりだ。
それは集まった面々も同じ事。うまくすれば雑誌に載れるという下心から、全国のライバルの
情報を入手出来るかも知れないという期待も込めて彼女を歓迎する。

「でも・・・荒木君がいるのは意外ね。」
彼は敵に塩を送るタイプでもないと思うし、何より彼は全国への出場権が無い。
相撲部を引退ともなれば、かつて語っていた総合格闘技の方に気持ちが向いているかと
思ったのだが。
「ま、俺らを倒して代表になったダチ高に、全国で無様さらしてほしくねぇからな！」
営業スマイルでそう返す荒木。うん、良いこと言ったぜ俺、とほくそ笑む彼を
室内のほぼ全員がジト目で睨む。
「そういうワリには、三ツ橋部長にやったらつっかかってましたけどねぇ。」
「いきなり申し合いはするわ、勝ったら勝ったでガッツポーズするわ・・・どう見ても
大会のウサ晴らしに来たんでしょーが。」
ダチ高の面々の感想に続いて、沙田までもがジト目で突っ込みを入れる。
「で、もう一番やって負けたらさらに泣きの一回だからねぇ・・・」
「う、うるせーな！コイツはなんか頼りねーんだよ！」
集中砲火を受けた荒木が涙目で蛍を指差してそう反論する。
「国宝『蛍丸』？コイツ程度の実力で全国に国宝デビューしたら恥かくだけだっつーの、
だから俺が胸出してやってるんだよ！」
その言葉にさらに冷たい目線が集中する、あんだけ豪快に投げられといてどの口が言うんだか。
「いい話題が出た所で、今日はお土産持って来たわよ。」
名塚がそう言ってカバンから1冊の本を取り出す。真新しい表紙の『月刊相撲道』だ。
「おお！最新刊ッスか？来週発売の。」
「そうよ、今日は特別だから、内容をネットで拡散とかしないでね。」

一応釘を刺しておいてから雑誌を皆に差し出す。表紙には草薙と童子切、その書き文字に
『高校相撲ＩＨ直前特集号』と書かれている。
早速興味津々で雑誌に群がる一同。さすがに巻頭ページは大相撲の話題だが、センターカラーの
ページから高校相撲の特殊が組まれている。
その見開きには３人の選手が大写しになっていた、『現在の国宝達』という見出しと共に。
千葉の月光〃三日月宗近〃こと沙田美月
名門白楼の雄〃備前長船〃こと舟木長一郎
九州の弾丸〃圧切長谷部〃こと黒田篤
見開きを３分割してその３人がデカデカと紙面を支配していた。
それを覗き込んでいた沙田が
いやぁ参ったなぁ、と爽やかに笑う。
「えー、部長もカントクも無しですかー?」
という柚子香の抗議に、名塚は次のページ開いてみて、と催促する。
言われるままにページをめくると、そこには日本地図が大きく描かれ、都道府県ごとの
団体、個人の出場メンバーが細かく明記されている。
そしてその各所に、小さなワク取りで人物の写真が、短いコメントとともに張ってあった。
そのページの一番上にはこう書かれている。
〃国宝候補!?全国で旋風を起こせるか!〃
「あ、部長発見!カントクも。」
千葉のエリアに小さく蛍と桐仁の写真が載っている、『蛍丸』と『鬼切安綱』の文字と共に。
「けどなんか、すいぶん多いわね国宝候補・・・」
池西レモンがそう続ける。その小さい写真は全国各地にちりばめられ、それぞれに名刀の名が
書き添えられている。
全員で２０名以上ピックアップされている様は、まさに国宝のバー

ゲンセールといえる。
「僕の名が無いのは心外だけど、大会が終わる頃には書き加えることになるだろうね、
国宝『國平製之』の名を。」
大河内が自信満々にそう吹く。それに続いて陽川が、大峰が、神崎が次々と「俺も俺も」と
名塚の方をちらちら見ながらアピールする。
「もちろん全国で活躍したら大いに取り上げさせてもらうわ、みんな頑張ってね。」
その声におっしゃあ!と高揚する一同。これでさらに気合が入るってもんよ!
と、そんな空気を桐仁の一言が止める。
「愛商大豊田の名前が無い?おいおい大阪の八尾学修館もかよ!」
雑誌を掴んで驚く桐仁に、周囲もええっ!という顔で再び集結。
なにしろその2高は有名な相撲名門校。毎年当たり前のように代表となり、本大会でも上位に
食い込む超強豪校の一角なのだ。それが・・・府県予選で敗退した?
「秋田の大成院、福井の衆翼第一、山梨の兜山、徳島の板野林業、沖縄の那覇付属あたりもね。」
名塚の指摘に全員がげっ!という顔をする。確かに今年のＩＨ，団体も個人もその勢力図が
すっかり書き換わっていることに全員が驚く。
「これが本当の『国宝効果』よ。」
名塚は語る。高校相撲で国宝世代、豊作の世代と言われた面々が死闘を演じた2年前。
あの童子切の、草薙の、大典太の、数珠丸の、そして鬼丸の戦いを見ていた当時の高校1年生。
今はその彼らが3年生の世代、相撲に夢を持ち、我こそはと稽古に励み、県内外のライバルに
勝ちたいと精進する、自分こそが『国宝』と呼ばれることを目標に。

本来野球やサッカーと違い、相撲のようなマイナーなスポーツはどうしても強豪校に
強さが偏りがちになる。学校側が相撲の環境を整え、志あるものがその学校の門を叩き、
実力者をスカウトして引っ張ってくる。結果、他の学校は『所詮あそこには敵わない』と
モチベーションを上げられなくなる。
だが2年前のあの熱い戦いを、そして無名の大太刀の躍進を目の当たりにした
全国の力士たちは、自らも主役になり得るんだ、という心を芽生えさせる。
強豪校なにするものぞ！の意思で各所で番狂わせを演じ、県代表として名乗りを上げて来たのである。
そして、そんな学校にこそ多くの写真が『国宝候補』の銘と共に張られているのだ。
「白楼、栄大、金沢北も立花寺も去年までよりずっと苦戦していたわ。3―2の辛勝も
何度もあったのよ、今まで歯牙にもかけなかった無名高にさえ、ね。」
言われて蛍たちは自分達の県を思い出す。弱小だった西上や常磐第三の躍進、いや自分達だって
千葉での地位は石高に次ぐナンバー2以下だったハズだ。そんな下克上が全国レベルで
起きているというのか・・・
「参ったな・・どこをチェックすりゃいいのか、皆目見当がつかないぜこりゃ。」
そう嘆く桐仁に、名塚は『まだ貴方達はマシよ』という目を向ける。
ダチ高が全国を決めたあの日、彼女は会場の外で悲観に暮れる少年たちを目にした。
てっきり『ここで』負けたのかと思いきや、ジャージには『愛商大豊田』の文字。

他県の偵察に来ていた彼らが、なんと同日に行われていた愛知県大会で自分たちの高校の
敗北を知ったのだ。仲間の応援も出来ず、ここで得た情報は無駄になってしまった。
彼らだけではない。衆翼第一や兜山のマネージャーの姿も見えていたが、翌週行われた
彼らの県大会でも母校は敗北し、偵察の情報は意味をなさなくなった。
唯一、女子マネが来ていた鳥取白楼は同じ日になんとか全国を決め、ダチ高の情報を
生かすことが出来るのだが。
「ま、情報の無い有象無象を気にしてもしょうがねぇだろ、注目すべきはやっぱコイツだ。」
荒木がページを戻し、３人の国宝のページにいる選手を差す。
〃鳥取白楼、国宝『備前長船』〃
「そういや荒木さん春に対戦したんですよね、どうでした?」
千鶴子の問いに、荒木はシンプルにこう答える。
「強かったぜ。」
わかり切った答えに一同がずるっ、とずっこけそうになる。
「具体的に言えよ!」
「弱かったらここに載ってねぇ!」
「・・・ほんとバカですねこの人。」
最後の蛍のしみじみとした感想に、また涙目でつっかかる荒木。
「う、うるせぇ!誰がバカだこのヤロウ、もう一番取りやがれ・・・」
と、そこで言葉を切り、すっと真顔になった荒木はこう続ける。
「そうだ、お前だよ三ツ橋、お前の相撲にそっくりなんだよコイツは。」
「・・・え?」
鳥取白楼高校２年、舟木長一郎、１７５ｃｍ１２３ｋｇ。
彼が『国宝』として全国デビューしたのは昨年の春、準決勝と決勝でその圧倒的な実力を
示してみせた時だ。ぶちかまし、突き、寄り、投げ等を間髪入れず

繰り出す強さ。
　蛍と荒木も現場で見ていたが、その時はとにかく攻撃的な選手というイメージが強かった。
　だが、彼の本性は攻撃性だけでは無かったのだ。彼は相撲の持つ自由度をひたすら追求し
　あらゆる技、決まり手を習得しようと追い求めた。
　出し投げ、引き投げ、変化から反り技や関節技に至るまで、あらゆる戦法を貪欲に取り入れる、
　そんな彼の姿勢を支えていたのは、あの天王寺とはまた違った形での相撲愛だった。
「何でもやってくる、言い換えれば何をするか分からないんだよ、ヤツは。」
　２００ｋｇ超の相手をぶちかまして放り出すかと思えば、軽量級の選手を引いて仕留める、
　自分こそが万能の相撲取りと言わんばかりのその戦法は、対戦相手の研究を
　無効にする強みを持っていた。
「とにかく相撲が好きなのよ、彼は。」
　名塚がかつて白楼に取材に行った時の事を思い出して語る。とにかく天真爛漫な性格で
　あらゆる技を楽しそうに繰り出すその様は、まるでゲームで色んな技を試す子供のようだった、と。
「誰かに似てますねぇ。」
　柚子香がレモンを見てそう呟く。そう、そんなタイプの選手は本当に何をやって来るか分からない。
　色々と技を試したいがゆえに、行動に対するためらいが無い、だからこそ矢継早に様々な技を
　繰り出してこれるのだ。
　だからこそ彼には『備前長船』の名がしっくりと来る。その刀は長きにわたり
　刀匠により作り続けられてきたが、その時代ごとの主流や傾向を取

り入れ、世代ごとに様々な
進化や特徴を備えてきた。同じ銘にもかかわらず、一本一本が様々な個性を見せる名刀。
「名塚さん、こっちの黒田選手の方は？」
蛍がやや神妙な顔で問う、それを見た柚子香も少し暗い表情を見せる。
あるいはもしかすると、蛍と同じ『心の闇』を抱えているかもしれない国宝。
「彼は舟木君とは真逆ね、ひたすらぶちかまして押し切る、まさに『圧切（へしきり）』よ。」
「ただ左右に躱そうとしても読まれるか追いかけられるんだよね、相手の心理をよく読んでるよ。」
沙田がそう付け足す、彼も昨年のＩＨ個人戦で彼との対戦経歴があった。
その情報を聞いた蛍は確信を深める、彼も多分、未だに覚めない悪夢の中で戦っている、と。
「さて、情報も入ったことだし稽古を再開しよう、せっかく集まったんだからね。」
諸岡の声に全員がハイ、おおっ！と答える。そうだ、他校の情報が入らないのは他所も同じ
だったら自分たちが大会までに少しでもレベルアップするしかないんだ、と。
熱の入った稽古の最中、カメラを構える千鶴子を見て、カメラマンの宮崎が声をかける。
「マネージャーさん、写真も撮るのかい？」
「あ、はい・・・みんなの姿を取り溜めてて、なにか記念にしたいと思ってて・・・」
本職さんに見せるほどのものでは無いですよ、と恐縮する千鶴子にぐいぐい押して、彼女の
取り溜めた写真を見た宮崎が、ほ～う、と感心する。絵心があるよねぇ、と。

本職に褒められて上機嫌で再度カメラを向ける千鶴子。と、部室の隅で未だ『月刊相撲道』を眺めている人物が目に留まる。

「・・・赤池君？」

彼は先ほどの『国宝候補』のページを開いて凝視していた。

「徳島県代表、海洋美波高校3年、菅　正一（すが　しょういち）、国宝候補『蜂須賀正恒』・・・」

第三章　インターハイ全国大会
第６０番　全国の猛者たち

「帰って来たぜ、国技館ーっ！」
早朝の両国国技館、珍しくハイテンションな桐仁のその一声に、バスから降りたばかりの
ダチ高相撲部がおーっ！と声を上げる。
２年ぶりに力士としてこの国技館で相撲を取ることの興奮に否応なしに高揚する。
すでに出入り口付近には全国から予選を勝ち抜いた強者たちがごった返している、
無差別級、相撲という競技の各県代表達の居並ぶ姿、その迫力は見る者を圧倒する。
そんな中、蛍はマネージャーから貰って来た選手証を付けているか皆に確認させたり
入場時の順番や選手席の確認など、物怖じせずにてきぱきと部長の仕事をこなす。
「よっ！大太刀じゃねぇか、久しぶり。」
そんな彼らに声をかけてきたのは石川県代表、金沢北高校の現主将、藤田だ。
昨年秋の合宿で顔馴染みになった、そして昨年ＩＨ団体戦と個人の覇者であるチーム。
挨拶を返す蛍たちに、神妙な顔でこう話してくる藤田。
「いやぁ、もう参ったぜ、みんなギスギスしてさぁ・・・」
話を聞くに、原因は例の『月刊相撲道』に掲載された国宝候補らしい。
もともと波乱の県予選の結果から他校の情報が不足している中、あの雑誌で写真付きで乗った
人物は注目と警戒の的にされているのだ。ということは・・・
びりっ！と周囲の視線が刺さっていることに気付く。蛍丸と鬼切

安綱、彼らもまた
　他校からの強烈な敵意にさらされていた。
（あれが・・・小さいな、本当に実力あんのか？）
（蛍丸のほうは変化使うらしいぜ、２年前もやってたし）
（鬼切ってスタミナ無いんだっけ・・・線も細いし、楽勝だなこりゃ）
「そういや金沢北はピックアップされてませんでしたけど・・・温存してるとか？」
　そう、あの雑誌に名門金沢北の国宝候補はいなかった、仮にも昨年で団体と個人の
　タイトルホルダーだったにも関わらず。
　いぁあお恥ずかしい、と前置きして藤田は語る。確かに今年のウチにはとびぬけた選手は
　いないけど、その分全体のレベルは高いつもりだよ、と。
　なるほど、千葉で言うなら柏実業みたいなチームカラーなわけだ。
「俺、選手宣誓しなきゃいけないのにこの空気だろ、参っちゃってさぁ。」
　そう言い残し、仲間の下に返っていく藤田。あー、こりゃ確かに大変だわ、と。
　彼と入れ替わりにやって来たのは、千葉の個人戦代表の３人、沙田、大河内、神崎、
　あとおまけで荒木。彼らは人数が少ないため、同じバスで乗り合わせて来ていたのだ。
　当然、３国宝の一人『三日月宗近』には周囲の視線が刺さりまくっているのだが、
　沙田はまったく気にしていない、むしろそれを喜んでいるかのようだ。
「いーねぇこの殺気、期待してもいいのかな？」
　聞こえよがしにそう言う沙田に、さらに殺気が突き刺さる。見てろ、俺が倒してやる、と。
　と、ここで案内の係員がスピーカーで選手たちに伝える。
「入場を開始しますので、各団体は番号ごとに入って下さーい。」

昨年覇者の金沢北を先頭に、各校がぞろぞろと入場していく。内部の観客席の中央部分に
各校専用の座席が設けられており、そこに荷物を下ろしてマワシを締め、準備を整える。
当然まだこの時点で女子は入場禁止だ。外で待つ千鶴子たち3人は、見知った女子に
声を掛けられる。
「おひさー、堀ちゃん。」
「あ・・・天王寺さん。」
その名に柚子香がえっ!?という顔をする。
「咲（さき）でいいわよ、大太刀もやっと帰ってきたねぇ。」
鳥取白楼相撲部マネージャーリーダー、天王寺　咲。後ろにふたりの女子を従え
天真爛漫な笑顔を見せる。
「あの白楼の？お姉ちゃん知り合いだったんだ。」
「知り合い、っていう程じゃないけど、そもそもこういう場に女子って少ないから、自然とね。」
そう答える千鶴子にうんうんと同意した咲は、後ろの二人を手招きして紹介する。
「ウチの後輩でマネージャーの田中さんと七瀬さん、よろしくね。」
「よろしく、こっちは女子相撲選手の堀・・・妹の柚子香と小林さん。」
紹介に従ってぺこりと会釈する4名、顔を上げるとダチ高の面々は田中と七瀬の二人に注目する。
「美人！そしてスゴいスタイル!!何で相撲部のマネージャー？」
確かに、両名ともまぁ女子としては羨ましさを隠せない美貌とプロポーションだ。
え、いや、そんなと恐縮する二人に、咲が思いっきりジト目を利かせて追い打ちをかける。
「なぁ、ホンマに。少しでえーからその胸よこせって・・・」
「無茶言わんでください、っていうかこのやりとり何度目やねん！」
「もはやウチらの紹介のテンプレになりつつあるなぁ・・・」

田中の反論に続き、しみじみそう返した七瀬がはっ、と目を輝かせる。
「ほう言えば！凄かったですねダチ高の幸田君、あの沙田選手を倒すやなんて！」
その台詞を言い終わるかどうかの所で咲が七瀬にヘッドロックをかける、田中も
あーあ、という表情でこめかみを抑える。
「ウチらがダチ高の情報を持っとるコト、バラしてどないすんねーん！」

「宣誓！我々は、伝統ある国技の担い手として、日頃鍛えた心技体を存分に発揮し、
取る者の、見る者の魂を響かせる戦いをすることを誓います！
選手代表、金沢北高校主将、藤田竜則！」
ああ言ってた割には堂々とした選手宣誓、魂という言葉を入れる所が金沢北らしい。
さぁ、戦いの開幕だ！

―東、千葉代表、沙田君。西、大阪代表、桑原君―
午前は個人戦のリーグ戦、いきなり3国宝の1人『三日月』と国宝候補『桑山光包』の一番。
沙田はここでいきなり真っ向から組み止め、一気に寄り切るスタイルで会場を驚かせる。
あのマワシを取らせないスタイルの沙田の、まさかの四つ相撲に意表を突かれ
成す術なく土俵を割る桑原。
沙田にしては、まず全力の相撲を取る事による自らの暖気と、あえて手の内を晒すことで
ここからの戦いの機先を制する狙いがあったのだ。
個人リーグ戦は進む。やはり国宝候補と言われる面々は強かった。
突き押しが強い者、

キレのある投げ技を披露する者、かち上げや関節などダメージ系の技を狙って来る者など
個性的な強さを見せる。
―東、京都代表、大山君。西、千葉代表、大河内君―
「お、大河内の出番か、果たして『逆鞘』が全国で通用するか・・・な？」
そこまで言って陽川が絶句する。相手の大山一二三、国宝候補『不動国行』
２４５ｋｇのその巨体をゆすって土俵に上がる様は、名前の如くどうやって動かすんだという
想いに囚われる。
これだけ横幅が広いと逆鞘がどうとか関係なかった、あえなく押し出される大河内。
―東、鳥取代表、舟木君―
出やがったな、と荒木が嘆く。相手は腰の重さに定評のある北海道の一条『和泉守兼定』。
立ち合い強烈な当たりから一転、舟木は叩き込みに出る。が、そこは粘りの一条、
引きに落ちないことに定評があった。
次の瞬間、彼は背後から吊り上げられる。舟木は叩いたその瞬間から回り込み
いともあっさり相手の背後を取って見せた、勝負あり。
「叩くのと次の動きが完全にセットになってるね、叩きに落ちないのは想定済みで
その２手３手先を読んでる・・・」
なるほど、彼のように体の有る力士が『何でも出来る』相撲を取るとこうなるのか。
確かに対戦相手にしてみればこれほど対策が立て辛い相手もいないだろう。
残り３国宝の１人、黒田はあっさりとぶちかまし一撃でケリをつけた。この一撃だけなら

最早幕内でも通用するだろう。
だが、初戦のその勝利にも、彼の顔は綻ばない。
―東、千葉代表、神崎君。西、愛知代表、荒巻君―
そのアナウンスを聞いた瞬間、会場がどぉっ！と沸く、開会式から目立っていた楽しみな
選手の一番。
１８８ｃｍの神崎がはるか見上げるその相手、国宝候補『物干竿』。
実にその身長２１１ｃｍ！
「あの大典太よりさらに１０ｃｍも高いって・・・何食って生活してるんだコイツは。」
桐仁が呆れる。あの相撲強豪校の愛商大豊田を破った騎皇国際の主力選手。
なるほど長身だが締まった体（１４３ｋｇ）の彼はまさに物干竿の異名がハマっている。
「神崎！分かってるな、潜ればお前の相撲だ！」
土俵下から柏実業の阿部監督が檄を飛ばす。確かにこれだけ背が高いと、潜り込まれれば
成す術もないだろう。
―手をついて―
仕切りに入ると同時に荒巻は大きく足を開き、ぐぐっ、とその長身を神崎よりも
低く縮める、これは・・・平蜘蛛！いや、その長い脚を折り畳んで仕切る姿はさながら
バッタかカマドウマすら連想させる。
―はっきよい―
低く当たった荒巻はそのまま前傾を利して、あっという間に神崎を土俵際に追い詰める。
「（マワシが遠い・・・っていうか遠すぎだろ！）」
神崎の手はマワシどころか相手のヘソにすら届いていない、これだけの長身に低く当たられては
マワシを掴むどころではない、ならば！と体をいなして躱しにかか

る、この身長で前傾なら
変化に簡単に落ちるだろう、と。
次の瞬間、神崎は土俵の外まで吹き飛ばされる。荒巻は最初っから変化されるのを
承知のうえでこのスタイルで相撲を取っているのだ、変わった方向にすかさず力の
ベクトルを変え、変化を許さない。
「・・・強い。」
会場の全員が同じ感想を共有する。またやっかいな存在が現れた、と。
2、3巡目に入るリーグ戦、相変わらず3国宝は盤石の強さで明日の決勝トーナメントに駒を進める。
国宝候補もお互いを食い合いながらもそれぞれが勝ち残り、その存在をアピールしていた。
ちなみに大河内と神崎も2、3戦目は辛くも勝利し、明日の決勝にコマを進めることに成功する。
そして最後の一番、3度土俵に上がる『物干竿』荒巻に会場が沸く、対戦相手はここまで
1勝1敗で後がない東京の国宝候補『菊一文字』こと後藤、突進力と四つからのがぶり寄りに
定評のある選手。
―はっきよい―
立ち合い低く当たった後藤は、そのまま全力でかち上げを放ち、すかさず相手の懐に
潜り込むことに成功する。もらった!と両マワシを引き、寄りに出ようとする。
と、ここで荒巻は割っていた腰を伸ばし、半ば棒立ちのような状態になる、
これでは寄ってくれと言わんばかりの・・・
「高いっ!!」
腰を伸ばした荒巻のマワシは、なんと腰を割った後藤の目の高さに

すらあった。
　こんな高さのマワシを持ち上げるなんて出来るのか？力が入らない。
　ウェイトリフティングでもこの高さは手首を返して持ち直す位置じゃないか！
「ならば！」
　後藤は吊りも寄りも不可能と判断し、すかさず足取りに行く。この長身なら片足を
　刈ってしまえば必ず倒せる、と。
　だが足取りをしたその瞬間、荒巻は再び腰を割っていた。上から全体重を受けたその足は
　足取りでもビクともしない、普段からこの状況を想定して稽古している、そんな練度が見て取れた。
　結局そのままじりじり寄られた後藤は、最後に背中越しに取られた両上手で釣り出される。
　こうして午前の部、個人戦予選が終了する、午後からは団体戦のトーナメント開始、
　いよいよダチ高の全国デビューの時だ。
　軽めの昼食を済ませ、アップを終えた全員が練習場の一角に集結する。
「にしても・・・クジ運悪いのは相変わらずだな、ウチは。」
　―1回戦第一試合、大太刀（千葉）―騎皇国際（愛知）―

第６１番　黙らせる

「先鋒大峰、２陣松本、中堅陽川、副将俺（桐仁）、大将三ツ橋で行く、出し惜しみはナシだ！」

桐仁のオーダーに全員が頷く。相手の騎皇国際は個人戦で戦った荒巻のデータしかない、

ならば相性とかは度外視で、今のベストメンバーで行くほかない。

また、今日の団体戦はどちらかが３勝した時点で残りの試合は行われない、もし３連敗したら

桐仁と蛍の出番は無いまま終わってしまう、そういう意味で２年生にハッパをかける

オーダーでもあるのだ。

―これより団体戦を開始します、第一試合、大太刀高校、対、騎皇国際高校―

土俵の淵に立って礼をする両陣営。中でもやはり荒巻の長身はインパクト抜群だ。

観客もライバル達も、２年前に全国制覇したダチ高よりも、この『物干竿』を有する

騎皇国際のほうに注目が集まっている。

先鋒戦、大峰は得意の攻めで相手を追い詰めるが、土俵際のいなしに落ちてしまい黒星、

国技館での全国デビューにやや勝ちを焦って攻め込んだところをうまく引かれてしまった。

２陣戦は逆に松本のどっしり構える相撲が功を奏した。土俵際に追い詰められながらも

得意の粘り腰からくる受けの相撲で耐えしのぎ、相手が力尽きると寄り切って勝つ。

中堅、陽川の相手は留学生の北欧人、エディ・オーベリソン。なんと立ち合いからいきなり

片足タックルを繰り出され、そのまま倒される。どうやら元レスリング選手らしい。

相手のデータが無い事が悪い方に出た一番だ。
副将の桐仁、国宝候補『鬼切安綱』その出番に会場が沸く、ライバル達の視線が刺さる中
持久戦に来た相手に対し、オンオフの相撲を使い分けることによって対抗し、相手が焦って
寄りに出た所を見事に巻き落としで仕留めてみせた。
「なるほど、カウンターの投げが得意か。」
「石神高校の荒木を思わせるな、あの力の抜き方は。」
そんな桐仁の戦い方を冷静に分析するライバル達。だがそれも大将戦のコールによって
かき消され、意識を持っていかれる。
―大将戦。東、三ツ橋。西、荒巻―
ざわ、ざわ、と個人戦の話題をさらった荒巻に注目が集まる、対するは４０ｃｍ以上背の低い
小兵の三ツ橋。その光景に、会場にいる相撲ファン達がひとつの懸念を抱く。
この素晴らしい力士が、姑息な『変化』を使う三ツ橋にけつまづくような負けを喫し
その戦歴を汚しはしまいか、と。
「三ツ橋ーっ、お前が国宝だと、笑わせんなよーっ！」
どこかの酔っぱらいのその一言がきっかけだった。変化を使う蛍に対する嫌悪感と
その彼が国宝候補の名を与えられていることに対する不快感が会場に浸透し、蔓延する。
「全敗のくせに、よくものこのこ出てこれたなぁー！」
「姑息な手ェ使うんじゃねぇぞー」
「荒巻ーっ、かまわねぇから吹き飛ばせーっ！」
思えばこういうヤジも各校のデータが出回っていない弊害かもしれない。彼らの頭の中では
未だに蛍は変化しか能のない、非力な力士としての一面しか知らないのだ

２年前、もし首藤に勝っていればその評価も違っただろう。だが負けた以上、彼らの記憶には
小細工を弄して勝とうとする姑息な選手、というイメージしか残っていなかった。
「ちょ、ちょっと！何よコレ、高校生の試合中よ！」
記者席で名塚がその空気に声を上げる、まだ何もしていないのにこの言われように
さすがの彼女も嫌悪感をあらわにする。が、会場のブーイングや口笛は止まらない、
異常な空気に包まれる両国国技館。
「ハッ、まぁしゃあねぇわな。」
「さて、黙らせることが出来るかな、三ツ橋君は。」
荒木と沙田が観客席からそうこぼす。彼らは覚えている、２年前もこの罵声に耐え、
一度は奇跡を見せた蛍の胆力の強さを。だが相手は化け物級、さて、どうなるか・・・
「（ったく、何じゃあこの空気は・・・）」
荒巻が内心そうグチる。純粋に自分の応援なら力も入る、だが聞こえてくるのは
自分よりはるかに小さいこの相手への否定と非難、うるせぇ黙ってろと思わずにはいられない、
お前らに気を使われるために相撲取ってんじゃねぇ、と。
が、次の瞬間、荒巻は気付く。相手の三ツ橋のそのらんらんと光る眼が自分を射抜いている事、
観客のヤジなどまるで意識せず、自分との対戦その１点に集中している相手の存在を。
「（上等、いい芯してんでねぇか！）」
だがヤジやブーイングは止まることを知らなかった。礼をさせようとした主審（行司）を
土俵下の副審が止める、この雰囲気の中試合をさせるのは公平ではない、と。

役員を呼び、汚いヤジを止めるよう場内放送を指示しようとした、その時。

「やかましいわ!!!」

広い国技館の隅々まで響き渡るその怒号に、会場が一転、水を打ったように静まり返る。

それは次戦の選手席にいた人物が放った一喝だった。周囲のチームメイトは予想していた

彼の行為に、耳を手で押さえてやれやれ、という顔をする。

声の主はふん!と鼻息をついて座り直す。海洋美波高校、菅　正一、国宝候補『蜂須賀正恒』。

そんな彼を見上げて『相変わらずだな』と言う顔をするのは、ダチ高の赤池だった。

―互いに、礼―

ようやく勝負が始まる。その間も蛍は目線を逸らさず、荒巻の目を睨み続ける。

荒巻もまた蛍を睨み返し仕切りに入る。見れば見るほど小さい相手、ならば観客の言う通り

変化もあるか?だが自分の長い腕ならどこに飛ぼうと捕まえる自信がある、さぁ来い!

―はっきよい―

ガツゥン!と頭からぶつかる両者。と、三ツ橋の頭が下がり、荒巻の頭がハネ上がる。

「蛍火の如し、潜!」

だがハネ上げたのは荒巻の頭だけだった、その巨体は相変わらず低く構え、潜ろうとする

三ツ橋を捕らえるべく胸を合わせにかかる。

が、沈んだ状態から一歩下がった三ツ橋は、そこから何と腕を十字に組み合わせ、

全身のバネを使って荒巻を下からカチ上げる。

―ドゴォン!―

『十字かち上げ』が再び荒巻の頭を跳ね上げる、先ほどよりもさらに

上体を浮かされた荒巻は
逆にこの小さな選手の胆力に感心する。このこんまい体で俺に対してこのケンカ腰な相撲とは！
だったら俺も！と下の三ツ橋を捕らえにかかろうとする・・・いない、だと？
会場があっ、と驚きの声を上げる。なんと三ツ橋が思い切り宙を舞い、巨体の荒巻を
飛び越して見せたのだ。
「八艘飛び！」
「うそ・・・だろ!?」
いかに荒巻が腰を割っているとはいえ、この長身選手に八艘飛びを仕掛けるとは誰も予想しない、
だからこそ蛍はこの戦法を選んだのだ、蛍火の如く、潜から十字かち上げで『潜るぞ、潜るぞ』と
意識させておいてからの飛び技。加えて強烈なかち上げが瞬間相手の目を閉じさせ、
飛ぶ蛍の姿を視覚と意識の両方から消し去って見せたのだ。これぞ蛍得意の心理戦、その真骨頂！
「うまいっ！」
そう吐いたのは白楼の舟木だった。少し離れたところでは立花寺の黒田もぐっ、と拳を握って
ほくそ笑む。先ほどのヤジ、そして2年前の三ツ橋に対して、彼もまた思う所があるのだ。
背後からマワシを掴む蛍、だが荒巻もすかさず体を起こし、直立に近い体制になると
右手を後ろに回して相手のマワシを掴もうとする。
「そうだ慌てるな荒巻、お前が立てば相手はマワシに力を込められん！」
騎皇国際の監督がそう叫ぶ。この体格差なら例え後ろを取られた状態でも挽回は可能だ、
相手を捕まえ、もう一度正面に引きずり出せば・・・

蛍はここで相手の左足に後ろから『内掛け』を仕掛ける。荒巻の足が長いため、
ヒザではなく向こうずねに足を掛ける形でロックする。そして掛けた自分の足首を
左手で掴み、手と足の両方で荒巻の左足を引き付ける。
「根太起（ねたおこし）！」
背後からな為、また身長差がありすぎる為、いつもの形とは違うが、それでも荒巻の
ヒザから先を自分の方に引っこ抜き、強引に片足立ちにさせる。
棒立ちだった荒巻、その巨木の様な体躯が、この『根太起』によってぐらぁっ、と傾く。
「（な、なんだ?左足が、浮かされて・・・言うことを聞かない、どうなっとんじゃ！）」
まるで巨木を切り倒したかのように、縦から横に傾き続ける荒巻の巨体。
それが完全に横倒しになった時、土俵に派手な衝撃音と、土煙が舞う。
―どどどぉーーーーん！―
会場の大勢が口をあんぐりと開けて固まっていた。ヤジを飛ばしていた酔っ払いも、
三ツ橋が国宝呼ばわりされる事に不満だったライバル達も、口を開けたままその光景に
黙らされる。
―東、三ツ橋の勝ち―
「「おぉおぉおぉ・・・」」
ため息とも歓声ともつかない声に会場が響く。あの三ツ橋がこの巨体を仕留めてみせた、
ぶちかましも、カチ上げも、そして彼らが嫌っていた変化である八艘飛びも使い
最後は力づくでこの荒巻を倒して見せた、これが今の三ツ橋、これが国宝『蛍丸』か！

「ほら黙らせた。」
沙田と荒木が笑いながらそう語る。伊達に俺達石高を破ったチームじゃねぇんだよ、と。
―以上、3―2で大太刀高校の勝ち―
勝ち名乗りを受けるダチ高に拍手が飛ぶ。会場の誰もがそのチームに畏怖と敬意の念を込めて。
参加選手たちの、もはや疑うべくもない『強敵』として。
大太刀高校、一回戦突破。

第６２番　腕白小僧達

初戦に勝利したダチ高の面々が通路に引き上げる際、次戦の待機スペースにいる
他校の選手とすれ違う時、彼らに声をかけられる。
「よっ、テツ！」
「お前も全国来てたんやなぁ。」
声をかけられているのは赤池だ、どうも顔馴染みらしい。
「えっとぶりですわ、次はウチらやから勝ちぃや！」
そう返す赤池の頭をわしっ、と掴む長身の男。日焼けした顔でにかっ、と笑う。
「言うようになったやんか、こらウチらも石にかじりついてでも勝たんとなぁ。」
試合場に向かう徳島県代表、海洋美波高校相撲部。そしてその主将、菅正一。
そんな彼らと対峙するのは、全国でも屈指の相撲名門校、青森県代表、三ノ矢実業高校。
共に国宝候補『蜂須賀正恒』菅と『用恵国包』柏木　恵、『小烏丸』烏野　章を擁する注目高だ。
「知り合いなのは分かるけど、どういう関係？」
「田舎の昔のツレですわ、漁師町でよう相撲取っとったんです。」
ダチ高指定の観客席で蛍の質問に赤池が答える。彼らはいずれも海沿いの街の腕白仲間、
ほぼ全員が漁師の息子で気が強くて喧嘩っ早かった、そんな中でガキ大将格だった菅は
よくこう言っていた。ケンカするなら相撲でやれ、と。
「赤池の人格構成が透けて見える話だ・・・」
思わずこぼす沼田に、周囲もうんうんと頷く。それを聞いただけで彼らに交じる赤池の姿が
ありありと目に浮かぶ。
海洋美波高校には元々相撲部が無かった。菅たち数人が入学した

時、彼らで相撲部を
立ち上げたのだ。腕っぷしには自信のあった彼らだが、それだけで勝てるほど甘くは無かった、
一年たって後輩が入学し、さらなる強さをつけた彼ら、それでも徳島の名門、板野林業の
牙城を崩す事は叶わなかった。
『お前が来てくれたら全国も見えるんやけどなぁ・・・』
赤池が千葉に引っ越すことが決まった時、そう言ってくれた菅の言葉を思い出す。
だが、彼らは赤池抜きでもその偉業を達成してみせた。県大会決勝、２―２の大将戦で
菅は板野のエース小塚を気合一閃で吊り落として、全国を決めてみせたのだ。
その強さ、そして吊りを決めた時の雄叫びを聞いた『月刊相撲道』の取材記者は
小塚に付ける予定だった国宝銘『蜂須賀正恒』を菅の方に与えたのだ。
―東、海洋美波高校。西、三ノ矢実業高校―

腕白坊主軍団ＶＳ相撲エリート、そんな戦いは予想以上の激戦となった。
先鋒で出た三ノ矢の『小烏丸』烏野は、押されながらも土俵を丸く使い円を描きながら
相手を流れるような投げで仕留める。２陣戦では海洋美波の田宮が怒涛の突き押しで
相手をあと一歩まで押し込む。が、相手の土板に脇に手を差し込まれ抱き抱えられると、
そこから驚異のうっちゃりで逆転負けを喫す。善戦してはいたが白星に繋がらない海洋美波。
―中堅戦、東、菅。西、柏木！―
中堅戦は国宝候補同士の激突、１９０ｃｍ１１０ｋｇの菅と１８２

ｃｍ１３８ｋｇの柏木。共に個人戦予選リーグを
突破しており、今日ここまでで３番を消化している。が、その疲れ
も見せず睨み合う両者。
会場も主戦力同士の激突に、固唾をのんで見守る。
―はっきよい！―
立ち合いと同時に菅はもろ手突きで相手を起こしにかかる。柏木
も受けて立つと言わんばかりに
突き合いになる、手数と威力では菅の方が上だったが、体重で勝る
柏木は体ごとそれを突破し
得意の左四つに組み止める。
電車道で寄りに出る柏木、菅は寄られながらも長い腕を巻き替え、
両上手を深く取る。
俵に足を掛け、寄りを止めた彼はそのまま吊りに出る、柏木も応え
て両者吊り合う。
「出るで！」
そう赤池が言ったその時だった。吊り合っていた菅が吠える、会場
全体に響き渡るほどの声で！
「けえぇらあぁぁあぁぁぁぁぁ!!」
その声と同時に柏木の体が土俵から引き抜かれる、なんという膂力
！
そのまま体を半回転させ、相手を土俵外に放り出す菅、勝負あった。
「・・・あの人、吠えたら信じられん力出すんや、相変わらずやでホン
マ。」
波音が響く漁師町の育ちだけに、彼らは皆一様に声が大きい。だ
が、その中でも
菅の大声は別格だった、そしてその雄叫びを上げたその瞬間、彼は
とんでもない力を
絞り出すことが出来た。
「武道でも格闘技でもあるからな、技を出す際に声を上げて力を増す、
という概念は。」
桐仁がそう分析する。息を吐くと同時に『気を吐く』、つまり乾坤一

擲の力を出す者は
確かに存在する、菅はまさにそういう存在なのだろう。
「あ、あの声。さっき部長の時に怒鳴ってヤジを止めた人だ・・・」
柚子香が気付く、蛍は後でお礼言わなきゃ、と拍手しながらそう返す。
菅の余勢をかってか、副将戦も海洋美波が取る。ぶちかましから胸を合わせた福島が
そのまま一気に土俵際まで詰めてからの見事な出し投げを決め、2対2のイーブンにしてみせた。
だが、彼らの健闘もここまでだった。大将戦、一進一退の攻防の末に土俵を割ったのは、
海洋美波の大将、花田のほうだった。
菅が選手席で、赤池が観客席で、無念の思いにに天を仰ぐ。
「カタキとらなきゃ、ね。」
蛍が赤池にそうハッパをかける、次の試合は彼も出場予定、実力伯仲のダチ高に明確な
控え選手はいない、桐仁の肺の疾患もあり、全員が出番をローテするのは県大会からすっとだ。
ウス、と頷いて拳を合わせる赤池。
「さて、練習場に行くぞ、急いで三ノ矢対策を練らなきゃいけないからな！」
桐仁の指示で選手全員が席を立つ、マネージャーの千鶴子と柳沢は居残り、
他校の情報収集に当たる、勝つために各々がすべきことはいくらでもあるのだ。
練習場について体を動かし始めた時、なんと海洋美波の面々がやってくる。
「よう大太刀さん、すまんけど赤池と一番取ってもいいか?」
菅がそう言ってくる、いや赤池は次の試合に出るしそれは・・・と渋りかけた桐仁を
蛍が制してこう返す。

「いいですよ、気合い入れてやって下さい。」

第６３番　名門の重責

「大丈夫です監督、行げます、やらせてください！」
ダチ高とは別の練習場でそう懇願するのは、１回戦を突破した三ノ矢実業のエース、
国宝候補『用恵国包』こと柏木　恵。脇にいる烏野　章『小烏丸』もしんどそうに
立ちながらも頷いて見せる。
「ダメだ、もう握力も尽きてるじゃないか、烏野もヒザが笑ってる・・負けに出るつもりうか。」
柏木の手を握りながらそう叱咤する三ノ矢の監督、森繁。
三ノ矢の誇る国宝候補の二人、柏木と烏野だが、今日ここまで既に個人戦込みで４番取っている、
稽古の申し合いや県予選とは次元が違う。全国の舞台で、負けたら終わりの常に崖っぷちの相撲、
いかに名門高の国宝候補とはいえ、楽な相撲など一番だってありはしない、特に小兵の烏野は
全てに長い相撲を強いられ、それでも個人戦は決勝トーナメントに駒を進めて来た。
そのツケがこれだ。柏木は団体１回戦でも国宝候補の菅と力相撲を強いられ、烏野もまた
土俵を回りながらかろうじて勝ちを拾うことが出来た、残りの余力を全てつぎ込んで。
「次はあの大太刀です、２年前の借りを返させて下さい、お願いします！」
柏木がなおも食い下がる。かつて国宝『数珠丸』を擁し全国の舞台に来たが、準々決勝で
『鬼丸』率いる大太刀に苦杯を嘗めさせられた、当時１年生だった彼らはその光景を覚えている。
因縁の相手に、先輩の無念を晴らすべく矢面に立ちたい、その覚悟で。

「大崎と馬場が信用できんか?」
その言葉に口を止められる。三ノ矢の控え選手二人も、決して実力的には遜色がない。
それでも納得いかなさそうな彼らに、馬場が肩に手を置いて話す。
「ま、野地さんの敵討ちは俺等に任せとげって、おめらは明日に備えて体を休めてけろ。」
その言葉にようやく頷く二人。
相撲名門校、三ノ矢実業。
相撲所である青森県の強豪、角界力士も何人も輩出してきたその伝統は、決して生徒や監督だけの
功績ではない。相撲部そのものに後援会があり、遠征費用の集金や設備の充実、相撲部屋への
出稽古や合宿の支援、もちろん今日の大会への出場も数多くの人々に支えられてやって来ている。
彼らはそんな期待に応える義務がある。勝つにせよ負けるにせよ、常に死力を尽くした戦いで
応援してくれる人たちに応えなければならない、名門の看板を背負うというのはそういう事なのだ。
柏木と烏野が食い下がった理由の一つがそこにある。国宝候補とまで言われた主力の自分たちが
疲れたから出られなかった試合で負けました、では矜持が許さない。まして2年前に負けた相手に
リベンジすることは、自分たちを支えてくれている人たちを喜ばせることが出来るだろう。
「負げんじゃねぞ!」
その柏木の言葉に、まがしとけ!と返す二人。

「ったく、試合前だってのに5番も取りやがって・・・行けるのか?」
海洋美波との稽古に熱が入りすぎ、息を継ぐ赤池に呆れ顔でそう言

う桐仁。
「んなヤワちゃうよなぁ、テツ！」
菅がそう返す。ちゃんと手加減はしておいたよ、と付け足して。
確かに赤池は体格の割には持久力があるほうだ。むしろ番数をこなしたほうが余分な力が入らず
実力をより出せる時もある。案外彼らはそんな赤池の性格を見越して胸を出したのかもしれない。
「三ノ矢には去年もウチの県代表（板野林業）が負けとるからな、赤池にカタキうって貰わんと。」
「おいおい、それじゃワイらのランクがどんどん下がるやないか。」
「俺がその分個人戦で勝つからええんや。」
そう言って笑う菅。その時に諸岡が大会役員から預かっているベルが鳴る、２回戦の時間だ。
「んじゃ、俺らは観客席で見とるから、頑張んなダチ高！」
引き上げていく海洋美波の面々に、赤池はぐっ、と右手を突き出す。
彼らも応えて手をかざす。
蛍は深々と一礼し、、こう付け足す。
「必ず勝ちます！」
―２回戦第１試合、東、大太刀高校。西、三ノ矢実業―
両陣営が東西に分かれる。と、お互いの座る位置を見て両陣営が、観客が驚く。
「三ノ矢、柏木と烏野を温存かよ、思い切ったな。」
「大太刀も『鬼切』を引っ込めたぞ、初戦で勝った松本も・・・ナメてるのか？」
両陣営の台所事情を知らない観客が口々にこぼす。
―先鋒戦。東、赤池。西、井口―
呼び出しにパンパン、と顔を張って土俵に上がる赤池。いつもより気合の入れ方が穏やかだが
本番前の稽古がほどよく『入れ込み過ぎ』を緩和している、いい状態だ。
―はっきよい―

強烈なぶちかましで当たる両者。両者がっぷり四つに組むと、体格に勝る井口の方が
がぶって出る、土俵際まで追い詰められる赤池。
が、それは勝利を焦る井口と、ほどよい稽古で、はやる気を抑えている赤池の構図だった、
俵に足を掛けると、赤池はぐっと腰を沈め、寄りを止める。
井口はここから吊りに出る、俵半個分の段差なら少しでも足が浮けば超えられる、との判断。
体を寄せ、胸を合わせて持ち上げようとする。
―ガチン―
瞬間、吊ったかと思った井口だったが、そこからまるで固定されているかのように吊り切れない、
赤池が相手の左足に足を絡め、浮かされるのを防いでいたのだ。
「アレは！」
沼田が思わず笑顔をこぼし、桐仁は『あの野郎』と歯を見せる。諸岡顧問もうんうんと
腕組みしたまま頷く。
「くっ！」
吊りを諦め、相手を下ろす井口。まだだ、土俵際に追い詰めているのはこっちだ、ここから
もう一度詰めれば・・・
その瞬間だった。お返しとばかりに赤池が吊りに出る。瞬間、対応が遅れた井口の腰が浮く。
慌ててマワシを引きつけこらえる、自分の１３５ｋｇの体重があれば・・・
次の瞬間、赤池が吼えた。
「ぬごおぉぉぉぉぉっ!!!」
適度に疲労していたからこそ、気合を入れて吐いた咆哮が筋肉にム

チを入れる。
観客席で見ていた菅が、海洋美波の面々が、ぐっと拳を握って腰を浮かす、そう、それだ！
完全に井口を吊り上げた赤池は、そのまま電車道で反対側まで走り、
吊ったままなだれ込むように土俵下に転落する。
―東、赤池の勝ち！―
「いよぉっし！」
ダチ高の面々が、新一年生の全国デビューに歓喜する。土俵の反対側では三ノ矢の面々が
苦虫を噛み潰す。
これで流れはダチ高に傾く。２陣戦、大峰は先の反省を生かし、攻めながらも勝負を焦らない、
チームメイトの松本に試合前に言われた言葉を思い出しながら。
『折角の全国大会なんだから楽しめよ。』
そう、焦って勝負を決める必要はない、むしろこの大舞台を一秒でも長く楽しめば
いいじゃないか、焦らず、奢らず、冷静に相手を見て攻め続ける。
ついに土俵際に追い詰める、その時大峰は初戦の二の轍は踏むまいと、ここで腰を割り直し
万全の体制に持っていこうとする。その瞬間、相手は大きく『うっちゃり』に出る。
１回戦の２陣戦でもこのうっちゃりで逆転勝ちを収めていただけに、同じ技をトレースする、
だが腰を割り直した大峰に対してはそれ自体が無力だった、すっぽ抜けたいなしは、
自分の体勢を不利にするだけだった。寄り切って勝利した大峰も、全国初勝利を手中に収めた。
―中堅戦。東、幸田。西、岩本―
「頼む、岩本ーっ！繋いでくれぇっ!!」
三ノ矢から悲鳴に近い檄が飛ぶ。もしここで負ければ敗北が決定

し、その後の試合は行われない、
折角全国に出られるはずだった控えの大崎と馬場が、出番すらなく終わってしまう。
幸いにして相手の幸田は大きくない、むしろ小兵に部類される選手。三ノ矢の小兵国宝候補
『小烏丸』こと烏野と毎日稽古している岩本にとっては与しやすい相手のはずだ！
「幸田のヤツ、あれ使うかな？」
「やると思うよ、出し惜しみする性格じゃないからね、彼は。」
桐仁の質問に蛍が答える。そう、彼には独自に編み出した特殊な取り口がある。
元ラグビー選手だったその特性を生かした、そして長身であまり太っていない岩本のような
相手にこそ効果を発揮する、沙田すらも倒したその戦法！
―はっきよい―
低く当たり、頭を付けて前傾姿勢で寄りに出る幸田。岩本は胸で受け止めるとそのまま
上から相手を抱え込む。
「（んだ？こんな前傾で・・・正気か？）」
多くの力士がそうするであろうように、岩本も叩き込みに出る。こんな前傾姿勢は
そうしてくれと言ってるようなものだから。
だが、幸田は落ちずに食らいつくと、そのままずいずいと押し進める。投げを躱し、
引きについて行き、いなしに足さばきで堪え、追いかける。
「三ノ矢はあんまし他校の偵察する方ちゃうからなぁ・・・」
観客席の一角でそう嘆いたのは鳥取白楼のマネージャー、天王寺咲だった。隣にいる七瀬も
うんうんと頷く。あの相撲を取られたら大事にいっては駄目だ、叩くなら乾坤一擲のつもりで
負けを覚悟で行かないといけない。負けない相撲を取っていたら、

アリ地獄にはまるように
体力を全て持っていかれる・・・
11分47秒後、その時は訪れた。凌いでは押されるをひたすら強いられた岩本は、ついに疲労から
足を滑らせ、土俵に尻から落ちてしまう。ほぼ同時にヒザをついた幸田も、息絶え絶えに
手をいて呼吸を荒げる。
―東、幸田の勝ち。以上3―0で大太刀高校の勝ち！―
会場が歓声に沸く。ダチ高の全員がガッツポーズを決め、海洋美波の面々がおっしゃぁ！と
拳を合わせる。
顔色を無くす三ノ矢実業の面々。国宝候補の両エースを出せずに負けた、控えの馬場達を
試合に出す事すら叶わなかった、何より自分たちを支えてくれて来た人たちの期待を裏切った・・・
そんな彼らにも、三ノ矢の応援団は温かい拍手を送る。試合は完敗だったが、それぞれが
全力を尽くした試合、特に最後の長い長い死闘は、両選手の健闘をたたえるべき試合でもあった。
「へっ、いいねぇ東北は情が深くて。」
言葉に似合わぬ笑顔でそう毒づいたのは石川代表、金沢北高の主将、藤田だ。
2年前、彼らはなんと団体戦初戦で敗退し、後援会や地元の協力者たちの散々な批判に晒された。
だが翌年、全国制覇を成し遂げると彼らは途端に手の平を返す、むしろ屈辱をバネにして
よくやったなどと取ってつけたような事を平然という者までいた。
現金なものである。
別の所から、その拍手と選手たちを羨望の眼差しで見つめる男がいた。
そう、堂々と全力で戦ったなら、見る人は認めてくれるものだ、そ

れが勝負なのだから。
だが、それすら出来なかった自分、その汚点はもう二度と取り戻すことが出来ない、
後援会からの支援を打ち切られ、地元の恥と罵られ、名門である相撲部廃部の危機にまで陥った。
すべては自分の、あの不甲斐ない相撲のせいで。
―大将戦、決まり手『睨み出し』―

第６４番　振るいにかける

花道から通路に移り、割り当てられた観客席に戻るダチ高の一同を、同じスペースにいる
千葉県勢の個人戦出場者たちが出迎える。
「やったな、お互い明日まで生き残ったなぁ。」
神崎と、大河内と、そして沙田とハイタッチしつつ席に着く一同。
そう、団体のダチ高も
個人戦代表の３人も明日以降に生き残ることが出来たのだ。
「さて、感慨に浸る暇は無いぜ。」
桐仁の言う通り、眼前では早速明日のダチ高の相手を決める一戦が行われようとしている。
―東、広島　宮島海産業。西、群馬、館林南―
共に全国初出場、そして国宝候補を擁している。いずれが勝つにしてもダチ高にとって
情報収集が非常に重要になる一戦だ。
試合は一進一退の攻防を見せ、２―２で大将戦にもつれ込む、奇しくも国宝候補同士の対決。
―大将戦。東、古淵原。西、内山―
「『三原正弘』と『村正』か、どっちも個人戦は１勝２敗で敗退してるんだよなぁ。」
国宝候補とはいえ、激戦区の個人戦を誰もが勝ち上がれるわけではない。
国宝に敗れた者もいれば、無名の選手に不覚を取った者もいる、相撲で勝ち上がるというのは
ある意味綱渡りであるとも言えるのだ。
「古淵原選手は沙田選手と福井の朝倉選手に負けてますね、いずれも出し投げ系の技で。」
千鶴子がメモを見ながらそう語る、１８４ｃｍ１５６ｋｇのその巨体は今日残念ながら、出し投げを
得意とする二人の絶妙のタイミングの投げに屈していた。初舞台

の全国で緊張もあったのだろう。
「内山選手は福岡の黒田選手と沖縄の玉城選手のぶちかまし一撃で土俵を割っています。」
確かに、内山は１８２ｃｍ８９ｋｇの、相撲取りとしては細身なタイプ、重量級の選手に体ごと
ぶち当たられると相性的に良くないだろう。
「ただ、残りのひと試合、そして団体一回戦で・・・相手を『壊して』います。」
千鶴子の一言がダチ高のメンバーに冷たいものを走らせる、それに続いたのは柏実業の神崎だ。
「もろ手突きやかち上げからの突っ張り連打で相手をＫＯする、西上の葉山に似たタイプだ、
気を付けな。」
―はっきよい―
立ち合い、両者は意外にも頭からぶつかる。古淵原にとって怖いのは頭を起こされてからの
顔面急所への張り手だ。アゴをしっかり引きつつ、細身の相手を捕まえにかかる。
対する内山は相手の右下手を左手で抱え、出し投げ気味の小手投げに行く。
「(同じ技で一日3回も負けるか、ナメるな!)」
古淵原は素早く体を回し小手投げについて行く。変わった相手の方向に目をやり、その姿を捕らえる。
その瞬間!
―ビン!バチィ!ベチィッ!ゴンッ!―
内山が至近距離から、空いた右手で古淵原の顔面を4連打する。出し投げで変わった相手を
顔が追いかけたその一瞬を狙って、アゴ、人中、左眼球、そしてまたアゴに小さく、かつ体重を乗せて。
どどぉっ、とその場に崩れ落ちる古淵原。行司の勝負ありの声と同時に、宮島海産業の面々が

心配そうに古淵原に声をかける。古淵原は手をかざして『大丈夫だ』のジェスチャーを見せるが
もう片手で顔面を抑え、立ち上がることが出来ない。
車椅子が呼ばれ、仲間に抱えられて退場する古淵原、その後でようやく勝ち名乗りが上げられる。
―西、内山の勝ち―
「日本拳法か！」
ダチ高顧問の諸岡が思わず叫ぶ。内山のあの距離の短い、体の中心から突き出すような掌打は、
日本拳法の『直突き』に酷似していた。
「日拳かよ・・・」
そう嘆いたのは沙田の横にいた荒木だ。総合格闘技目指す彼にとってはお馴染みの格闘技、
昔から総合格闘術を磨いてきた、相手を壊すことに特化した恐るべき格闘技。
「持ち主にすら不幸を呼ぶ『妖刀』とまで言われる刀、『村正』とはよく言ったものです。」
歴史に詳しい千鶴子がそう解説を入れる、単に強いだけではない、危険な相手だ、アレが
次戦の相手か・・・
「(三ツ橋や陽川、松本のような間合いを取る相撲では危険だな、当てるのは大峰か赤池あたりが
理想か。)」
桐仁がそう分析する。勝つ事も大事だが、ケガをしない事、壊されないことも考えなければ。
勝者と敗者をふるいにかけるべく団体戦は進む。強豪校が、無名高が、かたや3回戦に
名乗りを上げ、こなた国技館から去っていく。
―東、埼玉代表、栄大付属。西、大阪代表、堺像仙台付属―
全国有数の強豪校と、全国常連を破って出て来た新鋭高の対戦、堺像仙台付属は先鋒の

国宝候補、新開が白星を挙げ、２陣の真島もそれに続く。いきなり追い詰められる栄大。

だがここから栄大の反撃が始まる。アメリカ・ハワイからの留学生、ジョン・Ｊ・オーリス（１９５ｃｍ１２５ｋｇ）がその体躯を生かした当たりからのもろ手突きで相手にマワシを触らせずに

土俵から押し出すと、春の新人戦でダチ高の沼田を一蹴した１年生、久我が電車道で相手を下す。

大将戦は共に国宝候補、滝沢　繁『繁慶』と桑原　隆司『桑山光包』の対戦。

「お！滝沢の出番か、あいつも今や国宝候補だもんなぁ・・・」

１年前、春の新人戦で陽川、大峰、そして松本と熱戦を演じたライバル滝沢。今や彼も

全国の舞台を幾度も経験し、国宝候補に挙げられるまでの強さを身につけていた。

両者がぶつかり、差し手争いに入る。ここで場数の違いを見せた滝沢は右四つ十分の体制を

先に作ると、そのまま一気の電車道で勝負を決めてみせた。正統派の強さに思わずため息が出る会場。

ただ、蛍はそんな栄大のコーチ席に座っている『彼』、栄大付属の現主将を残念そうな顔で見る。

「（狩谷君、相当悪いんだろうな、もう選手としてはダメなのかな・・）」

かつて蛍が模範とした『潜る相撲』の使い手、体重別の世界選手権を制した彼の姿は

あれ以来、今日まで土俵の上で見る事は叶わなかった。

盤石だったのは、かつて『絶対王者』と呼ばれた鳥取白楼だ。秋田の男鹿学園を相手に

先鋒で出たモンゴル人、バトムンフ・バトバヤルが組み際に投げで崩してからの２枚蹴りで

相手を横倒しにする。国宝級のその実力に会場も思わずため息。

２陣に座る国宝『備前長船』舟木はなんと立ち合い、腕をクロスさ

せてのかち上げを放つ。
「じゅっ、十字かち上げ!?」
ダチ高の面々が驚く。蛍が使うその技は、パワー不足な彼がそれを補うために両手で
カチ上げるべく編み出した技なのだ。両手の分威力こそ上がるが、腕をクロスさせているため、
その後のマワシを取りに行く動作が遅れるデメリットが・・・
次の瞬間、舟木は左手で相手の左手首をつかみ、右手で相手の首根っこを押さえる。
そしてそのまま体を躱し、左手で相手を巻き込みながら右手で抑えた相手の頭を押さえつけて
土俵に薙ぎ倒す。クロスさせた腕からごくスムーズに繋いでいく変形の巻き落とし。
「・・・凄い。」
思わずうなる蛍。自分が見せた変形のかち上げからの繋ぎ技を、その日のうちに考えて
形にしたと言うのか・・・。
―中堅戦。東、上月君。西、北谷君―
ここで男鹿の国宝候補、上月　卓也『月山』の登場。１８５ｃｍ１２５ｋｇのその体躯に対し、
対する北谷も遜色ない体つきだ、さてどうなるか。
―はっきよい―
当たった直後の上月の右かち上げはするりと躱される、続いて取ろうとした下手は手首を
掴まれて止められ、背中越しに取りに行った右上手は腕を返されて浮かされる。
「（読まれてる・・・全部、コイツ!）」
そのまま寄りに出る北谷に対し、せめてもの抵抗で浮かされた腕で首投げを放つ上月。
だがやはりそれを読んでいたかのように首を引っ込め、相手の技をすっぽ抜けさせた北谷は

そのまま相手の背後に付いて寄り切る。
「（さすが、兄貴の後継者って呼ばれるだけのことはあるなぁ・・・）」
白楼のマネージャーリーダー、天王寺　咲がそう心で呟く。自分たちが収集してきた各校の
データを、誰よりもよく研究し対策を施すデータの鬼、北谷。
元々彼は白楼内では弱かった。強くなるために選んだのは、入学当時の主将である
天王寺獅童のデータ相撲を身につける事だった。
様々な選手のクセ、攻め手から成長まで全てを理解し、研究し、各選手ごとに対策を考える。
そのために2年生の時期をマネージャーとして費やし、相撲を外から見ることで相手を知り、
選手に返り咲いた3年生で見事白楼のレギュラーの座を勝ち取って見せたのだ。
「どう思う?」
観客席で千鶴子が柳沢に問う。見ればわかる、彼もまた相撲を『外から』見る感覚の持ち主。
柳沢は初めて彼女が言う『相撲を外から見て強くなる』ということを理解できた気がした。
あれが、自分の目指す姿だと。
本日の最終戦、福岡の立花寺と京都の京都右京の試合。
副将戦までもつれ込んだその試合は、国宝『圧切長谷部』こと黒田が、国宝候補『不動国行』
大山　一二三と対戦。
黒田のぶちかましを２４５ｋｇの体重で受け止める大山だが、それでも『圧切』は止まらない。
体重差も何のその、相手の胸に頭を付けた黒田はそのままじりじりと相手を押し込む。
思わずもろ手突きで距離を取ろうとした大山に再度突進、上半身ごとのけ反らせると
そのまま四つに組んで土俵を割らせる、刀銘の通り、不動の相手を

見事圧切ってみせた。
勝利を決めた黒田、土俵上でも、土俵を降りてからも、そこに笑顔は無かった。

インターハイ初日はこうして終了した。明日以降のさらなる激戦に備えて選手たちは
各々の宿で一時の休息に入る。明日勝つため、頂点を目指すために

―

第６５番　真夜中の邂逅

―カシュッ！―

深夜１２時、ホテル内の自販機コーナーでプルタブの栓を抜き、オレンジジュースを
乾いた喉に流し込む。
「ふぅ・・・」
ようやく一心地ついた柚子香は、備え付けのベンチに腰を下ろす。
「（みんな呑気っていうか・・よくあの相手と相撲取る気になるわね。」
明日の対戦相手、群馬の館林南のエース内山、国宝候補『村正』。日本拳法をベースにした
打撃技で相手を『壊す』相撲を取る選手。あの危険な相手にもし蛍が、相撲部の誰かが
壊されたりしたら・・・
「相撲は格闘技だから。」
「別に反則じゃないしなぁ・・・」
「五條さんもああいう相撲だったしね、まぁ気をつけるよ。」
ダチ高相撲部の皆は特に気にも留めない。だが端から見ている分にはやはり心配だ。
この時間に彼女が起き出してここに来たのも、誰かは知らないが壊される夢を見て目が覚めたから。
ポケットからお守りを取り出す柚子香、買った神社で思い出すのは今年の正月に蛍と一緒に引いたおみくじ。
運勢こそ『凶』だったが、その神社に祈願したのは『皆にケガが無い様に』だった。
やっぱ私は女子なんだな、とお守りを握りしめながら思う。
と、自販機の脇にあるエレベーターが。ちーん、という到着音を立てて停止し、ドアが開く。
中から出てきたのはいかにも相撲取り然とした大きな体の男。ダチ高じゃない、違うジャージだ。
他校の選手もこのホテルに泊まってたのかな・・・って！この人、

知っている!!
「黒田選手!立花寺高校の・・・国宝『圧切長谷部』!!」
黒田は目を丸くして柚子香を見る、彼女もジャージであること、自分を知っていることから
他校の相撲部のマネージャーか、とあたりを付けて軽く会釈する。
「アンタも相撲部の・・・マネージャーはん?」
「あ、いえ。大太刀高校相撲部員の堀柚子香、一応女子選手です。」
会釈を返す柚子香に、少し険しい顔をして固まる黒田。が、それも一瞬で、すぐに自販機から
麦茶のペットボトルを買い、取り出すと、柚子香とは離れた場所に腰を下ろす。
「いいんですか?明日に備えて寝なくて。」
柚子香のその質問は至極当然だった、彼は個人も団体も明日以降も試合がある、夜更かしして
いい立場では無いはずだ。現にダチ高相撲部の面々は間違いなく高イビキの最中だろう。
「嫌な夢を見てな・・・目が覚めたんや。」
そう言ってペットボトルを開け麦茶をあおる。自分と同じだな、と思いつつ柚子香は
その横顔を見て少し違和感に囚われる。
彼の顔は雑誌で何度も見た。だが実際に会ってみるとイメージしたより子供っぽい表情、
それに違和感を与えているのは、うっすらと盛り上がった額に刻まれた無数の傷。
特にまぶたまで届く無数の傷跡が、そのベビーフェイスと相反して痛々しさを感じさせる。
おっと、敵高同士がこんなトコで話してるのはいけないかな、と腰を上げる柚子香。
「じゃあ、失礼します。」
そう会釈して去ろうとした柚子香に声をかける黒田。
「三ツ橋君・・・『蛍丸』と呼ぶべきかな、調子良さそやね。」

ぞわり、と背中に悪寒を感じて柚子香は立ち止まる。それは別に黒田から放たれた訳ではない、
『黒田』が『三ツ橋』の事を気にかけていることに、既視感と黒い感情を予感させたのだ。
かつて蛍が話していた、蛍と同じ傷跡を背負って尚、相撲を取る二人―
柚子香は振り向いて、おかげさまで、と返す。そして立ち尽くす、その後の話題を期待して。
黒田はそんな彼女を見て、話を聞いてくれそうだと判断する。
「今日のヤジは酷かった、あれで平然と相撲を取る彼の『心』は強い、本当に。」
俯いてそう呟いた後、柚子香に向き直り、真摯な顔で問う黒田。
「彼は、2年前の事を、引きずっとるか?」
公式戦全敗、それだけなら弱小の相撲部なら無くもないだろう。だが彼のいたチームは
インターハイ団体戦で全国優勝したのだ。そのレギュラーでありながら、出場した全ての試合で
敗北を喫した、その光景を黒田もまた目の前で見ていたのだ。
視線を逸らす柚子香。そう、その傷跡は今も蛍の心中に深く刺さっている。小兵の彼が
ケガを恐れず巨漢と平然と相撲を取るのも、どこか自虐的な顔を見せるのもそのせいだ。
相撲と言う危険な世界に身を置くことで、まるで自分を罰するように。
「そうか。」
その態度を肯定と判断した黒田はそう呟く。少しの間の後、柚子香はこう返した。
「黒田さんは、どうなんですか?」
その問いに黒田はふぅ、とひと息ついて頷く。知っていたか、理解してたのか、この女子は。
こんな小娘がか、ありがたい、誰もが知っているなら、俺はますま

す縛られる。
「今の自分は、自分の時間は・・・あの時から止まっとっとよ。」
２年前のインターハイ団体準決勝、立花寺は０―５で栄大付属に敗れた。だがそれだけなら
単純に実力不足、相手の方が強かった、で終わっただろう。
―大将戦、決まり手『睨み出し』―
期待の一年生としてレギュラー入りし、大将を任された黒田は、対戦相手の国宝『草薙』に、
その静謐なまでの圧倒的な威圧感に、組み合う事すら拒んで土俵を割ってしまった。
福岡に帰った彼を待っていたのは、当然のように批判と嘲笑と、そして罰則であった。
『相手にビビって何もせずに逃げた?何ねそれ。』
『俺、実費で応援に行っとったんぜ!ったく恥晒しがぁ。金の無駄ばい。』
『九州男児なら強敵にこそ挑むもんだろう!刃皇だろうが雷電だろうが野見宿禰だろうと!』
ＯＢや後援会は特に容赦が無かった。伝統ある立花寺高校相撲部の名誉を汚したとして
黒田の退部、退学はおろか相撲部の廃止まで要求するものまでいたのだ。
『臆病者のいる相撲部に支援をする気はない!』
相撲部の後援会は解散し、部は事実上休部状態に追い込まれた。部室は閉鎖され、
他の有望な選手は他校への転校まで斡旋されていた。
翌日、黒田はひとり校庭で、ポプラの生木に頭を打ち付けていた。木のささくれで額は
血にまみれ、胸まで赤く染めている。そんなことを気にも止めずに、鉄砲柱にしているように
ぶちかましを続ける。
その光景を見る周囲のギャラリーは冷たかった。なんだよ、学校や

後援会に対するアピールか？
今さらそんなことしたって意味無ぇよ、木がかわいそうじゃない？
カッコつけたいんでしょ、と
女子にまで嘲笑される始末。
「おいクロ！何やってんだよお前!!」
騒ぎを聞きつけて飛んできたのは同級生の相撲部員、伴吾郎だった。比較的仲の良かった彼に
黒田はこう返す。
「俺は、この樹をへし折って、素行不良の生徒として退学する。俺がいなければ相撲部は続けられる。」
彼が頭を打ち付けているポプラの樹は、５年前に相撲部後援会から寄贈されたものだった。
すでに体長５ｍ、鉄砲柱より太くなっているその木をぶちかましでへし折るなど不可能だ。
「バカかお前は、そんなことして何になる！」
体のいい自己犠牲などやめろ、そんなことしたってお前に何の得もないだろう、と。
そんな伴の反論は、次の黒田の一言によって覆される。
「俺は、もう一度『草薙』の前に立つ。もう二度と逃げない、引かない。」
１か月、２か月、黒田はぶちかまし続けた。本来学校の寄贈品に対するその暴挙、だが
学校側からも後援会からも、彼の行為を止める者は誰もいなかった。
彼の意思を、真意を、伴を通じて聞いていたから。
相撲部員は１、２年も、進学を控えた３年生も、部の存続の署名活動に奔走していた。
栄大に電車道で惨敗したのは自分達だって同じだ、俺たちが不甲斐ないから１年坊のクロに
余計プレッシャーをかけてしまったんだ、と説得して回った。
もう３か月、放課後になると血まみれになりながら生木にぶちかましを続ける黒田、

そんな彼を嘲笑する者はもう学校にはいなかった。
やってみろ、頑張れ、成し遂げろ、彼の周りはいつしかそんな思いに包まれる。
１００日目、樹は斜めに傾いていた。しなりのある生木を折るなど不可能だが、日々の黒田のぶちかましと、その度に揺れる樹の先端が少しずつその根を起こし始めていたのだ。
１０５日目、もう何度目になるか分からないぶちかましを受けたその樹が、音を立てながらゆっくりと傾いていく。
―ドッシャ！ザァァアン―
倒れた樹の音と葉っぱの潺は、周囲に集まったギャラリーの、校舎から見守る生徒の歓声と雄叫びにかき消された。
「うぉぉぉぉぉぉぉっ!!!」
黒田はそのまま職員室に向かう。彼を待っていたのは校長ほか立花寺の首脳陣と、元後援会の偉いさん達だった。
「自分は、学校の備品を壊しました。罰則は甘んじてお受けします、ですが、どうか相撲部は・・・」
深々と頭を垂れ、そう懇願する。自分はどうなってもいい、だから、せめて相撲部は救いたい、
この不甲斐ない、罪深い自分から。
「何を壊したと言うのかね？」
涼しい顔でそう告げる校長。そして校庭の方を指差す、目線を移すとそこに見えたのは
嬉々として倒した樹を起こして植え直す大勢の生徒たちだった。
園芸部員の指揮の元、ロープで樹を起こし、スコップで手際よく穴を掘って根を埋める。
「・・・あ」
黒田は知らなかった。この3か月余り、相撲部の一同が彼にもう一

度チャンスを与えてほしいと
何度も職員室に嘆願に来ていたのも、生徒はもちろん、自分たちを捨てた後援会のＯＢ達にまで
署名を願いに何度も出向いていたことも。
それに応えて署名をした大勢の人々が、この日を待ち望み、この日の為に備えていたことも。
黒田の成した偉業に応えずして、何が九州男児、九州女児か、と。
「相撲部の名誉を取り戻したいのだろう、君は。」
その校長の言葉に、瞼に熱いものを感じながらこくりと頷く。
―ならば倒せ、『草薙』を―
「・・・はいっ。」
ぼろぼろと涙を流しながらそう絞り出す黒田。この時から彼は縛られた。
逃げない、引かない、いつの日か草薙にリベンジする、その時まで。
『圧切長谷部』の異名と共に。

柚子香は呆然とその話を聞いていた。相撲名門校だからこそ背負うその『業』の深さ。
彼が引かない理由、国宝と呼ばれるまでになっても、勝利に笑わないその意味を。
彼が払うべき闇は、蛍部長よりも遥かに深く、濃い事を。
黒田は空になったペットボトルをゴミ箱に捨てると、柚子香に向かってこう告げる。
「俺は、草薙を倒すという目標がある、それで2年前の清算が出来ると信じているよ。」
ひと呼吸おいて彼はこう告げる。
「だが、三ツ橋君はどうすればいい？何を成せば彼の過去は清算できるんだ？」
あ、という顔で立ち尽くす柚子香。そう、確かに黒田の闇は深い。
だが彼は大相撲に進んで
草薙を倒すという明確な目標がある。

だが蛍部長は？どうすれば2年前の『全国制覇したチームで公式戦全敗』の汚名を払える？

首藤に勝つ？駄目だ。あの試合で白楼に負けたならともかく、蛍の負けを込みでも勝っていたのだ。

今さら首藤にリベンジする意味すらない。

そう、蛍にその『汚点』を消す方法は存在しなかった。

彼の人生が終わるまで、それはずっと背負っていく十字架―

エレベーターに乗る直前、黒田は柚子香にこう話す。

「彼に伝えてくれ、是非一度戦ってみたい、だから団体決勝まで勝ち進んでくれ、と。」

静かに閉まるエレベーターを見送って、柚子香はやっとこの言葉を絞り出す。

「蛍部長・・・あなたは、何で相撲を取ってるん、ですか・・・」

第６６番　国宝候補『陽鉈（ひなた）』？

―先鋒戦。東、陽川。西、内山―

大会二日目のオープニングカード、大太刀ｖｓ館林南。土俵に上がる二人を見つつ、桐仁は

頭を抱えていた。

「（何でだよ、内山は県予選からここまでずっと中堅以降だったのに、なぜよりによって

先鋒で出てくるんだよ、今日に限って！）」

国宝候補『村正』こと内山。日本拳法をベースとした打撃系の技で相手をＫＯする

相撲を取る彼に、桐仁は一気の相撲を得意とする大峰や、密着して打撃技を出させない

相撲を取る赤池を想定して中堅、大将に配置して臨んだ。

だが先鋒で出て来た彼に対するダチ高は、中間距離での腕力相撲を得意とする陽川。

単に相手との取り口が悪いと言うだけではない、気の強い彼は多分相手の打撃にも

真っ向勝負を挑むだろう。勝敗ももちろんだが大怪我をされたらコトだ。

なんとか無難に、という桐仁の願いは、土俵上の陽川のそれはもう闘志にあふれた笑顔に

消し去られる。

「（願ってもないぜ、国宝候補『村正』を喰って、俺が国宝に名乗りを上げる！）」

大相撲に進む目標を持つ彼にとって、強敵との対戦とその勝利は何より価値がある、まして

昨日は全国初勝利を逃した彼にとって、ここは是が非でも負けられない一番。

「内山ー！ジャンケンに勝って先鋒で出てるんだから負けんじゃねぇぞーっ！」

土俵の反対側から聞こえた声援に桐仁ががくっ、と体を傾ける、ジャンケンかよ！

それに答えて『俺が負けるかよ』という不敵な顔を対戦相手、陽川に向ける。

土俵の東西で睨み合う両者。

―手をついて―

陽川１８９ｃｍ１００ｋｇ、内山１８２ｃｍ８９ｋｇ。似た体躯ながらわずかに陽川の方が大きい。特に

腕の長さで勝る陽川に対し、内山はその立ち合いを想定する。

「（俺の相撲は知られてるはずだ、ならばこいつはリーチを生かして張って出るか、もろ手突きで

突き放してくるか・・・）」

―はっきよい―

立ち合いと同時に、両者肩と肩でぶつかる。お互いが突きを警戒していただけに予想外の開幕だ。

「いい度胸じゃねぇか！」

内山は半歩後退し、陽川の顔面を視認できる距離を取ると、胸の前に構えた両手から張り手を

繰り出す。日本拳法で言う『直突き』の掌底バージョン！

だが陽川は自分の顔の前に左手を構え、内山の右手突きを捕まえると、そのまま片手四つに

持っていく。ぐぐっ、とお互いの手に力が籠る。

「くおぉぉぉっ！」

「すあぁぁぁぁっ！」

腕を、指をぎりぎりと軋ませながらの力比べ、お互い引かない、互角だ。

「おいおい、陽川と互角の腕力かよ！」

ダチ高の面々がマジかよ、という顔で驚く。

「うっそだろー、内山の握力に対抗するとか、化け物かよ！」

館林南の選手たちも、今まで見なかった互角の手四つに思わず立ち上がる。

１０秒ほど膠着状態が続いた時、内山は残った左手で陽川の肩を掴む。そして伏せていた上半身を
起こすと、そのまま額を相手の顔面に叩きつけた。
―ガッツゥンー
もろに頭突き、というかヘッドバットが炸裂し、陽川の顔がハネ上がる。日拳使いならではの
えげつない攻撃は、実はそれが初動でしか無かった。次の瞬間、身をひるがえした内山は、
手四つに組んでいた陽川の左手を巻き込み、一本背負いに持っていく、乱暴ながら合理的な連携！
「行くかぁぁぁっ!!」
陽川は瞬時に腰を割り背負いを止めると、そのまま後ろマワシをわし掴みに取り、片手吊りに
持っていこうとする。
「くっ！」
内山は背負いを諦め、手を離して向き直る。スキのある動きにもかかわらず追撃が来なかったのは
先ほどの頭突きのダメージが残っていたからなのだろう、現に陽川の鼻からは血が垂れている。
追撃の張り手を繰り出す内山に対し、陽川はアゴを引いて額で受け止め、再度体ごと突進する。
肩で押し合う体制になった所で、行司が『待った』をかける。陽川の鼻血を止める為だ。
足の位置を確認し、両者を分ける行司。陽川は貰ったティッシュを鼻に詰めながら相手を睨む。
「（凶悪なだけじゃねぇな、連携や技がいちいち理にかなってやがる。）」
内山もまた、相手のその闘志と反応速度に感心する。
「（あの背負いを止めるか、腕力も負けん気も強いが、反射神経も相当だな・・・）」
再度肩で押し合った状態に戻される両者、行司が両者の背中をぱ

んっ！と叩く。試合再開だ。
同時に陽川は左を差し下手を取る。その動きを見て取った内山は、その手を巻き込んで
投げに行く、想いきり体を開く出し投げ気味の小手投げ！
「あれは！」
蛍が叫ぶ、昨日の試合でも見せたその小手投げは投げ切るためのものではない。
相手との距離を開け、その隙間から直突きを顔面に放つための前動作。小手を巻かれている以上
下がる事もかわす事も出来ない。
「もらった！」
内山が至近距離から顔面目掛けて突きを出す。顔面を景気よく張ったその掌打がバチィン、と
痛々しい音を響かせる。
だが2発目は無かった、陽川は突きを避けもせず、逆に右手で相手のアゴに強烈なかち上げを
放っていたのだ。顔面をハネ上げられた内山はバランスを崩し、追撃の体制を失う。
彼が再度腰を割るスキがあったのは、今度はダメージのせいではない。陽川は小手に巻かれた
左腕を巻き替え、逆に相手の右手を小手にかかえ込む。
その手の平が、相手のアゴを打ち付けた右手の二の腕をしっかりと掴んだ。
陽川必殺の型の完成に、ダチ高全員がぐっ、と拳を握る。
「鉈っ！決まった!!」
相手の右肘を極めながら、右手を強烈にノドに押し付けて相手を一気に押し込む。
土俵の端から端へ、2本のレールが伸びていく、電車道！
押されながら内山は感じ入っていた。おう、見事な攻めじゃねぇか、ノドとヒジ関節の2点を
攻めながら押してくるとは、相撲侮れじ！

ならばと残った左手を振り上げ、相手のこめかみに打撃を放って―
「勝負あり！」
内山の足が土俵を割った時、彼の左手は陽川の側頭部で止まっていた、いや、正確には
止めていたのだ。
「学生相撲じゃ、横から、張るのは、反則だった、よな・・・」
ノドに手を当て、しんどそうにそう言う内山に、陽川はへっ、と笑って背を向け、仕切り線に歩く。
―寄り切って東、陽川の勝ち―
拍手で迎えられる陽川を記者席で見ながら、相撲記者の名塚は唸っていた。
「陽川君・・・国宝認定しようにも『鉈』のイメージが強すぎて刀剣銘が思い浮かばないじゃない！」
横でそれを聞いた宮崎がぷっ、と吹き出す、別にマスコミが好き勝手に付けてるんだし、鉈でも
いいじゃないか、と。
２陣戦で出たのは蛍、相手は１３５ｋｇの体重を誇る二ノ宮。立ち合いから張って出る蛍に対し
二ノ宮はアゴを引き、張られながらも一気に蛍を土俵際に追い詰める。
「（なんだその優しい張り手は、内山に比べりゃナデられてるようなもんだ！）」
と、蛍は相手の両肩に手を添え、上半身をぐっ、と弓のように反らせる。
「（頭突き!?これも内山のマネかよ、ナメてんのか！）」
吹き飛ばすつもりで額に力を込めた二ノ宮の前で炸裂したのは、頭突きでは無く猫だましだった。
瞬間するりと懐に潜った蛍は、そのまま両前ミツを引くと、全身の力で反り返る。
「居反り！」
そのままフロントスープレックスよろしく反り技を放つ蛍。

アゴを引いて相手に突進し、頭突きに備えて前傾姿勢が増していた二ノ宮に、この反り技を
残す術は無かった。
鳥取白楼の選手席で、舟木がこの取り組みに嬉々として拍手している。
「すっげぇなアイツ、『手玉に取る』って表現がピッタリだぜ！」
確かにあの張り手も、頭突きのモーションも、明らかに相手にそれと意識を向けさせるための
前動作だった。意識をそっちに振り、完全に逆を取る。『変化』という名の蛍丸スペシャル。
これで2―0、大太刀の3回戦突破にリーチがかかる。だが中堅の赤池は戦いを優位に進めながらも
土俵際での切り返しに敗れる。続く松本は立ち合いからの、相手の大型選手のまさかの引きに
ばったりと落ちてしまう。
これで2―2、大将戦にもつれ込んだ試合は大峰が怒涛の攻めと、土俵際の油断のないツメで
無事勝利を納め、準々決勝に進出を決めた。
―3―2で東、大太刀の勝ち―
辛勝を収めたダチ高、割り当てられた席に戻り次の試合に注目する。準々決勝の相手は
果たしてどちらか。
―第二試合。東、埼玉代表、栄華大付属。西、石川代表、金沢北―

第６７番　栄大からの挑戦

金沢北の主将、藤田が小さく投げを打って、栄大付属の怪物一年生、久我の体を崩すと
そのまま半身の相手を一気に寄りに出る。
「くっ！」
ここまで一年生とは思えぬ堂々とした相撲で勝ち上がってきた久我、その１３０ｋｇの体躯が
わずか９０ｋｇの藤田に押し込まれていく。
「（一年坊、お前の相撲はここまで見せて貰った、正対して寄れば強いが崩されたら脆いと思ったぜ！）」
藤田はここで絶妙の判断を下す。久我の足があと１０センチ程で俵にかかるという所で
寄りから体を躱して出し投げ、つまり引き技に移行する。
「んなっ!?」
寄られていた久我は自分の足が俵にかかるのを待っていた。その瞬間こそ踏ん張る力が増し
相手の寄りを止めることが出来る、また相手が出し投げに来るのも、自分が踏ん張って
押せなくなったその瞬間だという思考しか無かったのだ。
現に投げに入ったその瞬間も、久我の意識は自分の両足が俵に触れるのを待っていた、
その直前に体が前に流れ、成す術なく前方に放り出される。
―ゴロン―
久我の巨体が土俵に転がる。ダチ高の面々が、出し投げを得意とする沙田や福井の朝倉が、
そして会場内の選手や相撲ファンが一斉に『上手い！』と呟く。
「・・・くそっ！」
土俵に拳を当てて悔しがる久我。一年生から名門、栄大付属のレギュラーを勝ち取った彼だが
ここにきての公式戦初黒星。

春の関東新人戦を制し、2年前の久世草介の再来かと言われた彼の快進撃もここで無念のストップ。
「久我！最後までシャキッとしろ！」
土俵下からそう檄を飛ばしたのは栄大主将の狩谷だ。三木監督の隣に座り、礼を尽くせと
下級生に指示を出す。それに応えて身を正し、礼をして降りる久我。
すんません、と頭を下げる久我に次は勝てよと肩を叩く狩谷。
―以上、3―2で栄大付属の勝ち―
一進一退となった名門同士の対決は、副将戦で滝沢が3勝目を挙げることで決着を見た。
最後に藤田が意地を見せたが、昨年覇者の金沢北はここで国技館を去ることになる。
「栄大が勝ったか。」
「僅差でしたけどね、明確なポイントゲッターがいる分、栄大に分があったかな。」
桐仁と蛍の会話に沼田が割って入る。
「でも久我もポイントゲッターでしょ、藤田って人あの体でよく久我に勝ったなぁ・・・」
春の新人戦では久我に成す術なく完敗した沼田もアゴに手を当てて感心しきりだ。
この大会では出場できない沼田にとっても、見ることもまた血肉になるだろう、と
笑顔で顔を見合わせる蛍と桐仁。
「さぁ、栄大対策に行くぞ！」
桐仁の号令一下、ダチ高の選手はみな立ち上がり、練習場に向かう。
千鶴子も続くが
顧問の諸岡と柚子香、柳沢、小林は情報収集のためその後の試合も見続ける。
と、諸岡のスマホが鳴る。誰だ?とポケットから取り出し、画面に映る着信名を見て

思わずえっ、と驚く。
〃栄大付属　三木監督〃
練習場にて、桐仁はタブレットで栄大付属の試合を流しながら皆に指示する。
「栄大もここまでオーダーをずいぶんいじっている、全員が誰と当たってもいい様に
相手の情報をよく把握してくれ。」
先の3回戦でもオーダーを外されたダチ高としては、誰を誰に当てるという考えを止め
相手全員に勝つイメージを各人が持つという対策に切り替えていた。
と、そこに試合を見ていたはずの諸岡が入ってくる。
「あれ！先生、どうしたんスか？」
「試合場で何かありましたか？」
不思議がる面々。諸岡はてっきりのまま各校の情報収集に当たっているものだとばかり
思っていたが、わざわざ来るという事は、何か大会の進行に関わる事か？と。
そんな彼らに諸岡はスマホをかざしてこう言った。
「情報が来たよ、次の栄大付属戦、先鋒で来るのは主将の狩谷君だ！」
ええっ！何で？という言葉が漏れる。狩谷はずっと監督席に座っていたが、補欠登録されて
いたのか？ケガしてるんじゃ、そもそも何で先生がそんな事を・・・
そんな疑問に対する回答を、驚きの事実と共に話す諸岡。
「三木監督から直々に伝えて来たよ。そして相手に三ツ橋君、君を指名だ！」

―半月前、栄大付属高校にて―

「ちょ、ちょっと待ってください監督、何で俺が7人目なんスか！」
三木監督にそう突っかかるのは相撲部主将の狩谷だ。インターハイ出場選考の部内戦が終わり、
出場選手の発表の最後の7人目に自分の名が出たことに、不満と憤りを持って訴える。
自分は部内戦にすら出ていない、完全に戦力外扱いされた存在だったハズだ。確かに
部内戦7位は同率で3人が並んでおり、選考の余地はあったのだが・・・
「まさか名門栄大ともあろうものが、主将だからって思い出作りに出ろって言うんですか！」
実力主義の現実を狩谷はよく理解している、今やケガで相撲を取る事が辛くなっている彼にとって
その判断は単に甘いだけでなく、栄大の勝利をも危うくする判断であることも。
だが部内で憤慨しているのは彼だけだった。7位同率の3人も、今年引退の3年生達も、
不満の顔は見せずに三木監督の説得を待つ。
「ずいぶん弱気じゃないか狩谷、全国で勝つ自信が無いか？」
「え・・・いや、そりゃ出たら勝ちますけど、そもそも俺は出る資格が無いはずですよ！」
「勘違いするなよ、今日の部内戦の上位が全国出場の絶対条件ではない。」
そう前置きしてから、ひとつ咳払いして三木監督は力強くこう続ける。
「ウチのメンバー選出とは、全国優勝するための布陣を揃えることだ、部内戦はそのための
手段の一つにすぎん。」
部内に水を打ったような静寂が訪れる。その意味を理解していたのは皮肉にも狩谷以外の全員だ。
昨年秋、世界大会の体重別を制した彼は、栄大の主将を任されてか

らも精力的に動いた。
ケガで勝てなくなってきても決して腐らず、同級生にハッパをかけ、下級生の面倒を真剣に
見て来た。まとまりが無いのが伝統と言われる栄大相撲部で、彼は積極的にまとめ役を
買って出ていたのだ。
そんな彼のいない春の全国では、栄大は何と3回戦で敗退していた。相手が鳥取白楼とはいえ
自分たちの背中を押してくれる主将の不在は、彼らの『心』にどこか物足りなさを感じさせる。
皮肉にもその狩谷が引率していた春の関東新人戦で久我は優勝し、他の1年生も全員上位に
名を連ねていた。
『主将』そして『世界大会王者』の狩谷に自分の相撲を見て貰いたい、そんな思いが今の
栄大の全員にあったのだ。
「必ずどこかで試合に出す。それに勝って勢いをつけ、そのまま一気に全国制覇を目指す！」
三木監督がそう狩谷の背中を押す。そう、強いだけでは頂点は望めない、チームに勢いを
与える存在、栄大の秘密兵器として勝ちを挙げ、その勢いで頂点に駆け上がる、
そんな役目を監督は狩谷に与え、部員全員もそれに大いに同意する。

そして『その時』は来た。準々決勝の大太刀高校戦、その先鋒に狩谷は指名された。
三木監督はあえてその情報をダチ高の諸岡にリークした。そして相手に三ツ橋を希望する、
今のダチ高のムードメーカーであり、狩谷と同じくチームに勢いを

与え続けてきた者同士、
そして同じ小兵同士の対戦に大いに盛り上がりを期待して。
諸岡もこの提案に乗った。お互いチームを牽引する『部長』対『主将』の一戦、
大型力士に対して負担の大きい三ツ橋にとって、この組み合わせは願っても無い、
それは向こうも同じだろう。
「ちょ、ちょっと待って下さい！そもそも信用できるんですか？」
桐仁がそう諸岡に問い詰める。が、諸岡は涼しい顔でその疑問を肯定する。
「名門の監督がそんな嘘をつくはずが無いよ、三木監督の人となりは君も知ってるだろう？」
確かに、昨年の秋合宿を共に過ごした栄大の監督。泰然自若とした中に真っすぐな意志と
相撲の将来に思いを馳せる立派な監督だった。
「し、しかし！」
なおも口ごもる桐仁。何より相手の行動に乗せられて動くことには抵抗がある。何も馬鹿正直に
三ツ橋を当てずとも、確実に勝てるところで白星を挙げる方法もあるだろう。
それを否定したのは、指名された当の本人だった。
「願っても無いよ桐仁、栄大の選手は普段から狩谷君と稽古してる。僕の潜る相撲は
通用しないと思っていたからね。」
蛍の言葉にハァ、とため息をつく桐仁。確かに栄大の各選手は今の蛍の潜る相撲に対応する
術を持っているだろう。他の選手に当てても勝ち星が計算できるとは限らない。
だが何より、指名されて引く性格じゃないよな、コイツは。
団体戦の3回戦が終了し、いよいよベスト8が出そろった。いよい

よ大詰め、
準々決勝の幕が開く。
―東、千葉県代表、大太刀。西、埼玉代表、栄華大付属―
チームの紹介に続き、先鋒の選手が呼び出される。
―東、三ツ橋。西、狩谷―
土俵に上がる両者。その二人を見て、その呼び出しを聞いて、国技館が怒涛の歓声に揺れる。
世界王者、国宝『小龍景光』の復活、相手は国宝候補『蛍丸』！

第６８番　蛍丸と小龍景光

―互いに、礼―

三ツ橋　蛍、１６７ｃｍ　７９ｋｇ。狩谷　俊、１７０ｃｍ　８０ｋｇ。

今大会、最も小さいと思われる二人が土俵で対峙する。にもかかわらず会場内は

その対戦に熱い視線を送っていた。

かたや昨年のアマ相撲世界王者、こなた今大会最大身長の荒巻（２１ｃｍ）をも薙ぎ倒した変化の

スペシャリスト、果たしてどちらが勝つのか、会場内は皆、興味津々でその取り組みを見守る。

「悪いな、ウチの監督がワガママ言ったみたいでよ。」

「いえ、望むところでしたよ。」

へっ、と笑う狩谷に対し、蛍は目線を相手から離さない、そのらんらんとした眼で

相手の心理を、行動を、戦法を探ろうとする。

狩谷もまた、その手の駆け引きはお手の物だった。薄く笑いながら蛍の目を睨み返す。

ただ、彼の腹は決まっている。今の自分の相撲を取る、それだけだ。

狩谷の両ヒザには大きなサポーターが巻かれている。それのみならず足首にも包帯、背中にも

いくつもシップが張られていた。

彼がケガで調子を崩したことは広く知られていた、世界大会の当時からそれは明らかで

決勝戦に勝った時すら、周囲の肩を借りないと土俵を降りられなかったほどである、

しばらく公式戦に姿を見せなかった彼が、現状どの程度相撲を取れるのかは誰も知らない。

―手をついて―

仕切りに入る両者。オーソドックスな蛍の仕切りに対し、狩谷はお

馴染み半身に構える
独特の、そして世界を制した仕切りを見せる。さぁ、両者どう出る？
―はっきよい―
共に変化は無い、肩から激突する両者。と、狩谷は差し手争いをせず、蛍の両肩に手を添える。
次の瞬間、狩谷のもろ手突きが蛍を吹き飛ばした！
「なっ!?」
桐仁が思わず声を上げる。あの狩谷が相手を突き放した?潜る相撲じゃない、だと・・・
いや、それよりも！
―ドツドドツ！ドンツ！―
狩谷の怒涛の突っ張りが蛍に打ち込まれる。その威力、速さ、回転力、あれはまるで
火ノ丸の突き押し相撲じゃないか、あんな武器があったと言うのか！
蛍も突っ張りで応戦する。体の芯を捕らえる回数は互角だが、1発1発の重さが段違いだ、
あっという間に土俵際に追い詰められる蛍。
「(どうだ、これがウチの主将、狩谷の強さだ！)」
三木監督が腕組みしながら土俵を見上げ、そして邂逅する、自分の教え子の『心』の強さを。
最初に左ヒザを壊し、続いて右ヒザと足首。それでも狩谷は相撲を取り続け、世界大会に
優勝して見せた。
だが、その代償は大きかった。足を庇いながら相撲を取れば、負担は当然他の所に行く、
首を痛め、腰を壊してしまった彼に、医者は非情な事実を宣告する。
―君はもう、相撲を取れない。いや、取るべきじゃない―
このまま続けていたら間違いなく君は壊れる、一生車イスの世話になるかもしれない、

特に腰は致命的で、ムリをすれば君は将来、子供を作る事さえ出来なくなる。

そんな力士としての死刑宣告を受け、どうして相撲が続けられる？そう、普通は諦めるだろう。

だが、狩谷は諦めなかった。足は動かず腰は壊れた、首を痛めたがゆえに得意だった

『潜る相撲』ももう取れない。

「だったら、腕を鍛えるまでツスよ！」

そう言って黙々とダンベルを上げ続ける日々。腕力と突き押しに必要な背中の筋肉、

マワシを取った時の引きつけに必要な胸の筋肉を徹底的に鍛え上げきた。

そして彼は土俵に帰ってきた、突き押しと投げ、吊りという新たなスタイルを引っ提げて。

何より、どんな苦境にも諦めないその『心』の強さで。

「ふっ！」

追い詰められた蛍が、両手を交差しながら狩谷の突っ張りをたぐる。五條佑真の突き押しを

学んでいた時から練習していた空手の捌き。瞬間、狩谷の体が流れ、土俵際から脱出する蛍。

「（くぞ！嫌になるぜ、足が突き押しに付いてこねぇ・・・）」

狩谷は横に距離を開けた蛍を睨みながら毒づく。今の展開で押し切れない自分に腹が立つ、

同時に自分と同じ小兵でありながら、こんな捌きまで身につけている相手に感心する。

上等だ！と心で吠えて再び突進する狩谷。相手もすかさずぶちかましに来る、そして

当たった瞬間横っ飛びに変化した相手にすかさず突きを入れて怯ませる。さらに追撃の張り手！

蛍はその張り手をいなして頭を下げ、さらに目線での誘導を入れて潜り込むそぶりを見せて

横っ飛びで回り込もうとする。その蛍の顔面を強烈な突っ張りが捕らえる。
「三ツ橋部長が・・・振り切れない！」
「なんて反応しやがるんだ。」
蛍の相撲の真骨頂は『先手』にある。変化にしろ潜る相撲にしろ相手に先んじての行動が
自分の時間をより多く作り、そこから様々な派生技に移るのが強味だ。
だが相手は速さがウリの軽量級で世界を取った男、その反応速度、対応力、そして
試合を支配する先手先手の攻撃性、いずれも蛍が経験したことのない領域での攻防だった。
「(これが・・・狩谷君の本気！)」
昨年の秋合宿でも胸を合わせたが、いざ試合で心を燃やした戦いがここまで激しいとは。
先手を取られ、こちらの行動を見切られ自分の相撲が取れない。こんなに主導権を握れない
長い相撲を蛍は取った事が無かった。蛍が積み重ねてきた様々な強みが全く出せない！
相手の出足が鈍いせいで辛うじて土俵際でいなせてはいるが、このままじゃいずれ
土俵を割る事になるだろう、だったら！
ここで蛍は頭から突進する、アゴを引き、突っ張りを額で受け、体ごと突破にかかる。
相手の出足の遅さからして、大仰な足のサポーターはフェイクではないだろう。胸を合わせれば
押し合いの勝負、足腰の攻防に持ち込める、と。
蛍の体が泳ぐ。突進した先に狩谷はいなかった、蛍のぶちかましを見込んで体を躱し、
腕を取って『逆とったり』に持っていく、完全にウラをかかれた！
「くっ！」

辛うじて踏みとどまる蛍だが、この攻防で完全に相手に横を取られてしまった、
捕まったら終わる、押し出されても終わる。どうする?
迷うな!そう判断した蛍は素早くかがみ、大きく真上にジャンプしてバック宙をする。
無茶な選択ではあったが、このまま地面にいたらどうやっても負ける、だったら飛ぶしかない!
逆とったりをされたことが、県大会で桐仁のとったりを宙返りで躱したことを思い出させたのも
この大胆な判断を後押しした。
「んなっ!?」
捕まえに行った狩谷が、栄大の選手が、そして会場が仰天する。相撲の最中に何をやってるんだ!
だがその無謀な行為は功を奏した。狩谷の腕は虚空を掴み、その横に蛍が着地する。
すかさず正対した両者は、そのまま吸い込まれるように胸を合わせる。
「がっぷり四つ!」
両者左四つに組み、両マワシを引きつける。その光景に両陣営の背筋が凍る。
「(マズい、今の狩谷主将の足腰で四つに組まれたら・・・持たない!)」
「(いかん!蛍部長は潜るならともかく、胸を合わせての四つ相撲からの技が無い。)」
こうなっては両者小細工は通用しない、押し合って土俵を割らせたほうが勝つ。
―ズザザザーーッ―
電車道で寄りに出たのは蛍の方だった。やはり足腰の壊れた狩谷に堪える術は無い、
一気に土俵際に詰まる狩谷。だが彼は諦めずに最後の反撃に出る。
「ここだ!」
俵が足にかかった瞬間、狩谷は両手で吊りに出つつ、右足のヒザで

相手の内股を蹴り上げる。
「櫓投げ！」
蛍は瞬時に反応し、浮かされた左足に力を込めて腰を割ろうとする。相手の腕の吊りは
強烈だが、跳ね上げる足には力が無い、これなら耐えられる！
「（もってくれ、右足！）」
狩谷は右足を立てたまま、マワシを掴んでいた右手を離して、跳ね上げていた相手の左足を
抱え込む。鍛え込んだ両腕で相手のマワシと足をがっちりホールドしてみせた！
形勢逆転、片ヒザを抱えられたまま片足立ちになる蛍。
「がぁぁぁぁぁぁっ！」
今度は狩谷が電車道、片足立ちの蛍を土俵の反対側に一気に持っていく。
狩谷の両足が、腰が悲鳴を上げる。吠えることで痛みに耐えながら一気に走る！
蛍が土俵外に放り出されるのと、狩谷の足が付いてこずヒザを付くのは同時だった。
土俵の上と下で、小兵力士同士が倒れ、判定を待つ。
―西、狩谷の勝ち！―
「「うおぉぉぉぉーーーーっ！」」
栄大の全員が立ち上がり、吠える。あの満身創痍の状態で勝って見せた、全国の舞台で！
自分たちの為に見事1勝を挙げてみせた、さすが俺たちの主将だ！
土俵外に上がり、礼をするべく際に立つ蛍。見れば狩谷は歩く事すら辛そうで、
相撲を取れる状態とは思えない、そんな相手に黒星を喫したことに落胆する、
自分で挑戦を受けておいて何をやってるんだ僕は・・・
「ごめん、負けちゃったよ。」
土俵を降りて顔を伏せたままそう嘆く蛍。強豪相手の貴重な勝ち

星を拾えなかった事、
そのツケを後輩たちに押し付ける事を悔やんで。
「おぉ、珍しいモン見れたな、三ツ橋部長が落ち込んでるよ。」
大峰の能天気な返しに、え?と頭を上げる蛍。見ればみんな落胆した様子も無く、
余裕じみた笑いすら見せている、負けたのに何で?
「ま、部長には俺たちの尻ぬぐいばっかさせてた印象あるからな。」
「たまには俺達にも取り返させてくださいよ、団体戦ですから。」
「むしろ燃えるッスよ、こっからの巻き返しに乞うご期待!」
あっけらかんとそう言う後輩たちに、ぽかんとした顔しかできない蛍。
そんな彼に柚子香がタオルを肩にかけ、そのまま蛍の肩を掴んで席に座らせる。
「部長なんだから堂々としてて下さい、仲間を信じて、ね。」
「そのセリフは俺に言わせろよ!」
桐仁のツッコミに皆が笑う。そう、これは団体戦。仲間の黒星は自分たちで取り返す、
蛍が担ってきたその役目は、頼もしいチームメイト達に託された。

第６９番　所作

―パンッ！―

土俵下で柏手を打ち、両手を左右に広げて『塵手水』の所作をしたのは栄大付属の２陣、徳永だ。

チームメイトにとってはすっかりお馴染みの彼の試合前の儀式は、同時に「大相撲に行く」という

彼なりの意思表示でもある。。

三木監督も、主将の狩谷も、いつも通りの徳永の態度にうむ、と頷く。余計なプレッシャーに

捕らわれない為にはいつもと同じことをするのが一番だ。

土俵の反対側から、またやったと呆れる陽川に桐仁が解説を入れる。

「栄大はプロ志望が多いからな、一足早く大相撲気分を味わってるんだろう。」

「意思表示も兼ねてるんだろう、プロになるんだ！というね。」

諸岡顧問のその言葉を聞いて、ダチ高の２陣、大峰は心中で唸っていた。

「（大相撲、か。）」

大峰浩二。大太刀高校２年生、攻撃的な相撲が身上の主力選手。

彼は昨年、桐仁の紹介で度々柴木山部屋に出稽古に出向いていた。

その相撲スタイルを

いたく親方に気に入られ、たいそう『可愛がられて』いた。そんな親方から、弟子の力士たちから

度々かけられていた言葉。

「大相撲に来るならウチに入れよ！」

その言葉は嬉しくもあったが、大峰にとっては負担でもあった。あまり裕福でもない家の長男、

高校卒業後は出来るだけ早く良い所に就職し、親兄弟を助ける必要がある。そのため勉学に励み、

生活態度も厳しく律してきた。そんな彼にとって角界入りは二の

足を踏まざるを得なかった。
プロは甘くない、最低でも十両入りするまではまともな給料も無く、仕送りすら出来ない。
そんな現実が彼の前に壁となって遮っていた、いつしか柴木山部屋へも足を運ばなくなり、
相撲は高校まで、という諦めに心が引きずられつつあった。
『折角の全国大会なんだから楽しめよ。』
チームメイトの松本に言われた言葉を思い出す。
「(そう・・・だな。)」
ここは国技館、この場所だけはプロと同じ舞台。大相撲に進めないなら、せめて今ここで
大相撲気分を堪能するのもいいかもしれない。
―2陣戦！東、大峰。西、徳永―
大峰１８１ｃｍ１３５ｋｇ、徳永１８５ｃｍ１３３ｋｇ、『体』はほぼ互角の二人が土俵に上がり、一礼をする。
―手を付いて―
睨み合う両者。と、大峰はかつての親方の教えを思い出す。
『お前さんのツラ構えは大きな武器だ、相手から目を離さなけりゃ敵はビビるさ。』
―はっきよい―
突進する大峰、『変化』する徳永。両者は交差し、大峰は横を取られる、まずい！
側面に取り付いた徳永は、よし！と心でほくそ笑む。仕切りのあの眼光から、相手が入れ込み
過ぎているのを見越して変化した、つもりだった。
しかし組みに行った彼は瞬間硬直する。大峰の体は躱せたが、その目線だけは躱せなかった。
自分を睨むその眼光にわずかに躊躇した結果、組む直前に大峰の肩のカチ上げに跳ね返され
チャンスを逸する。
『激しい相撲を取っている時ほど、心は冷静でいるべきです』

そう教えてくれたのは柴木山部屋の関取、冴ノ山だった。
そうだ、今大会でも激しい相撲に引きずられ、熱くなった結果土俵際で逆転負けを許した、
もうそんなのは御免だ。激しく突っ張りを繰り出しながらも、相手をよく見て分析する。
「(俺の睨みにビビった、のか?仮にも角界を目指してる奴が・・・だったら!)」
次の行動は予想がつく。彼にもプライドがあるだろう、恐れて勝機を逸したことを
恥じたなら、今は攻めっ気が支配しているはずだ!
―パシィッ―
突っ張りから一転、叩き込みを見せる大峰。攻め一辺倒だった彼がこの『叩き』を見せるのは
公式戦はおろか練習含めても初めての事だった。ダチ高のチームメイトも、大太刀を研究している
栄大の面々も『ええっ!?』と言う表情をする。
効果は絶大だった。大きく前方に泳いだ徳永はこれで完全に死に体となる、辛うじて
残したものの、腰砕けの体勢で背を向けてしまう。
『相手を崩したらそこが勝機じゃ、その瞬間に決めに行けんなら話にならんぞ。』
先輩であり憧れていた関取、鬼丸の言葉を思い出す。小兵の彼は相手をひたすら揺さぶって、
崩してからの投げを得意としていた。
自分には大きな体があるが故に、逆に崩しの感覚を実感することは少なかった、
それが今、目の前にある!
「ふんっ!」
すかさず横から組み付く、あとは一気だ。土俵下に徳永を放り出す大峰。
「いよおぉぉっし!」

土俵下でダチ高の面々が気勢を上げる。これで五分に戻した、さぁ反撃開始だ、と。

対照的に栄大付属の面々は、ああーっ、とため息をつく。折角主将の狩谷が上げた白星が

取り返されてしまった。

最も当の狩谷本人は気にした様子も無く、ドンマイと徳永に声をかける。

―東、大峰の勝ち―

土俵上、勝ち名乗りを受けながら大峰は思う。さすが関取たちの教えは的確だ、自分の相撲を

分析し、正しい指導をしてくれていたのだ、と。

そして、その立場に立った自分を想像する、大相撲で、この国技館で活躍する自分の姿を。

「(可能性を追いかけてみるか・・・)」

勝ち名乗りを受けた彼は、右手をスッ、と前にかざすと、大相撲力士が勝った時に行司に示し

懸賞金を受け取る時の『手刀(てがたな)』という所作を小さく真似る。

ざわっ、というざわめきに続いて、まばらではあるが拍手が起こる。

今日ここにいる相撲ファンなら

誰もが知っているその所作に、微笑ましさと彼の将来の姿に思いを馳せて。

土俵を降りた大峰は、陽川に笑顔で『懸賞金よこせ』と小突かれる。

実力がありながらも

角界入りをためらっていたチームメイトの背中を押す意味も含めて。

その横で、トーントーンと軽くジャンプして体をほぐす幸田。これで試合は振り出しに戻った、

中堅を務める自分の重要性を意識しつつも、いつもの自分の力が出せるよう精神集中する。

土俵の向こうでは、同じく中堅の怪物一年生、久我がドシン、と力

強く四股を踏む。
先の試合で無念の黒星を喫した強豪選手が、雪辱に燃え意気上がる。
―中堅戦。東、幸田。西、久我―
幸田１７７ｃｍ８０ｋｇ、久我１８８ｃｍ１３０ｋｇ。先の対戦とは一転、相撲取り然とした体躯と小兵の対決。
それでも久我に油断は無い、県大会であの沙田を倒した相手ならば不足はあるはずもない。
「（相手に取り付いて粘るのがコイツの相撲だった、だが俺の押しなら粘らせはしない！）」
―手をついて―
土俵際目一杯まで下がって構える幸田。逆に久我は仕切り線すらまたぐほど前によって
手を下ろす。追い詰めて叩き出す！その意思を隠そうともしない立ち合いの体勢。
―はっきよい！―
幸田が頭から、久我が胸から激突する。次の瞬間久我は腹を突き出しつつかち上げで
幸田を体ごとハネ返す。
「くっ！」
まるで大波に押し返されるように俵に戻される幸田。だが心は折れない、すかさず腰を割り
再度頭から突進する。
―ゴツ！―
今度は久我も低く当たる。肩と肩でぶち当たると、そのまま牛相撲のように低い体制で
押し合う両者。
体重で押す久我に対し、幸田は俵に足を掛け、そこから体を一本の柱のように芯を固めて
対抗する。かつてラグビーのスクラムで培った押し合いの技術を相撲に応用した姿勢で。

おおおっ、と驚愕の声が上がる会場。あの小さな幸田が真っ向から久我と押し合っている、
その姿に感心し、静止している彼らに拍手が浴びせられる。
だが現状、手詰まりなのは幸田の方だった。
「まずいな、久我の奴、幸田が動くのを待ってやがる・・・」
陽川の嘆き通り、久我はここで『後の先』を取る作戦に出ている。この相手がここから
『引く投げ』に来るのは情報として知っている。ならばその瞬間に一気に押して土俵を割らせる
腹づもりだ。
かといってこのまま押し合っても、姿勢が互角なら押されるのは体重の軽い幸田の方だ。
沙田に勝ったあの戦法は、自分が低い姿勢で相手の腹に取り付いていればこそ有効なのだ、
このままではジリ貧は目に見えている。
ここで幸田は動く、相手のマワシに手を伸ばす、その動作をフェイントにして体を外し
右にサイドステップする。
「(待ってたぜ!)」
久我は左手を伸ばして、変化した幸田の肩を掴むと、まるでラリアットのように幸田ごと
腕を前に押し返す。そのまま土俵下に投げ落とされる幸田、なんという怪力か!
唖然とする会場の中、久我は見たか!という表情で幸田を一瞥し、礼をすべく土俵の際に立つ。
幸田は何も出来ずに敗れた悔しさを噛みしめて土俵に上がる、これが力士の強さか・・・。
―西、久我の勝ち―
土俵を降りた久我を栄大の面々が笑顔で迎える。全くこの化け物が、と。
今大会1敗はしたものの、確かにその強さはあの『草薙』久世草介

を彷彿とさせるものがある。
「すいません、何も出来なかった・・・」
そう頭を下げる幸田の肩をぽん、と叩いて、桐仁はこう返す。
「なぁに気にするな、俺が取り返してくるよ。」
メガネを幸田に預け、相手を見てほくそ笑む桐仁。さて、楽しみな相手だ、と。
―副将戦。東、辻。西、ジョン・Ｊ・オーリス―

第７０番　なりたい、やっつけたい。

―かつて、大相撲の歴史を塗り替えた力士がいた―

第６３代横綱、華和（はるわ）。ハワイ出身、大相撲史上初の外国人横綱。

２０７ｃｍ２２５ｋｇの巨体から繰り出される強烈な突き押しで、対戦相手を次々と土俵下に薙ぎ倒していく。

その腕が相手の体に添えられた時、それだけで必殺の型が完成していた。

次の瞬間、その巨躯に見合った剛力と、体重に似合わぬ瞬発力で相手を遥か向こうまで放り出す。

さらに脅威なのはその空間把握力の高さだ。間合いを詰められ潜られかけた時、すかさず

自分から後退してでも押しの間合いにピタリと戻し、遠くなった土俵外もなんのそのと跳ね返す。

その強さで幕内最高優勝、実に１５回を叩き出してみせた。

彼の隆盛時、それは初めての『強すぎる外国人力士ＶＳ日本人期待の若手』の構図が生まれた

瞬間でもあった。彼は横綱と言う最高位の地位にありながら、同時に悪役（ヒール）としての

立場に立たされていく。

大相撲を見る当時の子供たちにとって、華和は『自分が「やっつけたい」』一番の対象であった。

「華和って・・・『あの』華和ですか？」

陽川いわく副将戦の桐仁の相手、ジョンの相撲が現役時の華和関にそっくりだ、という言葉に

目を丸くしてそう返す幸田、柚子香と小林もうんうんと頷く。そこには『脅威』とは別種の

驚きが含まれていた。

「言っとくがな、現役時は鬼みたいに強かったんだぞ。」
「幕内優勝１５回、横綱在位８年、強烈な押し相撲でほぼ無敵の存在と言っていい力士でした。」
大峰のフォローに千鶴子が続く。幸田たちは顔を見合わせ『あの華和が、ねぇ・・・』という表情。
華和関の現役は今の高校生達の幼稚園～小学生低学年当時。最近相撲を始めた彼らが力士の華和を
知らないのは無理からぬこと。
だが、彼らは別の意味で華和を知っていたのだ。引退後、親方株の取得が敵わなかった華和は
元横綱の看板を引っ提げて総合格闘技にデビューする。
そして、見るも無残に敗北した。
その姿が多くのメディアに取り上げられ、彼の強さは次第に日本人の記憶から忘れ去られ、
『道化』としての認識ばかりが印象に残されていく。
幸田も、柚子香も、小林も、彼がリングでうつ伏せに倒れるそのシーンはよく見ていた。
映像で、録画で、漫画やアニメで、アスキーアートすらでも。
「桐仁・・・笑ってる?」
土俵に上がった桐仁を見て思わず呟く蛍。団体戦を2―1でリードされての副将戦、その状況で
相手の巨体を見つめる桐仁はどこか嬉しそうだった。
「あー分かる分かる、相手もハワイ出身、しかも相撲もそっくりと来てるからな。」
「子供の頃、よく自分が倒す姿を妄想したもんだよ。辻先輩も同じじゃね?」
大峰と陽川のその想像は的を得ていた。そう、当時のチビっ子相撲ファンにとって、
華和関は『やっつけたい存在』ナンバーワンだった、幼少から相撲オタクの桐仁がその例に
漏れるわけもなかったのだ。

「(これだから相撲はいい、よもやこんな時が来るなんてな!・)」
土俵上、桐仁は綻ぶ顔を必死で抑えていた。まさかあの華和関とそっくりな相手と相撲が
取れるなんて。
「(何度頭の中で華和関と相撲を取ったか知れねぇよ、日本人力士が負けるたびに俺が
大相撲力士になって、アンタを投げ飛ばす姿を幾度想像してきたか・・・)」
無論それが子供の都合のいい妄想であることは言うまでもない、ましてやジョンは華和関ではない、
それでも子供の頃に見た夢の一番が今、まさに目の前にあると思うだけで顔が緩む、力が漲る。
「ジョンー、相手よく見ていけ、動き速いぞ!」
土俵下からチームメイトの激が飛ぶ、それに頷いて答え、審判の声に従い礼をする。
大丈夫、ボクは勝つよ。ボクを強くしてくれた、ハルワのスモウを教えてくれた、
栄大付属のチームメイトのために。

ジョン少年にとってハルワはヒーローであった。いや、それ以外に表現のしようが無かった。
地元ハワイ出身で、異国の国技で純白のチャンピオンベルトを腰に巻くスモーヒーロー!
太った体をコンプレックスに想っていた彼は、そのヒーローに憧れ、日本に渡って
スモウレスラーになる事を夢見る、ボクもハルワになるんだ!と。
だが彼が日本に来た時、彼のヒーローはこの国ではピエロでしか無かった。
その名を出すたび嘲笑と、軽視と、そして『過去の人』という見方をされていた。

何でお前らがハルワを笑うんだ、彼の何を知ってるんだ、ウチの島のヒーローを侮辱するな！

彼は憤慨し、そして日本に失望していた。

「華和関いいな。めっちゃ強いし、お前のスタイルにドンピシャじゃね？」

敵意すら抱いて入門した栄大付属相撲部で、チームのキャプテン・カリヤに笑顔でそう返された。

「偉大な横綱だ。だが誰しも彼になれるわけではないが、君ならその可能性はある！」

マスター（監督）・ミキはそう言って僕の肩を強く叩く、嬉しそうな顔で。

「プロ入りしたら二代目華和を名乗らせて貰えよ、絶対人気出るぞ！」

エースのタキザワはそんなことを勧めてくれた、ボクが夢見て口に出来ないことをあっさり

言ってくれる。

このチームメイト達は知っていたのだ、華和関の強さ、偉大さを、そしてその相撲スタイルを。

ミーティングで何度もビデオを流し、自分にそのスタイルを叩き込んでくれた、数えきれない程の

アドバイスを貰い、自分は日一日と憧れの存在に近づいていった。

彼は再びこの国が好きになる、そして自分がいつかハルワになるという夢を取り戻す―

―――――――

立つと同時に桐仁は低く突進する。あえて平蜘蛛は使わず、変化を意識させた上で低空突進、
そのまま両下手をつかみにかかる。
が、それは寸前でストップされる。桐仁の肩を掴んだジョンはそのまま一歩後退し、
折り畳まれたヒジが最も力を出せる、最も体重を乗せられる角度まで広げる。
「させるかよ！」
ジョンの強烈な押しが爆発する寸前、桐仁は自らバックステップして相手の押しを空振らせる。
土俵際まで下がった桐仁は相手の取り口に驚愕と称賛の両方を感じ取る。
「（踏み込まれたら一歩下がって体ごと押す、か。どこまでも華和関だぜ！）」
引くことでジョンの体も前方に泳いだ。が、このままだと体ごとなだれ込まれる。
素早く体を躱し、突っ込んでくる相手を叩き込む。
「（デカすぎだろ！叩きが全然効いちゃいねぇ！）」
毒づく桐仁の通り、叩きは大した威力にならずに体を残すジョン。
２０１ｃｍ１９５ｋｇのその巨体は
外国人特有の手足の長さで体重を稼いでいるため、引き技には意外なほど強い。
だが！今ならその長い脚が逆に狙える、すかさず踏み込んだジョンの右足に取り付き
内掛けを仕掛けながらマワシをがっちりと掴む。
「よし！」
「組み付いた、もらった、行けカントク！」
意気上がるダチ高陣営。捕らえてしまえば多少の体格差など物ともしないのが桐仁の相撲だ、
これならいける！
ずっ、ずずっ、ずずずっ・・・

組み合ったまま、ジョンの体が少しずつ沈んでいく。大きく股を開き、腰を割りながら桐仁と同じ
頭の高さまで体を沈めると、こんどはその長い腕を懐にネジ込んでいく。
「そうだジョン、焦るな、じっくり自分の体制を作れ！」
桐仁も必死に抵抗し、その腕をこじ入れさせまいと脇を絞る。が、それでもジョンの
剛腕は止まらない、ついに胸の中に腕をこじ入れると、今度はぐぐぐっ、と自分と相手の胸の
隙間を広げていく。
「（どんな、怪力だよ・・・コイツ！）」
桐仁懸命の抵抗もむなしく、ついにマワシを切られ、そしてそのグローブのような大きな手を
胸にべったり当てがわれる。
「（ああ、そうだ。相手は横綱だったな。）」
最初の感情を思い出す。そう、元々あの横綱を想定していたじゃないか、怪力なんて当たり前だ。
その上で勝つつもりで土俵に上がったんじゃないか！
「フンッ！」
ジョンの力を込めた押し一閃、吹き飛ばされた桐仁の体が宙を舞う。その勢いは俵はおろか
土俵の遥か向こうまで吹き飛ばすかに思えた・・・が。
「ナニ!?」
桐仁は飛ばされる寸前、両手でジョンの右手首を掴んでいた。その腕を命綱にして相手を
引き込みながら辛うじて土俵内に着地した桐仁は、腕を取ったまま体を回し、背負い投げに持っていく。
「浅い！」
そう叫んだのは観客席の荒木だった。背負いと言うには相手との距離が遠く、相手を担げずに
長い腕を巻き込んでいるだけだ、あれじゃあ・・・

「(いいんだよ、これで!)」
構わず相手の腕を巻き込みつつ1回転する桐仁。まるでヨーヨーが糸を巻いて手に戻るように
ジョンの腕を首に巻き付けて右わきに密着する。
ジョンは何とか間合いを離そうとするが、自分の腕が相手に巻き付いているために距離を
開けようがない、しかも右脇に肩を差し込まれた状態で潜られている。今までに
経験したことのないこの体勢がピンチである事を予感し、戦慄する。
桐仁は一度体を沈め、相手の右ひざを左手で抱える、そして全力で反り返る。
首に巻いた腕と肩で相手の脇を持ち上げ、右足を手で持ち上げつつ残った足で狩り飛ばす。
そのまま二人はもつれる様に、背中から後方に倒れ込む。
―どっすぅぅぅ・・・ん―
派手に背中から倒れ込む両者。どっちだ、どっちが先に落ちた・・・?
―東、辻の勝ち!―
最初に土俵に付いたのはジョンの大きな尻だった。体を躱した桐仁は辛うじて落ちるのを
その後になるまで耐え凌いだ。
「いよおぉぉぉっし!」
「さすが!いいぞーカントクっ。」
歓喜に沸くダチ高相撲部。桐仁自身も先に起き上がり、荒い息でいよぉし!とガッツポーズ。
が、そんな自分を反省し、すかさず姿勢を正すと、ジョンを起こすべく手を差し出す。
ジョンもその手を掴み、残念そうに立ち上がる、尊敬するハルワの礼節を心に残して・・・
「意識してんだろ、あの横綱を。」

そう声をかける桐仁に対し、一瞬えっ、という顔をした後、笑顔でこくりと頷くジョン。
礼をして土俵を降りる両者。
ハルワになりたい力士と、華和関を倒したいと思っていた力士の勝負は、後者の勝利に終わる。
これで2―2、準決勝進出への対決は双方の大将に委ねられた。
―大将戦。東、松本。西、滝沢―
昨年春の関東新人戦決勝と同じ顔合わせ、お互い手の内を知り尽くしたライバルの
決着の時、来たる。

第７１番　飲み込む相撲

「なぁ名塚、ダチ高の松本君は何で国宝候補じゃないんだ？」
記者席でカメラマンの宮崎がそう問う。確かに松本は昨年の関東新人王戦の決勝で
栄大付属の滝沢を破った。にもかかわらず滝沢は国宝候補として『繁慶』の名が与えられ
松本には未だ国宝の銘は与えられていない。
「そうね。ひとつは『伸びしろ』かしらね・・・」
名塚曰く、１８８ｃｍ１４５ｋｇで『あんこ型』の松本の体はおそらくもう頭打ちだろう。
受けの相撲を取る彼のスタイルから、瞬発力が無く、体重に筋肉が負けている
ように見えるのだ、と。
「『国宝』っていうのは、あくまで将来的に横綱に成る『成長』を期待された選手の事よ、
今現在で横綱を張れる子がいたらそれはもう人間じゃないわ。」
角界入りして、そこからの成長を見込したうえで、将来の横綱候補『国宝』の銘が
与えられる。今の時点で強くても伸びしろが感じられなければ将来には期待できない。
かつて鬼丸や、今の辻、三ツ橋に候補付きで国宝名が与えられているのも、あくまで
将来の成長に期待が込められている意味もあるのだ。
「じゃあ、滝沢君はもっと伸びる可能性があると？」
その宮崎の返しにこくりと頷く名塚。１８２ｃｍ１２５ｋｇのその体躯は太ってはいるものの
筋肉も相当目立っている。加えて彼の速く鋭い相撲なら、まだまだウェイトを
乗せる余地はあるだろう。
そしてなによりその『技』だ。彼の相撲は決して派手では無いもの

の、安定感という
点において彼に勝る選手は全国でもそうはいない。ひとたびがっぷり四つに組めば
一気に寄り、投げ、吊り等、格の違いを見せつけるように圧倒する。
それを支えるのは、彼の異常なまでの勝負勘の良さだ。相手が巻き替えに来るその瞬間、
投げに移行しようと体重をかける一瞬、果てはがっぷり四つで相撲が膠着し、相手が
ひと息ついたその瞬間を見切ってカタをつけてしまう。
見ている人は、何故がっぷり四つで組んでいるのにこうも力の差が出るのだと思うだろう。
だがビデオ映像をスローで見てみると、彼は相手の一瞬のスキを生む動作とほぼ同時に
動いていた、まるでコンマ数秒後の未来を見ているかのように。
「あの勝負勘に、もう一回りの体と大相撲での経験を上乗せしたら、横綱も夢じゃないわ。」
もう彼は国宝『候補』の文字を外してもいいと名塚は思う。ここ数年の栄大付属の不振から
表彰台にこそ縁が無かった滝沢だが、今年こそは団体も個人も、彼の名を大きく示すことに
なるだろう、と。

「頼むぜ松本!」
「お前は一度滝沢に勝っている、大丈夫だ、勝って来い!」
「それフラグじゃないんスかぁ?」
桐仁の激励に笑顔でツッコミ返す松本。桐仁はがくっ、と体を傾けるが、
他の面々は大一番を前に笑顔の松本を見て安堵する。うん、康太スマイル来てる、
これならいけると。
土俵の向こう側でも滝沢を激励する声、狩谷だ。

「お前の相撲を取ってこい、俺達は何も心配して無ぇからよ。」
その主将の言葉に、その場の全員がうんうんと頷く。今や部員の誰もこの滝沢に
勝てなくなっていた、栄大相撲部最強の男に勝利を託すのに不安があるはずもない。
滝沢は闘志ある顔で頷くと、土俵を見据えて歩を進める。

―大将戦。東、松本。西、滝沢―
さぁ大一番!そして国宝候補『繁慶』の異名に恥じぬ強さを見せる滝沢と、かつてその
滝沢を破った経験のある松本の対戦に会場が沸く。
「見物やね、栄大かダチ高か。どっちが上がってくるんや?」
鳥取白楼の選手席でマネージャーリーダーの咲が呟く。少なくともこの一番で、彼ら白楼の
今後の対策は大きく変わることになる。選手たちも皆、土俵を注視する。
「借りは返すぜ、松本!」
「倍に被せて貸し足すさ。」
睨む滝沢、笑顔で返す松本。それに釣られたか、滝沢も口元をにやり、と吊り上げる。
―手をついて―
どんっ!と力強く手をつく滝沢。松本はゆっくりした動作で土俵に手を添え、ぐぐっ、と
体を沈める。
―はっきよい!―
バチィン!と大型力士同士独特の立ち合い音が会場に響く。両者胸で当たった、体勢も五分だ。
すかさずマワシを探る滝沢に対し、松本はやや前傾姿勢になり、相手からマワシを遠ざけ・・・
「フッ!」
松本が腰を引いたその瞬間、滝沢は叩き込みに出る。今の今までマ

ワシを取りに
行っていたというのに、なんという判断の速さ！
大きく泳いだ松本の体にすかさず取り付く滝沢。そのまま土俵際まで一気に寄るが、松本は
大きな腹を突き出して相手を押し止める。
そのまま押し合う事数秒、滝沢が一気の寄りを諦め、スッ、と一歩下がる。再び胸を合わせた
四つの状態からマワシを探り合う。滝沢は右上手を引いて左四つになりたい、松本は左上手を
取って両上手にしたいところだ。
次の瞬間、滝沢は右の『下手』を引いて瞬時に下手投げに行く。ほんの今まで狙っていた上手を
いともあっさり諦めて先手を取る、なんという勝負勘か。
「くっ、惜しい！」
蛍が思わず叫ぶ。今の状態で両上手を取れれば、相手の下手を腹に挟み込んで無力化する
松本得意の型『お腹極め出し』に持って行けたはずだ。それを直前で察知し、すかさず
返してくるその判断力、そう、それはまるで・・・
「まるで潮君だわ。」
千鶴子の嘆きに蛍が、桐仁が、大峰が心で頷く。鬼丸の小兵ならではの磨かれた勝負勘と
危機察知能力。それをあの体でどうやってモノにし、そこまで神経を尖らせることが出来るのか、
と毒づく。
下手投げをこらえた松本に、今度はかち上げからの突っ張りで攻める滝沢。組んでも離れても
相撲が取れる滝沢の攻勢が続く、終始防戦一方の松本は、ここであえて右の突っ張りを打ち返す。
その腕をすかさず手繰って崩し、横から取り付こうとする滝沢。左手と腹でかろうじて

ブロックする松本。
ならばと松本の左手首を掴み、頭を付ける滝沢。再度中央で止まり、残った手でマワシを
探る両者。双方息は荒く、その大きな背中が呼吸で揺れる。
「くそっ、しぶとい！」
「野郎、受け上手すぎだろ、滝沢の攻撃をあそこまで凌ぐか⁉」
いつもならとっくに決着をつけている滝沢の苦戦に栄大陣営が嘆く。監督の三木は腕を組んで
松本の胆力に感心する。
「(あれだけ攻められてもなお笑うか、この状況を明らかに楽しんでいる、いい選手だ。)」
息を切らしながら滝沢は思う。そうだ、相変わらずだコイツの相撲は。その恵まれた体で
こちらの攻めを全て飲み込むように受け切りやがる、去年もそうだった、全くやりにくい！
だが今日こそは負けん、俺は名門栄大のエースなんだ！
対する松本も、相手の強さと激しさに感じ入り、力を漲らせる。
「(強い、強いな滝沢。そうこなくっちゃあなぁ)」
大舞台で強敵と相まみえる、それが彼の相撲を取る理由、そして憧れ。夢に見た熱い戦いに
その身を投じる喜びが、彼の大きな体にムチを入れる。
攻防は続く。滝沢が先手を取り松本が凌ぐ。反撃に出ようとした松本の出鼻をくじき、
攻める滝沢、こらえる松本。そして止まり、また動く。
「松本君の受け、シャレにならんわアレ。」
咲も思わず嘆く。あそこまで粘る事に特化した選手などそうはいないだろう、その大相撲力士と
見まごうばかりのアンコ型の体形を生かして重心を低く取り、猛攻を凌ぎに凌ぐ。
「受けの技術は高いと思っていた・・・けど、これはもう大相撲のレベルよ！」

名塚が愕然としてこぼす。確かに彼の体格は頭打ちだろう、それは言い換えれば大相撲の力士が
求めるレベルの体に近づいているという事だ。
自分は何を勘違いしていたのだろう。思えば彼はダチ高の選手だ、チームメイトの面々は
全員が違うタイプの選手じゃないの！その彼らと日々稽古してるなら、その受けはどんな
攻めにも対応している可能性が・・・
「ゼェッ、ゼェッ、ゼェ・・・っ」
「フヒュー、フヒュー、ふぅぅぅ」
土俵際、組み合った両者が大きく息をつく。滝沢は息を荒げながらも相手の呼吸を読み、
その瞬間に狙いを定める。
松本がすぅっ、と息を吸い込んだその瞬間、滝沢は最後の力を振り絞って吊りに出る。
呼吸で肺が膨れ、上半身がわずかに浮いたその瞬間を狙っての吊りに、松本の巨体が
持ち上がる。
「行ったあぁぁぁっ！」
意気上がる栄大付属の選手たち、土俵外はもうすぐそこだ、あと一歩前に出るだけで相手を
吊り出せる、行けーっ！
ずんっ！
松本の足が着地する。土俵の『内』に。
吊った滝沢の右手がマワシから外れている。それは長い相撲で握力の限界が近い事もあったが
大汗をかいた両者の汗で指が滑った不運もあったのだ。松本はすかさず腹を突き出して
わずかに相手との距離を開けると、滑らせた滝沢の右手を絞り込み、腹を合わせて無力化する。
「入ったあぁぁぁっ！」

「寄れ！決めろーーーっ！」
相手の右手を両者の腹でサンドイッチして無力化する『お腹極め出し』の体勢で、
松本が土俵の反対側に電車道で進撃する。滝沢は寄られながら左半身を引いて半身になると
右に体を躱しながら松本の頭を左手で抑え込んで叩き込みに出る。
両者最後の、そして執念の攻防！
土俵下に落ちた二人が、両チームの面々が、応援団が、各校の選手が、固唾をのんで判定を待つ。

―寄り切って東、松本の勝ち！―
「うおっしゃあぁぁぁぁぁっ!!」
「やったやったやったーっ！」
喜びに沸くダチ高の面々。苦しい戦いだったのはここまでもそうだが、栄大付属に勝ったのは
彼らにとっても特別な意味があったから。
昨年の秋合宿で『勝てない相手じゃない』と手ごたえを感じた、そしてやっとたどり着いた
全国の舞台でそれを証明することが出来た、俺達は強いんだ！と。
蛍ははぁぁぁぁ、と大息を吐き出し、そして感謝する。自分が喫した黒星をきっちり
取り返してくれた頼もしい後輩たちに。
天を仰いで息を吐くのは栄大の主将、狩谷だ。今年はついにベスト４にすら進めなかった。
だがまぁ仕方ない、仲間たちは最高の相撲を取ってくれた、ＯＢ達に怒られるのは俺だけでいい。
みんなよくやったよ、この部で主将を張れたのは俺にとって誇りだ。
涙にくれる滝沢の肩をぺちぺち叩いて元気づける狩谷。お前はまだ個人戦があるだろうに
メソメソしてんじゃねーよ、と。

整列し、士俵に一礼して引き上げる栄大の面々。毎年多くの選手をプロに送る名門高は
敗れてもなお堂々とした態度で礼を尽くす。
大太刀高校、準決勝進出！

第７２番　黒い狼

―はっきよい！―

西東京帝天の池田と鳥取白楼のバトムンフ・バトバヤルが土俵上で激しく当たり合う

１６４ｋｇの国宝候補『池田光忠』こと池田拓海に対し、バトは１０８ｋｇの体重で真っ向から挑む。

「ナメるな！」

すかさずもろ手突きでバトを弾き飛ばす池田。自分より軽い相手に得意の押し相撲で

後れを取るわけにはいかない。まして相手はモンゴル出身、今の相撲界の事情からしても、

国宝候補の自分が遅れを取るわけにはいかないのだ。

準々決勝第二試合の先鋒戦、バトはその殺気を隠そうともせずに土俵に上がると、

国宝候補の池田を親の仇のような目で睨めつける、殺気と、焦燥を混ぜ込んだ眼光で。

そしてそれを白楼の面々も、加納監督も、咲はじめマネージャーたちも諫めない、ただ

不安と祈りの目で見上げていた、どうか彼が報われんことを、と。

バトは焦っていた。日本に来て３年、彼は未だに相撲部屋への入門が決まらないでいた。

鳥取白楼へ相撲留学してはや２年半が過ぎ、彼が奨学金制度で高校にいられる期限が

もう終わろうとしている。

この大会でどこかから声が掛からなければ彼の夢は潰え、後に残るのは奨学金の返済という

負債だけになってしまうのだ。

「（ボクを見ろ！ここに強者がイルんダ！）」

弾かれながらも、あくまで真っ向から池田に立ち向かうバト。ただ

勝つだけではダメだ、
押しの強いこの相手に真っ向からの押し合いで勝ってこそボクの強さがアピールできる！
その悲壮な決意で身を焦がし、黒い炎を纏った狼のごとく闘志でぶちかましを仕掛ける。
２発、３発、４発。弾かれ、突き放されながらも、何度も突進を繰り返すバト。
相手の池田も細身のバトに対し、土俵際での変化を警戒してどうしても慎重になる。
が、バトは愚直に突進を繰り返し、ついには土俵中央まで池田を押し返す。
「（バトさん、頑張れ！）」
咲が土俵下で祈るように応援する。彼の実力ならとっくに相撲部屋から声がかかっても
おかしくないハズなのだ。しかし今現在、各相撲部屋は誰かしら外国人力士が所属している。
外国人力士は一部屋に一人、このルールこそが今バトを人生の土俵際に追い詰めているのだ。
白楼の選手たちが応援を送らず、静かに土俵を見上げているのもこの為だ。余計な雑音を排し
純粋に彼の強者たる相撲を角界関係者に見てもらいたい、その一心で口をつぐみ、そして願う。
どうか彼を大相撲に、と。
「（こいつ・・・バカかよ！）」
池田が心の中で毒づく。明らかに劣る体重で真正面から自分に向かって来るとは正気か？
現にこいつの額は割れて赤い血がにじみ出ているというのに、変化はおろか組みさえもせず
正面からぶちかましと突きで対抗してくる、自分の得意なはずの相撲スタイルで。
まるで飢えた狼が、自分の体を顧みずに獲物に食らいつくかのよう

に。
「うおぉぉおっ！」
ガチィ！という激突音と共に、ついに池田をのけ反らせるバト。勝ちたい執念、認めさせたい執念、
角界入りして横綱になるという執念が、５４ｋｇ差の体重をついに凌駕する。
たまらず叩き込みに出る池田。だがバトは本来猪突猛進のぶちかまし力士ではない、たまたま
相手の池田がそうだったから、それを上回る強さを見せるためにそうしていただけなのだ。
当然、変化によって落ちるような男ではない。すかさず変わった方向に突進し、一気に土俵下に
池田を突き落とす。
「バトっ!!」
その瞬間、土俵下から白楼の加納監督から声が飛ぶ。勝利を決めたバトが一瞬固まり、そして
ふぅっ、と息を吐いて肩の力を抜くと、土俵下に落ちた池田に手を差し出す。
勝ち名乗りを受け、一礼をして土俵を降りた彼は、監督に「アリガトウ・・・ゴザイマシタ」と
感謝の意を示す。
常日頃から言われていた、相撲では礼節を重んじるという事。土俵上ではガッツポーズや雄叫び
などの行為はかえって角界関係者の心証を悪くすること、ここ数年の横綱刃皇の素行の悪さから
モンゴル人の印象が良くないことを踏まえて、土俵上での自制をしろと釘を刺され続けていた事。
それを忘れ、今も勝利の瞬間に吠える寸前だった。監督の声掛けが無ければ、自分はますます
角界への望みが薄くなっている所だった。
だが、だからと言って彼の道が明確に開けたわけではない。この２

年半で打診を続けた相撲部屋は
ことごとく競合していた外国人選手にそのイスを取られていたのだ。
ドウシテ、僕はこんなに強いのに・・・何でダレも僕を入れてくれない、認めないんダ！
イスに座ったバトは土俵上のチームメイトの相撲を見ていない、大事なのは仲間じゃなく自分ダ！
1年2年の時なら仲間がどうのと言えただろう、しかし今はもうタイムリミットが目前、
最後の大きなこの大会で自分の実力をアピール出来なければ、僕の夢は終わるんダ、なのに・・・

―以上、5―0で鳥取白楼の勝ち―
涙にくれる西東京、帝天学園の選手たち。そんな彼らを向こうに見てバトは嘆く。
お前たちハいつでも相撲部屋ニ入門できるジャないか、泣きタイノは僕のほうダヨ！と。

「白楼が勝ったか・・・」
観客席で桐仁がそう呟く、大型選手を揃えた帝天学園の勝ちもあるいは、とも思ったが
フタを開けてみたらやはり王者、白楼の圧勝劇だった。
「先鋒のバトムンフが真っ向勝負で勝ったのが大きかったね、あれで流れが一気に白楼に
行っちゃったよ。」
蛍がそう続ける。この大会ずっと先鋒を務める彼の闘志あふれる相撲は、続く
チームメイトを奮起させ、対戦相手を威圧するに十分だった。
団体戦の先鋒は攻撃型の選手が向いている、そんなセオリーをまさに実践していた。
「(だが、ちょっと相撲が荒い、というか雑だな、余裕が無いという

か・・・）」

桐仁は思う。俺ならそこを突いて攻略できるかもしれない、もしそれに成功すれば白楼の
必勝リレーを潰せるだろう。だとすればヤツを止めるのは俺の仕事か、と。

準々決勝第三試合、宮城青葉と山梨甲斐の試合はは接戦の末、３―２で宮城青葉が制す。
ベスト４の最後のイスを賭けた第四試合は、福岡立花寺が沖縄うるま国際との九州対決を
モノにした。やはり国宝『圧切長谷部』こと黒田の強さは際立っていた。
その試合を観客席で見ていた白楼のマネージャーリーダー、咲の携帯がヴーッ、と振動する。
なんやこんなとこで、とスマホを見て目を丸くする。もうかれこれ２年も音沙汰の無かった
その相手からの着信、一体何事やろ?.席を立ち、会場の外に出て着信履歴から返信。
「あーもしもし、咲です、お久しぶりです・・・」

会場内では団体戦の後、個人戦が行われていた。こちらも強者と強者が鎬を削る熱戦続き、
沙田含む３国宝が順当に勝ち進む中、同じ千葉の神崎は決勝トーナメント初戦で福井の朝倉に敗れ
大河内は初戦を勝ってベスト１６に進むも、愛知騎皇国際の２１１ｃｍ、荒巻に手も無く敗れる。
こうしてＩＨ全国大会２日目は終了した、泣いても笑っても明日が最終日。

・団体戦準決勝
第一試合　大太刀（千葉）―白楼（鳥取）
第二試合　立花寺（福岡）―青葉（宮城）

・個人戦準々決勝

第一試合　荒巻（愛知）―沙田（千葉）

第二試合　黒田（福岡）―細川（熊本）

第三試合　朝倉（福井）―今井（静岡）

第四試合　菅（徳島）―舟木（鳥取）

その頂点に立つのは、果たして。

第７３番　最期の日

「あたたた・・・もっと上だ。」
「おーい、シップこっちもー。」
「氷嚢どうぞ。」
「サンキュ。」
　大太刀高校の宿泊する旅館の男子部屋、いや今は野戦病院と言ったほうがいいかもしれない。
　一瞬で全ての力を出し切る格闘技、相撲。全国での死闘を経た面々にとって体のケアは必須だ、
　明日も戦いがあるとなれば猶更である。
　陽川は館林南の内山に張られまくって腫れた顔面を氷嚢で冷やし、松本は栄大付属の滝沢との
　死闘で疲労しきった体を寝かせて柳沢にマッサージして貰っている。
　蛍は柚子香に土俵下に落ちた時に背中を打った所にシップを張ってもらっているし、
　桐仁以外の他の面々も、痛めた場所が無いか入念にチェックする。
「さてみんな、そのままでいいから聞いてくれ、今から白楼対策に入るぞ。」
　桐仁がタブレットを部屋の一角に立てて皆にそう告げる。諸岡顧問と千鶴子がその脇に立ち、
　データ収集したノートを広げる。
「白楼は県大会からこっち、ほぼオーダー変更はないようだ。」
　諸岡がそう話す。全国大会初日こそ最初の３人に主力を集めてきたが、２日目の今日は
　鳥取県予選と同じオーダーで来ている、おそらく明日もこのまま来るだろう。
「先鋒バトムンフ、３年生、１８３ｃｍ１０８ｋｇ、１年の時からレギュラーで、とにかく攻撃的な選手です。」
　映像と共に千鶴子がそう話す。ある相手には張り手、別の相手には

寄り、また違う敵には投げと
戦い方のバリエーションが非常に豊富だ。
「けど、なんか際立った強さに見えない気がしますね・・・」
そう言ったのは沼田だ。投げこそ鋭いが寄りや突きは平均的なレベルで、白楼のレギュラーとしては無難な強さに見える。
「相手に合わせてるんだよ、突き押しには突き押しで、寄りには寄りで、ってな。」
その桐仁の言葉に全員が驚く。確かに相手を意識して見ると、その相手の得意な戦術で、
苦戦しながらも勝利をもぎ取っている。
「一昨年の五條さんの時もそうだった、多分強さをアピールしてるんだろう、角界関係者に。」
彼がモンゴルからの留学生、しかもプロ志望であることを説明され、なるほどね、と
納得する一同。
「そのせいか、相撲がどこか雑で隙がある。」
「個人戦も出場していましたが、栄大の滝沢選手にトーナメント1回戦で敗れています。」
桐仁と千鶴子の言葉に思わず頷く。スキのある相撲を取るならそれをあの滝沢が逃すわけもない。
ならば大太刀で彼の相手は・・・
「というわけで先鋒は俺が出る。」
その桐仁の言葉に全員が頷く、蛍は桐仁に『頼むよ』と声をかけ、肩を叩く。
「2陣の七瀬選手、3年生、１８５ｃｍ９６ｋｇ、典型的な突き押し選手ですが、引き技でも勝っています。」
動画が七瀬のそれに切り替わる。確かに千鶴子の言う通り突き押し相撲だが、意外にその
決まり手は多彩だ。押し出しと引き技だけではなく、相手をＫＯして勝っているのもある。

「突きのバリエーションが豊富だな、押すのもあればダメージ狙いのも、相手との距離を
空けるため、測るためのもある。」
今日、突き押しの内山と対戦したばかりの陽川がそう解説する。確かに突きと一言で言っても
その選択肢の多さが見て取れる。
「かといって体重に物を言わせて突破したら引き技が待っている、か、厄介だな。」
「だがそれでも突破力が無いとなぶり殺しに合う、ここは大峰で行くぞ！」
桐仁の言葉にウス、と頷く大峰。
「ねぇ、七瀬って言ってたけど、あのマネージャーさんのお兄さんかな？」
柚子香の問いに千鶴子が答える。
「みたいね、兄妹で名門白楼の相撲部ってことは、相当相撲に精通しているでしょうね。」
中堅、北谷の映像が流れる中、一同は呆然とその相撲を見る。
「・・・なにこれ。」
松本がようやくそれだけを口にする。無理もない、北谷は相手のやろうとした事を
その初動か、それ以前に封じて相撲を取らせない、明らかに相手を研究し、丸裸にしている。
「2年前の天王寺もそうだったが、研究し尽くして対策を練るタイプだ。ちなみにウチの県予選も
きっちりチェック入れられているぞ。」
そう言って女子3人に目配せする桐仁。何故か柚子香がへっへーん、と胸を張って得意気だ。
確かにお手柄だが、それが相手のマネージャーの自爆であることは黙っておく。
「小細工するタイプは向かないね、だとしたら情報も少ない赤池君、頼んだよ。」

蛍の言葉にうぅっし!とガッツポーズする赤池。確かに小細工するより力づくで倒したほうが
勝ちが見える相手だろう。
副将の久留田は典型的な大型選手、そして怪力が売りだ。アンコ型の体形もあり、
こちらが当てる相手はすぐ決まった。
「松本、頼むぞ。」
陽川が彼の肩を叩いてそう激励する。陽川にとってアンコ型の相手は天敵に近い、
腹に乗せられての吊り負けが多い彼に対し、松本は逆に同じアンコ腹で腕を挟み込む
『お腹極め出し』が使いやすい相手。
「今日、長い相撲だったから十分に体を休めておくように、明日もしんどい一番になるよ。」
諸岡顧問の言葉に、柳沢にマッサージされながらうーい、と頷く松本。
国宝候補を破った男の、その太々しい態度が逆に頼もしさを感じさせる。
「大将の舟木だが、今さら言うことは無いだろう。三ツ橋、頼むぞ!」
桐仁の言葉に全員が、そして蛍が力強く頷く。かつてダチ高の部室で聞いた、石高の荒木の
言葉通り『何をしてくるか分からない』相手にぶつけるには蛍以外の選択肢がない。
とにかく先手を取られるといいように蹂躙されてしまう、ならば蛍の速い相撲で
先手先手を打っていくことが一番明確な活路だろう。
何より強豪鳥取白楼、その大将にぶつけるのに三ツ橋部長以外の選択肢は無かった。
勝つにしても負けるにしても、最後は『蛍丸』に任せたい。
と、千鶴子が立ち上がり、蛍と桐仁に近づいていく。
「いよいよ明日、これが最後ですね、部長、監督。」

そう言って手をグーに握り、ふたりの間に差し出すマネージャー。
あ、という表情でお互いを見る。そう、明日でいよいよ彼らの大太刀高校相撲部員としての
最後の公式戦、３年間戦ってきた高校相撲の総決算となる一日。
「そういや僕ら3人は後発だったんだよね。」
「ああ、そうだったな。色んな事があった。」
蛍と桐仁も拳を出して、３方向からこっつん！と手を合わせる。
小関が守り、火の丸が育てた相撲部。佑真が加わり、國崎が力を貸すことによって強豪の
布陣が出来上がった。
そんな相撲部に憧れて蛍が加わり、それを後押しするべく桐仁が加入。その戦いを見て
千鶴子がその門扉を叩いた。
後発のその３人だけが残った相撲部で、再び全国の舞台に帰ってきた、頼もしい下級生たちに
支えられて。
火の丸という『熱』が抜けた後でも、３人でその日を再び灯してきた。その火は大きく広がり
全国の舞台で再度掲げる為に。
―明日は、笑って終わろう！―
３年間一緒だった３人がそうアイコンタクトする。周囲の１、２年もへへっ！と笑う。
それを見る諸岡顧問がうんうんと頷き、感慨に浸る。全国制覇した時よりも今、
彼らの顧問で良かった、と。

夜が明け、陽が昇る。国技館を黄金色の朝日が照らす。

会場には多くの角界関係者が詰めかけていた。柴木山親方は鬼丸や寺原と共に、隣には勿論
五條佑真＆レイナの姉妹もいる。反対側には沙田の出稽古先の皆

川親方と、三段目の兵藤も
荷物持ちとして姿を見せる。別の所には大和国親方が草薙と清心同（澤井璃音）を伴って座り
大会の行方を見守る。
長門部屋では朝稽古の後、部屋頭である童子切の提案で中継のＴＶに皆が群がっていた。
元々２年前の高校相撲の強豪を多くかき集めた長門部屋の面々にとって興味を引く大会だろう。
「小関、お前もこっち来て見いや！」
童子切が朝稽古で散々可愛がった（過酷にしごいた）小関に声をかける。童子切にとって
自分と同じくらい相撲に愛着がある小関が、実力で自分に追いついてこないのがもどかしかった。
コイツが俺と同じ目線まで来たら、さぞ高め合う相手になるだろうにと、普段の稽古でも
小関にはかなりキツく当たっていた。そんな彼に対するカンフル剤になればという思いがある。
ちゃんこの後始末を仲間に任せ、ＴＶの前に来る小関。そこに移る文字を見て目を輝かせる。
―団体準決勝、大太刀ｖｓ白楼―
「（辻・・・三ツ橋。よくここまで。）」
感激する小関の頭をわしっ！と掴んだ童子切は、意地悪な顔でこう語る。
「２年前の借りは返させてもらうでぇ、今の白楼は最強やからな。」
その言葉を聞いて、珍しく小関は反抗する。番付が遥か上の相手に対して。
「ダチ高も・・・負けません！」
そして開幕するインターハイ最終日。まず個人戦準々決勝から行われる。
第一試合は国宝『三日月』こと沙田が２１１ｃｍの荒巻と対戦。なんと沙田は立ち合いから

半身に構えて両手で荒巻の片手をおっつけて見せる、そのまま小手を振り回し、
崩れた相手の懐に潜り込んで速攻の下手投げで仕留めてみせた。
第二試合は国宝『圧切長谷部』黒田の突進に対し、細川は何度も体をいなし、
横を取ろうとするが、それでも相手を振り切れない。やがて正面から体を合わされ、
そこから両者、力相撲を演じた結果、黒田が押し切った。
第三試合、驚異の引き足で大会を沸かせた福井の朝倉が、懸命に追撃する静岡の今井を
土俵際ギリギリで躱し切って横を取り、そのままケリをつける。
そして第四試合、白楼の国宝『備前長船』に対するのは乾坤一擲の力出しを得意とする
徳島の菅。捕まえてしまえば菅にも十分に勝機があると見られていた。
―はっきよい―
舟木は意外にも正面から組み合う、お互い右四つで両マワシを引く、これは菅の形！
同郷の赤池が金星を確信して拳を握る、そして菅が吼える、気を吐く。
「けぇらあぁぁぁぁっ！」
その雄叫びと共に一気に舟木を吊り上げようとする。が、菅の膂力をもってしても
舟木の体は浮かない、舟木は右足を菅の左足に『内掛け』で絡め、浮かされるのを防いでいた。
皮肉にも昨日、赤池が見せた吊りに対する防御を舟木も見せていた。
「ほんなら、こうや！」
菅はそのまま絡められた足を外から『外掛け』で狩り返す、前に体重を浴びせ、舟木を
後ろに倒そうとする。

だが舟木はすかさず残った左足を体の真下に持ってくると、まるでカカシのように
片足立ちでバランスを取り、菅の外掛けに崩れる様子を見せない。
「どういうバランス感覚だよ！」
観客席で見ていた荒木が吐き捨てる。むしろ仕掛けた菅の方がバランスを崩され気味ではないか！
そう思った瞬間、舟木は片足立ちのまま体を回し、内掛けからスムーズに掛け投げに持っていく、
前に体重をかけていた菅はその重心変化に成す術なく1回転し、背中から土俵に落ちる。
「なんか、池西さんを思わせますね、あのバランス感覚。」
柚子香の言う通り、あの片足立ちからのバランスの保ち方は柚子香が戦った池西レモンの
戦いを彷彿とさせる。だが舟木は１７５ｃｍ１２３ｋｇ、その体格で女子の軽中量級の選手に匹敵する
バランス感覚を持っているとは！
「（根太起は・・・通用しない、かも。）」
蛍が息をのむ。あのバランス感覚を持つ相手に足技が通用する可能性は限りなく低い。
蛍が積み重ねてきた『潜る相撲』の根幹である技が通じないとなれば・・・

―次に団体戦、準決勝第一試合を行います。東、千葉県大太刀高校。西、鳥取県白楼高校！―
場外アナウンスに会場が沸く。いよいよ天王山の一戦、勝つのはどちらか。
「（よし、オーダー変更無しだ！）」
桐仁は整列する相手を見てほくそ笑む。オーダー次第では勝ちの目も十分にある組み合わせ。
これならいける！
―先鋒戦。東、辻。西、バトムンフ―

土俵に上がる両者。辻はバトを見据えて対峙する。その瞬間彼が感じたその感情。

相手のバトから放たれるその『気』の圧を受け、彼はその思いにとらわれる。

それは絶望、後悔、そして・・・戦慄！

―勝てない―

第７４番　白い狼

桐仁は見えていた。バトの背後にあるモンゴルの大平原と、そこで相撲を取る少年たち。

そんな彼の原風景と、その先にある『力士』としての威厳の両方を備え持つその姿を。

「（・・・昨日までと、まるで別人じゃないか！）」

そこにいたのは、追い詰められて焦燥に駆られた昨日までの飢えた狼のような彼では無かった、

ハリのあるつややかな筋肉は躍動感に溢れ、その佇まいや所作は余裕と漲る力で満ちている。

そしてその相手、バトムンフの表情は堂々として緩まず、猛らず、正面と未来を見据える、

あの草薙の静謐さと、童子切の相撲を楽しむ子供の様な欲求を併せ持つその存在感！

その王者の風格、まさに平原に佇む白き狼の如く。

―はっくろうっ！はっくろうっ！はっくろうっ！―

観客席から白楼の補欠たちが声を上げる。昨日までは無かったバトに対する声援がこだまする。

その応援は学校名であるはずなのだが、桐仁には目の前の相手を揶揄した『白狼』にすら

聞こえていた。

白楼のマネージャーリーダー、天王寺咲が礼をする両者を見上げながら思う。

さぁ、バトさん、無様な姿は見せられへんで！と。

昨日の事。会場にいた咲は久しぶりの相手から電話を貰う。柴木山部屋の選手、寺原から。

２年前に見学に訪れた時に番号交換したけど、その後は特に音沙汰も無かったのに

何事やろか?と会場の外に出て、返信電話をかけてみたんやけど・・・

『やぁ咲ちゃん久しぶり、柴木山です、いきなり電話してすまないね。』

なんと電話に出たのは親方の方やった。どうやら荷物持ちに来ていた寺原から電話を借りて

私にコンタクトを取ってきたみたいやな、何用やろ?

『不躾で済まないが、おたくの加納監督とサシで話したいことがあるんだけど・・・アポを

お願いできるかな?』

加納監督は快く了解した。皆が着替えてる間、ウチと一緒に会場の外で親方と面会する、

親方はまず深々と頭を下げた。

「大会中の忙しい最中、お呼び出しして本当に申し訳ない。」

うーん腰が低い。そらまぁ監督もヒマな身じゃないんやけど、むしろそこまでして

監督に一体何の用やろ。

「いえいえ、別によろしいですよ。それで、要件とは?」

その監督の言葉に、親方はとんでもない爆発断言を返してきよった。

「お宅のバトムンフ・バトバヤル君。もし大相撲に進むなら、是非ウチにスカウトしたいと

思いまして・・・」

この時の加納監督の表情は、ウチが高校3年間で見たこともない表情やったなぁ・・・

口開けたまま完全に固まっとったわ。

「あ、もしもう他の相撲部屋に入門が決まってるなら、この話は無かったことに・・・」

そう言う親方の肩をがしっ!と掴んだウチの監督は、親方にかぶりつかんばかりの勢いで

「決まってません!決まってませんので是非に!ええ、あの子は逸材です、間違いなく!!」

思わず親方が後ずさりするほど押しに出る監督、いやぁ貴重な絵面やな・・・。

親方いわく、部屋に所属しとる薫風（くんぷう）さん、台湾出身の選手がこの度

廃業を決意したらしく、柴木山部屋の外国人力士枠がひとつ空くみたいや。

元々期待された選手だったらしいけど、ケガをすることが多く幕下と三段目を

行ったり来たりで上がり目は望み薄やったらしい。

そこに鬼丸が入門してきて、一気に自分の番付を抜き去るのを目の当たりにして

自分は上に行ける人間やないという現実を理解せざるを得んかったみたいや。

けど、彼も国に帰ったら家族に負担をかける事になる、5人兄弟の末っ子らしいんで

なんとか日本に残りたかった、そんな彼の相談を受け、親方はちゃんこ番として

薫風さんを雇うことにしたらしい。

ちゃんこ番長の薫富士さんが引退して自分の店を持ったんもあって、ちゃんこの質の

低下が問題になっとった柴木山部屋で、台湾料理風の彼のちゃんこは好評だったらしい、

そして何より薫風さんはマッサージが上手で、力士たちのケアをする担当としても

重宝されとるんで、色々適任やったみたいやな。

そんなこんなで空欄になった外国人枠、バトさんに白羽の矢が立ったちゅーワケやな。

とまぁ冷静に言うとるけど、ウチもホンマ嬉しいわ。バトさん親方のファンやし、

サインまで貰うとったくらいやからなぁ。

「それでなんですが、今は大会中ですし、彼にその事を伝えていいもの

かと思い
こうして監督に相談に上がった次第で・・・」
「今すぐ!今すぐ伝えてやってください!!お願いします!」
恐縮する親方に再びがぶり寄るウチの監督、中年二人のこの絵面はきっついわぁ。
しかしこらバトさん絶対大泣きする流れやな・・・
果たしてバトさんは大泣きに泣いた。柴木山親方の両手にすがり付いて感謝感激し
ボクの一生を捧げマス!絶対横綱になって見せマス!と大声で口上を述べる。
そんな彼を見て、ウチも他のマネージャー2人も思わずホロリと来る。周囲にいる相撲部の
仲間たちは皆一様に歓喜のガッツポーズをし、大勢の補欠応援団達は万歳三唱をしている。
嬉しいんやけど、周囲の他校生徒の視線が痛いわ・・・

観客席で複雑な表情を見せるのは、見物に来ていた柴木山親方だった。こりゃ辻君には
悪い事をしたかな、と。
でもまぁ学生同士がお互い万全の状態で戦えるのは悪い事じゃないし、辻君はウチじゃなく
長門部屋に行くみたいだし、まぁいいよなと納得する。
何よりバトが自分の部屋に来るのは楽しみであった。外国人にとって相撲部屋の封建的な
しきたりや厳しい稽古は辛いものがあるだろう。事実それに耐えきれずに相撲を諦める
有望な選手も少なくない。
だが彼ならウチの猛稽古にも耐えてくれるだろう、その気迫あふれる相撲は、鬼丸に続き
またひとつウチの稽古に熱を入れてくれるに違いない、無論彼の投

げの技術にさらなる
『体』を上乗せ出来たら本当に横綱もあるかもしれない、入門が楽しみだ。
・・・ただ隣に座っている五條兄妹、特にレイナちゃんの非難の視線が痛いけど。

―手をついて―
仕切りながら桐仁は作戦変更する。攻めを受けつつスキを突く作戦だったが、どうも今の
バトにその戦法は通用しない気がする、ひしひしと。ならば先手を打って一気に決めにかかる、
これしかない！
―はっきよい―
桐仁の頭からのぶちかましを、とすっ、と胸で柔らかく受け止めるバト。すかさず肩で押し合い
マワシを探る。左下手を掴み右上手を取り合う両者。
「（コイツ・・・持久戦を！）」
桐仁が毒づく。自分のスタミナの無さを見抜かれているのは覚悟の上だが、狙いの速攻勝負を
仕掛けることまで見透かされている、このままじゃダメだ、とスッと力をオフにする。
次の瞬間、バトの豪快な下手投げが桐仁を振り回す。足さばきで耐える桐仁に組み付いて
一気に寄りに出る。
桐仁は腰を割り、相手の寄りを受け止めると、そのまま巻き落としを仕掛ける。踏みとどまった
バトの足を蹴手繰って崩しにかかるが、バトも動じずにもろ手で突きはなして追撃を許さない。
土俵中央で再び組み合う両者。じりじりと重心をかけながら圧力で攻め、相手の体力を奪いに
かかるバト。

桐仁は小さくすくい投げを打って相手を崩すと、すかさず相手の腕を手繰って身を外に出し
とったりでネジ伏せにかかろうとする。が、バトは素早く身をひるがえし、腕を取られたまま
正対するとすかさず下手を取り、片手吊りで相手を崩して取られていた腕を切る。
「いい緊張感ダ、ナーダムを思い出すヨ！」
バトは投げを打ち合いながら、かつて平原でモンゴル相撲『ブフ』をしていた頃を思い出す。
あの頃もキレの投げを打つ相手と青空の下、よくこうして転がし合っていたものダ。
「（くそっ！こいつ、こんなに躍動感のある相撲を取る奴だったか・・・？）」
振り回されながら桐仁は嘆く。昨日までの余裕のなさはどこへやら、今は実に生き生きと
相撲を楽しむかのように、速く力強い投げを次々と仕掛けてくる。
切り返す技が得意な彼が凌ぐのが精一杯であるほどに。
「そうだバト、それが本来のお前の相撲だ。」
加納監督が腕組みしたまま土俵を見上げて悦に浸る。あの雄大な大地で思う存分
大きな投げのモーションを持つブフをしていた彼にとって、二つの意味で日本の土俵は
狭すぎたのだ。ひとつは単純な広さ、もうひとつは外国人に対する門扉という意味で。
そのひとつが昨日開いたことにより、彼本来の相撲が再び蘇った。
枷を外された彼は
もう相手の得意分野で勝負する必要はない、思う存分お前の相撲を取ればいいんだ！
激しく動き回っていた二人が、がっぷり四つで組み合って土俵中央、動きが止まる。
「ゼエッ、ゼエッ、ゼエッ・・・」

大きく呼吸を乱す桐仁、ここまでの攻防でもう彼の時間は残っていなかった。次が最後の
攻防になるだろうことを確信し、覚悟を決める。
バトが動いた。両マワシを取った彼はそのまま桐仁を吊ると、そのままカニ歩きのように
真横に体を滑らせる。
「横吊り！」
相手を自分ごと土俵際に持っていくと、その勢いを利用して掛け投げを仕掛ける。
横移動の勢いを生かした投げに、桐仁の体が宙に浮く。
「ここだ！」
桐仁は最後の力を振り絞って、浮かされる直前に自ら飛んでいた。
バトの真上に！
「（このまま俺の体重を浴びせて押しつぶす！）」
掛け投げは足で相手の体をはね上げる技であって担ぎ技ではない、その片足立ちの最中に
まさか相手がのしかかってくるとは思わないだろう、軽量の自分でもこの姿勢なら
『浴びせ倒し』で潰すことも可能なはずだ！
おおおっ！と会場が沸く、土俵際で『静止』した両者に。
なんとバトは片足のまま、のし掛かって来た桐仁を担いだ状態で耐えていた。なんという足腰か！
そのまま軸足の向きを変え、改めて片足を安定させてから、持ち上げていた桐仁の体を
土俵の下に投げ落とす。
どどぉっ、と土俵下に落下する桐仁、なんとか受け身は取れたが・・・
―西、バトムンフの勝ち！―
行事の声が響くと同時に、白楼の面々が沸き立つ、ダチ高相撲部が天を仰ぐ。
「ヒュウ、ヒュウ・・ぜはぁっ、ハァッ、ハァッ。」
息も絶え絶えに倒れたままの桐仁、仲間の酸素スプレーを拒み、よ

ろよろと起き上がって
土俵に上がり、礼をして降りる。イスに雪崩れ込むように座ると酸素スプレーをひっつかみ
呼吸をむさぼりつつ、一言。
「ったく、俺の、オーダーって、何でこう・・・外すんだよ・・・」
相手が昨日のままなら桐仁で正解だっただろう。しかし今の彼の相撲はいわば桐仁と同じ
投げ主体のキレる相撲、体格で一回り上の相手に持久力のない自分が挑んでもそりゃこうなる。
ちなみに土俵上では、勝利して派手に雄叫びとガッツポーズを披露したバトが、審判団全員に
厳しくお説教をされていた。頭を抱える加納監督の横で、咲はヤレヤレ、といつものバトさんを
笑顔で見上げる。
先制したのは白楼。このまま一気に行くか、大太刀の反撃はあるのか・・・？

第７５番　ナンバーシステム

長門部屋、高校相撲インターハイＴＶ鑑賞会中。
「おー、バトの奴絶好調やねんな、あの鬼切を一蹴しよったわ。」
部屋頭の童子関がアゴをさすりながら、後輩の勝利に笑顔でそう語る。かつてのバトの
荒さや危なっかしさのない、充実した内容での完勝に思わずほくそ笑む。
「悪いな小関、２年前の借りは返させてもらうでぇ。」
そうおどける童子切に対し、小関はう・・・とうめくだけ。元々番付が遥か上の相手に
こんな時でも強く出るような性格ではない上、あの辻が完敗する展開とあっては
反論の余地もない。
「なんやなんや、そこは『こっから逆転や』とでも返さんかい。」
上機嫌でそう煽る童子切。小関もそうだが、どうも関東の連中はノリが悪くていかんなぁ、と
頭をひねって一考し、こう提案する。
「よっしゃ！もし白楼が全国制覇したら、今夜は俺のおごりで皆で焼き肉や！」
その言葉におおおっ！と沸く長門部屋。特に小関含む下っ端のちゃんこ番連中にとっては
夕食の用意の手間が開く分、自分たちの時間が取れる事にもなる、ありがたい。
「で、もし大太刀が優勝したら、小関の要求をひとつ飲んだるわ、何がええ？」
思わぬフリにえっ！と真顔になる小関。が、すぐ察する。さすがに２年も同じ部屋にいるし
これは降ってわいたチャンスではなく、自分に対する別のフリであると。
「じゃあ、その時は皆に焼き肉おごって下さい。」

「一緒やないかーいっ！」
小関の頭を軽くハタく童子切、部屋内に笑いが響く。
「っと、2陣戦始まりますよ、白楼は七瀬選手・・・ソップ（痩せ型）ですねぇ。」
「そういや白楼はチームカラーが『カラフル』って言ってましたね、彼もそんなタイプですか？」
そんな力士たちに童子切は自慢げにこう返す。
「おう！七瀬はとびっきりのな。何せ元ボクシング選手やからなぁ。」

「さて、出番やなタケ兄ィ、勝って来ぃや！」
鳥取白楼のマネージャー、七瀬　瞳が2陣選手の兄、武夫を激励する。彼はまかせんかい、と
腕をぐっ、と曲げて答える。中学までボクシングを習ってきた彼だったが、背が伸びすぎたため
ウェイトコントロールの難しさからプロの世界に進むことを断念する。
地元の白楼高校に入学して、その経歴を知った加納監督に誘われるまま相撲部に入部する。
そして相撲は肌に合っていた。自分より大きい相手を思う存分殴れる世界、何より体重を
気にせずコンディションが作れる世界にごく自然に馴染んでいった。
2年生時の先輩であり、当時の主将が榎木であったことも彼をより相撲に馴染ませた。
合気道と相撲の融合が可能であるように、己のボクシング技術を相撲に生かせる術が
あるということを率先して教えてくれたから。
そして3年の今、彼は強豪白楼のレギュラーとして2陣戦を担うまでになっていた。

「あ・・・親方!・鬼丸関も。見に来ていたのか。」
土俵の反対側で、ダチ高2陣の大峰が観客席にいる二人を見つける。
なんか白楼のバトが勝利の後で、観客席にペコペコしてるな?と思ってその視線の先を
追ってみたら、世話になった二人が目に入ったのだ。
瞑目する大峰。自分はプロの世界に進みたい、ならばここでいい所を見せ、親方から
喜んでプロ入りを勧められるくらいにならないといけない、と気合を入れ直す。
両者気合十分、2陣戦の開始である。
―東、大峰。西、七瀬―
大峰１８１ｃｍ１３５ｋｇ、七瀬１８５ｃｍ９６ｋｇ。対峙すると体格の差は歴然だ。だが七瀬のその太い腕は
ここまでも大型選手を何人も土俵下の放り出してきた。その突き押しが今回も炸裂するか、
それとも・・・
―はっきよい!―
頭からぶちかます大峰に対し、なんと七瀬はいきなり変化する。踏みとどまった相手に
すかさず強烈な突っ張りを連打する。
「ぶっ!?」
面食らう大峰。変化から突きがセットになっているばかりか、その突きの連打も実に様々な
パターンをはらんでいる、それが間髪入れずに飛んでくるのだからたまらない。
今大会、ダチ高は突き押し相撲の選手を何人も見て来た。しかし七瀬の突きはその誰とも
似ていない、性格の違う突きを5~6発まとめて放つその攻撃は、相撲の突っ張りと言うより
打撃系格闘技のコンビネーションブロウを思わせるのもがある。

「ナンバーシステム、今日も調子良さそうやなぁ。」
咲が瞳にそう話す。ボクシングでよく使われる連続攻撃、ナンバーシステム。
相手の体の急所に番号をふり、相手の姿勢やスタイルに応じて番号順に攻撃する戦法。
七瀬はこれを相撲の突き押しに取り入れた、押し、張り、手を添えてのつっかい、
下から相手の上体を起こす突き上げやかち上げ、さらに踏む込まれた時の変化や回り込み。
それらに番号を付け、決め打ちで一気に5~6アクションを1セットで叩き込む。
無論、最初から上手くいったわけではない。何しろ相手がどうあろうと次の手が出てしまうのだから。
折角相手がのけぞった時に引いてしまったり、牽制が空振ったのに追撃を放って組まれたりと
失敗を重ねる毎日が続く。
しかし研鑽を重ねるうちに、そのコンビネーションは次第に的確さを増していき、やがては
相手がアクションを起こす前に次の突きを放てるという武器に進化していく。
―パンパンッ、ドンッ、ぐいっ、ゴッ!―
多彩な突きに、大峰も得意の回転の速い張りで対抗する、強烈な突き合いに会場のボルテージが
上がる。しかし単調な大峰の突きに対し、いなしや間合い取りを含んだ七瀬の突きはより効果的に
相手の体を捕らえ、押し込んでいく。かといって体重を利して突破しようとすれば、まるで
見越したように叩かれ、横に回られてまた張られる。
「何とかして捕まえないと・・・」
千鶴子が思わず嘆く。彼女が調べた七瀬のデータでも、彼の敗戦はすべからく組まれてから

土俵を割らされるパターン、捕まえなければこのまま滅多打ちに合うだけだ。

「(組ませねぇよ!)」

七瀬が心で吐く。こういうアンコ型の選手に組まれることの怖さを彼は良く知っている、

だからこそ常日頃から張り手のパターンを磨き、捕まらずに勝つ方法を模索してきたのだ。

ましてやチームメイトには投げのバト、巨漢の久留田、そして躍動感のある相撲を取る

舟木がいる。彼ら相手に磨いてきた捕まらない相撲で、俺は白楼のレギュラーになったんだ!

「大峰、苦戦じゃな・・・」

観客席で鬼丸が嘆く。その隣では五條佑真が七瀬の張り手の見事さにに唸っている。

横のレイナだけは大峰に大声で檄を飛ばすが、旗色が悪いのは明らかだ。

彼らを横目に親方は厳しい目で土俵を見つめる。

「(ここが我慢のしどころだぞ、大峰ちゃん・・・)」

ついに土俵際に詰まる大峰。懸命に張り返すが、それでも相手の体の芯を捕らえられない、

このままでは押し出される、かといって体ごと突っ込めば叩かれる、まして巨漢の自分には

桐仁の様な土俵際の切り返しも、蛍の様な回り込む『円の相撲』も無い・・・どうする?

「(組みさえできれば・・・)」

相手はチームメイトの陽川に似た体格、組んでしまえば腹に乗せて土俵下まで運べるだろう

だがその唯一の条件が見つからない、陽川なら簡単に組めるのに・・・陽川?

大峰は思い出す。つい昨日陽川が、国宝候補を喰った時の相撲、そのシーンを!

七瀬は左手を相手の肩に添え、右手でストロークの長い突きを放つ、これで1セット終わり。
土俵際でのけ反った相手を見て、トドメのコンビネーションを素早く選択し、撃とうとするが・・・
「何?!」
引いたはずの左手が戻らない、なんと大峰に『手四つ』で捕まえられている。その一瞬の
心の隙に、突き出した右手も同じく指を絡められ、組み合わされていた、両手の手四つ!
ここで両者、力比べに突入する。
「っしゃあ、捕まえた!」
「行け、押し返せーーっ!」
意気上がるダチ高勢、だが白楼側はその光景を余裕の目で見つめる。
「七瀬に手四つ?そりゃ愚策だろ。」
「お生憎様、ボクサーの握力舐めないでね。」
七瀬妹の言葉通り、七瀬が手四つで大峰の腕を押し込んでいく、大峰はたまらず
両手を下に向け、腰を割ってこらえるが、そのまま押し進められめ、ついには両手を
体の後ろまで持っていかれる。これは勝負あった・・・か?
「・・・捕まえた。」
大峰が低い姿勢から、相手を見上げてそう呟く。顔を張られて腫れあがった大峰の強面が
ニヤリと笑って睨み上げるその顔は迫力満点だ。
―ずっ、ずずっ―
「・・・は?」
七瀬の妹、瞳がすっとんきょうな声を出す。大峰が手を後ろに回されたまま、それでも
七瀬を押し返して少しずつ前進している・・・アホな、なんで?
二人は胸から腹までぴったり密着した状態で、しかも大峰の大きな

腹に七瀬の腰が
乗っかってしまっている、今まで手四つの体制だったのに・・・あ！

「あの野郎！考えやがった。」
桐仁が拳を握って歯を見せる。手四つで押し負けたのではなく、相手の腕を自分に
引きつけることで、体と体を密着させたのだ。あの後ろ手は押し負けたんじゃなくって
自分で引いて、引きつけているんだ、相手の体ごと！
「ぐっ!!」
七瀬は押されながら臍を噛む。手を握られて体をぴったりくっつけられている以上、
左右に身をかわすことが出来ないし、腕を外すことも出来ない。腕を抜くには後ろ方向に
力を入れねばならず、そうなれば一気に寄り切られるだけだ、腕を抜けなきゃ突きも出せない。
前に寄ろうにも相手の腹に腰を乗せられては寄れるはずもない、手四つになってすぐ相手が
腰を割ったのはこのためだったのか・・・俺を引きつけ、腹に乗せるために！
―ずずっ、ずっ、ずずっ―
一歩、また一歩、七瀬の空間が無くなっていく、ついには土俵際まで追い詰められる。
そこで大峰は顔を真っ赤にして力を入れ、再び手四つを押し返す。
「ふんぬーっ!!」
気合一閃、両手が再び二人の中央まで戻される、渾身の力を込め合う両者。
だが、体勢互角ならともかく腰の浮いている七瀬が、腰を割っている大峰との力比べに
勝つ術は無い。腰を割り直そうにも、足を後ろに出すスペースが無い、そこは土俵の外だから。

―寄り切って東、大峰の勝ち！―

両者大汗をかきながらの力相撲はこうして決着した。五分に戻し歓喜に沸くダチ高に対し

白楼サイドは皆一様に『その手があったか！』とうんうんと納得し、七瀬に少しは残念がれ！と

ツッコまれている。

観客席の柴木山親方もうんうんと拍手を送る、本当に彼は自分の現役の相撲によく似ている。

バト君も獲得できた事だし、このさい来年は彼も誘ってみるか、と心に決める。

1―1のイーブン、勝敗のカギを握る次の中堅戦。天王寺獅童の後継者とまで言われる

データ相撲の鬼、白楼の北谷に対するはダチ高の燃える闘魂、赤池！

第７６番　努力人

「さて、出番やね。頼むで北谷はん！」
白楼の女子マネージャーの咲が、田中が、七瀬が、北谷の前にグーの手を突き出す。
北谷は拳を握り、その手をコツコツコツと合わせで頷き、返す。
「行ってくる。」
―東、赤池。西、北谷！―
赤池がばんばんと顔を張り、気合を入れて土俵に上がる。1―1の中堅戦、負けられない一番。
ましてや同郷の菅がついさっき白楼の選手に負けたばかりだ。なんとしても勝つ！と
意を決して北谷を睨む。
そんな相手を見て北谷は少し顔をしかめる。痛いだろうによくやる、と。
―はっきよい！―
赤池のぶちかましを、少し身を引きつつ柔らかく受け止める北谷。
両者下手を取り、
赤池が右上手を取りに行ったそのタイミングで、北谷は下手をひねって相手を奇麗に崩す。
「く・・・！」
こらえる赤池の左下手をおっつけて殺すと、そのままずいずいと胸を合わせて寄りに出る。
密着した赤池は頭突きを放つが、北谷はすいっと首を倒して避け、相手の肩をアゴで挟み込む。
ならばと腰を割り、吊りに出る赤池。手の内を読まれるのは覚悟の上だ、それなら馬力で
押し切ったらぁ、と。
だがその馬力をかけさせて貰えない、吊りに出たのその瞬間北谷は一歩後退し、
吊りのベクトルを真上から斜め上にすらして殺す。その勢いつい

でに寄りに出た赤池を
下手投げであわやの所まで崩すと、一度離れて張り手を見舞う。張り返しに来る赤池の手を
悠々とくぐってその懐に入り込む。
「なんだよ・・・まるで打ち合わせてるみたいな相撲じゃないか。」
沼田が思わずそう嘆く。よく知った赤池の激しい相撲が、まるで全て見透かされて
いいようにあしらわれているその姿に愕然とする。
他のダチ高の選手たちも信じられないという表情で冷や汗を流す。
「だが相手も楽ではあるまいな、表情を見れば分かる、北谷君も必死だ。」
そう言って皆の注目を集めたのはダチ高顧問の諸岡だ。かつてレスリングで様々な
選手を見、対峙してきた彼にとって、その戦術が綱渡りであることが見て取れる。
「(くっそ、相撲を取ってる気がせん!ダンスでもしてるみてぇや!)」
赤池が思わず嘆く。こちらの渾身をことごとく外され、まるで作業でもするように
あしらわれ続ける。事前の情報が無ければとうに転がされていただろう。
上から素首落としを打ち下ろす赤池の右手を、なんと下を向いたまま掴み取る北谷。
「ちょ、超能力者かよ!」
思わず吐く幸田の横で、桐仁はかつての五條佑真の『見えない箇所の体の動き』を把握する
技術を思い出す。だがすぐによぎるのは違和感、北谷はどう見ても五條の様な
向こうっ気の強いタイプではない、むしろその相撲は優等生のイメージすらあった。
「「行け!行け!きっただにっ!」」
観客席から白楼補欠の応援団の声が飛ぶ、たゆまぬ努力で自分たち

を追い越し、
晴れの舞台に立つ『元マネージャー』に、尊敬と祝福の色を込めて。

北谷　真。鳥取白楼高校３年、１８３ｃｍ１１９ｋｇ。
関西の強豪校であり、プロ志望が多く集まる白楼において、全くの初心者からレギュラーの
座を獲得した男。だが、そこに至る道は決して平坦では無かった、彼は相撲以前にそもそも
格闘技自体の才能が無かったのだ。
彼は『痛がり』だった。ふちかましや張り手を食らうたび苦悶の表情で崩れ落ち、
土俵に叩きつけられる毎にのたうち、立ち上がることが出来ずにいた、受け身を取っていても。
多くの生徒が、監督が、マネージャーさえも、彼は向いてないと思わざるを得なかった。
やがて彼は選手のケアや雑務、他校の偵察などのマネージャーとしての仕事に回される。
淡々と仕事をこなす彼に、皆は『収まる所に収まったな』と安堵していた。
だが北谷本人だけは違っていた。僕はこんな事をする為に相撲を始めたんじゃない、
見るためじゃなく、自ら土俵に上がって戦うために入部したのに！
努力はしたつもりだった。だがそれは白楼の選手なら皆当たり前にやっている事、
格闘技の才能が無い痛がりの自分に、彼らとの差は開くばかりだった。
「（どうする、どうすれば僕は強くなれる・・・）」
マネージャーの仕事をしながら彼は苦悩する、このまま卒業まで出番なしなんて嫌だ！
後輩のフンドシを洗濯し、土俵には掃除をするためにだけ上がる毎

日。本来生真面目な彼は
表向きは仕事をこなしつつも、陰でひとりグチる事が多くなっていた。
「なぁ北谷君、ウチの兄貴知っとる?」
ある日、同級生のマネージャー、天王寺咲にそう声をかけられた。
もちろん彼女の兄を
知らないはずが無い、1年の時の主将であり、大相撲に進んでからも番付を駆け上がる童子切関を。
「兄貴は相手を徹底的に研究してたで。君は今マネージャーやし、そういう相撲目指してみん?」
努力、というのは自分を鍛え、虐めるだけの事だと思っていた。だが咲のその言葉で彼は
研究や研鑽という『見る側』での努力もあることを知る。
そして彼は、やがて彼独自の稽古方を考案する、それが彼の運命を大きく変えた。
大相撲が開催されている15日間、彼は何と幕内の全取り組みを見て、それを自分で
トレースし始めたのだ、勝つ側と負ける側の両方で。
最初は誰にも相手にされず、同じマネージャーの咲や田中、七瀬に頭を下げて行っていた。
ジャージのまま3軍の土俵の隅で彼は女子マネ相手に転がされる、周囲の嘲笑に耐えながら。
そんな彼の姿を見て、監督は土俵への復帰を許可する。ケガをしないように隅でやるなら
その特訓を続けてもいいと。こうして彼は連日30番以上、大相撲の取組をモーショントレース
し続ける。名門白楼なれば大相撲の力士と相撲の似た選手には事欠かない、彼らを相手に
どうすれば負けるのか、どうすれば勝てるのかをその動きや流れで学習していく。
それは地味な積み重ねではあったが、それでも彼の努力が他の誰よ

りも濃かったのは
部員全員が身に染みて感じていた。
彼に『勝てなくなった』者から順に。
そして3年の夏、インターハイ出場選手を決める部内戦で彼は全勝してみせたのだ、
あのバトや舟木にすら！
戦術を研究し、それに対する対応を極めた彼にとって、普段から稽古しているチームメイトは
まさに丸裸の状態だったのだ。大相撲のトレースで勝ち身を磨き、仲間の稽古を間近で見ることで、
その取り口と対応方法は全て彼の手の内にあった。
だが身内にしか勝てないなら大会では使えない、そんな彼を支えたのは3人の
女子マネージャーだった。
彼女らが集めて来た各校の選手情報や動画は北谷にとって万金の価値があった。咲達もまた
かつて自分と同じ立場で働いた彼の為に精力的に情報収集に当たった。何より彼のその努力研鑽の
日々を見て来た彼女たちにとって、土俵に立つ北谷は『もし自分が選手だったら』という思いの
代弁者でもあったのだ。
そして鳥取県予選が終わる頃、彼は『天王寺獅童の後継者』とまで呼ばれるようになる。
だが、白楼のチームメイトだけは別の見解を彼に抱いていた。
『白楼一の努力人』と。

取られた腕を内に巻き込んで殺され、土俵際まで押し込まれる赤池。このままやアカン、
どないかして流れを変えな、と。だが押しても吊っても全て相手の手の内だろう、八方塞がり、か？
―赤池君、手の内バレバレだったよ―

思い出した、いつか部長に言われた台詞。いつもウラをかかれて稽古でも苦手だった相手の言葉！

思い立ったが行動、なんと赤池は引き気味に身をかわしつつジャンプしてみせる。

「八艘飛び!?」

まさかの赤池の引き技に体が反応しない、思わぬ相手の行動に北谷は意表を突かれ体が泳ぐ。

距離を取って対峙する両者、赤池はその北谷の表情を見て思わず安堵する。

「（なんや、オドレも必死やないかい！）」

いいように踊らされていた彼にとって、もし相手が余裕綽々ならば絶望感があっただろう。

だが相手も必死だ、ひとつ上回れれば俺にも勝ち目はある！気合を再注入して組み付きに行く。

ここで初めて両者がっぷり四つになる。ようやく五分の攻防の体制が出来上がる。

「んごおぉおぉおっ!!!」

この勝機を逃すまいと、渾身の力で吊りに出る赤池。体重はあるが身長の低い赤池が、

相手を腹に乗せて高々と吊り上げてみせた！

「おっしゃ！行ったぁ！」

「寄れえぇえぇっ！」

「それじゃあぁぁあっ！」

ダチ高陣営が、観客席から見ている徳島海洋美波の菅たちが歓喜の声を飛ばす。

北谷を吊り上げたまま土俵の反対側に走る赤池。

北谷は吊り寄られながらも、土俵際までの距離を測る。土俵の広さはそれこそ

日々のトレースで何度も確かめて来た、見間違うものか！

しばらく吊られるままだった北谷が、あるタイミングで腕を引きつけて腰を下ろす。

そのカカトが土俵際の俵に、まるでアンカーのように引っかかる。
「ぬおぉぉっ！」
今度は北谷が吼え、赤池を逆に吊り返す。相手の寄りの勢いも利用し、まるで
シーソーのように今度は赤池の体が浮く。
吊りを下ろした瞬間こそ、最も相手に吊り返されやすい瞬間なのだ。しかも寄りの勢いと
俵の掛かりまで利用されては、いくら重心の低い赤池でも成す術は無かった。
赤池を吊ったまま半回転し、土俵の外に降ろす北谷。
―西、北谷君の勝ち―
おおおおっ！と沸く会場。その北谷の技術と判断の冴えに驚愕の声を上げる。
白楼陣営は大いに歓喜し、ダチ高の面々はその技量差に思わず息を漏らした後、悔しがる。
礼をして土俵を降りる両者。北谷は再びマネージャー3人と拳を合わせると、仲間から
ぺちぺちと軽く小突かれる。これで2―1、久留田と国宝の舟木を残してのリードに
貰った、と思わず笑みが出る。
何よりバトが大願成就し、北谷がその努力で得た技術で白星をもぎ取った、これで
勝てないわけがないだろうと。
「すんまへん・・・」
頭を下げる赤池に、松本と蛍はその肩をバチンと張って答える。
「まだまだ！」
「取り返す、必ず！」
―副将戦。東、松本。西、久留田―

第７７番　部長に繋げ！

「久留田主将、頼みますよ！」

チームメイトの激励を受け、土俵に上がる久留田。１８４ｃｍ１５７ｋｇの巨体を誇る白楼きっての大型選手。

大舞台に上がりながら、そして対にいる、やはり大型選手の松本を見ながら彼は感慨に浸る。

「（ここまで生き残ったのは俺だけ、か。）」

２年前、鳥取白楼に入学した時から彼は大きな体と、中学時代の実績を誇る『期待の新人』であった。だが無論それは彼だけではない、彼の他にも恵まれた体と実績を持つ新入生は数名存在していた。

だがこの３年間で、彼らは公式戦選手から次々に脱落していく。様々な選手のカラーを大事にする白楼の指導方針は、体格や実績だけでは覆せない化け物を度々生み出してきたのだ。

様々な突き押しを繰り出す七瀬、工夫と努力の積み重ねで成り上がった北谷、人生を賭けた執念でねじ伏せるバト、そしてあらゆる戦法で土俵上を爆走する後輩、舟木。

そんな彼らに抜かされた期待の選手達。ある者はケガに泣き、別の者は心を折り補欠に甘んじる。

退学して大相撲に進んだ者もいたが、結局は通用せずに廃業した。

そんな中、久留田だけがチーム内で生き残り、その舞台に主将として立つ。かつて彼も相撲は自分の様な巨体を持つ者の独壇場だと思っていた。が、今ここにいるのは俺一人だ。

自分と同じ巨漢の松本を相手にして、彼はひとつの原点に返ったような感慨にとらわれる。

「（あの栄大付属の滝沢を破った選手、か。お前も『体』だけの選手じゃあるまい！）」

松本はかつてないプレッシャーを抱えて土俵に上がる、だがそれすらも彼にとっては
漲る力に変えることが出来る。楽天家でかつ『熱い戦い』を常に望んでいる彼にとって
この土俵はまさに望んだ舞台、思わず笑みがこぼれる、心臓が早鐘を打つ。

「（やる事はひとつ、勝って部長に繋げる、そうすればきっと、あの部長が何とかしてくれる！）」

確信があった、あの部長なら相手が国宝でもきっと何かやってくれる、と。
そのためにも勝たねば、ここで負けたらダチ高の敗北が決定する。
自分の全てを使ってでも
大将戦に望みを繋ぐ、と。
―はっきよい―
激突する両者。と、松本はかち上げからもろ手突きで相手の上体を起こすと、そのまま
突っ張りを連打する。

「松本!?」

受けの相撲が身上の彼の思わぬ攻めにダチ高の面々が驚きを見せる。何より意外に洗練された
その見事な押し相撲に。

「（僕の相撲は相手に知られてしまってる、だったら見せてない相撲を取るまでだ！）」

「まるで俺の突き押しじゃねぇか・・・」

大峰が土俵下で嘆く。いつも彼が松本に散々食らわせていたその攻めを再現している。
小さく、回転力の有る突っ張りが久留田の体を押し進めていく。
久留田はアゴを引き、体重を使って頭からこれを突破。最初こそ

データにない攻めに
面食らったが、受けてみればこの突きは練度に欠ける、所詮は急造の技だ！
その瞬間、久留田の体が泳ぐ。松本が突破した相手の体を瞬時に叩き込んだのだ。
「上手い！」
絶妙の『引き』に思わず桐仁が唸る、技もそうだがそれ以上にその一瞬の判断に。
「くっ！」
何とかこらえた久留田をすかさず横から捕らえ、組み付く松本。だが久留田もさるもの
ヒジをたたんで相手との体の隙間にこじ入れ、半身の体勢でマワシを取らせない。
そのまま土俵中央で動きを止め、差し手争いに入る両者。巨漢同士の攻防は自分の得意の形を
作った方に流れが行く。
小手に巻いた右手でおっつけに行く久留田、その瞬間松本は左手を引き、すくい投げを放つ。
崩したらすかさず巻き替え、左手で逆に相手の右手を抑える。
久留田はならばとハズ（脇下）を捕らえ距離を開けようとするが、すかさず胸を合わせ
ハズを取らせない松本、相手の先手先手を取って封じるその相撲、これは・・・
「滝沢君の・・・勝負勘!?」
記者席で名塚が思わず嘆く。ここまで後手後手で受けて来た彼の相撲とは違う、まるで
国宝候補『繁慶』滝沢の様な『後の先』を取る相撲、こんな相撲を彼が!?
「（いいぞ、次々と技が出る、いける！僕は勝てる！）」
受けの相撲を取ってきた松本、それは逆に言えば今まで様々な相手の戦法を体で体験してきた

という事。ならば僕ならその技を逆に使えるはずだ！開幕で大峰の攻めを使ってみたことが
彼に今までの経験で得た引き出しを開いたかの如く、受けてきた様々な技が溢れ出てくる。
相手の左手を捕まえ、右手を差し込んですくい投げを打つと同時に足を内股に跳ね上げる。
腕取り、掬い、掛け投げの同時発動。これは・・・
「俺の『天地返し』じゃねぇか！」
観客席で荒木が思わず叫ぶ。巨漢の松本だけに荒木のようなダイナミックさは無いが
それでも同じ巨漢の久留田を崩すには十分だった。残す相手を一気にずいずいと土俵際まで
押し込んでいく松本。
が、俵に足が掛かった状態で寄りは止まる。無理に押しに出ていたせいでマワシが
取れていない上、相手に右上手を許している。
「ここだ！」
松本は決断する、寄りを止めて両手を外に出し、巻き替えに行く。
相手の両手をお互いの
腹の中に押し込めて封じる『お腹極め出し』の体制を作るために。
身を引き、マワシを探る、その行動を久留田は見逃さない。巻き替えに来た瞬間から
一気にがぶり寄りを仕掛け、電車道で土俵の反対側まで相手を押し返す。
そして松本の足が俵にかかった時、久留田の両腕は二人の腹の中にサンドイッチされていた。
「入ったぞおぉぉおっ！」
「もらった！」
松本の、対大型選手必殺の形が完成、あとは押し返すだけだ、いける！
だが両手を腹に挟まれながらもしっかり下手を引いた久留田は、腰

を割り先に動く。
「(対大型選手の戦法を持ってるのは、お前だけじゃ無い！)」
白楼期待の巨漢新人たちの中、生き残ったのは自分だけ。言い換えれば彼もまた、
自分と似た大型選手たちを蹴落としてレギュラーの座を勝ち取ってきたのだ。
「ふんっ！」
右手を引き上げ、押す。と同時に左手を下げ、引っ張り込む。加えて久留田は左半身を
大きく引いて半歩後退する。そんな大きなアクションの『捻り』に思わず松本の巨体が揺らぐ。
「なにっ!?」
桐仁が驚愕の声を上げる。『捻り』は本来崩し主体に使う技だ。だがこのひと捻りは
相手のヒザを一気に土俵に押し付けんばかりの勢いがある。
しまった、と思わず心で嘆く。大相撲でもまれに見る、巨漢力士を捻りでヒザを地面に落とす
その光景。そう、巨漢でアンコ型、足の短いタイプの力士がこの捻り一撃で土を付けられる
のはよくある決まり手じゃないか！
「ふがっ！」
辛うじて反応し、右足を出してこらえる松本。その反応もまた滝沢戦で身をもって会得した
対応の速さ。だが久留田は間髪入れず、なんと逆方向に捻りを入れる。右から左に
大きく揺さぶられる松本。
「右に左に・・・まるで潮君の崩しだわ！」
千鶴子が思わずそう呟く。かつて鬼丸が両下手を引いた時から、その回転力を利用して
右に左に相手を振り回した光景を思わせる。違う所と言えば相手は真後ろに下がり、相手を

引っ張り込みながら捻り倒そうとしている。一度土俵際まで押し込んでいるからこそ
成立するその連続の捻り技！
３度目の捻りで土俵中央を通り過ぎる、久留田の残された距離が狭まって行き、
松本の体の揺れが大きくなっていく、どちらが堪え切る、どちらが決める!?
４度目の捻り、その瞬間に松本の体が浮く、すでに久留田の足は俵にかかっており、
これに堪えれば松本の勝ちが決定するというその瞬間だった。
久留田は肩を入れ、体を回して豪快な投げを打つ。捻りに投げを加えた2点組み合わせの
巻き込み投げに、松本の体が飛び、そして・・・空中で半回転する。
―捻り落とし『釣り鐘揺らし！』―
その名の如く、右に左に揺さぶられた松本がついに土俵に落ちる。
どっしゃあぁ、と
土俵外に転落する松本。
この瞬間、大太刀高校のインターハイ制覇は夢と消えた。
天を仰ぎ、目を伏せるダチ高のメンバーの向こう側で、白楼の選手たちは歓喜を爆発させる。
そんな中、諸岡顧問と加納監督だけは両選手の健闘をたたえ、拍手を送る。
お互いの成長と技量、その恵まれた体の生み出した心技体の名勝負に。
―西、久留田の勝ち―
礼をする頃には、二人は会場中の拍手に包まれていた。ダチ高の面々も顔を上げ、
死力を尽くして戦ってくれた二人に心からの拍手を送る。
土俵を降り涙にくれる松本。自分得意の形ができあがったその一瞬のスキを突かれた、
相手もまた自分の様な巨漢力士を倒す術を持っていた、自分の実力

が及ばなかったことを
痛感して涙を流す、部長につなげなかったその弱さに。
―びりっ！―
歓喜と落胆に包まれていたはずのその空間を、一気に緊張が支配する。
土俵の向こうで四股を踏んだ大将、国宝『備前長船』舟木が発した強烈な殺気、
それがダチ高を射抜く。
その視線の先にあるのは、対戦者である大太刀の大将、三ツ橋蛍！
「勝ち確だからって、手を抜く気はさらさら無いみたいだな。」
殺気に当てられた陽川が冷や汗を流してそう呟き、相手の蛍を見る。
だが我らが部長は憶する様子も無く、そのらんらんとした目線を舟木に返す。
相変わらず図太いというか、このヒトは・・・
「アイツに勝てば、２勝分の価値がありますよ、蛍部長！」
柚子香の埒も無い、それでいて的を得た言葉に蛍は頷き、皆に向けて拳を突き出す。
それに応えて柚子香が、千鶴子が、小林が、柳沢、沼田、赤池、大峰、幸田、陽川、松本が
拳を合わせていく。
最後に残った桐仁が蛍の正面に立って拳を見せる、合わせる前に一言放つ。
「見せてみろ、お前の集大成を！」
―ゴッ！―

第７８番　蛍丸と備前長船

「（待っていたぜ、三ツ橋蛍！アンタと相撲を取れる日をな！）」

四股を踏み、土俵の向こうにいる相手を睨め据える鳥取白楼の大将、舟木長一郎。

すでに団体戦の勝利は決しており、彼にはまだ個人戦を残しているにもかかわらず

消化試合のダチ高との大将戦に、異常なまでの入れ込みようを見せる。

その視線の先には彼の対戦相手、三ツ橋がらんらんとしたその眼光を返してる。

ヤル気十分のその気概を感じ、ありがてぇ、と心で笑みを見せる。

そうだ、消化試合だからってヌルい試合をしてくれるなよ！

「ちょ、ちょい舟木、そんなに入れ込んだらケガするで、もう勝ったんやし・・・」

マネージャーの咲が苦笑いを見せながら、明らかに気合の入りすぎている自分たちの

大将をなだめるも、その声は届いてない様子だ。

「（あの日から、俺の相撲観は変わったんだ。あの一番を見た時からな！）」

舟木長一郎、国宝『備前長船』。

実家が岡山県の相撲教室を営んでいたこともあり、幼少の頃から相撲を取ってきた。

その恵まれた環境でめきめき腕を上げて行ったが、小学生、中学生と、彼が全国の舞台で

名を馳せる機会は訪れなかった。

それは彼自身のモチベーションの要因が大きかった。相撲を取ること自体は好きだったが

あまり勝ちにこだわる性格では無かったのだ。

中３の時に至っては県大会前日にインフルエンザにかかるという間の悪さもあり、

結局全国には縁が無く、ＴＶで滝沢の全国制覇を眺めるだけだった。

それも別にいいかと思っていた時だった、あの一番を見たのは。

国技館に鳴り響くブーイング。

何度も手付き不十分で相手に突っかける無礼な態度。

そして・・・立ち合い成立した後、なんと相手に背を向け歩く、試合放棄したかのごとく。

こんな奴に相撲を取る資格があるか！相撲をバカにしてんのか！

彼も親も道場の仲間も

皆、激高する。

―パンッ―

猫だまし、そして八艘飛び。自分の倍以上ある大男の背後を取った時、彼らは初めて

その小さな選手が、ただ勝利の為だけに、そこまでの暴挙を行ったことを知る。

同体により取り直し。片足を引きずって戦い、そして敗れる。

「そこまでして・・・勝ちたいのかよ。」

ＴＶで見ていた長一郎が思わず漏らす。自分には理解できない勝ちへの執念。

「・・・勝ちたくなければここまではせん。」

父親が瞑目しそう語る。彼自身も若い頃は大相撲にあって十両までは上がっていた。

しかし現役の頃の自分に彼ほどの執念があればあるいは幕内まで、と思わずにはいられない。

「あんな相撲を認めるのか、父さん！」

「反則は何一つやっとらんよ。」

その父の言葉にすぐには同意できなかった。自分の知る相撲とは明らかに違うその戦いを

若い彼は、すぐには受け入れられなかった。

しかし日がたつにつれ、彼の中であの一番は次第に大きくなっていく。

相撲は大男の押しくら饅頭だと思っていた、しかしあの一番の何と自由なことか。

無差別級、相撲。ならば体に恵まれない者が、より工夫を重ねて勝ちを目指すその意欲の高さ、

自分には無かった勝つ事へのこだわり、そしてそれが生み出す自由な発想。

そう、相撲と言うのは自分が思うよりずっと自由な競技だったのだ！

そう思うようになってから彼は変わる。名門の鳥取白楼に入学すると、彼はあらゆる

相撲の技を貪欲に取り込み始めたのだ。元々四つ相撲だった彼がぶちかましや突き押し、

さらにはいなしや変化、出し投げ、吊り、反り技、叩きに至るまで、あらゆるアクションを

必殺技の領域まで高めようとする。

そして彼にはそれに応える『体』があった。１７０ｃｍ１１５ｋｇのその体躯は相撲を取る者としては

決して大きくはない。だが彼の持つ運動神経や反応速度は群を抜いていたのだ。

その太い体でトンボ（バック宙）を切り、１００ｍを１２秒台で走る、そんな彼が土俵を縦横無尽に

駆け回るその姿は、まさに戦うミサイルそのものだった。

高１の春に全国デビューした彼は、その強さをいかんなく発揮する。栄大の主将、澤井を倒し

決勝では金沢北の瀬良を一方的に撃破してみせた。

そして彼はまた変わる。周囲は自分を国宝『備前長船』と称し、彼自身もまた将来、

このあらゆる戦法を使いこなす力士として綱を巻く、という目標を抱く。

彼にとっての横綱相撲とは、引きや叩きすら必殺技となりうる、あらゆる一太刀を兼ね備えた

『全刀の王者』であると示すために。
そして今年、インターハイの全国出場校の中に千葉の大太刀がある事、件の三ツ橋が
国宝候補『蛍丸』と呼ばれるまでに成っている事、マネージャーの撮ってきた動画で
あのキレのある荒木選手を豪快に投げ飛ばして勝ってきたことを知り、歓喜した。
自分が変わるその原点と言える相手と戦えるかもしれない、全国が楽しみだ、と。
そして全国の舞台で彼の期待は実現する。三ツ橋は初戦で２１１ｃｍの荒巻を飛び越して
横倒しにするわ、館林南の二ノ宮を心理戦で手玉に取って反り倒すわと、あの頃を思わせる
発想の自由さと、かつて無かった速さ、力強さを兼ね備えて勝ち進み、ついに自分と相対する
ことになった。
―大将戦。東、三ツ橋。西、舟木！―
両大将が土俵に上がる。強烈な烈気を放つ舟木に対し、蛍火の様に光る目線で
殺気を払いのける三ツ橋。その緊張感、その濃度にこれが消化試合では済むまい、と皆が思う。
「さて、どうなる・・・？」
そう嘆いたのは石高の荒木だ。この二人と対戦しその実力は良く知っているが、実際この二人が
戦うとなるとどういう相撲になるかが全く見えてこない。
「三ツ橋君には『蛍火の如し』があるからね、立ち合いは制すると思うよ。」
沙田が隣でそう答える。そう、小兵の三ツ橋にとって、ぶちかましからの高速変化
『蛍火の如し』は命綱ともいえる立ち合いになっていた。
小兵の彼は常に変化を警戒される、かといって正面からぶち当たっ

ても跳ね返されるだけ、
そんな常識を覆したのがこの技の存在だ、当たった瞬間に左右に飛び、あるいは下に潜る。
この選択肢により相手は『受け止めれば勝ち』という選択肢が取れなくなってしまっていた。
元々、火の丸が柴木山部屋で学んできた『火の如し』に、桐仁が仕込んだ変化をミックスした
その技は、原点を辿れば火の丸に憧れ、真っ向からぶちかましを続けて負け続けたあの頃にこそ
土台が出来ていたのだ。
―手をついて―
場内を緊張感が包む。ダチ高や白楼の面々が、柴木山親方や鬼丸が、記者の名塚や宮崎が、
そして会場中のライバル達が固唾を飲んで見守る。
―はっきよい！―
頭から突っ込む蛍、出るか『蛍火の如し』！
―バシィッ！―
蛍の両肩を、舟木の腕が抑え込む。舟木は何とボクシングのファイティングポーズのように
両腕を立て、ガードする部分を蛍の両肩に押し付けて受け止める。
同時にその両手の平で
蛍の顔面を左右から鷲掴みにする、これでは左右に飛ぶことも、下に潜ることも出来ない。
いや、それよりも！
「合唱捻り・・・いや、徳利（とっくり）投げか！」
桐仁が叫ぶ。相手の顔面を手で挟み込んでひねり倒す大技。頭を捕まえて変化を封じた上で
そのまま蛍をねじ伏せにかかる、大きく振り回され、体を飛ばす蛍。
「くっ！」
なんとか一足飛びに着地した蛍はそのまま両手をクロスさせ、『十字かち上げ』で

舟木の両手を顔から振りほどく。返す刀でその手を合わせ、パン！と炸裂音を響かせる。

「猫だまし、飛ぶで！」

咲が思わず声を出す。この技は次の大きなアクションへの布石、今の二人の体制を見ても

飛ぶ以外に選択肢はありえないだろう、と。

だが蛍は飛んでもいなければ潜ってもいない、自然に一歩、ただ後退しただけだった。

逆にそれが舟木の意識を外す。上？下？左右？とわずかに躊躇したその瞬間だった。

―パァンッ―

猫だまし2連発！このまさかの展開に誰もが意表を突かれる。次の瞬間、今度こそ蛍は

高々と舟木を飛び越して見せる。直前に踏み込んだ舟木は瞬時、反応が遅れる。

両者、異端の相撲。先手を打つのは、果たして―

第７９番　蛍丸と備前長船②

八艘飛びで背後を取られた舟木が、瞬時の判断で土俵を走る。俵の淵に沿って回り込み
蛍から距離を取ると即向き直り、追いかけて来た相手にすかさずぶちかます。
蛍はその当たりを『蛍火の如し、横』で横っ飛びにいなし、低い体制で横から
組み付きに行く。
ここで舟木は何とダンスの様に体を回し、体ごと蛍の組み付きをいなして背後に回る。
「シィッ！」
その動きを肌で読み取った蛍は、なんと背中で舟木にタックルをかまし一度押し離すと、
すかさず前方に飛びながら、フィギィアスケートの選手の様に身をひるがえし着地。
正対した両者が再度、土俵中央で激突する。今度は舟木がかち上げを放ち、体格と
パワーの差で蛍を後退させる。飛ばされた蛍はそこから突っ張りを放つが、その手を
舟木が両手で捕まえると、そのまま肩に巻き込んで体を反転させ、蛍を担ぎにかかる。
「一本背負い、マズい！」
諸岡顧問が叫ぶ。体勢としては蛍の方が腰が低く、担ぎ切れてはいないが、このままでは
馬力と体重で持っていかれる。
「ふんっ！」
蛍は一度、腰を割って耐えようとする。一瞬投げが止まるが、舟木はそこから気合一閃
巻き込むように体を回す。
「けやぁっ！」

その投げに手ごたえは無かった。蛍は一度踏ん張ってから、相手が投げる方向に自ら飛んだのだ。

一度相手の投げを止めることで、次のタイミングを測る。彼が常々心がけて来た

『引く前には必ず押す』のスタイルが功を奏し、見事舟木の眼前に着地する。

「速い！二人とも・・・」

記者席、名塚が思わず嘆く。身軽な蛍に対し、馬力とスピードで追撃する舟木。

蛍丸と備前長船の高速での斬り合いは幾太刀を交え、今だ決定的な展開を作れないでいた。

「凄いな・・組み合わないで戦う相撲は珍しくないが、ここまで土俵を目一杯使って

動き回る相撲は流石に初めてだ。」

カメラマンの宮崎がファインダーを覗きながら、冷や汗をかいてそう嘆く。これは決定的瞬間を

撮らえるのは大変だ、ど。

一本背負いを空振りし、体勢の崩れた相手に蛍は下から『十字かち上げ』を放ち、体を起こす。

すかさず潜ろうとした蛍に、舟木は強烈な『叩き込み』を上から見舞う。と同時に何と

蛍の体を八艘飛びで飛び越して見せる。

「くっ！」

あわやの所で残した蛍は、そこで一度身を沈める。ジャンプするための『溜め』に見える

そのアクションに、舟木は先の狩谷戦で見せたバック宙を警戒する、万が一入れ替わられたら

こちらが背後を取られる、と。

その一瞬の躊躇をついて、蛍が体を反転させながら真後ろに飛び、ショルダータックルのように

ぶちかましを仕掛ける。

組み止める舟木からすかさず離れつつ、今度は相手の左手首を掴んで横に回り、その手を極めて『とったり』に持っていく。が、舟木は蛍の手を掴んで動きを止めると、そのまま力づくで蛍を逆方向に振り回す。

「へ、へへっ。やっぱこうなるんじゃねぇか。」

観客席で荒木がそう嘆く、隣に座る沙田はあまりにも相撲に見えない展開に呆然としている。

何でも出来る相撲を取る両者の一戦、相手の意表を突き、心理を読み、誘導し、激しく動いて相手に相撲を取らせない。その目まぐるしい思考がそのまま攻防となって土俵上を暴れ回る。

振り回された蛍は逆に相手の腕を取り、勢いを利用して相手を引っ張り込み、崩しにかかる。

体勢を乱された舟木は手を離して腰を割る、これだけ早い攻防の中でも彼の軸は大きく乱れない。

一方の蛍は何度も体を崩しながらも、その軽量を生かして追撃を凌ぐ。

―ドカッ！―

何度目かもう分からない両者の激突。その瞬間、舟木の頭が跳ね上がる。『蛍火の如し、潜！』

するっ！と相手の懐に潜った蛍が両下手を、上から覆い被さった舟木が両上手を取る。

「潜った、部長の形！」

「よぉおし、行けっ！」

意気上がるダチ高の面々に対し、白楼側も笑みを漏らす。

「潜られたんじゃない、潜らせたんだよ！」

「捕まえた！両上手を取った舟木の強さ、見るがいいさ。」

開始から激しく動いていた両者が、ここで組み合ったまま動きを止める。

ようやく組み合った、やっとここから相撲らしい攻防になるのか、

そしてそうなった時
どちらが相手を上回るのか、会場中がその答えに注目する。
「ぬんっ！」
先に動いたのは蛍だった、動き回る攻防でことごとく追いつかれた彼にとって、
この最後かもしれない好機を逃すわけにはいかない。相手を引っ張り込み、『居反り』を
仕掛けにかかる。舟木は瞬時に反応し、右足を前に出して踏み止まる。
「来たっ！」
陽川が叫ぶのと同時に、蛍はその足に『内掛け』を仕掛け、からめた自分の左足首を左手で掴む。
―地足取り内掛け『根太起（ねたおこし）！』―
手と足で舟木の右足を地面からぶっこ抜く蛍。その瞬間、舟木は残った左足を摺り足で
自分の真下に持っていき、まるで案山子のように片足立ちでバランスを取る。
「・・・あれがあるんや、舟木にはっ！」
海洋美波の菅がそう嘆く。奴は片足を刈られても残りの足でバランスを残す器用さがある。
つい先ほどの個人戦で自分が倒されたように。
内掛けを外掛けで返しつつ体重を浴びせる、勝負の天秤は明らかに舟木に傾いたかと思われた。
が、蛍はその瞬間かけた左足を素早く抜くと、すかさず体を回して相手を担ぎにかかる。
「百千夜叉落とし！こう繋ぐかよ！」
桐仁が拳を握る。根太起を破らせ、その勢いで前に出てくる相手を利用しての担ぎ技！
相手が根太起への流れを知っている事、先の菅に対する足技の返しを見ていたことを踏まえて
蛍が編み出した必殺技の連携！

「そうは・・・」
舟木は担がれながらも冷静に状況を見る。この技は担ぎ、捻り、そして足技の3点同時の技のはず、
ならば狙うは・・・足！
「いくかぁっ!!」
蛍の刈りに来た足を、舟木は逆に右足で『河津掛け』で引っ掛け、上に引っ張り上げる。
「な・・・んだと!?」
桐仁が思わず喘ぐ。刈りに来た足を逆にすくい上げて体勢を乱させる・・・なんという対応力！
「なっ・・・」
観客席でそう嘆いたのは鬼丸だ。自分のあみ出した技を目の前で破られるその光景に、
さすがの彼も冷静ではいられない、なんて奴じゃ、と。
「んんーーーっ！」
辛うじて足を外し、投げを止めて着地する蛍。舟木もまた凌ぐのが精一杯で地面に足を付ける。
ここから先に動くのは・・・
―バチィン―
舟木だ！蛍の横から突き上げるような張り手を見舞い、その体を吹き飛ばす。全力の必殺技を
2連発した蛍に堪える術は無かった。
舟木はすかさず組み付くと、なんと先ほどと同じように蛍の体に覆い被さり、両上手を取る。
わざわざ蛍に得意の『潜る相撲』の姿勢を取らせるように。
「ゼェッ、ゼェッ、ゼェッ・・・」
のしかかられたまま激しく呼吸を乱す蛍。疲労ももちろんあるが、肝心の潜る相撲からの技は
全て破られた、離れての相撲も通用しない、呼吸を乱すもうひとつの要素は・・・絶望感。
「（この人は・・・強い、本当に。）」

国宝。将来の横綱候補。彼はその名の重さを今、ひしひしと実感していた。

自分が目指した『何でも出来る相撲』それを自分より上のレベルで体現する力士。

「(勝てない・・・勝てるわけ無いよ、これじゃあ。)」

理想の自分と相撲を取って勝てる道理はない、蛍の心が折れそうになったその瞬間!

「勝てーーっ、蛍部長ーーーっ!」

彼の耳に届いたのは、チームメイトの、後輩の、そして弟子の声。

自分を信じ、心の底の棘の痛みを汲んでくれる、生意気だけど優しい娘の声。

ふっ、と心の固さが抜ける。そうだ、実力で劣ってもいいじゃないか、僕は元々、

どんなにみっともなくっても勝ちたがっていたじゃないか、今更だよ。

どんなに格好悪くてもいい、今日この一番だけ勝てればそれでいい、かつて首藤さんに

したような、無様でも勝てる方法・・・

その瞬間、蛍の脳にフィラッシュバックする光景。そう、相撲は時に力や技以外で

あっさりと決着するケースがいくつもある。

彼が思い描いたのは2番、チームメイトの一年生が犯した気合の空回りと、ライバルの男が

脱力のスキを突かれた敗北の記憶。

―勇み足―

―お手つき―

第８０番　蛍丸と備前長船、決着。

「フゥツ、フゥツ、フゥー」

蛍に覆い被さった体制のまま舟木が呼吸を整える。彼にしてもここまでの高速の戦いで
疲労が無いはずもない、次の攻防に向けて呼吸を整え、力を溜める。

「ゼェツ、ゼェツ、ゼツ、ゼェツ・・・」

その舟木に覆い被さられた状態で激しく呼吸を乱す蛍。だがその目だけは未だに
らんらんとした光をたたえ、その一瞬のチャンスを待つ。蜘蛛の糸より細い、わずかな可能性に
望みを託す。

「・・・春に戻っちゃったよ、これじゃあ。」

そう嘆いたのは幸田だ。かつて三ツ橋蛍は『潜る相撲』を模索し、部員との試行錯誤の果てに
潜った方の蛍が手詰まりになるという結果を迎えた。
春の部内戦で敗れて以来、蛍はその状況を打開すべく、居反りからの『根太起』と、かつて
憧れた火の丸の必殺技『百千夜叉落とし』を身につける。
だが、その二つの技も舟木に破られた。根太起は片足立ちから外掛けで返され、夜叉落としは
掛け足を河津掛けで封じられた。そうなると再びこの『潜る相撲』は決め手の無いまま、
相手に覆い被されて体力を消費するだけの『死に体』となってしまう。
無論、舟木もそれを十分理解しているからこそ再度この体勢に持っていったのだ。相手の技を
全て破り、打つ手無しにして見せた今、この体勢は相手の変化を封じ、上から相手の体力を奪いつつ
自分の体力を回復させるための膠着状態に持って行ける。

「万策尽きた、かしら。」

記者席で名塚がそう漏らす。その表情に動揺や焦燥は無い。自らが彼らに示した格付け、
『国宝』と『国宝候補』の差、同じような相撲を取る二人の、それでも生じる格の違いに
自らの判断の正しさを自ら認め、頷く。
「こりゃさすがにダメだね。」
そう呟いたのは石高の沙田だ。彼もこの後の個人戦、決勝まで進めば舟木と対戦する
可能性は高い、三ツ橋との相撲であわよくば何か攻略法が、とも思ったが、結局自分で
何とかするしかなさそうだ。
「勝負は・・・ゲタを脱ぐまでわかんねぇよ！」
そう唸ったのは隣の荒木だ。彼自身三ツ橋の往生際の悪さは身に染みて知っている。
何よりこのまま三ツ橋が舟木に負けるのは面白く無かった、単純に負けるなんてお前らしく
無ぇだろ、何かやってみろ、と。
「フゥウゥウ・・・ぬんっ!!」
舟木が動く。両上手を引きつけて蛍の体をぶっこ抜こうとする。
蛍はすかさずマワシを引きつけ
重心を後ろにずらして吊りを防ぐ。
が、蛍の足がわずかに浮いた瞬間、舟木はまさに機関車の様に前進する。吊って相手の足を浮かし
抵抗が無くなったところを一気に寄り立てる。わずかに土を触っている蛍の足の裏が2本のレールを
土俵に描き上げる。
「最後は『寄り』か。」
鬼丸が嘆く。ここまで数々の技を見せて来た両者、その決着を王道の手で決めに来る舟木に
鬼丸は彼の『力士』としての矜持を見る。
「腰を割れ、こらえろーーーーっ！」

「三ツ橋ぃーーっ！」
五條兄妹が声を出す、団体戦の勝敗はすでに決しているが、ならば部長の三ツ橋にせめて
金星を挙げてほしい、その願いが秒単位で消えていく状況で、奇跡を願って声援を送る。
柴木山親方もまた、三ツ橋の絶望的な状況を見ながらも、諦めるな！と心で叫ぶ。
―ザンッ！―
俵に足を掛け、なんとか寄りを止める蛍、だが止まっただけで状況は変わらない。
相変わらず上からのしかかられた体勢のまま打つ手はない、しかも今度は土俵際、
もう一度浮かされたら今度こそ土俵下に放り出されるだろう。
「フゥウゥッ・・・」
舟木が一度息をつぎ、腰を割って力をためる。さぁ、もう一度行くぞ！
「ぬぅんっ！」
再度両上手を引きつけ、一歩前に出て寄りに出る舟木。と、その時、前に出た舟木の右足を
蛍は左の『内掛け』で絡める。同時に素早く左手で自分の左足首を掴む。左の手足が完全に
舟木の右足に絡みつく。
「根太起（ねたおこし）！」
桐仁が叫ぶ。それに託すか、との想いで。
蛍の技は基本、桐仁が教えた変化技と、鬼丸から学んだ鬼車や夜叉落とし、そして火の如しから
学んだ『蛍火の如く』から成る。
そんな中、蛍が自分で考えて工夫し、失敗を重ねて習得した技こそがこの根太起なのだ。
絶体絶命のこの状況、蛍はこの技と心中するつもりでこの選択をした、とダチ高の誰もが思った。

「決まれーーっ！」
「行け行け行けーーーー！」
「薙ぎ倒せえぇぇぇぇぇーーっ！」
悲鳴とも絶叫とも取れる声を上げる大太刀の面々、彼らもまた蛍の勝利に金星の価値を思い
その実現に希望を寄せていた、自分たちの小さな、でもいつも何かをやってくれる部長に！
―ズサアッ！―
舟木の左足が体の真下にスライドし、奇麗にバランスを保つ。むしろ足を掛けた蛍の方が
ややバランスを崩し、土俵際でよろよろと体勢を正そうとする。ダメだ、やはり通じない！
「（勝った！）」
舟木に躊躇する理由は無い。そのまま刈られた足を『外掛け』で引きつけて刈り返し、
体重を浴びせて相手を押し倒せばそれで全てが終わる。
二人の体が、土俵の外側にゆらぁっ、と傾く。
「！」
最初に気付いたのは舟木だった。間を置かずに桐仁が、咲が、行司や副審たちが、
そして会場中の全員が、その光景に声も無く驚愕の表情を見せる。
「なにぃおぉぉぉおお!!」
舟木は驚愕と抵抗を混ぜ込んだ声で吠える、こうなってはやる事は一つだけ、一刻も早く
相手を土俵下に放り出すしかない、『その』前に！
『その』前にーーーっ！
土俵下に転がり落ちる蛍。なんとか受け身は取ったが、呼吸も体力も限界を超えている。
うつ伏せに倒れたまま起き上がれず、荒い呼吸を地面に浴びせ続け、酸素を貪る。
会場は水を打ったように静まり返っていた。土俵上では舟木が仁

王立ちで眼下の蛍を
見下ろしていた。その土壇場の『勝ちへの執念』を見せた小さな力士を。
―その右足を、土俵の外に降ろして―
蛍は最後の攻防の中、後ろに倒れながらも、根太起で捕らえた舟木の右足を土俵外に引っ張り出し、
上から全体重でのし掛かって足を地面に付かせてみせたのだ。同時に彼の体も飛び、死に体となったが。
『お手つき』ならぬ『足付き（土俵外）』、『勇み足』ならぬ『勇ませ足』とでも言うべきか。
その奇想天外な発想、そこまでして勝ちにこだわる執念、そしてそれをこの土壇場で実現してみせた
その『心』の強さ。
それが実ったかどうかは、行司と、２人の副審に委ねられた。
最初は西、舟木に手を上げた行司だが、声を出すまでも無く副審が手を上げ、立ち上がる。
土俵脇にいる審査員席に詰め寄り、今の一番をビデオ再生して勝敗を協議、判断する。
「勝った！勝ったよな、なぁ沙田っ！」
荒木が嬉々として沙田の肩をばしばし叩く。鬼丸は深いため息と共に裁定を待ち、佑真とレイナは
勝敗よりも最後の三ツ橋の足掻きの見事さに掌を合わせる。
海洋美波の菅が「何て奴だ」と笑いながら呟き、立花寺の黒田は「見事！」と頷く。
名塚は呆然とした表情ながら、カメラマンの宮崎に一言「撮れた？今の」と伺う。
土俵の東西でもダチ高の、白楼の選手たちがマネージャーのカメラに群がり、今の瞬間を
凝視している。どうだ、どっちが勝った!?
蛍がようやく起き上がり、土俵の東側に立つ、相対して舟木が西側に。

行司が土俵中央に立ち、右手を上げる。ダチ高陣営から歓喜の声が上がる！

「行司差し違えで、東、三ツ橋の勝ち！」

「うおぉぉぉぉぉっ!!」

「やりやがった、あの国宝『備前長船』を！」

「すげぇぞー、『蛍丸』ーっ！」

歓喜と拍手の渦が国技館を包む。その勝敗を分けたのはまさに執念、言い換えれば『心』の

有り様の差ともいえた。技と体の壁を越えた結末に、会場中が熱狂していた。

そんな中、舟木は礼をして土俵を降り、かつて自分が見失っていたことを思い出していた。

そう、三ツ橋蛍という人物が怖いのはその奇想天外な技じゃなかった、どんな手を使っても

勝ちたいと願うその思いこそが彼の強さでは無かったか、俺は結局彼から何も学べていなかった。

上辺だけを磨いても意味は無い、大切なのはそこじゃなかった、と。

一方で土俵から降りた蛍はチームメイト全員にもみくちゃにされていた。あそこから一体

どうやったら逆転できるんだよ、この魔術師が、いやサギ師だろ、などと言われながら。

「さぁ、礼をして。3位決定戦が待っているぞ！」

諸岡顧問の声に一同我に返り、整列する。そうだ、まだ終わりじゃない。

せめてメダルだけでも持って帰ろうじゃないか、と。

―以上、3―2で鳥取白楼の勝ち―

東西で礼をする両チーム。勝者の白楼よりも敗者の大太刀の方がむしろ笑顔だ。

金星を挙げる、というのはそういう事なのだろう、会場中の誰もが不思議な興奮に包まれている。

ただ一人、『彼』だけを除いて。

「（つまらないな・・・もう帰ろうか。）」

第81番　壊れた『心』

―東、千葉代表、沙田。西、福岡代表、黒田！―

団体準決勝第一試合の後、土俵では個人戦の準決勝が行われる。この変則的な進行は

団体、個人の両方で出場する白楼の舟木と立花寺の黒田に配慮して組まれたスケジュール。

両名の個人、団体の出番を出来るだけ空けて、連戦による不利を無くすための配慮だ。

全体の進行としては以下の流れになる。

・団体準決勝第1試合
・個人戦準決勝第1試合（現在ここ）
・団体準決勝第2試合
・個人戦準決勝第2試合
・団体3位決定戦
・個人3位決定戦
・団体戦決勝
・個人戦決勝

先の試合の興奮冷めやらぬまま土俵に上がる国宝二人に、会場のテンションは最高潮だ。

国宝『三日月』ｖｓ『圧切長谷部』、今大会初の国宝対決というだけでなく、円の相撲を取る沙田と

直線的に押す相撲の黒田の対決、相撲ファンとしても興味の尽きない一戦だ。

―はっきよい！―

誰もが予想通りの、そして高校生としてのレベルを超えた次元の戦いとなる。

猪突して押す黒田をいなし、躱し、おっつけて円を描き回り込む沙田。黒田もまた想定内だと

回り込んだ方向を瞬時にサーチし、その体格に似合わぬフットワー

クで追撃する。
「回れ回れ、捕まるなーっ！引き倒せぇ！」
土俵の下で荒木が声を出す、反対側では立花寺のチームメイト達が黒田に檄を飛ばす。
「クローっ！捕（と）まえろ、逃がされんぞ！」
「くっそ！あの体ですばしっこすぎだろ、三日月の奴！」
二人ともすでに大相撲力士と遜色ない『体』を持っている。その二人がまるで少年相撲のような
速度と反応力で土俵上を駆け回るその姿に、見ている全員がレベルの高さを実感する。
それは決して先の一番、三ツ橋と舟木の高速戦の影響がないとは言えないだろう。
あの一番に刺激を受けた二人が、それに負けまいと戦いながら自身を高めていく。
やがて黒田が、ついに沙田の正面から食らいつく。沸き立つ立花寺の陣営。
「いよっしゃー、捕まえた！押し切れーっ！」
その瞬間、沙田はおっつけていた両手を巻き替え、両下手をしっかりと掴む。黒田は
構わず寄り立てる。
土俵中央まで押し進んだ時だった。沙田は両下手を引いたまま体を回して出し投げに
移行する。右手で投げ、左手で捻り、そして足で相手の体を自分ごと回転させる。
「月輪（がちりん）！」
荒木が叫ぶ。キレやタイミングよりもむしろ力づくで投げ切る沙田の両手投げ。
他ならぬ部内での荒木という『削ぎ落す精神』の相手を倒すために編み出した剛の技。
「強引だ、決まるかよ！」
「耐えたら勝ちだ、クロ、凌げーっ！」

土俵上を1回転、2回転・・・そして3回転する両者。円の土俵の中にひとまわり小さい
満月の轍が描かれる、止まらない！
「うおぉぉぉっ！」
「くぅっ、フッ、フッ・・・」
ひたすら引き回す沙田、懸命に足を運んで堪える黒田。そう、この技は一瞬で決める技ではない、
決まるまでひたすら投げ続ける、もし止まれば敗北も覚悟の乾坤一擲の投げ。
４回転した時、ついに黒田の体が崩れる、あとは一気だった。横転した黒田は回転の
勢いそのままに土俵下まで転がり落ちる。歓声に包まれる国技館。お互いの相撲スタイルを
貫いた一番は、辛うじて三日月が制した。
「いよっしゃー！今年こそ優勝だぜ沙田！」
礼をして降りる沙田の頭をハタいて祝福する荒木。昨年は届かなかった高校横綱の地位、
大典太に敗れた個人戦決勝の舞台まで再び辿り着いた、今年こそは！と。
大汗をかきながら土俵を降りる黒田。チームメイト達はよくやったよ、と彼を労う。
昨年の個人戦でも沙田と対戦していたが、その時は瞬時の出し投げに呆気なく土俵を
割っていただけに、今年はより成長した相撲で食らいつくことが出来た。
負けたのは残念だが、まだ団体戦が残っている。お前の相撲を見せる舞台はまだ健在だ、と。
「父さん、僕はもう帰るよ。」
観客席でそう嘆く大男、この会場にいる人なら知らぬ者の無いほどの有名人は、

つまらなさそうにそう嘆いた。
「草介・・・そうか。」
大和国親方はため息と共にそう答えた。息子の気分転換になればと連れて来たが、彼にとって
今日の相撲は何の感慨ももたらさなかったらしい。
「(この分では、今の一番で負けた選手とかつて戦ったことも、覚えてはいまいな・・・)」
大相撲力士、久世草介。四股名『草薙』。
彼は今、壁に当たっていた。相撲人生で最大の、そしておそらく最後の壁に。
横綱『刃皇』。かつて尊敬する父、大和国を引退に追い込んだモンゴル人力士。
押しも押されぬ横綱に成った彼に、幕内入りした草薙は2度挑み、そして惨敗した。
初顔では上手を取れずに、そして先場所は一度右上手を取り、万全の体制を作ったにもかかわらず
あえなくハネ返される。力負け、という表現がぴったりの完敗だった。
今、彼の頭を支配しているのは、どうすれば刃皇に勝てるか、その一点だった。
元々集中力がある反面、視野の狭さが短所としてある草介にとって、高校生の相撲を
刃皇と同列に見ることは出来なかった。これ以上ここにいても刃皇は倒せない、
それなら帰って稽古したほうがマシだ、と。
なら仕方ない、と草介の向こうにいる澤井、四股名『清心道璃音』に目配せする。
褌担ぎ(荷物持ち)として同伴していた彼は残念そうに、ウス、と頷く。
彼は草薙とは反対に、小兵と侮っていた三ツ橋の健闘や、かつて敗れた黒田の戦いを

最後まで見ていたかったのだが。

ダチ高の面々は控室の一角で大慌てで行動していた。試合の間に儲けられた
インターバルの時間、トイレタイムである。
何しろ股間にフンドシをがっちり巻いているせいで、トイレに行くにも一苦労なのだ。
順番をローテーションしながら入れ代わり立ち代わりトイレを往復し、マワシの
締め外しを複数人で行う。
この後は3位決定戦で対戦する相手の試合があるため時間が惜しい。何とか最後の蛍が
ジャージに着替えて用足しを済ませ、皆と合流しようとトイレから出た時、隣の女子トイレから
柚子香がひょっこり顔を出す。
「あ、蛍部長。最後ですか?」
「あ、うん、僕で最後。」
そんな会話、弛緩した空気は、次の瞬間に凍り付く。

「クロ、準決勝行けっか?」
立花寺の面々が通路を歩く中、チームメイトの伴が黒田に問う。黒田は団体でも大将として
出場する予定ではあるが、今しがたの熱戦を終えた後での団体出場はキツくない訳がない。
「おいは大将やっけん、いけるたい。」
ならば先鋒から副将戦までは休める、主力の自分が出ないわけにもいくまい、と。
何しろ相手は宮城の名門、国宝候補『鶯丸』を擁する青葉高校。いかに春の王者の立花寺とはいえ、
戦力を出し惜しみして勝てる相手ではない。
呼吸を整えつつ先頭を歩く黒田のほんの数メートル先、観客席から

の降り口から来た3人が
目の前を横切る。
その先頭にいる男の横顔を見た瞬間、黒田の全身に電撃が走る。雷に打たれたようなショックの
後に来たのは、沸騰する血液と全身の逆立つ強烈な怨気!
「く、さ、な、ぎぃぃぃっ!!!!」
―ビリイイイッ!―
周囲が一斉に凍り付く。目の前にいたのは彼にとって不倶戴天の敵、そして今、自分が
相撲を取る理由そのものの存在。かつての自分の弱さを表す象徴の力士。
その殺気に、何!?という反応をする大和国親方。立花寺の面々と、その先頭にいる
黒田を見つけ、まずいな、と正対する。
「黒田・・・」
璃音もその殺気に反応し、かつて相対した相手に向かう。が、肝心の草薙はその殺気にも
全くの無関心で、ん?という顔を向けただけで、すぐに頭の中で対刃皇のイメトレに戻る。
「清心道、草薙を連れて先に帰っていなさい。」
璃音はその親方の指示に頷き、黒田の視線から草薙をがばうように通路を去っていく。
黒田は歯を軋ませ、拳を握りしめて消えて行く草薙を泡立つ殺気で睨みつける。
「(草薙!草薙!草薙いぃぃぃっ!!!)」
「君が今見るべきは、草介・・草薙関じゃないはずだ、そうだろう?」
黒田に正対し、烈気を放ってそう返す大和国。最強の日本人横綱だった彼の気に
立花寺の一同が固まる。だが、黒田は意に返さない、視線を小さくなっていく草薙から外さず
黒い怨気を周囲に撒き散らす。

「落ち着けクロ！親方も言っとろう。今そっちに気い向けてどないすっと！」
伴が黒田の体を抱えて万一の事態を抑える。抱える黒田の体は炎のように熱く、ほんの
些細なきっかけで爆発せんばかりに猛っている。
「草薙は、逃げも隠れもせん。大相撲へ来て挑むがいい。」
その親方の言葉にはた、と我に返る黒田。そうか、親方も知っているのか、覚えているのか、
あの一番を。
「あいつは物覚えが悪くてな、多分君の事も覚えてはいまい。悔しければ大相撲で彼に
君の名を刻んで見せろ。」
そう言って黒田の肩にぽん、と手を置く大和国。状況が落ち着いたのを確認し、
背を向けて歩き出す。
後に残った立花寺の面々を、通路の横側から蛍が、柚子香が、その一抹を呆然と眺めていた。
黒田もまた、草薙を見たことでその『心』は留め所を見失っていた。仲間に連れられ、
朦朧としたままその場を後にする。
「黒田さん・・・やっぱり。」
そう嘆く蛍。やはり彼の相撲の根幹は2年前のあの出来事なのか、と。
そんな蛍に柚子香が語りかける。
「蛍部長、実は・・・」
柚子香は話す。一昨日の晩、黒田と出会って話した事。彼が背負う物の重さ、そして彼もまた
蛍の『過去に縛られた相撲』を理解していることを。
「最後に彼はこう言ってました。『三ツ橋君はどうやったらその過去を清算できるんだ?』って。」
ひと呼吸置いて柚子香は蛍に問う。

「三ツ橋蛍、貴方はどうして、相撲を取っているの?」

会場の外、草薙たちと合流した大和国は、彼らにこう告げる。

「やはり、私は残って最後まで見届けるよ。」

「あー、うん。分かりました。僕は帰ります。」

表情無く頷く草薙。と、璃音が口を開く。

「自分も残ってイイっすか?関取の荷物は後で持って帰りますんで。」

その言葉にうん、いいよ。と返す草薙。帰って稽古するのに体があればそれでいい。

親方の荷物と一緒に持ってて下さい、と。

会場に戻り、再び自由席を探す二人。先に座っていた席は埋まっているが、少し上の方に

見知った人間のすぐ下の席が空いている、そこへ向かう親方と璃音。

「おう大和国、来てたのか・・・ってどうした、顔色が優れんぞ?」

柴木山親方が声をかける。隣にいた鬼丸も、珍しく暗い顔をしている親方に心配げな顔をする。

「若者の心はデリケートだ・・・私は、間違えたかもしれんな。」

席に座ってそう嘆く大和国。そう、これから戦う選手の心を激しくかき乱してしまった、

―団体戦準決勝第2試合、東、青葉。西、立花寺―

青葉は国宝候補『鶯丸』鳥羽を先鋒に出して来た、確実に先制するべく変えたそのオーダーは

当たり、寄り切って1勝を挙げる。

2陣戦は立花寺が地力の差で取るも、中堅戦は力相撲の末、先に青葉が王手をかける。

副将戦では国宝候補『五月雨江』こと伴が接戦の末2―2に持ち込む。

―大将戦。東、砂野。西、黒田―

黒田が土俵に上がると同時に会場内が異様な空気に息をのむ。その怨気は今までの黒田に比して

どこか暴走気味な殺気をはらんでいた。
青葉にすればこの大将戦までに決めたかった、砂野はチーム内でもやや実力が劣っていて、
むしろ捨て石として黒田にぶつけたのだが。
それでもいなしの技術は一級品である、突進の『圧切長谷部』に当てるのはそのわずかな可能性を
信じての事でもあった。
―手をついて―
黒田の目に砂野は映っていなかった。彼が見ていたのは2年前、この団体準決勝で相対した
静謐な空気を身に纏った長髪の力士だ。
―はっきよい―
黒田は地面に手を付きながら思う。自分は何をしていた?対戦相手をちゃんと見ていたか?
誰と相撲を取っていた?
土俵の向こうでガッツポーズを決める砂野と青葉の面々を見ながら、土俵に落ちたまま
彼は後ろを、立花寺の仲間たちを見れないでいた。
―2年ぶりの己の愚かさを、再び噛みしめながら―

第８２番　蚊帳の外

「相手は立花寺か・・・」

桐仁がアゴに手を添えて呟く。３位決定戦の相手は国宝『圧切長谷部』と国宝候補『五月雨江』

を擁する福岡代表、立花寺高校と決まった。

「春の覇者相手か、望むところ！」

陽川がぱしっ、と手を合わせて気合を入れる。彼は準決勝で出番が無かっただけに意気上がる、

せめてメダルだけでも持って帰る、と。

「けど、今の大将戦、なんかあっけなかったツスね。」

そう漏らしたのは幸田だ。たしかに、と頷く一同。立花寺の大将、黒田は確かに頭から

ぶちかますタイプだが、引きやいなしにそうそうは落ちない足腰と追い足を持っているはずだ。

だが先の一戦、宮城青葉の大将、砂野の叩き込みにいともあっさり落ちていた。

「さすがに疲労もあるんじゃね？あの沙田と一番取ったばかりだし。」

「そうね、だとすればそこが攻略のカギになるかも・・・」

沼田の意見に千鶴子が同意する。黒田はこの後、個人戦の３位決定戦も控えている。相手の

状況によっては個人戦は出場しない可能性もある。あえて出るなら変化にはもう付いてこれない

かもしれない。

だが、ダチ高の面々のそんな意見に対し、蛍と柚子香だけは違う見解を持っていた。

彼は試合直前に心の古傷をえぐられ、自分の相撲を見失ってしまったのだ、と。

だがそれはあえて口にはしない。敗北を喫し、立花寺の春夏連覇を落としてしまった彼が

この後の試合でどう変わるのか、あるいは変わらないのか、それは

分からない。
「先鋒・大峰、2陣・幸田、中堅・松本、副将・陽川、そして大将は三ツ橋で行く！」
その桐仁の言葉に一同が驚く。
「辻先輩、出ないんッスか？、これが最後の公式戦ですよ!?」
その柳沢の質問に、自分の背中をとんとんと叩いて返す桐仁。
「先の白楼戦で背中を痛めてな・・・酷くは無いんだが、体の捻りが効かない。」
準決勝のバトンムフ戦、桐仁は相手の掛け投げに乗っかって潰そうとしたが、逆にそこから
土俵下に放り落とされた。したたかに打ち付けた背中は赤く腫れあがり、その痛みは
彼の相撲の真骨頂である体のキレを生み出せなくなっていた。
「思い出作りに興味は無い。あくまで実力優先、それがダチ高のスタイルだ。そうだろ部長？」
蛍の方を向いて同意を求める桐仁。そう、2年前の全国優勝後に再スタートを切ったその時から
ずっと貫いてきたチームのスタイル。それが部内での競争を生み、お互いを押し上げて来たのだ。
だが、話を振られた蛍は軽く頷いただけで、誰とも顔を合わせようとはしなかった。
ただ、チームの皆はそれが蛍の覚悟とプレッシャーにあると思い込んで気にしなかった、
大将なら国宝『圧切長谷部』黒田と対戦する可能性が高い、先ほどに続いて国宝との連戦が
我らが部長をしてプレッシャーを感じているのか、という見解しか無かった。
―三ツ橋蛍、貴方はなんで相撲を取っているの―
柚子香に、そして自分自身に問われ、答えが見つからない。
いくら勝とうと2年前の記録が消えることは無い、なのに何故、自分は相撲を取っている？

同じような闇を抱え、その具体的な答えを持つ黒田でさえ、たった今、その困難さを目の前で
見せつけられたばかりだ。
全国優勝チームで公式戦全敗。
相撲を続ける限りついて回る記録。
相撲を止めても思い出として記憶に刺さる棘―

「クロ、切り替えろ。これから3位決定戦、相手はあの大太刀だ！」
黒田の背中をぱんぱんと叩いて励ます伴。黒田は先の敗戦以来、下を向いたまま一言も発さない。
彼はひたすら心中で自分を責め続ける。睨み出しで負けたあの日の事、草薙の顔を見て冷静さを失い
チームを敗北に追いやってしまった事、どこまで愚かな男なんだ、俺は・・・
「まぁ、お前は気楽に取ればええよ、俺達で決めてやるけん。」
「確か三ツ橋やっけ?相撲取りたいつっとったやんか、大将で来るかもしれんぞ。」
仲間の励ましが逆に黒田の心を抉る。自分のせいでかつて廃部寸前にまで部を追い込み、
今また彼らの夢を潰した、彼はむしろ罰せられるのを望んでいた。
それも叶わぬ願い、彼らの周りにいるのは気骨ある九州男児、どうして団体の負けを
黒田一人に押し付けたり出来ようか。
後悔と自己嫌悪、そしてより遠くなった草薙の背中。高校横綱の夢は既に潰え、
自分に今一度のチャンスを与えてくれた皆の期待を裏切った。
こんな自分が、どうして顔を上げて相撲を取れる―

土俵では個人戦準決勝の第二試合、鳥取白楼の舟木と福井一条谷付属の朝倉の一番が行われていた。
参加選手の中でもかなりの小兵ながら、引き技や出し投げを駆使し

てここまで来た朝倉だが
舟木のそのスピードについには捕まり土俵を割らされる。
三ツ橋蛍と共に大会を沸かせた小兵力士、国宝候補『吉光』こと朝倉も、ついに力尽きる。
―続きまして、団体戦の3位決定戦を行います。東、千葉県代表、大太刀高校。
西　福岡県代表、立花寺高校―
両校のメンバーが入場し、土俵の東西に陣取る。いよいよメダルを賭けた最後の戦い。
―先鋒戦。東、大峰。西、近久！―
先鋒同士が土俵に上がる、両者ともチーム内屈指の攻撃型選手。体格もほぼ互角で
激しい攻防が予想される一番だ。
―はっきよい―
ぶちかまし、突き合い、押し合い、がぶり寄る両者に会場が沸く。激しい呼吸と汗を玉と
散らせながら、両者の死に物狂いの攻防が土俵に咲く。
―2陣戦。東、幸田。西、武藤―
手足が長く、懐が深い武藤に対し、幸田はひたすら頭を付け、何度もいなされながら食らいつき
その体力の限り追い続ける。武藤も懸命に残し、躱し、凌ぐ。その長い相撲に会場が沸く。
―中堅戦。東、松本。西、戎原―
背が低く体重の有る戎原、ダチ高の赤池に似たタイプの激しい攻めや揺さぶりに対し、
今までの受けの相撲で吸収してきた攻めや返し、滝沢のような勝負勘で受けて立つ松本。
激しい技術戦に、大相撲のスカウトが唸り、目の肥えた相撲ファンが歓声を上げる。
―副将戦。東、陽川。西、伴―
国宝候補『五月雨江』こと伴と、国宝候補『村正』を破った鉈、陽

川の対決。
共に大相撲に進むと志す両者の死闘は、決勝に劣らぬ熱い戦いであると、誰もの記憶に
刻まれる。

―両チームの大将は、その熱狂の『外』にいた―

第８３番　蛍丸と三ツ橋蛍

―大将戦。東、三ツ橋。西、黒田！―

土俵に上がる蛍に、仲間の声援は、観客の歓声は、耳に入っていない。

彼の目前にいるのは、暗い闇の中に浮かび上がるもう一人の自分。

（なぁ、君はどうして相撲を取っているんだい？）

そう問うのは三ツ橋蛍。華奢な体にベビーフェイスを乗せた、かつての自分。

手には楽器、フルートを持ち、周囲には多数の顔のない吹奏楽部の女子達。

（いくら相撲を取っても、もう過去は消せないんだよ、無意味じゃないか。）

その通りだ。記録とは非情なもの、初勝利を挙げた時も喜びは沸かなかった。

だけどあの時は、このまま勝ち続ければきっと、いつか覆せると思っていた。

（無駄だよ。だって・・・分かってるんだろう？僕のやってるのは姑息な相撲なんだから）

変化。真っ向勝負が醍醐味の相撲にあって、逃げ回り、楽に勝利を得ようとする姑息な手。

相手がこれまで培ってきた努力や研鑽を使わせずに終わらせる無情な戦法。

―互いに、礼―

（ほら、相手を見てみなよ。彼は過去に失敗したけど、真っ向からの『相撲』で頑張ってる）

黒田篤。彼もまた２年前に消せない屈辱を味わった。だが彼はその屈辱に常に真っ向から

立ち向かい、今や『国宝』とまで呼ばれるように成った。

そして将来、かつての借りを返すべく大相撲に進むだろう、そう言った明確な目標もある。

（だけど、僕はそうじゃない。明確な目標も、過去の返済も出来ない。
それ以前に胸を張って
『相撲取り』と言える存在になれるとすら思っていない、そうだろ？）
小さな体、足りない膂力、いくら『技』を磨いても、『心』を鍛えても、所詮は上辺だけだ。
根本的な『体』の無い自分に、力士としての将来は見えない。
（なぁ『蛍丸』。そんな呼ばれ方しても嬉しくないだろ？分不相応だって分かってるくせに。）
目の前の蛍の隣に荒木が現れ、うむ、と頷いて消える。
将来の横綱候補、自分が？この相撲で？無い無い。どこの世界にそんな横綱がいるんだよ。
―手をついて―
（まぁ、よく頑張ったじゃないか、ここまで。もういいだろ？）
初勝利も挙げた、部長としてチームを全国まで引っ張ってきた。鬼丸の背中を追い、
桐仁に変化を教わって、新たに入って来た後輩たちに刺激を受け、諸岡顧問に様々な
駆け引きを教わり、幾多のライバル達と戦い、満足のいく勝利も収めることが出来た。
だけど
（そうだよ、それでもまだ忘れられないだろう、全国優勝したチームでの公式戦全敗。）
あぶら子、という言葉がある、小さい子供が鬼ごっこやかくれんぼをする際、まだ特に
幼い子が、負けても仕方ないと鬼になるのを免除され、手加減される存在。
２年前の自分がまさにそうだった。小さいから、非力だから、初心者だから、誰も彼の
敗北を責めなかった、どれだけ負けても、いくら足を引っ張っても。
（そりゃ悔しいよね。負け数に数えられ、戦力外通知を受けてるのに、試合には出られる。）

悔しくないわけがない、忘れられるわけがない、どんなにみっともなくても勝利を求め
それも結局は叶わず、みっともなさだけを全国にさらしたあの過去を。
(どうして、そうなったかわかるかい?『蛍丸』。なに、簡単なことだよ。だってお前・・・)

―はっきよい―
蛍が、黒田が、頭からぶちかましで激突する。
―ガッツゥ・・・ン―
一方が押し勝ち、もう一方がのけ反る、明らかに体の大きな側が!
「真っ向から・・・打ち勝った!?」
桐仁が驚愕の表情で声を出す、会場もそのあまりの光景におおおっ!とどよめく。
「なっ・・・?」
弾かれながら驚く黒田。確かに自分は立ち合い、相手の変化を警戒してややセーブして
突っ込んだ。だがまさか正面から跳ね返されるとは。
自分はそこまで弱かったのか、いや、弱くなったのか?先の団体準決勝で自分を見失った事が
自分を弱くしてしまったのか?
一度弾き合った両者が再びぶつかる。今度は流石に蛍の方が飛ばされる、変化も『蛍火の如し』も
使うことなく。
「マズい、モロに食った!」
大峰が思わず叫ぶ。ぶちかましの軌道をずらす事すらせず、国宝『圧切長谷部』の突進を
まともに食らったのだから無理もない。
一撃で土俵際まで飛ばされた蛍は、額を赤く染めながらも顔を上げ、らんらんとした眼で
黒田を睨む。

その顔を見た黒田が一瞬目を疑う。この小兵の力士がかつての自分と重なって見えたから。

そう、2年前のあの試合の後、ポプラの木に頭をぶつけ続けて来た自分と蛍丸が重なって見える。

自分を罰するため、ひたすら前に出続けたあの時の自分と同じだ！

3度激突する両者。今度は両者弾ける、五分だ。

その一因として、黒田が蛍の自虐ともいえる執念に気圧された感じは否めない。

だがダチ高の面々はその光景に、戦慄と寒気を覚えざるを得ない。

「おいおい、どうしたんだよ部長！」

「無茶するな、回り込め、翻弄しろ！」

その声は、やはり蛍には届いていなかった。

「うおぉぉっ！」

4度目の激突。黒田にももう迷いはない、この相手は決して引かない、変化しない。ならば

自分も全力で押し切るまでだ！

―ドガァッ―

上半身ごとのけ反らされる蛍。血しぶきが舞い、再び足が俵にかかる。

だが次の瞬間には顔を戻し、再び目の前の相手を睨めつける。

黒田ではない、もう一人の自分、三ツ橋蛍を。

立ち合いの瞬間に彼の発した言葉、それをなんとしても否定するために！

（だってお前・・・相撲好きじゃないだろ）

第８４番　引っ込んでろ！

自分の体は起きてしまっている、相手が頭を低くして突っ込んでくる！
絶体絶命のピンチに、蛍の積み重ねてきた稽古が、相撲勘が、考えるより早く
行動を起こす。
「フッ！」
短い『溜め』から素早く身を踊らせ、相手の突進を躱して背後に回り込む。
「八艘飛び！」
「ここで使うか！」
辛うじて黒田のぶちかましを躱し、土俵中央に着地する蛍。そんな彼を
もうひとりの三ツ橋蛍があざ笑う。
（ほらね、所詮僕はそんな程度さ。真っ向勝負で勝てないから変化に逃げる。
そんな僕が相撲を好きなわけがないんだ。）

一方の黒田は逆に驚愕を隠せないでいた、バカな！ここで変化とは!?
「（あの目を・・かつての俺の様な、自分を罰するようなあの目も、この変化の伏線だと!?）」
ここまでの真っ向勝負、『圧切長谷部』の自分に対し、あの小さな体で真っ向から、
額を割ってまで挑んできたのも、このためだと言うのか！
「（そうだ、彼も俺と同じ、屈辱と言う泥沼から這い上がって来た男だ・・・）」
黒田の意思が、目線が、三ツ橋蛍に集中する。自分が戦っているのは今は草薙でも、
先の相撲で不甲斐ない醜態を曝した自分でもない、目の前の国宝

『蛍丸』！

黒田の目に明確な光が灯る。自分が辿り着く場所に行くために、目の前の敵に全てを尽くして

倒す、勝つ、必ず！

土俵際で体を残した黒田が再度、蛍に突進する。蛍もまた腰を割り、すべるように黒田の

足元に向かって出る。

（無駄無駄、相手は相撲に人生賭けてるんだよ、所詮僕じゃ・・・）

「（ちょっと黙ってて！）」

蛍が蛍を怒鳴りつける。今はそれどころじゃない、あの国宝『圧切長谷部』が自分を倒すべく

全精力をぶつけてきてる最中だ、自問自答なんかしてるヒマなんかあるもんか！

蛍をそう覚醒させたのは他ならぬ黒田のその目だ。相手の目を見ての心理戦を諸岡から教わり

身につけていた蛍は、その目を見ることで勝負に意識を全振りせざるを得なかった。

相撲に没頭していくにつれ、心の中の自分が消えて行く、考える余裕がなくなっていく

「（後にしろ、後に！）」

そして蛍の目もまた、らんらんと蛍火の輝きを灯す。

―ドカァッ！―

蛍が身長の低さを生かして、下から『十字かち上げ』を放つ。だが直撃はしたものの、

それだけで止まるような突進ではない。浮かされた上半身を再度沈めつつそのまま蛍を

飲み込む大波の如く前進する。

次の瞬間、黒田は首根っこを上から下に押し付けられる。何だと・・・何が!?

―叩き込み『大引波（おおうねり）』―

蛍は相手をかち上げた後、すかさずバックステップしてジャンプ

し、突っ込んでくる黒田を
上から下に叩き込みつつ、八艘飛びで再び飛び越したのだ、まるで体操選手の様に。
「うまい！」
「上にカチ上げて、すかさず下かよ！」
意気上がるダチ高応援団。黒田の上半身がまさに波のように上下し、土俵に落ち・・・
「こおぉぉおっ！」
落ちなかった。どう見ても限界の体勢から、それでも足を出して土俵内に踏みとどまる。
「うそぉっ！アレを残すの？どんだけよ！」
柚子香が驚愕の声を上げる。『叩き込み』といえば彼女も県大会の決勝、宿敵の池西檸檬に
『三角落とし（トライアングルストライク）』を決められた経歴を持つ。
それに劣らぬ完璧な体勢で決められた叩き込みを残すなんて、あの巨体で、あの前傾姿勢で！
それは黒田が、あくまで『三ツ橋蛍』と相撲を取っているがゆえの凌ぎだった。
そう、相手は草薙じゃない、変化の蛍丸だ。彼に勝つには『彼に勝つため』の相撲を
取らなきゃならない、集中しろ、目の前の相手に。
体制の崩れた黒田に蛍が突進する。狙いは一つ『蛍火の如し、潜』で懐に入り、
得意の潜る相撲で勝負に出る！
―ゴッ！―
蛍の頭が黒田の頭を跳ね上げる、だが次の瞬間、蛍の顔もまたカチ上げられ、割れた額から
血しぶきを舞い上げる。
―かち上げ『棚斬り』―
自身の低いぶちかましを万が一くぐられた時に使う黒田の裏の技。
ぶちかましと

腕でのかち上げの2段攻撃で相手を自分の懐から引きずり出す!
「『蛍火の如し』が破られた・・・初めて見たぜ。」
「なんかもう、三ツ橋君のために用意されたような技だよね。」
荒木と沙田が驚愕の声を出す。あんな真似されたら黒田の懐に潜るのは不可能と言っていい。
「圧切長谷部・・・もともと名の由来は、織田信長が無礼を働いた小僧を棚ごと『圧切った』
からって言われてるわ。まさに彼に、いえ、この対決にぴったりね。」
土俵を見つめ、そう解説する名塚に、カメラマンの宮崎が反論を返す。
「誰が小僧だって?あれはむしろ『牛若丸』だよ。」
突進する黒田に対し、蛍は張り手で応戦する。顔面を捕らえるが無論、その程度では止まらない。
蛍はそこで体を反転させ、なんと背中から黒田にぶち当たっていく。
「鉄山靠(てつざんこう)かよ!」
そう吐き捨てたのは格闘技マニア、館林南の内山だった。中国拳法にあるその技は
即興で出来るような簡単なものではないのだが・・・
蛍はまるで車に撥ねられるように体を回す。そう、背中から当たったのは決して体当たりが
目的ではなかった、体を回すことで相手の突進をいなし、『後の先』を取る事が真の狙い。
コマのように1回転した蛍は見事に黒田の背中に取り付いていた。
「ウナギの如し、久々に来た!」
回転しながらぬるっと相手の背後を取った蛍を見て松本が叫ぶ。
2年前の部内戦で
幸田に決めた『蛍火の如し』の原型となった動き!
両マワシを掴んだ蛍が、なんと前のめりにバランスを崩す。黒田は蛍に後ろを取られたまま

なんと俵に沿って土俵際を円を描いて走り始めたのだ。すり足ながらそのスピーディな動きに
蛍は踏ん張ることも出来ずに引きずり回され、ついにマワシを体ごと振り切られる。
「いよっしゃ、離した！」
「見失うなー！捕（と）まえろーっ！」
「まだだ、徹底的にかき回せぇ！」
「突進来るわよ、対処してーっ！」
意気上がる立花寺と大太刀の面々。熱戦ならなおさら、その先に自分たちの大将の勝利が欲しい！
目に同じ光を灯す両力士が何度目か分からない激突に向かう。
と、蛍の頭に自身を自虐する、もう一人の自分が浮かぶ。
黒田の脳裏に『草薙』が、あの静謐なオーラを纏った力士が浮かぶ。
二人は同時に心でこう一喝する。
「「引っ込んでろ！」」

第８５番　蛍丸と圧切長谷部

―ドカッ！―

両者、頭を肩口にぶつけて止まる。正中線にそってかかる力が吊り合い、土俵上で膠着する。

「ゼッ・・・ゼェ、ゼイッ！」

「かっ、かはっ、はぁあああっ・・・」

押し合ったまま息を荒げる両者。ここまでの激戦に肺と心臓が悲鳴を上げている。

蛍に至ってはそればかりではなく、手も足も限界が近く、血を流した額が痛みを訴える。

それでも軽量の彼に余裕などない、その目を輝かせながら、相手の出方に集中する。

黒田にしてもこの硬直は願ったりだった。自身の呼吸を整えるのもそうだが、

組み止めている間は三ツ橋の姿を見失わなくて済む。

「（ここからどう動く、どうすれば逃さずに仕留められる・・・？）」

思考が加速する。雑念を払い、この蛍火の様な捉えどころのない相手をいかにして

土俵から叩き出すか、その方法を。

「舟木戦と同じ展開だな・・・。」

「ああ、だがまだ『潜る相撲』の体勢にはなってない。それが出来れば！」

桐仁の言葉に陽川が返す。この黒田に対しては今だ懐に潜ることが出来ていない。

鉄壁のかち上げ『棚斬り』の前に阻まれ続けていたから。

蛍も黒田もそれはよく分かっている。前傾でぶちかます押し相撲の黒田にとって

懐に潜られるのは致命傷になりかねない、また彼は体の割に腕が短く、頭を付け合った状態で

マワシを探るのに向いていない。だからこそその手を下に構え、潜

ろうとした相手を
かち上げるために待機させる。
「ぬんっ！」
先に動いたのは黒田だ。なんと自らの体をねじり、蛍の姿勢を崩しにかかる。
「頭捻り、だと・・・!?」
桐仁が絶句する。本来引きながら相手を引き込みつつ決めるこの技を、逆に押しながら出して
蛍の姿勢を崩しにかかる。
「くっ！」
意外性も手伝って効果は絶大だった。思わず片足立ちになった蛍に、今度こそ『圧切長谷部』が
その名の如く圧殺せんと押し込む。
「んんーっ！」
蛍はここで半身のまま体を沈める、姿勢の不利は承知のうえで、突進の勢いを逆に利用して
潜り込もうとする・・・が。
―ガコォッ！―
かち上げ『棚斬り』がそれを許さない。潜ろうとした蛍の頭が跳ね上げられ、顔面を大きく
のけ反らせる。
そのためにわずかな隙間が両者の間に出来る、黒田は無論ここで左右に動く相手を警戒する。
だが蛍は頭をはね上げられたまま、それでも黒田の下に体を沈める、首筋に当たった顔面を
黒田の胸に、腹にこすりつけながら、頭を下に抜く。額の傷の血が黒田の正中線に
一本のラインを描く。
「いよっしゃあ、ついに潜ったぁっ！」
「部長のターン来たぜぇっ！」
蛍はかつて火ノ丸に憧れ、頭から突っ込むガッツある相撲を志して

いた。桐仁に変化を
教わってからも、石高の間宮戦まではそれを隠すため、常に頭からぶちかまし続けた。
主力が去ってからは火ノ丸や冴ノ山の『ぶちかましから軌道をずらす』技術を習得せんと
稽古を重ね、やがてそれは『蛍火の如し』という技に生かされる。
その経歴を経て蛍の首周りはとても柔らかくなっていたのだ、その柔軟性がここで生きた。
下手すれば頸椎を痛めかねないその潜り込み方で、ついに必殺の形を完成させる蛍。
両下手をしっかりと引き、上からの重量に正中線を固める、蛍の相撲の柱ともいえる
姿勢を取り、最後の攻防に力を振り絞る、行くぞ！
寄り立てる蛍、黒田の全体重を押すのは不可能でも、潜ってしまえば押すのは下半身だけだ、
黒田は上から体重を浴びせながら足を引き、こらえる。
蛍はその足に右足でけたぐりを仕掛ける。威力はさほどないが、黒田にはそれが見えていない、
下にいる相手のさらに下の足技など見えるはずも無いのだから。
足に感触を感じた黒田が反射的に右足をさらに引く。
「ここだ！」
そう叫んだのは石高の荒木、この連携を彼は良く知っていた。柔道で言う小内狩りから
背負い投げへの連携、その先の技を俺は知っている、食らっている！
瞬時に体を反転させ、黒田の股下を腰に乗せて担ぎ上げる蛍。蹴繰りからの流れを利用し
担ぐ投げに繋いでいく。
「百千夜叉落とし！」
赤池が叫ぶ。厳密に言うとそれは火ノ丸のそれとは少し違う、横に揺さぶり横に投げる

本家とは違い、相手の前のめりの腰に潜り込み、シーソーのように相手を前方に倒す
縦回転の技。
「お〃お〃お〃お〃っ!!」
蛍丸が吼える。もう余力は一切残っていない、まさに乾坤一擲の投げで勝負を決めにかかる。
「こあぁぁぁぁっ!〃!」
圧切長谷部が吼える、蛍の頭を上から抑え込み、自ら前に出て相手の投げの重心を崩し
地面に叩き潰しに行く!
二人の頭が、同時に土俵に突き刺さる。
暗転する意識。
―ドサァッ―
折り重なって倒れる両名。下になった蛍に覆い被さるように黒田がいた。ただ落ちた瞬間は
蛍の体は弧を描き、頭以外は地面に付いていない。どうだ・・・?
「西、黒田の勝ち!」
その判定と共に副審が手を上げる、物言いだ。両者を東西に分けて審議に入る。
ダチ高の面々も、立花寺の一同も、祈るような気持ちで裁定を待つ。
やがて審判団が分かれ、主審の行司が中央に位置し、高らかにこう宣言する。
「同体、取り直し!」
おおおっ!と沸く会場。この熱戦は未だ終わらない、その興奮に場内は自然と両名を
たたえるコールに包まれる。
―ほったるまるっ!ほったるまるっ!ほったるまるっ!―
―へっしきりっ!へっしきりっ!へっしきりっ!―
鬼丸も、五條姉妹も、清心道も、白楼や青葉の面々も、沙田、荒木、菅、内山、朝倉ほか会場内の
全てのライバル達も皆、思い思いに声を上げる。

やや劣勢な圧切コールを埋めようと、立花寺の面々が声を張り上げる。
そんな中、ダチ高の一同だけが顔を青ざめさせて固まっていた。
仕切り線まで進む両者を見上げ、呆然とした表情で桐仁が一言、こう嘆く。
「三ツ橋・・・お前、意識が飛んで・・・」
その目に輝きは無く、まるでゾンビのように歩き、ふらつきながら蹲踞の姿勢を取る。
消えた蛍火の輝きが今の彼の状況を物語っていた、それでも繰り返した来た習慣が
土俵にその手を下ろさせる。
「マネージャー！・」
諸岡顧問が千鶴子に向き直り、指示を出す。彼女はひとつ頷くと、足元の救急箱を拾い上げる。
その横では柚子香が両手をかみ合わせて、祈るような姿勢で土俵を見守る。

―ほったるまるっ！ほったるまるっ！ほったるまるっ！―
―へっしきりっ！へっしきりっ！へっしきりっ！―
蛍はその合唱を、どこか遠い世界の音の様に聞いていた。
ふと前を見ると、そこにはもう一人の自分がいた。ああ、さっきは悪かったね、と自分に謝る。
その蛍ももう何も言わない。フルートを抱え、むしろ何かを言ってほしそうに、佇む。

―バッチィィン！―

第８６番　魂の叫び

―バッチィィン！―

国技館が沈黙に包まれる。その光景を見た会場の全員が目を丸くして硬直する、なんだあれは？

「・・・え？」

思わずこぼす蛍の目前に、黒田の顔。

「起きとると!?」

「あ・・・はい。」

黒田はこの取り直しの一番、行司の「手をついて」の言葉と同時に、明らかに手付き不十分の

状態で蛍に突っかけた。

が、ぶちかますでもなく突っ張るでもない、なんと彼は両手で蛍の頬にサンドイッチビンタを

放った。響き渡る張り音とは裏腹に、それは蛍を動かすこともダメージを与える事もなかった。

代わりに与えたのは、蛍の意識の回復、それだけ。

ふっ、と息を吐いて手を放す黒田。主審の「キチンと手をついて」の警告に頭を下げる。

が、その主審もどこか救われたような表情で黒田から目を逸らす。

「三ツ橋を・・・起こしてくれたのか？わざわざ。」

思わず漏らす桐仁の言葉と同時、横から拍手。

―パチパチパチ・・・―

諸岡顧問がいい笑顔で土俵上に拍手を送る。もしあのまま立ち合っていたら三ツ橋君は間違いなく

無事では済まなかっただろう、そんな彼を気遣ってくれたその精神に感謝し、手を叩く。

それに応えて桐仁が、千鶴子が、幸田が、松本が、陽川に大峰、赤池に沼田に柳沢、小林が。

最後に手を噛み合わせていた柚子香がその手をほどき、拍手を送

る。
事情を察した立花寺の選手たちが、そして立ち合う前からの蛍の異常に気付いていた
選手たちや、目の肥えたファンがその『心』に惜しみない拍手を打つ。
遠い2階席の名塚と宮崎も、鬼丸や清心道、佑真にレイナ、柴木山に大和国も事態を察し
それにならう。
―パチパチパチパチパチパチパチ―
ふぅ、と息をつく主審。行司を務める彼は先の一番が軍配差し違えで取り直しに
なったことにナーバスになっていた。判定を覆されるのは審判にとって恥であり、
面白い事ではない。
が、再勝負に当たって両選手の状態を把握するのはまた別の義務、三ツ橋選手の異常に気付かず
軍配を返そうとしていた自分の不徳を、対面の選手が止めてくれたのだ。
「大丈夫かね、君。」
今更ではあるが改めて確認する。ハイ!と目を見据えて答える三ツ橋選手、いけそうだ。
未だ鳴りやまぬ拍手の中、蛍は天を仰ぎつつ、心にじわっとした感動を覚えていた。
「(ちょっとカッコ良すぎでしょ、黒田さん・・・)」
その時だった。蛍の頭に思い浮かぶその言葉、遠い過去のその記憶を思い出す―

『可愛い』と言われるのが嫌いだった。
ヒゲが濃い人が羨ましかった。
亭主関白に憧れていた。

ムッキムキになりたかった。
そう、『カッコよく』なりたかった。
でも周囲は皆一様に『可愛いね』と言うばかりだった。

文化祭の日、体育館で『彼ら』に出会った。
―これが相撲における『死』じゃ。どうじゃ、ぬるいか?―
小さな体をものともせず、真っ向から相手を倒し続ける同級生、名前は『潮　火ノ丸』。
―そんな勝ち方・・・俺にだってプライドがあらぁ―
他のクラブ代表との連戦の疲れを言い訳にせず、レスリング限定の戦法も使わずに相手を認める
名前は『國崎　千比路』。
―カッコイイなぁ、二人とも―
その日のうちに吹奏楽部を退部し、相撲部に入部した。そして僕は彼らを、ライバル達を
見続けた。
―僕もあんな風に『カッコよく』なりたくて―

いつからだろう、負け続けるあまり、勝つ事に執着するあまり、それを忘れてしまったのは。
カッコいいのは他人の領分、自分は無様でもいいからとにかく勝ちたい、チームの役に立ちたいと
変化をし、無礼な行為に身を染めて、後に残ったのは二度と消せない記録と、後悔。

「(ああ、そうだ。僕は・・・カッコよくなりたかったんだ。)」
小さな体で大相撲の世界をこじ開けた火ノ丸さんのように。
レスラーだった彼が、国宝『大包平』を真っ向から寄り切った國崎さんの様に。
そして、目の前にいる、体も心も大きな、屈辱を抱えてなお正道を

行く黒田さんの様に。

―手をついて―

蛍は腰を下ろしながら、少しだけ目を閉じる。その先にいるのはフルートを持った

もうひとりの自分。彼はガッツポーズを示し『そうだよ、それだよ！』と満面の笑顔。

そうだ、僕は、僕達は・・・

―はっきよい―

「(カッコよく、なりたかったんだぁーーーっ!!)」

黒田が、蛍が、頭から激突する。左右に躱さない真っ向勝負！

当然の如く押し込まれながら、蛍は心で叫ぶ。自分の原点、相撲を取る一番の理由を。

―かっこよくなりたい！かっこよくなりたい！かっこよくなりたい！かっこよくなりたい！―

―カッコよくなりたい！カッコよくなりたい！カッコよくなりたい！カッコよくなりたい！―

押されながら、呪詛の様に唱え続ける。子供じみたその欲求を、心の底から、魂の叫びを。

そうだ、それだけなんだよ、僕が相撲を取る理由なんて。相撲が好きか？そんなことはどうでもいい、

かっこよく成りたかった、誰かに『カッコいい』そう言ってほしかったんだ！

蛍の足が俵にかかる、黒田は圧殺して押し出さんと胸を合わせにかかる、両者の距離が近づき

蛍の手が黒田の下手マワシに届く。それを掴み、足で俵を握りしめ、胸を合わせたまま腰を落として

懸命にこらえる。

黒田の巨体が蛍の体を起こしていく、重心が俵に近づいていく、決着の時が近づいていく。

蛍は全身の力を集中し、心から『想い』を振り絞る。

―僕は―
「（カッコよく、なりたいんだあぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!!」
その時だった、黒田の巨体が、その足がふっ、と浮く。
「「吊ったあぁぁぁぁぁぁっ!!」」
ダチ高の面々がその光景に絶叫する、拳を握りしめ、血液を沸騰させながら。
「「なんやとぉぉぉぉぉっ!!」」
立花寺の一同が、ありえない光景に慟哭を吐く、そんなことが、あるのか!?
７９ｋｇの蛍が１３５ｋｇの黒田を吊り上げる、それだけでも異常な光景ではあるが、
ダチ高相撲部員にとって、それは初めて見る三ツ橋部長の『吊り』のシーンだった。
いかに相手が寄りかかってきたとはいえ、俵を掴む足で踏ん張りがきいているとはいえ、
あの三ツ橋がこの巨体を吊り上げるなんて！
「三ツ橋ぃぃぃぃっ!!」
「部長おぉぉぉぉっ!!」
叫ぶ大太刀。彼らはわかっている、今の蛍は相手を持ち上げるだけでいっぱいいっぱい、
吊ったまま寄る事はおろか、体を回して土俵外に出すことも、横倒しに吊り落とすことも
出来ないという事が。
だから声を出す、その頑張りに、その『心』に。
「クローっ！寄りかかれ、浴びせろーーっ！」
「暴れろ黒田、相手を落とせーーーっ!!」
吠える立花寺。そうだ、つまづいたらまた立って歩きだせばいい、
団体も個人も
もう優勝は無いが、そこからまた勝ちを積み重ねて行けばきっと届

くんだ、草薙に。
だから、勝てよクロぉっ！
そして、二人の体が、ふっ、と傾く。
土俵の外側に。
まるでスローモーションのように倒れ込む二人。蛍は歯を食いしばったまま、その蛍火の様に
らんらんと輝く目を黒田に向けたまま。
黒田もまた、尊敬と敬意と敵意をたたえた目で、蛍を見下ろしながら。
―どどぉっ―
蛍が背中から、黒田がその上に覆いかぶさって、土俵下に転落する。
その瞬間の歓声は、知らない人が聞けばこれが決勝戦では無く、3位決定戦であるなど誰も
信じないだろう。そんな大歓声が会場に鳴り響く。
―寄り倒しで西、黒田の勝ち！―
黒田がまず立ち上がり、蛍に向けて手を差し出す、いけっか?と声を掛けつつ。
蛍は寝ころんだまま相手を見上げ、大丈夫です、と返す。下敷きになったかに見えたが
しっかりと『かばい手』で蛍を潰すのを防いでいてくれたから。
黒田の手を借り、体を起こす蛍。ほんとカッコ良すぎだよ、この人は。
土俵の東西に分かれ、礼をして降りる両者。蛍を最初に迎えたのは千鶴子だった。
消毒液をしみこませたガーゼを蛍の割れた額に当てる。
桐仁がお疲れ、と肩を叩く。続いて蛍の正面に立つのは、柚子香。
彼女は潤んだ目で一言、こう告げる。
「カッコ良かったですよ、蛍部長。」
その声を聴いた蛍が、一瞬ポカンとした表情を見せる。そのまましばし固まっていたが、
やがてその目から涙が、まるで蛍火のようにぽろぽろと零れだす。

「・・・ありがとう。」
届いた。報われた。願いがかなった。ついに立った自身のゴールで、蛍は涙を流す。
そんな彼の前でダチ高の面々は顔を見合わせて笑顔になる。

「つーか、今までカッコよくないと思ってたスか？」
「そうですよ、そんな小兵で大型選手をあんだけ薙ぎ倒しておいて。」
・・・え？
「ワイを散々手玉に取っといて、カッコわるかったらワイ立場無いわ。」
「国宝『蛍丸』って羨ましすぎですよ、俺もそんな言われたいッス。」
・・・あれ？
「私はずっと思ってましたよ、カッコいいな、って。」
「ずいぶん基準が高いんですねぇ、カッコ良さの。」
・・・ちょ、ちょっと待って！まさか。
蛍はごしごしと涙をぬぐうと、顔を上げて真顔で皆に問う。
「もしかして・・・声に出てた？」
その問いに、全員の絶望の返事。

「「思いっきり叫んでましたよ！」」

石化する三ツ橋蛍。周囲は皆、爆笑である。
「叫んだから力出たんやないか。」
「会場中に響き渡ってましたよ『カッコよくなりたいんだー！』って。」
「ＴＶ中継も入ってるから日本中に届きましたねー、」
「いやいや今はネット世界だから、ワールドワイドに知れ渡りますよ。」
青ざめた蛍の周囲で嬉々としてはやし立てる仲間たち。桐仁に至っては苦しそうに顔を伏せ
蛍の肩に手を回して笑いを吐き出している、完全にツボに入ったようだ。

「忘れろーーーっ！」
顔を真っ赤にして皆を追い回す蛍。が、顧問の諸岡の鶴の一声で一同ぴたりと止まる。
「こらこら、じゃれるのは試合の礼が終わってからだ！」

土俵の東西に整列する両チーム、主審の声が高らかに響き渡る。
―5―0で西、立花寺の勝ち！―
やはり春の覇者は強かった。誰もがもう一歩の勝負ではあったが、ギリギリの所で
立花寺はダチ高を上回って見せたのだ。

大太刀高校相撲部、全国団体戦４位。
蛍の、桐仁の高校相撲は、こうして終わりを告げた。

第８７番　日本一

「よっ、お疲れさん。」
土俵を後にし、観客席の千葉代表スペースに戻って来たダチ高の面々に、個人戦で出場してた大河内たちがそう声をかける。試合の余韻を胸にダチ高の皆も、おう、と返す。
ただ蛍だけは目を伏せ、小さく縮こまってこそこそと席に着こうとする・・・のだが。
「カッコよくなりたいんだーっ！」
仰々しく立ち上がって演技する荒木、一息置いてぷっ、と吹き出す面々。
「ギャハハハハハっ！」
「おいおい止めてやれ・・・ぷくくっ。」
大笑いする沙田に、神崎がフォローにならないフォローをする。桐仁に至っては思い出し笑いでその場にうずくまって苦しそうにのたうつ。
「（あー、こりゃ当分言われるな・・・）」
見ないふり、聞こえないふりをしながら隅っこで頭を抱える蛍、本当にえらいことになったなぁ。
「ま、まぁまぁ三ツ橋部長、旅は恥のかき捨てって言いますし。」
「そうですよ、人の噂も７５日です、気にしない気にしない。」
堀姉妹がフォローするが、出来ればスルーしてほしかった・・・のだが。
と、そんな空気に助け舟を出すかのように、場内アナウンスが響き渡る。
―お知らせします、この後、個人戦３位決定戦の予定でしたが、先に団体決勝戦を行います―
それは大会運営側の、個人と団体の両試合に出る二人の選手に対する配慮だった。
黒田と舟木の連戦による不利を無くすべく進行プログラムの変更

が提案され、参加選手の
了承を取り付けていたのだ。
団体決勝→個人3位決定戦→個人決勝という流れにすれば、舟木も黒田も連戦を避けられる。
個人3位決定戦を控える福井の朝倉も、控え通路の先にいる鳥取白楼と宮城青葉もこの提案を
快く了承していた、バテきった相手に勝って何の価値があるものか、と。
かくして団体の決勝戦、鳥取白楼高校と宮城青葉高校の対決を迎える。
東の控え通路、白楼の加納監督が選手たちにこう告げる。
「普段の稽古をそのまま出せばいい、それでお前たちが勝つ！」
全員のオッス！の声の後、マネージャーリーダーの咲が手を上げ、こう話す。
「2年前な、当時の主将だった兄貴、天王寺に試合後こう言われたんや。『日本一の相撲部の
マネージャーにしてやれんかったわ』ってな。」
ひと息置いて続ける咲。
「あれから2年、ウチらはインターハイ全国を取れてへん。せやけどな・・・」
同じマネージャーの田中と七瀬の間に移動し、両名の肩を抱いて笑顔でこう告げる。
「こーんなキレイどころ3人にマネージャーやらせといて、優勝できなんだら許さへんで！」
その激に思わず笑みがこぼれる。確かにそうだ、とか、自分でそれ言ってどないすねん、とか
咲を差してボクは大きいほうがスキです、とか言って小突かれる者もいたりする。
さすがのマネージャー。緊張をいい感じでほぐされ、今、白楼の精鋭が出撃する。
「さぁ、お前たちの花道だ、思う存分暴れてこい！」

青葉高校の松田監督が選手たちを鼓舞する。宮城の古豪である青葉だが、未だ全国優勝は無い。

悲願の全国制覇目前ではあるが、あえてそのプレッシャーを与えないように気を遣う名伯楽に

全員がおおおおっ！と猛って答える。

春の覇者、立花寺を準決勝で下したその勢いがチームの背中を後押しする、さぁ、あと一つ！

絶対に勝つ！と皆で目を合わせ、通路に並ぶ。

―東、鳥取県代表、白楼高校。西、宮城県代表、青葉高校―

両チームが花道から姿を現す、大相撲の土俵入りさながらに木槌が打ち鳴らされ、

観客の大歓声がそれをかき消す中、両チームが堂々の入場を見せる。

「演出凝ってますねー。」

感心する沼田に、桐仁が思わずこぼす。

「俺らの時はここまで盛り上げなかったけどな、これも国宝効果か・・・」

「来年はみんながこの舞台に立たないと、ね。」

千鶴子が1、2年に向けてそう語る。そう、ダチ高は団体メンバーで3年は蛍と桐仁の2人だけ。

後輩が全国の舞台を経験したことで、来年は今年以上の活躍が大いに期待できるだろう。

―先鋒戦。東、バトムンフ。西、砂野―

先の準決勝で黒田を破った砂野は、その勢いそのままに土俵を疾走する。

１７７ｃｍ８２ｋｇの小さな体は、バトの右へ左への投げに振り回されながらも俊敏な足運びで耐え凌ぐ。

何度目かの投げを凌いだその時、両足が揃ったタイミングでバトが『2枚蹴り』で仕留めに行く、

だがそれは砂野の仕掛けた罠だった。なんと彼はまるで縄跳びの様にそれを飛んで躱すと

刈りに来たバトの足を追いかけるように刈り返す。
「ツバメ返し！」
「うまいっ・・・」
瞬時に横倒しになるバト、まさかの切り返され方に呆然とするしか無かった。
―2陣戦。東、七瀬。西、岩隈―
立ち合いからひたすら張り続ける七瀬。とにかく先手先手を取り、相手に相撲をさせない。
岩隈は何度も体ごと突破を試みるが、その度に体を躱されて組み止められない、
2分にもわたる打撃戦の末、ついに七瀬が押し出して勝利した、息も絶え絶えになりながら。
―中堅戦。東、北谷。西、曽田―
青葉の曽田はここまで出番の無かった控え選手。データ相撲の北谷相手に満を持して登場。
その目論見は当たった、１８１ｃｍ９０ｋｇと決して大きくないその体躯で取る相撲は、得意の右四つから
強烈な膂力でがぶり寄る、意外ともいえる正統派のスタイルだったのだ。
変化や投げを想定していた北谷はそれに対応できず、無念の黒星を喫する。
―副将戦。東、久留田。西、木下―
巨漢対決となっらこの一戦は、先の一番とは逆に久留田が差し勝つとそのまま電車道で
決着をつけてみせた。大型選手同士の一番なら、名門高で生き残ってきた久留田に一番の長があった。
これで2―2、決着は大将戦の国宝『備前長船』舟木と、国宝候補『鶯丸』鳥羽に託された。
―はっきよい―
鳥羽は体の割にその長い手でひたすら張ってくるスタイルの力士だ。

『鶯の翼』と言われる彼の突きは多彩で、大振りなモーションにもかかわらず的確に舟木の体の
芯を捕らえる。まるで羽ばたくように突きを繰り出し、舟木に組み付かせることをさせない。
かい潜ろうにも低空の突きが混じっており、手を掴もうにも手の引きの速さは一級品だ。
「お、おい・・・あの舟木が押されてる!」
「連打でもなく、速さでもなく、一発一発の力強さがある、なんて優雅な突きだ。」
剣の連撃ではなく、まるで丸太で城門を突き押すかのように相手を押し込んでいく、
ここにきて国宝『備前長船』が負けるのか?と誰もが思う。
舟木はこの状況をまさかの方法で打開する。なんと体を正対から９０度回し、相手に対し
真横を向いて構えたのだ、まるで大相撲の『三段構え』のように!
「なにっ!?」
体を横にして自らの的を細くする、そのあまりに突拍子な対応に驚く鳥羽。立ち合ってから初めて
彼の突きが空振りし、舟木の胸元を通過する、マズい!
国宝『備前長船』の豪快な一本背負いが、鶯の羽根をねじ込んで土俵に叩き伏せる。
―東、舟木の勝ち!―
喜びを爆発させる白楼陣営。かつて7連覇目前にして大太刀に敗れて以来、ついに
覇権奪還に成功した、その喜びに沸きに沸く。
咲は二人のマネージャーと抱き合って涙を流す、過去二年間で流し続けた悔し涙は
ここに来て歓喜の涙に変わったのだ。
肩を落とす青葉、あと一歩、あと1勝のなんと遠い事か。
選手たち以上に無念さを見せていたのは松田監督その人だった、手塩にかけた可愛い弟子たちに

栄光を掴ませてやれなかった無念に涙する。
「熱い監督だな・・・今度合同稽古を申し込んでみるか。」
そう呟く諸岡顧問。涙もろいという点で松田監督には同じ匂いを感じる、彼とも是非一度
語り合ってみたいものだ、と。
「ええ・・・いいですね。」
桐仁がそれに続く。指導者の道、それは選手に負けず劣らずの熱く、そして険しい道。
柏の阿部監督、西上の飯田監督、栄大付属の三木監督、白楼の加納監督、そしてこの
松田監督、何より隣にいる、大太刀をさらに強くしてくれた諸岡さん。
自分もそんな生き方に身を投じてみる、それもいいかもしれない。

―続きまして個人戦、３位決定戦を行います―
―東、福岡代表、黒田。西、福井代表、朝倉―
蛍や桐仁に劣らぬ小兵の朝倉、国宝候補『吉光』。出し投げや引き技を得意とする俊敏な
相撲を得意とする選手。突進の国宝『圧切長谷部』こと黒田と相撲スタイルが噛み合う存在。
「俺と蛍部長のスケールアップ版ですかね。」
そう語る幸田に、蛍はこう返した。
「彼らのスケールアップ版にならなきゃ、ね。」
立ち合いの瞬間、黒田の突進を躱した朝倉はそのまま出し投げに行く、沙田の出し投げに劣らぬ
その速さに誰もが決着を予感する。
が、黒田はすんでの所で踏みとどまると、その投げをすくい投げで返しにかかる。
すくった相手の腕を片門に決め、体で圧殺しながら投げに巻き込む。
黒田は青葉の砂野、大太刀の三ツ橋と小兵との戦いが続いていた。

その『慣れ』が功を奏したと
いえるこの対応に、朝倉の体が土俵から落ちる、勝負あった。
―これより個人戦決勝、『高校横綱決定戦』を行います！―
興奮冷めやらぬ熱戦続きの中、ついに結びの一番を迎える国技館。
―東、鳥取県代表、舟木。西、千葉県代表、沙田！―
最後の、そして最高の殺気がほとばしる土俵上。相対するは国宝『三日月』と『備前長船』。
頂点に立つのは、日本一の栄冠は、どちらの手にー
―はっきよい！―
沙田の出し投げが炸裂する、舟木が足運びでそれに付いて行く、沙田は追いついてきた相手を
のど輪で迎え撃ち、右足でちょん掛けを仕掛けつつ押し倒しにかかる。
―仏壇返し『月蝕』―
呼び戻しと同じ原理、引いておいて逆方向に押し倒すこの技に舟木が背中から倒れたのは
その技術の見事さもさることながら、やはりここまでの試合の疲労があったことは否めないだろう。
荒木が土俵下で歓喜する中、沙田は大きな仕事を成し遂げた満足感と共に、将来に思いを馳せる。
「（俺も行くぞ、大相撲に。待ってろよ、天王子さん、大典太・・・そして、潮君！）」

『団体戦３位、立花寺高校。』
『団体準優勝、青葉高校。』
『個人戦３位、福岡県代表、黒田君。』
『個人戦準優勝、鳥取県代表、舟木君。』
拍手に包まれ、賞状を受け取り、メダルをかけられる選手たち。
今年、大太刀が届かなかったその輝きを、来年こそはという目で見下ろすダチ高の面々。
―そして―

『団体優勝、鳥取県代表、白楼高校！』
『個人戦優勝、高校横綱、千葉県代表、沙田美月君！』
日本一、その栄冠を勝ち取った名が呼ばれ、国技館が大歓声に包まれる。
選手も、記者も、力士も、親方も、そして相撲ファンも、栄冠を勝ち取った彼らに惜しみない
拍手を送る。
勝者がいて、敗者がいる。だが彼らの心は等しく一つ。
相撲が、大好きだ。
―来年も、再来年も、その次の年も、それはずっと続いていく―

第８８番　進路

「いよっし、スタミナ次郎にとうちゃくーっ！」
「うぉー腹減ったー。」
「俺もう倒れそうッス・・・」
大会終了後の夕方、ダチ高がチャーターしたマイクロバスが焼き肉店『スタミナ次郎』に
到着、これから打ち上げの食事会である。
「でも、僕らまでご馳走になっていいんですか?」
諸岡顧問にそう聞いたのは大河内だ。他にも沙田、荒木、そして神崎もその後に続く。
彼らに諸岡はぐっ、と指を立て、目を光らせてＯＫのサイン。
「ちゃんと君たちの分も予約してあるから、遠慮は要らないよ!」
おおー、と顔をほころばせる一同。実はダチ高相撲部は全国出場を決めた際に、部費の増額の
申請許可が通っていたのだ、それでこの気前の良さである。
「で、俺らまで来たけどいいんスか?」
五條佑真がその後ろからそう問う、傍らにいるレイナは、なんなら私たちは実費でも、と言うが
諸岡は首を振り『まかせときなさい』のジェスチャー。
が、入り口のドアにかかった看板を見て、ええっ!?と固まる諸岡。
〔本日貸し切り〕
「貸し切り!?そんなバカな、確かに予約を入れておいたはず・・・」
そう狼狽した時、カラン、と店のドアが開き、年配の女性が顔を出す。
「あ、大太刀高校御一行様ですね、どうぞどうぞ、いらっしゃいませ。」
なんとなく冴えない顔で全員を手招きし、店内に誘導する女性店員。
「どゆこと?」
「いくら俺達でも店内全部の食材を食いつくせるワケじゃないし・・・」
「仕入れが滞ってるとか、そういう事かしら・・・?」

彼らの疑問は、入店してほどなく氷解することになる。店内にいたのは２０名ほどの客だが、
その全員が例外なく大男、しかも着物に身を包んでいる。そう、力士だ。
「長門部屋の！」
見知った面々に思わず叫ぶ桐仁。と、テーブルに座っていた一人がこちらを見て返す。
「おう、ダチ高やないか、お疲れさんやなぁ！」
「「童子切!!」」
陽川が、大峰が、大河内が、そして神崎がその名を叫ぶ、またとんでもない有名人がいたもんだ。
沙田に至っては、びりっ！と気を張ってかつての天敵を睨めすえる。
「まぁまぁ、そない緊張せんと、今日はプライベートやからな。」
「相撲部屋がこんな庶民の店に来るんですか？」
「今日は母校の白楼が優勝したさかい、お祝いに焼き肉おごるって宣言したんやが、
日曜だけあってどこも満席でなぁ、こういう大型店でないと食えんかったんや。」
ああなるほど、と納得する一同。彼らの胃袋を満たすとなると並大抵の店の在庫では追いつくまい、
この店が今日貸し切りになっているのも彼らが原因だったか。
耳を澄ますと店の奥の事務室から店長の悲鳴が聞こえてくる、他のチェーン店からも
食材をかき集める電話の真っ最中のようだ。
「長門部屋・・・ってことは？」
蛍のその言葉に、そやそや、と食材コーナーに声を飛ばす童子切。
「おーい小関、ダチ高の面々が来たでー！」
その声に反応して、食材をかき集めていた力士の１人が振り向く。
蛍と桐仁、佑真にレイナ、
そして千鶴子にとっての懐かしい顔が。

「みんな！」
陽が差すような笑顔になる小関。ダチ高の側も久々に見る、その懐かしい表情に思わず笑顔になる。
「三ツ橋、辻、みんな頑張ったなぁ・・・」
「僕らだけじゃないけどね。」
そう言って後ろの後輩たちを差す蛍、桐仁もそうだな、と頼もしい後輩たちを自慢する。
「部長も元気そうで何より。」
「おいおい、僕はもう部長じゃないよ。」
そう、今は三ツ橋が部長のはずだが、どうもこのメンツが揃うと、彼らの脳内では部長は
どうしても小関になってしまう。
思わぬ懇談会になった夕食ＩＮスタミナ次郎。現役で活躍する力士たちの話はダチ高の
面々にとって思わぬ充実した時間になった。
「妹さん・・・咲さんは来てないんですか？」
千鶴子の質問に、思わずむっ、とした顔になる童子切。
「聞いてや！電話で誘ったんやけど、あいつ何て言うたと思う？」
『えー、ス次郎？ウチらは牛神王で祝勝会やでぇ♪』
鳥取の和牛専門高級店の名を出されては黙るしかない、というか童子切が全国制覇した時も
そこまでグレード高くなかったんだが・・・
「今度会ったらデコピンやな。」
関取の冗談に笑いが起こる、親しみ安いキャラクターだこと。

「おーい小関、俺赤身頼む。」
「あ、俺はカレーとサラダな。」
「こっちに豚トロとラーメン、早よ持ってこいや！」
長門部屋の面々が小関他数名の下位力士に指示を出し、食材を取りに走らせる。その遠慮の無さに
少し、むっとした表情を見せるレイナ。

「相撲部屋っていうのはそういう所だから、仕方ないさ。」
「でもせっかく久々に部長に会ったのに、気が利かない連中じゃない？」
佑真のたしなめにも納得がいかないレイナ。折角の再会も食事もパワハラを見ながら食べても
気不味いだけだ。
と、そんな五條兄妹や桐仁をちょいちょい、と手招きする童子切、何すか？何よ！という顔で
そのテーブルに移動する各々。
「小関って学生時代からああなんか？」
「ああ、って？」
「今やって、折角ダチ高来とるんやないか。少しは他の連中に任せてお前らと話してええんちゃうか？」
思わずアンタが言うな！とツッコみそうになるレイナ。が、続く彼の話に少し納得する。
どうも小関はそういった図々しさに欠ける所がある、と。
「アイツは相撲が好きやし稽古も熱心や。ただ何ちゅうか、我が弱くてなぁ、
そんで番付も上がらんのや。」
相撲も一対一で戦う格闘技、単に技術や体だけでは無く、自分が相手より強いという
自惚れともいえる自信が無いとやっていけない、いちいち相手に敬意を使っていては
勝てるものも勝てなくなる、土俵上では俺こそが強者だ、という厚かましさが無ければ。
今もそうだ。部屋頭の童子切に『すいません、後輩と話させて下さい』って言えば誰も
文句を言う気はない、若手中心のこの部屋はそこまで気が利かないワケではない。
だが小関は童子切の付き人として不平を言わず、ろくに食事もせずにせっせと動いている。

上下関係が厳しい世界とはいえ、下っ端根性が身に付いてしまえば上がり目すらなくなる。
そんな話を振られて顔をしかめたのは佑真だ。かつての『ダチ高最強』時代に
小関を散々使いっ走りにしてきた苦い記憶が蘇る。
「スイッチっつーか、キッカケがあれば化けると思うんですけどね、ぶちょ・・・小関は。」
「そう思て結構かわいがっとるんやけどなぁ、どないしたもんか。」
その会話を少し離れて聞いていた千鶴子がぼふっ!と赤面する。
隣の柚子香がジト目で
姉にツッコミを入れる。
「かわいがる、って、徹底的にシゴく、って意味知ってるでしょ?」
「う、うん、シゴく、ね。」
さらに赤面し、頬を抑えて俯く千鶴子・・・ダメだこの姉。

「んで鬼切、卒業したらウチ来るんやろ?」
その問いに一瞬表情を固める桐仁、メガネを指で上げると、こう返した。
「正直迷ってますよ、自分の『道』に。」
「なんやなんや、大学とか就職とか後でもええやないけ、まず角界に入ればええんや
通用せなんだらそっち考えたらええねん。」
そんな返しに陽川はうんうんと頷き、大峰と大河内はおお!という表情。それでも桐仁だけは
その言葉に素直には頷けない。
力士と指導者、その進路への天秤は今だ吊り合っている。本音を言えば角界に進みたい、
あの日誓った、いつか火の丸と角界で相撲を取るという夢を諦めてはいない。
だが自分は欠陥の有る選手だ、学生相撲ならともかく大相撲で自分が通用する力士に

成れるのかといえば自信は無い、それに高校相撲を経て、指導者と言う立場に魅力と
やりがいを感じているのもまた事実なのだ。
「そういやバトの奴、柴木山部屋に入門決まったらしいで、つい昨日だそうや。」
その一言に桐仁の思考が中断される。バトムンフ、今日彼が敗北した相手。昨日までとは違う
明るく大きな相撲を取っていた理由はそれか！
「そういやお前さん今日バトに負けたんやったな、こらますます借りを返さんとあかんなぁ。」
ニヤニヤしてそう桐仁に語る、その会話を興味深そうに聞いていたのは意外にも大河内だ。
「（柴木山部屋、か。実は僕の家の近所なんだよなぁ・・・）」
その後も学生の面々と色々話し込む童子切。陽川を名指しで『鉈丸』と評して
まんまじゃないですか！と笑顔で突っ込まれたり、沙田と火花を散らしていたはずが
『夜の話』になった途端に沙田が食いついてきて、お前もスキやなぁ、と意気投合したり
小林さんと腕相撲を勧められ、ファンサービスと侮っていたらマジ負けして『アンタ男やろ』と
返したら赤池に般若のような表情で睨まれたりと、楽しい時間?を過ごす面々。
「おーい小関、アレまだあるやろ、皆に配ってやれや。」
その指示に応えて小関が一度バスに戻り、分厚い封筒を持って来る。彼らに配られたのは
来場所の大相撲観戦チケットだ。
「ま、角界入り迷ってるヤツはソレ見に来たらええわ、ワイからの勧誘やな。」
「蛍丸も角界に来いや、カッコよくなりたいんやろ?」
「貴方まで言わないでください！」

蛍から笑いを取って食事会はお開きとなる。

だが、最後の笑いは彼らと別れた後、童子切のあ・・・という固まった表情の後に沸く。

「ちょ、ちょいまてや・・・俺人気力士やろ?何で誰もサイン要求せぇへんねーん!」

帰りのバスの中、高校生の面々はそれぞれ自分の『進路』に思いを馳せる。

蛍も桐仁も千鶴子ももう3年、将来への選択をする時間のタイムリミットは、すぐそこに迫っていた

第８９番　盛り上げていこう！

「おーい大峰。そのラインもうちょい右だ・・・そう、そこ！」
　体育館の館内、桐仁が図面を見ながら指示し、配置の為の紐を大峰がマスキングテープで固定する。
「対角合ってるー？」
「５センチこっちが長いッス、ちょい右にズラしますよー。」
　蛍と松本が５０ｍ級の巻き尺を使って、マット土俵を敷く位置を細かく決める。
「長机とパイプ椅子、どこに並べますー？」
「審査員席は中央だ、２面の土俵の真ん中に頼む。」
「あーこっちもひとつ、入場受付の入り口に。アンケート用紙もこっち持ってきて！」
　あわただしく動き、会場の設営にいそしむダチ高相撲部男子部員と、見知らぬ他校の生徒や父兄。
　関東某県の中学校の体育館、今日ここはインターハイ女子相撲全国大会の舞台となる。
　試合を控えた女子選手たちを支えるため、彼らはボランティアとして早朝から汗を流す。
　女子相撲は、一言で言えば人気が無い。
　太った男が裸で取っ組み合う、というイメージが強いこの競技に積極的に取り組む
　女子が少ないのは当然ではあるが、加えてプロ制度も無く、オリンピック種目にも採用されない
　ましてや花形ともいえる大相撲の土俵は『女人禁制』の封建的な制度。これで女子に人気が
　出るほうが不思議だろう。
　事実、女子相撲がインターハイに正式採用されたのはわずか３年前の事、まだまだ競技人口の
　少ないこの種目の会場に充てられたのは、決して広くなく交通の便も良くない地元の

中学校の体育館。当然ながら県営や市営の体育館や武道場は他の競技が盛況使用中だ。
運営も人手を回して貰えず、参加選手の身内がボランティアに駆り出されて設営している状態。
女子相撲協会の役員たちの指揮の元、ダチ高の面々も出場する仲間に、少しでもいい環境で
戦ってもらおうと皆頑張っている。

会場の外、各県代表のプラカードを持った生徒の所に各々集合する女子選手たち。
柚子香も小林も、プラカードを掲げる九十九里高の池西檸檬のもとに集まっている・・・でも。
「なんか、人数少なくないですか?」
各県代表は1階級に付き2人、4階級あるから各県で8人、合計400人弱はいるはずなんだが
どうもそれより人がいない、県によってはプラカードの所に誰もいないトコすらある。
もう集合時間過ぎてるというのに、だ。
「言ったでしょ、同志が欲しいって。」
はぁ、とため息をついて檸檬が返す。そう、確か夏合宿の時、彼女たち九十九里女子相撲部は
そう言ってダチ高女子相撲部員を快く受け入れてくれた、県予選でライバルとなる自分たちを。
「千葉は相当マシな方なの。県によっては参加校が1校だけで県予選が校内対抗戦だったり、
酷い所になると階級によっては参加者ゼロだったりね。」
確かに、千葉では1階級に2~30人はいたはずだ。予選無しで全国に来れる選手もいるとは、
それがいい事なのか悪い事なのかは選手次第なんだろうけど。
「もっと酷い話だと、代表になっても来ない人もいるらしいから。」
佐倉女子の代表、水須がそう続ける。なんでも学校側から遠征の部

費が出ずに涙をのむ選手や
　柔道やレスリングと掛け持ちで選手を務めているが、どちらも代表になったので相撲の方を
　辞退する生徒までいるそうな。
「はぁ、とんでもないスポーツを始めちゃったなぁ・・・」
　思わずため息を漏らす柚子香に、檸檬が笑顔でこう返す。
「何言ってんの、もし将来女子相撲が人気出たら、あたしたち第一人者よ。
『初代女子横綱』とか『第一回世界大会金メダリスト』とか呼ばれたくない？」
「ふむ・・・それは悪くないかも。」
　アゴに手を当ててそう呟く柚子香。人気が無いなら自分たちで盛り上げていく、か。
　それも確かに面白いかもしれない。
「宣誓、私たちは女子相撲の未来のため、清く美しい大和撫子として、国技にきらめく汗を流し、
　全力で戦い抜くことを誓います！選手代表、愛媛古田高校３年、宮本　蜜柑（みやもと　みかん）！」
　昨年度軽中量級優勝者の宮本が、会場に響く美しい声で選手宣誓をする。柚子香や檸檬と
　同じ階級、そして檸檬が昨年準決勝で敗北を喫した相手。
　ダチ高の男子の面々はその宣誓を聞いて、思わずパンフレットを確認する。すだちとか
　カボスとかの名前の選手がいないかなぁ、と。
　そして大会が始まる。人気のない競技とはいえさすがに全国はハイレベルだ、キレる技と
　女子特有のしなやかな動きは、男子の相撲とはまた違った競技の様相を呈する。
　小林は３回戦で福島県代表の小川に敗れた。小川は怪力の小林に持ち上げられても慌てず騒がず
　空中で鮮やかに体を切り返して残すと、その勢いを逆に利用して小

林を土俵外に引っ張り出す。
ああーっ！と天を仰ぐダチ高の面々、だが小林本人は息を切らせながらも、実力を出し切った
自分に納得していた。女子にはあんな相撲もあるのね、と感心しながら。
一方の柚子香は順調に勝ち進んでいく。相撲の基本に忠実なその前さばき、腰の割り方、
投げの技術、そしてつい先日、国技館で見た男子たちの戦いの熱をそのまま引き継いだ戦いに、
小さな会場を大いに沸かせた。
―軽中量級準決勝！東、宮本。西、池西！―
昨年準決勝の再現、事実上の決勝戦とまで目された両者の一戦。足技で攻める池西と
卓越したバランス感覚で凌いでくる宮本の戦いを見て、目の肥えた観客たちが関心する。
「うまいな・・・単にバランスがいいだけじゃない。相手に寄りかかった状態でうまく体重を預け
体力の消耗を抑えながら相手を押し込んでいく・・・すごく相撲慣れしてるぞ！」
桐仁がそう評するほど、昨年の覇者、宮本の強さは際立っていた。あの池西が全く
体勢有利になれずに押されていく。
「だが、池西選手も『アレ』狙ってますね！」
幸田がそう続ける。そう、彼女には取って置きの技がある。ここまでの足技もその伏線の為だろう、
あとはどこで出すか、そのチャンスは果たして訪れるのか。
頭を付けて動きが止まる両者。差し手争いに入ると、宮本は池西の左手を右手で掴むと
すかさず『腕捻り』に持っていき、大きく体が流れた相手を一気に押し込んでいく！
池西はここで足を飛ばす、押されながら相手の右足に、そして左足

に足技を刷り込む。
「(出るっ！)」
その技を知る千葉県の選手が、応援団が、同時に心で叫ぶ。と同時に池西は体を後ろに飛ばし
宮本の肩に手を添えて、相手を強烈に、真下に押し付ける。
―叩き込み『三角落とし（トライアングルストライク）！』―
両足を引いて前進していた宮本に、この叩き込みを残す術は無かった・・・はずだ！
―バシィッ!!―
「え、ええっ!?」
「なっ！」
「うそ・・・だろ?」
四つん這いの体勢になっている宮本、しかしその両手は地面に付いていなかった。
なんと叩いた池西の両足首を掴んで耐え凌いでいる、執念が土俵に落ちることを拒む！
「やぁーーーっ！」
そのまま池西の足首を引っ張って、相手を後ろに押し倒す宮本。池西も懸命にこらえ
相手の頭を押さえつけて地に付かせようと最後の抵抗をする。
そのままなだれをうって倒れる両者、会場が静寂に包まれ、審判の判定に注目が集まる。
―裾取りで東、宮本の勝ち！―
歓声に包まれる会場。歓喜する者、天を仰ぐ者、見事な攻防に拍手する者。
「・・・男子じゃ絶対ねぇな、あの攻防も決着も。」
「皮肉だな。『逃げ』の叩き込みなら足を掴まれることは無かった。」
必殺の叩き込みであるがゆえに体が逃げていなかった、足が躱せていなかった、
そしてそれを逃さず掴んで耐え凌いだ宮本の執念が、この逆転劇を呼んだのだ。

池西檸檬がぼろぼろと涙をこぼし、しゃくり上げながら礼をする。
今日のこの日の為に
磨いてきた必殺技、それがあと薄皮一枚の差で決まらなかった。悔しい、悔しい！悔しいっ!!
土俵を降り、チームメイトに寄りかかって無念の涙を流す檸檬。
その横で柚子香は深呼吸する。あの技をまさか耐え凌ぐ選手がいるとは、やっぱり相撲は凄い。
この世界、女子相撲にはまだまだ自分の知らない技が、攻防が、名勝負がある。
そして自分もまたその世界の最前線にいる！その自負に力が漲る。
さぁ、次は私の番だ。
大太刀高校で学んできた相撲を、私の2年間の集大成を、今こそ見せる時！
―準決勝第二試合。東、岐阜代表、中瀬。西、千葉代表、堀！―

第９０番　正道、堀柚子香

―手をついて―

インターハイ女子相撲、軽中量級準決勝。中瀬杏と堀柚子香の一番。

低く腰を割って仕切りに入る柚子香に対し、中瀬はやや腰高な中腰の姿勢で、手だけを

スッ、と降ろす独特の構え。

―はっきよい―

中瀬は立つと同時に低い姿勢で突進してくる。柚子香は肩でその突進を受け止めるが、

相手は次の瞬間、左へ体を躱して後ろに回り込もうとする。

柚子香は冷静に相手の手首を掴むと、体を回しつつ取った腕を引っ張り込んで、

回り込もうとする相手を止める。

「（やっぱり・・・諸岡先生の言ったとおりだった！）」

「中瀬選手、やはりレスリング出身のようだね。」

試合を腕組みしながら諸岡顧問がそうこぼす。ここまでの試合を見ていた彼にとって

中瀬の相撲がレスリングの動きを踏襲していることは明白だった。

「確かにあの動き・・・僕も覚えがありますよ。」

蛍が続く。日頃からダチ高レスリング部の胸を借りて稽古することもある蛍にとっても

その動きや足運び、そして戦略はよく理解できた。

そして柚子香もまた、その戦法は体験済みだ。

「（栄大付属のレスリング部とも稽古してるのよ、通用させないっ！）」

昨年の秋合宿、彼女は栄大の女子レスリング部の胸を借りる機会があった、その際に

何度も後ろを取られ、またタックルで押し倒され、あるいは上から覆い被され投げられた。

その経験がここで生きている、相手の姿勢に反応して次に来る技を

先読みし、主導権を握らせない。
「くっ・・・」
やりにくい、中瀬はそう心で毒づいた。後ろに回ろうにも懐に潜ろうにも、腰を割った
柚子香の対応が早く、鉄壁ともいえるガードを崩せない。
「だったら!」
中瀬は相手を軽く叩き込むと、そこから覆い被さるように相手を捕まえる。上から覆い被さって
体重をかけて相手の疲労を狙う策だ。
が、柚子香にそれは通じない。何せ普段からダチ高の男子相手に稽古しているのだ。
身長差がある相手との稽古で、この体勢になる事などしょっちゅうなのだから。
「フッ!」
軽く相手にゆざぶりをかけ、相手の腹に押し当てた頭を横に抜くと、そのまま脇から胸を
すりぬけて相手のあごの下に頭を持っていく。マワシを引きつけ、相手の上体を起こす。
この時点で勝敗は決していた。いわゆる『胸を合わせた状態』で、明らかに柚子香の方が
腰が低い、相撲と言う競技の性格上、これで柚子香が負ける要素は無かった。
電車道で一気に寄り切って勝負をつけてみせる。
―西、堀の勝ち!―
大いに沸くダチ高応援団、これで柚子香の全国2位以上が確定した、今年の全国の成績では
彼女がこの時点でダチ高ナンバーワンになったのだ!
が、土俵を降りた柚子香はどこか不機嫌そうにむくれていた。
「おめでとう・・・って、どうしたの?」
マネージャーでもある姉、千鶴子に彼女は小声でこう返す。
「胸でっかー、何よアレ。勝ったのにすっごく負けた気分。」

がくっ、と体を傾ける千鶴子と小林。何の勝負してんのよ、とツッコみたい所だが、
確かに中瀬のその胸はバストガードの下からでも自己主張が激しかった、確かに羨ましい限り。
一方、悲観にくれる中瀬。自分の胸をさすりつつ仲間にごちる。
「うう、潰れるかと思った。まな板の堀選手が羨ましい・・・」
「いつか刺されるわよアンタ。」
辛辣にツッコむ仲間だが、中瀬にとっては別に嫌味の類ではない。
彼女はその胸が
大きくなりたせいでレスリングの寝技に耐えられなくなり、相撲に転向したという経歴がある。
地面にこすれて痛い思いをするのが嫌だったのに、洗濯板に押しつぶされて負けるなんて・・・

「やっぱり『相撲』の方が来たてや、蜜柑。」
愛媛古田高校の相撲部陣営、決勝進出を果たした宮本蜜柑に、仲間がそう話す。
「ん。」
柔軟をしながら、そう一言だけ返す宮本。先の準決勝であわやの際どい勝負だった彼女は
未だその緊張から抜け出せないでいた。そんな自分を沈めるように、深々と体を折り曲げる。
「相変わらずやらかいねー、さすが元体操選手。」
「2連覇期待しとるけん、勝ってな！」
宮本　蜜柑。
小学校から体操を習ってきた彼女だったが、高校に入学したタイミングでそこの体操部が
廃部になってしまったのだ。上級生が鉄棒の練習中に転落事故を起こし、そこからの調査で
その部のスパルタな指導が問題視され、部は解体の憂き目に合ってしまった。

宙ぶらりんの立場だった彼女に、当時の女子相撲部が声をかけた。
また体操に戻るまでの
繋ぎの運動にと入部したその競技は、彼女の肌にドンピシャ合った。
バランスの崩し合いという競技の性質上、宮本の体の柔らかさとバランス感覚は最高の
アドバンテージだった。相手の渾身の投げを余裕で残し、こちらが重心を保ったまま大きく動けば
相手はたちまちバランスを崩す、相手をコロコロと投げ倒すうちに、彼女は相撲にどっぷり
ハマって行った。
相手の堀選手は正統派の相撲選手と言っていい。まるで男子の相撲の様な、しっかりと
腰を割る安定した姿勢で、前さばきを制して万全の体制を作り勝負を決める。
異端な相撲を取る者が多い女子相撲に合って、ある意味教科書の様な王道の選手。
だが宮本は自らの体操相撲で、彼女のような相手を何度も破って来た。奇をてらわない分
やりやすい相手ともいえる。
負けられない、必ず勝つ!と意を決し、腰を下ろした状態から逆立ちに移行し、しなやかな
ブリッジから立ち上がると、そのまま前方転回からなんと月面宙返りを決めてみせた。
「おおおっ、すっげぇ!」
「見た?今の、ムーンサルトしたぞ!」
会場からどよめきが起こる。ダチ高の面々も、無論柚子香もその動きに驚く。
が、蛍だけはそんな柚子香の肩を叩いて、一言こう激励する。
「大丈夫、いつもの相撲を取れば勝てるよ。」
「ハイ!」

軽く言ってくれるわねぇ、と思いつつもそう言ってくれるのは嬉しくもある。自分が積み重ねて
来たものが、あの相手にも通用すると言ってくれるのだから。
3位決定戦は池西が中瀬を制し、ついに決勝戦を迎える。
―東、愛媛県代表、宮本。西、千葉県代表、堀！―
両校の応援合戦が響く中、土俵に上がる両選手。例えマイナー競技であっても、小さな
体育館の中でもささやかな大会であっても、これに勝てば、日本一！

―はっきよい―
両者が立ち、肩で押し合う体制になる。素早くマワシを探る柚子香に対し、宮本は付き合わず
柚子香の両肩に手を添える。
両下手を引いた柚子香が、ぐいっ！と相手を引き付ける。だが宮本はなんと腰を
引き寄せられるまま大きく体を逸らせ、まるでバレリーナのように弓なりに反ると、
そこから体を反転させて相手を自分ごと捻りつつ、右上手を取って投げに繋げる、
空いた左手で頭を押さえつけながら・・・これは！
「変形の・・・鬼車!?」
桐仁が思わず嘆く。上手下手の違いはあるが、相手の頭を押さえて投げるその技はまさにそれだ。
が、腰の低い柚子香は足を踏み出してこらえる。しかし宮本の次の行動は更に想定外だった。
なんと回転の勢いを利用して、柚子香の背中におんぶされるように乗っかって見せたのだ。
マズい、ここで相手を下ろせば完全に後ろを取られる、だったら！
柚子香は瞬時に反応して、そのまま背負い投げに持っていく。だが宮本はふわりと体を浮かすと
平然と身をひるがえして着地してみせた、なんという身体能力。

再度組み合う両者。今度は柚子香も不用意にマワシを取りに行かない。下手に取れば
腰ごと腕を引き込まれてこっちが崩される。ならばと肩に添えられた手を払いのけ、
相手の懐に潜り込みに行き、密着したまま両下手を掴む、これならいける。
すかさず足技で攻める柚子香。大きく踏み出して内掛けを仕掛ける、しっかりと足がフックし
完璧な形で捕らえることが出来た、勝てる！
―スッ―
呆気なく外される柚子香の内掛け。なんと宮本は刈られたその足を大きく上にあげ、
残る片足で平然と立って見せた。テコンドーかカポエラかと思うくらい高々と上げた足を
弧を描いて降ろすと、両肩に添えた手を大きくひねって柚子香の体勢を崩す。
「（なによ、それぇっ！）」
蛍部長どころではない、まさにサーカス相撲。しかもここまで全くそういう相撲を見せずに
ここまで勝ち上がってきた宮本が、ここにきて初めて見せるスタイル。
どんっ、と辛うじて踏みとどまる柚子香、続く叩きからの出し投げも耐え凌ぎ、再び
肩で押し合う体勢になる両者。
「くっ、しぶといてや！」
「アレ残すって、どんな足腰しとんねや。」
愛媛古田の面々も驚きを隠せない。宮本の相手の技を躱しつつ決める返し技は、
相手の乾坤一擲を空振りさせるだけに効果絶大のはず、それをあああまで残すとは！
「ハァッ、ハァッ・・・」

肩で息をしながら柚子香は思う。どうする、どうすればこの相手に勝てる？

攻めても攻めてもすり抜けられる、まるでウナギを相手に相撲を取ってるような感覚。

「（ウナギ、か。蛍の技をウナギの如しって呼んでたけど、そんなレベルじゃ・・・）」

「（・・・蛍？）」

あ、という顔をする柚子香。そう、蛍のあの技なら、このウナギを掴めるかも。

よし、迷ってもしょうがない、県大会の決勝のように様子見して負けるのは御免だ、

この技にかけるしかないと意を決し、呼吸を止める。

「いやぁっ！」

下から相手を突き上げ、素早く懐に潜り込むと両下手を取る。宮本は先ほどと同じ展開に

慌てず冷静に対処の姿勢を取る。

と、柚子香は反り返りながら後ろに相手を投げに行く。宮本は優雅な動きで足を前に出し

投げの先に回り込んで着地する。

「（ここっ！）」

着地した宮本の足に、柚子香の足が絡みつく、内掛けがまたも深々とフックする。

宮本はムダよ、とその足を持ち上げて抜こうとする・・・が、抜けない。

「根太起こし！」

蛍が叫ぶ。そう、柚子香は刈った左足首を左手で掴み、手と足で輪を作って宮本の右足を

捕らえていたのだ。上に抜こうとした宮本の足は、柚子香の脇に当たって止められた。

反射的に足を後ろに抜こうとする宮本だが、一瞬だけ遅かった、柚子香は自分の足首を放すと

脇を絞って相手の足首を抱え込み、捕らえる。
「行っけえぇぇぇぇっ！」
ダチ高の一同が、九十九里や佐倉女子の面々が叫ぶ。行け、千葉の代表、堀柚子香！
相手の片足首を脇に挟んだ、これ以上ない絶好の体勢。こうなればバランス感覚も
体の柔らかさも何もない、まさに決定的状況！
「せやあぁぁぁぁぁっ！」
電車道で寄り立てる柚子香、苦悶の表情で抵抗する宮本。すでに決した明暗は
最後まで懸命な両者に彩られ、そして終わる。
―寄り切って、優勝、堀柚子香！―
「いやっほぉおおっ！」
「おおおっしいぃぃっ！」
「日本一だーーーっ！」
歓喜するダチ高部員。諸岡監督も両拳を握り締め、下を向いて歓喜する。
千鶴子は快挙を成した妹にむしろ呆然とした表情。そこからほろっ、と涙をこぼす。
蛍も感激に涙しながら、大きな音で拍手を打つ。
当の柚子香はまだ信じられなかった。自分が日本一になったことも、この強い相手に
勝てたことも。この小さな体育館でのささやかな大会で、自分が頂点に立った事も。
土俵を降り、皆に手荒い祝福を受けるもまだ実感がわかない。ただ今まで自分が
積み重ねて来た物、青春を捧げて頑張ってきたこと、それらに『勝たせてもらった』
事だけは実感できた。
だから、みんなにこう返す。
「みんな、ありがとう。」

ささやかに表彰式が行われ、今度は選手たちも会場の片づけに精を出す。戦った
ライバル達ととりとめもない話をしながら、感動を惜しみつつ激闘の後始末をしていく。
そして、会場がただの体育館に戻ったその時、柚子香の瞳から涙がこぼれる。
蛍が、千鶴子が、そんな柚子香を心配気に見て声をかけようとする。
それを制するように
柚子香は涙声で、しかし大きな声で、こう宣言する。
「私、相撲が好き!だから・・・だから・・・もっと女子相撲を有名にする!」

最終章　道の先の宝物
第９１番　その瞬間（とき）

「じゃあ撮りますよー。３・２・１・チーズ！」
夏休みが終わり、２学期の第二日曜日の朝、ダチ高相撲部員は全員が部室の前で
卒業アルバム用の記念写真撮影をしていた。部長の蛍を中心に、桐仁が隣で肩に手を置き
前列には松本と大峰が蹲踞してピースサイン、諸岡顧問と千鶴子が両サイドを固め、
幸田と１年生の面々、そして柚子香がその間に挟まる。
―パシャ―
総勢１３名、今年度の大太刀高校相撲部は、今日がその体制の最終日。
蛍、桐仁、千鶴子の３年生トリオは今日で相撲部を引退する。２年前の全国制覇から
主力を失ったダチ高相撲部を支えてきた彼らだが、後に残す不安は皆無だった。
今や全国にも通用する実力を備えた２年生、その個性的なキャラクターでめきめきと
日々実力をつけ続ける１年生、そして未だ２人ながら全国まで経験した女子部員。
今やダチ高は、県内有数の強豪相撲部としてここにあった。

「じゃあ新部長、新副部長、頼むよ。」
「来年はマジで全国制覇狙えよ。」
「しっかり稽古して、いい報告聞かせてね、ケガの無い様に。」
撮影後、蛍たち３人は部室で、少し早いちゃんこを囲みながら後輩に思いを告げる。
新部長には幸田が抜擢された。主将ではなく部長なので、実力より

もむしろ部としての
立ち回り、つまり部長会議での予算の獲得や遠征時の書類仕事、出先での皆の引率など
行動力やコミュ力が必要とされる立場に彼はうってつけで、他の誰にも納得の人選だった。
そして新役職の副部長には柚子香が選ばれた。この選出は顧問の諸岡の提案で、
来年以降の女子部員の増加を期待して、その場合の男子との分割を考えて、女子の側にも一人
リーダー的立場がいたほうがいい、という思惑があった。
「って、ゆずにリーダー務まるかなぁ。」
「本当に、それだけが心配で心配で・・・」
おどける蛍に、心の底から不安そうな千鶴子が続く。柚子香があんたらねぇ、とジト目で
二人を睨む。そんな会話にも笑いが咲く今の相撲部。
「っていうか、3人だけなのに戦力ダウン著しいですよ。」
その幸田の言葉に皆がうんうんと頷く。チームのムードメーカーとして、小兵ながら
ダイナミックな相撲でチームの士気を上げた三ツ橋蛍。
技術指導員として皆を指導し、かつ選手として肺の疾患と戦い、懸命な姿を見せて来た桐仁。
そして相撲部のおかみさんとして皆を底から支え、時には名アドバイザーとして貢献してきた
堀千鶴子。
人数的な消失はわずかだが、それでもこの部に欠けるものは大きかった。
「ま、来年に頑張って新入部員集めればいいんだよ。」
お気楽に言う蛍。そう、いつまでも卒業する自分たちに頼られても困る。来年以降この
相撲部のバトンを繋いでいくのは彼らの仕事なのだから。
「俺はそれよりも、2人とも進学っていうのが不満ですよ。」

そう続いたのは陽川だ。大相撲に進むと志す彼にとって、共に部で戦ってきた先輩が
先駆者となってくれないのは少し寂しいものがあった、共に『国宝候補』と呼ばれた
彼らなら尚更のことだ。
とはいえ彼らの決断を尊重しないわけでも無い、１７０ｃｍにも満たない蛍と、肺に疾患がある桐仁。
彼らがプロの世界に進んで成功する確率は低いだろう、そんな甘い世界でない事は皆知っている。
それでも大相撲で活躍する彼らを想像すると胸躍るものがあるだけに、その可能性が潰えるのは
やはり残念だ。
「まぁこれから見て、気が変わったらいつでも相談するといい。」
そう語ったのは諸岡だ。そう、実はこれから一同は国技館に向かい、大相撲を観戦する
手はずになっていた。インターハイ最終日の夕方、焼き肉店で現役力士、童子切関に頂いた
観戦チケットの当日券が今日の日付なのだ。
各々の思いを胸に、観客として国技館入りするダチ高相撲部。

「うわ・・・すごい人。」
「初日からずっと満員御礼らしいね、指定席で良かった。」
国宝効果で大相撲は人気絶頂だった。人ごみをかき分けながら、指定の番号の席を探し
腰を落ち着ける一同。と、彼らの隣に見知った顔。
「五條さん、ちわっス！」
同じく焼き肉店でチケットを貰った五條佑真が先に来ていた。そしてほどなくその隣に
１人の女性が辿り着く。
「もー、凄い人。見てよ2階席までびっしり！」
ダチ高の元部長でもある五條レイナが小洒落た格好で登場する。

相撲部の皆もちゃっす！と
彼女に挨拶する。
「インターハイがかわいく思えるくらいの熱気ですね。」
「ああ、これが大相撲だよ！」
焼き鳥を頬張る松本の横で、蛍と桐仁が『自分には過ぎたステージ』を見て感想を漏らす。
が、ほどなく思考は目前に迫る『お目当ての一番』に移る。そう、この相撲を見に来たんだ、と。
―かたや、鬼丸、鬼～丸う～。こなた、数珠丸、数珠う～丸う～っ！―

二人の力士が土俵に上がると同時に、国技館が熱狂に包まれる。
「来たーっ！日本人最重量対最軽量！」
「体格差やべぇーーっ！」
「数珠丸っ！吹っ飛ばせぇー！」
「鬼丸かわいいー、頑張ってーっ！」
両力士への声援と、四股名の国宝銘コールが会場に響く。
―おっにまるっ！おっにまるっ！おっにまるっ！―

―じゅっずまるっ！じゅっずまるっ！じゅっずまるっ！―
その体格差もさることながら、両者とも客受けのいい人気力士。その初顔合わせの対決に
懸賞幕が土俵をぐるぐる回る。
「うわ！見て下さいよあれ。懸賞幕があんなに、全部でいくら？」
思わずこぼす柚子香。あれ一本一本が企業やスポンサーから贈られた賞金ともいえる報酬、
客が望む一番を見せる力士に送られる寄付金、相撲に払う価値があると出されるお金。
「（女子相撲があそこまで支持されるのに一体何年かかるかしらね・・・）」
相撲界の男女の境遇差を考えて思わずため息が出る。私の生きてるうちに実現するかしら、

と頬杖を付く柚子香。
仕切る二人を、各々がそれぞれの思いで見守る。
陽川と大峰は、いつか自分が倒すべき相手として、たとえそれが自惚れであってもいい、
いつか必ず、と。
松本や幸田、そして赤池や沼田、柳沢はこの一番が何か参考にならないかと目を光らせて。
そして桐仁は、かつて共に相撲を学び、その背中を追い続けた男の、遥か遠くに行ってしまった
火ノ丸の晴れ舞台を、尊敬と自虐の想いをないまぜにして見つめていた。
「(なぁ火の丸、俺はやっぱ裏方の方が向いているのかもな。)」
自分はあの舞台に立つには不相応かもしれない。だが将来あそこに行きたいという陽川や
大峰を指導し、より強くしてきたという自負はある。
それもまた相撲道。懸命にチームを強くしてきた指導者たちを何人も見て来た桐仁にとって
その道もまた価値ある生き方であることを感じていた。
蛍は久しぶりに見る火ノ丸の相撲に胸躍る思いだった。自分より小さな体で、あの舞台で、
あの大男と相撲を取る、そんな憧れの人物を、自分が心底『カッコいい』と思う人の雄姿に。
ふと思いを馳せる。もし僕が火ノ丸さんだったら、あそこにいるのが僕だったら・・・
そんな思いで土俵上の鬼丸に、自分の姿を重ねる。
―それが蛍の後人生を大きく変えるなど、誰にも想像できなかった
―
『はっきよい!』
立ち合いは五分、鬼丸はすかさず下手を引き、小さく投げを打って数珠丸を崩す。
それを見ていた蛍は、その当たりの強さと行動の速さに置いて行か

れそうになりながらも
想像の自分を懸命に鬼丸の動きに追いつかせる。
「(やっぱり火ノ丸さんは凄い！)」
カッコいい、そして自分みたいな小さな者にも希望を、夢を与えてくれる、自分があそこで
相撲を取っている姿すら、ありありと思い浮かばせてくれるほどに。
『一気の出足、体重差を物ともしない！』
電車道で寄り立てる鬼丸。蛍もまたその背中に自分を重ねる。行け、行けっ！
土俵際、数珠丸が鬼丸の下手を閂に巻き、体を躱しつつ小手投げで最後の抵抗を見せる。
「(・・・あ。)」
蛍には、土俵下にもつれ落ちる二人の姿が、まるでスローモーションのように見えた。
そして土俵下で響いた小さな音が、聞こえるはずのない蛍の右手で同じ音を立てる。
ぐしゃっ

惨劇は誰の目にも明らかだった。２００ｋｇを超える数珠丸の重量が、鬼丸の肘を完全に
決めた状態で落下し、力を逃がしようのない体制で腕を逆方向にへし曲げたのだから。
静寂の後に、国技館を焦燥と悲鳴が包む。呆然と立ち上がった鬼丸の右手はヒジから
完全に逆に曲がっていた、ありえない方向に。
熱を感じさせるほど真っ赤になった肘が、その内部の破壊の酷さをありありと物語る。
土俵下で見守っていた柴木山親方が慌てて半纏を脱ぎ、観客の視線から腕を隠す。
続けて飛んできた付け人の寺原が、持っていた鬼丸の着物を半纏と

入れ替えて肩にかけ
左から肩を貸して通路に鬼丸を誘導する。
その時の小さな力士、鬼丸の表情は誰にも表現が出来ないだろう。
苦痛、恐怖、後悔、恐れ、怒り、不安、絶望、あらゆる負の感情が
揺蕩った顔をして
それでも歩いて花道を引き上げる。
未だ静寂に包まれる国技館、そこに桐仁の嘆きが響く。周囲にいる
ダチ高の面々は、
その声をしっかり聴き遂げる事が出来た。
「何をやってるんだ・・・俺は!」
その声が唯一耳に届いていない男が、足早に後ろを通過していく。
「げえぇぇっ!」
国技館のトイレに到着した蛍は、そのまま便器の中に、先ほど食べ
たちゃんこの中身を
胃液と共にぶちまけた。
痛みのないはずの右手が強烈に違和感を訴える、曲がってないはず
の右肘が壊れたような錯覚、
体中を脂汗が伝い、呼吸がおぼつかない、息を切らせても酸素を吸
えてる気がしない。
「はぁっ、はぁっ・・・はぁっ」
怖い。
あの憧れの火ノ丸さんがケガをした。それも並大抵じゃない、再起
不能は間違いないであろう
大怪我。
いや、そんなレベルではない。利き腕の右手を折られることは、後
の人生を障がい者として
生きて行く事すら強いられる。
箸も鉛筆もロクに持てない、服を着替えるのも財布を出し入れする
事すら難儀する後人生が。
―僕は、今まで何を思っていた、何を勘違いしていた?―
本当に怖いのはケガではない、なんて粋がっていた。過去にちょっ

と負けが込んだぐらいで。
そんな自虐に身を任せ、身の程知らずにも大男たちと体をぶつけ続けた。
血を流し、意識を飛ばし、それでも相撲だから、と意に介さず戦い続けた。
もしひとつ間違えば、自分も壊れていたかもしれないのだ。
首藤さんとの一番、あの程度で済んだのは幸運じゃなかったか？
思い出の初勝利、下山君との一番でも意識を飛ばした、もしあの時に投げが来ていたら
自分は受け身も取れず、酷い事になっていたんじゃないか？
他にも数々の対戦を思い出し、そのほとんどが紙一重で負傷を免れていたのではと想像する。
得意の潜る相撲？それを続けた狩谷さんはどうなったか、そこに思いが至らなかったのか？
先日の高校相撲最終戦、黒田さんが『かばい手』をしてくれなかったら、自分はどうなっていた―

トイレの壁にもたれて震える蛍。疲れは無いのにヒザが笑って歩けない。

三ツ橋蛍はこの時、初めて『相撲』そのものに、恐怖を覚えた。

第９２番　袂分かつ時

「桐仁・・・」

放課後、帰宅しようと教室を出た蛍の前に、彼は佇んでいた。

蛍の姿を認めると彼はくいっ、と顎を引き後ろ指を指す。付いて来いというゼスチャー。

無言で背を向けて歩き出す桐仁に、やはり無言でついて行く蛍。

要件の見当はついている、まず間違いなく昨日の火ノ丸さんの件だろう。

だが具体的な内容は分からない、容体が明らかになったのか、これから柴木山部屋へ

お見舞いにでも行くのか、あるいは昨日の一番を糧として、後輩たちにケガの怖さを

教えておくのか・・・

部室に到着し、蛍に向き直った桐仁は開口一番、こう言い放った。

「俺は、大相撲に行くぞ、三ツ橋！」

「・・・え？」

蛍はその言葉をすぐには理解できなかった。桐仁は進学希望だったはずだ。

ましてやつい昨日、目の前で大相撲の過酷さを目の当たりにしたばかりじゃないか。

思いたくは無いが、火ノ丸さんあのケガで復帰できるとはとても思えない、桐仁にとって

目標である火ノ丸さんと対戦できない角界に・・・なぜ？

「お前はどうする、三ツ橋。」

暗い影を落とした、だが真剣な表情でそう問う桐仁。

「どうするって・・・進学するって言ってたじゃないか！」

高校３年の２学期、今さら進路を変えるなどありえない。困惑した表情で逆に問いただす。

「桐仁、どういうつもりだよ！今更大相撲って・・何考えてんだよ！」

その言葉に、眼鏡に手を当てて少し俯いた後、顔を上げて桐仁が叫

ぶ。
「決まってるじゃねぇか！火ノ丸がケガしたんだぞ、俺が行ってアイツを引き上げてやるんだよ！」
普段見ない剣幕の彼に一歩引く蛍、構わず続ける桐仁。
「分かるだろ！アイツには立ち直る理由がいるんだよ、相撲を続ける道標が！
俺が、俺達が火ノ丸のライバルになってアイツを奮起させてやるんだ！」
「・・・本気で、言ってるのか？」
蛍には理解できなかった。自分たちがいれば火ノ丸さんが復活する？そんな理屈がどこにある。
そもそも角界にはライバルなんて吐いて捨てるほどいる、今さら桐仁がそっちに行ったとして
火ノ丸さんを奮起させられると思っているのか？いや、それよりも・・・
「本気さ、決まってるだろ。」
蛍を睨んでそう吐く桐仁。そして、決定的な一言。
「たった今、退学届けを出してきたよ。もう後戻りはできないし、する気も無い！」
「なっ!?」
愕然とする蛍。思慮の深いはずの桐仁のその極端な行動に動揺を隠せない。
「な、何考えてんだよ！もう少し待てば卒業じゃないか、なんでこの時期に・・・」
「そんなもん、どうでもいいっ！」
怒鳴りつけて蛍を黙らせる桐仁。激高を隠せずにまくしたてる。
「火ノ丸は俺がいなきゃ駄目なんだよ、俺が卒業までチンタラやってて余裕で角界に行っても
アイツを失望させるだけだ、今すぐじゃなきゃダメなんだ！」
呆然とそのセリフを聞く蛍。彼は一体何を言ってるんだ、自分の進路だろ、人生じゃないか。

まるで火ノ丸さんに尽くすために自分を投げ出してるような物言いに驚く。
「依存しすぎだろ！火ノ丸さんに、いくらなんでも・・・」
その言葉にはっとする桐仁。蛍の真意を咀嚼し、しばし考えてから返す、決定的な一言を。
「・・・そうだよ、火ノ丸が最優先だ。正直に言うぞ、俺にとってダチ高相撲部も、後輩たちも、
そして三ツ橋、お前もどうでもいいんだよ！」
言葉の刃が、蛍の心を切り裂いた。
「小関さんも、五條さんも、國崎さんも、所詮は火ノ丸を叩き上げるために指導しただけだ。
そうさ、俺は体よく彼らを利用したんだよ、火ノ丸の為にな！」
・・・もういい。
「俺がダチ高相撲部に残ったのだって、自分を鍛えて大相撲に行くためだ、正直チームなんか
勝てなくったって知った事か！」
・・・黙ってよ。
「お前ならわかってくれるかと思ってたがな、期待外れもいいトコだ！憧れるだけ憧れて
何も返す気概は無いのかよ！」
・・・うるさい。
「出来の悪い後輩の指導に2年も費やして、ああ、時間の無駄だったよ！俺の為の時間なのに
何が監督だ！いつまでも人に頼ってんじゃ・・・」
その瞬間だった。蛍が桐仁の胸倉を掴み、怒りの表情で絞り上げたのは。
「いま、何て言った・・・？」
この2年、後輩たちと共にダチ高相撲部を育て、共に戦ってきたことが無駄だって言うのか？
皆で頑張って汗を流し、鍛え、戦い、結果を出してきたことが・・
無意味？

「火ノ丸、火ノ丸、火ノ丸！お前は一体何なんだよ、そんなに火ノ丸さんが大事か！
今のダチ高相撲部全員が、火ノ丸さんより価値が無いって言うのか!!」
胸倉を引き付けて怒鳴り返す蛍。さすがに看過できない一言に血液が沸騰する。
「ああそうさ！俺はそういう奴なのさ。部長さんはせいぜい仲良しこよしでやってろ！」
桐仁にしても『売り言葉に買い言葉』だとは思う。だが火ノ丸を肯定しダチ高を否定するのは
彼にとっては力士への道を肯定し、指導者への道を否定する事に等しかった。
指導者への未練を断ち切る意味も込めて、あえて汚い言葉を吐き続ける。
「現実を見ろよ桐仁！お前あのケガで復帰できると思ってるのか!?」
今度は桐仁が言葉の刃に斬られる番だった。
「腕が完全に逆に折れてただろ、関節グチャグチャなのが分からないお前じゃないだろ、
仮に治ったとして、まともに相撲を取れると・・・」
「黙れえぇえぇえっ!!」
今度は桐仁の方が蛍の胸倉を掴み、吐き返す。
「火ノ丸の事、何も知らねぇのに言うんじゃねぇよ！アイツは必ず復活する、必ずだ！」
「火ノ丸さんの事だけじゃない、大相撲に行けば桐仁だって同じ目に合うかもしれないじゃないか！」
お互いの胸倉を掴み合ったまま、しばし睨み合う両者。
「お前・・・怖いのかよ。だったら相撲なんか止めちまえ！」
「・・・っ！」
図星を刺された動揺もある。しかしそれ以上に、その上から目線の物言いに腹が立った、
今だけは。

「何様のつもりだ！相撲を取る者がケガを怖がって何が悪いっ!!」

「つまみ出して。」

幸田新部長の声と同時に、桐仁と蛍は同時に後ろから組み付かれる。

桐仁は大峰に、蛍は松本に抱え上げられ、出入り口まで運ばれて外に放り出される。

突然のことに頭が追い付かない二人に対して、陽川がこう言い残してドアを閉める。

「・・・アタマ冷やして下さいよ。」

尻もちをついていた桐仁が立ち上がり、パンパンと土を払い落とす。

「フッ、まぁいいさ、あんな奴等、どうでも・・・」

「桐仁！」

「どうせ引退した身だ、もうアイツらは他人なんだよ、それでいい。」

きびすを返して歩き出す桐仁、その背中に蛍は何も言えなかった。

ただ、その丸めた背中のもの寂しさを感じ取り、心でこう毒を吐く。

「（・・・強情っぱり。）」

大太刀高校相撲部のツートップ、三ツ橋蛍と辻桐仁、国宝候補『蛍丸』と『鬼切安綱』は、

この日、袂を分かつ。

帰宅後、心の疲れに滅入った蛍は、勉強机のイスにもたれかかる。

今日だけは受験勉強をする気分になれない、なにも頭には入らないだろうから。

と、蛍はタンスの上にある黒いバッグを目に止める。

立ち上がり、背伸びしてその箱を掴み取り、下におろして箱を開ける。

出てきたのは銀色の楽器、彼が小４から愛用してきたフルート。

ティッシュで楽器の口周りを拭いてから両手で持ち、口を添える。

この部屋はかつて家族が
楽器の練習のために防音を施してくれている、吹いても問題は無いだろう、と。
吹けなかった。
かつて繊細な動きでメロディを奏でたその指は、今や相手のマワシを掴むためのもの。
吐息を美音に変えたその息遣いは、もう格闘の気を発する咆哮を生み出すもの。
蛍はフルートを両手の平に乗せ、天井を仰いで一言呟く。
「・・・何やってんだろうな、僕。」

第９３番　前相撲

「よし、辻、行け。」
「ウス。」
早朝の国技館、役員に促されて控室から花道に向かう桐仁。これから自分は初土俵、
前相撲の対戦に向かう彼は、様々な不安と焦燥に駆られていた。
高校を退学し長門部屋に入門したのはいいが、部屋での彼の立場は当然のように低い。
ましてや肺に疾患がある彼は、ぶつかり稽古でも早々に転がされ続け、ほどなく
立ち上がれなくなり、皆に足蹴にされて（かわいがり）終わる日々。
入門してからこっち、何一つ身になった気がしない。こんなので本当に大相撲で
通用するのか、と。
また今日のデビュー戦の相手は相撲教習所で顔馴染み、１９０ｃｍ１２５ｋｇの恵まれた
体躯を備えた、大学相撲でも鳴らした選手なのだ。
一刻も早く火ノ丸に追いつくためには初戦でつまずくわけにはいかない。だが
花道を歩く彼に去来するのは『本当に俺が力士に成れるのか』という不安と、これからの
一番に対するプレッシャー。
「（落ち着け。火ノ丸はもとより、小関部長だって初戦は勝ったんだ、俺だって・・・）」
励ましにもならない活を自分に入れる。だが虚勢でプレッシャーが跳ねのけられるなら
誰も苦労はしないのだ。
一体、自分はこの２年間何をやって来たんだろう、小関や鬼丸と同時にデビューしていたら
より彼らに対する対抗心も沸いただろう、同じ時代の国宝としてシ

ンパシーも沸いたかもしれない。
だが、今の彼は孤独だった。大舞台に一人で飛び込んで、そのあまりに遠い道に不安が募る。
救いと言えば、さすがの国技館もこの時間はまだガラガラで、本場所の熱気が未だ感じられない
ことであろう。1月の朝の静謐な空気が桐人を若干落ち着かせる。
花道を歩きながら客席を見回す。こんな時間にいるのは選手の家族くらいのものか、と
周囲を眺めて回る。助かるぜ、今のうちに国技館の空気に馴染んでおかなくては。
「ん？」
桐仁が何かに目を止める。あれ・・・ダチ高の相撲部じゃ？
視力のよくない桐仁は普段メガネをかけている。今は当然外しているため、客席にいる人間は
うっすらとしか見えない。だか、客席の一角にいる集団は、彼がよく知ってる体形の連中だった。
「（あいつら、来てたのか？いくら今日が祭日だからって・・・）」
目を細めて、近眼なりに視点を合わせて確認する。あ、という顔と共に一瞬固まり、後に
ハァ、という息を吐き出す。
その一団は黒いジャケットと貴金属のアクセサリーに身を覆い、顔や肩に派手な色の
ペイントを施している、いわゆるメタル系バンドのフッションをした連中。
うち何人かはギターケースを背負っており、桐仁の認識が切り替わる。
「（なんだ、別人かよ・・・）」
土俵の下、『たまり』に腰を下ろし、誰に言うともなく残念がる桐仁。
ああそうか、と自分を納得させようとする。確かああいうファッションの親玉みたいな
芸能人が大の相撲ファンだったはずだ、確かデーモン大暮、いやサ

タン小暮だったか？
そんなことはどうでもいい、と座ったまま正面を見据える。今日の対戦相手、太田選手が
すでに向かいに腰を下ろしてこちらを睨んでいる、彼ももちろん一番出世を目論んでおり
初土俵の今日は負けられない一番だろう。
そう、どこの馬の骨とも知れないバンド連中など気にとめている場合じゃ・・・
「って、んなわけあるかっ!!」
ぐるん！と首を回して思わず叫ぶ。出番を待つ他の選手や副審が何事か？と桐仁に注目する。
が、それも構わず観客席の一団を見て固まる桐仁。
相撲、心技体を心得とする格闘技。目で見える相手の『体』は誰もが日々意識している。
桐仁にとってその一団の体つきが、どう取り繕おうとダチ高相撲部のメンバーであることは明白だ。
「（何やってんだ、全く！）」
嘆くと同時に理解する。ああ、そうか。俺がアイツらを振ったみたいな形で退部したから
変装の一つもしないとお互いバツが悪いと思ったんだろう。
「（っていうか松本、アフロは止めろよ、お前がそのカツラ被ると笑いしか無ぇよ。
あと赤池、お前元が凶悪なツラだけにほとんど素じゃねぇか。それにマネージャー、
無理に片足を座席に掛けてワルっぽいポーズしても顔真っ赤だぞ。
三ツ橋に幸田は
似合いすぎだし・・・）」
思わず笑いをかみ殺す、ダチ高連中も『気付いた気付いた』とケラケラ笑ってやがる。
これからデビュー戦の俺の緊張を返せよ。
「（やれやれ、ベタベタな連中だぜ全く。）」

あれだけ喧嘩別れみたいな形になって、まだ俺のデビュー戦が気になるのか。
全く信用されてねぇな俺は、と息をつく。同時につい先ほどまでの自分の不甲斐なさに
そりゃあ心配もされるぜ、と改めて思う。
「(よし、見てろよ!)」
―ひが～しぃ～、太田～。にぃ～しぃ～、辻ぃ～―
呼び出しを受け土俵に上がる両者、後に『鬼切』の四股名を得る男の、力士への第一歩。
―手をついて―
腰高に仕切る太田に対し、広いスタンスでぐぐっと身を低くして構える、平蜘蛛型仕切り!
―はっきよい―
頭から突っ込む両者。太田の方もこの仕切りなら変化は無いと踏んでぶちかましに来る。
ゴツン!と衝突した次の瞬間、太田の目の前から桐仁の姿が消える。
「(蛍火の如し!)」
蛍が、ダチ高の面々が思わず心で叫ぶ、蛍の得意としたぶちかましからの高速変化!
「くっ!」
太田もさるもの。足運びで体を残すと、すかさず突進し組み付いて右の下手を取りに来る。
桐仁はその下手を左小手に巻き、スッと一歩後退して間合いを取る、同時に右手で相手のアゴを
カチ上げる。
太田は構わず胸を合わせに来る、体重差で圧倒する算段で。だが桐仁はカチ上げたその腕を
そのまま太田の喉笛にあてがうと、小手に巻いた左手で自分の右手を掴み、腰を引く。
「(鉈か!珍しい技を使う。)」

土俵下の副審が思わず唸る。彼もまた相撲協会の一員だが、大相撲ではここ何年も見ていない技。
それを前相撲のデビュー戦で披露するとはな、と感心する。
体重差で圧殺するつもりだった太田が逆に押されていく。喉笛を責められているために
前に出られない、押す相手に抵抗できない、呼吸が苦しくなり首が痛む。ついに俵に足が掛かる。
「くぁっ！」
空いた左手で桐仁の右ヒジを掴み、なんとか鉈を振りほどく太田、すかさず胸を合わせ、
寄り合戦に入る両者。
先ほどの鉈の攻めで太田の腰が浮いている、しかも土俵際ともなれば、このまま桐仁が
寄り切りを狙っていると思うのは自然な考えだろう、太田も最後の執念を見せ、己の体重を
頼みに懸命の抵抗をする。
それが功を奏したか、桐仁は浴びせていた体をスッと引き、腰を割った姿勢に戻る。
凌いだぞ、という心境で太田も腰を割り、息をつく。
その瞬間だった、桐仁は右足で相手の右足を蹴手繰りにいく。足を払われた太田は思わず
右足を引く。が、桐仁は返す刀で足を逆に飛ばし、相手の左足に『内掛け』を仕掛ける。
予想外の連続攻撃に驚いた太田は慌てて刈られた足を引っこ抜く。
抜いたその時、桐仁はすでに後ろに飛んでいた。相手の肩に両手を添えて、強烈に
下方向に相手を叩き落とす。
―叩き込み『三角落とし（トライアングルストライク）！』―
成す術なく腹から、胸から土俵に叩きつけられる太田、勝負あった。
「うわ、檸檬さんの技・・・」
「そういや辻先輩、あの技に感心してたもんな、理にかなってるって。」

柚子香の言葉に沼田が解説を入れる。足技で相手の足を引かせてから叩き込む。
本来逃げの要素が強い『叩き込み』を攻めの一手で使う必殺技。
一番弟子の幸田は目を潤ませながら拍手を送る。これからも頑張れ師匠、と。
―辻ぃ～―
勝ち名乗りを受け土俵を降りる。無事にデビュー戦を飾れた、自分が二年間居残った
ダチ高相撲部で見て、経験して、血肉にしてきた技の数々で。
「（ああそうか、俺はちゃんと積み重ねて来たんだよな・・・あそこで。）」
客席の一角を仰ぎ見ながら桐仁は思う。自分が積み重ねて来た年月を否定してたら
そりゃ相撲も不安になる、どうりで試合前は弱気になってたハズだ、と。
通路を引き上げる前、もう一度彼らを仰ぎ見て、ふっ、と息をつく。
そして深々と彼らに一礼すると、そのまま引き上げる。
―ありがとうよ―
彼が目指す鬼丸との対戦まで、あと１２場所。

その日の早朝５時半、蛍は制服を着て家を出た。
受験勉強の息抜きにと柚子香にデートのお誘いを受けたのだが、制服で集合場所が学校の部室とか
嫌な予感しかしないんだが。
「おーい蛍、こっちこっち。」
案の定デートだと言うのに一切めかし込んでない制服姿で合流する柚子香。蛍の腕を取り
部室に引っ張り込まれたら案の定、部員全員が集結していた。
まぁそれはいいんだが、みんな何？その恰好。
どう見てもどこかのヒャッハーみたいなスタイルとメイク、いつからここは世紀末になったんだ？

「はいはい三ツ橋さんとゆずちゃんも、メイクしますよー。」
そう言ってジャケットとカツラを差し出してきたのは軽音部の生徒たちだ、なるほどこの格好は
彼女らの仕込みか・・・って何のために!?
「今日は辻先輩のデビュー戦ですからね、見逃せませんって。」
世紀末衣裳が似合いすぎる陽川がそう語る、ご丁寧に胸には七つの傷まで入ってるし。
「でもまぁ、気になって見に行ったって思われるのもシャクじゃないですか。」
それでこの変装か・・・っていうかもっとマシな選択肢は無かったのだろうか。
ハイハイと観念してメイクされる蛍。確かに桐人のデビュー戦は見てみたいと思う。
彼らは失念していた。この格好で公共交通機関を使うことのプレッシャーを。
さんざん通行人に指を差され、幾たびかの職務質問をクリアーして国技館に辿り着いたのは
前相撲が始まる時間ギリギリだった、やれやれ。

―辻ぃ～―

心配は無用だったようだ。桐仁は前相撲で大男を苦も無く下し、その健在ぶりをアピール
してみせた。皆一様に『さすが』と感心する。
彼らは知らない、その勝利を呼び込んだのは他でもない、今日ここに来た自分達であり、
共に過ごした2年間であることを。

第９４番　雪の日の春

「・・・あった。」

小雪の舞い散る流山星稜大学、大勢の人混みでごった返す掲示板の前で、

蛍は自分の受験番号が掲示板にある事を確認し、小さくガッツポーズする。

「よかったぁ～、受かった。」

大学受験、既に第二第三の志望大の受験に失敗していた蛍にとって、第一志望の

流星大の合格はまさに崖っぷちでの逆転劇ともいえる、あわやの浪人の危機をなんとか

回避することが出来た、とひと息つく。

とりあえずこの吉報を親に連絡しよう、ときびすを返し、人混みを抜けつつスマホを

取り出す。まだちょっと震える指で電話帳を開き、合格の報を伝える。

電話の向こうの両親もほっ、と胸をなでおろし、たいそう喜んでくれた。高校時代に

相撲部に青春を尽くした彼は、当然ながら成績は下降の一途を辿っていったのだ。

部活を引退してからの懸命の受験勉強がようやく実ったことに、家族一同安堵する、

スマホを切ってポケットに仕舞った時、蛍の目の前に一人の少女が立っていた。

「合格したみたいですね、おめでとうございます。」

白い吐息を吐きながら蛍を祝福したのは後輩の堀柚子香だ、カラフルなマフラーを首に巻き、

シックなコートに身を包んだ状態で笑顔を向ける。

「ゆず・・・来てたのか。」

なんでここに?とは流石に言わない、それは野暮というものだろ

う。
　一応、付き合ってる彼氏彼女の関係ではあるのだが、夏までは部活で、それ以降は受験で
　ほとんど構ってあげられなかった。そんな彼女が蛍の合否を気にかけるのはまぁ無理からぬ事だ。
「合格祝いにオゴりますから、そのへんでお茶しません？」
「あ〃～～、本当に良かった、受かって。」
　喫茶店のテーブルに額をつけて嘆き出す蛍、人生瀬戸際で辛うじて春を迎えることが出来た。
「はいはいお疲れ様。」
　突っ伏した蛍の頭をなでなでする柚子香。端から見てると爆発しろ的な二人だが、まぁさすがに
　今日はいいだろう。
　注文した抹茶セットを味わう柚子香を見て、ミルクティーのカップを持ちながらふと思う。
「っていうか、相変わらず化けるねー。」
　実に女の子らしいその恰好もそうだが、おしとやかに抹茶ケーキを口に運ぶその姿は
　普段の相撲部で見て来た彼女とは似ても似つかぬ女の子らしさだった。
「むしろこっちが素ですよ、私は。」
　愛想のいいウインクをしてアピールするゆずに、蛍は冗談でしょ、と笑って返し、
　お約束の様に対面から頭を叩かれる、こういうやりとりももうすっかり馴染んできた二人。
「そういやお姉さん、複数合格してたみたいだけで、どこ行くの？」
　ゆずの姉、千鶴子は第一から第三志望まで全て合格していた。いわばよりどりみどりな
　状況なのだが・・・
「東京の大学。なんか雑誌のカメラアシスタントのバイトするとかで、会社に近いトコ

選んだみたい。」
ま、第一志望のトコなんでいいんじゃない?と付け加える。
「で、蛍は大学行っても相撲続けるの?」
その質問にえ?という表情をする蛍。目線を下に落とし神妙な顔つきを見せる。
どうだろう、どうしよう。
今日までひたすら受験受験で、その後のことを考える余裕は無かった。
かつてカッコよさに憧れて始めた相撲。1年目の悲惨な成績は今も心の棘として
蛍の奥底に刺さっている。
稽古、試合、合宿、後輩、全国。青春を注いだその競技に対する想い、思い出。
やり尽くした感じと、今さら他の事をするのか、という両方の思いが天秤を吊り合わせる。
そして・・・
「やっぱアレが原因ですか、鬼丸関のあのケガが。」
ぶっ!と吹き出す蛍。まるで心を読まれたかのようなタイミングで、蛍の相撲に対する
拒絶感の元凶を的確に指摘される。
「エスパーかっ!」
「これでも一応、彼女のつもりなんですけどー。」
柚子香は語る。あの日、国技館で顔を真っ青にしてトイレに走って行った蛍を見て
ああ、『もし自分だったら』って思っちゃったんだな、って。
「参ったね、なんでもお見通し、か。」
そう、あの一番を見て蛍は、相撲の怖さを骨身にしみて思い知った。
自分が首藤戦で
ケガをした時よりも、はっきりと、鮮明に。
「火ノ丸さんは僕のヒーローだったんだ。その彼が、まさかあんな事になるなんて・・・」

心底怖かった。自分に当てはめたら悪寒が突き抜けるほどに。そしてそれを契機に
長年共に戦ってきた桐仁とも袂を分かった。
より相撲に積極的になった桐仁と、相撲から遠ざかった蛍。
「正直、怖いよ。カッコ悪いだろ、僕？」
自虐的な表情でそう言う。かってカッコよくなりたいと願った。
だがその夢は一歩間違えば
人生そのものを粉々に砕く危険な道であることを思い知ったから。
柚子香は肯定も否定もせず、蛍を見てふっと息をつき、マフラーを持って立ち上がる。
「少し歩こう、蛍。」
小雪の舞う道を歩く二人。小川にかかる橋の上、柚子香は蛍に向き直り、こう伝える。
「確かに、カッコ悪いよ蛍。」
「あ・・・」
ある意味辛辣な柚子香の言葉に少しへコむ蛍。単に不甲斐ないと思われただけじゃなく
男性として愛想つかされたかな、とも思う。大学に進学し距離が遠くなる今は、
フられるキッカケにするにはいいタイミングなのか、と言う思いが胸からせり上がってくる。
「どうして、『ケガをしないような相撲』を目指さないんですか？」
雪を世界にまとわせた、日本人形のようなその少女は、蛍にそう『道』を示した。
その言葉を様々に咀嚼する蛍。言うだけなら簡単だ、でも目指すことが出来なくはない。
ケガの怖さを知り、それを回避することを常に念頭に置き、相撲を続けていく。
それはケガが怖いから逃げるんじゃない、怖いからこそそれを克服

し、相撲と付き合っていく。
ケガを理由に相撲を嫌うんじゃない、ケガの可能性を含めて相撲を自分に取り入れる、
そうすれば自分は・・・
青春を、相撲を続けられる。
カッコいい自分を目指せる、過去の汚点をいつか栄光で塗りつぶすための挑戦を続けられる、
恐れたケガすら自分自身の方針で克服することが出来る、なによりあの円い土俵の上で
人生最高の瞬間を夢見ることが出来る、見続けることが―
「もう、何て顔してんですか。」
柚子香が蛍の両頬に手を当て、顔を近づけて言う。あ、という表情で我に返る蛍。
いつのまにか持っていたバッグを地面に落としている、その空いた手で蛍は
目の前の柚子香をぎゅっ、と抱きしめる。
「わ！」
いきなり公衆の面前で抱き着かれた柚子香が思わず声を上げる。
「もう・・・投げ飛ばしますよ。」
蛍に身をゆだねながら、その気の無い発言でそう続ける。やれやれ、やっとここまで来た、と。
「・・・ありがとう、ゆずと出会えて良かった。」
体を離し、肩に手を添えて、柚子香の目をまっすぐ見据えてそう告げる。優しい光を湛えた
その蛍火の様な瞳で。
「うん、カッコ良くなった。」
にっこり微笑んで柚子香が返す。常に全力で、自虐的なまでに無茶な挑戦をしてきた彼、
過去の傷に囚われ、捨て身で戦ってきた柚子香のヒーローが今、自分を大切にすることを知った。
あるいはそれで弱くなるかもしれない、蛍火の輝きが弱くなるかも

しれない、それでもいい。
困難を飲み込み、さらに前に進む、それでこそ私の好きになった人。
雪の舞う午後、ふたりは今、新たなスタートラインに立った。

卒業式の日、桜の舞う大太刀高校。
式の後に部室に顔を出した蛍と千鶴子。何をするともなく思い出の部室を見て回る。
神棚、てっぽう柱、2面取られた土俵。彼らは今日、ここを巣立っていく。
二人が感慨に浸っていると、どやどやと在校生の相撲部員たちが入ってくる。
「あ、ゴメンゴメン。これから稽古?」
マワシを締め、熱気あふれる体の後輩たちに気を使い、部屋を出て行こうとする・・・が。
「何言ってるんですか、これから送別相撲ですよ。ダチ高恒例の、ね。」
幸田の言葉に、え!と固まる蛍。柚子香が頑張ってくださいね、とマワシを手渡す。
「ちなみに賞品はコレね。」
沼田が額縁にはめこまれた写真を見せる。
「ぶふぅっ!!」
思いっきり吹き出す蛍。そりゃそうだ、なんと写っているのは雪の舞う中、柚子香を
抱きしめている蛍の写真なのだから。
「うん、会心の一枚♪」
そう自慢する千鶴子の横で、柚子香は苦笑いしながら『この姉は・・・』と呟く。
焼き増しはしていないし、ネガも消去したからこれが正真正銘最後の一枚だ。
「条件は全敗でもいいから、全員と取ってケガをしない事!それが目標だろう。」
いつの間にか入室している諸岡顧問が親指を立ててそう告げる、あ

んたもグルですか、と

毒づく蛍の表情は、今までにない程の笑顔だった。

「さぁ、最初は俺ですよ、夏の部内戦の借り、返させてもらいます！」

陽川が土俵に上がる。受けて立つよ、とマワシを受け取る蛍。

―はっきよい―

今、最後に残った物語の主役たちが卒業する。

後に残された者たちの物語は、残された者たちで紡いでいく。いつかその報を聞いた彼らは

後輩たちの想像以上の活躍に目を細め、喜びを覚える事だろう。

第９５番　流星大１年目

「お、三ツ橋じゃねぇか、お前も流星大かよ。」
「大太刀の・・・蛍丸！」
流山星稜大学相撲部の道場、蛍と共に入部届を持って来ていた新入生のうち
見知った顔の２人にそう声をかけられる。
「常盤第三の下山君・・・それに西上の葉山君も！」
かつて『鬼丸殺し』と呼ばれ、暴力的な相撲を身上として弱小だった常盤第三を
強豪校に叩き上げた下山倫平。
そしてやはり弱小だった西上高校で飯田監督と言う優れた指導者の元、その強烈な張り手で
同高のエースとして叩き上げられた葉山焔（ほむら）。
蛍は新たな、そして頼もしいチームメイトに心中微笑んだ。自分が目指す『ケガをしない相撲』
を目指すのにこの上なく頼もしい稽古相手だ。
「あー、一年は今日は見学でいいから。」
入部届を提出し、さっそく着替えを、と申し出た蛍たちに部長の寒川はそう言った。
そして始まる稽古を見て、蛍たち３人は現実を知って落胆する。
四股はわずか３０回、基本稽古もそこそこにハズ押し、申し合いに移る先輩方。
新入生の前でキツい印象を持たれたくないのかと思いきや、これでも皆息が上がっている状態だ。
普段の稽古量が足りてないのがありありと伝わってくる。
見学を終え解散する新一年生。その中の３人、蛍と倫平と焔は自販機の前に固まって話す。
「ンだよありゃ、先輩方ヤル気ねぇなぁ。」
「相撲強豪の大学じゃないことは知ってたが・・・」
「まぁ、あそこまでとは、ねぇ。」

現実を考えれば無理からぬ事ではある。本当に相撲に心血を注ぐ者は大学よりも大相撲に進み、
角界と学歴の折衷案を取るなら東京の帝天大や埼玉の栄華大など、相撲強豪校に進学して
学生選手権や全日本選手権で付出し資格を目論むのが普通だ。
結果、ただ相撲部があるだけの大学では、趣味や健康のために相撲を続けているものが多い。
が、それすらまだマシかもしれない。この相撲部では稽古以上に頻繁だったのは、他のクラブとの
合コン食事会という体たらくである。要するにキャンパスライフを満喫するために、体のデカさと
傍目の強そうな風貌を利用してモテようとしているだけなのだ
「ほーう、ケガをしない相撲をなぁ・・・」
「飯田監督も言ってたよ、ケガをさせるのは格闘技だから仕方ない、自分がケガをするのは
ただのバカだ、って。」
蛍の今の方針に2人は快く協力してくれた。だらけた先輩方を尻目に、迫真の気迫で稽古を
続ける3人を、上級生は『若いねぇ』という目で見守る。
3人もまた、そんなチームメイトと余計な摩擦を生まない為にも、しっかり合コンにも顔を出す。
もっともベビーフェイスの蛍、ユーモアのある倫平、格闘家気質の焔はそれぞれ結構モテていて
結局は若干の嫉妬を招いたりもしていたのだが。
彼ら3人が試合でその本領を発揮することは無かった。こういうサークル的な部活で
年功序列は絶対である、実力が劣る先輩達がレギュラーを務め、彼らは補欠にも入れない。
個人戦もやはり出場人数制限枠を先輩方が埋めているのが現状だ。
「ま、今年は力を溜めるのに集中すべきかな。」
蛍のその提案に2人も乗らざるを得ない。週3の練習の合間を

縫ってひそかに他校や
後輩のいる高校に出稽古に行ったりして、少しでも稽古を充実させていった。
中でも有難かったのは、西上の飯田監督のツテで大相撲の四ツ谷部屋に出稽古に通えた事だ。
最高位が十両の力士しかいないこの部屋は、学生相撲に対する対抗意識が強かったため
皆真剣に胸を出してくれた。
夏、蛍はそのニュースを聞いて、より一層稽古のギアを上げる。
―大太刀高校、ＩＨ全国団体準優勝―
―女子相撲、堀柚子香、２年連続高校女子横綱―
「おいおいダチ高絶好調じゃねーか！」
「ぐ・・・西上も予選でダチ高に負けてる、くっそー・・・おい三ツ橋、一番相手しろ！」
雑誌『月刊相撲道』の記事を見た二人は本を握りつぶして蛍に突っかかる、今でこそ
チームメイトだが、かつてライバルだった頃の『心』が蘇り、より一層稽古に気合が入る。
秋、蛍がずっとコンタクトを取ってた所との合同稽古がようやく実現する。
「いよぅ三ツ橋！元気だったか？」
「ええ、五條さんも。」
埼玉県、栄華大学相撲部。学生相撲としては頂点ともいえるその大学への合同稽古に
ひたすら縮こまる先輩方を尻目に、五條や金盛をはじめとする強豪選手の胸を借りる３人。
「なるほどな・・・大事だと思うぜ、それは。」
マネージャーの狩谷が蛍の『ケガをしない相撲』の考え方に感心する。
彼自身がその執念を燃やして相撲を取った結果、体を壊してしまい相撲を取れなくなってしまったから。

だが、もしケガを『怖がって』いたらとても世界大会の覇者になどなれなかっただろう。
怖がるのではなく、ケガをする原因を理解して克服する。相撲を長く取るならその考えは
大きな財産になるはずだ。
「っていうか、元々お前はケガしにくい相撲だけどな。」
ケラケラ笑ってそう返す狩谷。変化の相撲は相手の真っ向勝負をいなし、心理戦の相撲は
相手の手を読んで機先を制する。これでケガをする要素があるはずもない。
この合同稽古以来、部内の空気が少し変わった。
栄大にコテンパンにのされた先輩方は、今までより少し精力的に稽古に参加するようになってきた。
1年生の3人があの栄大と互角の相撲を取っていたことに奮起せざるを得なかったのだろう。
蛍たちもまた、ヤル気の出た先輩方を相手に多くの稽古をこなし、その力を溜めていく。
そして一年が過ぎた頃、物語が動き始める。
―鬼丸関、ケガから復帰。幕下15枚目から再始動―

第９６番　再会

「こんにちわー、お久しぶり。」
　1月某日、大太刀高校相撲部は実に久々の来訪者に驚きを隠せない。
「三ツ橋さん、おひさッス！」
「おお、えっとぶりやぁ。」
「おう1年、前部長の三ツ橋さんだ。」
「「チューッス！」」
　大峰、赤池の返しに続き、陽川が初顔の1年生達に自分を紹介してくれる。
　蛍の知らない5～6人の部員たち、なるほどひとクセもふたクセもありそうで、さすがは
　全国大会準優勝チーム、その選手たちのケツを叩いた控え選手たちだ。
「今日はどうしたんですか？」
「うん、待ち合わせの約束あってね、ここで。」
　蛍は今日、ある人物とここで落ち合う約束になっている。別に駅前でも校門前でも
　良かったのだが、どうせなら後輩の顔を見に来ようと部室を集合場所にしたのだ。
「ちょっと待っててくださいね、幸田さん達呼びますよ。」
　沼田がスマホをいじって連絡を取る。なんでも角界入りが決定した陽川と大峰は卒業待ちだが
　他の3年生達は受験勉強の最終追い込み時期、よく集まって教室で勉強会をしてるそうな。
「大峰君は柴木山部屋だよね、陽川君は？」
「俺は荒浜部屋ですよ、あそこデカい力士が多いから、太れるかなぁって。」
　確かに、国宝『数珠丸』もそうだが、あそこはいわゆるアンコ型の力士が多い、

太れないことがコンプレックスだった彼らしい選択だ。
蛍たちがそんな話をしてる側で沼田が電話をかけているのだが、その内容は蛍の耳には
入っていない。
「(ええ・・・三ツ橋さんです、チャンスですよ、プロジェクトG、発動ですよ。)」
しばらくして部室の外に人の気配。その時蛍の前にスッと赤池と沼田が立ち、その視界を遮る。
え、何事?といぶかしがる蛍を赤池が(動かんといて)と制する。
―パッシイィィィン―
いきなり強烈に響き渡る轟音、これは竹刀を叩きつけた音?それを肯定するように
怒号が間髪入れず部内に響き渡る。
「コラーーッ!何突っ立ってんのよアンタ達、体動かしなさい!ヤル気あんの!?
陽川、大峰、そんなダラけた態度で大相撲行く気?赤池、沼田、置き物の像じゃないんだから・・・」
怒号の主がそこまで言った時、赤池と沼田がスッ、と左右に分かれ、後ろにいた蛍の姿が
あらわになる。
「お客さんッス。」
笑顔でそう蛍を差す沼田、赤池も大峰も陽川も懸命に笑いをこらえる。
「え・・・あ、蛍・・・あ、あの、これは・・・」
固まったままあたふた体を動かす怒号の主、堀柚子香。
先ほど『クセ者』と評した1年生達は彼女の登場に怯えを隠せず、彼女の後に続く幸田、松本は
作戦成功とばかりに皆とアイコンタクトする。
「いやぁ、実に堂々とした鬼軍曹っぷりだねぇ、ゆず。」
その言葉に一同大爆笑、実は彼女のこの1年での部内のアダ名がまんま『鬼軍曹』だったのだ。

「蛍には・・・見られたくなかった。」
ず~ん、と部屋の隅で落ち込む柚子香。1年生達はあの鬼軍曹が、と蛍に驚愕と尊敬の
視線を送る。
「堀さんマジで強くなったんスよ。俺ら男子でも何番かに1回は不覚を取ったくらいで。」
幸田が語る。蛍が卒業してからの柚子香の相撲への入れ込みっぷりはハンパじゃなかったとか。
どうりで2年連続ＩＨ女子王者を取るわけだ。
「俺らも感化されて、気合の入り方が違ってきましたよ。おかげでＩＨもあと一歩までは
行ったんですがねぇ。」
「気合入れる時なんか『きえぇぇぇぇっ!』って吠えますからね、怖いのなんの。」
「そこまでバラすなぁぁぁぁっ!」
涙目で沼田の暴露を止めようとする柚子香だが、小林に背後から羽交い絞めにされてそれも叶わず。
「なるほど、強くなるわけだ。」
蛍が思わず漏らす。部内に熱をもたらし燃え上がらせる存在、男子に対して女子の身で
闘志と勝利を部内に持ち込んだ存在、3年前の火ノ丸に負けない火薬が部内に居たのだから。
「御免下さい、おお!ここは変わらんのう。」
噂を思えば何とやら、その火ノ丸が入り口から入ってくる。
「お・・鬼丸関!?」
「うっそー!全国制覇した時の、あの潮さん!?」
1年はもちろん、あまり火ノ丸と面識のない2年生も驚いてざわめく。そんな彼らに律義に
頭を下げて挨拶する火ノ丸。
「おはようございます、っていうにはもう遅い時間か。初めての人は初めまして、鬼丸じゃ。」

「「チ、チューーーーーーーーーツス!!」」
部員全員が一斉に腰を９０度曲げて挨拶を返す。その体の小ささも相まって角界で話題の力士として
あまりに有名な人物の登場にみんな驚きを隠せない。
「三ツ橋さんと待ち合わせの人って鬼丸関だったんですね。」
「うん、ちょっとこれから別の人に会いに。」
「えーっ!?せっかくだから稽古していきうましょうよぉ。」
残念がる面々、陽川や赤池あたりは真剣に鬼丸と一番取りたそうな表情で詰め寄るが、
さすがに現役力士にワガママを言うわけにはいかない、としぶしぶ身を引く。

「ほほう、堀さんの妹さんと付き合っとるんか。」
部室から出て目的地に向かう蛍と鬼丸。ついでに息抜きして来いと追い出された柚子香が
気まずさそうに「あ、まぁ・・・一応。」と返す。
「女子相撲高校横綱ですよ、ゆず・・・香は。」
「おお!それは凄い、尻に敷かれそうじゃのう、蛍。」
屈託なく笑う鬼丸。蛍は苦笑いしながら、間違いないね、と相槌ちを打つ。
と、蛍のスマホがピコン、と着信を告げる。画面を確認して鬼丸に向き合う蛍。
「今からならＯＫだそうです。」
無理言ってすまんの、と恐縮する鬼丸に、蛍はひとつ息をついてこう返す。
「探せばもっといい人、いると思うんですけどねぇ・・・」

千葉からほど近い、東京のとある格闘技ジム。中では屈強の格闘家たちがトレーニングに
励んでいる。その中で３人に面識のある人物が１人、リングの上にいた。

彼こそ今日、鬼丸が会いたかった、蛍にコンタクトを取ってもらった人物。
「肩書は元・中学柔道王者ですけど、頭が悪いからなぁ。」
「オイ！聞こえてんぞ蛍丸！」
総合格闘家、荒木源之助がリング上からそう返す。蛍と彼はなんか腐れ縁的に現状報告など
度々メールのやり取りの付き合いがあった。まぁお互い毒づくのがほとんどだが。
鬼丸が荒木と会いたがった理由は、彼の柔道技を自分の相撲に取り入れる為らしい。
ケガから復帰したとはいえ、まだまだ以前の強さが戻ったわけではない。現に復帰場所は
幕下で5勝2敗、優勝争いに絡めなかったという至らなさだった。
そんな彼は新たな相撲の手を模索していく。先週には五條佑真の通っていた空手道場で
女性の師範直々に『突き』の伝授をしてもらっていた。
が、やはり蛍にしてみれば、この人に教わるのはどうかなと思う。
元々直感と本能で
戦うタイプだけに、自分の技を理論的に解説して他人に伝授なんて器用な真似が出来るかどうか・・・
が、そんな荒木にも頭を下げる鬼丸。
「だがお前ほど土俵で柔道を使いこなした奴をワシは知らん、稽古をつけてくれい。」
そんな真摯な態度に、しゃあねぇなぁとリングに招き指導を始める荒木。
と言ってもひたすら鬼丸に投げを仕掛けるだけで、これといったアドバイスは無い。
鬼丸もまた投げられることで、その感覚をものにしようと観察しながら受け身を取っていく。
その光景を眺めながら、蛍は心のどこかで空しさ、辛さを覚えていた。

かつての憧れの人が、かつてのライバルに教えを乞うている。じゃあ僕は？

部室にいた一年生と同じで、自分は火ノ丸に相対するに足らない人間なのだろうか。

自分の相撲は変化が主軸、王道の横綱相撲を目指す火ノ丸さんが学ぶべきものは無い、

角界に進まない自分は、決して火ノ丸さんのライバルにはなり得ない。

だから、火ノ丸さんは、自分の方を、見ない。

「（桐仁、君のほうが正解だった・・・）」

彼は火ノ丸の復活を信じ、彼と戦うために全てを投げ打って角界に身を投じた。

僕は火ノ丸がもう駄目だと決めつけ、一時はケガを恐れて止まってしまった。

隣りにいる柚子香すら、女子相撲の未来を憂いて一念発揮し、どんどん先に進んでいく。

置いて行かれた、そんな感慨を胸に、リングの上を無言で見続けた。

第９７番　進化の形

「おいおい２連敗とか勘弁しろよ。」
「何やってんだよ、あんなチビ相手に。」
恒例の成田大・流星大相撲部、春の対抗戦が行われている成田大学の屋外土俵で、成田の面々が
頭を抱えてそう嘆く。
何しろこの対抗戦、ここ数年はもう成田の全勝が恒例になっていて、そろそろ中止にしても
いいんじゃない？との声も上がっていたほどだ。
成田は千葉の中ではわりと強豪校なほうで、同好会に毛が生えた程度の流星との試合で
得るものはあまりなかったハズなんだが・・・
「焔、お見事。」
「続けよ、蛍丸！」
土俵から降りた葉山焔が蛍と拳を合わせる。その横では先鋒戦を制した下山倫平も笑顔を見せる。
ついに試合のメンバーに選ばれるようになった彼らの大学相撲デビュー戦、２年生三羽ガラスが
そろって勝利を飾れるかは最後の蛍に託された。
―東、三ツ橋。西、奥山―
１９３ｃｍ１１８ｋｇの奥山は土俵に上がると同時に、先に上がっていた蛍を見下ろす。
「主将から聞いてるぜ、お前、国宝候補『蛍丸』とか呼ばれてたらしいなぁ。」
指関節を鳴らしながら首をひねって笑みを見せる、言葉には出さねど明らかに
『こんなどチビがか？』と舐めてかかった態度。
対峙する蛍は無言のまま、薄く笑って蹲踞の姿勢に入る。フゥウ、と呼吸を整え、全身の力を
ひとつに纏める。

―はっきよい―

両者がぶちかましで激突する。その瞬間、蛍は身をひるがえすと、円を描いて横に回り込み

相手の横ミツをつかみ、そのまま寄りに出る。

「(ほう・・・『蛍火の如し』進化してるな。)」

そう感心したのは成田大の主将、市橋だ。かつて石高時代に自分が対戦し、敗れたその技の

より効果的な進化に感心する。

蛍が目指した『怪我をしない相撲』にはいくつかの決め事がある。そのひとつは『体を開かない』事。人間の体は丸まる分には際限が無いが、逆に反り返るには

限度がある。反り切られれば関節を壊すことになる、かつての鬼丸のヒジのように。

常に体を内に軽く曲げ、丸まった外から攻撃を受けいなす。この『蛍火の如し』も

かつての横っ飛びから、当たった瞬間の変化と同時に体を丸く使い弧を描く動きに進化している。

「くっ!こ、こいつ・・・」

一気に押し込まれる奥山、その体からは想像出来ない膂力に焦りを見せる。

蛍の決め事の二つ目、常に全身の力の連動を意識する事。手足や上半身と下半身がバラバラだと

どうしても無理な体勢になりやすくなり、結果ケガのリスクも高まる。

寄りや吊りはもちろん、投げや突っ張り、変化に至るまでつねに全身運動を意識することで

ケガを防ぐのみならず、その威力も格段に高めることに成功していた。

土俵際、奥山は打っちゃりに出る。が、蛍は素早く足を滑らせて重心を残し腰を割る。

相手の足掻きに振り回されながらも、しっかりと土俵に体を残す。

決め事の三つ目、それは下半身の関節の柔らかさを磨く事と、常にすり足を忘れない事。
相撲取りのケガで多いのがヒザと足首の関節だ。特に足首、ひねったり足首を立てた状態て
体重をかけられると間違いなく壊れる。足の裏を土俵に吸いつかせる『すり足』を
常に意識し、土俵上に自分の足跡で筆線を描くことを意識していた。
なすすべなく土俵を割る奥山。成田の『またかよ』という嘆きが聞こえる中、蛍は相手の
奥山に少しだけ感心していた。
決め事の四つ目、決して無理な足掻きはしない事。相手にスキがあれば別だが、万全の体勢から
決めに来た技は無理に返そうとしても逆転にはまず繋がらない、ましてここのように土俵が
高く盛られているなら尚更、無駄に足掻いて転落すれば大怪我にもなりかねないだろう。
勝ち名乗りを受け、土俵を降りる蛍。焔と倫平にガッツポーズを見せ、次の先輩方に勝利を託す。
この対抗戦は7人制で、4勝すれば勝利を確定させることが出来るのだ。
で、3連勝の4連敗というお約束の結果で対抗戦は終わった。
「いやぁ、なんか強くなったっていうか、力強くなったなぁ、力感があるよ。」
試合後の合同稽古で市橋は蛍をそう評する。かつてはひらひらと飛び回り、捕らえどころが
なかった印象だったが、今はしっかりと地に足を付けつつ、なおかつ高速で動く印象。
「あれだな、去年のアマ横綱『備前長船』を思い出すよ。」
鳥取白楼の舟木、昨年高校横綱を取り、そして全日本選手権でも優勝してみせた男。

幕下付け出しの資格を引っ提げて角界デビューして以来、早くも十両上位まで駆け上がっている。

元々『体』の出来上がっている舟木が何でもできる相撲を目指したのに対し、変化をはじめ

何でもやる相撲を目指した蛍が『ケガをしない相撲』を取り入れた結果、同じような所に

行きついたようだ。

この日以来、彼ら3人は流星大の選手の座を不動のものとした。

各校の対抗戦でも勝利を重ね、関東のアマチュア大会でも勝利を収めてみせる。

とはいえ、この手の大会は団体戦がほとんどなこともあり、さすがに表彰台には縁が無かった。

やはり本番は秋に行われる全国学生選手権、そして冬の全日本選手権だろう。

個人戦で活躍すれば大相撲の付け出し資格すら習得できるその大会は、全ての学生相撲力士の

目指すべき頂である。

焔も倫平も全国の強豪たちと同様、その日の為に力を蓄え続ける。

そんな中、蛍は自分とは決して交わらない、ある力士が気になっていた。

大相撲力士、鬼丸国綱。

以前会ってからの彼は破竹の快進撃を続けていた。幕下優勝、十両準優勝、十両優勝と勝ちを並べ

ついに幕内への復帰を果たしてみせる。

だが、それは蛍の知っている彼の相撲ではなく、蛍が目指している相撲でも無かった。

どこか余裕が無く力任せ、暴力的で己の身をも顧みない危険な相撲。四股名の示す通り、

まるで鬼のような無謀ともいえる相撲に身を任せていた。

「(あれじゃあ、また怪我するんじゃないか・・・?)」

そんな不安が拭えない。元々幕内にいた鬼丸にとって、幕下や十両

ならその相撲でも
通用するだろう。しかし今の幕内には国宝がひしめいている状態、今の彼の相撲で
無事で済むとはどうしても思えない。自分が『怪我をしない相撲』を目指してきたから、尚更に。
そんな心配は杞憂であると言わんばかりに鬼丸の快進撃は続く。
初夏の名古屋場所、
初日から一気の7連勝で健在ぶりを見せつけていた。
部室のＴＶでその様を眺めながら、やっぱり火ノ丸さんはどこかデキが違うんだな、と
心配事を肩から降ろす。彼は彼、僕は僕だ、と。
だが、そのＴＶに移ったテロップを見て、蛍の全身に電撃が走った。
〝八日目取組、鬼丸（西前頭十三枚目）―鬼切（東十両二枚目）〟

第９８番　とある女子大生達の休日

「ねぇねぇ、あとドコに行く？」
「んー、名古屋城もいいけど、熱田神宮も押さえておきたいわねぇ。」
「栄も行きたい！あそこ行かずして何が名古屋よ。」
流山市内のチケットショップにて４人の女子大生がパンフ片手にあーでもないこーでもないと
喧々諤々状態。中でもリーダー格の香山夏美は特にハイテンションで計画を練っている。
流山星稜大学女子ソフトテニス部の２年生である彼女たち、と言っても部活にはほぼ顔を出さず
もっぱらバイトで小金を稼いでは、仲のいいこの４人でツルんで遊び回っている。
とある女性誌に掲載された名古屋スィーツを見た彼女たちは、早速ツアーを計画し、
名古屋旅行のプランを詰めるべくこうしてショップでダベっているのだ。
が、どうもスケジュールが開くというか、ややヒマを持て余すことになりそうで、空き時間の
有効な使い方に頭を悩ませている。手帳にタイムスケジュールを書き込みながら、
夏海はうーん、と頭を掻く。
と、その時チケットショップに一人の男性が、やや早足で駆けこんできた。
彼女たち全員が知っている、ちょっと気になっていた男性の顔。
「すいません、明日の大相撲名古屋場所のツアーか、当日券のチケットまだ取れますか？」
彼女たちなど目に入らない様子でカウンターの受付嬢にそう詰め寄る。嬢はパソコンを
操作して確認すると、彼、三ツ橋蛍にこう返した。
「大丈夫ですよ、日帰りのツアーも、会場の当日券もまだ空きがありま

す。」
「あーっ！蛍ちゃんじゃーん。」
「ホントだ、慌ててどーしたの？」
そう声をかけられて蛍はあれ？と彼女らの方を向く。知ってる顔に張り詰めていた顔を
落ち着かせる。
「テニス部のみんなだよね、君達も旅行？」
「うん、名古屋スィーツ食べに。蛍ちゃんは？」
「僕は明日の大相撲。見たい一番があってね。」
彼女らは蛍と2～3度、合コンで顔を合わせていた。最初は相撲部となんて
気が進まなかったのだが、先輩たちの誘いとあれば断るわけにもいかず、
しぶしぶ同席したのだが・・・
てっきりデブ君の群れと思いきや、シュッとした人もいるじゃない、と蛍や焔にすり寄って
思いのほか楽しい時間を過ごせていた。が、ここ半年ばかり相撲部との合コンはご無沙汰
していたので、蛍と顔を合わせるのは久しぶりだった。
「じゃあ、蛍ちゃんも名古屋に？」
「やった、一緒に回ろうよ。」
せっかくの旅行なのに女だけで行くのは味気ない、と蛍に声をかける彼女たち。
が、受付嬢の冷徹な一言がその可能性を潰す。
「残念ですが、明日の名古屋行き新幹線チケットはもう満席でして・・・」
彼女たちは朝一番に新幹線で行く予定だったが、名古屋場所ツアーのチケットは
昼前出発のバスツアーだ。
「そうだ、だったら名古屋で合流しない？」
「そーそー、相撲なんてちょっと見ればいいじゃない、私たちとデート

しよ～。」
　食いつく女子大生たちに、蛍はそうだねぇとしばし考え込む。じゃあお目当ての
　一番を見たら回ろうか、と返されて盛り上がる一同。
「でもお目当てって、そんなに見たい試合があるの？」
「うん、僕の高校時代のチームメイト同士の一番なんだ。」
　言って蛍はスマホを操作し、鬼丸と鬼切の画像を読み込んで彼女たちに見せる。
「うわーっ！なにこれカッコいいーっ！」
「ホントに相撲取り？めっちゃシュッとしてんじゃん。」
「この二人が裸で抱き合って・・・私、行く！」
「私も見るー！受付さん私も相撲の当日券、この人の隣で！」
「私も私も！」
　抜群の食い付きだった。蛍にしてみれば少しでも多くの人に相撲に興味を
　持ってもらえればという思いもある。元々女子の扱いに慣れているだけに、４人まとめてなら
　かえって迫られることも無いのをよく知っていた。

　かくして翌日、彼女らの名古屋ツアーがスタートした。
　名古屋に到着し、お目当てのスィーツを堪能した後、名古屋城を観光して栄でショッピング。
　３時に蛍のツアー組と合流なので、やや足早に回る事になる。
　彼のお目当ての試合はなんでもマクウチの最初の方の試合なので、その後の最後の試合までは
　時間が空くらしい。ツアーバスの集合時間までは蛍と近場を回れそうだ。
　彼女たちが愛知県体育館に到着すると同時にツアーのバスが到着。無事蛍と合流を
　果たした彼女たちは、早速館内に入場する。
　場内はちょうど十両の取組が終わった所だった。東西から幕内力

土の土俵入りが披露され、
その後横綱、刃皇が堂々の雲竜型を披露する。
「あの前掛け奇麗ねー、いくらするのかしら。」
「化粧まわしは寄贈されるんだよ、価格にしたら7ケタ行くかもね。」
「あれが横綱？へー、意外と恰好いいじゃん。」
「今、無敵の横綱だからね。やっぱ迫力が違うよ。」
蛍は彼女たちの質問に逐一答え、時には解説を加えて彼女たちを接待する。こういうのを
面倒くさいと思わず笑顔で出来るのがある意味蛍の凄い所だろう。
これをモテない男が見たら
さぞ虫の好かないチャラ男に見えるに違いない。
―ひが～しぃ～、おにぃまるぃぅ～。にぃ～しぃ～、おにぃ～きりぃ～―
「さて、お目当ての一番だ。」
土俵に上がる両力士を見て女性陣が色めき立つ。相撲取りとは思えぬそのスリムな
顔つきに、チョンマゲの鬼丸とざんばら頭の鬼切の姿は、まるで時代劇の俳優が
対峙してるかに見えた。
しかもフンドシ一丁のほぼ全裸で、である。
普段は相撲部に見学に行くほどの勇気は持てない、男の裸目当てで行ってると思われたくないから。
だが大相撲の世界では大勢の観客にその姿を晒すのが当たり前、ＴＶ中継までしてるその世界は
彼女たちにとって未知の役得の世界だ、こんな格好いい選手がいるのなら。
「さすがに気合入ってるなぁ、二人とも・・・」
思わずそうこぼす蛍。彼のみが知っている事だが、桐仁にとってはいわばこの一番こそが
相撲人生の終着点ともいえる。かつて自分と袂を分かった男が、わずか2年でその舞台に

辿り着いたことに感慨深さを感じずにはいられなかった。
時間一杯、平蜘蛛型仕切りで対峙する両者に会場がどぉっ！と沸き、女性陣は何事？と驚く。
蛍はスマホのカメラを向けながら「本気の本気だよ」と解説を入れる。
彼は心の中で、火ノ丸に、桐仁にエールを送る、頑張れ！
―はっきよい―
その激しい相撲に女性陣は言葉も無い、立ち合い腕を取り、折らんばかりにねじる鬼切、
それを凌いで、まるでボクシングの様に相手を殴りつける鬼丸。先ほど時代劇の俳優などと
思った彼らだが、今は本気で戦国時代の果し合いを見てる気分で血の気が引く思いがする。
イケメン同士の抱き着き合いなどと邪な期待をしていた彼女たちは、その激しさ、相撲と言う
競技の厳しさを目の当たりにする。
決着は早かった。土俵際で網打ちを放った鬼切を、鬼丸は力づくで投げ返し、土俵下に放り出す。
元、高校のチームメイトのその容赦のない決着に会場内が騒然としていた。鬼丸は土俵から
鬼切を見下ろして何か言葉をかけている。
蛍は、火ノ丸が桐仁に何を言ったのか、何となくわかった気がした。
「・・・これが一番良かったのかもな、桐仁にとっては。」
もし桐仁が火ノ丸に勝てば、彼が人生をかけて追い続けた目標が達成されてしまう。
そしてそれはまだまだ若い桐仁にとって、決して幸せなことではないだろう。
「火ノ丸さんに勝ったらやめちゃいそうだもんな、依存しすぎなんだよ、アイツは。」
感慨深く嘆くその蛍の姿を見て、女性陣はある意味感心し、ある意味納得する。

今の激しい戦いを見ても何ら臆せず恐れず、冷静に見つめるこの人物もまた
あの世界に生きる男子なのだ、と。
が、彼女たちもさるもの、それで引くほど女子力が低いわけではない。シュッとした
男は好きだが、強い男が嫌いなわけではない。むしろ女顔の蛍の内面の芯に彼女たちは
より惹きつけられた。
「ねーねー、本当に蛍ちゃんあの2人と同じ相撲部だったの？超強いじゃん。」
今までと別の目の輝きを湛えて夏海がそう話しかける。蛍は今の一番をスマホで
五條佑真に送信しつつ返す。
「だったら相撲部見に来てよ、僕だって国宝『蛍丸』とか呼ばれて―」
『ながら』の返事だけに、肝心なことには気付いてないままで。
「じゃあ、行こうか。」
そう言って席を立つ蛍。ここに来るまでは結びの一番まで見ていきたかった気はあるが、
彼女たちとの約束もあるし、それ以上に今の感動を他の取組で薄めたくないという思いが
強かった。これからも頑張れ、桐人！
席を立ち、蛍の後に続く4人の女子大生。しかしその空気は今までのものと若干の変化が
見られた。このイイ男をなんとかゲットできないものか、そんな空気を4人ともが纏っている。
皆顔は笑っているが、内面では今までの友達をライバルとして意識していた。
「わ！」
突然立ち止まる蛍に夏海がぶつかり、声を上げる。もう、どうしたの？
「う、うぁ・・・い、いやあの・・・これは」

固まったまま真っ青な顔で立ち尽くす蛍。その前には自分たちと同じくらいの歳の女の子が
にっこり笑って、しかし全く笑ってない目で佇んでいた。
「おひさー、蛍。女の子引き連れてモテモテっすねぇ。」
おかっぱ頭にしゃれっ気の無いワンピースに身を包んだその少女を前にして、蛍は小刻みに
震えていた。夏海たちもただ事じゃない、とその少女に対峙する。
「ちょっと、何よアンタ、蛍ちゃんに何の用?」
つっかかる夏海を蛍があわわわわ、という顔でとどめようとする。
「あ、僕の後輩で・・・女子相撲の選手の堀柚子香・・・さん。」
「はじめましてー、みなさん♪」
笑って4人に声をかける柚子香。なにこいつ馴れ馴れしい、と対抗意識を燃やす4人だが・・・
ゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・
彼女たちも今の今まで格闘技、相撲を目の当たりにしてきたばかりだ。戦う者の持つ
独特の圧に気付かないほど鈍感ではない。その勘が告げている。
こいつ化け物だ、勝ち目はない、逃げろ、と。
「じゃ、じゃあ蛍、私たちはホテルで一泊だからこれで、気をつけてねー。」
「また大学でー、じゃっ。」
そそくさと逃走する女子大生4人。後に残された、いや見捨てられた蛍は逃げ場のない
館内の通路で絶望感を噛みしめていた。

翌、月曜日。稽古の最中に倫平や焔に問われる蛍。
「なんだよ、今日はずいぶん気合入ってねぇじゃねぇか、どした?」
「ダチ高の仲間の一番見て来たんだろ?気合い入りまくりだと思ってたのに。」
そんな問いに顔をうなだれて、蛍はぼそりと返す。
「・・・いやもう、色々と、疲れて・・・」

第９９番　嬉しい出来事、そして・・・

―夏、国技館―

「うおおおおおーーーっ！」

「行け、行ってくれぇっ！」

「勝ってえぇぇぇっ！」

蛍が、幸田が、松本が、千鶴子が、柚子香が、観客席から絶叫する。

「マコトーっ！決めてまぇーーっ！」

「チャンスだ！逃すなーーっ！」

「ＧＯ！ＧＯ！ゴオォォォッ!!」

赤池が、沼田が、小林が、そして諸岡顧問が、全身を沸騰させながら檄を飛ばす。

今まさに、大太刀高校相撲部の悲願が成されようとしていた！

インターハイ団体決勝戦、昨年と同じ大太刀ＶＳ栄大付属の対決は２対２のイーブンで

大将の柳沢と久我の１戦、幾多の攻防の末、ついに柳沢は『対久我、必殺の形』を完成させる。

己の額を相手のみぞおちにめり込ませ、両ハズ（脇）を突き上げるようにして押し進む。

土俵際まで追い詰めると、柳沢は体を寄せて久我の腹の下から突き上げるようにせり上がる。

個人戦を制し、今年の高校横綱となった栄大付属３年、久我北斗、国宝『七星剣』。

高校での公式戦、１年の時には金沢北の藤田に黒星を喫したのみで、２年時には名門栄大付属の

復活に心血を注ぐ意味で個人選を辞退し、団体戦のみでの出場で見事全国制覇、

今年も圧倒的な強さを誇った彼が、最後の最後でまさかの剣が峰に立たされていた。

大太刀高校３年、柳沢真。

高校から相撲を始めた彼は、その体力の無さから選手の傍らマネー

ジャーとして働いていた。
先輩の堀千鶴子から『相撲を外から見る』ことで強くなる可能性を示唆された彼は、
様々な取組みを見て、分析し実践することで、めきめきとその実力を伸ばしていった。
かつて見た鳥取白楼の北谷のように相手を研究して対策を編み出すその相撲は、主力の抜けた
ダチ高を昨年以上の強豪校に押し上げてここまで辿り着かせる。
赤池が準決勝で金沢北の大将、生島を破るも右腕を負傷し、この決勝ではここまで
控えだった柳沢が大将に抜擢された。ダチ高の秘密兵器として満を持して登場した彼が
今まさに大金星をあげて見せる―
「寄り切ったーーっ！」
「ウッソだろう！あの七星剣が!?」
「何者だよアイツ、なんでここまで補欠・・・」
―寄り切って東、柳沢の勝ち！―
―大太刀高校、４年ぶり２度目の全国優勝！―
歓喜に渦巻くダチ高関係者。特に千鶴子は直弟子の最後の大活躍にカメラのピントを
合わせることもままならないほどに涙する。頑張った、うん、すごく頑張ったね、おめでとう、と。
片腕を布で吊った赤池、ダチ高のポイントゲッターとなった巧者沼田、そして相撲を
続けることで格段に痩せて見違えるような美人になった小林が、土俵から降りた柳沢に
手荒な歓迎をする。
共に戦った後輩の２年生、観客席で応援していた１．２年生も皆抱き合ってこの快挙を祝う。
その際では実費で応援に来ていた川人高校の喜多も思わず目を潤ませながら拍手する。

公式戦のデビュー戦同士で戦った彼が、まさかここまで強くなるなんて、凄いな、と。

「惜っしいよな、大峰や陽川も見に来れればよかったのに。」

「桐仁もね。生で見逃したの悔しがるだろうねぇ。」

松本の問いにそう返す蛍。大相撲力士は夏巡業の真っ最中で、角界入りしている彼らは

今日この場には来れなかった。

まぁ大相撲勢はそれどころでは無いのも確かだ。角界は今、横綱刃皇のまさかの爆発宣言、

「来場所優勝したら引退します」を受けて異様な空気に包まれていたから。

幸田がスマホで動画とメールを陽川と大峰に送る。ほどなく届いた返信には、やはり

見に行けなかった残念さにのたうち回る二人の心境がよく表れていた。

幸田と松本、柚子香の同級生トリオがその様を想像して朗らかに笑う。

蛍も桐仁に同じものを送ったが、帰って来た返信は『そうか』の一言だけだった・・・

と、思いきや、5分後に『上をいかれたな』10分後には『ああ、去年もか』

30分後には『俺も頑張らないとな』1時間後に『おめでとうって伝えてくれ』、

2時間後に来た8度目のメールに、皆のツッコミを代表して蛍が

「まとめて送れ!」と返す。

「おーい!やったな、本当におめでとう!」

閉会式を終え、解散したダチ高相撲部に合流する蛍たち。悲願達成の興奮冷めやらぬ彼らは

尊敬する先輩たちにいい笑顔で快挙を報告する。

「赤池、腕大丈夫か?」

「ヒビ程度やろ?いけるいける。決勝も出たかったわ。」

幸田の心配を無用だと腕を振り回して見せる赤池、当然次の瞬間には「あいたたた・・・」と
うずくまる羽目になるのだが、本当に相変わらずだ。
「辻先輩来てないんッスねー、俺の雄姿見せたかったのに、ざーんねん。」
そうおどけてみせる沼田だがそれもまた無理からぬ事、なんと彼は今年ここまで
公式戦無敗で来ていたのだ。あえて個人戦にはエントリーせず団体戦に集中し、
柳沢のデータと戦略に忠実に従うことで白星を量産し続けた。
「って、お前は真のデータ通りに動いただけやないかい。」
「分かってないなぁテッツー、それが出来るのが実力なんだよ、なぁ真。」
その後、恒例の祝勝会ＩＮスタミナ次郎に招待される蛍たち。
早いもので、蛍たちが高３の時に入学してきた彼らももう３年、彼らもまた進路の選択を迫られる
時期に来ていた。
「ワイは親父の後ついで板前の道に入るけん。」
そう語る赤池に残念だという空気を隠さない一同。ダチ高の燃える闘魂として戦い続けた彼だが
貧しい父子家庭という事情がある彼にとって、進学や大相撲という道を取れないのは仕方が無かった。
「俺は就職。で、真はもちろん帝都大学だよな。」
沼田の言葉に一同がおおおっ!となる。日本人なら誰でも知っている学問大学の頂点。
相撲に心血を注ぎつつも成績は落とさず、むしろさらにキレッキレの頭脳のようだ。
「しかし・・・小林さんが今日一番の驚きだよなー・・・」
ぼそりとこぼす蛍に、幸田や松本、千鶴子がうんうんと頷く。かつて小太りで暗い影の
あった彼女が見違えるほどの美人になってしまってるんだから。

「この一年で何があったのよ、参考にしたいから教えて。」
柚子香が思わず詰め寄る。考えてみれば先輩のレイナや姉の千鶴子はもとより、ライバルの
檸檬や蜜柑や杏、白楼マネージャーの咲に七瀬に田中と、どうも相撲関係者の女子に
美人やグラマーが多いのは何かの呪いだろうか・・・
「俺達の事より、先輩方はどうすんです?三ツ橋さんも松本さんも大相撲行かないんですか?」
「せや、それそれ。大学で付け出し資格獲って大相撲行くんやろ?」
幸田は大学進学後、またラグビーの方に戻ったこともあり、残る二人に後輩たちが
期待の目を向ける。
「大学と言うのは、高校とはまた違った世界だからね、彼らにもいろいろあるさ。」
諸岡がそう蛍たちをフォローする。蛍はふと、そいうや松本君の名前を大学相撲で
聞かないことを不思議がる。彼の実力ならてっきり大きな大会で活躍して・・・
「ああ、僕もう相撲やってないんス。」
その松本の言葉に一同騒然となる。彼が言うには松本家は大きな事業をいくつも手掛けている
名士の家で、彼もまた大学進学と同時に実家の帝王学を学び、政治や経営の方行に人生の舵を
切っていたらしい。
「いずれは大相撲のタニマチ(個人スポンサー)に名を連ねたいと思ってるッス、辻先輩や
角界に行くなら三ツ橋先輩も応援させて貰うッスよ。」
それぞれに進路があり、その先に人生がある。今日と言う栄光の日を門出にして
若者は先に進んでいく。

「大相撲、か。」

解散した後、蛍は一人夜道を歩きながら、その見果てぬ世界に思いを馳せる。

相撲を取る者にとって夢の舞台。しかしそこにいる自分を想像して蘇るのは、彼を苛む過去。

―また全敗するかもしれない―

―今度こそ大怪我するかもしれない―

あの日の柚子香の言葉によって、相撲で怪我をしない自信は少しついたつもりだ。

相撲を始めた最初の一年で経験した棘も、今は痛みも和らいでいる。

だが、大相撲に行くなら、再びそう言った脅威に直面するだろう、思い出すだろう。

過去の痛みを忘れて渡って行けるほど甘い世界ではない、それを承知で行くのか。

秋。そんな蛍に、進路を決めるきっかけになる事件が起こる。

それは懐かしい人物からの、一本の電話が始まりだった。

『よう、久しぶりだなぁホタル・・・明日空いてるか?』

第１００番　途絶える道

―数珠丸、会心の相撲で一勝目、鬼丸は悔しい二敗目―

流星大相撲部の部室にあるＴＶを見ながら蛍たちは、あーあ、という表情を見せる。

「ガタガタじゃねぇか鬼丸の奴、力感が全然感じられん。」

「やっぱ昨日の横綱戦かなぁ、完全に遊ばれてたからね。」

倫平が、焔が、地元千葉の星ともいえる鬼丸関の不甲斐なさに息を吐く。特に倫平は

かつて鬼丸に投げられたことが新たな相撲人生のスタートになった、いわば恩人であり

指針でもあったから落胆もひとしおだ。

「初日からなんかおかしかったよ、余裕が無いというか焦ってるっていうか・・・」

蛍がそう続く。初日の大典太戦から鬼丸はその四股名の通り、まるで鬼のような

形相で相手に食ってかかるかの如く相撲を取っていた。まるで自分も相手も壊しに

かかっているかのような相撲、それはかつての蛍の知る相撲では無く、まるで子供が

癇癪を起こした状態で暴れているようにすら見えた。

その比喩が正しかったことを２日目の相撲が証明する。鬼丸の無茶攻めを難なく

押さえつけて悠々と勝利する横綱刃皇のその様は、まるで相撲教室の先生が

やんちゃな子供を嗜めるような一番に見えた。

「おーい三ツ橋、携帯鳴ってるぞー。」

そんな彼らに１コ上の先輩が更衣室から声をかける。どーも、と小走りに駆け寄って

スマホを取り出し、着信相手を見る。

「うぇ？國崎さん！」

思わず変な声が出てしまった。かつて鬼丸と共に全国制覇の立役者となり、その後は
総合格闘家を志してアメリカに渡っていた豪傑。
「もしもし、三ツ橋です、國崎さんお久しぶり。」
『よう、久しぶりだなぁホタル・・・明日空いてるか?ちょい火ノ丸の奴に活を入れに行くけど
ヒマなら付き合え!』
「って、いま日本にいるんですか!?」
『ああ、訳アリで昨日からな。んで今相撲見てたんだが、酷いってもんじゃねぇなアレ。』
「僕もそう思いますよ。それで、どうします?僕ならこれからフリーですけど」
『んじゃ今からだ、柴木山部屋に集合な。』
ブツッ、ツーツー・・・
「え、ちょ、ちょっと!」
最初に明日って言ってたのにあっさり予定変更する國崎に、相変わらずだなぁ、と
ため息をついてスマホを仕舞う。
「國崎って、あの國崎か?」
「うん、一緒に鬼丸に活を入れに行こうって。明日は悪いけど練習休むよ。」
「いいんじゃねぇか?どうせお前の事だから相撲部屋行って結局稽古するんだろ。」

夜、電車に揺られて柴木山部屋に到着。と、玄関前に見知った顔を見つける。
「あれ?マネージャー・・・じゃなくて堀さん。」
「三ツ橋さん、やっぱり國崎さんに?」
彼女もまた國崎に連絡を貰って来たらしい。もっとも彼女は相撲雑誌のカメラアシを
している関係上、柴木山部屋にはよく出入りしてるようだ。

「柴木山部屋・・・か。」
鉄筋コンクリートの建物を見上げて思う。自分が未だ踏み込めない大相撲の世界、
時折通っていた四ツ谷部屋では自分の相撲を育てるのに夢中で特に感慨が湧かなかったが、
ここはかつて名古屋で親方自らに胸を出してもらい、尊敬する火ノ丸さんが居る、
いわば憧れの部屋。ここで稽古する力士たちや親方に会って、何かが変わるのだろうか・・・
「よう、お前らもか。」
ぼそりと聞こえたその声に2人が振り向くと、青白い人魂を従えたイメージで、
着物を纏って青い顔をした幽霊のような男が佇んでいた。
「ひぃっ・・・って、桐人か!」
ただでさえ亡霊のような気配を纏ったこの男が、夜に着物を着て暗い顔で佇んで
いるもんだから、そのままお化け屋敷で使えるくらいのクオリティーに仕上がっている。
「何を驚いてるんだよ、俺がここにいちゃいけないのか?って、いかんよな。」
「待て待て待て、帰るな!」
そういって踵を返そうとする桐仁の手を掴む蛍。
桐仁は今場所新入幕したものの初日から3連敗。本来ならこんな所に来て敵の心配を
してる場合じゃないのだが、逆に長門親方や部屋頭の童子切は気分転換に行ってこい、と
快く彼を送り出す。そんな状況なら彼のこの暗い表情も納得だ。
「おーい、お前ら何やってんだよ、早く入って来いよ!」
なんと柴木山部屋の中から顔を出しそう叫ぶのは懐かしい顔、國崎だ。
「って、もう入ってたんですか、人を呼びつけといて・・・て!?」

抗議をしかけた蛍が思わず固まる。なんとその腕には可愛らしい赤ちゃんが
抱かれているでは無いか！あまりに似合わない絵面に固まる3人。
「しゃーないだろ、外に出してるとお米がカゼ引くし。」
親方やおかみさんに挨拶して部屋に入る面々、特に桐仁は立場上恐縮しきりだ。
「鬼切関、三ツ橋先輩、久しぶりです！」
「大峰君！あ、今は薫峰（かおるみね）関だっけ。」
懐かしい顔に顔をほころばせる蛍に、千鶴子が彼の現状を語る。
「今は三段目上位で、今場所勝ち越せば幕下入りも見えるんですよ、頑張って欲しいですね。」
「おお、ダチ高の。久しぶりですね。」
「あ、変化の三ツ橋さん、その説はお世話になりました。」
かつてのライバル高、川人出身の大河内と、在学中によくダチ高に出稽古に来ていた
星野君もこの柴木山部屋に入門している。蛍は挨拶を交わしながらも、大相撲の世界に
踏み込んだ彼らの決断に拍手とエールを送る。
―僕は、どうする―
稽古場前の座敷に皆が揃って腰を下ろす、出されたお茶をすすりつつ、國崎の娘さんの
お米ちゃんを中心に皆が懇談を咲かせる。
「って、肝心の火ノ丸さんはどうしたんですか、彼を元気づける為に集まったんでしょ!?」
蛍が我に返った顔でそう問題提言、それに対して桐仁・・・鬼切はニヤリと笑って親指を立てる。
なんだそのリアクション、といぶかしがっていると外からインターホンの音。
おかみさんが出迎えると、そのまま来訪者はどすどすどす、と激しい足音を立てて蛍たちの元へ。
「國崎ィ、手ェ貸せ！今から鬼丸の野郎をぶちのめしに行くぞ！」

怒り心頭で現れたのは、やはり当時のチームメイトであり、今は蛍の大学相撲のライバル
でもある五條佑真、そして後ろからおずおずと付いて来ているのは彼の高校でのゴロツキ仲間。
「なんですか、現れるなりいきなり物騒な！」
そう返す蛍にかまわず、佑真は握りしめたスマホを潰さんばかりに睨みつけ、怒髪天を衝く表情で
こう吐き出す。
「あの野郎・・・レイナをラブホに連れ込みやがった！カチコミに行くぞ!!」
爆発断言に一同騒然となる。鬼丸のあの性格と今の状況からしてそれはまずありえないだろう、
見方を変えて、レイナの方が連れ込んだと仮定すればぴったり当てはまるのだが
シスコン兄貴にそれを理解しろと言う方が無理だったか。
「ハッハッハッ、火ノ丸があの五條妹と、ねぇ。」
すでに子持ちの國崎にとってはすんなり受け入れられる事なのか、大口を開けて笑う。
そんな彼の首根っこを掴んで、行くぞ！と部屋を出ていく、ユーマ軍団の3人も頭を下げながら
それに続く。
「どーでもいいけど、ホテルに踏み込むのは止めろよ。ニュースにでもなったらコトだぞ。」
桐仁の忠告にへこへこ頭を下げて退室する3人組。
後に残った3人、お米をあやしている千鶴子の隣で、蛍が気まずい顔をしていると
桐仁が笑顔で親指を立て、歯を光らせて自慢げにこう語る。
「心配ないって、レイナさんにはきっちり鬼丸の好みをリサーチ済だ。苦労したけどなー。」
「へぇ、どうやったんですか?」
「高校の時に見てたグラビア雑誌使って選ばせたんだよ、トーナメン

ト方式でな。」
　食いつく千鶴子にさらに自慢げに返す桐仁。なんか連敗中の現実から逃避してるようにも見えるが
　それ以前に千鶴子もまた火ノ丸に気がある事に全く気付いて無い様だ、聞いてて痛々しい。
「辻さんが煽って五條さんが止めに入るって・・・すごいマッチポンプですよね、それ。」
　まぁ当の千鶴子が無理をしているのか予想していたのか、比較的平静を保っていてくれたのは
　幸いだったが。
「部屋用意するから、今日は泊まっていきなさい。」
　おかみさんにそう進められて、3人は厄介になる事にした。個室を千鶴子が使い、
　桐仁と蛍は雑魚寝の部屋へ。
「関取なのに雑魚寝させてスマンっすね。」
　大峰のその言葉に、ウチ（長門部屋）でもそうだから気にするなと返す。
「あーどうせ部屋探すのが面倒くさいとかでしょ。」
　図星を刺された桐仁の顔が引きつるのを見て皆で笑う。柴木山部屋に来たのは初めてだが
　皆いい雰囲気だ。

　翌朝、蛍は部屋の朝稽古に参加させてもらっていた。猛稽古で有名なこの部屋だが
　さすがに場所中ともなると少しペースダウンしてるようだ。別部屋の桐仁は参加しなかったが
　大峰や寺原、大河内らと何番か胸を合わせて汗を流す。
　取り組みの早い星野や大河内達が国技館に向かったのと入れ替わるように、佑真たちが
　鬼丸を連行して帰って来た。
「あ、来た来た。鬼関の朝帰りですよ。」

火ノ丸は目を丸くして部屋にいる全員を見渡す。小関こそいないが、かつてのダチ高の
メンバー勢ぞろいのその光景に思わず笑みがこぼれる。
「ま、ここまでされて、死にたがりはしないだろ。」
親方の言葉に、蛍は内心やっぱりね、と頷く。今場所の彼の取組がどこか自棄的に見えたのは
間違ってはいなかったようだ。
気を使った桐仁が帰り、入れ替わりで何故かやって来た火ノ丸の今日の対戦相手、大般若を
親方が追い返した後、鬼丸関立ち直りの為の作戦会議が始まった。
「現実的な所で言うと、僕は変化も混ぜるべきだ思っている。」
親方のその言葉に蛍は意図する。親方も現役時代は変化をせず、真っ向勝負を身上と
してきたはずだ。そんな親方率いる部屋で、彼に変化を教えられる人物は自分しかいない、と。
「目線や立ち位置、仕切り中にもいろいろ仕掛けてきますが、付き合ってはいけませんよ。」
皮肉にも今日の相手の大般若は巨体にもかかわらずガンガン変化する力士だ。
してやられない為にも、また今後火ノ丸が変化を使いこなすためにも、蛍が得意としていた
心理戦、目線での誘導、どのタイミングで変化するか、等の事をアドバイスする。
が、その時蛍が一番意識していた人物は、実は火ノ丸では無かった。
実際に変化のパターンを見せるため、彼らの前で何番か大峰と相撲を取ってみることにする。
変化の筋書きを打ち合わせる蛍に、大峰はぶっつけ本番でも大丈夫だと豪語するが、
そんな大峰を蛍がたしなめる。
「ダメだよ、大峰君も場所中でしょ！万に一つもケガは避けなきゃ。」
変化でばったり落ちるパターンはケガをしやすい相撲でもある。

せっかく幕下が射程内に
入っている彼の足を自分が引っ張るわけにはいかない、と。
親方はそんな蛍を見て内心唸る。今日のここまでの彼の稽古も、今までのような
危なっかしさは皆無で、しっかり全身の膂力を一体化させて安定した相撲を取っていた。
そんなケガをしない相撲、地に足の着いた相撲。技量はともかくその心構え、それこそが今の鬼丸に
一番足りないものであったのだ。
立ち合い『蛍火の如し』で下を取った蛍が、すかさずかち上げで大峰の頭を跳ね上げ
スキ間の空いた脇から横に抜け出し、出し投げ気味に『鬼車』で投げる。
おお！と感心する鬼丸、そして親方。
（ウチに入門しないか）
思わずノドまで出かかった言葉を引っ込める親方。
あの鬼丸でさえ大怪我をした。そして彼も鬼丸同様の小兵だ。いくらいいものを
持っているとはいえ、無責任に彼を引き込んで人生を壊してはいけない、選択はあくまで
彼自身の意思で為されるべきだ、と。
―その言葉こそ、蛍が待ちわびている一言であるのに―
その日の取組、火ノ丸は見事に大般若を下す。そこから彼の快進撃が始まった。
草薙を、童子切を、三日月を、そして小関こと太郎太刀を破り、ついには優勝決定戦で
同門の冴ノ山、そしてとうとう力士の頂点、横綱刃皇をも投げ飛ばし、実に１０年ぶりの
日本人幕内最高優勝をその手中に収める。
日本中が相撲ブームに沸く中、蛍は柴木山部屋と、そして大相撲と自分の距離が

開いていくのを痛感する。
ついに親方から一言の勧誘の言葉も無かった、だが無理もない。あそこは火ノ丸さんがいる、
もう親方も僕の事など見る暇はあるまい、と。
自分の進路が見えるかも、と思って訪れた柴木山での数日間で、逆に彼と大相撲の
『縁』を断ち切られた気がしていた。

第１０１番　柚子香は夜に出会う。

『令和ウォッチャー』のオープニングテロップに続き、スタジオ内がＴＶ画面に映し出される。
「こんばんわ。今夜の令和ウォッチャーは『激動の大相撲』と題しまして、今話題の
大相撲を特集してまいります。」
アナウンサーがそう挨拶して、本日のゲストを紹介する。
「今日のお客様は皆さんご存知、元横綱の大和国親方です。」
「どうも、大和国です。」
秋場所の鬼丸の優勝以来、世間は大相撲ブームに沸きに沸いていた。ＴＶは連日
角界の話題で特番が組まれ、有名な力士や角界関係者は引っ張りだこになっていた。
大相撲中継を受け持つ国営放送の特番に比べると、この『令和ウォッチャー』は
民放のややユルい感じの番組なのだが、大和国の出演を取り付けたのはスタッフの
お手柄と言えよう。
もっとも彼だけなら国営放送も他の民放もとっくに放映していた。だが彼を呼ぶ以上
どこか生真面目な番組になりがちなのであるが、この番組はにぎやかし役に、
思い切った共演者を用意していた。
「今日はスタジオに、華やかなお客さんをお呼びしております、こんばんわ。」
「「こんばんわー。」」
挨拶を返したのは大和国に比べ粗末なイスに座る４人の女性、大学生くらいか。
一応は美人の部類に入るだろうが、ただどこかＴＶ映えしないそのルックスは、

いわゆるタレントやアイドルの類では無いのが見て取れる。
「彼女たちは、女子相撲で活躍している選手たちです。」
その紹介に続いて、４人は短く自己紹介していく。
「全日本女子中量級横綱の宮本蜜柑（みやもと　みかん）です。」
「同じく中量級の中瀬杏（なかせ　あんず）です。」
「軽中量級の池西檸檬（いけにし　れもん）でーす。」
「軽量級の堀柚子香（ほり　ゆずか）です。」
「「４人合わせて『女子相撲フルーツカルテット』でーっす。」」
ＴＶの前で座って見ていた蛍が、そのリアクションにずるぅっ！と体を横倒しに滑らせる、
何をやってんの、何を。
完全に名前でウケを取るべく集められた彼女たちだが、それでも女子相撲が脚光を
浴びる機会に少しでも貢献できれば、と出演をＯＫした。
残念ながらプロの芸能人とはほど遠い演技力に痛々しさが目立ってしまうのだが。
が、相撲の取組になると彼女たちは大和国そこのけで、あーでもないこーでもないと
解説を入れまくる。リハーサルでは大和国のお言葉に頷いていればいいだけだと言われていたが
それで大人しく従う彼女たちでは無かった。せっかく女子相撲のレベルの高さをアピールする
絶好の機会なのだから。
時折スタッフが（抑えて、少し黙って）などと小声で支持する音声が入ってしまって
いるのだが、豪傑女子４名はそれをガン無視して現役関取の相撲に注文や解説を述べていく。
肝心の大和国はというと、自分の言いたいことを先取られて言われるので、逆にうんうんと
頷くだけの楽なお仕事になった。それにしても彼女たち、本当に相撲をよく知っている、と

内申唸りながら。

番組のエンディングを見ながら、蛍はあーあ、と頭を抱える。大和国と言えば日本国民の
老若男女問わず人気Ｎｏ１の力士だった人物だ。その彼の発言を遮りまくっての行動に
さぞクレームが殺到するだろうなぁ、と。
ちなみにこの番組の後評価は、批判が４に対し絶賛が５の割合だった。お約束の
知識とおべんちゃらしか言えないアイドル出演の特番よりもウケは良かったくらいだ。
「「お疲れ様でしたー。」」
頭を抱えるスタッフ達にしれっと笑顔で挨拶する４人。そんな彼女たちに大和国が声をかける。
「大したもんだね、実に的確な分析だったよ。やはり実際に相撲を取っている人は違う。」
伝説の横綱にお褒めの言葉を頂き、さすがに嬉々とする彼女たち。
「そういえば・・・」
大和国がアゴに手を当て、首を少しひねって思案た後、口を開く。
「堀君、でしたね。君は確か大太刀高校の出だったね。」
「あ・・・はい！」
名指しされて思わず硬直する柚子香。そういえば彼の息子の草薙関がかつて高校相撲の
インターハイでダチ高に敗れて優勝を逃していたはずだ。
その関係の話だろうと思い込んでいた彼女が聞いたのは、全く予想外の言葉だった。
「三ツ橋蛍君、知ってるよね。彼は大相撲に進まないのかな？」
大和国にとって、彼、三ツ橋蛍がどこかに引っかかる存在だったのはどうしてだろう。
かつて自分が現役の頃『昭和の牛若丸』と呼ばれ、角界を沸かせた異端の相撲を取る

力士にどこか似ていたからだろうか。
それとも、ウチに入門を期待されていた狩谷俊君、ケガで大相撲への道を絶たれていた
その彼とどこか相撲スタイルが似ていたからだろうか。
あるいは、ウチの清心道（澤井璃音）が、時折彼の事を気にかけていたからだろうか。
いや、先場所優勝した鬼丸関が彼と似た体格で、変化『八艘飛び』を見せたから
ウチにもそういう相撲が出来る力士がいれば面白いと思ったのか・・・
あるいは現在十両を駆け上がってきていて、やがて息子と相対するであろう
あの力士と、どこか似た目をしているからだろうか―
その質問に柚子香は答えを詰まらせる。さすがに大和国は彼と自分が恋仲なことまでは
知らないだろうが、まさか今ここで伝説の相撲の神様に彼の事を聞かれるなんて。
「え・・・いえ、どうでしょう?」
そう言って俯いて考え込む。そういえば蛍にそれを聞いたことは無かった、
ただ彼が進学を選んだのは、たぶん・・・元々大相撲を視野に入れていなかったのだろう。
辻先輩も鬼丸の怪我で角界に舵を切るまではそうだった、身の程をわきまえて夢を見なかった、
そう考えるのが妥当だ。
でも、とも思う。今の蛍なら大相撲に進んでも、全く通用しないという事は無いだろう。
さすがに関取（十両以上）までは厳しいかもしれないが、それでも蛍なら国技館を
沸かせる相撲を取れる、あの日以来『ケガをしない相撲』を目指して来た彼なら

角界を渡って行けるのでは、とも思う。
ただ、蛍には何かが足りない。それが何かは分からないけど。
「ああ、すまなかったね。立ち入ったことを聞いたようだ。」
そう言って柚子香の思考を終わらせようとする大和国。
が、柚子香はこの大人物と蛍との繋がりを今自分が握っている事、ここでこのまま別れたら
その縁が完全に切れる事を自覚し、彼を、二人を繋ぎとめようとする。
「あの、一つだけ・・・」
そう呟いた柚子香に大和国はうん?と改めて柚子香に向き直る。
「彼は、相撲にトラウマがあるんです・・・多分、怖いんでしょう。」
期待はしていなかった、決して見つからない、蛍の心の奥底の棘を抜く方法、その答えを。

第１０２番　落ち武者たちの祭典

「よっしゃ、やっと俺等の出番だな。」
「2年待ったよデカい大会、見てろよ。」
意気上がる下山倫平と葉山焔。そんな二人に対して幾分落ち着いている蛍は
その会場の想像以上の規模に少々圧倒されていた。
「公園内の相撲場、って聞いてたけど・・・さすが国技館と並ぶ大学相撲の聖地だね。」
大阪、堺市にある大浜公園相撲場。公園の中にあるその巨大なドームの中には
すでに全国各地から腕に覚えの大学生たちが集結していた。
全国学生相撲選手権大会。大学相撲の団体、個人の頂点を決める大会であり
個人戦優勝者には大相撲転向時の『幕下付け出し資格』、ベスト８までに入賞で
『三段目付け出し資格』が与えられる。
さらにベスト１６まで勝ち残れば年末の全日本選手権への出場権も手に入る、まさに
学生相撲の一大イベントだ。
いよいよ本格的な大会に参加する蛍たち３人。大会初日の今日は個人戦が行われ
明日には先輩達も到着して団体戦が待っている。流星大は昨年以来、部内のレベルが
上がっており、そんな彼らが少しでも多く大会に出られるようにと、団体と個人で
メンバーを分けて参加していた。
そんな流星大の発奮材料となった２年生トリオは個人戦へのメンバーに選ばれた。
自分たちの実力を発揮し、明日に駆け付ける団体組の為にも流星大の強さを

見せつけたいところだ。
「よう三ツ橋、ついに来たか。」
声をかけてきたのは栄華大学相撲部の４年、かつてダチ高でのチームメイト、五條佑真だ。
今や彼も立派なライバルの１人、大学相撲の世界では屈指の突き押し相撲を誇る、名門栄大のエースの１人。
「そういえばレイナさん、ご婚約おめでとうございます。」
その返しにうぐっ、と苦い顔をする佑真。
「・・・ソレを言うなって、まぁ俺も応援してたけどよ、火ノ丸とのコトは・・・」
彼の妹、レイナは大相撲力士、鬼丸国綱との婚約が成立していて、冬には結婚披露宴も
予定されている。幕内優勝をした力士との結婚は喜ばしいが、シスコン兄貴としては
いささか寂しいものがあるのも事実だ。
「ま、俺ももう４年だ。下手すりゃこの大会が最後の公式戦だからな、切り替えていくさ。」
かつて怠惰なヤンキーの生活に埋もれ、火ノ丸によって相撲に引きずり込まれて、そこから
新たな人生を走り出した佑真、だがその相撲道も間もなく終わる。
医者を志す彼にとって、
白衣を着たその時から相撲の真剣勝負とは縁が切れてしまうだろう。
最後の大舞台に気合いが入るのも無理からぬことだ。
「あ、そうだ三ツ橋。お前知ってるか？お前もそうだが何人か『落ち武者』って呼ばれてるぜ。」
え？と目を丸くして返す蛍。その横では倫平と焔が、ああ、という顔で頷く。
「そういやお前も、件の国宝候補だったよな。」
２年前、高校相撲において『国宝候補』と呼ばれ、雑誌にピックアッ

プされた選手が
２０名以上存在した。本来将来の横綱候補の期待を乗せた国宝の銘、その予備軍ともいえる
存在だった国宝候補たちも、当然世間からは角界入りをして大暴れをするものと期待されていた。
だが、実際にその中から大相撲に進んだ者はわずかだった。何人かは昨年のこの大会で
１年生ながら好成績を収めた者もいたが、三段目付け出し資格を得てもその資格を行使して
角界入りする選手はいなかった。
もっともそれは例年のことではある。高校生に比べると大学生は付け出し資格の取得が
はるかに容易であるにもかかわらず、大学相撲から大相撲に転向する人材はまれである。
その原因はやはり角界の封建的な風習にある。十両に上がるまでは部屋での団体生活で
プライバシーも自由も無い、番付が上の者に家来のように扱われる過酷な世界で、
得られる給金はわずか、しかも結婚すら出来ないのだ。
大学生ともなれば誰もが将来の進路に目を向ける。一流企業を目指す者、恋人との
ゴールインに心躍らせる者、新たに商売をはじめようとする者など、将来の青写真を描く時期だ。
そんなキャンパスメイトを目にしていたら、とても過酷な角界へ飛び込む気にはなれない者が
多くても無理のない事だ。ましてや親の了解という難関もあれば猶更である。
だが、世間は酷なものだ。かつて国宝候補と呼ばれ角界での活躍を期待されながら、
大学や社会人で燻っている選手は裏で『落ち武者』という陰口を呼ばれるようになっていた。

「勝手な話だなぁ、頼んでつけてもらったわけでも無いのに。」
そう返す蛍に、佑真はまぁそうなんだがな、と前置きしてこう語る。
「高校相撲ってな、例えば高校野球の様に『地元の代表』みたいなイメージがあるんだよ。」
大相撲力士が多い都道府県、例えば石川や青森、埼玉、そして鬼丸や鬼切、太郎太刀のいる
千葉などはまだいいのだが、幕内で活躍する力士のいない都道府県では彼らは『地元期待の星』
だった。にもかかわらず一歩が踏み込めない彼らを世間は『不甲斐無い』『期待外れ』と
ばっさり斬ってしまっていたのだ。
「変な話して悪かったな、お前はお前だ、気にするな。」
ただし当たったら手加減しないぜ、と付け足して栄大の選手たちの所に帰る佑真。
そんな彼を見送った後、蛍は会場内の選手たちの顔を流し見る。なるほど確かに2年前、
自分同様『国宝候補』の名を冠された選手たちがちらほら見える。
山梨の浦川、静岡の今井、三重の三苫、大阪の桑原、山口の白石、そして・・・
「おう三ツ橋、お前も来たかぁ！」
いきなり背中から蛍の両肩をがっちり掴んだ、そのよく通る声を蛍は覚えている。
「徳島の菅さん、来てたんですね。」
蛍の後輩、赤池の田舎の先輩。現、徳島剣大学の菅正一。かつては国宝候補『蜂須賀正垣』
の異名を取った、乾坤一擲の力出しを得意とする選手。
「そいつも落ち武者か？」
倫平のその一言に菅はにっ、という顔を向け、返す。
「こっから名刀に返り咲くんや、今日ここでなぁ。」
びっ！と親指で地面を差す。彼は昨年ベスト8まで進んだが、その成績に納得がいかずに

角界入りを保留していた。行くなら学生横綱になってからじゃ！と。

「お前はどんなんや？三ツ橋。大相撲いかんのか？」

その質問に蛍は答えを返せなかった。沈黙を返事と受け取った菅は、そうか、と嘆いて

蛍たちのもとを去って行った。

「ま、先の事は別の話だ。今はこの大会に集中しよう。」

焔のその提案に、蛍と倫平はそうだな、と頷く。大学に入って初めての公式戦のこの場で

先の事など考える暇はない、今は自分の一番一番に集中しよう、と。

かくして始まった個人戦。まずはリーグ戦で3番取り、2勝した者がベスト32に残り

決勝トーナメント進出を戦うことになる。

蛍は初戦、島根睦大の大垣を潜る相撲からの足技で倒すと、2戦目には富山燐大の高山を

『蛍火の如し』からの出し投げで崩し、足取りからの内無双で尻もちをつかせる。

体格で劣る蛍だが、その動きの速さと技の多彩さ、そして『ケガをしない相撲』で得た

膂力を十全に使い切る相撲で相手を圧倒してみせた。

倫平は1勝1敗で迎えた3戦目、かつての国宝候補、萩大の白石に差し手争いで追い込まれ

寄り切られて惜しくも予選突破はならなかった。

焔は組み合わせに恵まれなかった。初戦でいきなり栄大の五條佑真と当たった彼は、

壮絶な突っ張り合いの末、ついに脳震盪を起こして土俵にヒザを付く。当てる数では互角だったが、

そうなるとやはり体格差が勝敗を決めてしまった。2戦目もそのダメージが大きかったため、

いい所なく敗れる。

「頼むぜ三ツ橋、勝ち進めよ！」

イスに座って悲観にくれる焔の横で倫平がそう檄を飛ばす。その様に闘志を燃やした蛍は
決勝トーナメント1回戦、本栖大の浦川、かつての国宝候補『星月夜』と対戦する。
立ち合い突っ張りを放ち、目線の誘導から変化し、横から激突して『蛍火の如し・潜』で
相手の横から潜り込むと、そのまま半身の相手を電車道で寄り切った。これでベスト16！
あとひとつ勝てばベスト8、そして三段目の付け出し資格が手に入るのだ。だが・・・
―2回戦。東、流山星稜、三ツ橋。西、徳島剣、菅！―
筋肉質なその体に、乾坤一擲の剛腕を持つ菅は、かつてのダチ高で言うなら
陽川の体格と赤池の一発を兼ね備えた、まさに蛍に対して天敵中の天敵ともいえる存在だった。
立ち合いから『蛍火の如し』でかき回し、小さい変化や出し投げを駆使して
相手に捕まらないように動き回った果てに、十字かち上げから相手の懐に潜り込み、
両下手をしっかりと取る事に成功する。
「おっしゃ、潜った！」
「行っけえぇぇぇ！」
意気上がる倫平たちの期待は、次の瞬間絶望に変わる。
「けえぇぇらあぁぁぁぁっ!!!」
なんと菅は蛍の上半身を上から抱き抱えたまま気合一閃、まるでプロレスの
ブレーンバスターの様に高々と蛍を持ち上げたのだ。
その瞬間に勝負は決した、蛍は素早く『ケガをしないための行動』にスイッチを切り替える。
投げ捨てられる方向を察知し、丸まって地面に着地して受け身を取る、なんとか

打ち身だけで済んだようだ。

―西、菅の勝ち―

蛍の大学での初挑戦はこうして終わった。悔しいが完全に力負けだった、自分はまだまだだ。

大会は結局菅の優勝に終わる。彼は優勝インタビューで『幕下付け出し資格を使って大相撲に行く』

と公言する。『落ち武者』などと陰口をたたいていた者たちもこれには黙るしかないだろう。

試合後、帰り支度をする蛍たちの視界に、ひとりの選手と、おそらくはその父親が映った。

大阪の桑原選手。彼もまた国宝候補から落ち武者という不名誉な評価をされた一人。

蛍と同じくベスト16止まりで、付け出し資格を獲得することは叶わなかった。

彼は涙を流して父親らしき人物に懇願していた、大相撲に行きたい、横綱に成りたい、と。

だがその人物は決して首を縦に振らなかった。付け出し資格獲得が条件の約束だったはず、

いつまでも夢を見るのは止めろ、と。

夢を絶たれ、肩を落とし、背中を丸めて泣きながら去っていく桑原。

そんな彼を見送りながら

蛍は自分に足りない物に気付く。

横綱になりたい、それが桑原の夢。それがあったから彼は頑張り、敗れては涙を流す。

―目標―

何故大相撲を目指すのか。

何故相撲を続けるのか。

僕の目指す所は、一体何処なのか。

何を夢見て、何を成そうとしているのか。

そんな当たり前のお題目が、今の蛍には無かった。

「（ああ、僕はやっぱり、だめだ・・・）」
空虚を感じていた。大相撲の文字が白い世界に溶け、消えて行くのを実感した。

「三ツ橋君、ちょっといいかな?」
そんな彼を現実に引き戻したのは、日本人なら誰もが知る、相撲の『神様』。

第１０３番　道の先の宝物

「うぇ・・・や、大和国！」
「（うわ、マジか・・・）」
倫平と焔が思わず硬直する。今、自分たちの方にまっすぐ歩いて来ているのは
まぎれもなくあの元横綱、大和国だ。
確かにこの大きな大学相撲の会場で、親方や現役力士などが生徒をスカウトするのは
珍しい光景ではない。だがまさかここ２０年の角界関係者の中でも一番の有名人が
自分達しかいないこの空間にやって来るとは・・・まさか!?
「下山倫平ッス！」
「葉山焔です！」
カチコチに硬直して大和国に一礼する二人。そんな彼らを見て大和国はこう返す。
「うむ、お疲れ様。流星大もなかなか強くなったね。」
「はいっ！」
「頑張りたまえ。それで、ちょっとそちらの三ツ橋君に話があるのだが、いいかな?」
「あ、はい、どうぞ。」
一歩引く二人の横を通過する大和国を横目で眺めつつ、『ですよねー』とため息をつく二人。
と、その大和国の後をトコトコついて行く女性が一人。あれ、どこかで見たような・・・
「三ツ橋君、ちょっといいかな?」
自分に、相撲を取る理由がない事に呆然としていた蛍が、その一言で我に返る。
振り向いて視界に入ったのは、知っている顔、ついこの間ＴＶで見た二人。
堀柚子香と、『あの』大和国親方。

「あ・・・どうも。」
「うむ。」
軽く会釈する両者を見て、柚子香は呆れ顔でこう語る。
「伝説の横綱と会ったっていうのに、なにその塩反応？」
「あ、いや、驚いてるよ。ただ感情の反応が追いつかないだけで・・・」
あわてて手をひらひらさせてあたふたする蛍を、大和国は構わないよ、とたしなめる。
「先日のＴＶではゆず・・・後輩がお世話になりました。」
「いや、こちらこそ有意義な時間を過ごさせてもらったよ。今日も彼女に我儘を言って
君に引き合わせてもらったんだ。」
その言葉で、大和国がわざわざ蛍に話をしに来たと確信を得る。しかしどうして？
５年前、ダチ高が全国制覇した際、引き上げる通路で蛍は大和国に会っている。しかしその時は
大将の火ノ丸と話をしただけで、蛍との接点は全く無かったはずだ。
それに、自分に一番近い大相撲の部屋は柴木山部屋だ。あそこの親方と交流のある大和国が
自分をスカウトするとはとても思えない。なら一体・・・
大和国はひとつ大きく深呼吸をして、蛍の目を見てこう言い放つ、予想外の、それでもどこかで『まさか』と思っていたその言葉を。
「三ツ橋君、ウチの部屋に入門する気はないかね。」
呆然とした表情の蛍の後ろで、倫平と焔が拳をガツンと合わせてガッツポーズする、凄ぇ！
「・・・僕、ですか？どうして。」
その反応に、おいおい即ＯＫだろこんなの、という顔をする２人、いや柚子香も含めて３人。
「理由は・・・そうだな。色々あるが、一番は・・・大相撲で活躍する君を見てみたいんだよ。」
え、という顔をする蛍に、大和国はふっ、と笑って話を続ける。

「小さい者が、大男の集う土俵で大活躍する、こんな痛快な光景を柴木山さんにだけ
独占させるのは悔しくてね。」
先日の大相撲、幕内最軽量の鬼丸が並み居る大型力士を圧倒し優勝したのは記憶に新しい。
彼は蛍に第二の火ノ丸に、大和国部屋の鬼丸になれと言っているのか。
「無論本音を言えば下心もあるよ。鬼丸関対策に小兵力士がいたら助かるし、ウチに来て欲しかった
他の小兵力士の代わりになってくれれば、という思いもある。」
聞かれたら気を悪くするような事情を包み隠さず話す大和国。こんな所も彼が皆から尊敬され
愛される大横綱である理由だ。
「君の相撲は狩谷君に似ている。加えて今日の最後の一番、よく受け身を取ったものだ。」
「でも、負けちゃいました、勝てないと・・・」
「無理をして勝ちに行って、ケガで全てを失う力士は大勢いる。でも君はケガの怖さを
よく分かっている、堀君に聞いた通りにね。」
言って柚子香の方をちらりと見る親方。蛍はこの邂逅が柚子香の仕業だな、と察し、
彼女に少し非難じみた目線を向け、当の柚子香はてへっ、と舌を出して誤魔化す。
「光栄ですし、いい話・・・だと思います。」
目線を逸らし、下を向いてそう言った後、親方の目を見返してこう続ける。
「でも、今の僕には足りない物があります、一番大事なものが。」
その言葉に一同が、ん?という顔をする。足りない物とは・・・?
「『目標』です。夢と言ってもいいかもしれません。自分は横綱も、幕内優勝も夢に
描いたことはありませんでした。」

モチベーションといえばさらに具体的だろうか。そう、蛍には目指すものが無かったことを
ほんのついさっき思い知ったばかりだ。自分は何故相撲を取っている？ケガをする危険まで冒して。
健康のため？体を鍛えるため？それともただの惰性で？いや、もしかすると、かつての―
「なんとも不思議なものだな、私は今日、それを君に提示しに来たのだよ。」
はい？という顔をする蛍。こんな話はありえない！大相撲の伝説が、大学相撲でも埋もれてる
僕にスカウトはおろか目標まで提示しようというのだから。
「君は、かつて全国優勝『させてもらった』事に不満があるんだね。」
胸を射抜く親方の言葉にはっ！となる。そう、蛍の心の奥底に刺さった棘。
―全国制覇したチームでの公式戦全敗―
忘れようとして忘れられるものでは無い。火ノ丸や小関はもちろん、初心者だった國崎や
五條、そして肺に疾患がある桐仁すらも戦いに勝利し、優勝に貢献して勝利に酔いしれる
権利を得ていた。
自分だけがその資格が無かった。全ての試合で黒星を喫し、ひたすらチームの足を
引っ張り続けた。それは蛍がこの先、一生引きずっていく黒い後悔。
「どうして・・・それを。」
そう発して、その原因が一つしかないことに気付く。傍らにいる少女、蛍の心の闇を
汲んでくれる存在、恋人、堀柚子香。
でもこれは許せない、個人的な心の闇を他人にバラすなんて、ましてやこんな大人物に！
瞬間、険しくなった蛍の顔を察して大和国が両手でまぁまぁ、と

ジェスチャーする。
「私が堀君に聞いたんだよ、いささか誘導尋問のような体でね、彼女を責めないで欲しい。」
ふぅっ、と息を吐いて怒りを収める蛍。やれやれ、という顔を作って心をなだめる。
「お詫びと言っては何だが、その不満を晴らす方法を教えよう。」
その言葉に蛍は背筋に何かが走ったような衝撃を感じた。他人に何がわかる！と言うには
目の前の人物は大きすぎたから。ひょっとして、本当に？そんな方法が、あるのか・・・？
「君は団体戦で負け続けて、チームの足を引っ張ってきた存在だった。だったら・・・」
穏やかな笑顔で、静かな目で、その大横綱はこう続けた。
―団体戦で優勝に一番貢献した選手、『彼』に勝ってみせることだ―
潮火ノ丸、四股名『鬼丸国綱』
ダチ高ＩＨ全国制覇の原動力であり、団体戦一度も敗北しなかった男。蛍の黒星を白星で
塗り替え続け、ついに日本一まで引っ張って行った男。
彼は勝った、蛍は負けた。予選から全国決勝まで、ずっと。
そんな彼を蛍が倒す、それが蛍にとってどれほどの深い意味があるのか、考えもしなかった。
先日、鬼丸は１０年間誰も成し得なかった、日本人の幕内最高優勝を成し遂げた。
今の蛍にとって、かつてすら比較にならない程の雲の上の存在。そんな彼を倒すことが
どれほど困難な道なのか、それはありありと想像できる。不可能と断じてしまえば
何一つ後悔しない程に、今の彼と蛍の距離は遠すぎた。
でも、だからこそ。
それを成せば、蛍の心の棘は抜けるだろう。かつて足を引っ張り続け、迷惑をかけて来た

火ノ丸を倒し、自分が本当に強くなったことを証明できれば、かつての弱い自分を覆すことが―

「どうだ、痛快な話だろう。」

そうだ、かつて全国制覇の後、一番だけ火ノ丸さんと真剣勝負した、あの送別相撲。

あの時火ノ丸さんに投げられて僕は泣いた。どうして?勝てるわけ無いのは分かっていたのに。

でも、今ならはっきりわかる。あの時はチャンスだったんだ、自分の情けない傷跡を消す

その機を逃し、自分が強くなったことを証明できなかった、だから悔しかったんだ。

「僭越ながら任せてほしい、私に身を預けてくれたなら、必ず鬼丸関の前に君を立たせて見せよう。」

どんなに年月を重ねても、どれほど勝利しても、決して抜けないと思っていた心の棘。

それを抜く方法は極めて困難、でも、方法がある。か弱い光の差す一筋の光明が。

だったら、その細い糸にすがらない選択肢は無い。なぁ、そうだろ?三ツ橋蛍。

彼は目を閉じて、かつて見た心の中の自分と対話する。フルートを持った、過去の自分を

自虐するもうひとりの蛍を。

細く、小さく、ひ弱なその彼は、全身を震わせて歓喜していた。そんなの乗るしか

ないじゃないか!

「大和国・・・親方。」

それ以上は言葉が出ない。歓喜と、感動と、そして責任の重さに息が詰まる。

だが意志は伝わるほど伝わったようだ。蛍自身気付いてはいないが、その顔はくしゃくしゃに歪み

頬には熱い物があふれ流れていたから。

「私自身も5年前には君は見ていなかったよ。あの駿海さんや長門親方も君には声を
かけなかっただろう、だからこそ君の下克上には価値があるんだ。」
腰を上げ、背中を見せた大和国は最後にこう語る。
「付け出し資格を持ってきたまえ、それが君に対する私からの宿題だ。」

「こりゃ冬の全日本、絶対勝たないとな！」
「たっぷりとしごいてやっから覚悟しろよ。」
嬉々として蛍にまとわりつく倫平と焔。蛍は腕で涙をぬぐうと、うん、頼む！と
2人に頭を下げる。
「私に何か言う事は？」
微笑んでそう蛍に告げる柚子香。彼女のしたことは確かにお節介だが、それが最高の結論を
呼び込んで見せたのだ、怒る事などできようか。
少し考え込んだ後、蛍はふふん、と笑ってこう仕返しをする。
「いいの？相撲部屋に入ったら基本、十両まで恋愛禁止だよ、結婚も出来ないし。」
結婚と言うパワーワード、事実上のプロポーズにぼふっ！と顔を赤らめる柚子香。
「え、ちょ、ちょっと・・・バカ！」
ひゅーひゅーとはやし立てる倫平たちの周囲を追いかけっこする二人、
柚子香は追いかけながら、顔がニヤけるのを抑えられないでいた。

（私ね、お姉ちゃんは好きだし尊敬してる。でも、ひとつだけ納得いかないことがあるの。
なんで火ノ丸さんをレイナさんに譲っちゃったんだろう、って。私は絶対譲らないよ。）
（だから・・・待つよ蛍、たとえ何年でも！）

第１０４番　三ツ橋蛍と五條佑真

「そりゃいい、頑張れよ蛍。」
「楽しみだわー、蛍がＴＶに映るのね♪」
・・・両親の説得、１秒で終了。
蛍の家は元々そこそこ裕福だった上に、しかも年の離れた長男が会社の役員まで
昇りつめていて家計が安定していたこともあり、坊ちゃん扱いの蛍の進路にあまり
こだわりは無かった。
むしろ一族が全て文科系、学問系だった三ツ橋家にとって、スポーツの道を志す
蛍の選択は期待や希望を持って受け入れられた。

「大学中退するってのに、軽すぎるだろウチの両親。」
「でもまぁ良かったじゃんか、これであとは今日勝つだけだな。」
倫平の言葉にまぁね、と頷く蛍。いよいよアマチュア相撲の祭典、全日本選手権が幕を開ける。
倫平と焔は先の学生選手権で予選落ちしたため出場資格を得られず、蛍の付き添いとして
ここ国技館に来ていた。
大学生、実業団の強豪選手、そして今年の高校横綱として選抜された栄大付属の久我、
そんな強者たちが鎬を削る大会。
蛍の目標は大和国親方との約束である付け出し資格、ベスト８入りである。
決して楽な条件ではないが、それでも角界入りしていつかはあの鬼丸との対戦を目指す蛍として
負けられない戦いであることに違いは無い。
開会式が終わり、いよいよ個人リーグ戦が開始される。学生選手権と同じく３戦して２勝を

あげられれば決勝トーナメントに進むことが出来る、さぁ決戦だ！
―次。東、帝天大、仰木。西、流山星稜大、三ツ橋！―
いきなり相撲強豪大学、帝天大の選手との対戦。だが臆するわけにはいかない、彼が目指す
大相撲の世界の住人が彼より弱いわけはない、そこで勝つためにも！
―はっきよい―
立ち合い胸で受ける仰木。彼は基本左四つ、ならばと『蛍火の如し』で左に変化して
相手の右手を取って『とったり』風にねじ伏せに行く。仰木はその動きに対応して体を回し
小兵の蛍に対してあくまで正対して組み付こうとする。
ここで蛍はあえて後方にバックステップする。相手の正面から組もうとしたその呼吸を
奇麗に外して相手を前方に崩す、一歩踏み出した仰木は踏ん張り体を残して耐え、
勢いのままに追撃して変化されたら危険だとその場で停止する。
次の瞬間、助走を取った蛍が低空のぶちかましを見舞う。初手の『蛍火の如し』を
警戒していた仰木は、この小兵のまさかの正面衝突に体を浮かされる。
あとは一気だった。電車道で土俵際まで追い詰めると、すかさず脇から抜け出して
出し投げ気味の下手投げにばったりと手を付く仰木、まず1勝！
―次。東、流山星稜大、三ツ橋。西、隠岐商事、榎木―
相撲の神様は角界入りへ楽をさせる気は全くなさそうだ。かつて高校時代、鳥取白楼で
主将を務め全国3位までチームを引っ張って行った合気道の使い手、榎木慎太郎が次戦の相手。
―はっきよい―
小兵同士の立ち合いからの体さばき、前捌き合戦となったこの1戦

は、蛍の
『ケガをしない相撲』が存分に生きた。相手の腕を取って逆間接を決める合気道の動きに対し、
蛍が心がけて来た体を外に開かない相撲は、結果的に榎木の戦法を防いでいく。
だが蛍もなかなかマワシが取れない、さすがに前捌きに関しては榎木の方が一枚上だ。
蛍の手首をつかんで巧みにこちらの動きを外してくる、押し合いながらも両者、決定的な
形を作れないでいた。
蛍はここで思い切った作戦に出る、組手不十分のまま相手に内掛けを仕掛ける。
待ってましたとばかりに榎木は蛍の足首を掴もうとする、かつて高校時代に小関を破った
『裾取り（足首取り）』を狙う、だがその刹那、榎木の手首を逆に蛍が掴み取る。
「しまった、狙われた！」
榎木が嘆くがもう遅い、その腕を巻き込んですくい投げ＋掛け投げにいく蛍、
なす術もなく一回転して背中から落ちる榎木。
かつて荒木の得意としていた『天地返し』。秋以降蛍は度々荒木の元を訪れ、この技を
モノにすべく稽古をつけてもらっていた、小兵が大型選手を投げるのにこういった3点投げは
非常に有効だ。
「おう、あの榎木を投げやがったか。」
観客席で荒木がそう呟く。この技の真骨頂はいかに相手の手首をいい体制で掴むかが
カギとなるのだが、かつて自分との対戦で『根太起』に来たその瞬間を狙って掴んだ俺の
トレースのような掴み方に思わず関心する。

「これで予選は突破だが・・・プロに行くなら次の試合こそ大事だぜ、蛍丸！」

―次、東、栄華大学、五條。西、流山星稜大、三ツ橋。―

予選最後はなんとかつてのチームメイト、五條佑真との一番。

変化を使う蛍にとって、離れて突き放しに来る五條のような相手は相口の悪い力士だ。

「佑真ーっ！頑張れー!!」

「ユーマさんファイッ！」

妹のレイナが、かつての五條の子分たちが声を張り上げる。佑真はここまで1勝1敗で、

蛍との1戦に決勝トーナメント進出がかかっている、彼にとっても負けられない一番だ。

「悪いが勝たせてもらうぜ、三ツ橋！」

拳と掌をばちっ！と合わせて蛍を睨む佑真。蛍は無言のまま、そのらんらんとした眼の光を返す。

土俵で対峙する二人を見ながら、ユーマ軍団の1人がしみじみと語る。

「俺さ、高校の時に、まだ相撲やってない三ツ橋見たことあるんだよ。」

なよっとした体、吹奏楽部の女子と一緒にいた彼を見た感想は『女みたいな野郎』

でしかなかった。それが今、ダチ高最強として君臨したユーマさんとガチで相対してるなんて、

あの頃の自分に言っても絶対に信じないだろう、人ってホント変わるよな、と。

―はっきよい！―

佑真が張る、蛍が返す、まさかの激しいど突き合いに会場が沸く。

「（野郎！まるで火ノ丸の突きじゃねぇか、上手くなりやがって！）」

打ち合いながら佑真がほくそ笑む。かつては俺もこいつもダチ高のお荷物的な存在だった。

それが今、この大舞台で真剣勝負をやっている、戦いながら感慨に浸る佑真。

蛍にとっては違っていた。佑真はかつてあのバトムンフをも破った、全国優勝に
大いに貢献したチームメイトだ、全敗してチームの足を引っ張ってきた自分とは違う。
だからこそ勝ちたい！自分の目標である火ノ丸さんを倒す事、それが禊である蛍にとって
この五条戦はその前哨戦とでも言うべき一番なのだ、負けられない、この人にも
自分が強くなったことを見せる、絶対に勝つ！
「くっ、やはり相手が一枚上手か！」
徐々に押し込まれる展開に焔が嘆く。秋以降彼は蛍に自分の突き押しを指導しており、
格段に威力は上がっているハズなのだが、それでも体格で勝り、技術でも長年の空手の経験で
上回る相手が蛍を追い詰めていく。
俵に足がかかったその瞬間、蛍は目線でフェイントを入れ、佑真の突きを外しにかかる。
「引っかかるかよ！」
佑真の左の突きが蛍の顔面を直撃する、半身になりながらのけ反る蛍。倫平と焔も
さすがにマズい！と顔をしかめる。
佑真に油断は無い、ここまで強くなった三ツ橋にどうして手加減などできようか。
ましてや自分にとっては公式戦最後かもしれないこの大会、この一番に勝たないと
俺の相撲人生はひとつの終わりを迎えるんだ、行くぜ三ツ橋！
佑真はのけ反った蛍の前に出ている右足に、外から自分の左足を引っかける。
それをフックにして自分の体を引き付けて、体重を乗せた右の渾身の突きを放つ。
―掛け突き、破城掌―

佑真の突き出された右腕は、蛍の両腕によって上に跳ね上げられていた。
「十字かち上げで、捌いた！」
体が前に泳いだ佑真が心で毒づく、あの目線の誘導もフェイントかよ！と。
だが今の俺は組んでも弱くはねぇぜ、と上から覆い被さるように組み付く佑真。
あとは腰を割り、目の前の土俵外に寄り切るだけだ！
「・・・え？」
腰が割れない。先ほど相手に引っ掛けた左足が抜けていない、それどころか
さらに深々とフックされ、左足をヒザから相手の右足にロックされている、
この体勢は・・・マズいっ！
蛍は待っていた。五條さんの一番の得意技、この『掛け突き、破城掌』を。
突き押し相撲の五條さんには潜る相撲も、そして足技も遠すぎて届かない。そんな相手が
わざわざ自分の足に足を絡めてくれるこの必殺技、もし突きをすかしてしまえば絶好の体勢を
作ることが出来る、今度は自分の必殺技の番だ！
―自足取り内掛け『根太起』！―
手と足で佑真の左足を土俵から引き抜く。それでも懸命にこらえようとする佑真を
左からのすくい投げ気味に投げ倒して見せた。
―西、三ツ橋の勝ち―
佑真の手を取り、引き上げて立ち上がらせる蛍。佑真はそんな蛍にこう語る。
「聞いたぜ。お前、大相撲に行くんだってな。」
頷く蛍にふぅ、と息をついて実感する、俺が負けたのは何よりも『心』、目指す所の違い。

それがそのまま結果に出たのがこの一番だったんだな、と。
「行ってこい。」
そう告げて土俵を降りる佑真。自分の相撲、その最後の真剣勝負が今、終わった。
悔いが無いわけじゃない、だがやるだけはやった、楽しかったぜ、相撲。
「佑真、お疲れ様。」
観客席からレイナがそうこぼす。鬼丸との結婚を間近に控えた彼女は、佑真もまた
自分の道を歩んでいく、その区切りの一番を見届けて涙する。
天を仰いでいるのは佑真と同じ栄大の相撲部の二人、マネージャーの狩谷俊と、
肩から胴に大きなサポーターを巻いた強面の大男。
「佑真さん負けたか・・・さすがだな三ツ橋。」
「つか、あの三ツ橋がなぁ、高校の時の面影のカケラも無ぇ。」
金盛剛。
彼もまた付け出し資格獲得に角界入りを賭ける、この大会で人生の命運を決する男。

第１０５番　蛍丸と七星剣と金剛力

「（なんだぁそりゃあぁぁぁっ！）」

土俵上、本年度高校横綱、国宝『七星剣』こと久我北斗が心で絶叫し、国技館の観客がその光景に思わず絶句する。

叩き込みに崩れ、前傾姿勢になっている彼のその背中の上、そこをなんと前転で

転がっているのは対戦相手の三ツ橋蛍だ。

およそ相撲と言う競技でありえないその絵、そこに至る過程を久我は絶望的な思いで回顧する。

全日本選手権の決勝トーナメント1回戦、相手があの大太刀高校出身の三ツ橋と聞いて

久我は大いに意気上がっていた。今年のＩＨ、唯一黒星を付けられた学校の出身者であり、

２年前には自分も所属する栄大付属を団体戦で敗北せしめた時の部長でもある男。

既に相撲部屋への入門が決まっている久我、手土産にアマ横綱の称号と共に

大太刀出身者に一矢報いるチャンスに熱が籠る。

立ち合い、久我はＩＨの再現を警戒する。大太刀の柳沢に頭をみぞおちにめり込まされ、

内臓を直接押されながら両ハズを押し上げられ、得意の剛腕を封じられて寄り切られた。

コイツは柳沢よりずっと小さいが、確か潜る相撲を使っていたハズ、同じ戦法を狙って来る

可能性を警戒して低く突進した。

―ゴッ！―

『蛍火の如し・潜』で頭をはね上げられた彼は、ならばと下に構えていた両腕で相手を

ハネ上げに行こうとする。
だがその刹那、間髪入れずの十字かち上げで逆に下から上半身を突き上げられる久我。
そうはいくか、と出しかけた手を戻し、相手の体を諸手で止めて潜り込みをガードしようとする。
次の瞬間、相手は後ろに飛んでいた、寄りかかる相手を失ったことで体が前に泳ぐ。
覚えている、覚えているぞ蛍丸！この連携はかつてＩＨで立花寺の黒田相手に見せた、
突き上げてから叩き込みつつ『八艘飛び』で飛び越す流れ。俺がそれを知らないと思うか、
対策が無いと思うのか！
左右どちらに飛んでも俺の腕でとっ捕まえて薙ぎ倒す、あの幸田とかいう奴と同じにな!!
前に泳いだ久我の肩に両手を添えた三ツ橋は、そのまま久我を下方向に押し付け、その反動で
宙に舞う、ここまでは予想通りだった。ただひとつの事を除いて。
三ツ橋蛍は、何と久我の真上に宙返りしながら飛ぶと、そのまま首から相手の背中に着地し
久我の背中をマットのように前転して転がって見せたのだ。
八艘飛びでも普通は左右どちらかに飛ぶものだ、いくら相手の肩に手を置き、跳び箱みたいに
飛び上がれたとしても、相手の真上に飛び、その背中を転がるなど考えもしないだろう。
相手を捕まえようとした両手は空を切り、前に流れた体制の状態で８５ｋｇの三ツ橋の体重が
背中の上から圧し掛かる。
「（なんだぁそりゃあぁぁぁっ！）」
―叩き込み『大引波・海猿（おおうねり・うみざる）！』―
背中を前転し終えた蛍が腰を割って地面に着地し、すかさず久我の方に向き直った時、

すでに相手は四つん這いになって土俵に落ちていた。
「ひ・・・東、三ツ橋の勝ち！」
行司の判定と共に大いに沸き立つ国技館。かつての三ツ橋を知る者にとって、今日ここまでの
彼の相撲はどこか正統派なものが感じられていた。それだけにかつての彼を彷彿とさせる
この奇想天外な戦い方に、やっぱこいつとんでもない！とヤンヤの声を上げる。
「おお、マジで決めやがった。」
「ほんっとにこれっきりの作戦だよな、アレ。」
倫平と焔が拍手しながらそう呟く。
この全日本に出る選手なら誰もがあの高校横綱、国宝『七星剣』久我の対策は
考えてはいるだろう、通用するかは別にして。
だが蛍が彼らに相談したこのあまりにアクロバティックな戦法に、さすがに「正気か？」な
感想しか出てこなかったものだ。
「久我君は膂力も腕力もケタ外れだよ、横に動いてもあの剛腕で捕まってしまう、つまり
横の変化は使えないんだ。」
ならば真上に飛ぶしかない、と考えた蛍は、その姿勢作りや状況の持っていき方を試行錯誤する。
久我に体格の似た倫平を相手に色々試した結果、かつての黒田との一番で使った『大引波』が
一番応用が利く事を確信し、この連携を何度も煮詰め、そして今日の一番に臨んだのだ。
久我はこの無茶な取り口にもかかわらず、自分が四つん這いで振り向いた時にはすでに
迎撃態勢を取っていたことで、それが即興技では無く磨きに磨いた練度ある技であることを知る。
礼をして土俵を降りる。見事にしてやられた、この借りは必ず大相

撲で返す！と誓う。

「・・・アレに勝たなきゃいけないんだよな、俺。」

そう嘆いたのは栄華大学の金盛だ。彼も1回戦を突破し、この一番の勝者と対戦する事に

なっていた。両親に大相撲入りを反対され、どうしてもというなら付け出し資格を獲得してこいと

言われていた彼にとって、次の一番はまさにベスト8入りを賭けた天王山なのだ。

久我と当たるかもしれないことに脅威を感じていたが、まさか三ツ橋の方が来るとは。

そしてその一番をイメージした時、実は久我と対戦したほうが遥かにマシだったと

思わざるを得ない。

いかに強敵でも、普通の相撲を取る相手なら自分も普通に相撲を取ればそれでいい。

だがこの相手に自分は一体どういう相撲を取ればいい？どんな戦いをイメージして

土俵に上がり、どういう相撲を想定して立ち合えばいいのかが全く見えてこない。

―東、栄華大、金盛。西、流山流星大、三ツ橋！―

いよいよ付け出し資格習得のためのベスト8を賭けた一番。

大和国親方に宿題として出された資格を取るために負けられない蛍。

大相撲へ進むのにどうしても資格が欲しい金盛、共に負けるわけにはいかない。

準国宝『金剛力』ｖｓ国宝候補『蛍丸』。先に進むのは果たしてどちらか。

「「つよし先生ー、頑張ってーっ！」」

会場の一角から若い声援が飛ぶ。声のする先に居たのは１５人ほどの中学生。

つい先月まで金盛が教育実習として出向いていた学校の生徒たちだ。

彼らを仰ぎ見て金盛はふっ、と力が抜ける。そうだ、俺は俺の相撲を取ればいい、

相手が誰だろうと、彼らに恥ずかしくない相撲を取るんだ。

―手をついて―

金剛力が仁王の様な目で相手を睨む、蛍もまたらんらんとしたその目で真っ向から

視線を返す。

「(お前と真剣勝負をする日が来るなんてな。)」

かつてモヤシみてぇな奴と一蹴し、タイヤすら持ち上げられなかった三ツ橋が今、

自分の角界入りの最後の関門として立ちはだかっている、だが思いは一つ、俺は勝つ!

―はっきよい!―

ガッツウゥン!両者頭から激突、真っ向勝負からのけ反ったのは、なんと金盛の方だ!

蛍は『蛍火の如し』のずらしを使いつつも、左右にも下にも飛ばずにそのまま肩から金盛を

突き上げたのだ。

「(これは・・・鬼丸の立ち合い!)」

蛍火の如しは元々、鬼丸の『火の如し』に変化をミックスさせた立ち合いだ。

それをあえてせず、ずらしの技術だけで金盛と互角以上に渡り合って見せる、いかに金盛が

変化を想定してたとはいえ、まさかの光景に金盛が、そして会場が騒然となる。

相手を押し上げた蛍はそのまま組み付き、低い背を利用して頭を相手のアゴの下に付け

腰を割って両下手を取る。ここまで見せなかった蛍のがっぷり四つに、倫平と焔は色めき立つ。

「やっぱりここで使うか！」
「行け！行け！三ツ橋っ!!」
蛍は彼らに話していた。本当に自分が大相撲に行く資格のある人間なのか、それを試すために
一度だけ小細工抜きの真っ向勝負をしてみせる、と。
蛍の目指した何でもできる相撲、それは言い方を変えれば真っ向勝負も出来るということ。
そのベースがあって初めて変化は生きてくる、正面から相手を圧倒する強さを持たなければ
所詮目指す所には辿り着けないだろうと。
金盛はその長い腕で蛍の外から両上手を取る。腕が伸びきっている状態ではあるが、その
金剛力の異名は伊達ではない、ここからの引き抜く腕力は絶大な威力を誇る。
「ふんぬーっ！」
気合一閃、蛍を吊り上げようとする金盛。だが蛍も両下手を引きつけ、なおかつ自分の
頭頂部を相手の顎に押し当てて吊らせない、土俵中央で両者の力が籠る、力相撲だ！
ぎりぎりと歯を食いしばって耐える両者。力では金森が、体勢では蛍が有利な状態で
拮抗して動かない、動けない。均衡を破るのは・・・
蛍だった。
「せぇやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!!」
会場に響き渡るその雄叫びと共に、ついに金盛を吊り上げる蛍。
かつて赤池が、彼の先輩の菅が得意としていた、気を吐くことで乾坤一擲の力をひねり出す方法。
蛍自身も黒田との一戦、『カッコ良くなりたい！』と叫んで相手を吊り上げたその気迫が今、実を結ぶ。
「ぐうっ！」
金盛が思わず吐き捨てる。なんたる不覚か、三ツ橋に吊りが無いな

んてどうして決めつけた?
相手の腹の上に自分の腹を合わせたこの体勢は吊って下さいと言ってるようなもんじゃねぇか!
懸命にもがく金盛、重心を前にずらし吊り出しに向かう蛍、硬直していた二人の力士が今、
土俵際に向けて動き出す。
「走れーーーっ!」
「持って行け、決めろっ!」
「止めろ金盛!間に合うぞ!!」
「引きつけろ、うっちゃれ!!」
倫平が、焔が、五條が、狩谷が声を出す。今のチームメイトの勝利を願って。
土俵際、金盛の足はなんとか土俵外に踏みとどまって着地する。のこった!と思った瞬間
蛍は素早く腰を切り、肩を跳ね上げて金盛の両上手を叩っ切る。
両腕を跳ね上げられ、バンザイをした金盛に蛍の最後の一歩がめり込む。まるでメダル落としの
ゲームのように金盛の体がずれ、土俵外に足を出す。
―寄り切って西、三ツ橋の勝ち!―
歓喜する流星大の二人。これであの三ツ橋の雄姿を大相撲で見ることが出来るんだ!
天を仰ぐ栄大の二人。だがすぐに顔を見合わせ、三ツ橋の成長に目を細める。
観客席で見ていた荒木は、思わずため息交じりに一言呟く。
「おーおー、ついに金盛さんにも勝ちやがったか・・・呆れたもんだ。」
礼をして土俵を降りる金盛。自分の夢が潰えたことに落胆を隠せないでいた。
だが、会場に来ていた生徒たちの事を思い出し、教師としての人生にも思いを馳せる。
「ああ、いい教材じゃないか、三ツ橋の奴は。」
今の一番、自分の最後に戦った相手の物語、ひ弱だった少年が数々

の経験を経て、
強く、たくましくなった。それは子供たちに諦めない事、努力の大切さ、夢を追う事の尊さを
教えてくれるだろう。
そして土俵に向こうにいるその彼に目をやる。息も絶え絶えで、ふらつきながら
イスに雪崩れ込む、その姿に心からの声をかける。
「頑張れよ、三ツ橋。」

第１０６番　大和国部屋へ

「それでは、三ツ橋君の活躍と躍進を願って、かんぱーい！」
「「かんぱーいっ！」」
とある居酒屋の一角、流星大相撲部の主将福原の音頭に全員がグラスを掲げる。
大相撲に進む蛍の送別会、というより送り出し会がささやかに催された。
倫平や焔はもとより、柚子香やテニス部の香山達も加わり新たな門出を祝う。
全日本選手権でベスト8まで勝ち進んだ彼は、約束通り大和国部屋への入門を許可された。
退学手続きも済ませ、明後日からはいよいよ角界入り、相撲部屋への缶詰め生活がスタートする。
一人前の関取になるまでは、外で仲間たちと騒ぐなどこれが最後になるだろう。
「にしても蛍、入門のタイミング悪くない？」
柚子香の言葉に焔がそうだねと頷く。倫平は気にしてどうすんだよ、と一瞥するが、
確かに今、大和国部屋は新人に構っている状態ではなかったのだ。

―大関草薙、全勝優勝ーーーっ!!!―
先の大相撲九州場所。大和国の息子、久世草介。四股名『草薙』が、ついに幕内最高優勝を
成し遂げたのだ。しかも千秋楽の結びで長年の天敵である横綱、刃皇を見事撃破してである。
彼を変えたのは先場所の苦戦だった。初の負け越しを喫し、カド番になった彼だが
『大和国になる！』という意志は一層膨らんでいた。
鬼丸に負けた一番の後、父である親方に言われた言葉が彼を変える最大のヒントになった。

「相手の相撲に付き合いすぎたな。」
鬼丸の動きを追うあまり腰高になり押し負けた、それは確かに事実だ。だが自分の目指す
横綱相撲とは『相手に何もさせずに勝つ』ともう一つ『相手の攻めを全て受け切って勝つ』
だったはずだ、にもかかわらず相手の攻めを受け続けて不利な状況を招くとは、自分はまだまだ
未熟だと痛感する。
『右上手を取れば勝ち』から『相手の攻めを受け切り、万難を排して右上手を引く』に
考えをスイッチした草薙は、父である大和国の若い頃のビデオを引っ張り出して研究する。
自分が生まれる前の大和国がいかにして強くなったか、彼の知らない下積み時代の
父の姿を見て、自分がいかに一足飛びに大和国になろうとしていたかを痛感した。
そして九州場所、彼は人が変わったように勝ち続けた。これが本当にカド番の大関なのかと
思わせるほど安定した勝ちっぷりで。
横綱刃皇戦もかくあるべしだった。後の先を取られて右上手を封じられても決して慌てない、
膂力、フィジカルは若い彼の方が上なのだ。じっくりと攻めを耐え凌ぎ、じりじりと自分の形に
押し戻した末に、ついに再び右上手をしっかりと引く、そこで勝負は決した。
期待の国宝がついに横綱に王手をかけたのだ。次の初場所で優勝、もしくはそれに準ずる
成績を挙げられたら・・・日本人相撲ファンの悲願が今、大和国部屋に集まっていた。
２日後の朝３時、蛍は大和国部屋の前にいた、１２月半ばの気温に

吐息も煙る。
親方には電話で『朝稽古が終わる１０時前後に来なさい』と言われていたのだが、どうも
気分が高揚して寝付けそうになかったし、それで無理に寝て寝過ごしたら一大事だ。
そんなことで生涯を棒に振るよりは、いっそ朝稽古から参加しようとやって来たのだ。
と、部屋の明かりが灯る、朝稽古の時間だとインターホンを押す蛍。
ドアを開けて現れた
若い力士に事情を話し稽古場に通される。
「おう、もう来たか。大和国部屋へようこそ、三ツ橋君。」
「はい！よろしくお願いします！」
稽古場の座敷の上から声をかける親方に、蛍は元気よく返事を返す。
その場にいる弟子たちに蛍を紹介する親方、心なしか少し口元が緩んでいるように見える。
だが蛍は、その時の稽古場の空気が不穏に歪んでいることに気付かなかった。
マワシを締め、部屋の若手たちと基本稽古に入る。この時間稽古場にいるのは幕下以下の
若い力士ばかりだ。無論、みんな蛍より大きい体躯ではあるが、そのほとんどは蛍が三段目の
付け出しデビューすれば下の番付になる者たち。
彼らにしてみれば面白くは無い、自分より小さなこのソップ（やせっぽち）に、場所が始まれば
格下としての扱いを受けるのだ。しかも入門からして親方の肝入り、そんな嫉妬が
声には出さねど彼らの周囲に渦巻いていた。
「おいソップ、一番やろうか。」
蛍と同じ三段目の鵜池に肩を叩かれる、お願いします！と返して土俵に上がる蛍だが・・・

バチン！とぶつかった後、蛍はずるずると鵜池を押し込む。一番と言った割にはまるで
ぶつかり稽古の様に無抵抗に押される相手に違和感を感じながらも、蛍はそのまま土俵を
割らせる。
その時だった、既に土俵を出ている鵜池がいきなり蛍を投げ飛ばしたのだ。予想しない
攻撃に思わず転がる蛍。
「なんだ、軽すぎて気が付かなかった。」
しれっと言い放つ鵜池、周囲の面々もゲラゲラと嘲笑する。
「そんなんで相撲取れるのかよ。」
「付け出し？最近の学生のレベル低すぎだろ。」
起き上がった蛍は鵜池を睨む。だが彼は下卑た目で見下ろしながら平然と返す。
足？出てねぇよ、仮に出てたとして行司が見て無かったらどうすんだよ、と。
無言で対峙する蛍の横っ面を、今度は違う男がビチン！と張り倒す。
「ごっつぁんです、だろぉ？」
「何気取ってんだコラ！」
「何様だよ、番付にも載ってないソップがよぉ！」
蛍はふぅ、と息を吐くと顔を上げ、鵜池にこう返す。
「ごっつぁんです、もう一番お願いします！」
そこから先は稽古と言うよりリンチだった。組み合っている最中に別の力士が横から
蛍をなぎ倒し、次の一番では立ち合い時に足を引っかけられて転ばされる。
周囲から蹴られ、殴られ、複数人に投げ飛ばされ続ける、やがて体力が限界に達し、
立てなくなった蛍を集団で囲んで踏み、蹴飛ばす。
「田舎帰って寝てろや！」

「お前のいる場所じゃねぇんだよ！」
「そのツラで相撲取ろうってか？とっとと帰れよボーヤ！」
そんな光景を見ながらも大和国は何も言わない、ただ溜め息をつくだけだ。
蹴られながら蛍は呆れる。なんだ、こんな程度か・・・ココ。
ようやくケリが止まった時、蛍は倒れたまま鵜池の足を掴み、腰を上げて一言こう返す。
「レベル低い・・・ですね・・・先輩方。」
その一言に全員が激高する。血を沸騰させて怒りをあらわにする。
だが蛍にとって
彼らの怒りなど受ける価値も無かった。
蛍は吹奏楽部に所属していた中学時代を思い出す。女同士での陰湿なイジメや
顧問の情け容赦ない罵倒に泣きながら楽器を抱える女生徒、メンバー争いで後輩に
脅迫まがいのプレッシャーをかける上級生。
まるであの日々と同じだ。ダチ高の相撲部も、流星大の時もずっとレベルの高い次元で
研鑽してこれたはずなのに、プロに来て中学生のレベルに落ちるなんて思いもしなかった。

「お疲れさんでございます！」
蛍が後ろから羽交い絞めにされ、今まさに殴られようとした時、道場にその声が響き
二人の男が稽古場に入ってくる。その瞬間、力士たちは蜘蛛の子を散らしたように蛍から離れ、
一斉に礼をする。
「お疲れさんでございます、大関、清心道関！」
部屋住みの力士の最高位の二人、大関草薙と、彼の付き人で幕下上位の清心道璃音。
草薙は基本、やや遅い時間に稽古場に入る。それは駆け出しの力士

が土俵で稽古する時間を
自分が奪わないための配慮であり、そうするよう親方に勧められたからであった。
清心道は付け人の中でも草薙のお気に入りだった。部屋住みの力士の中で自分とまともに
稽古できるのは彼だけだったし、何より栄大付属時代の先輩で気心も知れている、
その彼も来場所で勝ち越せば十両が確定するとなれば、彼との稽古にも一層熱が入る。
そんな事情もあって、最近はこの二人が同時に稽古場入りするのが習慣になっていた。
「おう、来たか三ツ橋。」
清心道かつて顔馴染みだった蛍に声をかける、既にアザだらけになった蛍が、
よろしくお願いします、と頭を下げる。
清心道は内心やれやれ、とため息をつく。またこいつらはつまらんことをやってるな、と。
―ピリッ―
え?と清心道は草薙を見る。なんだ?大関の様子が変だ。不穏な空気を感じ取り冷や汗を流す。
この空気、覚えがある。そうだ、先々場所で鬼丸が潜る相撲や八艘飛びを使った時こんな感じだった。
怒り、そして不快感。普段は優等生な草薙のその陰の気を感じ取り、嫌な予感が走る。
その間も他の力士たちは土俵をホウキで清め、稽古場の端に寄って地味なトレーニングに戻る。
準備運動を始める大関たちとなるべく目を合わせないようにしながら、どこか委縮した様子で。
彼らは思い知って来た。大関と胸を合わせることで感じる、自分たちの限界を。
最初はむしろ光栄だった、幕内力士と、『国宝』と、そして大和国の

再来といわれる力士と
稽古できる喜びに胸を躍らせて挑んでいった。
だが長くは続かない、決して届かないその実力に心を折られ、いつしか下を向いてしまう。
そんな彼らの鬱憤は下に向かうものだ、例えば今日入門してきたソップなどはうってつけの
ストレス解消の対象と言えた。
「君、土俵に。」
準備運動を終えた草薙がそう声をかけたのは、他でもない蛍だった。
短いがインターバルを取れたことで呼吸を整えた蛍は、ハイ！と答えて土俵に上がる。
ｯ―ビリッ！―
草薙が蛍に殺気を向ける。その気配を道場にいる全員が察し、緊張を走らせる。
いつもの大関の殺気ではない。どこか物騒な、負の感情を孕んだ陰湿な空気。
親方も息子の滅多に見ない怒りの感情を感じ取り、思わず腰を上げかける。
清心道も冷や汗をかきながら土俵を見る、一体どうしちまったんだ？大関は。
「(なんで、なんでその体でここにいるのが『君』なんだ！)」
草薙は苛立っていた。この場にいていい『こういう体格』の力士は君じゃない、俊だ！
彼を父がスカウトしてきたのも、潮君と同じ大太刀の選手だったことも知っている、それが
尚更草薙を憤慨させる、何で君なんだ、俊の代わりなんていらない、似た体格でここに居るな！
それは彼の友人でもあった狩谷俊の挫折に対する、彼の歪んだ願望だった。
俊とほぼ同じ体格の蛍を見るとどうしても彼を思い出し、俊が怪我

で夢を絶たれたことへの
落胆と、まるで代わりにいるようなその存在を嫌悪してしまい、苛立ちを抑えられないでいた。
普段の優等生な彼ならそういう感情も制御できただろう。しかし先場所で優勝したことが
彼を少しばかり天狗にさせていた。彼に蛍の人生を否定する権利など無いのに、感情のままに
その黒い感情を稽古場の土俵に持ち込んでしまった。
―ゴツ！―
立ち合いの瞬間、蛍は『蛍火の如し・潜』で草薙の懐に入る。両下手を引くが、同時にそれは
草薙得意の右上手をしっかり取られることを意味していた。
「(ぬぅんっ！)」
剛腕が唸る。幕内優勝を勝ち取ったその右上手投げが、軽量の蛍を空中に高々と浮かす。
「(・・・あっ！)」
我に返る草薙。僕は一体何をした？感情のままに相撲を取り、入門したばかりの新人を
空中に放り投げたことを後悔する。だが、もう遅い。
草薙の頭の位置まで全身を浮かされたその小兵の新人は、土俵の外まで吹き飛んで
地面に激突する、誰もが最悪の事態を予想した。
―ごろん―
蛍は肩から地面に落ちたが、そこから奇麗に3点式受け身を取り1回転、まるで柔道の受け身の
型のように奇麗に回って立ち上がる。常々から『ケガをしない相撲』を心がけてきた蛍の
ある意味真骨頂だ。
「ごっつぁんです大関、もう一番お願いします！」
すかさず放たれた蛍のその一言に稽古場一同が沈黙する。先ほど蛍をリンチしていた連中は

口を開けたまま声も出せずに固まっているし、草薙自身も『え・・・いいの？』という顔。

ひと呼吸置いて清心道がくっくっく、と笑う。ああコイツ中身は全然変わってねぇ。

なのに受け身はえらく上手くなってるじゃねぇか、これならノシていけるかもな、と。

大和国も腕組みしたまま「うんうんとほくそ笑む。どうもウチの部屋は上位と下位の

モチベーションの差が激しかった、そんな下位の彼らの意欲の向上も期待して

彼を呼んだ事情もあったが、どうやら大正解だったようだ、と。

この日、蛍は草薙と、清心道と、そして遅れてやってきた大欧牙、大和号らの

関取連中と存分に稽古を重ねる。そんな蛍に触発され、負けてなるものかと鵜池達も

次々と上位陣に胸を借りる。

活気ある稽古場の空気に、おかみさんは『今日はどうしたの？』と目を丸くするばかりだった。

―三ツ橋蛍、四股名『蛍丸』は、こうして大和国部屋に根を降ろす事に成る―

第１０７番　最後のピース

「失礼します。」
　入門初日の夜、ちゃんこの後始末をしていた蛍は親方から呼び出しを受け、親方の個室へ。
　中では大和国と草薙が将棋盤を挟んで座っていた。
「うむ、まぁ座りたまえ。」
「あ、はい。」
　あらかじめ置かれていた座布団の上に腰を下ろす蛍。
「私は話があるから、今日はここまでだ草介。」
「ええっ！もうほぼ詰んでるじゃないですか・・・今更勝負無しですか？」
　不満そうに抗議する草薙の言葉に、蛍は思わず盤面を除く。
「うわぁ・・・」
「ねぇ三ツ橋君、どう見てもこれは僕の勝ちだよね。」
　どういう将棋を指せばこの状態になるのだろう、草薙は飛角金銀桂で幾重にも包囲網を敷き
　持ち駒もたっぷりとあるのに対し、大和国の方は王将の他は歩が数個と言う有様。
「１２回も『待った』するなんて・・・本場所でこれやったらウチじゃ破門ですよ。」
　ああ成程、待ったの度に王将を逃がして、代わりに強力な駒を次々に献上していったわけだ、
　案外往生際が悪いのな、この親方。
「さて、本題に入ろうか。」
　そう言って蛍の方に向き直りつつ、左手でジャラッと盤面の駒をかき集めて箱に詰める親方。
　草薙はああっ・・・また?と不満の声を述べるが、さらっとスルーする父。
　っていうか『また』って。
「どうかね、初日の感想は。」

真面目モードに入った大和国の問いに、蛍は真剣のスイッチを入れ直して答える。
「そうですね・・・最初はともかく、場が締まってからは充実してたと思います。」
来てすぐの下位力士のやさぐれた態度に最初は落胆したものだが、草薙はじめ関取の面々が
稽古に参加してからは打って変わって熱の入った場になった。鵜池はじめ下位力士たちも
上位陣に懸命の抵抗を見せていたあたり、向上心は失われていないようだ。
蛍と同じレベルにいる同部屋力士が意欲的ならば、彼にとっても得るものは多いだろう。
それは何よりだ、と前置きして居ずまいを正す親方。
「さて、約束だったな。私に身を預けてくれれば、いつか鬼丸の前に立たせてみせると。」
その言葉に蛍以上に反応したのは、すぐ横にいた草薙だった。
「えっ・・・潮君に？」
「彼に影響されたのはお前だけではない、ということさ。」
親方の返しに、そうか、潮君にねぇ、と顔をほころばせる草介。彼にとって相撲を取ることは
鬼丸こと潮火ノ丸という人物と高め合う事でもあるのだ、頂に達するその時まで。
自分以外にも彼に影響を受け、人生を変えた人間がいることに感心し、納得する。
うんうん、さすが潮君だ、と。
「そのために、ふたつの課題を君に課そう。まず一つ、3年先の稽古をしなさい。」
相撲界の格言、稽古とは一日二日で成果が出るものでは無い、三年先の自分を見据えて
日々精進を重ねることが大事である、と。だがそれは蛍にとっても、もうひとつの意味を

示していた。
「火ノ丸さん・・・鬼関と戦えるのは、3年先になると?」
蛍の返しにこくりと頷く親方。確かに今の自分では火ノ丸の相手にもならないだろう、
3年でも足りるかどうかはわかったもんじゃない、彼も3年後は更なる高みに行っているだろうから。
「君はケガの怖さを知り、相撲を続ける明確な目標もある。焦らずじっくりと力を蓄えなさい。」
それはいつか堀柚子香嬢に聞いた三ツ橋蛍の『心の芯』。かつての苦い記憶を覆すための
鬼丸と言う目標と、負傷による挫折の怖さを心得ているその心は、指導者として何より
有難い資質と言えた。

「そしてもうひとつ。常にファンの目を意識して、観客を沸かせる力士を目指しなさい。」
その言葉に蛍も、そして草薙も目を丸くする。強くなることにあまり繋がらなさそうな
その物言いに疑問を感じ、続きの言葉を待つ。
「君の相撲は誰よりも明確に人目を惹く、それを使って観客を味方にすることだ。
そうすれば君の背中を皆が押してくれるし、対戦相手は君の事を色眼鏡で見るだろう、
そういった相手の心理をよく読んで『心』で相手を上回ればいい。
「あ・・・。」
かつて諸岡顧問に教わった心理戦、それに相撲ファンの後押しを上乗せしろという事。
もし自分が変化を使う奇抜な相撲で人気を博し、土俵に上がるたびにファンの期待の
声援を受ければ、相手は自分に様々な感情を抱いて向かって来るだろう、それは彼にとって

格好の攻略のヒントになるはずだ。
「かつて『昭和の牛若丸』と呼ばれた力士がいた、彼がそういうタイプだったんだよ。」
大和国が語る。その小さな力士が土俵に上がるたびに観客は『今日はどんな相撲を取る?』と
期待に目を輝かせ、相手もまたその多彩さに翻弄され、または迷わされて土を付けられる、
その度に座布団が舞い、観客を熱狂の渦に包んだものだった。
「そのためにも、君は多くの者の矢面に立たねばならん。」
その言葉と同時に、大和国は蛍に木札を差し出す。所属力士の名を記入したその札を。
〝蛍丸〟
鎌倉時代に作られたとされるその名刀、刃こぼれの破片が蛍火のように集まって治ったという
逸話からそう呼ばれる伝説の刀。
四股名を刀銘にする、それは昨今の相撲界にとって、将来の横綱候補『国宝』として
負けられない立場に立つ事を意味する。言い方を変えれば、刀剣銘を名乗ることで
否応なくファンの注目を集めるという事でもある。
最初は非難を浴びるかも知れない、横綱候補がぴょんぴょん飛び跳ねる相撲をするなど、
認めない者は少なくないだろう。それを蛍は良く知っている、『力士』とはあくまで
力ある者を指す言葉なのだから。
だか別の事も彼は知っていた。勝ち続ければ否定も非難もやがては称賛に変わることを。
蛍の変化は決して『楽をして勝つ相撲』ではない、相手に読み勝ち、乾坤一擲の力と技で
大きな男を仕留める決死の一手なのだから。
「私も現役時代は、ファンの声援にずいぶん力を貰ったものだ。」

珍しくにやりと笑う大和国。かつての力士時代を思い出しているのだろう。

蛍は木札を手に取り、しげしげと眺める。彼自身、四股名を名乗るならこの名にしようとは

思っていた。だがそれはずっと先、火ノ丸さんと戦えるところまで行ってからだと思っていた。

でも、今じゃなきゃ駄目だと。親方が、伝説の横綱がそう言ってくれた。無謀も、試練も、

全て飲み込んで、この名を観客に、角界に刻み込めと！

「ありがとうございま・・・ごっつぁんです、親方！」

まるで卒業証書を受け取るように、深々と一礼しながら木札を手にする蛍・・・いや蛍丸。

今、彼は彼を強くする最後のピースを手に入れた、その名と共に。

・生来のガッツある相撲と、桐仁によって仕込まれた変化を使いこなす。

・諸岡顧問に教わった『目線の誘導』『心理戦』を常に意識する。

・かつてのダチ高の後輩たち、流星大の仲間たちとそうであったように、大和国部屋の

仲間たちと研鑽を続け、高め合う。

・小さな自分が勝つにはどうすればいいかを考え工夫する、周囲のアドバイスに耳を傾ける、

かつて夜叉落としの連発を提案された時のように。

・全国優勝したチームで全敗した屈辱。拭うために鬼丸関の所までたどり着き、そして勝つ。

・自身の夢である、カッコいい力士に、人物になってみせる。

・ケガの怖さを心に刻み、ケガを未然に克服する相撲を目指していく。

・自分を信じ、成長するチャンスをくれて、待ってくれている『彼女』の為に上に行く。

・そして・・・相撲ファンに慕われる存在になり、その声援を力に変える、そんな男になる。

かつて相撲部の門を叩いた、あまりにマワシの似合わない、ひ弱な少年。

彼は今、己に必要なものを全て胸に書き留め、それを満たすべく歩き始める。

新弟子検査を受け、正式に番付にその名を乗せる。草薙の付き人の1人に指名され、

いよいよ初土俵を迎えることになる。

そんな蛍丸を後押しをするような出来事が起こる。それは大相撲初場所、その初日の割。

草薙（大関）―圧切長谷部（前頭八枚目）

第１０８番　ポプラの大樹

「ひがぁ～しぃ～、草薙、くさぁ～なぎぃ～」
　呼び出しの声と共に土俵に上がる大関、草薙関。それを合図に国技館が熱狂する。
「来たーーーっ！頼むぞ草薙ぃーっ!!」
「待ってましたぁ大関ーーーっ！待っているぞ横綱ーーーーっ！」
「やっぱお前しかいない、行け行け大和国二世ーーー!!」
「夢を見せてくれーーーっ！」
　―くっさなぎっ！くっさなぎっ！くっさなぎっ！くっさなぎっ！
―
　―くっさなぎっ！くっさなぎっ！くっさなぎっ！くっさなぎっ！
―
「さぁ、いよいよ次代の綱を巻く男、草薙関の登場に国技館も興奮を隠せません！
　先場所ついに幕内最高優勝、しかも全勝でこれを勝ち取り、今場所に横綱昇進を賭けます。
　その初日の入り方、ここはやはり大事ですよね、大和国親方。」
　興奮気味にアナウンサーがそうまくしたてる。だがそれも無理のない事だろう、長年の
　相撲ファンの悲願であった日本人横綱の誕生、その栄光の１５日間が今日からスタートする。
　ＴＶも、メディアも、そしてネットもこの草薙の今場所での横綱昇進を待ちかねていたのだ。
「いえ、楽観はいけません、文字通りふんどしを締めてかからないと足をすくわれますよ。」
「いやいや、相変わらず親方はご子息に厳しいですが、先場所を見る限り期待するなと言う方が
　無理でしょう、今の草薙関は本当に強いですよ。」
　先場所の全勝優勝は、その相撲内容もあらゆる面で完璧だった。数珠丸を真っ向から寄り切り

大典太の突きを捕らえてネジ伏せ、三日月の攻めに耐えに耐えて万全の態勢で決着、
鬼丸や童子切をも正面から切って落とし、ついにあの横綱刃皇すら上回って見せた。
その強さを目の当たりにしていれば、今場所で彼が綱を巻くのは誰もが確実だと思うだろう。
だが、熱狂する会場にあっても大和国は、この一番を楽観視してはいなかった。
「相手が会っての相撲ですからね、相手の圧切関は先場所で十両優勝して勢いに乗っていますし
草介・・・草薙にとっても初顔の相手ですから、なおさら油断は禁物ですよ。」
「いやぁ問題無いでしょう、圧切関はぶちかましの力士ですし、部屋には同じタイプながら
一回り大きく経験も豊富な大和号関がいらっしゃるんですから、対策も完璧では?」
アナウンサーにしてみれば、大和国親方のその辛口な物言いに少し不満があるだろう。
局も世間の風潮に乗る気マンマンで、とにかく草薙推しで中継を進めたいのが本音だ。
それでわざわざ初日の解説にお招きしたというのに、こうも期待感を薄れさせられるのは
今後の青写真を考えたら少々勿体ない。
まぁ今日の一番で草薙が完璧に勝って、親方の目じりを下げさせることになればそれで
問題は無いだろう、と切り替えて中継に戻る。
草薙のプロフィールやら、その強さの秘訣やら、大和国の血統がどうだとかを
まくしたてるアナウンサーの言葉に耳を貸さずに、大和国親方は心で息子に檄を飛ばす。
「(草介・・・油断するなよ。その男はお前が思っているより、この一

番に・・・）」

土俵上、蹲踞して塵手水をし、時間前の仕切りに入る両者。熱狂の後押しにもかかわらず

淡々と仕切る草薙に対し、対戦相手の圧切は今まさに人生の天王山、剣ヶ峰に立っていた。

どれほど待ち焦がれただろう、この瞬間を。

どれほど恐れただろう、この一番を。

5年前のあの日、目の前の男に睨み出されてから、今の彼の人生が始まった。

屈辱と、自虐と、自責と、後悔と、そこから這い上がるための唯一のか細い糸を頼みに

ドン底から這い上がって来た、永久に届かないと思われたその場所へ。

だがそこに立った時、彼の胸に去来するのはかつての弱い自分。

今日また草薙の圧に屈し、同じ負け方をするのではないか、自分は本当にあの時から

強くなったのか、変われたのか、そんな不安が押し寄せる。

仕切りの度に脂汗が噴き出し、心臓が早鐘を打つ。相手は今やただの久世草介ではない、

幕内で全勝優勝し、会場の、いや日本中の期待を背負って立つ男なのだ。

自分に勝ち目はあるのか、いや、そもそも今自分がここにいるのは現実なのか、

そんな思いさえ頭をよぎり、全身がふわふわと芯を定められず浮足立つ。

いかん、こんなことじゃ・・・

「圧切ーーーっ！」

「クローっ！ファイットーーーっ!!」

塩を取りに戻った時、草薙コールをかき分けて会場の一角から、彼の名を呼ぶ声が届く。

そちらに目をやり、あっ！と固まる圧切。視線の先に居たのはかつ

ての立花寺高校の相撲部や
クラスメイト達、先生方や後援会のＯＢの顔も見える。
皆、一様に声を出し、圧倒的な草薙の声援に懸命に抗っている。そして彼はそんな輪の中心に
ひとりの女性が抱え持つ額縁の中の写真に目を奪われる。
ふっ、と圧切の力が抜ける。体が芯を取り戻し、漲るべき所に力が行き渡る。
土俵を踏みしめる足の裏、塩を握る右手、固く締められたマワシ、彼はその時、己を取り戻した。
「（よし！）」
塩を撒き、仕切り線に向かう。腰を割り、時間前の仕切りを行い、目の前の『敵』を見据える。
そこにいたのは、相撲の神様ではない、自分と同じ『力士』でしか無かった。
「へっしきりぃーーーーっ!!」
懸命に圧切を応援する２０人ほどの一団。だがその周囲の人間にとって彼らはうっとおしい
だけの存在でしか無かった。折角草薙が日本人横綱になろうとしている時に、その敵を
応援するなんて！ウザい、邪魔だ。
「おいお前ら！日本人だろうが、草薙を応援せんか!!」
中年のガンコそうな親父がその一団に向けてそう発する。そんなに圧切を応援したけりゃ
明日以降にしやがれ、と。
「キサン！なんば言っとっとかぁーーーっ！くらすぞコラァーーッ!!!」
会場中に響き渡る声で絶叫したのは、何とそのオヤジの隣にいた華奢な若い女性だ。
あどけなさが残る博多美人にまるで噛み付かれんばかりにいがり倒され血の気が引いた親父が
持っていたカラのカップ酒をごとっ！と落とす。

その絶叫に会場が一瞬静まる。周囲の圧切応援団はよくいった！
という顔で、ここぞとばかり
圧切に声援を送る。
彼らは知っている。圧切関こと黒田敦がどれほどの思いで今日に辿り着いたか、
自らを罰し、重責を背負い、己にひたすらムチをくれ続けて、ついに辿り着いた終着点。
かつての弱い自分を殺すためひたすらイバラの道を駆け抜けて来た、その出口のドアに
ようやく手がかかったというのに、言うに事欠いて明日にしろだ？
できるわけなか！
土俵上、両者が別れ力士にタオルが渡される、時間一杯の合図だ。
再び熱狂に包まれる場内、大半の草薙の声援に抗うように声を絞る
圧切応援団。その中央で
1人の女性が大きな額縁を上に掲げていた。
中に納まっているのは、一本の大きなポプラの樹の写真。
立花寺高校名物『不屈の樹』と名付けられたその大樹、かつて若木だった頃、とある理由で
根から薙ぎ倒されていた。
だが再び植え直されたその樹は、再び雄々しく根を張り、花を咲かせ、実を付ける。
幹の一部を剥離させ、倒れても立ち上がるその強さは、いつしか立花寺男子の見本として
慕われる大樹と成っていた。
そう、倒れてもまた立ち上がればいい、かつてのこの樹も、そしてこの樹を倒した
張本人である土俵上の彼も。
―手をついて―
草薙はいつもの通り先に両手を下ろし、辺りの景色が白く溶けていくのを感じる。
静謐で、自分と相手以外存在しないような世界。この時こそ自分は

土俵に、勝負に
没頭できる、と。
そして相手を見た時、草薙は己の認識の甘さに愕然とする。
そこにいたのは、数えきれない程の物を背中に抱え、それを後押しにせんと構える
まるで大波を背負った剣士のような『気』をまとった力士！なんなんだ!?彼は。
―はっきよい―
頭と頭で激突する、押し勝ったのは圧切のほうだ！草薙はのけ反りながらも反射的に
右上手に手を伸ばす。
―ビチィン！―
圧切の放った左ヒジのバックエルボーが草薙の右手を弾き飛ばす。
乾坤一擲を全身に纏った
彼の突進が草薙を土俵際に追い込んでいく。
悲鳴を上げる国技館、パニックに陥る草薙。
どうして安易に右上手を取りに行った?それじゃあ以前の僕と同じじゃないか。
彼は一体誰なんだ?どうして初日でここまで懸命になれるんだ、まるで明日引退する
力士の気迫じゃないか。彼の背中を押すその力は一体何なんだ?
「(バカ者が・・・)」
解説席で大和国がそう心でこぼす。悲痛に絶叫するアナウンサーの横で、冷静に、静かに、
そして『当然だ』という感情を込めて続ける。
「(自分の尺度で測れない『心』の強さ、これで思い知るだろう！)」
草薙の足が俵にかかる。刃皇も、鬼丸も、童子切も、大包平も、大典太もその光景に
口を開けたまま呆然として固まる。
押し込んだ圧切は素早く下手を引くと、瞬時に手前に引きつけて草薙の足を俵から離し、

次の瞬間に相手を吊り上げると、そこから一歩前に押す。
―吊り出し『棚浮かせ』―
吊られたわずかな時間、草薙の足は土俵の俵を奇麗に乗り越え、土俵外に足を下ろしていた。
俵を足にかけての抵抗をさせないための小技、先程のヒジ打ちと同じく、長年研究してきた
草薙を倒すための最後の一手、それが今、花を咲かせる、実を結ぶ。
―へしぃ～きりぃ～―
行司の軍配が上げられる。観客の悲鳴とアナウンサーの「草薙敗れるーっ、まさかーっ」
の絶叫をＢＧＭにして、国技館に座布団が舞い踊る。
粛々と勝ち名乗りを受ける圧切。だか彼の頭にはこの５年間の記憶が次々と
フラッシュバックして蘇える、それが心を揺さぶる。
手刀を切り、懸賞金を受け取り、土俵を降りた彼の頬には、熱い玉の光が止め処なく
流れていた。５年間封印し、溜めていた歓喜が今、堰を切って溢れ出す。
彼の応援団も皆、涙を流す。ある者はハンカチで目を抑え、またある者は天を仰いで
「やったなぁ、クロ・・・」と祝福を思う。あの日から５年、ようやく彼は自ら課した鎖から
解き放たれたのだ。
「いやな予感はしてたんだ、あの時からなぁ。」
支度部屋で蛍丸の横にいた清心道がそうこぼす。草薙の付き人である彼らは先日、
親方からこう言われていた。
「草介には圧切・・・黒田君の事は何も言わず、黙っておいてくれ。」
てっきり雑念を排するために言ったのだとばかり思っていた。だが本当は草薙に
彼との一番を通じて何かを教えようとしていたのかもしれない、今

日の結果を見る限りは。
蛍丸はこの時、草薙の付き人として不謹慎とは思いながらも、ひとつの感情を抱かずには
いられなかった。かつて高校相撲で、意識を飛ばした僕をわざわざ起こしてくれた
そんな正道を行くライバル、悲願を達成した彼に対する祝福を。
自分より一足早く心の棘を抜くことに成功した、先駆者に対する称賛を。
「（おめでとう、黒田さん。）」

圧切長谷部。
後に『草薙キラー』と称され、彼の横綱昇進を何度も阻む壁となる力士の、
幕内デビュー戦であった。

第１０９番　蛍火、大相撲に舞う

「おはようございます。」
明けて2日目、いよいよ今日は蛍丸の角界デビュー戦。幕下以下は2日に一番のため
彼は今日、初日を迎えるわけだ。
西の支度部屋に入った蛍丸は、その中に見知った顔を見つける。
「お！三ツ橋部長もいよいよデビューっすか。」
「おいおい陽鉈、部長はねーだろ、今は蛍丸さんだ。」
「さん、は要りませんよ、お二人の方が番付は上なんですから。」
陽川満、四股名『陽鉈』。大峰浩二、四股名『薫峰』。かつての二人の後輩も
今は三段目上位の地位。番付社会の角界にとって今の蛍丸より目上の存在だ。
「大和国部屋は蛍丸ひとり？」
「いえ、もうひとり居ますけど、東のほうに。」
同部屋の鵜池は今日東の割だ、同じ三段目ということもあり、場所前の稽古も彼とは
多く番数を取っていたし、色々なアドバイスも貰っていた。
まぁ『先輩を立てろよ、本割で俺より多く勝つなよ・・・』などと本気かどうかわからない
アドバイスもしっかり頂いていたが。
ちなみにその鵜池は今日、陽鉈との一番が組まれている、正直どう贔屓目に見ても
鵜池の勝ち目は薄そうだが。
「俺は立場上応援するわけにはいきませんけど、いい相撲を期待してますよ。」
そう薫峰が声をかける。今日の蛍丸の相手は彼と同じ柴木山部屋の大河内、四股名『國平大河』。
彼もまた今場所から三段目に昇格し、それに合わせて刀剣銘を四股名に当てて来た。

本名と刀剣銘を組み合わせる所に彼らしいセンスを感じる。
係員に呼び出され、通路から花道に進む。と、会場の一角から声援。
「三ツ橋部長ー、頑張れーっ！」
「ほったるまるーっ！」
「行ったれやーっ！」
「蛍ーっ！しっかりねーーーっ！」
かつてのダチ高相撲部の仲間たち。柚子香、松本、幸田、赤池、沼田、柳沢、小林、
諸岡顧問に五條佑真まで。
さらにその一団の後ろには下山と葉山、加えて香山らテニス部の女子達の姿も見える。
「（みんな・・・平日なのにわざわざ見に来てくれたのか。）」
蛍丸は親方の言葉を思い出す、ファンを楽しませる力士になれ、と。
ならばまだガラガラの
この会場で自分を応援してくれる彼らを喜ばせる事、それが今日の一番の課題だ。
土俵下のたまりに腰を下ろす蛍丸。その所作を東の通路から眺めつつ、思わずこぼす力士がいた。
「とうとう蛍も来たか・・・あの蛍がのう。」
「おいおい、アイツを過小評価してねぇか？」
幕内力士、鬼丸の言葉に鬼切がそう返す。２人の明らかに早すぎる会場入りの原因が、
そのお目当てがいよいよこれからプロデビューを果たすのだ。
「鬼関、何かアドバイスは？」
いつのまにか後ろに控える國平がそう問う。鬼丸はお前の相撲を取れ、と國平の背中を叩く。
彼はそれを受け、土俵に歩を進める。それを見送りつつ鬼切が一言。
「しっかし、よりによって大河内がデビュー戦とは、大変だな三ツ橋も。」
「國平は強いぞ、特にここ最近の稽古ではワシや冴さんも不覚を取る

事があるからのう。」
え、マジで?と顔色を変える鬼切。そんな彼に鬼丸はこう返す。
「あいつの思い付きにはいつも驚かされることがあってな、役に立たんモノも多いが、時に凄い
発想を見せてくれるんじゃ。」
唸る鬼切。確かに彼は高校時代から『逆鞘』や『荒贄』等、他の選手が考え付かない戦法を
独自に編み出して来ていた。
思えば蛍もそんなタイプだ。相撲のあらゆる戦法を取り入れようとする過程で、彼独自の技を
いくつも編み出してきた。ならばこの一番、お互いの個性が存分に出る相撲になるだろう。
鬼切は珍しく鬼丸と逆のベクトルの思考をしていた、弟弟子の応援をする火ノ丸の対戦相手に
エールを送る。
「(勝てよ・・・三ツ橋!)」
―ひが~ぁし~、國平。にぃ~しぃ、蛍丸。―
行事の呼び出しに応じ、両者が東西から土俵に上がる。蹲踞から塵手水に移るまで、
國平の表情は穏やかだった。
「そういえば君には高校時代に不覚を取ったね、借りは返させてもらうよ。」
そう語る國平に、蛍丸は目線を合わせずにこう返す。
「あの時は意表を突いただけでしたからね、今日こそはしっかり勝ちますよ。」
そして仕切り線を挟んだその時、土俵にびりっ!とした空気が満ちる。
眼から、全身から炎を纏わせるが如く、闘気を漲らせる國平大河。
その瞳から、らんらんとした蛍火の様な眼光を放ち、相手を射抜く蛍丸。
「おお、両者気合十分。」

「さて、三段目デビューを飾るのはどっちかな?」
両者が仕切りに入る。薫峰も陽鉈も、鬼丸も鬼切も、鵜池はじめ他の三段目力士たちも、
柚子香やかつてのチームメイトも皆、その瞬間に注目する。
―はっきよい―
蛍丸が立つ、國平が突っ込む。両者頭で激突したその瞬間、蛍丸は横っ飛びに距離を
開けようとする。だが國平はその動きに合わせるかのようにサイドスレップし、蛍丸を正面に
捕らえる。
「その『蛍火の如し』は元々冴関の『水の如し』の変形だ、柴木山部屋の僕には通用しないよ!」
「シッ!」
蛍丸は追いかけてきた相手にすかさず突っ張りを見舞う。追いつかれることも予想済みで
流れるように攻撃を続ける。
ならばと返す刀で張られた國平の横薙ぎの『張り手』を、蛍丸は体を沈めて躱し、
体ごと突っ込む。
「読んでいたな!」
大相撲から解禁される横からの張り。今日がデビュー戦の蛍丸に対し、プロの洗礼をと
放った國平の攻めは、実はその心理を誘導され『打たされた』攻撃だったのだ。
相手の懐に潜り込み、両下手を引く蛍丸。國平もすかさず両上手を引きつつ覆い被さる。
「(相変わらずこっちの心理を読んでくれるね、でもこれは予想できまい、行くぞ!)」
突然、二人が回転を始める。右に左に蛍丸を振り回しつつ、自らも旋回ステップを踏む國平。
なんだ!?といぶかしがる鬼切の横で、鬼丸がふふん、と笑い、こう

続ける。
「出たな、國平の『力士禁則の舞い』」
「何だそりゃ？」
その回転を生んでいるのは、両上手を取った國平が相手のマワシをまるで
車のハンドルのように右に左にネジ回しての動きだった。ひねりとも投げとも違う、
相手の体の軸そのものを上から回転させにかかるその様は、まるで遊園地のティーカップの
ようだった。
稽古場で大河内は鬼丸の胸を借りていた時、何度も懐に潜り込まれ投げ飛ばされた。
そんなことを繰り返す内、彼が編み出した対策はとにかく上から崩してふんばりを利かせず
投げさせない事。試行錯誤の結果、ヘタに引きつけたり押し下げたりせずに両手で回転
させつつ自らも回転する事で相手の軸をずらし、技に移行させないこの技を編み出して見せた。
「関取は車の運転が出来んからのう。」
「それで『力士禁則の舞い』かよ、なんつーネーミングだよ。」
土俵上でワルツを踊る両者。蛍丸は止まらない動きに巻き込まれ、技に移行できないでいた。
得意の潜る相撲に入ったにもかかわらず相手に振り回され、凌ぐのに精いっぱいだ。
國平もそれは同じで、振り回してはいるもののこれだけでは決定打にはならない、
激しく振り回しながら、彼は決めるチャンスを伺っていた。
「くっ！」
大きな流れの中で蛍丸が右足を出して踏ん張る、そのスキを國平は見逃さない、貰った！と
その足を外掛けで絡め取る、そこから体重を浴びせて相手を倒そう

とした瞬間、蛍丸は
刈られた自分の足首を右手でつかみ取り、前傾の体制を取る。
「根太起!·狙ってたな。」
陽鉈の叫びに、隣の薫峰はにやりと笑って言い返す。
「狙ってたのは國平の方だよ。」
蛍丸が片手片足になった瞬間、國平は刈っていた足を下ろして大きくスタンスを取る。
そして相手の投げの方向に流れるように先回りし、そのまま上手出し投げに移行する。
大きく崩れる蛍丸、その蛍火のように光る目が泳ぎ、波打つ。
決まった!そう確信した時、國平の体は崩れていた。
「なっ!?」
蛍丸は離していた右手で相手のマワシをなんと『上から』掴んで耐えていた、
左手で下から、右手で上から、國平の前ミツの一点を両手で握りしめ、未だに体は大きく
泳いだままでバランスを取る。
―崩し技『綱錨（つないかり）』!·―
そのまま自らの体を引き付ける蛍丸。すり足が2本のレールを引き、國平の懐まで伸びる。
かつてＩＨで荒木に決めた『無限蛍火落とし』。その基盤ともいえる体の引きつけで
完全に相手の懐を取り、なおかつ相手を完璧に崩してみせる。
蛍は大和国部屋でかつての『相手のマワシに捕まって自らの体を引き付ける』を
何度か試してみた。しかし流石は大相撲力士、特に十両や幕内の力士には体の引きつけは
成功しても、相手はどっしりと安定して崩れなかった。
持っている両下手の距離が離れていることで、引きつけの力が分散していることを
指摘された蛍は、それならいっそ両手で相手のマワシの一点を掴ん

で引けばと考え、
この上下からマワシの一点を握りしめる『綱錨』を形にして見せる。
その威力はあの重量級の大和号をも崩して見せ、ダニエルに仕掛けた時はなんとマワシが
ほどけてしまい、生涯二度目の『不浄負け』を相手に強要してしまったほどだ。
その際の姿をおかみさんに見られ「もうおムコに行けない」とダニエルが涙したことは
おいておこう。
「くっ！」
崩されながらも國平は足を踏ん張り、耐える。確かこの崩しからの百千夜叉落としが
一連の流れのはずだ、それも鬼関と同じ部屋の僕には・・・
蛍火が土俵に舞い、飛ぶ。大屋根を横切って國平の背後に回り、音も無く降り立つ。
「ここで八艘飛びかよ！」
鬼切が思わず叫ぶ。相変わらず相手の裏をかかせたら天下一品だなお前は！と拳を握る。
隣の鬼丸はその様を呆然と眺める。自分も使う八艘飛びだが、まさか相手を崩したその流れで
投げも寄りも使わずに飛ぶとは、なんという奴じゃ！
実は蛍丸にとってこの流れは不自然では無いのだ。両手で相手のマワシ1点を掴んで引き付ける
崩し技『繋錨』は、崩しには有効でもその後は結局両手を広げてマワシを掴み直さなければならない。
その行動を取っている間に相手は立ち直るだろう、なら崩れているスキに組む以外のアクションを
取った方がマシだと考え、八艘飛びへの連携を稽古し身につけていたのだ。
「さ・せ・な・いっ!!」
國平がコマのように体を回し、後ろ手で蛍丸のマワシを探る。先程

からの『力士禁則の舞い』
からの円を描く機動力を再び発揮し、なんとか相手を正面に戻そうとする。
「(高校時代も八艘飛びで背後を取られて負けた、同じ轍を二度も踏んでたまるかぁぁっ！)」
辛うじて半身まで姿勢を戻した國平の腰に、蛍丸は腰を割って深々と食らいつく。
そしてここから、高校時代には無かった『蛍丸』の真骨頂が炸裂する。
「せいやあああぁぁぁっ!!」
気合一閃、横から組み付いた蛍丸は、１２０ｋｇの國平を軽々と持ち上げる。
後輩から、そしてライバルから学んだ、気を吐いて乾坤一擲の力を出すその吊り技を。
土俵際まで２本のレールを引き、走る。そして相手を土俵の下に降ろす。
その蛍丸のらんらんとした目の光が、髪を伝いしたたる汗が、蛍火のように土俵に輝く。
三ツ橋蛍、四股名『蛍丸』。その大相撲のデビュー戦に、白い丸が、白星が描かれた。
國平と礼をし、勝ち名乗りを受ける。かつてのチームメイト達に祝福され、共に競い合ったライバル達に今の自分を見せつける。
そして、今はまだ少ない観客にその名を刻みつけた。
―ここから『蛍丸』の物語が、始まる―

第１１０番　初場所を終えて

「えー、皆さまのご支援のおかげを持ちまして、我ら大和国部屋一同、無事に初場所を
終えることが出来ました。ありがとうございます。」
某ホテルの会場、大和国部屋の初場所終了の祝賀会にて、親方が壇上で祝辞を述べる。
親方の後ろでは所属力士一同が着物姿で佇む、蛍も端の方で、その小さな胸を張る。
今回は所属力士の１６人全員が勝ち越しを決めるという近年見ない健闘ぶりだった。
初土俵の蛍丸はなんと６勝１敗の好成績、同じ三段目の鵜池は４勝３敗、他の序の口～序二段の
力士も４～６勝を挙げてみせた。
そして一番の健闘を見せたのは清心道璃音、なんと幕下７戦全勝で優勝決定戦も制し、
幕下優勝と来場所の十両昇進をその手中に収めていた。ついに念願の関取の地位を獲得した
彼がこの会場の話題の中心であった。
が、やはり大関草薙の綱取りが白紙に戻ったのは残念な結果であろう。初日に圧切に
黒星を喫した彼だが、２日目以降は立て直して優勝戦線に踏みとどまるかと思われた。
しかし上位陣との取り組みが組まれる後半戦、多く星を落としてしまった。どっしりと構え
得意の右上手を引くそのスタイルに対し、ライバル達はその前に決める速攻相撲で対処してきた。
初日の圧切が付けた黒星は、今の草薙を攻略するための格好のお手本だったのだ。
結果、９勝６敗で初場所を追える草薙。先場所全勝優勝したとはいえ、その前に負け越していた

彼にとって綱取りは振出しに戻ってしまった。
そんな彼に対してマスコミが辛辣でなかったのは、優勝したのが童子切だったからだろう。
国宝の中でも草薙と双璧と言われていた彼の優勝は、日本人横綱誕生の夢を草薙から
バトンタッチして来場所に持ち越すことになったのだ。
まだまだ下っ端の蛍にとって、後援会やファンの方々の接待はこういう場でも重要な仕事だ。
各人に挨拶して回り、顔を覚えてもらう。もし将来自分が出世すれば、彼らの中に自分の
タニマチになってくれる人物もいるかも知れないから。
各テーブルを回り、挨拶とお酌をして回る。時には彼らの話し相手になり、親方や関取連中に
取りなして引き合わせる。パーティとはいえ彼らに楽しむ時間は無いのだ。
「蛍丸関だね、今場所活躍したねぇ。」
人の良さそうな初老の人物にそう声をかけられる蛍。こういう場に出てくる人に、
もう自分の名前を知ってもらえたのは有難い事だ。ただ三段目の自分に『関』は
付かないのだが、そのへんを指摘しては失礼に当たるだろう。
「ありがとうございます、今後ますます精進いたします。」
「私の周りでもちらほら君の名前を聞くよ、三段目に面白い力士がいるぞ、ってね。」
嬉しい感想だった。親方に宿題として出された『ファンに愛される力士』に少しでも
近づけたかな、と思わず笑顔になる。
パーティが引けた後、大和国部屋に戻って恒例の反省会が行われるそうで、蛍たちは
一足早く引き上げて支度を始める・・・のだが。

「あ、あのー・・・反省会ですよね、何でこんなに大量のお酒を?」
すでに稽古場横の座敷には２０ケース以上の酒瓶が用意されている、普段誰もこんなに
飲まないのに何でまた、という顔の蛍に、鵜池がげんなりした表情で返す。
「お前ももう２０歳だろ・・・覚悟しとけよ。」
「・・・はい?」
部屋に帰って来た親方と関取一同を迎える。彼らは座敷に上がり、蛍たち幕下以下の
力士は土俵側に立つ。親方が上座で座布団に座り、おかみさんが隣で一升瓶を抱えて待つ。
「それでは、反省会を始める。まずは草薙関!」
「はい・・・っ!」
びりっ!という緊張感を漂わせる親方の正面に、草薙が神妙な顔つきで座る。
周囲の関取連中も、下にいる鵜池達も、ごくり、と唾を飲み込み、緊張して姿勢を正す。
両者にドンブリが手渡され、おかみさんが笑顔で両者に酒を注いでいく。親方は
まずはお疲れさん、とドンブリを合わせると、その酒を一気に飲み干す。
「(うわ・・・)」
その酒豪っぷりに思わず蛍は心で唸る、まるで水でも飲み干すかのように平然と杯を
空ける親方。一方の草薙はムセながらもなんとか杯をカラにし、赤い顔でぶはっ、と息をつく。
この反省会、要はひとりひとりが親方と酒を飲みつつ、今後の課題を語る場のようだ。
早々に潰れた草薙に代わり、ワリと酒に強かった大和号は3杯まで付き合ってダウン、
下戸のダニエルこと大欧牙はコップ一杯もこなせずにひっくり

返ってしまう。
　今場所の主役だった清心道は親方に嬉々とした顔で迎えられ、およそ1升を空けるまで
　延々付き合わされる、関取が酒に飲まれてどうするんだ、などと無茶振りされながら。
　というか親方は一体どれだけ呑めるんだよコレ！
　次々とツブれる力士たちを尻目に、上機嫌で呑み続ける親方。幕下の杉ノ山や市松、
　三段目の鵜池が呼ばれ、杯を次々と交わして討ち死にしていく。
　ちなみに土俵の側では、親方に潰された面々が死屍累々と横たわっていた。
　ヒューヒュー言いながら座り込んでいる大和号や清心道はまだマシな方で、草薙は部屋の隅に
　座り込んでなんかブツブツ言ってるし、大欧牙は突如起き上がって陽気に歌い始めてまた倒れるを
　繰り返していた。っていうかこれって立派なアルハラじゃね？
「次、蛍丸。来なさい。」
「あ、はいっ！」
　実は飲酒の経験が無い蛍。それもそのはず、彼の誕生日は1月7日、つい先日２０歳になった
　ばかりなのだから。おかみさんにドンブリでお酌され、親方にご苦労さんと杯を合わされる。
　ええい、ままよ！と口をつける蛍だが・・・
「・・・あれ？」
　あっさり飲めた。多少匂いはあるけど、全然違和感なく呑めるその酒にかえって違和感を覚える。
「おお！イケる口か、嬉しいねぇ。」
　既に顔を真っ赤にした親方（そらそうでしょ）が笑顔で返す。伝説の横綱もこうなっては
　ただの酔っ払いのオジサンにしか見えない。
「無事勝ち越し、しかも相撲内容も上々だ、結構結構。」

「でも４日目にひとつ負けました、アレに勝てていれば優勝決定戦に出られただけに残念です。」
「うむ、だが三段目とはいえ上位はずっと強いぞ、来場所も気を抜かないように。」
「はい、ところでその４日目の相撲なんですが・・・」
まるで世間話でもするかのように会話する二人だが、一言喋る度にドンブリ酒一杯を
飲み干しているのだから絵的に凄まじいの一言である。蛍の後に続く序二段の力士たちは
彼の思わぬ酒豪っぷりに、頼むこのまま親方を潰してくれ、と祈りながら見上げる。
ツブれていた関取たちもその光景に目を丸くしている。ただ清心道だけは
あーあ、という顔をしてため息をついているが。
どさっ。
小さな音と共に蛍が横倒しに倒れる。親方はなんだいきなりだな、と嘆いて下の力士たちに
彼を下がらせる。
清心道の隣に転がされた蛍は、天上を見上げながら虚ろにあーでもないこーでもないと
自分の相撲の改良点をいろいろ思い描いている。そう、ああすれば勝ててたんだぁ～、
などと嘆きながら。
「いるんだよな、こーゆーペース配分心得ない無謀な奴が。」
清心道はそう言いながら、そういやコイツは相撲もそうだったよな、と思い当たる、
巨漢相手に臆せずに突っ込むその姿勢は呑み方にもそのまま反映されているようだ。
彼はふっ、と蛍の顔を羨ましそうに眺める。そう、コイツは誰が相手であっても
恐れることなくかかって行ける。巨漢でも、親方でも、酒でも。

「少し羨ましいぜ、こいつの性格はな。」

自分はどうだろうか、初めて親方に接した時、栄大付属に久世草介が入門してきた時、

そしていつかの夏合宿、留守を任された稽古場で『あの力士』の傍若無人な振る舞いに

相対した時、俺はどうだった、もしコイツがいたらどうしただろう？

蛍のその存在が自分にない物を気付かせる、馴れ合いだった下の者を奮起させ、全員に

勝ち越しを決めさせる。なるほど、考えてみれば小兵のコイツの奮闘は、今までこの部屋にない

新しい風を運んできた気がする、どうりで親方が気に入るわけだ。

後日、清心道は十両昇進後、蛍丸を付け人にするよう希望し、許可される。

それは部屋内でのお互いが足りない物を埋めるために、大いに役立つ事となる。

第111番　駆け上がる

・春場所、蛍丸。三段目東63枚目　5勝2敗。
新たに清心道璃音の付け人となった蛍丸。この時期は精力的に出稽古に行く清心道と共に
他の相撲部屋を回る事が多かった。特に身になったのは三島部屋や荒浜部屋などの
いわゆる『壊し屋』がいる部屋への出稽古だ、
彼が課題としている『ケガをしない相撲』をプロのレベルで習得するべく、数珠丸や
蜻蛉切に積極的に申し合いをこなしていく。
特に蜻蛉切は蛍丸が気に障ったらしく、何度も必要以上に投げ飛ばしたり、吊りから
叩き落とすなどするが、蛍丸はそのことごとくを無傷で凌ぐ。
ダメ押しに踏み潰すまでやってきたが、その手の嫌がらせは大和国部屋の初日で経験済みだ。
思い通りに蛍丸を壊せず、荒くなった彼の相撲のスキをついて土俵を割らせ、怒り狂う反撃を
さらりと手玉に取る、相手が怒ってくれれば蛍丸得意の心理戦の思うツボだった。
結果、出稽古4日目には「うっとおしいからもう来るな」と出禁になる始末。
清心道に謝る蛍に、彼は「スカッとしたぜ」と笑顔で返した。
・五月場所。蛍丸、三段目西33枚目　6勝1敗
最終日まで6戦全勝だった蛍丸だが、最終日にあの大河内、四股名『國平大河』に
痛恨の黒星を喫し、優勝決定戦への進出はならなかった。
この場所で三段目優勝したのは大峰浩二こと『薫峰』。陽川満、四股名『陽鉈』も
決定戦までコマを進め、2人とも翌場所の幕下昇進を確実なものにした。

ちなみにこの段階で蛍丸は鵜池の番付を上回り、彼に『この裏切り者～』と皮肉られる。

現在大和国部屋で蛍は7番目の地位にいた。

・名古屋場所。蛍丸、三段目東１３枚目　３勝４敗

蛍丸はここで初の負け越しを経験する。さすがにここまで来ると幕下へ向けて皆、

目の色が違ってきていており、蛍丸の相撲は警戒され、研究されていた。

あと彼はもうひとつの己の課題に気付く、夏の暑さに少し弱いのだ。

小兵な彼は大型選手よりスタミナがありそうなものなのだが、元々暑さにあまり強くない彼は

この場所以降、持久力の強化を得るべく長距離ランニングなどのトレーニングを始める。

・九月場所。蛍丸、三段目東４４枚目　７戦全勝、優勝決定戦で初戦敗退（４人トーナメント）

ついに本割で全勝し、優勝決定戦に進出した蛍丸。結果は残念だったが、この場所で

相撲ファンの間からも『下位に面白い力士がいるぞ』と囁かれるようになる。

ちなみにこの場所、彼は大和国部屋で一番成績が良かったため、反省会で親方にたっぷりと

呑みに付き合わされることになる。

・九州場所。蛍丸、三段目西８枚目　７戦全勝、優勝決定戦で３人巴戦、３巡まで粘るも優勝を逃す

蛍丸の相撲が話題になるにつれ、彼への声援と関心は日ごとに高まって行った。そして

相手がそれを意識しだしてから、逆に彼は得意の心理戦で相手を上回っていく。

ソップの彼に送られる声援が気に食わないと雑念を抱いた相手を、時に変化で、時に

真っ向勝負で斬って落とす。巴戦での優勝決定戦こそ体重差を超えられなかったが、

ついに幕下への進出を決定してみせた。

・2年目初場所。蛍丸、幕下東55枚目　5勝2敗

初土俵から一年、ついに幕下に上がった蛍丸。このレベルまで来ると周りは皆、

相撲取り然とした体格と取り口で、彼の異端さはますます際立っていく。

だがそれは蛍丸にとって悪い事では無かった、彼が異端であればあるほど観客は彼に期待し

声援を送る。その声に背中を押され、ますますダイナミックに土俵を奔走する。

・春場所。蛍丸、幕下西34枚目　7戦全勝　優勝決定戦で準優勝（4人トーナメント）

この場所の後、初の春巡業参加で蛍丸は思わぬ自分の人気に驚くことになる。

どこに行っても色紙を持ったファンが待ち構えており、頑張ってと声援を頂戴する、

中には彼を斜に構えた目で見て『あんなの相撲じゃねぇ』などと陰口を叩くファンもいるが

そんな彼らにこそ蛍丸は積極的にファンサービスをする。

自分のアンチこそ大事にしろ、これも大和国親方の教えだ。

・五月場所。蛍丸、幕下東17枚目　4勝3敗

いよいよ関取、十両を意識するこの地位、どの力士も死に物狂いで星を拾おうとする。

蛍丸も懸命に戦うが、やはり皆ここまでとは熱量が違った。何とか勝ち越しは出来たものの

十両昇進は次に持ち越しとなった。

・名古屋場所。蛍丸、幕下西9枚目　3勝4敗

自身二度目の負け越しを喫する蛍丸。とはいえ彼はこの場所で様々な新しい取り口を

試しており、その試行錯誤が逆に星を落とす原因となった。
同僚に『勿体ない』とお叱りを受けるも、それは蛍丸にとって避けては通れない道。
幕内入りし、鬼丸との対戦が目標である彼にとって、技の開発と進化は絶対の命題だ。
それに例え十両に上がっても、次の場所で負け越して陥落したのでは意味が無い。
上で通用する実力を養うために、この場所での負け越しは必要な授業料と言えた。
・九月場所。蛍丸、幕下西１３枚目　７戦全勝　優勝決定戦３人巴戦、３巡まで粘って優勝を逃す
昨年から続けて来た『スタミナをつける稽古』が早くも実を結ぶ。
蛍丸は先場所からの
課題だった長い相撲で体力を上手く分配しながら、なおかつ今のダイナミックな相撲を
見事実践し、本割で全勝を決めて見せた。
彼が指針としていたのは高校時代、彼の後輩でチームメイトだった幸田純一の相撲だった。
あの三日月をも上回って見せた『しぶとい、しつこい相撲』を自分に取り入れ、
より長い時間土俵を駆け回って見せる。当然その姿を見た相手は短期決戦を意識し、
それは彼の変化の格好の的だった。
・九州場所。蛍丸、幕下西４枚目　６勝１敗
先場所の好調そのままに蛍丸は勝ち続けた。ことこの場所に至っては彼はゆるぎない
人気力士になっていた。アウェイともいえる九州で、大男を相手に飛び、駆け、躱し、
時に真正面から斬って伏せるその姿に観客は熱狂する。前座の更に前座でしかない幕下の
その早い時間から福岡国際センターは満員御礼の幕を掲げること

になる。

そして、入門から2年、大和国部屋にひとつの吉報がもたらされ、一人の関取が誕生する。

第112番　贈り物

「蛍丸関、十両昇進おめでとう！」
親方の言葉に拍手が起こる大和国部屋。九州場所で勝ち越した蛍丸は、ついに
関取の地位である十両への昇進が決まったのだ。
「ありがとうございます、ますます精進いたします。」
親方に、皆に礼をする蛍。先の九州場所は幕内で大関の草薙が２度目の優勝をした事もあり
祝賀ムードもひとしおだ。まぁ、その草薙は今日もＴＶ番組に引っ張りだこなわけだが。
「さて、ここで紹介したい人物がいる、どうぞお入りください。」
親方の言葉に続いて稽古場に入ってきたのは、人の良さそうな笑顔をした初老の男。
白髪や顔のシワが年齢を感じさせているが、ピンと伸びた背筋は老人よりも紳士の
イメージを彷彿とさせる。
「初めまして蛍丸関、私、松本と申します。」
そう言って名刺を差し出す。蛍はそれを受け取りつつ、その紳士をまじまじと見る。
「・・・あ！思い出した。以前の祝賀会でお声をかけて頂いた方、ですね。」
２年前、蛍の初土俵だった場所の後、打ち上げ会で彼に声をかけてくれた人物だった。
名刺に目を落とすと『リーンカンパニー代表取締役』の文字。ええ!?あの大企業の？
「蛍丸関のタニマチ（個人スポンサー）を希望しておられる、光栄なことだぞ。」
親方の言葉に体がびんっ！と張り詰める。なにしろ相手は半導体の生産と輸出で
世界的なシェアを誇る大企業、それがまだ十両になったばかりの蛍

を支援するというのだから。
「は、はいっ！ありがとうございますっ！」
固まった体を９０度折り曲げて頭を下げる、相手は自分とは違う世界の人間、もし自分が
力士でなかったら影さえ踏めない存在なのが伝わってくる。
「それじゃ親方、今日一日彼をお借りします。」
そう告げる老人に、親方はよろしくお願いしますと頭を下げる。蛍は下の者が持ってきた
着物を羽織って一緒に外に出ると、止めてあった黒塗りの高級車の前に立つ。
運転手らしき大男がドアを開け、松本氏に続いて後部座席に蛍を誘導する。
「あ、あの・・・どちらへ？」
「ついてからのお楽しみさ。」
ゆったりと席に身を沈める松本氏。蛍は初めて乗る高級車の静粛性に驚きながらも
緊張を和らげんと、ふぅ、と息をついてシートに身を埋める。
しかし・・・この運転手すごい体してるな。ボディガード兼任だろうか、自分より
よっぽど相撲取り然とした体つきなんだが。
高速を駆け抜け、やがて車は千葉県内のインターに降りる。目的地はこのあたりのようだ。
果たして要件というか仕事は何だろう、まさかまだ十両の自分がいきなり企業のＣＭに
抜擢されるはずもないし、社の重役や取引先への紹介あたりが妥当だろうか。
が、目的地は意外にも、会社でも無ければ撮影スタジオでも無かった。
海にほど近いその、こじんまりした小料理屋の駐車場に停止する車。
松本氏に続いて車を降り、そのまま店内に入る直前、蛍はその店の

看板を見る。
〃海鮮小鉢あかいけ〃
「へいらっしゃい！」
暖簾をくぐった先に居たのは、懐かしい顔の板前だった。
「赤池君・・・君の店だったのか、お久しぶり！」
「俺らもいるぞー。」
声の主に驚く蛍。なんと桐仁、陽川、大峰の3関取が座敷に座っているばかりか、別の
テーブルや座敷には幸田、沼田、柳沢、千鶴子に小林。懐かしいダチ高メンバー勢揃いだ。
「この店も松本さんに出資してもろて出せたんスよ。」
赤池がそう解説する。しかしよくこんな大企業のトップに出資してもらえたなぁ、と返すと
逆に赤池の方が『へ？』という顔をする。
「はっはっは、そろそろいいだろ、康太。」
松本氏のその言葉に、後ろに控える運転手がサングラスを外す。その顔を見た瞬間
蛍は愕然とした表情で口を開ける。
「ま・・・松本君！見違えたよ、君だったんだ!!」
かつての坊主頭の印象が強すぎて気付かなかったが、確かにその人のよさそうな顔と
鍛え込まれた巨体はかつての後輩のものだった。
「言ってたでしょ、いつか三ツ橋部長のタニマチになりたい、って。」
松本氏は彼の祖父らしい。企業人の道に進んだ彼は仕事に励む傍ら、かつての同僚への
支援をいろいろ画策してきたそうで、実は桐仁、陽川、大峰のタニマチでもあるらしい。
この店も赤池の為に支援し、赤池もそれに応えて父と共にしっかりと店を切り盛りしている。
「身びいきで言ってるかと思いきや、康太も見る目がある。」
おしぼりで顔を拭きながら松本氏はそう話す。彼が紹介した人物

は皆、会社といい関係を
続けているそうだ。思えばダチ高時代から彼は温厚な性格で人当たりが良かった。
格闘家としての芯の強さも企業人として大いに貢献している事だろう。
「これでゆずが居たら全員集合なんだけどなぁ。」
かつてのメンバーでひとりだけこの場にいない。そう、堀柚子香だ。
女子相撲協会に所属した彼女は、女子相撲の普及のため、仲間と共に世界中を回っている。
時々届くメールで伝わる彼女の奮闘は、蛍にもずいぶん力を貰ったものだ。
「今は確かイギリスだよ、大変だろうによく頑張るよ。」
そう語る蛍。だが周囲の面々がややニヤついてたり、笑いをこらえて目を背けているのに
気付けていなかった。
「しかし女子相撲の普及に世界中飛び回るって、まるでエド○ンド本田だよねぇ。」
ケラケラ笑ってそう話す蛍に周囲の空気が一瞬固まる。え、いや、その例えは?と冷や汗。
「海外でも鬼軍曹っぷり発揮してるのかな?あまり日本的な体育会系空気出してなきゃいいけど。」
蛍が一言発するたびに周囲の緊張感が増していく。だが蛍は場慣れしない場所のせいか
それに気付けない。
「海外でも肉体言語で説得してるんだろうね、目に浮かぶ・・・」
―がしっ!―
蛍の言葉を止めたのは、頭の上から彼をわしづかみにするその手だった。黒いオーラを
背後に感じ、蛍はま、まさか・・・と冷や汗を流し、ゆっくりと振り向く。

「ほほう、とりあえず百〇張り手でも食らってみる?」
『無道の相』を身に纏った堀柚子香がそこにいた。その流れる炎のようなオーラが
彼女の表情にクマドリのような模様を描く、これじゃまんまエドモ〇ド本田だ。
大相撲料亭場所　堀柚子香〇―蛍丸●（鬼無双）
「ふんだ!別に蛍に会いに帰国したんじゃないからね。お姉ちゃんの結婚式に出るだけよ!」
平身低頭で謝る蛍に、ぷんすかむくれてそう返す柚子香。こう言ってはいるが彼女の格好は
和服をばっちり着こなしている、ただ帰国しただけでここまでコーデする必要はないだろう、
元ダチ高のメンバーが仕込んだサプライズは大失敗に終わった。
「そっか、マネ・・・千鶴子さんもいよいよ。」
堀千鶴子。彼女は柴木山部屋の大関、冴の山と親密な仲だった。だが冴関のストイックな
性格ゆえに、横綱に成るという夢を遂げるまでゴールインはしないつもりでいた。
が、流石に待たせ過ぎだ!と親方からお叱りを受け、目先を変える意味でもこの度
めでたく結婚することと相成ったのだ。
「結婚といえば、テッツーと小林さんはいつ?」
沼田がカウンターでそう赤池に、そしてわざわざ皆に聞こえる声で言う。
その言葉に、ったく、と頬をかく赤池と、耳まで真っ赤にして俯く小林。
「ンなコトより、そろそろアレ行こーや。」
赤池の言葉に、蛍以外の全員が『そうだな』と頷く。蛍だけがその言葉を理解できずに
頭にハテナマークを浮かべている。
その蛍の後ろで柚子香がぴょん、と後ろにステップし、両手を広げ

る。まるで着物で
後ろにある壁を隠しているかのように。
「ま、気を取り直して、と。蛍、松本さんと私たちからの贈り物。」
「贈り物？」
柚子香の言葉と態度にいぶかしがる蛍。柳沢が「自信作ですよ」と解説を入れる。
うやうやしく体を横にずらす柚子香。その後ろにあったのは、壁にかかっているのは、
タテヨコ１ｍほどの、一枚の蒼い布。
「・・・あっ。」
蛍は知っている。その布を、用途を、そしてその価値を。
化粧まわし。
関取が土俵入りする際に身につける前掛け。十両以上に昇進した力士のみが身に纏う事が敵う
その力士を象徴する文字や絵が描かれる、力士の顔であり名誉でもある聖衣。
「・・・凄い。」
見入った蛍が辛うじて言えたのは、その一言だけだった。
ぱっと見は漆黒に輝く天の川を連想させる。だがその光の群れは星々では無かった、
無数の蛍火の群れが、蒼い夜天に無数の輝きを散らせている。
中央には日本刀、それもまた柄のすぐ先から刀身が原子霧散するかのように幾多の光に分かれ、
光点の輝きを放ち、舞い踊る。
蛍丸、刃こぼれが蛍火となって剣に戻り、再生したという伝説を持つ名刀。
その物語が、それ以上の神聖さが、この一枚の布の中で『世界』を作っている。
「これを・・・僕に？」
絵から視線を離さずそう言う蛍に、周囲の面々が解説を入れる。
元絵を考えたのは他ならぬ柚子香で、その案に皆が細かい修正を入

れて原案を完成させ
　柳沢のいる帝都大学のＣＧデザイン部の協力を得て立体化時の色合いを決めたそうだ。
　出資した松本氏も満足する出来に笑顔を見せる。
「みんな、そして松本さん、ありがとうございますっ！」
　本日二度目の９０度角の礼。サプライズの第二弾は成功してよかった、安堵し拍手する一同。
「どれ、ひとつ纏って見せてくれないか。」
　その松本氏の言葉に蛍は頷き、着物をはだけて幸田と沼田に化粧まわしを当てがってもらう。
　おおー！と沸く店内。小兵ではあるが絞り込まれた蛍の肉体に、その宇宙を思わせる
　蛍火の群れは実に良く映えた。
「ぜひ『幕内』でこの化粧まわしを披露してくれたまえ。」
「はい、必ず！」
　力強くそう返す蛍。そんな彼に桐仁たちは「お、言うねぇ」と返す。
「今の十両上位は超激戦区だぜ、そんな事言って大丈夫かよ。」
　確かにそうだ。幕内上位に国宝の面々が定着している現在、幕内下位と十両上位のレベルは
　非常に拮抗している。桐仁さえもが何度も幕内と十両の間を行ったり来たりしている状態なのだ。
　そのすぐ下の地位、今一歩で幕内入りに届かない力士に至っても、彼の知る強豪力士が
　ひしめいている。今この場にいる陽川（陽鉈）や大峰（薫峰）、柴木山部屋の薫丸や大河内（國平）
　大和国部屋のダニエル（大欧牙）に澤井（清心道）、幕内復帰を目論むベテランの巌竜に三尾錦。
　彼らを突破していかないと上には行けないのだ。蛍の目指す場所への道のりはここからが
　いよいよ本番であるといえる。
「もちろん、負けるつもりは無いよ、君達にもね。」

化粧マワシを当てがってもらったまま桐仁たちに返す蛍。その言葉で力士の目になった3人が
蛍を睨み返す。本場所さながらのぴりっ、とした空気が店内を包む。
と、店の扉ががらっ、と開き、一人の大男が入って来る。
「おーいテツ！来たでー。って今日は偉い盛況やなぁ。」
マゲ頭に着物、その男も力士だ。赤池の旧知の仲であり、そして彼らの強敵となる一人。
菅正一、四股名『蜂須賀正恒』。
「また増えたよ。」
「今日は十両バーゲンセールの日だな。」
沼田と幸田がやれやれと呆れる。この面々が次の場所以降、幕内入りを目指して激戦を
繰り広げるその光景を想像し、相撲ファンとして心躍らせる。

松本氏が所用で退席し、皆と久しぶりのちゃんこを楽しんだ後、蛍は柚子香と店を出る。
夜風に当たりながら、二人は近況報告や、取りとめの無い話をする。
次々回のオリンピックで女子相撲が参考競技として選出される可能性が出て来たとか、
大和国親方の酒豪っぷりに部屋の皆が戦々恐々としている話など、この2年にお互いが
知らない時間を共有しながら歩く。
姉の結婚式が終わったら、柚子香はまた海外に戻らなければいけない。それはつまり
十両まで上り詰めて、結婚できる身分になった蛍と一緒になることがまだ叶わないと言う事。
「浮気・・・しないでよ？」
その言葉に、柚子香の頭にぽふっ！と手を置く、蛍なりの雄弁な返事。
「結構待たせたからね、僕も少しぐらい待つよ。」

その言葉に気をよくした柚子香が、たたっ、と数歩走り、蛍の方に向き直って言い放つ。

「どうせなら、夢を叶えて。私も叶えるから。」

白い息を吐き出しながら、着物を纏った少女はそう蛍に告げる。

４年前の雪の日、彼に道を示したそのままの姿で。

第113番　22年ぶりの天王山

大相撲名古屋場所、千秋楽の中入り直前の一番、十両最後の取組に会場のドルフィンズアリーナが
沸きに沸いていた。
〝蛍丸回る、まわる、回転し続ける！蜂須賀も懸命に堪えるーーっ！〟
アナウンサーのその絶叫の通り、相手の懐を捕らえた蛍丸はそこからひたすら円運動を続ける。
上から覆い被さった蜂須賀はその回転に巻き込まれながらも懸命に堪える。
十両東の筆頭、蜂須賀と西3枚目の蛍丸の一番、12勝2敗の蜂須賀が勝てば文句なしの優勝で
2場所ぶりの幕内復帰が確実となる。対する蛍丸が勝てば、十両で実に22年ぶりとなる快挙が
起こり得た。両者とも個性的な人気力士ではあるが、それ以上に会場が沸く理由がそこにある。
かつて大学時代、この蜂須賀こと菅正一に潜る相撲を引っこ抜かれて負けた経験がある蛍丸。
そんな相手の攻略のヒントとなったのが、柴木山部屋の大関、鬼丸の使う
『懐に入って振り回す相撲』と、大河内こと國平の『相手のマワシをハンドルのように
回しながら自分も回転する』戦法のミックスだった。
自分には鬼丸のような大型力士を振り回す膂力は無い、ならば自分が相手の周りを回転しつつ
相手をマワシごと回して回転に付き合わさせるこの『蛍の円（まどか）』で相手の足を土俵に
噛ませず、投げを打たせない戦い方で翻弄しにかかる。
蛍丸は回りながら、冷静に相手の呼吸を測っていた。相手の胸に付けた額から肺の呼吸を

読み取り、相手の反撃の瞬間を、その意思を察知せんとする。
胸の圧迫感が額に伝わる、息を大きく吸い込んだ！そして止まる呼吸、来るっ!!
「けえぇぇらあぁぁぁぁぁっ!!」
気合一閃、回転の逆方向に上手投げを放つ蜂須賀。彼の象徴とも言える雄叫びと共に
恐るべき勢いの上手投げが蛍丸を逆方向に吹き飛ばす。
「なっ!?」
思わぬ相手の軽さに驚愕する蜂須賀。飛ばされた先で蛍丸はそのまま逆方向に回転していた。
投げが来るタイミングさえ察知できれば、彼にとって残すのは十分可能だったし、その勢いを
逆に利用して止まらずに攻め立てる、昨年来のトレーニングで十分に養ってきた持久力を武器に
土俵上を動き続ける、止まらない。
「くっそ、がぁっ！」
なんとか回転を止めようと外から蹴たぐりに行く蜂須賀、それを視界の端に捕らえた
蛍丸の血液が沸き立つ。
「（来たあっ！）」
その左足に蛍丸の右足が、内側からまるでヘビのように巻き付いた。間髪入れず右手で
右足首を掴み、相手の足を重心ごと引っこ抜く蛍丸。
―自足取り内掛け『根太起こし』！―
相手をこの回転技の流れにハメた時、相手の反撃方法はいくつかに限定される、
蛍自身も部屋の稽古で草薙や大欧牙を相手にそのパターンを研究して来た。
この蹴たぐり等、足を出して回転を止めようとするパターンに根太起を合わせる流れは
既に彼の手の内にあったのだ。

―ドオンッ!―

背中から豪快に落ちる蜂須賀。爆発する会場内の歓声に負けない声でアナウンサーが

絶叫する。

〝蛍丸勝ちましたーーーっ!これで、これで十両なんと8人での優勝決定戦ーーーっ!!〟

そう、今場所の十両の全取り組みが終了して、何と首位に12勝3敗力士が実に8名並ぶ、

22年ぶりとなる珍事かつ快挙。

薫丸、國平の柴木山勢、清心道、蛍丸の大和国勢、そして荒浜部屋の陽鉈、安曇野部屋の

春嵐（本名：ジョン・J・オーリス）、四ツ谷部屋の七星剣（本名：久我北斗）、青雲部屋の

蜂須賀の8名がこれよりトーナメントで雌雄を決することになるのだ。

ここ最近の相撲界は、十両上位と幕内中位～下位の差がほとんど無い状態であった。

場所ごとに入幕する力士、十両に陥落する力士が入り乱れ、番付は大荒れに荒れていた。

台頭する若手、奮起するベテラン、それぞれの意地が土俵で激突し、名勝負を生み出す、

力士ごとに個性的な強さを持つこの階層は、目の肥えたファンを大いに満足させてきた。

そんな中、十両に昇進した蛍丸は、その飛び抜けた個性的な相撲を存分に発揮する。

初場所8勝7敗、春場所9勝6敗、5月場所10勝5敗の好成績で、この名古屋場所には

いよいよ幕内入りが射程圏内に入る西3枚目まで番付を上げて来た。

飛び、変わり、潜り、掛け、叩き、時には寄り、吊り、ぶちかます。

その変幻自在の相撲を

得意の心理戦が支え、鍛え続けた持久力とケガをしない心構えが15日の長丁場を
乗り切らせるどころか味方にさえしていた。
角界入りして以来、未だ優勝経験のない蛍丸にとって、ここでの優勝は幕内入りを
より確実なものにするだろう、名実ともに天王山となる優勝決定戦である。
くじ引きにより、組み合わせが決まった。
・蜂須賀―清心道
・七星剣―國平
・陽鉈―春嵐
・薫丸ー蛍丸
初戦は運不運が大きく作用した。先程取り組みを終えたばかりの蜂須賀はやはり
疲労が隠せず、逆に清心道は今日の一番を早い相撲で終え、体力に余裕が十分あった。
万全の体勢からの寄りで清心道が勝ち進む。
2戦目は國平が得意の変則的な相撲でかき回すが、ついには七星剣の剛腕に捕らえられる。
一気の寄りを懸命の打っちゃりで返そうとする國平だが、惜しくも逆転はならなかった。
3戦目、春嵐はその長い腕と絶妙の間合い取りで陽鉈を近づけさせない。2年前に
引退した大兜に変わって安曇野部屋に入門した彼は、ここまで一気に番付を駆け上がって来た
勢いそのままに陽鉈を土俵下に吹き飛ばす。
そして4戦目、苦労人として積み重ねを続け、ケガを克服して這い上がって来た
ベテラン薫丸と、幕下から観客を沸かせ続けて来た曲者力士、蛍丸の対戦。
「ほったるまるーっ！今日も魅せろよーーっ！」

「薫丸、行けよぉーっ！」
土俵上で仕切る両力士に声援が飛ぶ。両者とも十両では人気がある力士だが、そのファンの
付き方は全くの逆方向だった。
蛍丸ファンは薫丸を『面白味の無い地味な力士』と一蹴し、薫丸ファンは蛍丸を
『奇抜なだけのフザケた相撲』と斬って捨てる。
取り組みの後、歓喜するのは果たしてどちらのファンか・・・？
―はっきよい―
両者頭で激突する。蛍丸は『蛍火の如し』で横っ飛びに移動するが、やはり柴木山部屋の
薫丸にはその手は通用しにくい、飛んだ方向に素早く向き直り、得意の突き押しで
土俵際まで押し込んでいく。
「（やっぱり・・・強い）」
蛍丸は心で呟く。地味な印象のある薫丸だが、その『心』の強さはよく知っている。
彼が初めて十両に昇進した時、直後の合宿で大怪我を負って陥落してしまった事、
引退が囁かれる中、それでも諦めずに少しづつ番付を這い上がってきて、ついにまた十両に
返り咲いたそのベテランの意地を。
体を低くし、潜り込もうとする蛍丸だが、それをかち上げで跳ね上げる薫丸。突き押し相撲の
彼にとって懐に潜られるのは致命傷になりかねない、潜らせるものかと腕を振るう。
「（ここだ！）」
蛍丸はその腕を逆手で取り、空手の捌きのようにねじり、いなす。
「（逆とったり、喰らわない！）」
土俵際から脱出する蛍丸に素早く向き直る薫丸、取られていない腕で突っ張り、取られた腕を抜く。

通路から居並んで観戦する幕内力士、大関の冴ノ山が拳を握って心で薫丸に檄を飛ばす。

いいぞ、その調子だ、頑張れ丸！

体を入れ替えられたこともなんのその、再び蛍丸を土俵際まで押し込む薫丸。

蛍丸はそんな彼の実直さ、誠実な性格を計算した上で、この状況を変える奇策に出る。

―パシッ―

相手の突っ張りを左手で受ける、指を絡めさせて『片手の手四つ』の状態を作ると、

右手も掲げて両手の手四つに持っていこうとする、相手もそれに応え、蛍丸の右手を握・・・

―ドン！―

掌が合いかけた瞬間、蛍丸は組んでいた手を引きつけ、そのまま肩から体当たり！

その流れで体を相手の懐に滑り込ませる。さすがの薫丸も手を組まれた状態では

潜る相手をかち上げる事が出来ない。

形勢逆転！両下手を取った蛍丸が今度は相手を土俵際まで押し進める。相手は

押されながらも腰を割り、蛍丸の両手を閂に決める、俵に足が掛かり、寄りを押し止める。

―ゴツ！―

蛍丸は止まらない、すかさず『十字かち上げ』で相手のあごを跳ね上げる。軽量の彼にとって

動きを止める事はそれ自体が危険だ。

薫丸は衝撃を感じながらも、頭を下げ直して腰を割り、再び押しの体制を取る。

自分はこれしかない、親方と共に育んできた押し相撲、それが自分の相撲なんだ。

例え何度切り返されようと、土俵際まで押し込まれようと、そこか

ら、ただ『押す！』
彼は虚無を押していた。目の前から蛍丸がかき消えていた、そのらんらんと輝く目と共に。
「おおおーーーっ！ちょっ！」
「うっそおぉぉぉーーーっ!?!!」
声にならない声を上げる観客、力士、そして報道陣。
なんと蛍丸は相手を土俵際に押し込んだその状態から、八艘飛びで相手を『飛び越して』
見せたのだ。土俵の『外』に向かって。
下手をすれば自滅行為だ。それでなくても薫丸が残せば、わざわざ自分から絶体絶命の
土俵際に位置することになるこの行為。
それでも彼は飛んだ、生真面目な薫丸関の意識の裏をかけるこの一手を迷わず選択する。
相手の後ろマワシに手を引っかけ、辛うじて俵の上に着地する蛍丸。だがもしこの変化を
相手が残していたらそれで終わる、その相手、薫丸は・・・
土俵にばったりと、手をついていた。
信念、信条、そして積み重ねて来た物、それら全てが彼に虚無を全力で押させた。

勝者にも、そして敗者にも、惜しみない拍手が注がれる。
お互いの矜持をぶつけ合ったその両者に対し、誰が非難などできようか。
礼をし、土俵を後にする薫丸、その表情は凛として爽やかだった。
１３枚目の自分にとって、優勝を逃したことにより幕内入りは来場所以降に持ち越しだろう。
花道の終わり際、冴ノ山が薫丸を出迎える。惜しかったな、と声をかける彼に
薫丸ははっきりと答える。
「なぁに、次は勝つさ。」

一方、勝って土俵下のたまりに腰を下ろす蛍丸、その表情はより一層厳しさを増す。

あとふたつ、あとふたつ勝てば幕内に、あの火ノ丸さんに手の届く所まで行ける！

そのために・・・

土俵の対面にいる大男にその視線を向ける、相手もその眼光を蛍丸に返し、睨む。

あの大兜関に引退を決意させた、彼の為に道を譲ったと言わしめるほどの力士。

ジョン・Ｊ・オーリス。四股名『春嵐』―

第１１４番　小龍景光の見た光景①

大相撲名古屋場所、十両の優勝決定戦。その１回戦が終わりベスト４が出そろった時、
升席から観戦していた狩谷俊、元国宝『小龍景光』がいい笑顔でこぼしていた。
「くっくっく、栄大付属ＯＢが３人に三ツ橋かよ、嬉しくさせてくれるじゃねぇか全く。」
彼の顔が緩むのも無理はない。清心道こと澤井は先輩、七星剣こと久我と、春嵐こと
ジョンは後輩、そして蛍丸こと三ツ橋はかつて合宿で胸を合わせ、インターハイの団体戦、
自分の最後の公式戦、最後の真剣勝負を戦った相手。
「さぁ、誰が最後に勝つ？」
―ひがぁ～しぃ～、せいしぃんどぉ～。にぃ～しぃ～、しちせぃ～けん！―
呼び出しに応え土俵に上がる両力士。体格はほぼ五分ながら見る者のは七星剣の
勝利を予想していた。
七星剣はかつて『最後の国宝』と称された高校生。卒業後番付を怒涛の勢いで
駆け上がって来た猛者中の猛者だ。彼にとって十両優勝も通過点でしかないだろう。
それは強豪力士を輩出していなかった四ツ谷部屋で駆け上がってきたことからも明白だ、
叔父にあたる飯田氏（千葉県、西上高校相撲部監督）の遠縁ということで四ツ谷親方に
紹介された彼だが、親方に「ウチでは君の稽古相手にはならんだろう、他の部屋へ・・・」と
言われた時の彼の返した言葉はあまりにも有名だ。
「親方、横綱を育てた親方になりましょう！」

対する清心道は長い間3段目と幕下で燻っており、十両に上がっても番付をなかなか
上げられないでいた。今場所の好調もどこか『今だけだろ』『たまたま調子が良かったんだ』
という見方をされている。
―手をついて―
「(今場所だけしか見えてない連中は気付けないだろうな、ここんとこの澤井さんの
相撲の変化に・・・。)」
升席で見ていた狩谷には違う見解があった。彼はケガで現役を引退して以来、
マネージャーとして相撲を『外から』見て来た。そんな彼にとって、ここ最近の清心道の
相撲の変わりようは明らかだった。
「(油断すると食われるぜ、久我!)」
―はっきよい―
バチン!両者胸でぶつかる。すかさず得意の左四つに組もうとする七星剣。
だが清心道は左手をかち上げ気味に相手のハズに差し込み、右上手を取らせない。
右手は脇を締め、絞り込んで相手の左下手を殺そうとする。
「(草薙関と同門だったな、右上手を取らせない相撲で来たか!)」
七星剣の判断は早い。ならばと左手を差し込むと、そのまま強引にすくい投げに行く。
その投げに清心道の巨体が泳ぐ。そう、七星剣の強さを支えるのはその剛腕と、それを
使う決断を下す勝負勘の良さだ。
彼には尊敬する先輩がいた。高校時代ひとつ年上の滝沢、国宝候補『繁慶』と呼ばれた男。
チームの中でも彼だけにはどうしても勝てなかった。その抜群の勝負勘に自分の相撲は

ことごとくツボを外され、土俵に転がされ続けた。そんな先輩と稽古を重ねるうち、

久我は勝負所を察する嗅覚を磨き、ついには滝沢を超えるほどの判断力を会得する。

滝沢が角界入りしてすぐ交通事故で重傷を負い、夢を絶たれたことに彼はまず失意し、

そして彼の分も！と奮起する。

滝沢の遺志を受け継ぐ『心』、彼から学んだ『技』、そして持ち前の剛腕『体』、

それらを持ち寄った最後の国宝が番付を駆け上がり、弱小相撲部屋を角界の強豪部屋に

育てんとするのも当然と言えた。

「くぅっ！」

かろうじて残す清心道。だが体は崩れている、ここから胸を合わされて寄られれば

抵抗できずに土俵を割るしかないだろう、かつての彼ならば、だ。

「ふんっ！」

当然のように胸を合わせて来た相手に左腕をこじ入れて距離を作る、先ほどからハズに

左手を差し込んでいたことがここで生きた。頭を付け、相手の寄りを止める、しぶとい。

「そう、本当に最近は粘り腰出て来たよな、澤井さん。」

狩谷がそう感心する。清心道は良くも悪くも教科書の様な相撲を取る力士だった。

勝つときは万全に勝ち、負ける時は成す術なく負ける。だが最近の彼は特に窮地に陥った時

懸命に足掻き、時にはそれで逆転勝利をものにすることさえあった。

そんな彼の変化の原因も狩谷には何となく予想がついていた。大和国部屋に入門し

彼の番付を後ろから追い立てて来た『あの力士』が無関係ではない

だろう、と。
「（ったく、嫌になるぜ。）」
清心道は心でそう呟く。組み合っている相手から感じる膨大な脅力もそうだが、何より
自分の後から次々と追い越していく存在に。
２年の時の草薙、全国団体決勝で自分を負かせた鬼切、卒業後に栄大に入学したこの久我、
そして大和国部屋に入門し、自分の付き人からあっという間に卒業し、追い立てて来た三ツ橋！
あるいは身近にいた草薙の存在が、彼に線引きをさせていたのかもしれない。自分と草薙の
超えられない差こそが『才能』という奴なんだ、と。
だが三ツ橋が入門してきてその考えは改めざるを得なかった。その懸命さもそうだが、何より
相撲に対する姿勢の違い。常に新しい技を研究し、ケガの回避法を念頭に置き、相手の研究を
怠らない。
かつて虚仮にしていた小兵なればこその、その真摯な姿勢。角界で生き残るためにあらゆる
努力や工夫を惜しまず、格上の者にも臆さずに向かっていけるその芯の強さ。
対して自分はどうだ?.なまじ相撲が完成していると思い込んでいたがゆえに前に進めていない、
昔からそうだった。小兵を相撲すべきではない存在だと、天才を超えられない存在だと、
勝手に線引きしていた。
なまじ相手の目を見て心理を読む才能があっただけに、自分を上回る眼光をたたえた相手には
負けても悔しさすら沸かなかった。舟木に、黒田に負けた時のように。
「（どいつもこいつも可愛げが無い、鵜池の方がよっぽどマシだぜ！）」

大和国部屋で上位の壁に心を折られ、下っ端イジメしかできなかった付き人。彼すらが
三ツ橋の奮起に負けてなるものかと奮起し、ついには幕下にまで登ってきていたのだ。
―俺が奮起しないでどうするよ！―
頭を付けた状態から一気に寄り、胸をどんっ、と合わせて体ごと突き上げる。無論この程度で
七星剣が揺らぐわけは無い。だが彼の狙いは別にあったのだ。
―ぱしっ！―
清心道はここで思い切って『叩き込み』に出る。自分が久我に勝っている点があるとすれば
動きの速さ、スピードだ。その利と、三ツ橋が常々意識している『引く前に必ず押す』を
応用してのこの技に、大きく前のめりになる相手。
「いくかっ！」
足を前に踏み出して残す七星剣、ただ残すだけでは無く、腰を割って相手の攻めに対応した
姿勢をすかさず取る、彼の勝負勘の良さはこんな場面でも顕著に出る。
そして相手を視界にとらえた彼は、その勝負勘の良さが故に、自分の敗北を悟る。
清心道はなんと相手を叩いた後、バックステップして腰を割っていた。今にも突進
しそうな程に前傾したその様は、まるで発射直前のミサイルを見るようだった。
「（立ち合いを・・・やり直す気か！）」
大関鬼丸の『不知火型のぶちかまし』や、蛍丸の『蛍火の如し』からのリスタートのような
はっきよい後の立ち合いのやり直し。それは叩きに耐え、腰を割った七星剣にとって
最悪の選択をされたと言えた。腰を割るという事は踏ん張りがき

く半面、次の行動が一手遅れる、
つまり相手のぶちかましをこのままともに受けるしかないのだ。
バッチィィ・・・ン！
ぶちかましを食らい、成す術なく土俵を割る七星剣。その様はまるで立ち合い『待った』を
した力士が相手に押し出されるそれに似ていた。しかし立ち合いが成立している今、勝負が
止まることは無い。
―せいぃ～しんどぉ～―
勝ち名乗りを受ける清心道。土俵を降りる七星剣に目をやると、そこには自分を睨みつける
彼の眼光があった。今度こそは、という光をたたえた彼の目を、その意思を読み取る。
「（ああ、いつでも来な！）」
覚悟。来場所以降で七星剣の、そして幕内の強豪たちの、格上の相手に対する決意を決めて。
狩谷は後輩の健闘と、先輩の勝利に拍手を送る。まずは澤井さんが勝った。
さぁ次はどっちだ？ジョンよ、三ツ橋よ、お前たちはどんな相撲を見せてくれる？

―ひがぁ～しぃ～、はるぅ～あらぁ～しぃ～。にぃ～しぃ～、ほたぁ～るぅ～まるぅ～―

第１１５番　小龍景光の見た光景②

「さぁ、お前の番だ、上がってこい！」
「はいっ！」
清心道と入れ替わりに土俵に上がる蛍丸。これに勝てば大和国部屋同士で優勝を争うことになる。
が、そのためには目の前にいる大きなヤマを越えねばならない。
春嵐関、本名ジョン・Ｊ・オーリス。１９５ｃｍ２１２ｋｇの巨躯、ハワイ出身力士特有の長い手足で
相手を突き出すのそのスタイル、その姿に誰もがかつてのハワイの英雄、華和を思い出させる。
外国人初のその横綱をひたすら追いかけ、そこに成ろうとしている彼の姿は、ちょうど大和国に
成る事を目指して相撲を取る大関、草薙と姿が被る。
そしてその戦い方は、蛍丸にとってまさに天敵とも言えたのだ。事実先場所、今場所と
２度対戦して、いずれも全く相撲にならずに敗れていた。
何より厄介なのが春嵐の空間把握能力の高さだ。潜ろうとしても突き放され、掻い潜ったと
思ったら相手自体が下がって間合いを戻し、横に飛んでも上に飛んでもその空間把握能力で
まるでクレー射撃のように突き放しで撃ち落とされる。
潜れず、変化が通用せず、突き合いで勝ち目など皆無、まさに八方塞がりな状況だった。
升席から土俵を見上げる狩谷俊もまた、この一番はジョンが勝つだろうと思ってはいた。
ただ相手はあの三ツ橋だ、どんな奇策でこの不利な状況を打破するのか、かつて小兵だった
自分とその姿を重ね、期待して立ち合いを待つ。
―手をついて―
対峙する両力士。蛍丸は相手の目を見据える、春嵐の目は一点の曇

りなく雄弁に語っていた。
華和にナルンダ、華和の突き押し相撲を貫くンダ！それで僕が勝つンダ！と。
ゆっくりと腰を下ろす春嵐に対し、蛍丸は仕切り線から一歩、二歩と下がり、なんと半身の
体制のまま腰を下ろす。
ざわめく会場、目を見張る狩谷、厳しい表情になる春嵐。
「あっの野郎・・・！」
それはかつて狩谷が得意としていた、まるで徒競走のクラウチングスタートのような仕切り。
ここから一気に走り、懐に潜り込んで足技でカタをつける、世界を制した国宝『小龍景光』の相撲。
「キャプテン・カリヤの真似をスル気か！」
春嵐の目が怒りを湛える。かつて栄大付属で自分を鍛え、チームを引っ張って来た尊敬する
先輩の仕切りを真似られ、全身の血が沸騰する、負けるモノか！
蛍丸は終始、春嵐の目から視線を外さないでいた。今場所で彼に惨敗してからずっと
試行錯誤してきたその戦法を生かすために必要な事、それは清心道が得意としている
『相手の目を見て感情、戦法を読み取る』事が絶対条件だったからだ。
―はっきよい―
軍配が返ったその瞬間蛍丸は一気にダッシュする、目指すは相手の内懐、その一点！
―バゴン！―
春嵐の強烈なかち上げが蛍丸の頭を上半身ごと浮き上がらせる、予想していたその突進が
いきなり通用するわけが無いのだ、続くもろ手突きで一気に土俵際まで押し返される。
しかし春嵐もかち上げからもろ手突きと、突き放す系の技の連発に上半身が起きてしまい

追撃をかけられない。だがそれで問題無かった、彼の空間把握能力をもってすれば、
距離さえ空いていれば蛍丸がどう動こうと対処できる、今まで同じ様に。
「・・・おいっ！」
狩谷が嘆く。なんと蛍丸は飛ばされた先で再度半身に構え、立ち合いと同じように突進！
先程よりもさらに低い軌道で相手に突進する。
「（シィィット！）」
腰を割り直した春嵐は、その突進を両手で肩を掴んで止める。通用するモノか！と、まるで
荷物のように相手を突き飛ばす、再度俵に足が掛かる蛍丸。
そしてまた半身の体制を取る、そのらんらんとした眼光で相手を睨み据え、体を沈めて
さらに低い体制で突っ込んでくる。あくまでも潜り込むという意志を体現するその戦い方で。
「（ソノ構えを、止めろォォォッ！）」
春嵐はかつて世話になった先輩の立ち合いを3度も繰り返されて怒り心頭になっていた。
それをフェイントにして変化するならまだしも、キャプテン・カリヤそのままの相撲で
自分に通用すると思ってイルノか、カリヤを甘く見るな、お前なんかに真似が出来ルモノか、
僕の相撲、憧れるハルワの相撲にそんな付け焼刃が通用すると思ってイルノか！
―ビチィィィッ！―
超低空の蛍丸を、超低空の春嵐のかち上げが跳ね返す。あくまで潜る、あくまで突き放す、
土俵上での両者の意地の張り合いは未だ膠着して決着がつかない。
「（おいおいお前ら・・・意地張り過ぎだろ、冷静になれよ。）」
狩谷がそう嘆くのも無理はない、特にこの3度目の三ツ橋の突進は

いくらなんでも低過ぎだ、
もし『叩き込み』が来たら成す術なく潰されるだけじゃないか。
ジョンもジョンだ、幾ら何でも華和の相撲に拘り過ぎだ、ここまで低く突っ込まれたら
突き放しは相手を起こして助けるだけじゃないか、叩き潰せよ！と。
だが４度、半身の姿勢を取った蛍丸は、４度目の突撃を放つ、まだだ、まだ足りない、
もっと速く、もっと低く!!
―相手が『その手』に気付くまで！―
「ＮＯ、ノオォオォッ！」
春嵐はまるで地面に落ちた荷物を拾うかのような体勢で相手の肩を受け止める。
あくまでハルワの相撲を！その意思が低すぎる相手を捕まえ、引き起こし、突き放す。
その時だった、春嵐の目が、表情が、わずかに曇る。
「（ボクは・・・コイツは・・・何をやってルンダ、こんなの叩き込めバ終わるジャナイか！）」
５度目の半身の姿勢を取った蛍丸、そのらんらんと光る眼光は、相手の心理の変化を
見逃さなかった。
「（次だ!!!）」
意を決した彼は突っ込む、あくまで真っすぐに。
飛ばない、躱さない、まるで一本の矢のように相手の懐に放たれる体と、その意思。
吸い込まれるように春嵐の足元に飛んできた蛍火を、春嵐は上から叩き落とす。
その瞬間、誰もが彼の勝利を、土俵に落ちる蛍丸を、草むらに叩きつけられる蛍を想像した。
事実蛍丸は四つん這いの姿勢で止まっていた。行司が春嵐の方に軍配を上げようとした時

狩谷が、会場中が、行司が、そして春嵐自身が声を上げる。
「「げぇっ!!」」
なんと蛍丸は叩かれた勢いで相手の両足首を両手で掴んで、腕立て伏せのような姿勢で
耐えていた。その体は足の裏以外、未だに土俵に触れてはいなかったのだ。
―裾取り『足枷（あしかせ）』―
かつて高校時代、ＩＨ女子相撲の準決勝で池西檸檬の叩き込みを宮本蜜柑が耐え凌いだ
その悪足掻きの極みともいえる体の残し方、それをここで使ってみせる。
彼は忘れていなかったのだ。人気のない女子相撲、自分たちが会場設置を手伝った
小さな会場でのささやかな試合、そこで見せた彼女たちの戦い、それすらも己の血肉として
取り入れ、天敵ともいえるこの相手への切り札として昇華してみせた。
清心道が土俵の下で、草薙や大和号、ダニエルが控室で、大和国親方すらが理事室で
思わず笑いをこぼす。対、春嵐の稽古でこの突拍子もない凌ぎ方を取得しようとした
蛍丸に、皆は一様に『そりゃ無理だろ』と返すしか無かった。
だが場所中にもかかわらず彼は習得してみせた、かつて土俵でこの凌ぎ方をした
選手を僕は知っている、ならば僕もやってみせると。
カギとなったのは相手が叩き込みに来るタイミングだ、それを知るために蛍は
恩師、諸岡の目線と心理の誘導に加え、清心道の相手の目を見て意思を探る洞察力を
意識して土俵に上がっていた。
４度目の突撃の後、確かに春嵐の目つきが変わった。自分を睨めす

えていたその眼光は
その時から『何かに気付いて仕事をする目』に変わっていたのだ。
それはまるで
信号機のように、高難易度の技を決めに出るタイミングを教えたのだった。
足枷、その名の通り春嵐は動けなかった。２１２ｋｇの体重を支える足に、蛍丸の上半身の
重量をクサビのように押し付けられては動くことも叶わない。
蛍丸はすかさず自分の左足、右足と引き寄せて重心を安定させると、体ごと相手のマワシに
ぶち当たる。掴んでいる足を引き、相手を後ろに薙ぎ倒す。
―ドオォ・・・ン―
巨体が背中から堕ちる。
一瞬の静寂の後、大歓声に包まれるドルフィンズアリーナ、何て相撲だ！これだから
蛍丸の相撲は面白れぇんだ！こうでなくっちゃあな！
「あ・・・ああ・・・」
狩谷はぽかんと口を開けたまま固まっていた。なんだよこの相撲、ここまでやるか!?
―ほたぁる～まるぅ～―
土俵上で勝ち名乗りを受ける蛍丸。会場は万雷の拍手に包まれる、ついに決勝、同部屋対決だ！
狩谷もまた呆れ顔で拍手を打ちながら、心の中で唸っていた、コイツの相撲を幕内で見てみたい、と。

西の花道、その入り口でこの一番を見ていた三人の力士が嬉しそうに語る。
「おいおい、ソレまで使うのかよ、流石と言うかなんというか・・・」
「三ツ橋・・・ホントにとんでもないよな、君の相撲は。」
「あの蛍がのう、まさかここまで来るとは思わなんだ、大したもんじゃ。」

鬼切と太郎太刀、そして鬼丸。かつてのチームメイトの驚くべき成長ぶりに3人が
揃って目を細める。
あの弱かった蛍が、ありとあらゆる工夫をしてまさかの領域まで駆け上がって来るとは、
これは来場所が楽しみじゃ、と唸る鬼丸。

「甘ぇコト言ってんじゃねぇよ、鬼丸！」
それは彼ら力士の誰かの言葉ではない、花道の脇の観客席にいた、立派な体躯の男が
放った一言。
鬼丸は彼を見て、ぞわっ！という悪寒を走らせる。彼の胸の奥を黒く塗りつぶし、
全身の血が逆流するような感情を、かつての負の感情を沸き起こす。
―『鬼丸殺し』下山倫平―

第116番　蛍丸と清心道璃音

―ひがぁ～しぃ～、せいぃ～しんどぉ～、にぃ～しぃ～、ほたぁ～るぅ～まるぅ～―

呼び出しの声を受け、大和国部屋の両力士が土俵に上がる。いよいよ十両優勝決定の一番。

中入り前だというのに観客のボルテージは最高潮だ。

「いっけーっ！ほったるまるーーーっ！」

「清心道ーっ！潰せ潰せーーっ！」

「慣れ合うんじゃねぇぞー、バチバチやれよーーーっ！」

蹲踞して柏手を打ち、塵手水に移る。清心道の眼前には蛍丸のそのらんらんと輝く瞳。

相手の目を見ることで心理の洞察を得意とする清心道に対し、目線の誘導で心理戦に

持ち込む蛍丸の一番となれば、当然この時点で両者の眼光が激しく交錯する。

その蛍丸の姿を視界に収めながら、清心道はかつての自分の見解を、己自身で否定する。

―気の毒にな、なまじ仲間が強いせいでこんな場違いな場所に放り込まれてよ―

「(場違い？じゃあ今あいつがいるこの場所は一体何なんだよ、おい。)」

―仲間も仲間だ、この先恥をかく未来しか無ぇ雑魚を、どうして連れて来た―

「(恥？そんなもん漢を強くするコヤシだろうが。コイツもそうだ、黒田もだな。)」

―つーかピョンピョン跳ね回るのは相撲じゃねぇ―

「(この満員の国技館のヤツに対する歓声聞いて見ろよ、みんな蛍丸の相撲を楽しんでるぜ。)」

―大抵のチビは体格差に耐えきれず壊れて終わりさ、お前んとこの三ツ橋のように―

「(俺んトコの三ツ橋は、それすら念頭に置いてるぜ。見ろよ、あの体でここまで来て
サポーターひとつ、シップ一枚張ってねぇ。)」
なぁ、どう思う?自分よ。
大きな体で強者を気取って、才能のある者に挑みきれずに分相応に落ち着いて、俺はそこから
コイツほど努力をしたか?数えきれない課題を自分に課し、それを糧にしてここまで辿り着いた
この男のように。
俺は今でも、コイツと相撲を取るのを馬鹿馬鹿しいとでも思っているのか・・・?

土俵際で汗を拭きながら蛍丸は思う。清心道関、かつての澤井璃音と桐仁との1戦。
あの一番で蛍は、桐仁との差を改めて思い知らされた。自分が首藤さんにしたのは
無礼ともいえる奇策だったのに対し、桐仁はこの大きな相手を右に左に振り回し
取り直しの一番でも勝って見せた、体力が全く残っていない状態で、だ。
もし僕が準決勝でケガをしてなかったら、決勝はどうだったろう。
決まってる、ダチ高の切り札として桐仁が出てたに違いない、誰だって、僕だってそうする。
―もし実力の劣る僕が出て、勝てるかもしれない試合を壊していたら―
ああ、かつてそんな話をした、あれは幸田君と海で話した時だっけ。
彼の友人とかつての自分が重なる、分不相応の舞台に立つ責任と、その結果の後悔。
そう、自分はあの時どう転んでも、澤井選手と試合することは無かっただろう。
そしてそれはプロになっても実現しないと思っていた。

親方に道を示され、入門した部屋には彼がいた。共に研鑽し、同じ釜の飯を食い、
番付で先んじる彼を追いかける、ある意味それは競争ではあっただろう。
だけど同部屋だけに本割で対戦することは、真剣勝負をすることは無い、そう思っていた。
―手をついて―
交錯する眼光。目の前にはかつて侮った小兵がいる、自分が戦えないと思っていた大男がいる。
高校時代の『忘れ物』。そんな一番が今、幕を開ける―
先に手を下ろしたのは蛍丸の方だ。上体を起こした『狛犬型仕切り』で両手を土俵に付ける。
対する清心道はオーソドックスな仕切りでタイミングを計る、四股名の通り奇をてらわない、
正道を行く仕切りで相対する。
「お、おいっ!蛍丸が・・・」
「おおおおっ!?」
観客がそのアクションにどよめきを見せる。何と蛍丸は清心道が仕切るのに合わせるように、
上体をぐぐっ!と下げ続け、付いた手を前に前にと滑らす。何と狛犬型仕切りから
体を沈めて平蜘蛛型仕切りに『変化』する。
―はっきよい―
蛍丸が、清心道が立つ。両者頭から激突しガツンという音を響かせる。押し勝ったのは
清心道の方だ!
「(いくら小細工をしても目は嘘を付けねぇな、蛍丸!)」
清心道は蛍の仕切りの変化を見ていなかった、彼が見ていたのは、その曇りなく
らんらんと光る蛍火の様な目の光のみだった。彼はそれで確信する、真っ向勝負だ!

「(重いっ！)」
蛍丸は弾かれながら痛感する、相手の体、その重さと膂力を。
それでもそれを体感したかったのだ。高校時代の忘れ物、そしてこの先も二度とないであろう
この力士との真剣勝負、心に刻むべきこの一番を！
捕まえに来る相手に対し、蛍丸は低く当たるとそのまま『蛍火の如し』のずらしで
相手の脇を抜けようとする。だが常日頃から胸を合わせている相手にそれは通用しない、
右下手を抑えた清心道は、そのまま投げを放って相手を正面に持って来る。
俵に足が掛かった蛍丸は、ここでぐっと体を縮める。構わず組み付きに来る清心道に対し
蛍丸は低い軌道で相手の懐に突っ込む。
「足取り！」
先の一番で見せたタックルを察知した清心道は、両腕で相手の肩をザルすくいのように
すくって受け止め下半身を取らせない。そのまま相手の上半身を起こす、あとは突き出せば
終わりだ！
次の瞬間、蛍丸はなんと相手の左ヒザを踏み台にして、自ら後ろに飛んでいた。
と同時に突き出しに来た清心道の右手を両手で掴み、引きつけて土俵に戻りつつ
逆に相手を引っ張り込み、飛び越す。
アリーナがおおおっ！と沸く。土俵の外に飛んでそれでも『死に体』と取られないのが
蛍丸ならではだ、さすがは令和の牛若丸の異名を取る男！
着地する蛍丸、向き直る清心道、対峙する両者が三度激突する。
―ゴッ！―
蛍火の如し・潜で懐に潜り込み、両下手を取る蛍丸、行くぞ！

上から覆い被さり、その変幻自在の動きを封じる清心道、来い！
相手を引き付けて反り投げを放つ蛍丸。大きく前方に体が泳いだ
清心道は、左足を踏み出して
こらえる。その足に蛍丸の右足が巻き付く、内掛けから右手で自分
の足首を掴む。
―自足首取り内掛け『根太起』―
「ぬがあぁぁぁっ！」
清心道が吼えた。内掛けされた足を逆に外掛けで返しにかかる、蛍
丸の手と足の両方の力を
足の力のみで跳ね返そうとする、なんという膂力！
足首を掴んでいた蛍丸の手が切られる、次の瞬間、彼の体が後ろに
持っていかれる。
「もらったっ！」
そのまま外掛けから体を浴びせて倒しに行く清心道。が、次の瞬間
彼はぞわっ！とした
悪寒に襲われる、相手は真後ろに倒れずに体を回して自分を巻き込
んでいる、右手首を
掴まれて巻き込み、脇に右手を差し込まれて掬われ、内掛けしてい
た足を跳ね上げて
掛け投げに持っていく、これは・・・！
―3点式掛け投げ『天地返し』！―
同じように相手の内股に足を差し込む『内掛け』と『掛け投げ』。押
し引きの方向が逆な
表裏一体の技を交互に出す連携に、ついに清心道の体が飛ぶ。
「つくあぁぁぁっ!!」
―ドンッ!!―
清心道は耐えた。執念で右足を前に出して土俵を踏み締める、掴ま
れた右手首を叩っ切り
体を巻き込まれることなく体を残す、見たか三ツ橋っ!!
清心道の体が、振り子のように揺れる、前から、後ろに。
「せぇやあぁぁぁぁぁっ!!」

蛍丸が吼える。彼は引き技の『天地返し』から再び押し技の『内掛け』へ移行していた。
まるで釣り鐘を揺らすように、相手の巨体を後ろ、前、そしてまた後ろへと
片足立ちで取り付いたまま、揺さぶる。
その千変万化の崩しに、ついに清心道の体の芯がバランスを失う。
―仏壇返し『巨木抜き』！―
ドオオオオ・・・ン！
背中から倒れる清心道、その上に被さって四つん這いになっている蛍丸。
そして行司の軍配が『西』に翳される―
「十両優勝、蛍丸ーーーーっ!!」
アナウンスの絶叫と共に大歓声が沸き、座布団がドルフィンズアリーナを乱舞する。
この小さな力士が土俵を舞い、潜り、そして大男をなぎ倒し続けて、
ついに栄冠と共に
『そこ』に辿り着いたのだ。
幕内。相撲の最高峰、横綱をはじめとする４２人の怪物の住処。
いよいよだ、このサーカスのような自由な相撲を取る力士が、ついに頂点の世界に挑む。
その先でどんな相撲を、どんな光景を見せてくれるのか、その期待感に観客は声を上げる。
相撲を見ていて良かった、こんな痛快なシーンをついに最高峰の世界で見られるんだ、
早く来い来い来場所よ！
―ほたぁるぅ～まるぅ～―
勝ち名乗りを受け土俵を降りる蛍丸。息も絶え絶えになりながら花道を引き上げる。
その先、通路の先に彼は『標的』を目にする。
ついに届く、あなたに手が掛かる、過去の清算と、現在の研鑽と、そして未来を決める

その時はもう間近に迫っているんだ。
番付で言うなら未だ遥か上の相手に会釈し、そして顔を上げる、その目をまっすぐに見据える。
歩みを止めず、すれ違うその時まで、三ツ橋　蛍はその眼光を外さなかった。
潮　火ノ丸から。

第117番　綱の責務

―東方、横綱、刃皇。モンゴル出身、朝陽川部屋―
―西方、大関、鬼丸。千葉県銚子市出身、柴木山部屋―
名古屋場所千秋楽、結び前の一番の土俵に上がる両力士がアナウンスされると同時に
会場には拍手や声援が飛ぶ。
だが、そこに熱狂は無かった。
刃皇ＶＳ鬼丸、過去幾多の名勝負を演じて来た両力士だが、今場所の土俵で向かい合う
２人の優劣は誰の目にも明らかだった。
鬼丸はここまで１４戦全勝で既に今場所の優勝を決めている。さらに先場所は１３勝、
その前は１４勝で優勝しており、最終日を待たずに来場所の横綱昇進まで確定的な状況だった。
まさに順風満帆、今こそが全盛期と言って良いだろう。
対する刃皇はここまで7勝7敗、もしこの一番を落とせば負け越しとなり、横綱の立場として
厳しい追及を余儀なくされるだろう。ましてや先場所は3日目に黒星を喫し４日目以降は休場、
その前を遡っても優勝争いに加われたのはもう1年も前の話だ。
体力の限界が囁かれる中、それでも彼は土俵に上がり続けた。今場所も全盛期とは
程遠い内容ながら何とか五分の星で千秋楽まで持ちこたえて来た。
観客の興味は、この一番の内容と結果だった。
あるいは鬼丸はこの偉大な横綱を惜しみ、負けてやるのではないか。
『星の売り買い』の可能性もあるのではないか、そんな空気が会場に漂っている。
日本人とは不思議な民族だ。刃皇の全盛期にはその不遜な物言いも手伝って

彼を嫌うファンは大勢いた。事あるごとに『品格が無い』『これだから』『やめちまえ』

などとヤジを飛ばしていたものだ。

だが彼がボロボロになりながらも何とか角界にしがみ付いている姿を見ると、今度は逆に

彼を庇う風潮が強くなってきていた、判官贔屓というヤツなのだろうか。

この一番も、仮に星の売り買いがされていたとしても、また鬼丸が覇気に欠ける相撲を

取ったとしても、声を上げて非難するファンは多くないだろう。

むしろ鬼丸はもう優勝したんだし、ここは刃皇に勝たせてあげてくれないだろうか、

そんな空気すら感じられていた。

もっとも土俵上の二人は、そんなファンの思惑など知った事ではない。

四股名の如く幕内と言う地獄を闊歩する鬼と、土俵という舞台で頂点を謳歌する現代神。

金で星を買う気などあるはずもなく、同情など微塵も考えてはいなかった。

ただ、刃皇はここに至っても、鬼丸を心から認めてはいなかった。

彼が横綱に成るための最後のひとさじ、それが未だ彼には埋まっていなかったのだ。

彼だけではない、一年前に綱を巻いた大典太も、やはりそれは足りていない。

自分や童子切にはあって彼らに無い物、それが備わるまでは自分がいなくなる

わけにはいかない、そんな思いが燻っていた。

―手をついて―

仕切りの最中、刃皇は鬼丸を見据えて『うん？』と唸る、何だろうこの違和感は。

てっきり彼に足りていないと思っていたそのスキマが、いつの間にか埋まっているように見える。
「(よし、ひとつ久々に聞いて見るとしよう)」
―はっきよい！―
激突する両者。その時から二人の意識は別の世界に飛ぶ。
鬼丸が、刃皇が立つ場所、まるで裁判所のようなその景色。だが彼らは被告席にも
裁判長の席にもいなかった。傍聴席の最前列でそれらを見下ろしながら、静かに並び立つ。
「横綱はワシを認めてませんでしたね・・・その通りかもしれません。」
鬼丸が鼻を掻きながらそう切り出す。その言葉に薄い笑いを浮かべて刃皇が返す。
「見つかったようだね・・・聞かせてもらおうか、その答えを。」
鬼丸は少し瞑目してから刃皇に正対し、彼を見上げてこう返した。
「ワシに足りなかったもの。それは・・・」
―誰かに首を狙われる、狙われ続ける、その覚悟―

「甘ぇコト言ってんじゃねぇよ、鬼丸！」
いきなり観客席からそんな声を浴びせて来たのは、黒いスーツを来た立派な体躯の男。
見下ろすその顔を見た鬼丸は、胸中にドス黒い感情を、苦い記憶を呼び起こす。
が、それは瞬時に霧散する。今感じたのはあくまで遠い昔の話、過去に禊を済ませた事。
ならば目の前にいる人物もまた、プロの彼にとって大事な相撲ファンの1人だろう。
「下山か、久しぶりじゃのう。」
笑顔で返す鬼丸に続いて、隣にいた鬼切が彼や鬼丸に解説の意図も

込めて言う。
「そういやアンタ、三ツ橋と同じ大学の相撲部だったよな・・・なんだよ甘い事って？」
隣りにいる太郎太刀も込みで、そうなのか？と思い、その三ツ橋の知り合いがどうして
鬼丸にそんなことを言ったのか、その返答を待つ。
その意図を察した下山倫平は、彼らを見下ろしながら一言、こう告げる。
「三ツ橋がプロに行ったのは、お前を倒すためだよ、鬼丸！」
―!?―
「今お前何て言った？『大したもんだ』だ？いい気になって上から見下ろしてたら
今に後悔ずるぜ！」
固まって言葉が出ない鬼丸に代わって鬼切が返す。
「おいおい、あの三ツ橋がか、冗談だろ？」
太郎太刀も、そうだよあの三ツ橋が・・・という顔で鬼切と下山を交互に見る。
鬼丸はと言えば、まるで予想外の蛍の敵愾心に、胸に苦いものを感じていた。
あの蛍が・・・ワシを？
「アイツはな、6年前のダチ高が全国制覇した時、自分だけ1回も勝てなかった。
その事をどれだけ悔やんでいるか、お前らに分かるか？」
下山の言葉に、3人は心臓に強風をいきなり吹き付けられたように心を冷やす。
―『全国制覇』したチームのレギュラーで、公式戦『全敗』―
もし自分がその立場に立たされたらどうなる？その想像の恐ろしさに背筋が凍る。
鬼切は苦虫を噛み潰した表情で悔やむ、それは俺の責任だ、三ツ橋は俺の指示以上の事を
してみせた、それでも勝てなかったなら原因は俺じゃないか、お前

が悔やむことは無いんだ！

そして鬼丸は、その言葉を『鬼丸殺し』の下山に告げられたことで、よりその苦しみを

まるで己の事のように実感していた。

かつて小学生横綱を取った自分が、中学に上がって立て続けに負けた、勝てなくなった

自分の苦い記憶が蘇る。部屋に閉じこもって悩み、ああすれば勝てた、こうしたらなどと

醜い言い訳を繰り返した。

―大きく産んでやれなくて、ゴメンねー

大好きな母にそんな言葉さえ言わせてしまった、不甲斐ない自分に対する憎しみ、怒り。

だがダチ高に入学し、頼もしい仲間を得て彼は蘇った。春の新人戦ではかつて自分を

奈落に落としたこの下山を投げ飛ばして、彼にこう返した。

「今はワシの方が強い、それだけじゃ！」

思えばその時に中学時代の禊が成ったのではなかったか、体格差の象徴でもあった彼を

投げ飛ばしたことで、確かに自分の視界は開けた、胸に刺さった棘が抜けた気がした。

「アイツは、三ツ橋はな、その思いをずっと抱えて相撲を取ってたんだよ。」

下山の言葉に、鬼丸は胸が痛むのを感じた。ワシも味わったあの屈辱の日々を、

それ以上の恥を、蛍は今でも抱えて戦っていると言うのか？あの蛍が・・・

「そんな時だった、スカウトに来た大和国親方にこう言われたんだ。」

―ならば君に代わって勝ち続けた『鬼丸』を倒して見せろ―

「痛快な話だろ、って言ってたよ。そらそうだわな、全試合負けた三ツ

橋が、全試合勝った
お前をやっつけるなんて、今時マンガでもねぇ笑える話だぜ。」
鬼丸は無言で土俵を見る。その上では蛍が清心道関と死闘を演じていた。
倍近い体重の相手に堂々と渡り合い、工夫に研鑽を重ねて綱渡りのような勝ち筋を探る、
ライバルとの戦いで経験した技、仲間と研鑽して習得した必殺技を全て用いて。
―『強くなる』その言葉の体現―
その全てが、あの屈辱の一年を原動力にして成し遂げて来たというのか。
それはどれだけ過酷な日々であっただろう。だがそして、だからこそあの蛍がここまで
強く成って見せたのか！心の奥に『納得』と言う感情がズシンと落ち込むのを感じ取る。
そして、その闇を払う方法が、ワシを倒すことだと言うのか！
もしワシが蛍と、いや『蛍丸』と相対するなら、ヤツは己の全てを持ち寄って
死に物狂いでワシを倒しに来るじゃろう。
そんな蛍丸をワシは今までどういう目で見ていた？初心者、格下、ワシの相撲を見て
感銘を受けてくれた、ダチ高の為に変化を磨いた、そして、ここまで来るとは大したもんじゃ・・・
どこにも『ライバル』と言う単語は無かった、自分の首を狙っている男なんて想像すら
していなかった。その奥底に黒い執念を燃やしているなんて―
土俵上、清心道を振り子のように前後に揺さぶった蛍丸が、ついにその巨体を背中から
薙ぎ倒して見せた、沸きに沸く観客、この声援もまた蛍丸の刃となり、それはいつか
鬼丸に叩きつける力となることだろう。

鬼丸は全身の血が沸騰するのを感じていた、アドレナリンが全身を駆け巡るのが
芯から実感できた。自分の首を狙われる、その執念にも似た『想い』を受け止める立場に
心が震え、力が漲る。受けて立つ、その事への重圧を心から実感する。
土俵から引き揚げて来た蛍丸が、鬼丸に軽く会釈した後にそのらんらんとした眼光を
叩きつける。鬼丸もまた燃える瞳で蛍丸を睨んだ、睨むことが出来た。
光と炎を交錯させ、二人がすれ違う。
、

「正解だよ、鬼関。」
肩の荷が下りた、という表情で刃皇はそう返した。
そうだ、横綱である以上、いつまでも挑戦者ではいられないのだ。
金星と言う名誉を
欲して、下からいくらでも挑戦者は現れる。それらを受けて立ち、蹴散らして頂点に
君臨し続ける事こそ『横綱』にふさわしい責務なのだ。
「正直、蛍丸に標的にされていると知った時は動揺したもんです。けど考えてみれば
刃皇関はずっと首を狙われ続けていたんじゃった・・・」
国宝、という称号があった。強すぎる横綱、刃の皇帝という四股名を倒すべく
日本刀の名を冠して、彼らに横綱を、打倒刃皇を託し続けた。
その名を冠した力士は、その期待に応えるべく何度も刃皇に刀を振るい続ける。
斬りつけ、突き、袈裟掛けにし、刃を打ち下ろし続けた。
そしてこの偉大な横綱は、それらの挑戦を何度も退け続けて来た。

そりゃあ衰えもする、ボロボロになって当たり前の話だ。皆が寄ってたかって
彼に刃を振るい、それを常に真っ向から跳ね返そうとしてきたのだから。
「君に負けた時、私は止め時を失ったんだよ。私はもう首を狙われるに値しない
存在になったのか、その答えが知りたかったんだ。」
その言葉を否定しようとした鬼丸を手で制し、さらに続ける刃皇。
「変わらず皆は私に向かってきてくれた。それは嬉しかったが、誰も私に
成り代わろうとはしてくれなかった、『私がいないと挑み甲斐が無い』などと
思う者もいてねぇ。」
うっ！と渋い表情になる鬼丸。まさに自分がそうだった、草薙もそうだ、大典太も
またしかり。早くに横綱に成った童子切だけは、学生時代から首を狙われる立場に
慣れていたせいか、あっさりと『そちら側』に行ってみせたのだが。
「私は止められなくなった、ボロ負けするその時までね。そうなったらさすがに
我こそは頂点だ！と自覚する者たちが綱を巻くものだと思ったが・・・間に合って良かったよ。」
ポン、と鬼丸の肩を叩く刃皇。彼は今度こそ、己の全てを託せる存在を見出し、
その花道を退場する時が来たと確信する。
「さぁ、行きたまえあの席に。君に挑む者たちに対し、君はどんな判決を下す？」
―寄り切ったーっ！鬼丸強し、全勝で優勝に花を添えましたーーーっ！―
時間にしてわずか４秒の相撲、だが両者の間には幾多の言葉が交わ

された。
鬼丸は最後に一言、刃皇に心から感謝の言葉を告げる。
―ごっつぁんです―
一時代を築いた偉大な横綱は、遂にここで次代の若者に全てを託し、土俵を降りる。

〝歴代最強の横綱、刃皇引退〟
〝鬼丸国綱、第８０第横綱に昇進〟
激動の名古屋場所はこうして幕を閉じる。そして、夏の盛りは間近に迫っていた。

第118番　もう一度だけ、自分と語ろう。

―ぞわわわわっ!?―

大和国部屋恒例、巡業前の夏合宿初日の夜、親方の部屋に呼び出された関取衆は

入室するなり親方の、ドンブリ一杯分の苦虫を噛み潰したような表情に背筋が凍る。

「ああ来たか・・・まぁみんな座れ。」

その黒い気をたたえた眼光に睨まれ、草薙も大和号も大欧牙も清心道も、そして

蛍丸も一体何事かと緊張が高まる。

親方は今日、協会の会議に出て留守だったが、合宿自体は非常に気合の入ったものに

なっていた。蛍丸と清心道の入幕が確定しており、いよいよ大和国5人衆が幕内で

大暴れせんと気合十分に乗り込んだ合宿なれば当然である。

で、心地よい稽古疲れの後にこの展開、明らかに何か悪い知らせを抱えるその空気に

顔を見合わせる一同。誰か不祥事でもやらかしたか?それとも清心道か蛍丸の入幕が

まさか認められなかったとでも・・・?

緊張感漂う沈黙の後、親方が神妙な顔で口を開く。

「お前達・・・何か芸をやらないか?」

一斉にずるぅっ!と体を傾ける。この状況で芸が出来る者が居たらその神経を

疑わざるを得ないだろう。というか一体どういう流れで芸?

「ああすまん。実は今日の会議でな、大和国部屋は巡業でファンサービスが足りんと

お叱りを受けてな・・・今度の夏巡業、関取に何かパフォーマンスをしてもらう事になった。」

「え・・・?いや、みなさん普通にファンサービス出来てると・・・」

蛍のその言葉が終わるのを待たずして、親方はだだっ！と立ち上がると、猛然と
ダッシュして退室しようとする草薙の襟首をとっ捕まえる。
「逃げるなっ！」
「いや父さん、それ僕の守備範囲の遥か外ですよ・・・」
そのスキに、巨体を出来る限り縮めてこそこそ反対側の出口に向かう大和号。
「「ごーぜきっ。」」
蛍丸と清心道と大欧牙の容赦ないツッコミに固まる大和号。彼は中学卒業と同時に
角界入りした身の上、草薙と同じく人生に相撲以外の心得など皆無であった。
右手で息子を、左手で大和の四股名を授けた愛弟子を抱え込んで座布団に座り直す親方。
「巡業中、開演前のお客さんの行列の前とか、昼休憩時に他の部屋の力士がいろいろ
やってるだろう、ああいうのをウチでもやってくれないかとのコトでな。」
なるほど、巡業プログラムの出し物も色々面白いが、それに加えて何か余興を見せる力士は
結構いる。御手杵は自慢の美声を披露しつつＣＤを無料配布しているし、蜻蛉切は名は体を
表すと言わんばかりにアクロバットを披露したりしている。
春巡業に至っては、幕下以下の力士たちによるヒーローショーになんと童子切が乱入し、
悪の横綱としてヒーロー達を叩きのめしてしまい、周囲を爆笑に包んだものだった。
「どうもウチの部屋は堅苦しいイメージが強くてな、少しは相撲人気に土俵の外でも
貢献しろというお達しだ。」
３人は一斉にうーん、という顔をする。土俵の外ならやはり相撲以

外で何か
お客さんを喜ばせられるコトをしなきゃいけないのか・・・
ちなみに草薙と大和号は目を伏せて『無理無理』という表情で固まっている。
部屋頭の大関とナンバー2は今回戦力外が確定してそうだ。
「そういや僕、昔楽器を・・・フルート吹いてましたけど。」
今はもう以前みたいに吹けないけど、と言う間もなく親方にがっしと肩を掴まれる。
「そ　れ　だ　！」
息子と愛弟子をほったらかして蛍丸に迫る親方。楽器演奏といえば1年半前に引退した大関、
金鎧山関が馬頭琴を披露していたぐらいで、今は完全に空き枠状態である。
「あ、ワタシサクソフォン吹けますヨ。」
さらりと続く大欧牙。彼の出身国であるブルガリアは音楽の豊富な国であり、『キュチェク』
と呼ばれるパーティ音楽にはサックスは欠かせない。
蛍丸と大欧牙の肩を抱いて『でかした！』という表情でご満悦の親方。清心道は隣で驚き顔を
したままこう続いた。
「すげぇなお前ら・・・俺なんかピアノくらいしか弾けないぜ。」
全員がぐるん！と首を回して清心道を直視する。なんたる意外な特技か、くらいとか言うな！
かくして急遽、3人による楽団が結成され、巡業でお披露目をするハメになってしまった。
まぁファンに顔を覚えられ、楽しんでもらう事は悪い事ではない。本場所での声援が増えれば
それが自分の背中を押す事はプロなら誰もが知っている事だ。
翌日夜、家から宅配便で懐かしのフルートが届いた。早速箱を開けてみると、中には
明らかにメンテナンスされた輝きをたたえた銀色の楽器が収まっ

ている。
事情を話した両親が送るまでの短期間で出来る限りのメンテを施してくれたのだろう。
ありがとう、と呟いてフルートを取り出す。懐かしい重さ、手触り、そして・・・
目を閉じる。その前に居たのは、久々に見るかつての自分。やせっぽちで童顔な
その中学生の少年は、蛍丸を見てにこりと笑顔を返す。
―僕も、そっちに行っていいかな?―
かっこいい男に憧れていた。そんな彼にとって蛍丸はどう映っているだろう、
君が望んだ、男らしい自分になれただろうか。
―もちろん―
蛍丸は当時の自分を思い出し、フルートに口を添える。指を柔らかく構え、吐息を音色に
変えるべく腹から息を吐く。
合宿所に響く、高らかで優しい音色。音程に、旋律に緩急をつけ、メロディを紡いでいく。
ああ、そうか。これを吹くのも簡単じゃなかったよ、何度も練習して、時には唇を切って
血まみれになりながら頑張って来たじゃないか。
中学校で吹奏楽部に入部して、Aグループに入るために必死で練習したっけ。
3年で部長を務め、女子同士の陰湿な争いにもめげずに何度も仲裁に入ったなぁ、
コンクールでダメ金しか取れず全国に行けなかった時も自分は泣かずに、大泣きするみんなを
慰めてたっけ。頑張ったよ、よくやったね!って。
なんだ、昔から結構カッコ良かったんじゃないか、僕。
奏でる音楽が、昔の三ツ橋蛍と今の蛍丸を、奏者と力士をひとつに重ねていく。

演奏を終えた時、周囲から拍手が起こった。親方はじめ部屋の皆が集っていて
蛍の演奏に聞き入っていたようだ。草薙と大和号は特に感心しきりで、大欧牙は
これは本番が楽しみですネ、と笑うが、清心道に『アレに合わせるんだぞ』と
突っ込まれて青い顔になる。
彼は蛍に詰め寄り『モーチョット下手に頼みマス』と懇願する有り様だ。
もちろんそんな気は毛頭ない。連日稽古の終わった後、夜中まで散々二人を
演奏の特訓に付き合わせる蛍であった。

夏巡業、スケジュールの隙間を縫って行われた演奏会は大好評だった。
仏頂面でキーボードを弾く強面清心道とその美しい旋律のヒドいギャップとか、
笑顔でリズムを取りながら楽しそうにサクソフォンを吹く北欧人の大欧牙がいかにも
『らしい』とか。
そして、小兵で童顔の蛍丸が銀のフルートで甲高い音色を奏でるその様はまさに令和の牛若丸、
京都五條の橋の上で横笛を吹き、天を舞って大男弁慶を退治する源義経、そのイメージに
ぴったりと合致していた。
演奏のたびに拍手喝采が起こり、巡業の後半には追っかけが出るほどの人気を博していた。
そしてその演奏は、彼らにとって過酷な夏稽古のいい息抜きにもなった。
精神は集中するが、吹いている間は体を休められる。おかげで3人は夏巡業の間に体重を

落とすことなく、最高のコンディションで9月場所を迎える事となる。

そして番付発表。蛍丸、西前頭9枚目。

―初日の割。結びの一番―

鬼丸―蛍丸

結びの一番　蛍丸と鬼丸国綱

「もう、よりによって初日なんてね。」
シンガポールのチャンギ国際空港、仲間にそう毒づくのは女子相撲協会のひとり、
堀柚子香だ。
お目当ての一番がよりによって初日に組まれたために、今後のこの国での活動を
仲間たちに任せて一足先に帰国することになったのだ。
「じゃあ、後頼むわよみんな。」
「任せてよ、このままグイグイ行けば多分大丈夫、人気出て来たし。」
池西檸檬がそう返す。世界各国で女子相撲の普及を続けてきた彼女たちにとって、
世界の交差点とでもいうべきこの国に相撲を根付かせる事が出来れば、女子相撲の普及の
大きな前進になるだろう。
相撲の養成所、ファンクラブから大会運営、そして日本への観戦ツアーの企画など
まずは相撲人気を上げるために奔走し、その上で女性のこの競技への参加を進めていく、
すでに何か国のスポーツ省からは女子相撲のオリンピック認可を取り付けており、
この国もあと一押しで陥落しそうな状況まで来ていたのだ。
旅立つ柚子香に、仲間である檸檬、蜜柑、杏らが女子らしい声を送る。
「もうあっちで結婚しちゃいなよ、んで蛍っちにも協力してもらおー。」
「場所中にエッチしちゃダメだよー！」
「襲うのはいいけど、三面記事にならないようにねー。」
こらこら、私を何だと思ってんのよ！と苦笑いしながらも手を振り返す。

搭乗口への動く通路を進みながら、その先にある飛行機を見て、行った先に思いを馳せる。
「(とうとうだね、蛍・・・)」

「おし早苗、準備はええか?」
「うん、いつでも。」
千葉の料亭あかいけ。二代目板前の哲夫と若女将の早苗が店を出る。今日は父に店を任せ
大相撲の観戦ツアーにスポンサーや常連客と共に向かう。
送迎用のバスの特等席にはこの店の出資者の松本社長。すぐ後ろには彼の孫でかつての先輩、
松本康太と、社員であり彼のライバルであった滝沢氏も乗り込んでいる。
「ええー、テッツーが運転すんの?大丈夫かよ・・・」
懐かしのチームメイトである沼田が運転席の赤池に軽口を叩く。
隣では柳沢が生命保険の
紹介を皆にはじめて『おどれらなぁ・・・』と赤池に睨まれる。
「じゃあ、出発しまーす。」
早苗の言葉と同時にバスが動き出す。向かうは国技館、今日尊敬する先輩の
待ち焦がれた幕内デビュー戦、そして横綱初挑戦の一番に声援を飛ばすために。

「っしー・そろそろ出張るぞ。」
柴木山部屋、新横綱の鬼丸関のその言葉に、周囲はええー、という不満顔。
「ったく、横綱になったのに午前中に会場入りする気っすか?」
「まぁ鬼関だからねぇ、早めに行った方が落ち着くんでしょう。」
バトが、大河内が諦め声でそう呟く。頂点になったんだからあわてずに悠々と会場入り
すればいいのに、と。

「さすがに緊張してるか?」
そう声をかけたのは寺原だ。入門前から鬼丸を知る彼は、その表情が流石に固い事に
気付いていた。横綱としての初の場所、土俵入りも今日から薫丸、白狼と共に単独で務める、
少しでも早く会場入りして緊張をほぐしたいのも分からなくはない。
が、鬼丸は笑顔でそりゃそうじゃ、と答えるに留まる、その想いを心の奥に押し込んで。
それを座敷から見ていた柴木山親方は、彼の気負いの理由を正しく理解していた。
今日の一番、火ノ丸の相手をするのは他ならぬあの三ツ橋君、あの彼がまさかここまで
辿り着いた事も驚きだが、何より親方は火ノ丸を通じて彼の物語を聞いていたのだ。
今の三ツ橋君・・・蛍丸にとって鬼丸は『標的』
鬼丸にとっては返り討ちにすべき『挑戦者』。
相手の敵愾心を真っ向から受けて立つ立場。首を、金星を狙われ続ける者、それが横綱。
親方ですら未知の領域に立って見せた愛弟子に、かける言葉を見つけられない。
親方はただ、鬼丸にこう告げて腰を上げる。
「解説席で見てるよ、火ノ丸ちゃん。」

「えーっと、どこの入場口から入った方が近いんだっけ、僕らの席。」
「東口じゃない?ちょうどこの正面だけど・・・うわぁ、すごい人だかり。」
幸田純一と西岡トオルが国技館の前でそう話す。ラグビー強豪の(株)銚子造船のダブルエース、
中学時代のチームメイトであり、大学で再会して再びコンビを組んだ二人。

幸田いわく『どこかトオルに似てるんだよ、その先輩』と聞いて興味を持ったトオルは

幸田に付き合って初の大相撲観戦に訪れていたのだが・・・

入り口の混雑の理由はすぐに分かった。ちょうど今、幕内力士が会場入りする時間帯で

多くの『入り待ち』のファンが色紙をもってお目当ての力士に群がっているのだ。

と、そのうちの力士がこちらを向いて声をかけて来た。え、何で?

「あーっ!やっぱり幸田君だ、見に来てくれたんだねぇ。」

大勢の女性ファンに囲まれた状態でそう話す力士、相撲に詳しくないトオルでも彼くらい

知っている。

関脇『三日月宗近』。

すべるように土俵に円を描く、相撲とは思えない華麗な戦いをする人気力士。

知り合いなの?という顔をするトオルをスルーしてがっしと幸田の肩を掴む三日月関。

「さぁ、相撲部屋へ入門しようよ、勝ち逃げは良くないよ~」

「無茶言わんでください!」

幸田は全日本ラグビーの強化選手に選ばれているほどの逸材だ、今さら道を変えられる

立場ではない。その返答にちぇっ!と返してサインに戻る三日月。

「って、勝ってんの?三日月に!」

驚くトオルにまぁね、と返す純一。まぁあの一度きりで、もう絶対無理だけどねと付け加えて。

トオルは彼を見直す。高校時代に離れていたラグビーを大学からまたやり直して

落ち着かない奴だ、と思っていたが、相撲の方でも己を高めることを怠ってはいなかったようだ。

そんな彼の『お目当て』の力士とはどんな人だろう、と期待を膨らませて入場する。

『いよいっしょおーーーっ！』
新横綱『鬼丸国綱』の土俵入り、力強く四股が踏まれ、不知火型のせり上がりで
その小さな体をまるで山の如く見せつける。観客も親方衆も力士たちも皆、その見事な
土俵入りに感動のため息を漏らす。
既に土俵入りを終えている同じ横綱の大典太、童子切の二人も、草薙、冴ノ山、大包平の
大関陣も、他の関取たちもその姿を見て、負けてなるかと闘志を燃やす。
中入りの取組は激戦続きだった。人気絶頂の大相撲、参員御礼の舞台にあって、
不甲斐ない相撲や気力の無い相撲を取るわけにはいかない。今、まさに土俵は充実の
極みに達していた。
取り組みが進み、西の支度部屋も取り組みが終わった力士たちで埋まっていく。
そのまま帰る者もいるが、今日は多くの者がそこに居残っていた。
「蛍関、そろそろ・・・」
役員の呼び出しに腰を上げたのは、その支度部屋で最も小さい力士。そんな彼に
他の力士たちが次々声をかけていく。
「三ツ橋、火ノ丸は強いぞ・・・頑張れ！」
「ったく、俺よりよっぽど火ノ丸に拘ってんじゃねぇか。容赦ないぜ、アイツは。」
全国制覇した時のチームメイト、太郎太刀と鬼切がそう声をかける。
「俺らと当たるまで、せいぜい勝ち星稼いでくださいよ。」
「あー、負けが込んだら俺とも当たりますからね、楽しみにしてますよ。」

かつての後輩、陽鉈と薫峰が大舞台での先輩との対決に思いを馳せ、激励する。
「やっとここまで来たな、待ってたぜ蛍丸。」
「先場所の借り、キッチリ返させてもらうでぇ！」
「おいは草薙に勝ったぞ、お前も勝って来い、蛍丸！」
学生時代からのライバル、長船（舟木）と蜂須賀（菅）、そして圧切（黒田）がそう言って
彼を送り出す。
と、もう一人の男が立ち上がり、蛍丸の前まで進んでその両頬をぱんぱんと張り、感慨深い
表情でこう檄を飛ばす。
「見せてやれ、今のお前を。」
「はいっ！」
同部屋、清心道の目を正面から見返してそう答えた蛍丸。今、幕内の花道に歩を進める。

蛍丸と鬼丸が東西の花道に姿を現したのはほぼ同時だった。先の一番が終わった直後と
いう事もあり、国技館に大歓声が響き渡る。
蛍丸はその歓声の中に、いくつもの懐かしい声を聴き分けていた。
「みっつはっし先輩ー、ファイットぉーっ!!」
「ご馳走用意して待っとるでぇーっ！」
「金星挙げるッスーーッ！」
升席から赤池一行が声を上げる。諸岡顧問と松本社長も居並んで腕組みし、彼の一番に
期待を込める。
「行ったれーっ！今日からお前が『鬼丸殺し』だぁーーっ！」
「ポッキー食いながら叫ぶなっ！」
観客席からは大学時代のチームメイト、下山と葉山が並んで観戦している。
「勝たないとカッコよくなれねぇぞーっ！」

最上段の通路から声をかけるのは荒木だ、今年の年末に國崎との総合格闘技の一戦を
控えている彼もまた、この場に来て声を出す。
聞こえてるよ、みんな、ありがとう。

―ひがぁ～しぃ～、鬼丸、おにぃ～まるぅ～―
―にぃ～しぃ～、蛍丸、ほたぁ～るぅ～まるぅ～―
腰を上げ、土俵階段に足を掛ける両力士。蛍丸はちら、とたまりに腰を下ろす大和国親方に
軽く会釈し、正面を見据えて土俵に上がる。
そこは、灼熱の炎たぎる円（まどか）の舞台。
鬼丸の眼から、全身から放たれた炎が、熱気が、土俵上に荒れ狂う。
地獄を闊歩する炎の鬼が今、綱を携えて己の土俵に上がる、
その表情は、闘志の中にもどこか嬉しそうな色をたたえていた。
『さぁ、相撲ファンお待ちかねのこの一番！いよいよ実現しました、委員会の粋な
計らいに感謝ですね。』
アナウンサーがそう話す。確かにこの対戦が初日に実現した背景には、その小さな体に
見合わわぬ馬力を生かして横綱にまで成り上がった鬼丸と、同じく小さな体を巧みに舞わせ、
潜らせ、動きかき回して幕内まで来たサーカス相撲の蛍丸、その相撲を見たいと思う
ファンの期待に編成委員会が応えた、という側面があったと思われる。
『炎を帯びた小さな大鬼と、蛍火を纏った牛若丸。その対戦、いよいよですよ親方！』
『そうですね・・・私としては鬼丸に、横綱として強さを見せつけて圧倒してほしいですが
そういう相撲を切り返すのが蛍関の怖い所です。』
柴木山親方がこの一番をそう分析する。ただそれは技術面での話

でしか無かった。
問題なのは、勝敗を分けるのは『心』の差。これまで二人が積み重ねて来た物、背負っている物
背中を押してくれる力の、想いの差がそのまま勝敗を決するだろう、と心中で呟く。
蛍丸はその灼熱の土俵にあって、自分でも驚くほど冷静でいられる自分が不思議だった。
それは、その舞台が決して自分だけで立ちえた場所では無かったから。
大勢の観客の声援が背中を押す。かつての仲間が、ライバルが、辿って来た熱い戦い、
歩んできた人生が、自分の背中に力をくれる。
かつての自分、かっこよくなりたいという思い。黒田さんとの戦いで吐きだした
その想い、そうなりたいと思っていた過去の僕、それが土台となって僕を支える。
全敗の屈辱の記憶、過去の棘。それを抜くために、火ノ丸さんに勝つためにここにいる。
ああ、そうか。その棘すらも今日の僕の力になっているんだ。
父さん、母さん。楽器を、そして相撲をする事を許してくれた両親。きっとどこかで
見ていてくれているだろう、この観衆の中で声を出すような人たちじゃないから確認は出来ないけど。
そして・・・火ノ丸さん。
貴方と出会て、憧れて、僕の目標でありつづけて、そして標的として高みに居続けてくれた
彼に心から感謝し、そして・・挑む。自分の人生の全てを持ち寄って！
ありがとう、みんな。
僕をここまで叩き上げてくれた、全ての人に、心から感謝する。

―ほったるまるっ！ほったるまるっ！ほったるまるっ！ほったるまるっ！―

―ほったるまるっ！ほったるまるっ！ほったるまるっ！ほったるまるっ！―

『常にファンの目を意識して、観客を沸かせる力士を目指しなさい。』

声援を背中に聞きながら、親方の言葉を思い出す蛍丸。そう、あの人気力士の鬼丸と

対峙する自分にこんなに大きな声援が送られている、背中を押すその声が何より心地よく

全身に有り余る力を漲らせる、よし、行くぞ！

円い土俵の中、蛍火の様な彼の眼光が尾を引き、鬼を見据える。

対面にいる炎鬼は、その眼光を心地よく受け止め、その力を推し量る。

努力、屈辱、仲間、好敵手、師匠、弟子、魂、目標、さまざまな物を背負い自分に挑む

その様は、とてもあの三ツ橋蛍とは思えない程に大きく、そして重かった。

だが・・・

「火ノ丸ーっ！頑張ってーーっ！」

鬼丸は愛しい人の声を背中に受け、より一層の炎を焚き付ける。そう、自分には

さらなる一押しをしてくれる女性がいる、それが・・・

「蛍ーーーっ！頑張れーーーーーーーっ！」

国技館に響く女性の大きな、そして『想い』を乗せた声が響き渡る。

運動系の活動をしている者のみが出せる、腹からの、いや魂からの声援が。

「（なんじゃ、ワシが教える事が無いですよ、刃皇関。）」

鬼が笑う。笑うしか無い。

「(・・・柚子香)」

蛍は思う。ああ、これで揃った、僕を強くする最後の最後のひとかけら。

多幸感に身を浸しながら、俵に手を下ろす。そうだ、今僕は全てを持っている。

向かい合う相手すら、僕の欲したものなのだから。

さぁ、かっこ良くなろう。

―はあっきよいっ!―

―火ノ丸相撲二次創作、蛍火は円(まどか)に舞う　完―

あとがき

無事完結いたしました、火ノ丸相撲二次創作『蛍火は円（まどか）に舞う』、

いかがでしたでしょうか。

いやぁ『火ノ丸相撲』最高でしたね。まさか現在であんなに熱い漫画が読めるなんて

思ってもいませんでした、平成から令和にならんとしてる時代に昭和どストライクな

あの内容、私みたいな古い人間にはたまりませんわ。

特に沙田戦、沙田がさわやかな顔で『戦いが楽しい』なんて言ってる次のページで

『何を笑っていやがる』

このコマで完全に深みにはまりましたよ、自分の見て来た漫画のシーンで間違いなく

5指に入る名シーンです。

まぁそんな作品でしたが、不満が全く無かったわけでもなかったです。

え、草介が天王寺に勝つの?とか、ちょ、國崎が大典太を・・・ええ大包平まで!?とか

嫌アァァヒロインがレイナ?堀ちゃんじゃないのかよおぉぉぉぉ（号泣）とか。

まぁ読者としてワガママは色々あるんですが、一番の不満はそこじゃなかったんですよね。

少年漫画という都合上、最低限のチートっていうか、いわゆる主人公補正はどーしても

必要になって来るでしょう。火ノ丸相撲においてもそれは結構顕著でしたね。

小兵の火ノ丸がどう考えても体格を超える膂力を持っているとか、

2年間ロクに対人稽古をこなせず、春まで西上の生徒に負けていた小関が全国で勝ちまくるとか

國崎は言うに及ばず、佑真も空手をかじっただけのヤンキーが半年稽古しただけで
全国の強豪と互角に渡り合うとか。
酷かったのは桐仁ですね。たかが高1の小僧がなんで名門高の監督を上回る指導力を
持っているのか、どう考えても無理あるでしょうアレ。
ですがいいんです、少年漫画ですから。
でも、そんな世界ですら、全く報われなかった人物がひとり居ました。
そう、三ツ橋蛍です。
彼が勝てないのは極めて当然の話です。ロクにスポーツ経験も無く、体は小さくて力も無い
そんな人間が相撲はじめてもそら負けまくりますって。
でも、これは少年漫画でしょ?多少の主人公補正やファンタジーはあってもいいでしょ?
他の5人みたいに。
が、この世界は彼に対してだけは徹底的に残酷でした。理想を捨て、試合を捨て、
捨て続けた先の勝負の一番でもあっけなく負かされて、最後の希望を託して
立ち合い不成立を繰り返し、背中まで向けて挑発したあの一番すら、世界は彼に
勝利を与えませんでした。
まるで他のチームメイトを贔屓する分、彼だけに現実の厳しさを押し付けるように。
それで作品のバランスを調整しているような、負けることで禊の役目を背負わされているが如く。
彼はさらに残酷な現実を突きつけられます。彼に変わって出場した桐仁は決勝戦で
蛍がどうしても挙げられなかった白星を得、あろうことかチームは全国優勝してしまいました。

全国優勝のチームのレギュラーで全試合敗北。
これ酷すぎません？
例えば祝賀会があったとして、彼だけは完全に針のムシロでしょコレ。
学校で優勝を全校生徒に報告されたとして、あとで試合のリザルトを調べた生徒が
三ツ橋だけ全敗した事実を学校中に広められたら・・・地獄ですよ。
自分だったら間違いなく不登校になるレベルですよ、転校したいですよ、頭からフトン被って
現実逃避するしかないですよこんなもん。
そんな残酷な扱いを受けた彼、それは火ノ丸相撲に対する一番の不満であり・・・

最高の二次創作の題材じゃないですか（歓喜）

そう、本作は彼の原作に対する復讐劇なのです。
それだけに本作は原作の『火ノ丸相撲』に沿った世界でなければ意味がありません。
異世界転生して刃皇に匹敵する力を持って戻ったり、彼が急にスタンド能力に目覚めるような
話ではダメなんです。
あくまで積み重ね続け、過去の屈辱を力に変え、仲間と共に成長する。艱難辛苦を乗り越え、
かつ原作の『三ツ橋蛍』という人物をスタートラインとして、なおかつ彼を最強クラスに
押し上げるという無理難題が課された作品になりました。
第０話にエピローグを持ってきたのは、作者が話を進める上で目指すべき所を見失わない
ようにと、最初に設定した目標でもあったのです。
そのせいか、本作は私の書いた作の中でもぶっちぎりの長期連載になりました。

蛍の強化を説得力ある表現で積み重ねる為には、仲間やライバル、
それぞれの『心』まで
しっかり描いて行かなければなりません。また小説と言うよりは
『漫画の文章家』という
表現をしてきた事もあり、一話一話が非常に短期間の話になり、結
果１２０話という長編に
なってしまいました。
私が小説を書く時は、クライマックスやラストシーンをまず思い描
き、それを元にして
起承転結をがっつり設定するようにしてます。なので書き始める
と『早くクライマックスを
書きたい』という思いに囚われ、かなりの短期間で物語を完結させ
てしまいます。
まぁそれでクライマックスより繋ぎの話が面白くなってしまった
りしますけど。
本作を書くにあたって、メインはどうしても高校相撲になるため、
いろんな部活モノの
漫画、アニメを見漁りました。昭和のスポコン野球漫画は言うに及
ばず、スラムダンクや
帯をギュッとね、等の平成スポーツ物から、近年のけいおん！、放
課後ていぼう日誌、
ゆるキャン△に至るユルすぎる作品まで。
で、本作が一番参考になったのは意外にも『タッチ』でした。
カっちゃんの死や、達也と南の恋愛模様が印象的なこの作品です
が、作者にとって
一番のキーマンは途中で現れた監督代行、柏葉英二郎ではなかった
かと思っています。
明青学園に対する復讐心を胸に、その力をもって野球部を叩き上げ
たその姿は
恋愛メインの主人公補正、才能至上主義の世界観に確かな説得力を
持たせていました。

思えば柴木山親方の「時には夢や希望なんかより、怒り、嫉妬、屈辱、焦り、そんな
負の感情が人を奮い立たせる事もある」というセリフこそが本作の骨子だったかもしれません。
登場するライバルには事欠きませんでしたね。前述の通り本作でダチ高が優遇
されているなら、その裏では涙をのんだやられ役たちが大勢いたわけですから。
沙田に残酷に倒された大河内、鬼丸の成長の象徴にされた下山、ダチ高の当て馬にされた
柏実業に弱小校の象徴であった西上、そして睨み出しで戦わずして負かされた黒田（仮名）。
彼らに蛍と同じ『負の感情』を奮起材料としてダチ高の前に立たせた時、作者の予想以上の
熱い戦いが巻き起こりました。
そしてそれこそが蛍を叩き上げる、何よりの題材になったと思っています。
もう一つ大事なのは、最後の最後で蛍が単に復讐心だけでは無く、すべての陰陽の思いを
力に変える人物に成れた、という事でした。原作で鬼丸が刃皇に相対した時、彼は明らかに
負の感情に囚われて十全の力は出せませんでした。
蛍が最終目的である横綱鬼丸との戦いに当たって、かつての鬼丸以上の状態で相対する
というのが、最後の一番の結果に代わる蛍の『勝利の形』でもあります。

次回作はまだ未定ですが、火ノ丸相撲ではもうやり切った感じがあるので、書くとしたら
違うジャンルの話になるかと思います。
ここまで読んで頂けた読者諸氏がもし次回作を期待しておられる

なら、それまでの繋ぎに
私の過去作品を流し見して頂けると幸いです、ジャンルはいろいろありまっせーw

それでは、またお目にかかる日まで。

三流ＦＬ
ＡＳＨ職人